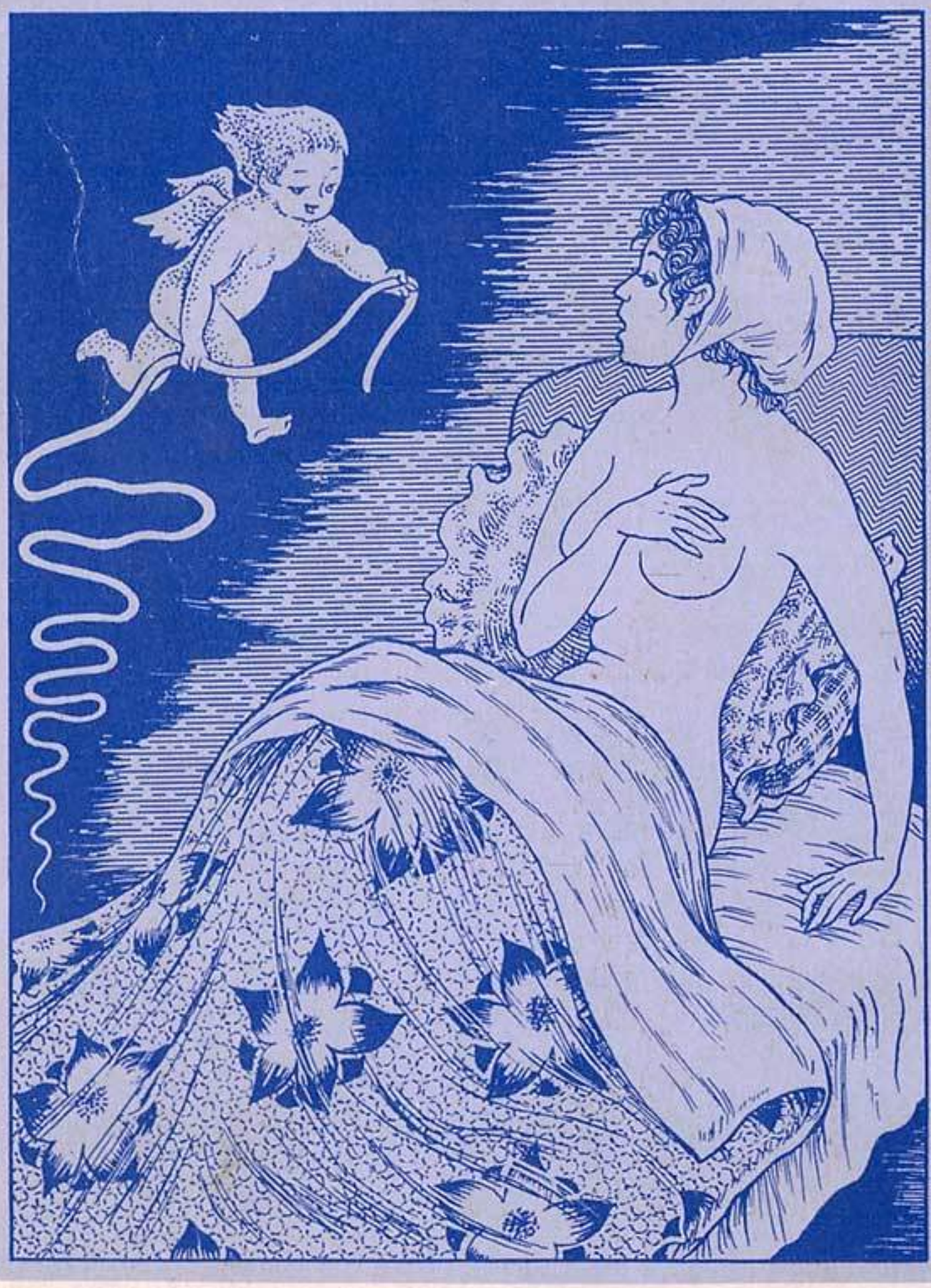
奇譚クラブ

10月号



新しい風俗文献誌

昭和四十八年九月二十日印刷　昭和四十八年十月一日発行　十月号（第二十七巻第十号）毎月一回一日発行　昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可
昭和四十二年四月二十一日国鉄大島特別扱承認雑誌第二一〇号

1973・10

☆総天然色カラー新作女体緊縛資料☆

極彩色のカラーで描く五人のM女の美しき生態

可憐な近代的姿態の深田菊子。純情で素人っぽい笠井奈保子。お俠やんで陽気な福井桃子。妖艶な芸者福竜の松本たえ。飼育済みのMマダム江口淑子。最近の奇ク誌上にて大活躍した五人の個性あるM女たちの生態をたっぷりと、大型ネガカラーによって、極めて鮮明にキャッチしました。自然のままの生々しい肌色も鮮やかにプリントの下に再現しました。厳しい緊縛と責めに喘ぐ彼女たちの、肉迫的に息まで画面に盛り上るほど重厚なカメラを縦横に駆使した誌上のニュー・ジュピターです。カメラは、お馴染みのメラとペンの塚本鉄三氏です。お白黒写真では物足りなく思いになった方は、是非この新しいコレクションの一端にお加え下さい。素晴しさの緊縛フォトに貰いまして、貴重な資料の作成に努めて頂きたいと思います。カラープリントの大きさはRサイズ（8cm×12cm）で大型のコダックネガカラーからプリントしましたので鮮明度も発色も断然素晴しいものです。五人のM女のいきいきした責めのムードを、カラーにてお楽しみ下さい。

全裸開股開陳縛り

カラー三枚一組　一〇〇〇円
深田　菊子　略号∧ある∨
思いきり両股をひらいて開陳する可憐で美しい女体も、縛られてこんなあどけない表情なのです。

白肌と赤白斑ら紐

カラー三枚一組　一〇〇〇円
深田　菊子　略号∧あり∨
真白い肌をぐっとくびる斑ら紐の美しいコントラストは惨虐のなかに甘いムードを盛りあげる。

浣腸と緊縛と弄戯

カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号∧あや∨
各種の浣腸器を前にして大の字に正面開股したマダムと後手高手小手に縛られた。

縛りの羞恥に喘ぐ

カラー三枚一組　一〇〇〇円
笠井奈保子　略号∧あむ∨
すぐ赤面する恥かしがり屋の奈保子が大好きな縄で縛られるというナマナマしい色彩の中の羞恥。

羞らいの坩堝の中

大手札三枚一組　一〇〇〇円
笠井奈保子　略号∧あも∨
原色的な配色の中心に全裸の肌に腋毛もあらわに繰り展げられる緊縛と羞恥のかもしだす饗宴。

晒らされた緊縛体

カラー三枚一組　一〇〇〇円
笠井奈保子　略号∧あめ∨
縄にくびられた乳房の先のグミのような乳首もピンク色に染まり全裸を晒して縛られた美麗な女体

猿轡に悶える女体

カラー三枚一組　一〇〇〇円
笠井奈保子　略号∧あみ∨
噛まされた豆絞りの猿轡にうめき思わず開股する女体の息づまるような迫真的な色美しきシーン。

全裸で見せる狂態

カラー三枚一組　一〇〇〇円
松本　たえ　略号∧あき∨
芸者福竜が全裸にひん剝かれて三種三様の縄にて変った縛りをされ、そのM性を露呈してゆく。

強烈後手縛り展開

カラー三枚一組　一〇〇〇円
松本　たえ　略号∧あい∨
如何なる強烈な責めにも耐えるというM女の繊細な裸身を厳重に縛りあげて執拗にいたぶり抜く。

臨月腹緊縛の発端

カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号∧あろ∨
覚悟はしていても出産予定日が目前に迫ってくれば跨踏するのだが、それを払いのけて緊縛する。

便々たる太鼓腹を

カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号∧あね∨
もうこれ以上大きくはならないという程思いきり突き出た太鼓腹にも情容赦なく縄が襲いかかる。

拘束された臨月腹

カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号∧あれ∨
丸々と極めて美しい線を見せた妊孕腹をツンと突き出させて非情な縄は妊婦の裸身にからみつく。

蛙腹にも強烈縄目

カラー三枚一組　一〇〇〇円
福井　桃子　略号∧あよ∨
出産間際の便々たる蛙腹でも苦しいのに、更に縄目も凄い後手高手小手縛りが肌を痛めつける。

海老責め後手吊り

カラー二枚一組　八〇〇円
江口　淑子　略号∧あお∨
強烈な海老責めと伸した後手を逆に吊り上げた姿態のなかに、あられもないM女の秘密があった。

苦痛と喜悦の交錯

カラー二枚一組　八〇〇円
江口　淑子　略号∧あわ∨
厳しい縄目で裸身をさいなまれる苦痛も彼女にとっては、身のおきどころない甘い喜悦であった。

◎お申込みは前金にて、大阪市阿倍野郵便局私書箱第14号天星社へ略号記入の上、御注文下さい。送料当方負担にて急送いたします。

女性モデル求めます

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の方々の告白の投稿やモデルの応募によって数多くの貴重な作品が誌上を賑わし、風俗文献誌としての絢爛たる金字塔を、打ち樹てて参りました。真摯で研究熱心な本誌読者の方々の期待に応えて写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか御遠慮なく勇気を出して御応募下さるよう、お待ちしております。

○本誌愛読の女性の方でしたら、国籍、未既婚の別、年齢など一切問いません。採用させて頂いた方には、謝礼として一回につき壱万円以上、即金にてお払い致します。

○応募されました方々の個人的な秘密の漏洩は、御本人の許しがない限り絶対致しません。尚、告白文をお書き下さった際は別に原稿料を、資料をお支払いの傾向をお好みの節、お申込みの節、お書き添え下さればなどを出来るだけ詳しく提供下さった方には謝礼を併せて、お申込みの節、お書き添え下さればなどを出来るだけ詳しく致します。

○撮影いたしました写真は、誌上掲載をよって発表はしておりますが、若し御都合により表を望まれない場合は、その旨添記下されば改めて打ち合わせしたいと思います。助手や介添えとしての出演、若しくは編集部資料作成についてのプレイ出演などの役に任じて頂きたいと思います。その際の報酬は、改めて個々に御相談に応じたいと思います。

○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体重などは必ずお書き添え願います。写真があれば同封下されば好都合ですが、お手元に適当なものがなければ結構です。

。申込先。大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社　編集部

◇本誌三百号突破記念◇ 百万円懸賞原稿募集

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ奇譚クラブという題号のもとに発行を続け、ここに三百号の多きを数えるに至りました。この間、風俗雑誌のパイオニアとしての幾多の辛酸を具に嘗めながら、読者の皆様の温かき御支援によって、二十数年の厳しい星霜をよく耐えて今日に至りまいりましたが、今まで読者の方々の投稿作品が春の花のように文献誌として生長してまいりました。ここに更に一層の内容の充実と清新化を計りたく、皆様の作品に期待し原稿募集を企画しました。

一、応募作品は、すべて未発表の自作品に限ります。原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上三百枚迄に制限致します。

一、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載の際、発表に支障ありと思われる個所を削除することもあります。原稿御入用の方は前もってお申込み下さるよう願います。

一、懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿と区別するため、第一頁に〈懸賞〉とお書き下さい。ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所〈又は連絡先〉は必ずお書き願います。

一、形式は、小説、創作、読物などのフィクション物でも、告白、体験、手記のようなノンフィクション物でも結構ですし、見聞記、見学、レポート、ルポルタージュも大いに歓迎致します。写真、画、参考資料などがあれば幸いです。（資料に限り返却致します）更に、論説、意見、エッセイ、手紙、随筆、シナリオ、戯曲、など、如何なるものでも最も得意とされる形式のもので御執筆下さい。

一、応募作品は、すべて本誌の誌面を野心のある読者作家まで模倣とか選んで形式は絶対に排して下さい。幾多のSM文献誌と肩を並べて新作に限ります。

一、原稿は、一般応募原稿、読者原稿、懸賞応募作品とも一切返却致しません。

一、入選作品は、第一席　一篇　賞金　十萬円
入選作品　第二席　一篇　賞金　五萬円
入選作品　第三席　一篇　賞金　三萬円
入選作品　第四席　一篇　賞金　二萬円
入選作品　第五席　一篇　賞金　一萬円
佳作優秀作品　十篇　賞金　五千円
選外佳作作品　十篇　賞金　三千円

一、入選作品は、本誌誌上に発表の際、原稿料を、お支払いの傾向をお好みの節、お申込みの節、お書き添え下さればなどを出来るだけ詳しくお書き添え下さればなどを出来るだけ詳しくお書き添え下さればなどを出来るだけ詳しくお

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan

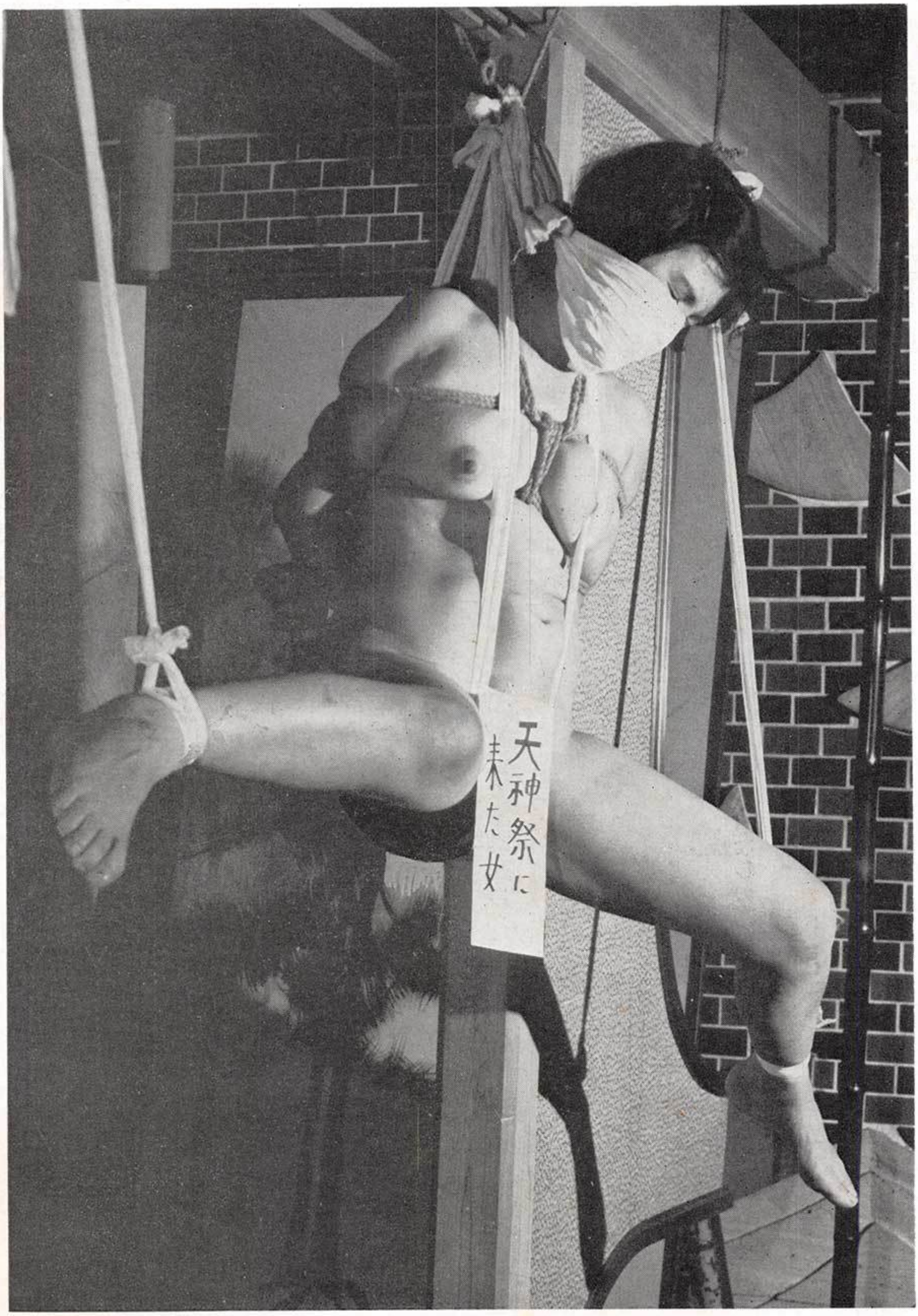
奇譚クラブ
昭和四十八年九月二十日印刷　昭和四十八年十月一日発行　十月号（第二十七巻第十号）毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日　第三種郵便物認可　昭和四十二年四月二十一日　国鉄大局特別扱承認雑誌第二二〇号

雑誌 2805－10

¥400

M女性の責め図絵

塚本鉄三・撮影



天神祭に来た女

木村洋子

昭和四十八年 十月号目次 〈第二十七巻第十号 通刊第三〇八号〉

フォト「手鎖足枷の美女」〈梨花悠紀子〉……瀬戸内 勇…(21)
一生のうちに数十人の女性を責めた男の話
遺稿『ボクの責め方』……宝塚二三夫…(22)
M女通信〝ひとり暮しの女の便り〟……村田 恭子…(30)
告白「豊かに熟しきった女性が好きだ」〈調教第一号〉……沢田 路夫…(34)
創作『SM企業』……秋津新次郎…(38)
告白〝女と犬の性〟について……宮田 信正…(48)
稀代のサジスチン春日ルミの体験談
『私が手玉に取った紳士』……春日 ルミ…(52)
願望「腹ボテ女のハダカが見たい」……大原女生…(63)
懸賞体験小説〝ミミクリー〟と〝イリンクス〟……時田 憲文…(64)
文献研究「女相撲書誌拾遺」(3)……雄松比良彦…(76)
連載・S時代小説『紫蘭の門』(26)……風流極道軒…(80)
「命預けます」の〝春子曼陀羅〟……柴 利好…(90)
完結によせて
連載小説『大噴火』〈第五十一回分〉……千葉 青鬼…(98)
敗戦秘話 〝汚辱にまみれた身体検査〟……鈴鹿 晶子…(106)
北満哀歌
SM随想「縄と革」……加留梨 雅…(121)
懸賞入選手記〝追憶の妊婦群像〟……大原 茂…(122)
読切S小説『浩が行く』〈口なしの花の歎き〉……久留木 栄…(134)
SM落書帳 〝ヨーロッパポルノ紀行〟……長谷田亀治…(150)
SM風物詩〈カメラ〉と〈ペン〉のルポルタージュ
〝パリ雑感〟……真行 彰…(162)
『天神祭に来た女』……塚本 鉄三…(164)
連載・M派交友録(43)「グラマーな猛女」……鬼山 絢策…(186)

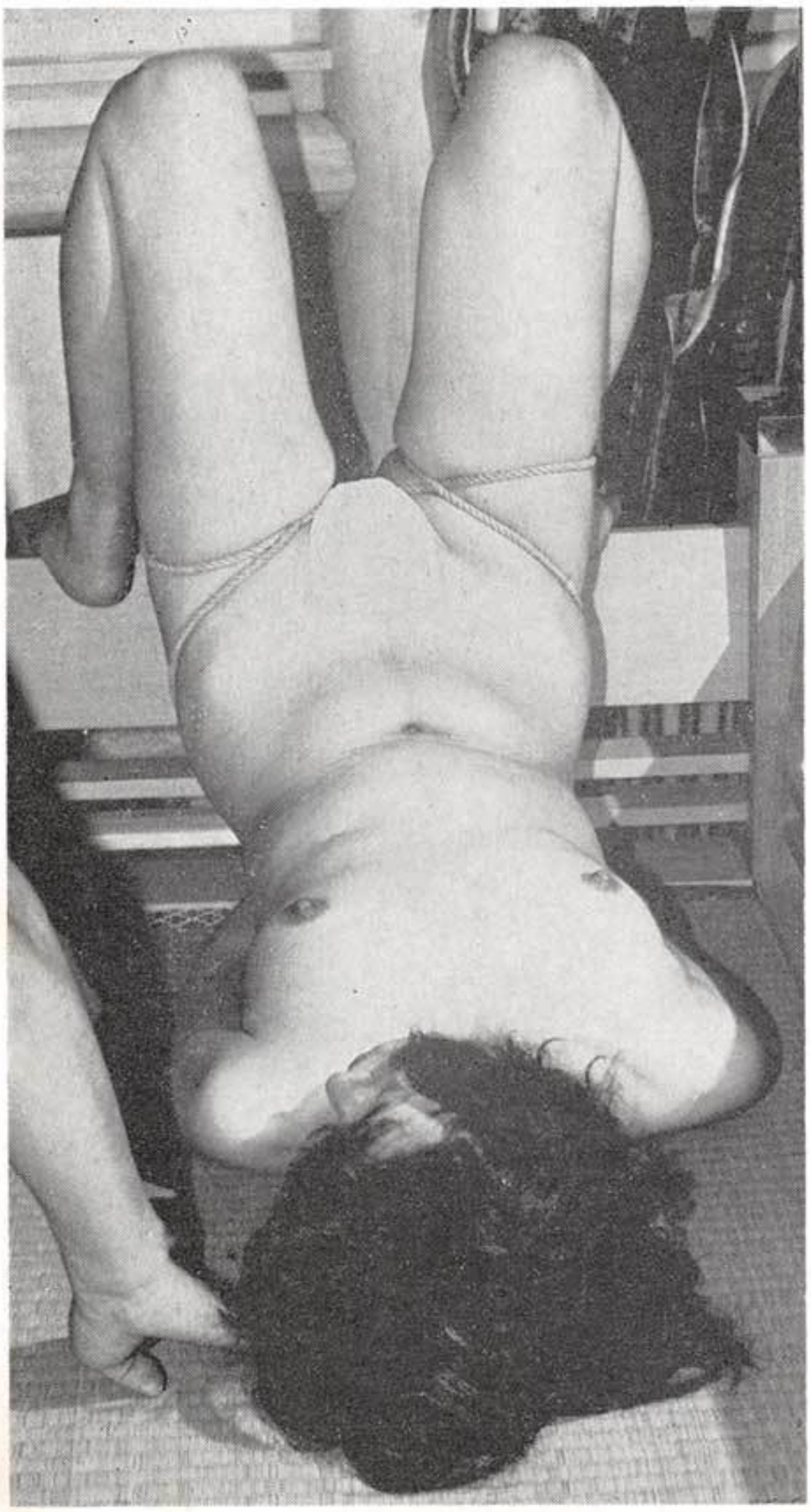
M女性の責め図絵〔塚本鉄三・撮影〕

天神祭に来た女……木村　洋子
妊婦哀歌……南　加津子
豊満さを痛めつける……笠井奈保子
マゾに目覚めた麗人……安井喜久子
若き肢体を誇る女……深田　菊子
美しきものへの屈伏……絹川　文代
ペットの飼育……春日　ルミ
驕慢な女の訓育……愛川　悦子
淑かなるものを汚す……荒尾　慶子
責め甲斐のあるマゾ……高村　浩子
迫りくる魔手……左近麻里子
妊婦を吊ろう……金原奈加子
すべてを晒して……福井　桃子
後手縛りの翻弄……西条　紀代
妖美に掛けた縄……山原　清子
惑溺の一瞬……三浦　純子
いたぶられる美女の生態……前田真知子
ベテランの味……玉木　章子

イメージギャラリー＝「羞悦の仕上げ」マエダヒオミ(33)

・「縄のタンゴ」岡たかし(42)・「誓約書調印式」須坂旭(45)・「牝イヌ訓練」室井亜砂路(50)・「世話のやける赤ちゃん」原由貴子(69)・「仲の良い主従」志羽利也(73)・「手荒な愛情」岡たかし(86)・「真昼の調教」室井亜砂路(111)・「除帯式近し」マエダヒオミ(115)・「新入りイビリ」須坂旭(119)・「復讐という名の嗜虐」四馬孝(141)・「熱愛の報酬」岡たかし(146)・「痰吐きゲーム」春川ナミオ(193)・「荷造り」岡たかし(197)

目次フォト……中河恵子・三浦純子



高橋千寿代様に〝恥奇房〟〝隷従の誓約〟

〝恥奇房〟我楽多控〈第七回〉……光林　裕二(201)
『排泄戯考』……辻村　隆(202)

読者通信……編集部選(266)

奇クサロン(236)

妻責めの記録「古都N市でのプレイ」……青木　順一
奴隷妾の悶え「じらし責め?」……北川まりこ
カメラルポの南加津子様へ
「妊娠腹について」……今井　五郎
倒錯の神秘と不可思議さ……持出矢目三
スキ花咲く蔵王への誘い……最上　卓也
浣腸キチ様へのご返書(アヌスは完全にお酒を吸収する)……三木　令子
オンナ・トイレ・スカトロ……福島　和夫
悩ましい自転車……秋野　美水
貞操帯の妖しい魅力……河本　光三
編集部だより……編集部
妻をM女にしたい……沢田　路夫
僕の心のビーナス真知子
処女と娼婦の同居する女……小沢　準一
読者諸兄姉へのお願い
「オムツが欲しい!」……押目　好夫
劇映画・最近の緊縛シーン……東山　映史

フォトに見る(奇クモデル ベスト・テン)きくかおる
投稿を読んで(小杉千恵さんの)……小池　明男
通信(鈴木千鶴子さんへの呼びかけ)……佐渡与太郎

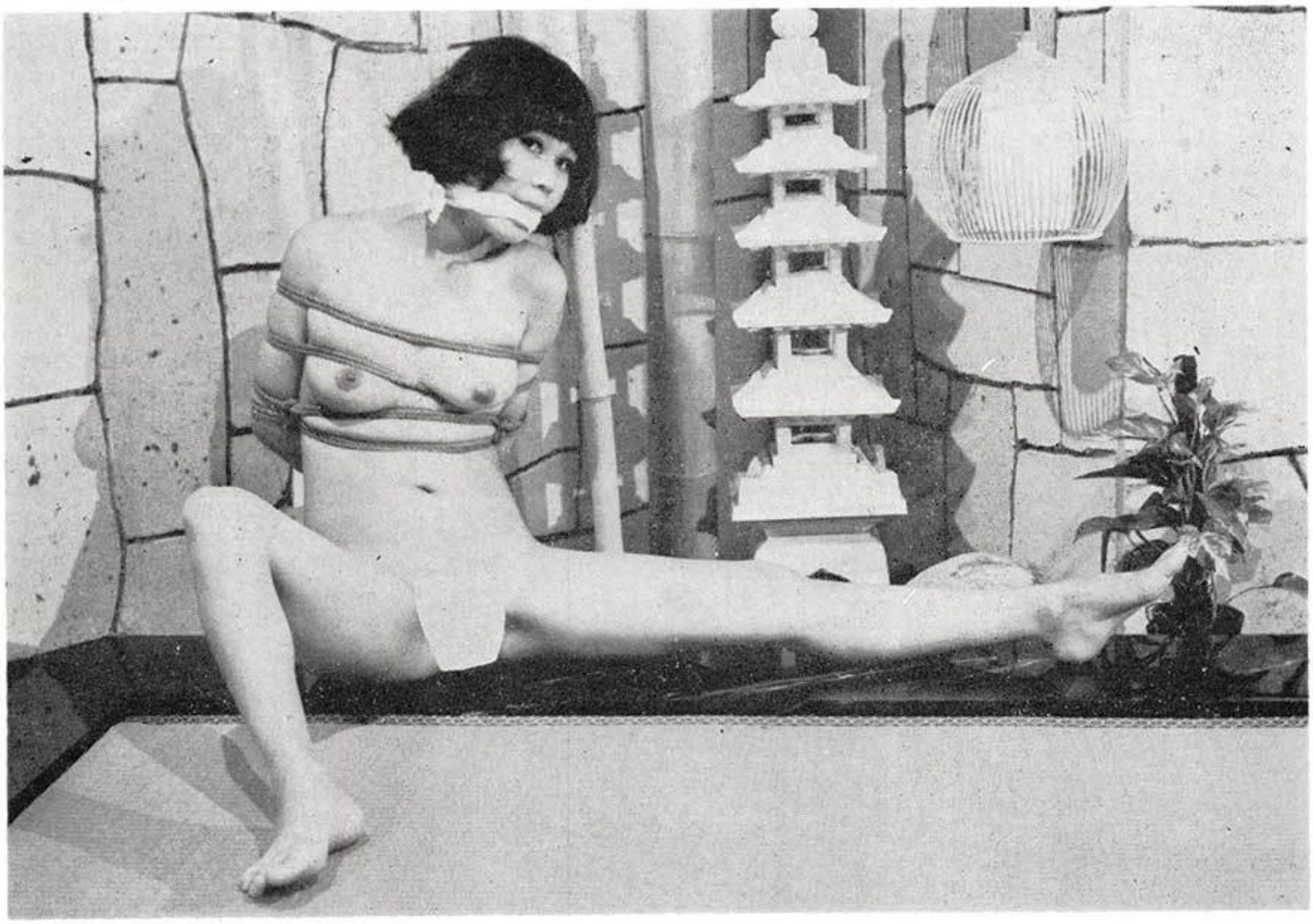
妊　婦　哀　歓　　〈南　加津子〉

豊満さを痛めつける

〈笠井奈保子〉

マゾに目覚めた麗人

〈安井喜久子〉



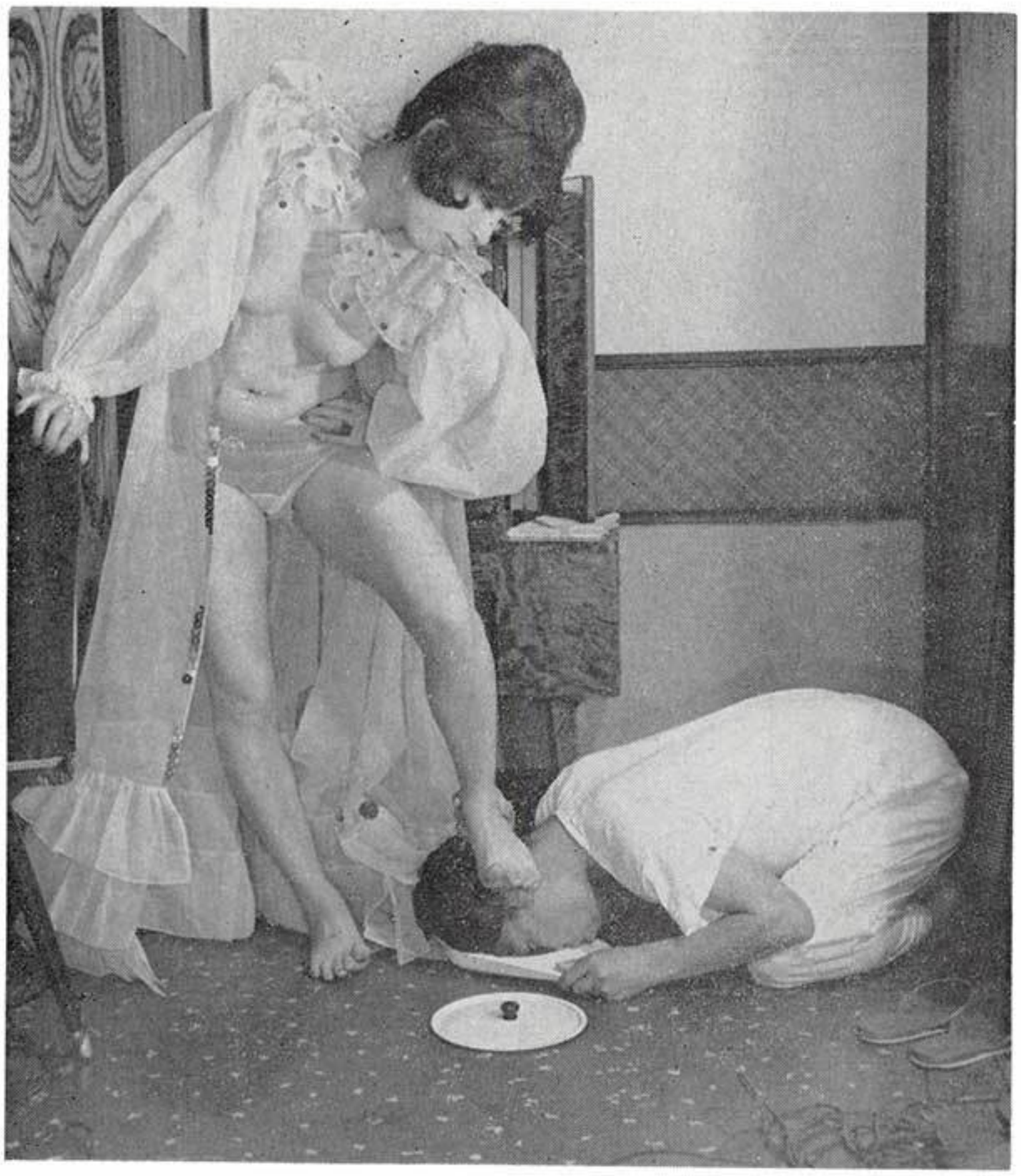
若き肢体を誇る女

<深田菊子>

セクション

美しきものへの屈伏

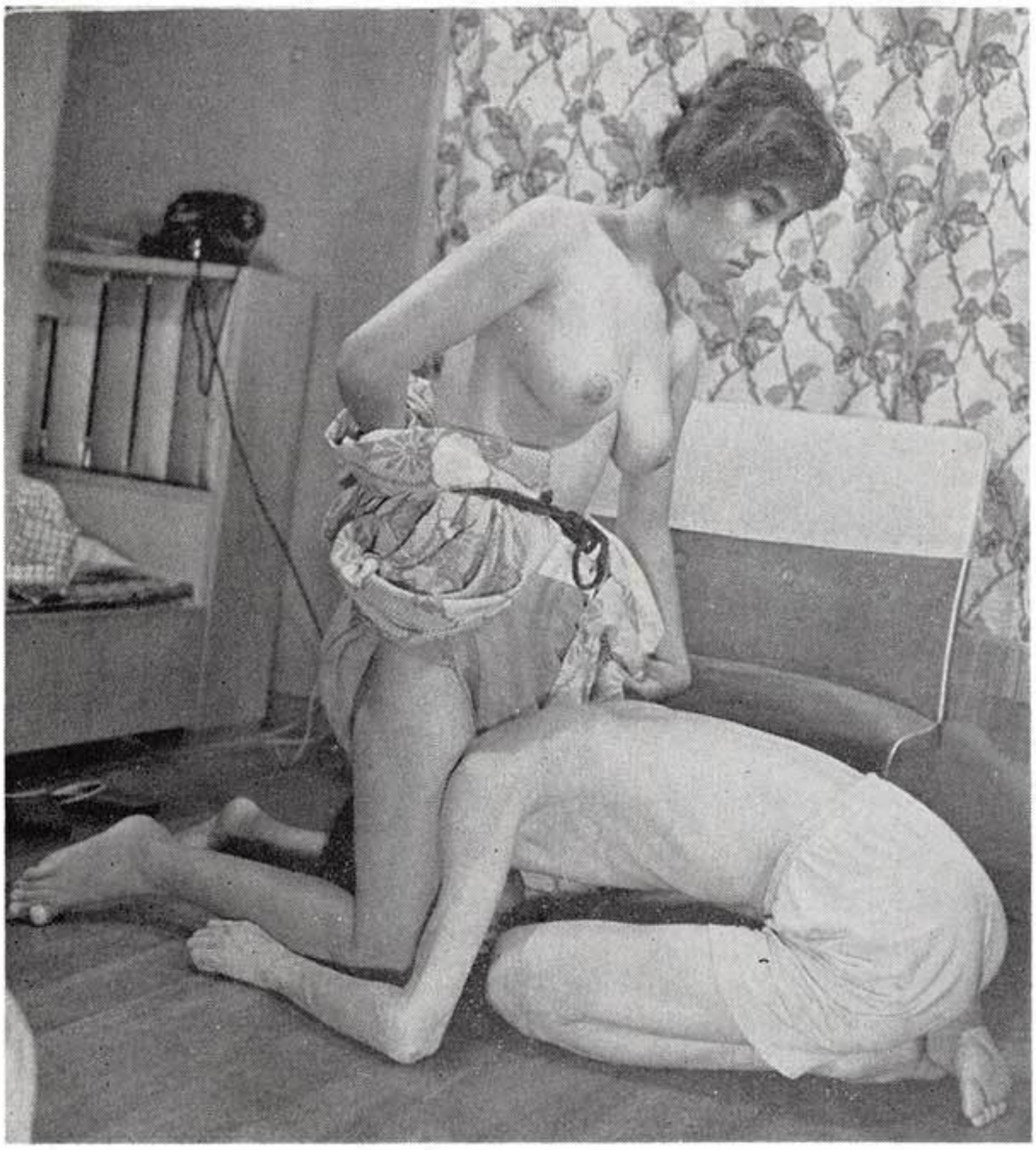
<春　日　ル　ミ>



<絹　川　文　代>

Mフォト

驕慢な女の訓育

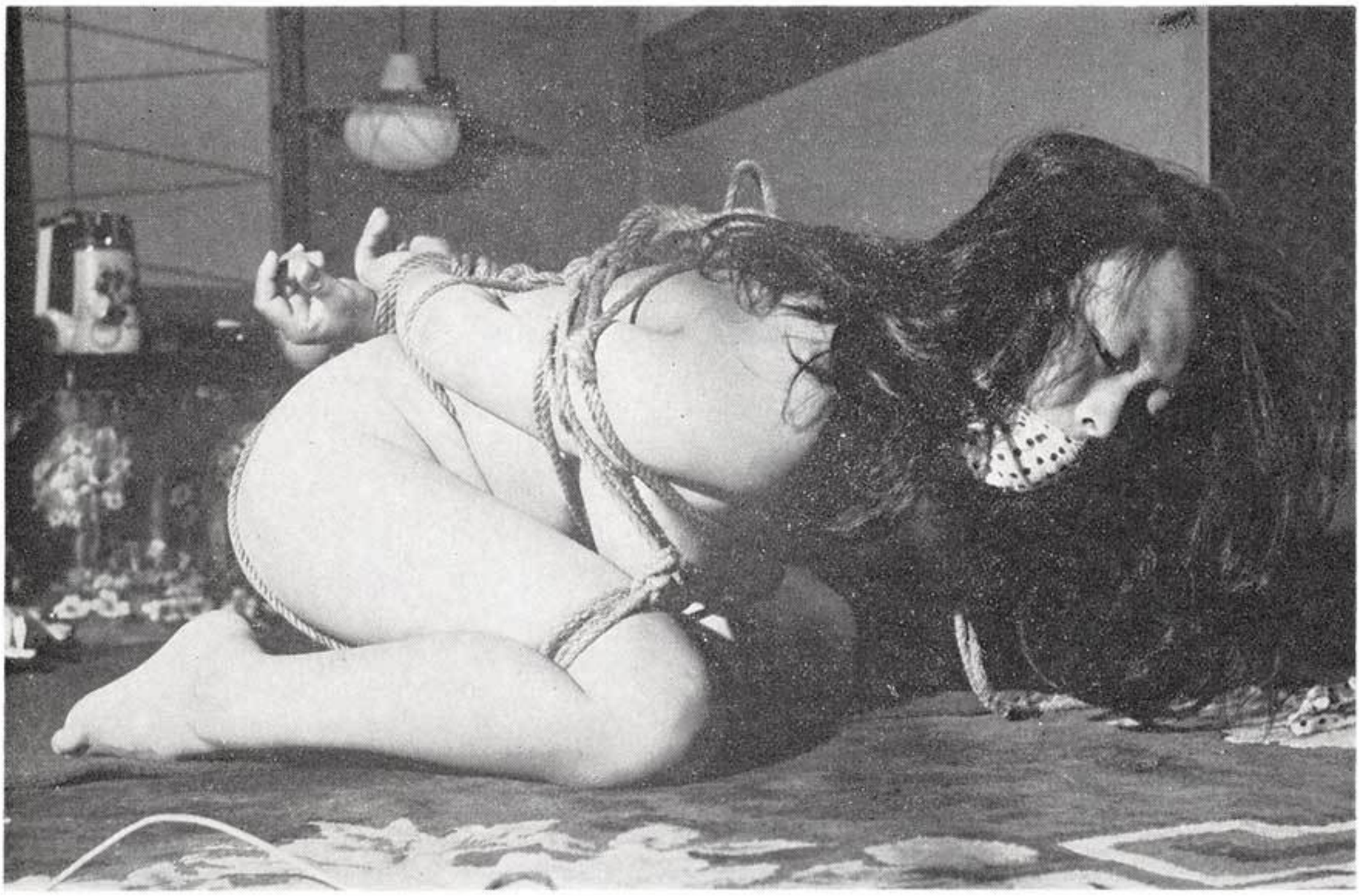


〈愛　川　悦　子〉

ペットの飼育

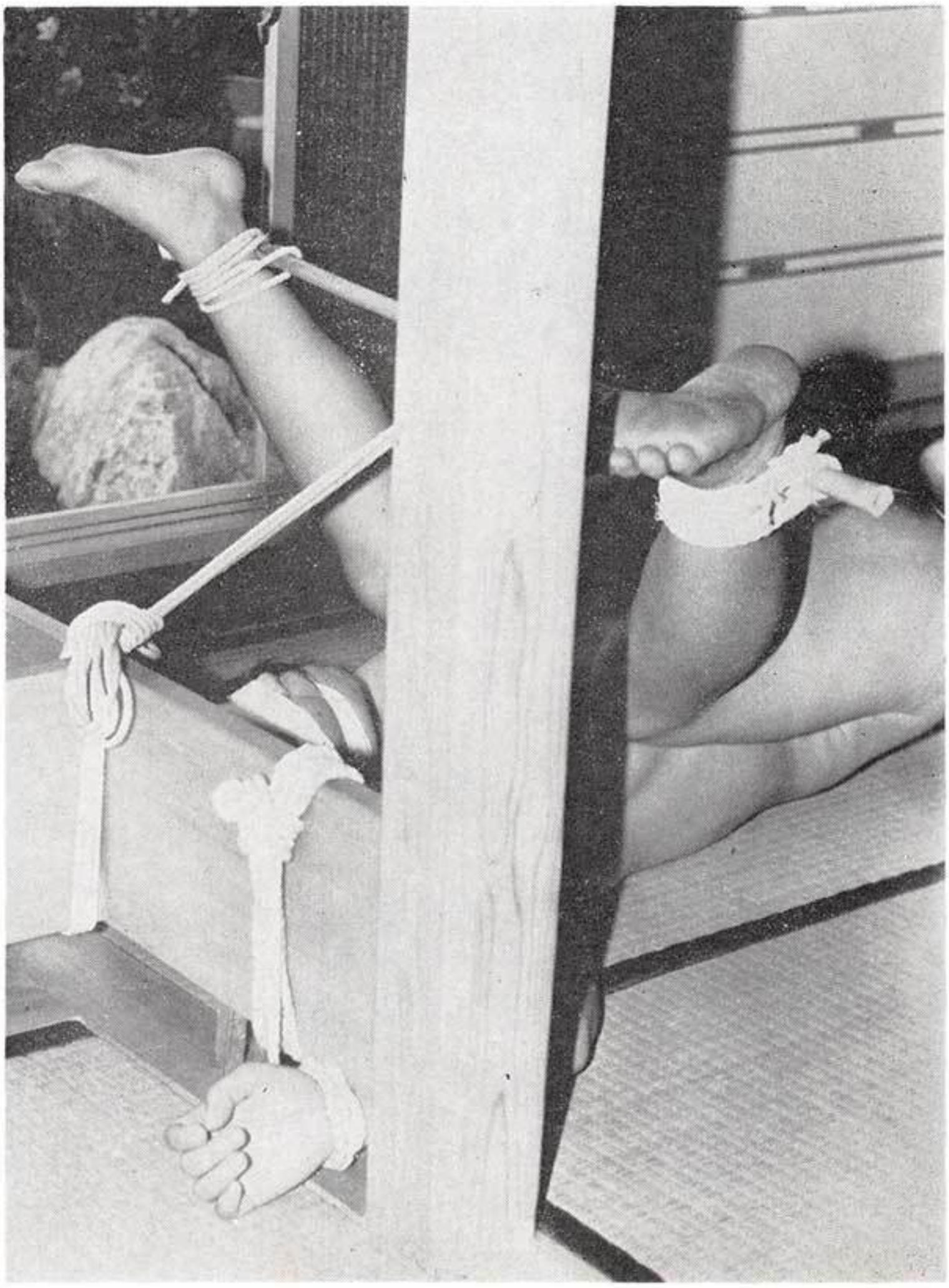
淑かなるものを汚す

〈荒尾慶子〉



責め甲斐のあるマゾ

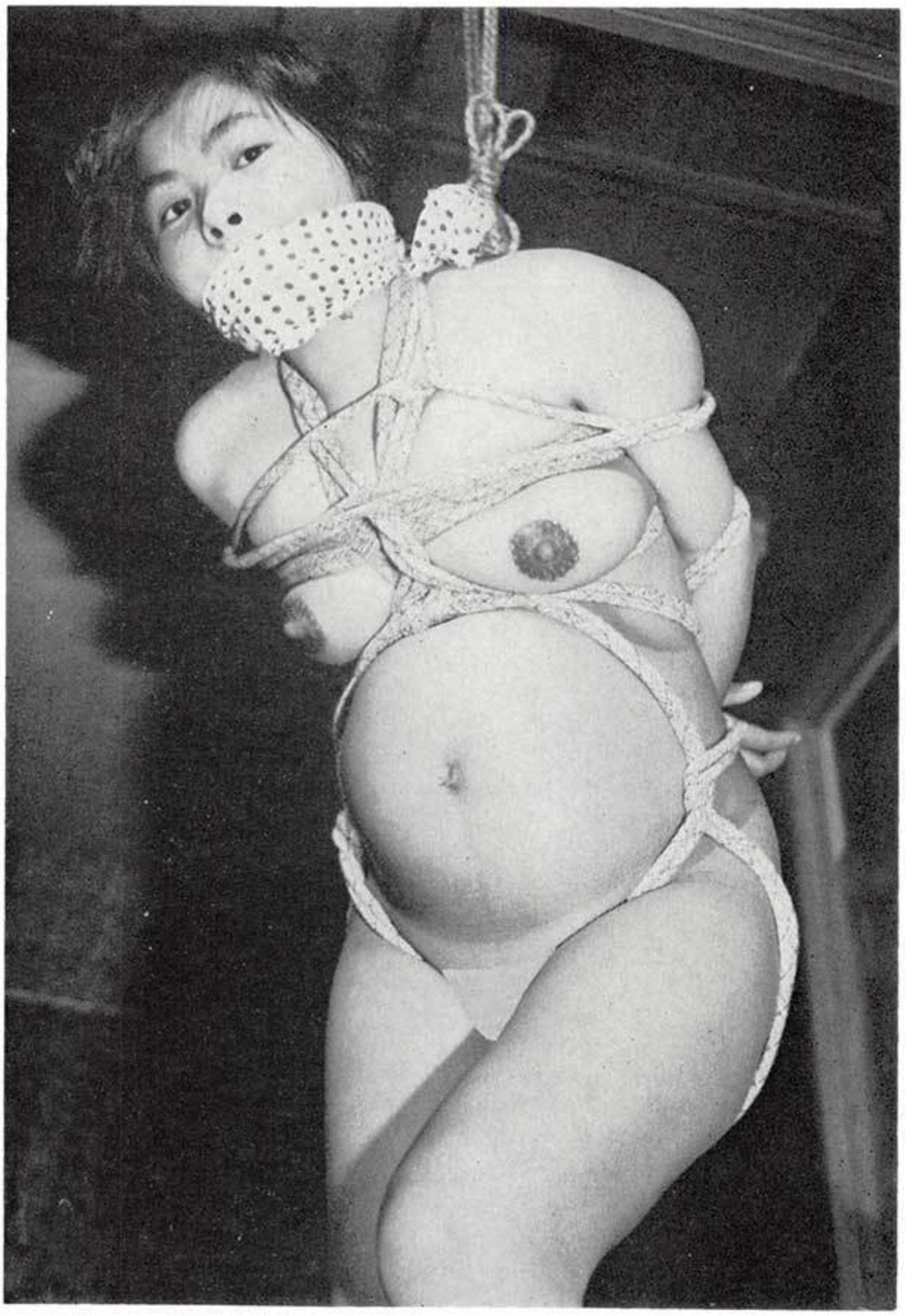
〈高村浩子〉



迫りくる魔手

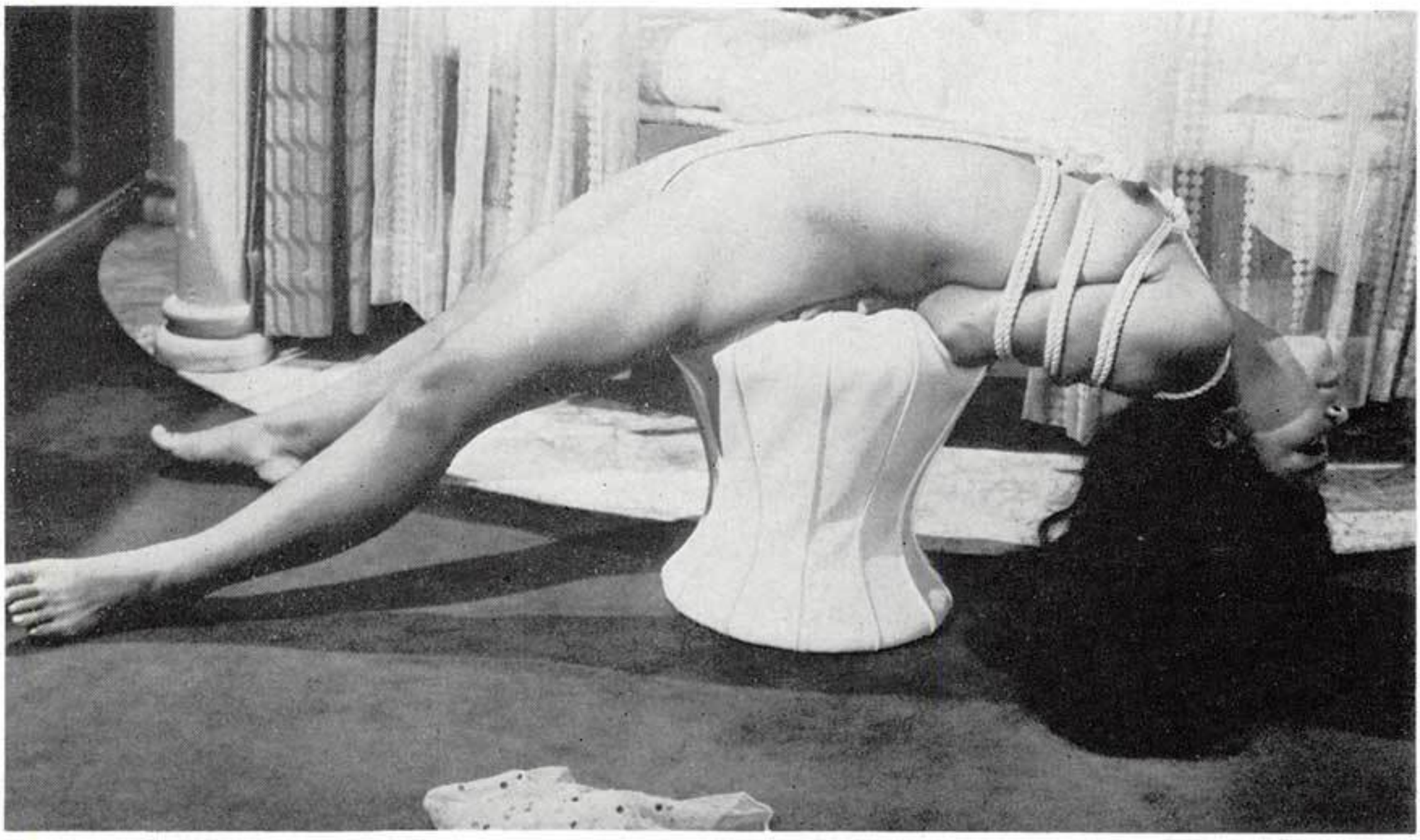
〈左近麻里子〉

妊婦を吊ろう

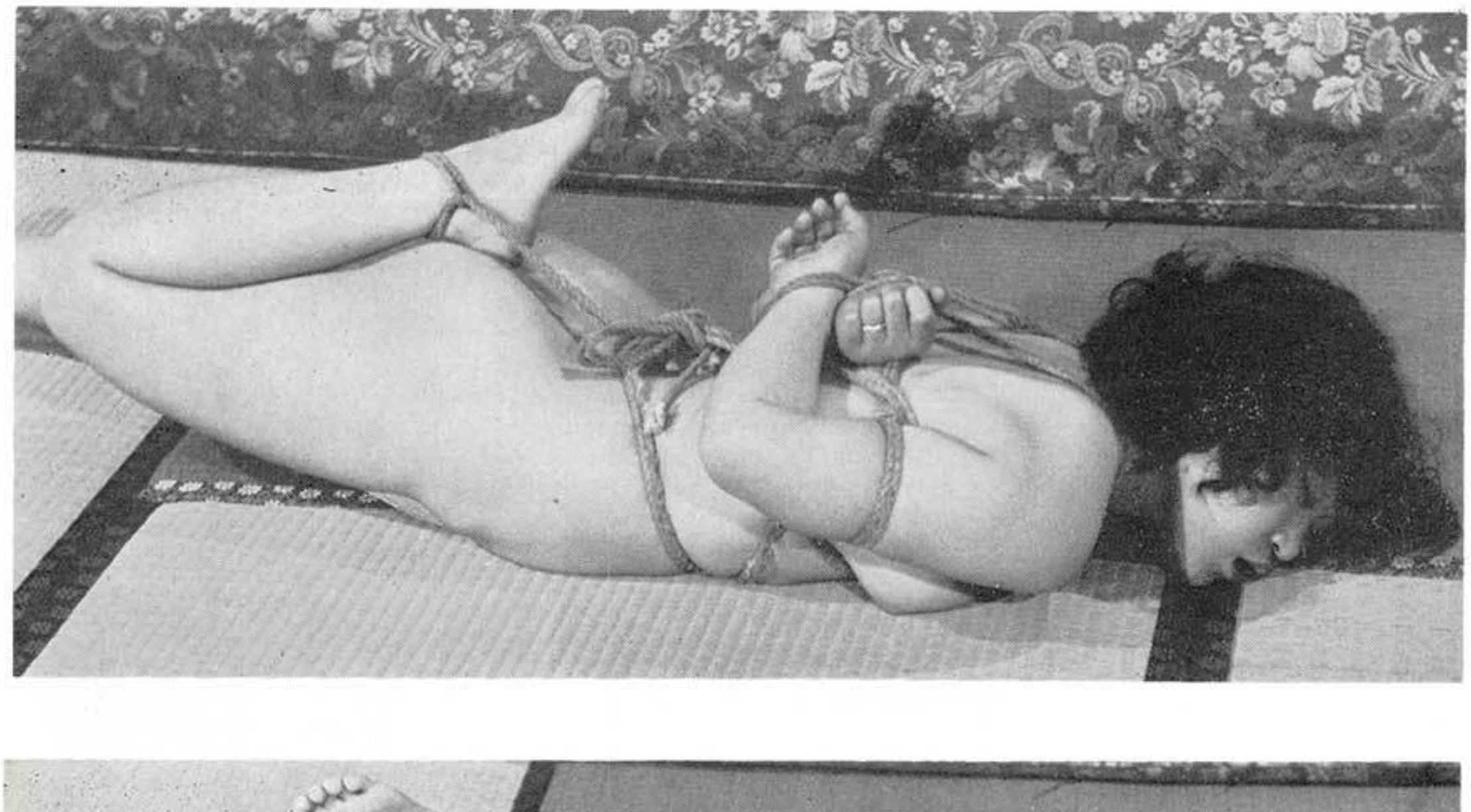


〈金原奈加子〉

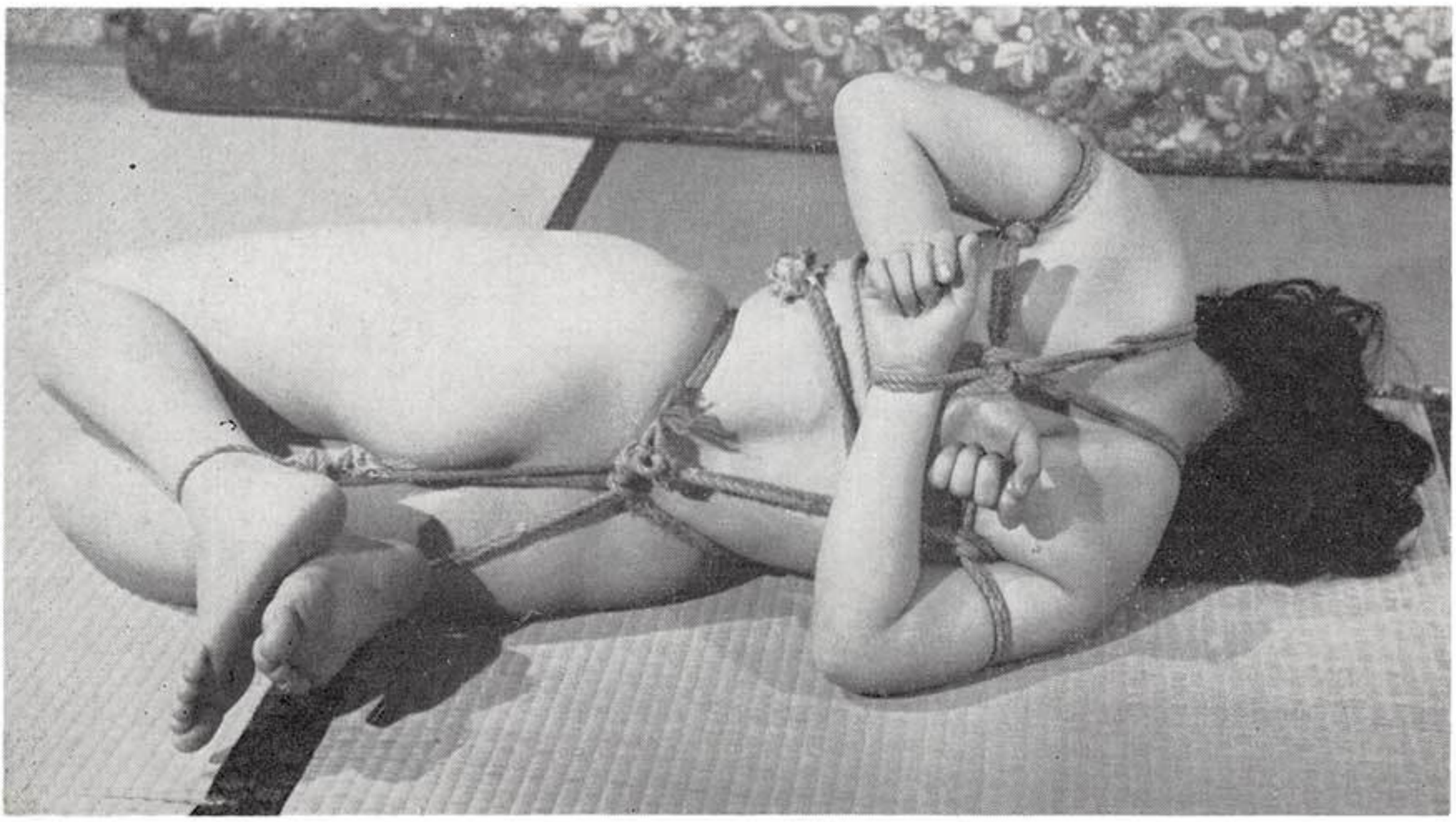
すべてを晒して



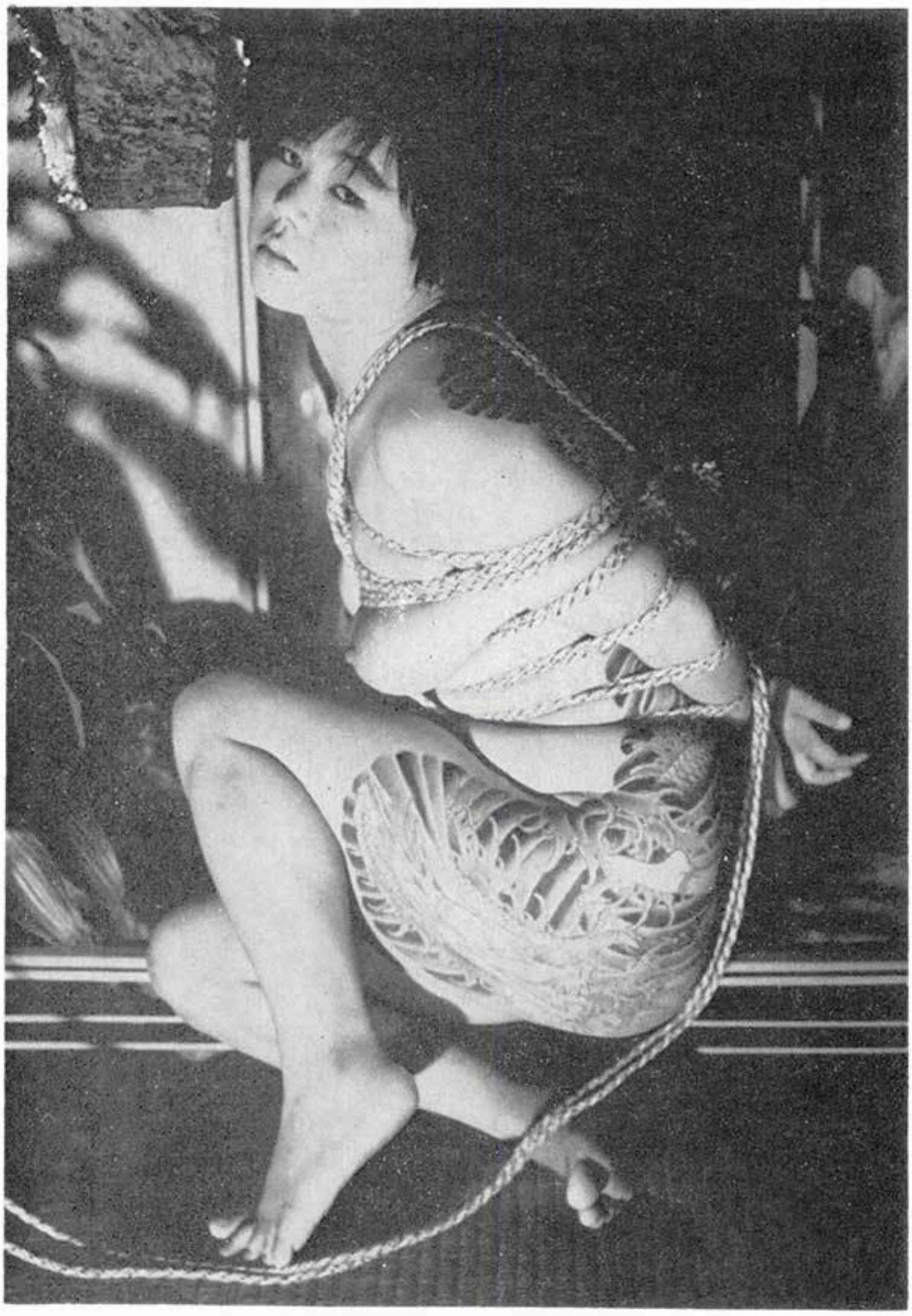
〈福井桃子〉



後手縛りの嬲弄　　〈西条紀代〉



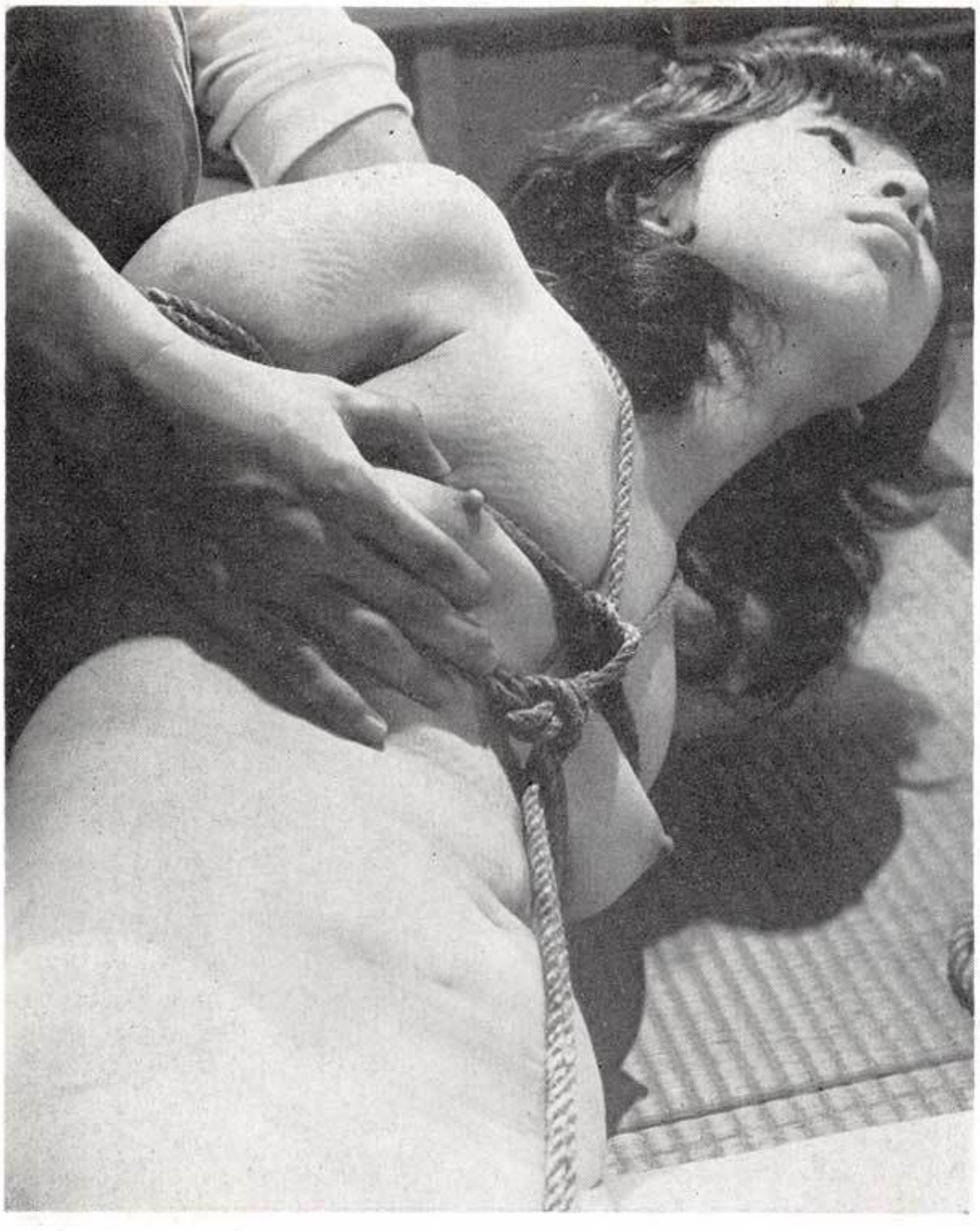
妖美に掛けた縄



△山原清子▽

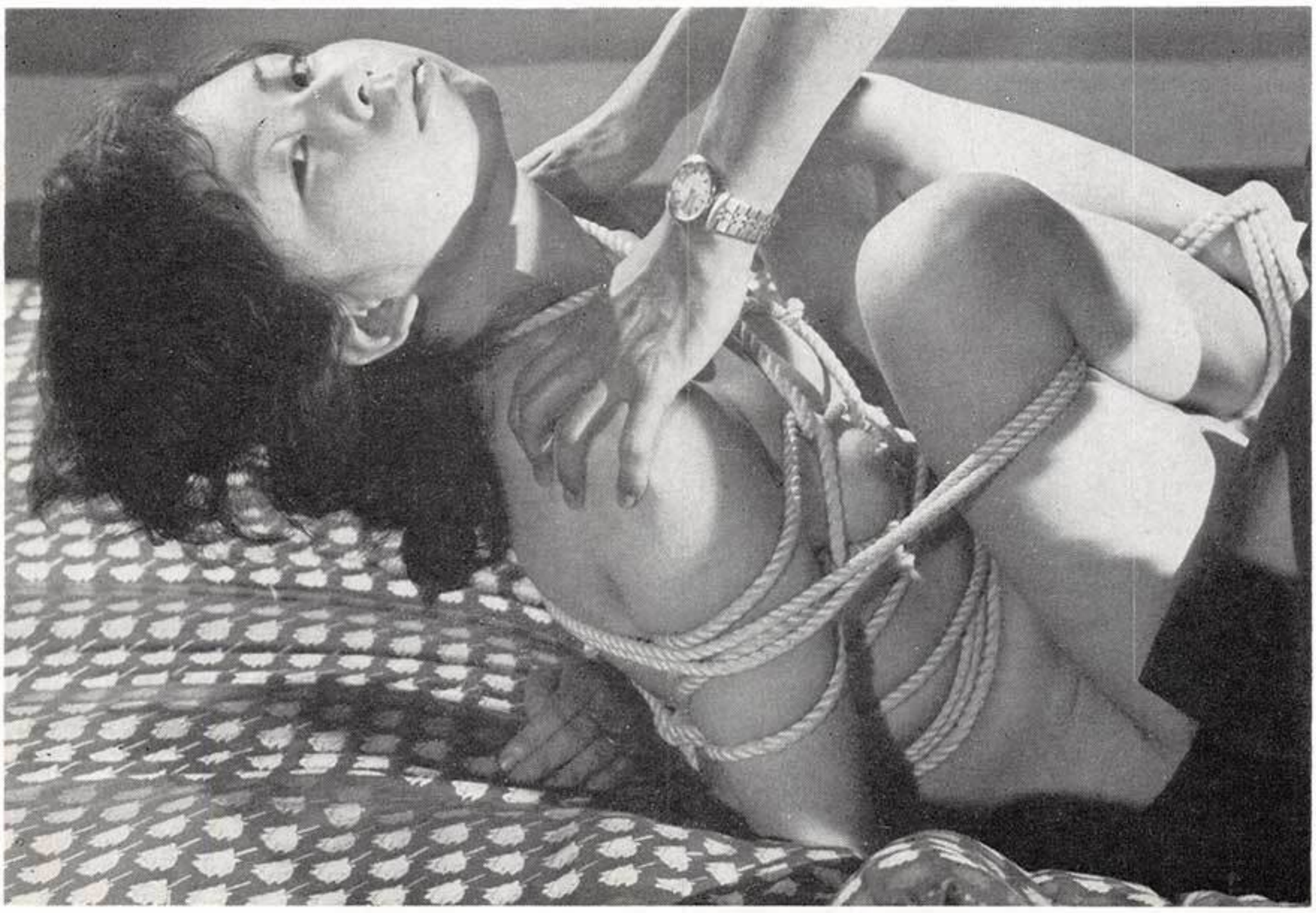
惑溺の一瞬

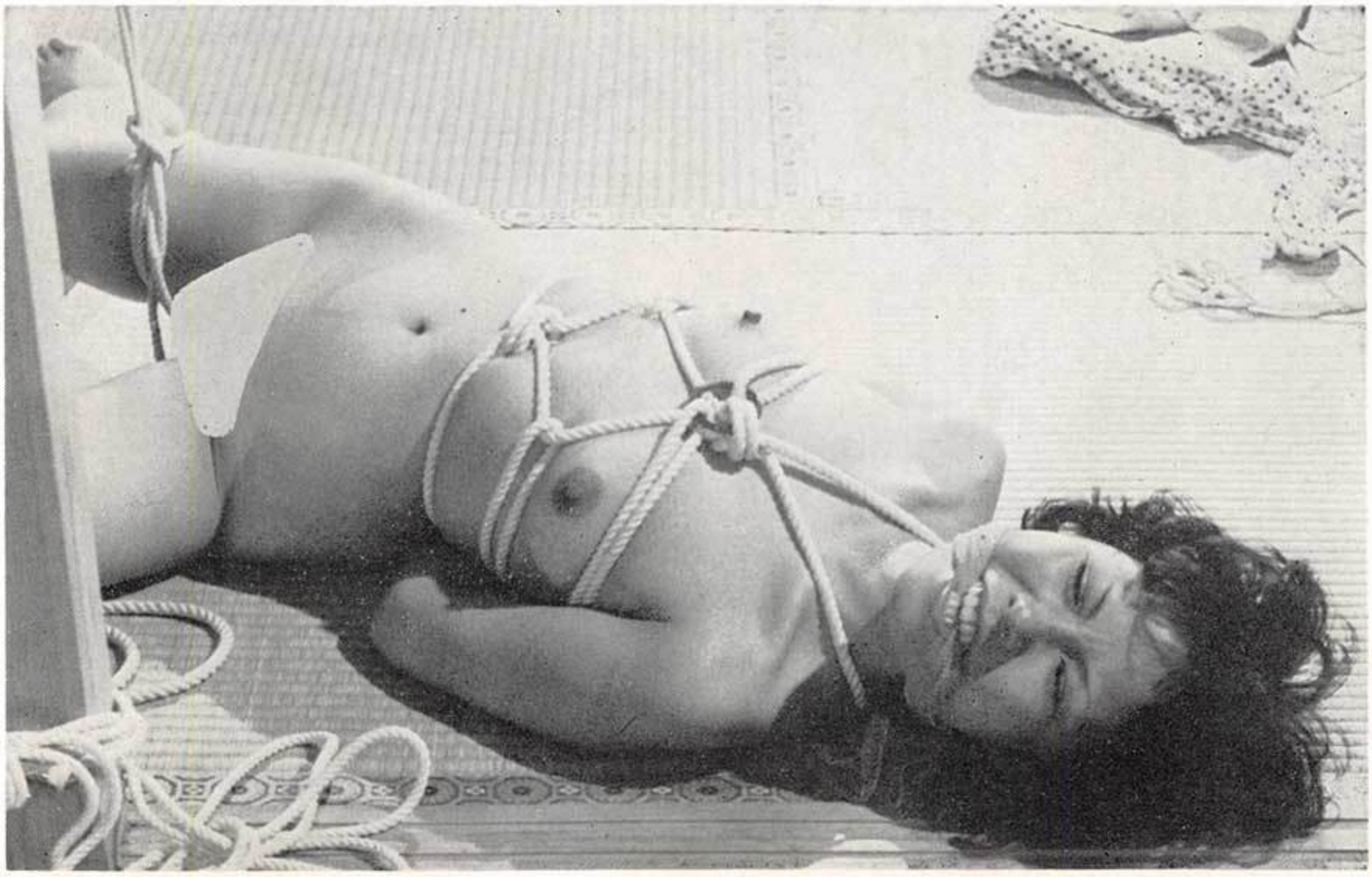
△三浦純子▽



いたぶられる美女の生態

〈前田真知子〉





ベテランの味

〈玉木章子〉

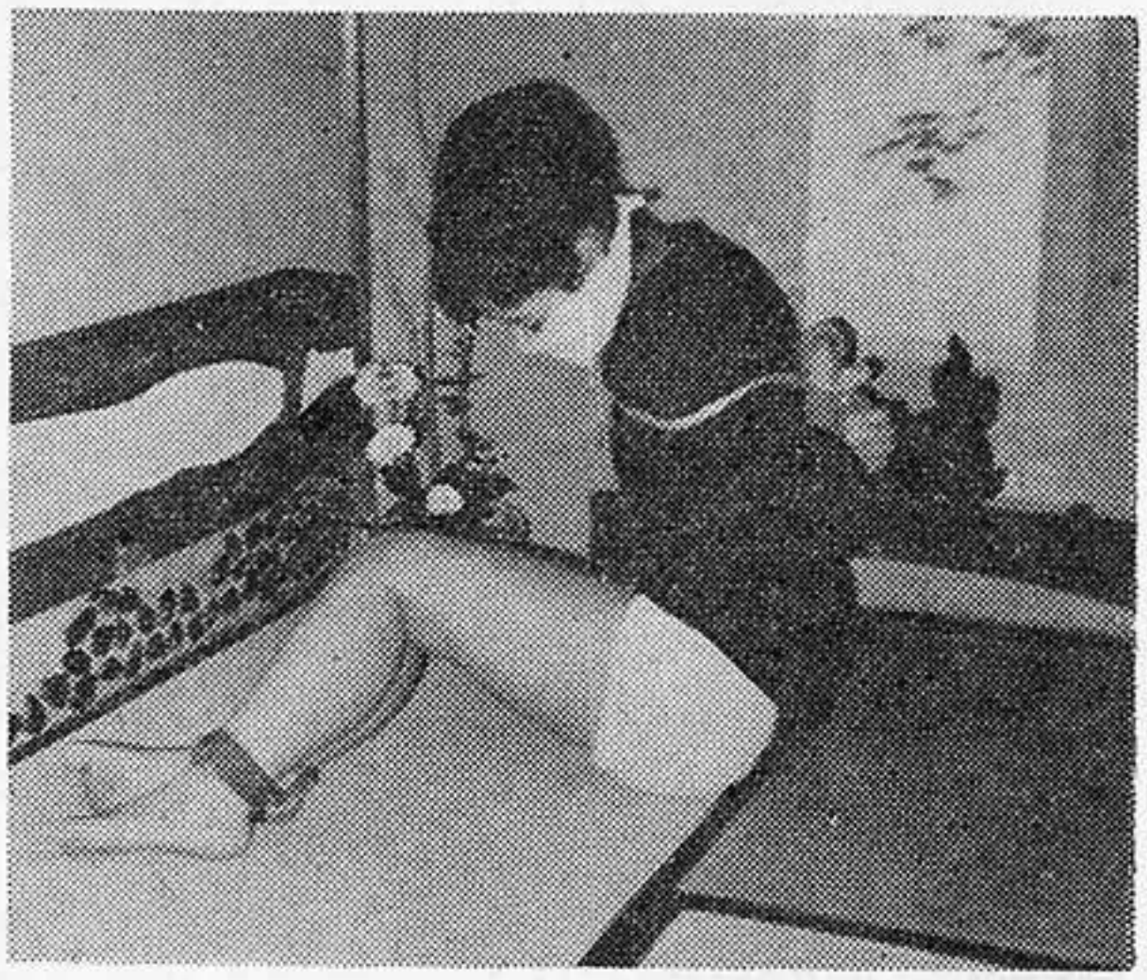
奇譚クラブ
昭和四十八年十月号
第二十七巻第十号
通刊第三〇八号

手鎖足枷（てぐさりあしかせ）の美女（びじょ）

モデル……梨花悠紀子

競売でセリに出されたエジプトの若き奴隷女が、足枷、手鎖で、セリ台の上に立たせられている絵を見ると、私は限りない哀憫の情と共に、この可憐な少女に対して嗜虐的な気持が起こるのを、どうすることも出来ない。この一見、相反する憐憫、加虐の情が、私の心の中で激しい葛藤を演じつつ、渦巻いているのを、私は、痺れるような甘い思いで噛みしめている。私に若し経済的余裕があれば、このセリ市に出された美女を、是非共、セリ落としたいと願っている。この奴隷女の御主人様になるという空想は、私に夢を与えてくれるのだ。

（瀬戸内　勇・記）



▽▽▽一生のうちに数十人の女性を責めた男の手記△△△

遺稿

「ボクの責め方」

宝塚二三夫

ボクの女の責め方の要諦は、女の美しさというものを、その中から引きだすものであって、女をいじめることを目的とするものではない。

だから、もう、むやみやたらに気狂いの様に縄を女の身体に、やけくそに掛けるといったことは絶対にやらない。よく、女の顔にまで縄を掛ける馬鹿な奴がいるが、ボクは、あんなのを見ると虫酸が走るような気がする。

女責めに用いる縄というものは〈女の美〉を強調してこそ、意味があるのであって、女の美しさを損うような縛り方は邪道であると思っている。もっとも、これはボクの好みを言っているので、他のマニアの方々に強要する気は、いささかもない。

例えば、冬の寒い日の朝早く、まだ暖房のきていないビルの一室の事務机の上に、勤めだしたばかりの十八か十九になったばかりの女事務員を立たすのである。如何に人気のない事務室といっても、机の上に立つということは若い女の子としては逡巡するが、ボクにとっては、それを無理に強要するところに面白さがある。

机の上に立って眺めた窓越しの風景に驚いている彼女のストッキングを、くるくるっとはがしてしまう。「いや、いやッ」と言ったって、ボクは止めることをしない。

冬の日の朝、冷たい机の上に素足で立たされた彼女の足の指が、忽ち紅に染まってくるのをボクは、わくわくする気持で眺めながらすべすべとした脛や太股を掌でさすって、その、えも言えぬ感触を楽しむのだ。

ボクの責め方は、こうした極めてソフトタ

ッチなもので、時には縄や紐を使わない事もあるから、絵や写真には、なり難いだろう。

ボクは大型の白いハンカチを、いつもポケットに忍ばせている。いざというときは、このハンカチで、女の手首だけを背後で括るのだ。ボクのやる、いろんな責めに対して、彼女の手が邪魔しないために軽く後で止めておくといった程度で、十文字に止めておくだけだ。

ボクの責め方のなかで次に重要なことは、責められているときに出す女の声を楽しむということである。その為に、ボクは出来るだけ猿ぐつわというものを用いないようにしている。その時の女の発声を封じてしまうということは、これは大変、勿体ないことだ。

女の身体を痛めつけて喜ぶといった責めは、たったの一度だってやったことはない。辛抱づよく飼育していって、いつの場合でも彼女が自分自身から、それをやりたいという風に、しむけるのがボクの責め方だった。

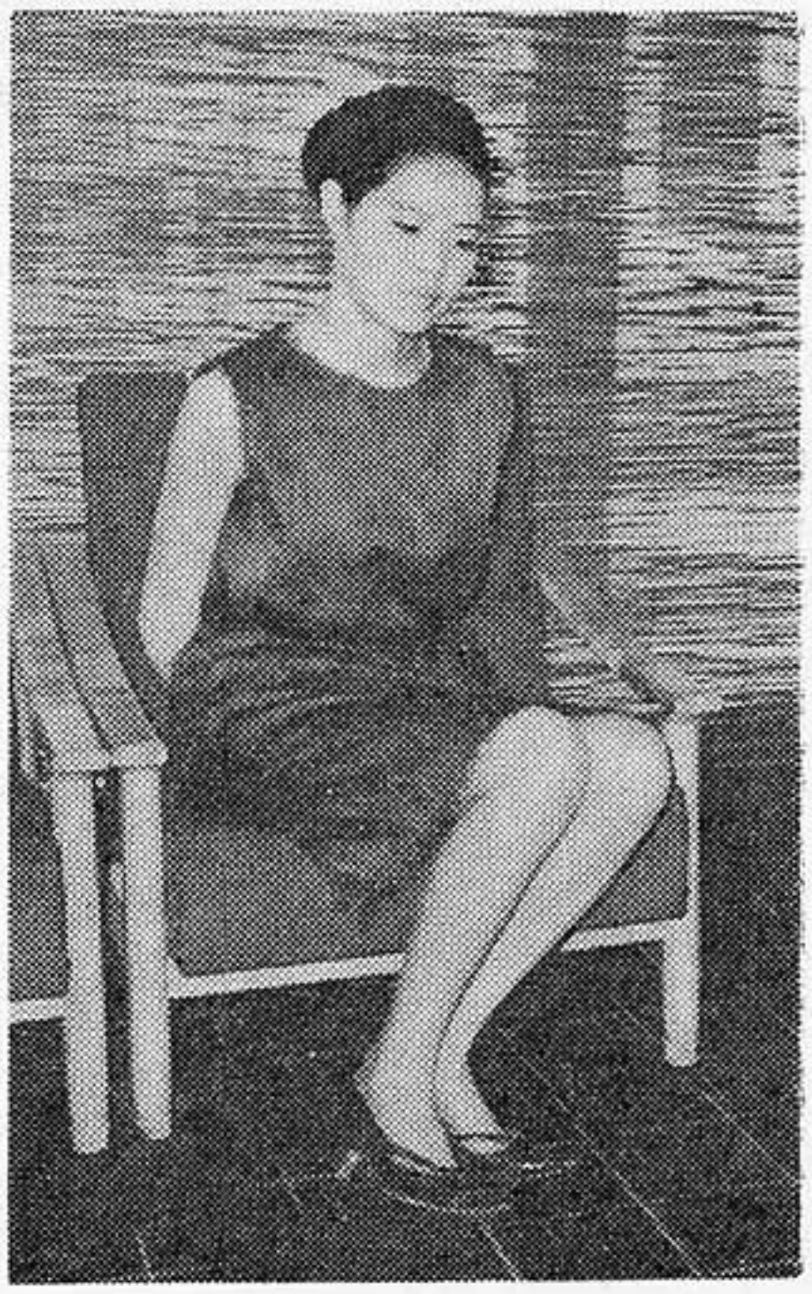
圭子という可愛いい無邪気な少女のパンプスもストッキングも脱がせて、お寺の砂利の上を素足で歩かせたことがあった。

そんな時の女は、いろんな泣き声を出すものである。年増は年増なりに妖艶に、おぼこ娘はおぼこ娘なりに可憐に、たまらない魅力的な声を出すものだ。ボクは、これを文弥節（ぶんやぶし）と名づけているが、猿ぐつわで、この折角の美声を、封じてしまうということは愚の骨頂だ。もっとも、ボクだって猿ぐつわを用いることが時にはある。それは発声を封じるということより、その表情を楽しむためだ。

ボクは今までに、何十人という若い女性を責めてきたが、一方的に女に惨虐なことを強いたことは一度もない。いつの場合でも、共に一緒に楽しむといった方針を守ってきた。

女の身体を痛めつけて喜ぶといった責めは、たったの一度だってやったことはない。辛抱づよく飼育していって、いつの場合でも彼女が自分自身から、それをやりたいという風に、しむけるのがボクの責め方だった。

圭子という可愛いい無邪気な少女のパンプスもストッキングも脱がせて、お寺の砂利の上を素足で歩かせたことがあった。



「圭子、こんな石の上、ハダシで歩くの、いやだわ。人が見ていたら、どうするの」

駄々をこねていたが、結局、ボクが強く要求すると、仕方なしに、跣足（はだし）で玉砂利の上を歩きだした。足の裏が痛いというよりも、圭子はハダシで歩くという違和感に、若い女としての羞恥心が先に立っていたに違いない。

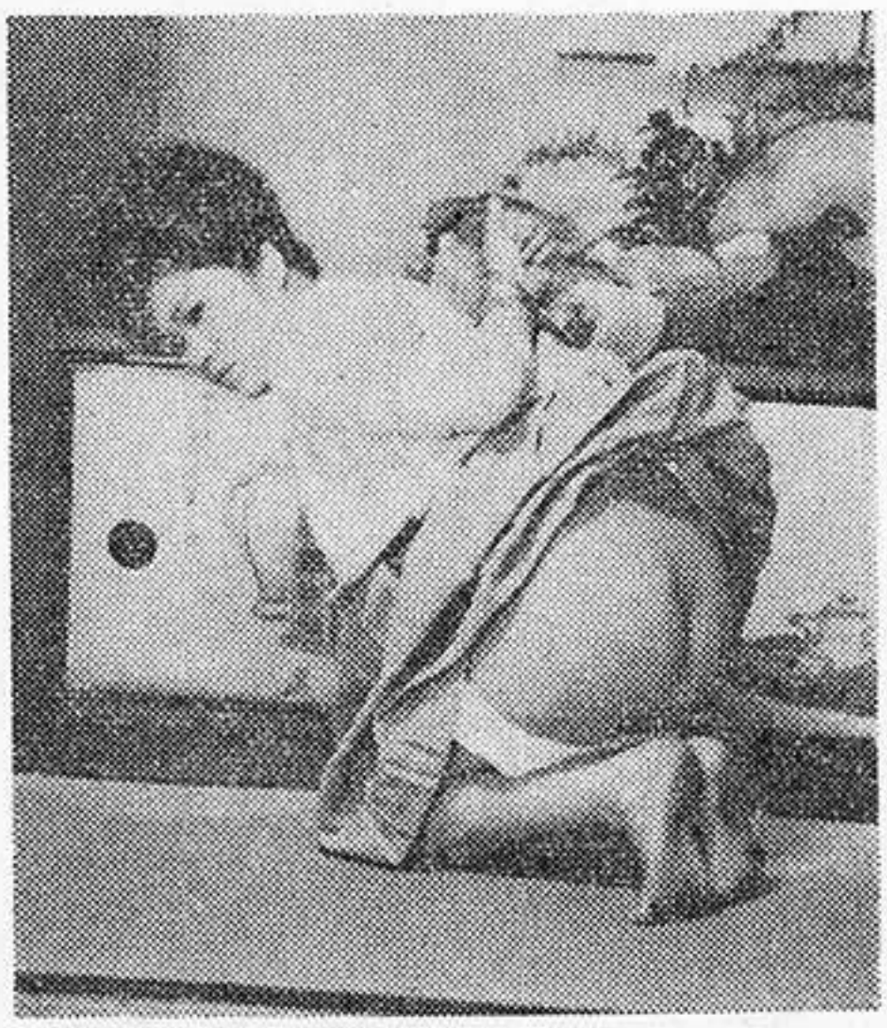
「お百度参りには、若い女の人はハダシで百回も、百度石を回るんだよ。そんなところでじっとしていないで、走った、走った！」

そう言って、けしかけると、圭子は靴とストッキングを手に持って砂利の上を跣足で走り出した。車へ戻ってから、「圭子、ハダシで歩いたときの気持は、どうだった？」って聞いたら、「いやよ、あんなの。みんながジ

ロジロ見るんだもの。社長さんって、私にあんなことさせるなんて、一寸変わってるわ」と言いながらも、自分の美しさに自信のある若い娘だから、万更でもなさそうだ。

「それは、キミの足が素晴しく綺麗だからだよ」と、ごま化しておいたが、圭子はアブノーマルなことなんか少しも知らない純情なお嬢さんだから、ボクの意図なんか、全然わかっちゃいない。それもまた当然のことなのだが、その圭子から、「一寸、変わってるわ」と言われたときは、やはりドキリとした。

ボクは女と車に一緒に乗ったときは、いつも靴を脱がせストッキングも剝いでしまう。運転手はボクの、そんな癖を、よく心得ていてマットを取り除け、カーペットを掃除しておいてくれる。この車はボク以外は使わないことにしているから、普通でも余り汚れていないので幸子のように、車に乗るときに、靴を脱いで上がってくる女もいる。そんな際は、車外へ履き捨てた靴を助手席で、ちゃんと保管するのも運転手の仕事になっている。車の中でボクは、専ら膝小僧から太股へと掌を滑らせ、視線を走らせて感触を存分に楽しむ。後手に縛るというのは、ボクの触手を拒否させないためのものだから、紐のようなもので簡単に括る程度にする。車外から覗かれても、縛られているなどとは、一切わからない。

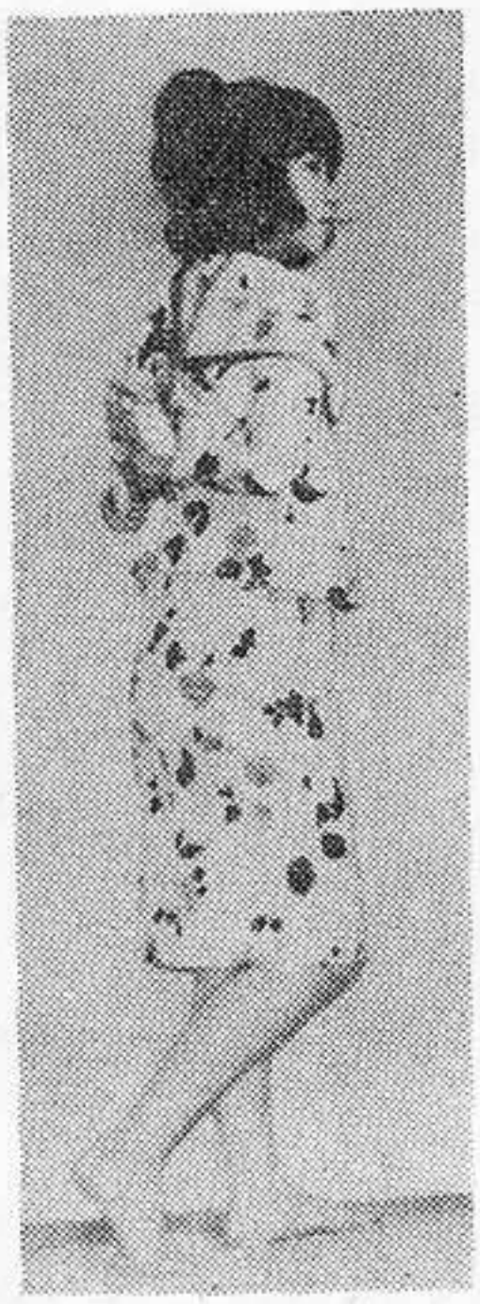


時には、両手に花と、二人の女を両側に坐らせて交互に、その下半身を愛撫したことがある。ボクの膝の上へ左右から一本宛、それぞれ素足を挙げさせたときは、さすがに二人の女は恥かしがって、頬を赤く染めて顔をシートに埋めていた。

ボクは車の振動に身をゆだねているふりをして、太股のツケ根から足の爪先まで、両方の手を使って右と左の足を擦ったり、撫でたりして、たっぷりと観賞した上で、軽く抓ったり、足の裏や膝の裏を、くすぐる。二人の女は、互いに、くくくくーう……と、忍び笑いを口でこらえながら、ハアハア荒い息を吐いているが、決して大きな声は立てない。

ムチムチとした若い女特有の、掌にねばりつくような内股の感触は、こたえられない。そんな絖のような肌に手をやっていると、思いっきり抓ってみたくなる。

大体、ボクの行動範囲は、大阪を中心として、京都、奈良、和歌山、神戸といった日帰りで行ける所だが、京都や奈良のお寺へは、



よく行ったものだ。もっとも、お寺といっても観光客の雑踏する有名なお寺ではない。廃寺に近いような破れ寺で女を責めるのが、なんとなく面白い。奈良の西大寺へ行った時は駐車場に車と運転手を置いておいて、例の幸子と二人で木立の中を、お寺へ向かう。

ウイークデイで人影のないのを幸い、西塔の礎石の上に跣足で立たして後手を括って晒しておいた。平安時代に兵火で焼失したという塔の礎石は、それから千数百年もの間、こうして風雨にさらされていたのだろう。私は幸子を一人、石の上に立たせておいて石段に腰を下ろして眺めていた。

「いやよ、いやよ。人がくるうーッ」

アベックが一組、来て塔の基壇の横のベンチへ並んで腰を下ろしたが、ボクは幸子の靴とストッキングを持ったままニヤニヤ。これも羞恥晒し責めの一種か。呵々――。

縄のゴタゴタ責めはやらないボクも、足首

縛りは、よくやる。事務室で責める時は、帳簿を綴じる黒い紐で揃えた足の拇指をくくるのは、ボクの責めの常套手段だ。黒紐のかわりに、輪ゴムを拇指に、くるくると巻きつけるのも面白い。面白いというのは、ゴムバンドで拇指と拇指とだけを止めたのだから、自分ではずそうと思えば、足を離しさえすれば簡単にとれるものを、ボクの許可がないことには、勝手にはずすことが出来ないというところに、SMプレイとしての面白味があるわけだ。

ボクは女を素裸にして責めることも多いが着物の裾まくりや、洋服のスカートまくりという一風、変わった余興をやることがある。

剝玉子のようなお尻を、まるだしにして手のひらで、ペチャペチャやる時の気持は、こたえられない。

おくので自分で「足が太いから、それだけは許して……」と哀願するのが面白い。

これをボクは、無理にまくってゆく時の気持は男冥利に『尻まくり』と称しているが、ピンク色の円い踵が左右、別れ別れになって、ちんまりと揃えているのは可愛いい。

裸から流れて太い盛り上がった脛は、彼女が自分から「足が太い」というだけあって、たしかに肉づきはよい。でも、脛で適度のふくらみを見せて、足首できゅっと締まっている足は、またボクの好みでもあるわけだ。

これとは反対に、素裸にひんむいて、足にだけ黒のパンプスを履かせて、廊下を歩かせたこともあった。両手は背中逆十文字に後手にしておいて窓際に立たせて。

縛り方へ逆、字

ボクの責め方でいえば、背中十字、首縄というのが、理想な縛り方である。縄を胸の方へ回しても回さなくても、この縛り関係はない。只、逆十は余り字に握りしめた拳が下がらない

ために是非共、首縄が必要だ。
廊下には誰もいない。そこでボクは素裸で靴だけを履いた女に、文弥節を誦わす。
「さあ、久子(ひさこ)、言わないか。言ってみろ」
「誰か見てェ。久子、こんなにして、縛られてるのを見てェー」
「どんなにして縛られてるのか、言わんか」
「久子、素裸にされて、高手小手に、むごたらしく縛られてるの、見てェー」
「もっと、くわしく言わんかッ」
「ネエ、こんなに、ムゴク縛られてるのよ。お洋服も下着も何もつけさせられないで、素裸のまま、靴だけ履かされてんの」
廊下のことだから、いつ、人が現われてくるか、わからない。そのことがボクを刺戟してか、ボクは是非共、首縄が必要だ。
廊下には誰もいない。そこでボクは素裸で靴だけを履いた女に、文弥節を誦わす。
「さあ、久子、言わないか。言ってみろ」
「誰か見てェ。久子、こんなにして、縛られてるのを見てェー」
「どんなにして縛られてるのか、言わんか」
「久子、素裸にされて、高手小手に、むごたらしく縛られてるの、見てェー」
「もっと、くわしく言わんかッ」
「ネエ、こんなに、ムゴク縛られてるのよ。お洋服も下着も何もつけさせられないで、素裸のまま、靴だけ履かされてんの」
廊下のことだから、いつ、人が現われてくるか、わからない。そのことがボクを刺戟してか、ボクは素裸で靴だけを履いた女に、文弥節を誦わす。
「さあ、久子、言わないか。言ってみろ」
「誰か見てェ。久子、こんなにして、縛られてるのを見てェー」
「どんなにして縛られてるのか、言わんか」
「久子、素裸にされて、高手小手に、むごたらしく縛られてるの、見てェー」
「もっと、くわしく言わんかッ」
「ネエ、こんなに、ムゴク縛られてるのよ。お洋服も下着も何もつけさせられないで、素裸のまま、靴だけ履かされてんの」
廊下のことだから、いつ、人が現われてくるか、わからない。そのことがボクを刺戟してか、ボクは素裸で靴だけを履いた女に、文弥節を誦わす。
「さあ、久子、言わないか。言ってみろ」
「誰か見てェ。久子、こんなにして、縛られてるのを見てェー」
「どんなにして縛られてるのか、言わんか」
「久子、素裸にされて、高手小手に、むごたらしく縛られてるの、見てェー」
「もっと、くわしく言わんかッ」
「ネエ、こんなに、ムゴク縛られてるのよ。お洋服も下着も何もつけさせられないで、素裸のまま、靴だけ履かされてんの」
廊下のことだから、いつ、人が現われてくるか、わからない。そのことがボクを刺戟して簡単な縛り方で

幸子は盛んにボクを呼ぶ。声がとだえるとあたりは、しんと静まり返って不気味だ。

前にも言ったように、こうして女を立縛りにする柱をボクは観念柱と名づけているが、それが、その時の状況の変化によって、晒し(ぶん)柱になったり、泣き柱となったり、また、文弥柱(やばしら)になったりする。

大体、ボクの責め方は、女体を痛めつけるのが目的ではないから、吊り上げたり、宙縛りにしたりはしない。せいぜい柱に立縛りにするにしたって、爪先を立たせるくらいであるが、その代り、彼女が羞恥にむせび泣くといった情況を作りだすための設定は、よくよく考えて、より効果的にやっている。

この場合だって、ボクは物蔭にかくれて、じっと立縛りにされた幸子の様子を、観察していたのであるが、幸子にしたら、ボクが黙って戸外へ出ていったものだから、放っておかれたものだと感違いして盛んに、わめき立てている。

こうして、ボクの責めの相手になる女性というのは、ボクの事務所――これはボクの事業単位の営業所で、大阪のビジネスセンター北浜にある一銀行の附属シンプルビルを借っているものである――の近くにある喫茶店のウェイトレスと親しくなることから出発している。喫茶店といっても、エヤーコンディショナーのよくきいた部屋全体は、まるでハワイのように、豪華なムードに溢れていて、給仕女も、若くてピチピチした美人を選りすぐって集めている。

ウェイトレスの可愛い子ちゃんのハントに成功してからは、専ら女事務員の中の器量自慢の子に目星をつけて仲良くなったものである。この方は、次から次へと、いろんな変わったタイプの女性像に接することが出来て、一時は食傷気味になるくらいだった。

背後へ回ったただけで、何かされるのではないかと、用心して身体をピクッとさせる純情型から、一度、両手首を縛っただけで、次に逢った時には、膝の上へ乗りかかってきて、両手をボクの首へ回してきてキッスをねだる多情型と、娘といっても、さまざまであるが方面を変えて取引先の銀行の窓口に坐っている可愛い子ちゃんと親しくなった時は、ちょっと変な具合であった。

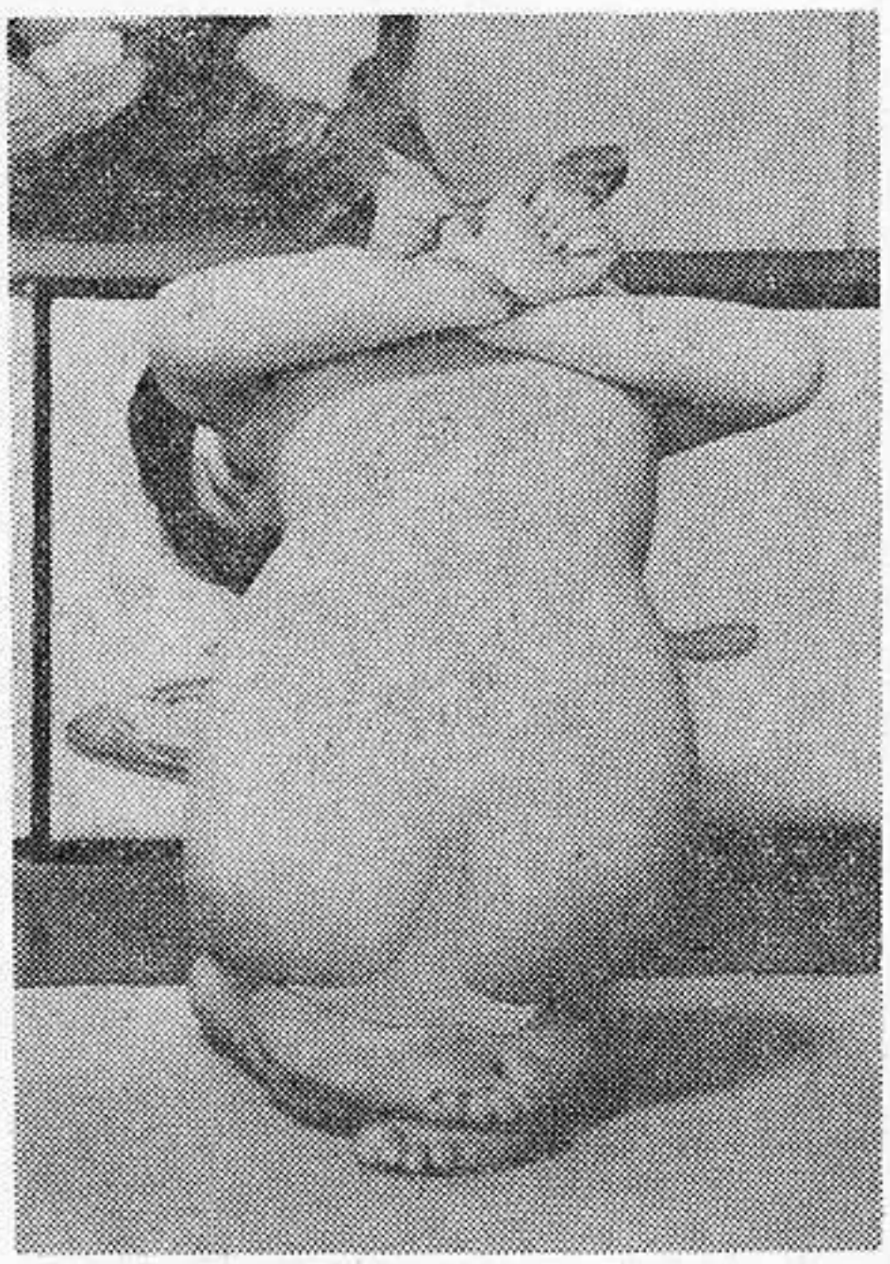
毎日、何百万、何千万という札束を勘定している繊手を、後ろへ回して縛り上げた時には、この指が聖徳太子と、いつも親しくして

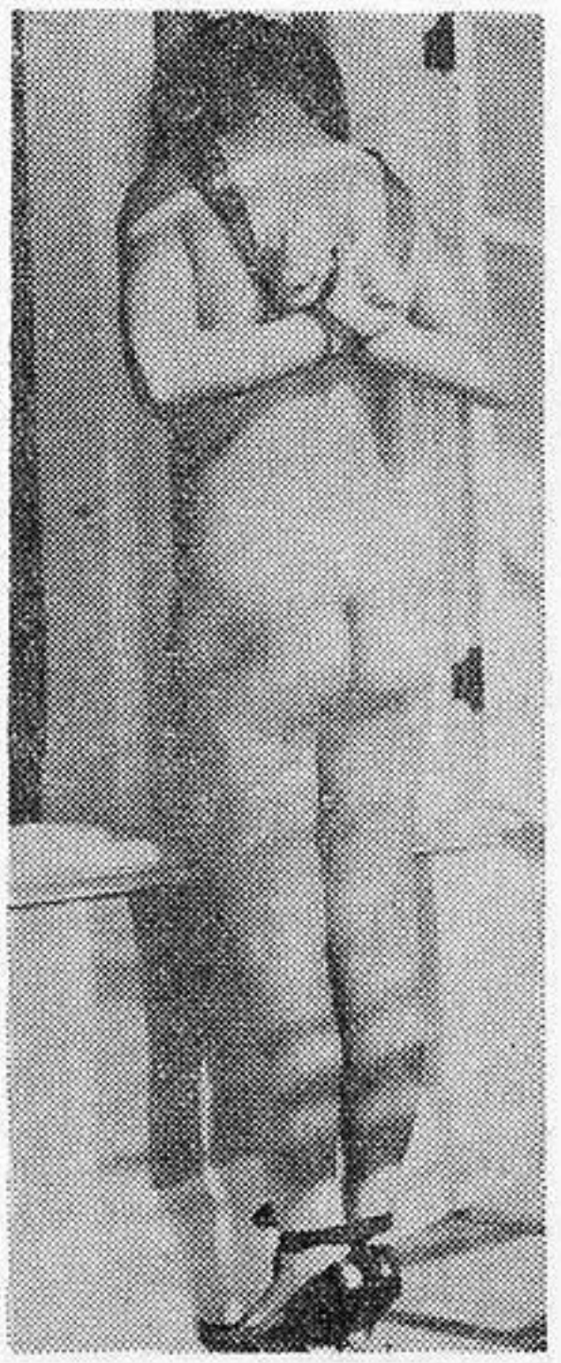
いるのだと思うとボクも責め甲斐があった。

笑顔で客に接している銀行員も、一皮むけば金の亡者じゃなかろうか。一体どんな足をしているのだろうかと、黒のハイヒールを脱がして、ストッキングを、くるくると玉葱の皮をむくように剝がすと、「アラアラ、なにを遊ばすの」ときた。大体、銀行員は裕福な家庭の子女から選んでいるというが、この隆子という子も、標準型以上の淑女であった。

神戸のフラワーロードにある東遊園地の噴水のところへ連れていったら、ボクが言わないうちに、靴を脱いで素足を水につけ、ボクに十分、その美しい脚線美を観賞させてくれた。やはり銀行勤めで目先がきくようになったのか、お蔭でボクは、その銀行に一千万円の個人の定期をさせられる破目になった。

取引先の会社でビルを新築した時のことである。落成式の祝賀会がカクテル・パーティで、模擬店をずらりと並べて、菰かぶりの樽酒を、がぶ飲みする大盤ぶるまいには、気にいらなかったが、京都の祇園から数人の舞妓がサービスに来ていたのには、大いに気に入った。専ら、だらりの帯の舞妓はんに、いかれてしまって、その白い襟足を眺めて時間を過ごしてしまった。そして、その日の最大の収穫はというと、一番気にいった駒勇という舞妓はんとデートの約束をしたことだった。

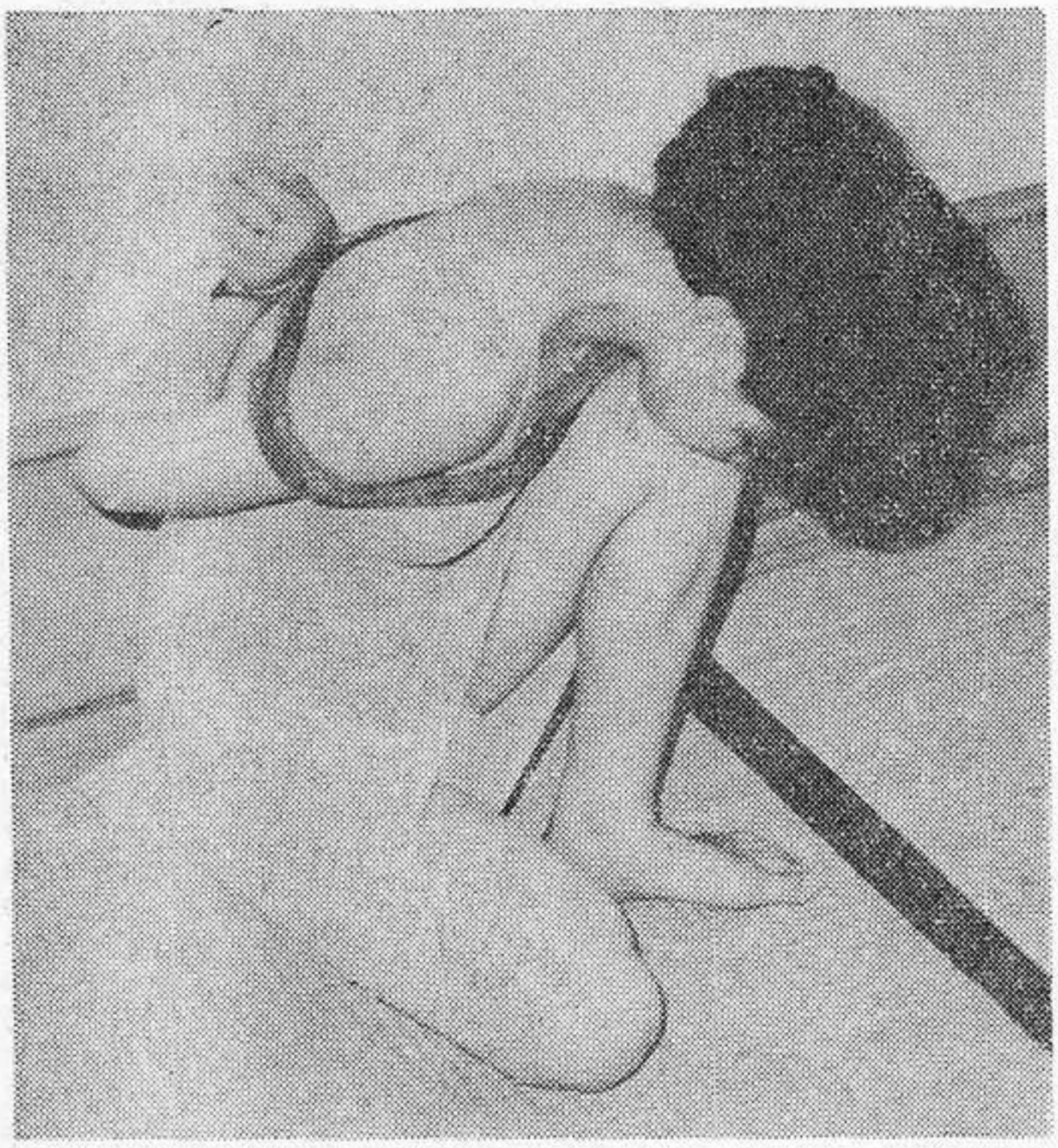




この駒勇という舞妓と神泉園でデイトした時にうつした写真は、奇譚クラブの何月号かに掲載されたことがあるが、ボクも実は、この写真を、いつ送ったか失念していて、雑誌を見てから驚いたものである。

「うち、かなわんわ。どないしょ」と言うのを、舞妓の盛装のまま、両手をうしろへまわして腰紐で括ったら、しなやかな手が、おして白粉か化粧品か、それとも手の脂か知らないけれど、ねばねば、べっとりしているのを、ボクの方が、なんだか薄気味わるくなったくらいである。厚化粧で襟足が真っ白に塗っているのなんか、まるでお人形のような無表情の美しさなのに、手を握ってみて、やはり舞妓はんも、生きた人間なんだなあと知らされたようなものだった。

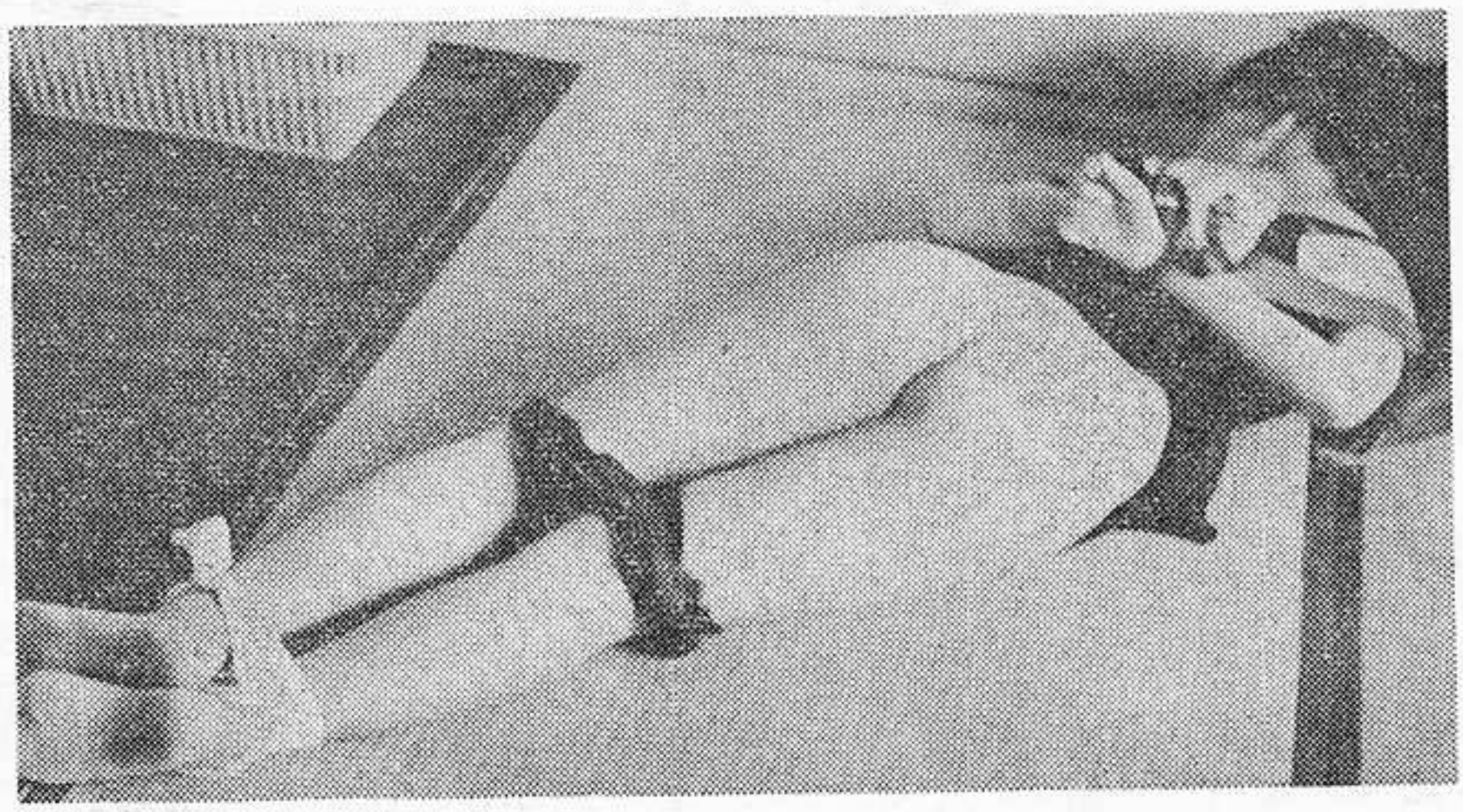
ここでボク独特の文弥節を唄わす責めについて言及したいと思う。ボクが女の太股



を軽く一抓りしただけで、ボクの二の腕に三つもお返しだとばかり、思いっきり力を入れて抓ってくる、お俠(きゃ)んな子があるが、こんなのなんかは、飼育具合によっては、物凄い文弥節を唄う女の子になるものだ。

抓り返してくるのを防ぐために、先ず、何だかんだと言いながら、両手をうしろで括らねばならない。両手を括ってしまったらもうこっちのもんで、あとは、如何に料理しようと、煮て喰おうと焼いて喰おうとこちらの自由である。もっとも、文弥節のよい声を聞こうと思ったら、それ相当の手練手管が必要なことは勿論である。

彼女の最も鋭敏な個所へのアタックであるが、これは個人差があるから、腋の下であったり、足の裏であったり、耳のつけ根であったりするが、刺戟は必ずしも強きを以てよしとするものではない。ムード作りが大切なことは、女責めを試(ため)みたことのある御仁(じん)であったら先刻御承知であろうと思う。



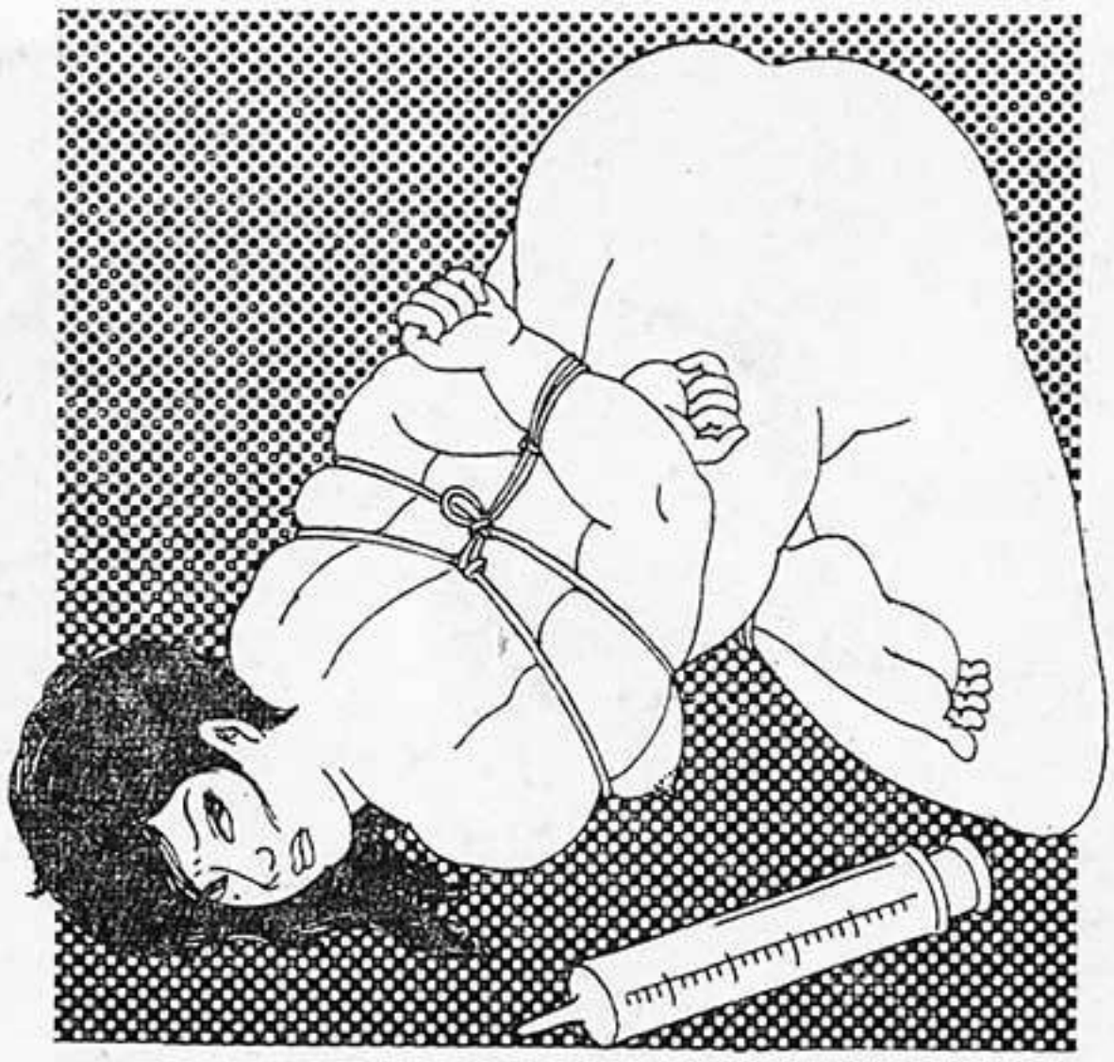
耳タブを噛まれたら最高の悦楽を覚えるという女がいたが、これとて、ガブリと西瓜にでも、かぶりつくような噛み方だったら、ぶっこわしもいいとこである。

〈女〉は、人の言葉ばかりじゃなく、自分の言葉にも酔う動物である。悦虐に酔わせるためには、出来るだけ文弥節を大きな声で繰り返し繰り返し、唄わすのが得策である。

前歯と前歯で、チチチチ……と、軽く歯型を入れるのがコツといえばコツである。

執拗で粘り強く、そして硬軟、強弱をとり混ぜて、長時間に亘って攻撃を続けると、女体というものは、必ず反応を示すものだ。殊に〈責め〉と名のつくものには、至って弱いものである。その頃から、彼女の可愛いい口から、妙なる文弥節が洩れてくる。

――(終)――



カット・マエダヒオミ

〔M女通信〕

ひとり暮(ぐら)しの女(おんな)の便(たよ)り

村田恭子

編集長様――。

先日は大変すばらしいお写真をたくさん、ありがとうございました。

恭子は、近頃ますますSMの世界に深入りしてしまい、身体中がその旨酒の中に浸ってしまうようになりました。少々オーバーな言い方をしますれば、暇さえあれば、奇クを読み、自分一人で出来るプレイがあれば、奇クを読それを実行に移してしまうほど、異常な女になってしまいました。

この間も、奇クの七月号を購入してきまして、二十四日の日曜日などは一日中、読み耽ってしまいました。最近は、図々しく、堂々と書店で奇クを買うことが出来ますし、SMに対して、それほどアブノーマルだという気持も持たなくなりました。誰に迷惑をかけるわけでもなし、それで良いのだと思うようになったのです。

七月号には、私の胸が思わずワクワクするほどの文章が満載されておりまして、大変興味深く、読ませて頂きました。

三木令子様のお書きになった『アヌスからの酒を飲まされて』は、浣腸好きの私にとって大変、参考になりました。ブロバリンを併用してしまいましたし、思いもよりませんでした。そのうちに試みてみたいと思っております。

この間、昔、夫にされたように、自分でウイスキーを流し込んでみました。二〇〇CCばかりを浣腸してみましたが、耐えがたいほどの鈍痛がアヌスの附近に集中し、ふき出さないようにおさえていた砲弾型の栓も役に立たず、数分間もたたないうち、注入した殆どを排泄してしまいました。

最上卓也様のSM体験記〈あるマンション〉で泣く裕子〉のロー責めのシーンには、すごい迫力を感じました。こんなロー責めを、ぜ

ひ一度、うけてみたいなあと思います。

高原薫様の「愛しの風船妊婦」も大変、私は感じ入りました。最愛の人の愛情のしるしを自身の体内に受け、それを育みたいという本能ことは、女性であれば誰でも持っている本能ではないでしょうか。

友人の敬子が妊娠しましたとき、彼女にたのんで、そのはち切れそうな、お腹を見せてもらい、ゆっくりと撫でさすったり、下腹部に耳を押しあてて、「腹の赤ちゃん、動いているみたいよ」と、敬子と二人で言ったものです。その時ほど、愛しい人の子を宿してみたいと思ったことはありませんでした。

妊娠腹って、一種独特の侵しがたい、何か神々しいところがあるとは、お思いになりませんでしょうか。愛する人と結ばれながら、愛の結晶を宿すことが出来ませんでした私、その点では大変不幸な女だと思っています。

山口とき子様の告白『とき子の自縛教室』は、自称自縛狂の私にとりまして、格好のテキストでして、折りにつけ、参考にしています。とき子さんは、洋服のまま自縛されるようですが、まあ自然といえば自然かもしれません。でも、私の場合、自分の裸体にからみつく縄の感触に、なんとも言いようのない快感を味わいます。ですから、私は自縛しますときには、縄以外には一糸もまとわないことにしているのです。

これは私の邪推ですが、とき子さんも、本当は直接、肌に縄を掛けた方が良いと、お思いなのではないでしょうか。ただ、何かの御都合で、それがお出来にならないのではないかと、思うのですけれど……。

でも、たまには、ガンジガラメに縛られまして、身動きならない身体を思いっきり悶えさせてみたいと思うことがあります。

新刊の奇クを購入しましたときや、編集部から写真を送って頂いた夜など、一段と、そのような思いにかられます。

小杉千恵様の「犬と人との性」は獣姦をテーマにしているだけに、私にはショックでした。以前、私は一匹の猫を飼っていて、〝トラ〟という名前をつけていました。トラ猫でしたのでそのような名をつけていたのです。

私はトラに直接、手から餌をやるようにしていましたが、好物の煮魚なんかでしたら、私の掌から指先までなめまして、その時の感触といったら、何とも、形容し難いものでした。

猫の舌にトゲがあることを、この時、はじめて知りました。指先をザラザラした舌でなめられる時の、あのゾクゾクとする気持。あの舌でなめてもらったら、どんなだろうかと想像しただけで、お尻のあたりが、もぞもぞしてきます。

そのトラも何か外で悪いものでも食べてきたのか、自分の巣まで這うようにして帰ってきて翌朝には死んでいました。

今、自分になついてくれる近所の猫が、いつ来ても良いように、バターなどを用意して待っているのですけれど……。世の中って、中々思うようにはまいりません。

小杉千恵様は大胆に獣姦というような刺戟的なテーマに興味をお持ちになっておられますが、独り暮しの私にも、こうした犬と人との性につきましては、大いに関心がございます。なにかしら、秘密めいたお話に、正直なところ、引かれるのでございます。

奇クの七月号には、その他、佐藤幸子様の『お百度参りの責め』や、長谷田真知子様の「あたしの演じたライブ・ショウ」など、私の欲求を満足させてくれるのに十分な素晴しい作品が沢山、載っていました。

それから、同じ真知子さんでも、前田真知子さんの演じられる塚本鉄三様の〔カメラとペンのルポルタージュ〕〈澄んだ眸の奥にあるもの〉は、羨ましくも嫉ましいくらい、この美しい女性の展開されるMの人間ドラマには、ひかれてしまいました。

勿論、塚本鉄三様の美しい写真と、流暢な文章によることが大なのでしょうけれども、

この前田真知子様の美貌と、ひたむきなまでのマゾに対する献身的な執着が、私たち同性の胸さえも打つのでしょう。

次に良かったのは辻村隆様の「逆吊漫考」と木村洋子様の「Mの性に泣く私」という告白でした。木村さんは、私たちから見ても、一風変わったマゾ性格の方と見受けますが、それを素直に自分から深く掘り下げて、抉り出すように隠しだてされずに書いていらっしゃることに敬意を表します。

私も、自分で文章を書いてみて、木村さんの勇気に感心いたしました。なかなか、このようには書けないものです。

こうして取り上げてゆきますと、奇譚クラブって、なんと楽しい本なのでしょうか。つくづく、感心させられます。

☆

それはそうと、四月号で工月洋一様が書いておられた『自虐自慰』という告白は、なかなか興味のある文章でした。

男と女の区別はあっても、私は独り淋しく暮しております者ですから、身につまされて読ませていただきました。男の方の欲求処理って、大変ですのね。

私は、前田真知子さんのように美しくありませんし、また、マダム芙美代さんのように妖艶でもありません。でも、もし工月様が、お望みなら、この私、いまそこへ、とんでいって縛られてあげたいほどです。

工月様。あなた様の告白文を参考にさせて頂きまして、簡易ディルドォをこしらえてみました。夫を失った女の手なぐさみの一つとして、お笑い下さい。

材料ですが、長さ十七、八センチ、直径一乃至一・五センチほどのゴムホース（できるだけ厚手のものを選びます。私は自分で浣腸に用いていますゴム管を使いました。いくらか、そっているものがよいと思いました）、それに、フェルト。サイズはホースの長さと同じくらいの物。長さは、ディルドォの直径とフェルトの材質で、きめます。

それに、ガーゼ、コンドーム二個、輪ゴム一本、材料としては、これだけです。

作り方は簡単で、フェルトをゴムホースに巻きつけながら、元になる太さをきめます。

あとは、その上をガーゼでくるみ、それにコンドームをかぶせて、はずれないように輪ゴムでとめると、それで出来上がりです。

ここで難しいのは、突端の丸味を、どうして、うまく出すかということです。これをうまくやりませんと、ゴボウ巻きみたいに、不格好なものになってしまいます。

二個のコンドームを、重ねてかぶせますのは、一個ですと、ゴムの布地が余りに薄いため、下の材質の感触が、そのまま出てきますので、それを防ぐためです。

こうして出来上がりますと、芯がゴムホースですから、硬いながらも適度の弾力性があり、フェルトによって、かなり柔軟性も帯びています。それに、いくらかのカーブもありますので、使用心地は満点で、それはそれは良い具合でございます。

私は数回、使ってみて工夫したのですが、二個のコンドームの間に、お米粒を十粒ほど入れてみますと、効果が一層、強くなって、すばらしいことに気づきました。

私など、このハンドメイドのディルドォで毎夜のように、自分を慰めております。

誰に気がねすることなく、部屋を閉めて施錠してしまいますと、いつも素裸になって、三面鏡に自分をうつしながら、思いっきり、楽しむのでございます。

こんなときの私って、本当に動物的だと、あとになって反省するのですけど、やはり夜独りになりますと、そのたまらない快感が忘れられず、つい、独りプレイに耽ってしまいます。本当に、いやらしい恭子です。

でも、その最中には、そんなことは一切、忘れてしまいます。思いっきり淫らなポーズを、これみよがしに鏡にうつし、恥かしい声まで立ててしまいます。それによって、自ら

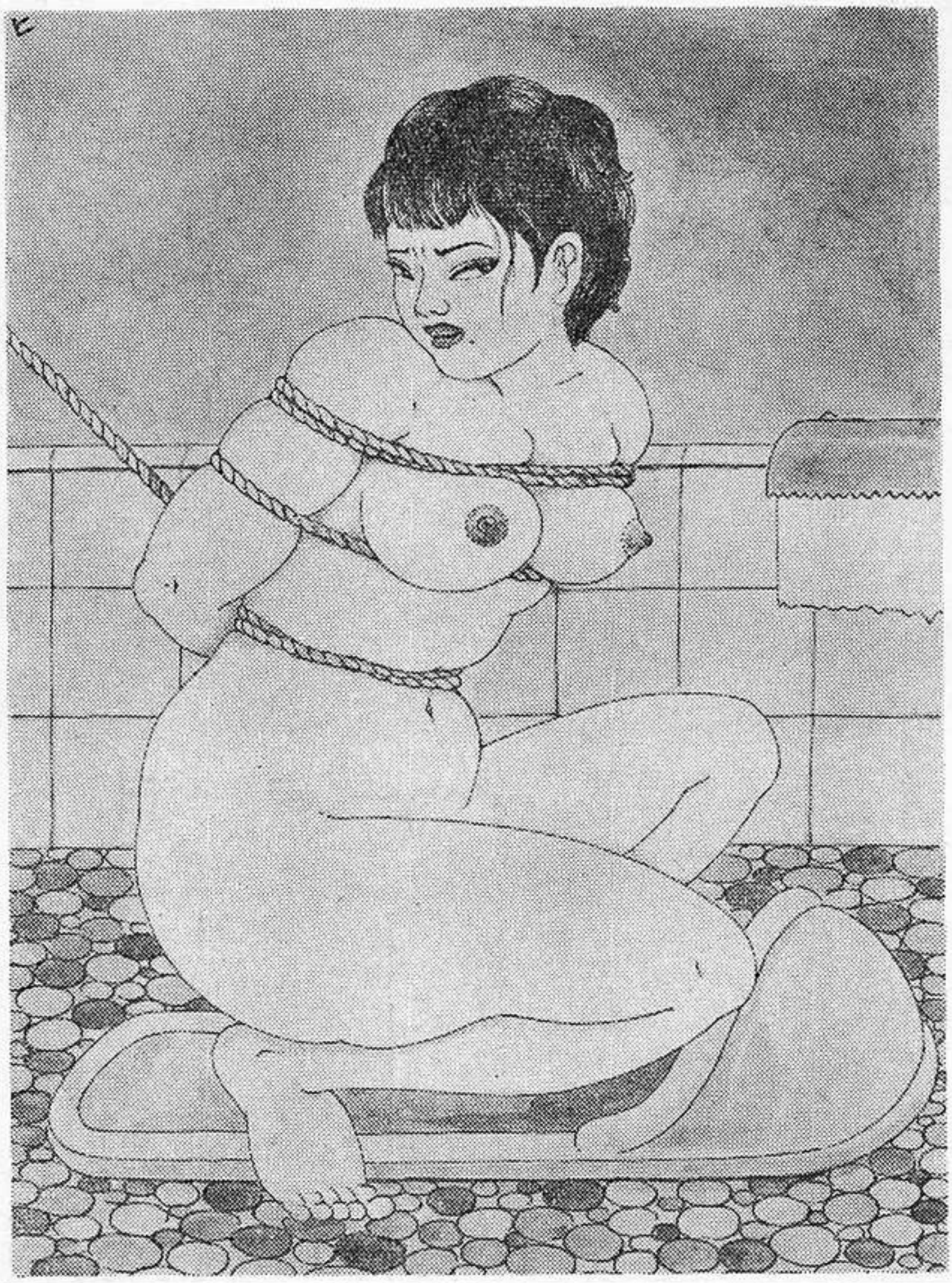
一層、興奮してしまいます。

工月様、それに読者の皆様、自分で作れるSMプレイの道具がありましたら、その作り方など、是非、誌上でお知らせ下さいませ。

楽しみに、お待ちしております。

☆

私の、いま勤めております職場は、女性ばかりで、それも既婚者が多いのです。



イメージギャラリー……『羞悦の仕上げ』……マエダ・ヒオミ……

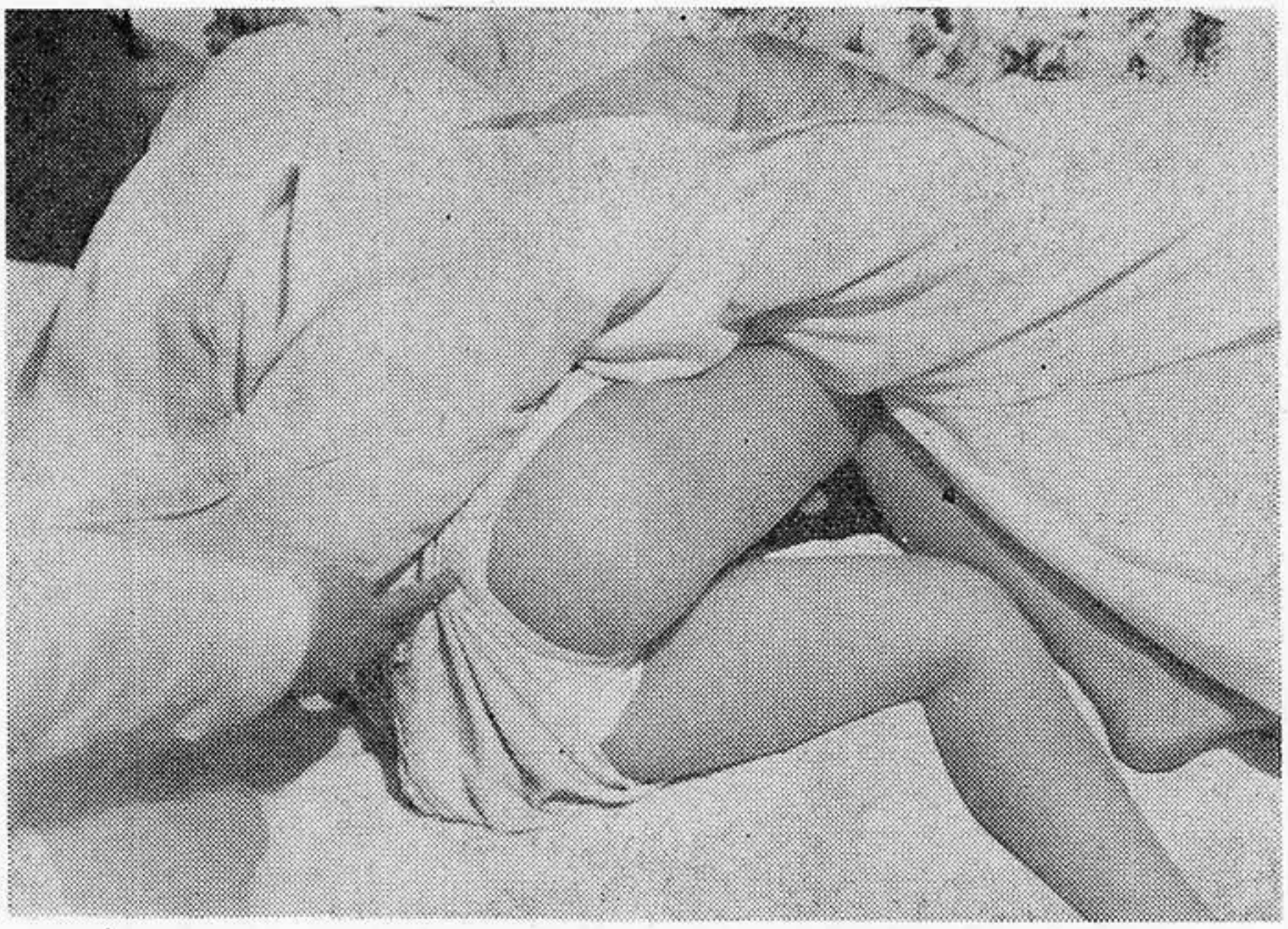
女なんて、大変いやらしい動物。男性の前では、そんなことは、何も知りません、なんて、ツンとすましていましても、女だけの集まりで一旦、そんな卑猥な話題に熱中しだしたりしましたら、男の方はきっと、耳をおおいたくなることと思います。

なにかのきっかけで、誰かが、そんなセックスの話を言いだしましたら、あとはもう、口から泡をとばすように、みんな競争で喋りだしたら、それは大変です。

やれ、ゆうべは主人に何回、可愛がってもらったとか、きの様子を自慢げに話すのですから、また負けていまいと微に入り細をうがって、そのと変わったその賑やかなことは、たったの一度でも、さすがに、Sだの、Mだの、それに縛りとか浣腸とかいったことは、たったの一度も話には出てきません。たまに浣腸という言葉が話の中に出てきても、言ってる人は、浣腸プレイにはおよそ興味のない人たちで、便秘だからする、など、私達が意味する浣腸プレイとは全く無関係に使っているのです。

編集長様。

私のたどたどしいお便り、ここまで、お読み下さって、うんざりなさったことと思います。



豊かに熟しきった女性が好きだ

女性が好き

沢田路夫

〈告白〉

三月号には、私の拙い筆になる『見せたい妻の寝乱れ姿』と妻の写真を載せて下さって有難うございます。

自分の書いた文章が活字になっているのを読むのは変な気持です。又、その後の号で、誌友の方々から、いろいろご批評がありまして、身をちぢめております。

でも、マゾ癖のある私としては、こうして誌上に身をさらしてみると、又ぞろ、例の好き心が動いて、妻の寝姿をパチパチやり、そして人にも見せたくなってきます。

私の精神は一体、どうなっているのでしょう。同封の写真は、三月号の告白を投稿してから写したものです。スライド用のフィルムからプリントしたので、鮮明度が物足りないのですが、まあ、見てやって下さい。

私の住んでいる北海道の釧路市は、四月といっても、まだまだ寒い季節なんです。でも部屋の中は、石油ストーブの炎で暖かです。

湯上がりで、ホカホカした体を横にして寝そべっている妻を、私は例によってマッサージしていました。頭のてっぺんから足の指先まで隈なく、揉みほぐしてゆくのです。

胃のうしろの背中を押してやると、ウーッと呻きますが、いい気持なのでしょう。腹も揉んでやります。腰も圧します。お尻の肉も

掌で握るようにして揉みます。
　足の裏も拇指（おやゆび）で押してやりますと「ああ、いい気持だわ」と喜びます。
　妻の体中を両手で撫でたり圧したり、触ったりしていると、妻と同様に、私自身も、よい気持になるのです。いつものように、妻はもうウツラウツラと、し始めます。
　さっそく、スリップを上に、たくしあげますと、ブリッとした三十五才の女盛りの肉体が私の目の前にあります。下の方に目を移動させますと、ムチッとした裸のお尻！　もちろんパンティはありません。すでに、パンティは下へおろしているからです。
　私は、むっちりと肉のついた中年の婦人が大好きです。前にも書きましたように、豊満で美しい肉体の早坂夫人。それに露出好きでセックス好きで最近、肉ののってきた佐野みさ子さん。という風に、主婦の方が好きなのです。
　主婦の方でなくても、笠井奈保子さんや座間明子さんのようなボリュームのある女性の方が好きですが、これが結婚して人妻にならたら、どんなに素晴しいことでしょう。
　さて、妻の大事なところをマッサージするには、太い両脚を開かないといけませんし、眠くなりそうだなと思ったら、先にパンティを外させるのです。
　妻も、そうされることを期待していますから、素直に腰を浮かします。首の後や横を指圧しますと、「頭がすっきりするわ」と言っています。
　妻の体中を両手で撫でたり圧したり、触ったりしていると、妻と同様に、私自身も、よい気持になるのです。いつものように、妻はもうウツラウツラと、し始めます。
　さっそく、スリップを上に、たくしあげますと、ブリッとした三十五才の女盛りの肉体が私の目の前にあります。下の方に目を移動させますと、ムチッとした裸のお尻！　もちろんパンティはありません。すでに、パンティは下へおろしているからです。
　私は、むっちりと肉のついた中年の婦人が大好きです。前にも書きましたように、豊満で美しい肉体の早坂夫人。それに露出好きでセックス好きで最近、肉ののってきた佐野みさ子さん。という風に、主婦の方が好きなのです。
　主婦の方でなくても、笠井奈保子さんや座間明子さんのようなボリュームのある女性の方が好きですが、これが結婚して人妻にならたら、どんなに素晴しいことでしょう。
　さて、妻の大事なところをマッサージするには、太い両脚を開かないといけませんし、山ありの谷で、たっぷりしています。
　私も裸になります。
　なにしろ暑いんです。部屋のストーブが最高に燃えています。
　隣室に用意してあるカメラとガンをとってきて、パッパッと撮りまくります。
　本当に妻は、よく眠っています。でも何枚も撮れません。一応の角度から写し終わるとあとは同じポーズなのですから、形を変えなければ、どうにもなりません。
　カメラを用心のため、隣部屋へかくして、又、指圧にかかります。眠っていてもマッサージは、よい気持とみえて、時々「ウーン」というような小さな呻きを発します。開かれた谷間の山村附近も優しく静かにソフトタッチのマッサージをします。
　どうも妻の体の位置が、よくないのです。妻の背中に跨がって、お尻を揉むことにします。本気で、どっかりと乗っかっている訳ではありません。ほんの軽く腰を下ろしているだけなのです。
　私のお尻と妻の背中が密着して、裸同士でています。中年女の体は、やはり最高です。
　肉つきもたっぷりとあり、なんといっても少々のことでは壊れない強靱さを秘めておりますから気持のいいこと。肉づきのよいお尻のマッサージを、静かに静かにやっているうち

に、やはり感じてくるんですね。「ウーン、ああ、いい気持よ」と、妻の夢の中での会話のような甘い声。

今度は背中からおりて、ころりと仰向けにころがした妻の横に坐り、片手は背中へ、残る片手は皮下脂肪のついたお腹へのせて撫でます。「ああ、何すんのよ」妻は寝返りを打って体を横にしました。すかさず片足を立てさせると、ペコンとへこんだお腹を強引に揉みはじめました。

静かな夜です。

お腹を揉まれて、妻もくすぐったいのでしょう。いつの間にか妻の体は大きくうねっています。息も荒く、自ら仰向けになって、妻も、もう完全に目が覚めているのでしょう。目がうるんで、優しい息づかいで……。これからは、夫婦のお時間です。

では――、失礼いたします。

♥　♥　♥

「ねえ、写真とったんでしょ？」

「まあね、う、ふふふ」

「いやねえ、どんな写真とったの。私の眠ってる間に裸を撮るなんて、子供達に見られたら、一体どうするつもり。ちゃんとしまっておいて下さいな」

そんなに言っても、妻の声は万更でもなさそうな大変甘くて優しい声だ。

二人共、汗だらけだ。

「どれ、拭いてあげるよ」

「ありがと」

妻は私の前に白い両脚を開く。

本当は、カメラに、もっともっと、いろんな妻のポーズを撮りたかったのに、でも、仕方ないや。またという日がないじゃなし。

こっちも愛撫を、し過ぎたし、それだけに妻も感じたのだから、夫婦なんだもの、愛し合うのはいいじゃないか……。

でも、カメラは、つぶやく。

『目をさまさないよう、ホドホドに奥さんをマッサージしておけば、もっと夢うつつになって、あられもないポーズを見せてくれたかも知れないのに、惜しい事をしたね』

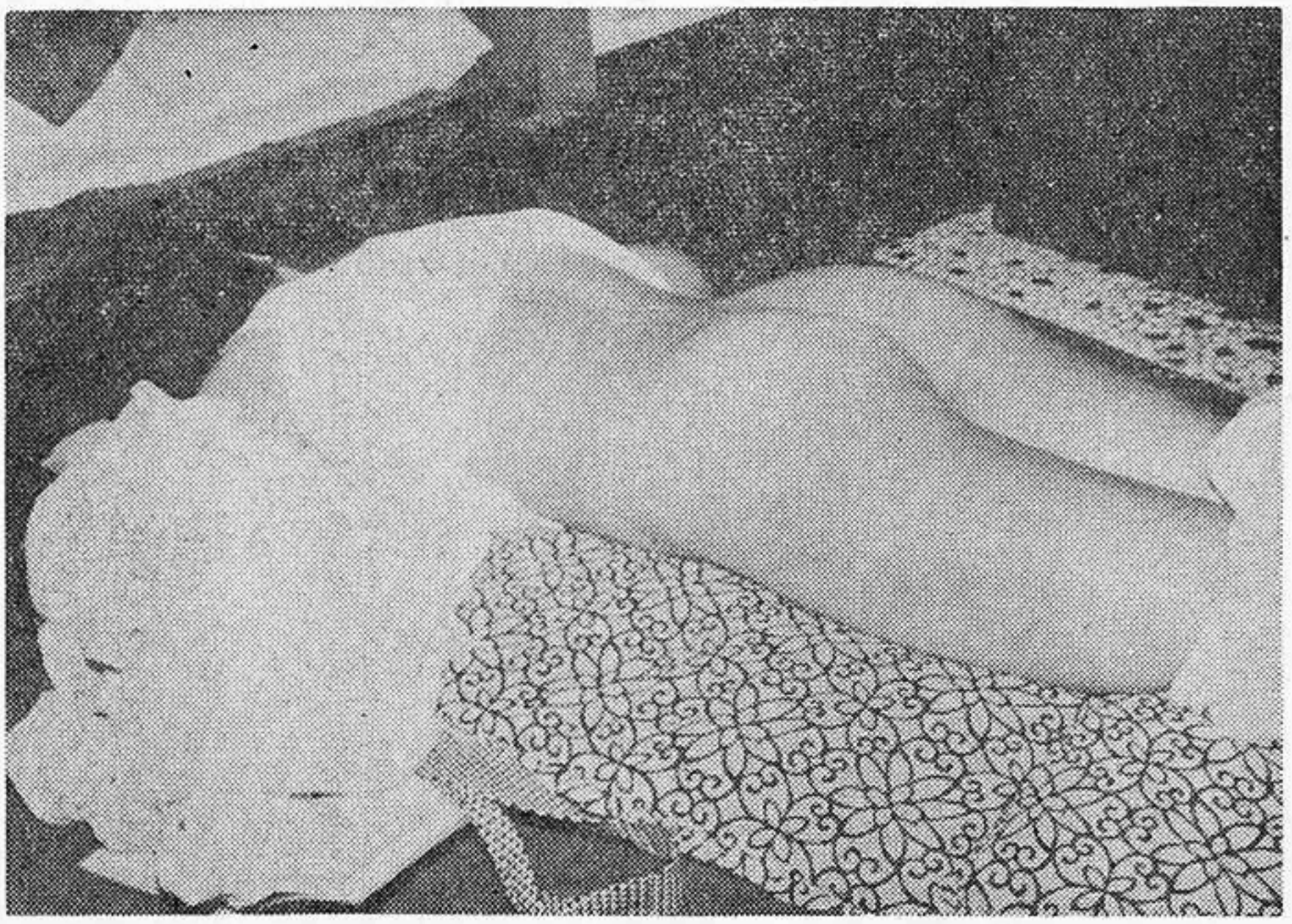
ゴモットモ……。

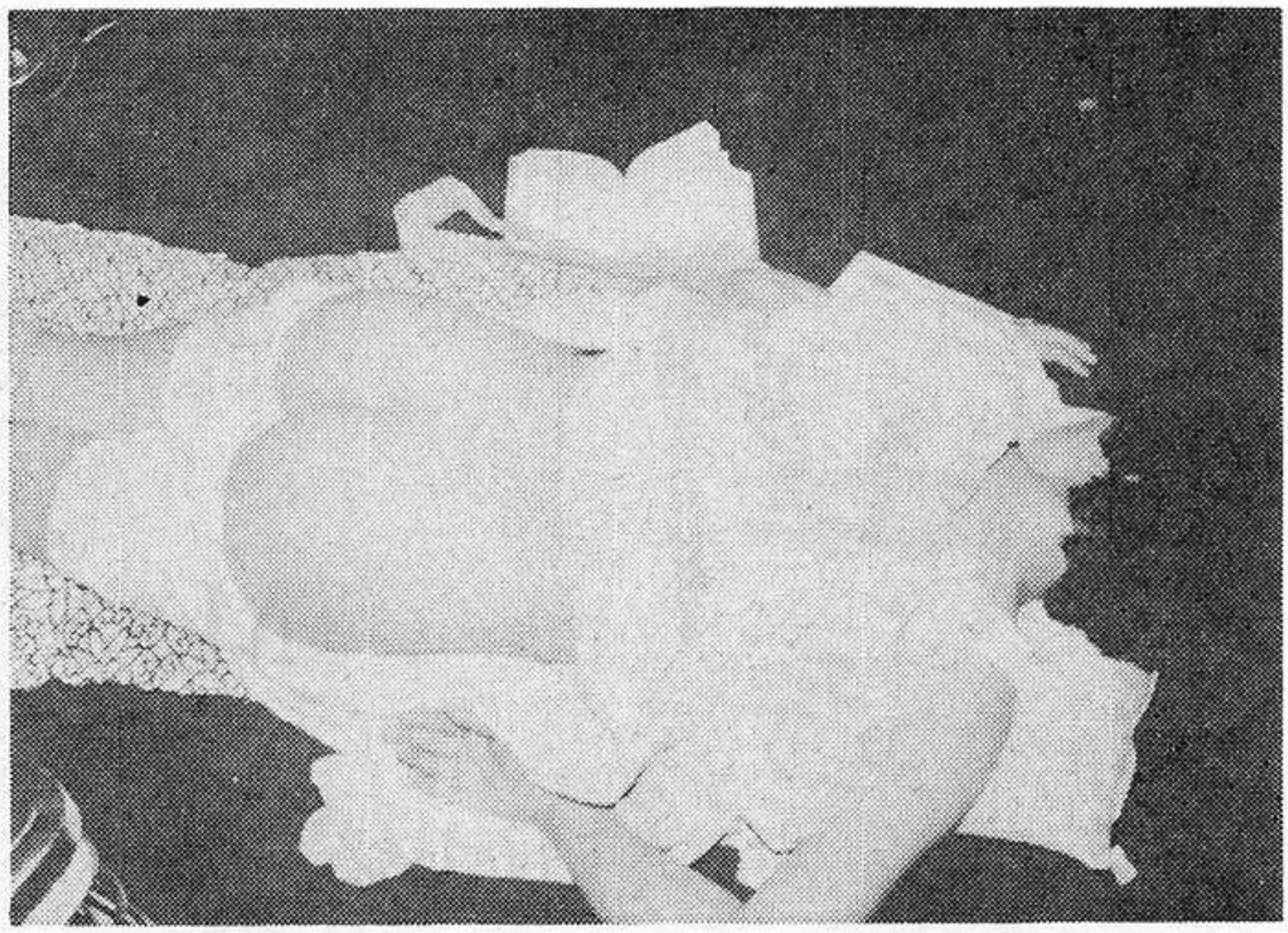
同封のカラー三枚は、愛し合う前、妻が私のマッサージにすっかり酔って、いい気持で眠っている時に写したもの。

このボッテリとしたお尻の中に顔を埋めてキスしたけれど、ショッパイ味がしたなあ。

でも、おいしかったけど。

今度は妻が、オシッコやウンチをしているところを写したいなあ。





そして飲んでみたい（ウンチもなめるのはゴメンだ。ペッペッ）。味の問題じゃなく、そんな事をしてみたいんだなあ。

誰か、ハンサムな青年に、そんな場面を撮ってほしいな。

妻も、そんなところをハンサムボーイに見られたら興奮して、すごいんじゃないだろうか。妻も気に入り、私も気にいったボーイなら、妻を借してあげてもいいと思っている。

私の目の前で、そのボーイと妻とがお互いに素裸になって戯れている図なんか、想像するだけでも血が沸きたってくる。

また、そのボーイと私と二人がかりで、妻を愛撫したら、どうなるかな。妻も乱れに乱れて、すごいだろうな。

前と後から、上と下から、反対になったり横になったり、どこか青空の下山の奥の草むらの中で、そんなことが出来たら、何て素晴しいことだろう。三人が愛しあえるなら、こんな幸せなことはないな。

妻のお尻を眺めていると、空想は果てしなく、ひろがってゆきます。

中年男女の爛熟した愛撫の仕方を好む年頃になった私。ああ、年だなあ。

でも、あっちの方は、どうしてどうして、妻だけでは物足りぬ位。でも、愛しているんだ。この写真の妻を。そして妻のお尻を。自分の妻以外の世間の大勢の奥様達の、豊満なお尻を眺めてみたい。なめてみたい。触ってみたい。

中年の奥様方は、もっともっと、自分のしさを強調したらよいのにな。旦那様達は、自分の美自分の妻の持つ中年女性の豊満な肉体美を、他の男性に堂々と公開する心を持ったら、よいのにな。

美しい中年の人妻達は、もっともっと、肉体を露出させて、人生を華やかにしましょうよ。小娘達にない濃密な色気を、家中に、街中に発散させましょう。

男も女も、裸の心、裸の体で接し合ったらこの世の中は、もっと楽しくなるだろうな。

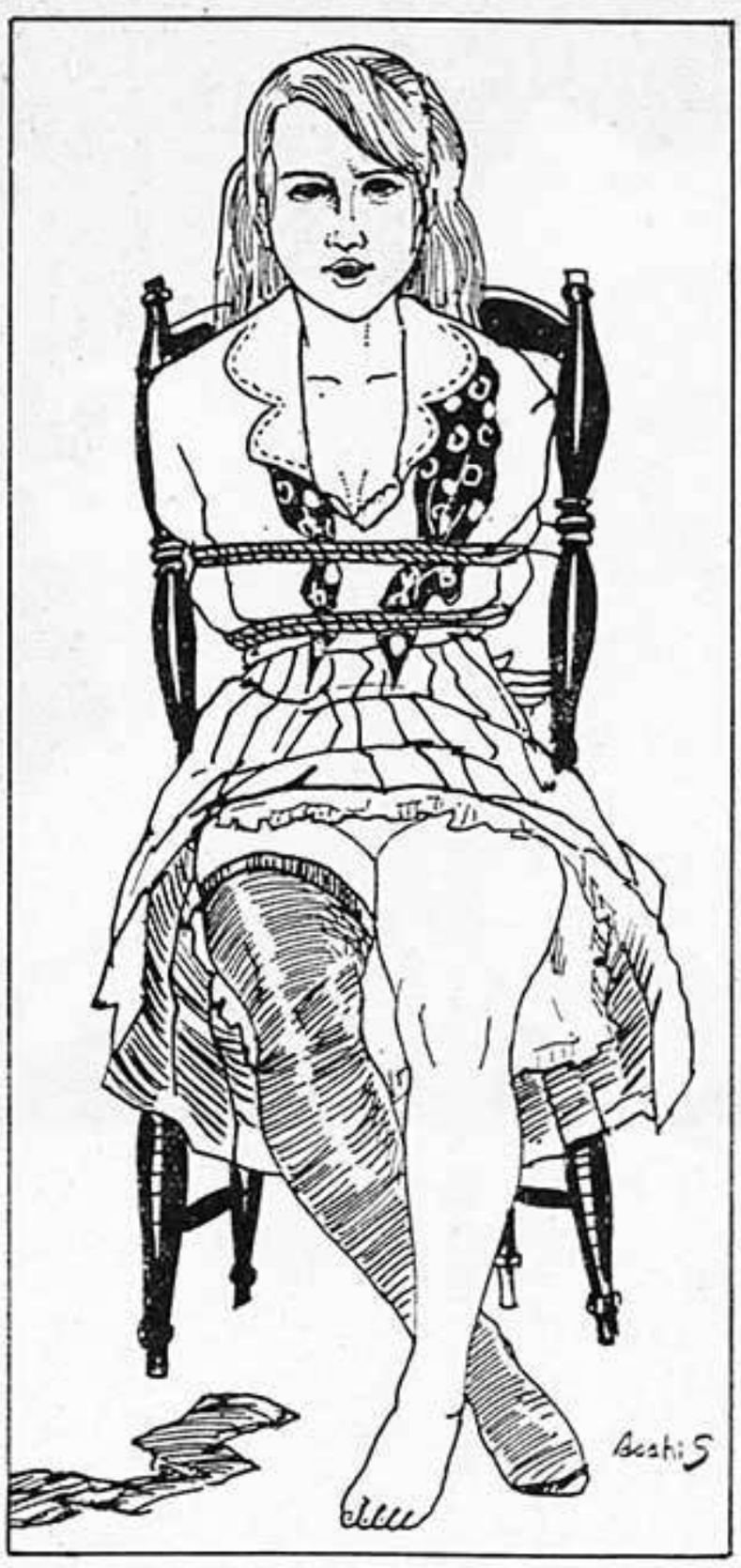
例えば友人の家へ遊びに行けば、そこの奥さんは裸になって訪問者を迎え、挨拶はお互いの秘部にキスをする……というのは、どうかな。そんな習慣が出来たら、いいな。

正月の年賀ハガキは、家族の全裸の写真刷りにする。こう書くと、三月号に告白した中味と同じようになってしまいます。でも、何度でもいいます。やはり私は、妻を愛し、妻のヒップを愛し、妻の友人である中年の奥様方を愛します。

〈創　作〉

SM企業

カット・須坂旭



秋津新次郎

《第一話》調教第一号

昭和四十X年、大阪・兵庫両府県警が合同で始めた暴力団潰滅頂上作戦は、一応の成果を見た。

もっとも関西随一を誇る暴力団神山組の組織全部を潰滅するには到らなかったが、それでも若者頭を恐喝で逮捕したほか、神山組の下部組織である城口組や大森組を解散に追い込んだことは、まずまずの成果といえよう。

暴力団と言えども表向きは土建業、バー、キャバレー、喫茶店と一応、善良な市民を装って営業している以上、うかつに手出しも出来ず、まことに手ぬるい方法だが、資金源を一つ一つ、つぶしていくより仕方がなかった。その資金源の一つであった大森組は競輪、競馬のノミ屋をはじめ、野球、ボクシング、相撲と、およそギャンブルの対象になるものであれば何でも扱った。

根気よく内偵をつづけた両警察特捜本部は、アジト六十四カ所を一斉に急襲して多くの証拠品を押収するとともに、組員始め客分（神山組の他の組から応援に来ていたもの）を入れて四十七名の大量検挙を果たした。逮捕された大森組の組長は、未決拘留中に組の解散声明を発表した。

金バッチ組の小田切修一は、事務所の近くのレストランへ食事に行っている間に警官が踏み込んだこともあって、幸運にも逮捕は、まぬがれた。

組が解散したのをきっかけに、他の組や上部組織からの誘いも、なんとか組を再建したいからと口実をもうけて断わって、これをしおに堅気の生活に戻る決心をしたのだった。

☆

ベッドに腹這いになってタバコをくゆらしながら、枕元につんであるSM雑誌を見ていた修一は、口びるを引きしめて呟いた。

「よーし！　のるかそるか、一ちょう、やってみるか」

組が解散してから、それを機会に何とか堅気の仕事をと思いながらも、怠情な生活を送っていたのも、美紀という女がいればこそであった。

私立ながらもR大の法科に三年まで学んだ修一は、組きってのインテリと組長も一目おき、大森組の顧問弁護士的な存在だったが、いざ組が解散してみると、仕事をさがすと言っても行く先は限られていた。

大学卒が、ごろごろしている昨今、中退の学歴では、どうせ、ろくな仕事につける筈もなく、せいぜい今までの顔を、いかして三流クラブのボーイ長、それも長とは名ばかりのキャバレーかナイト用心棒ぐらいが関の山だった。

南の、ちょいとしたゴタゴタを片付けてやったのが縁で、マダムの美紀と出来てしまって、ついずるずると同棲生活に入って三年。初めは軽いあそびの相手のつもりだったが、美紀の奇妙な性癖にほかの女を抱いても、それほど面白いとも惹かれるまま、最近は思えなくなってきていた。

元々、生まれつきサディスティックな性格があったのか、美紀の求めるままのSMプレーにひたっているうちに、そうなったのか、自分でも定かでないが、女の身体に傷つけないが、羞恥にのたうつ女に、女の美しさを感じ出していた。

美紀に初めてSM系の雑誌を見せられて何と世の中に奇妙な雑誌があるものと、あきれ返っていたのだが、この頃では通信販売で取り寄せているSM雑誌が月に七冊もある。

修一はベッドで大の字になりながら、立ちのぼるタバコの煙を目で追い、つい今しがた、SMプレーにのたうち廻っていた美紀が今頃、どんな顔をして出勤前の美容院の椅子に坐っているだろうと思わず口元が、ほころんだ。

☆

「ねえ、ねえ！　おねがい！」

素っ裸にされた上、ロープで高手小手に縛られ、ベッドに両足を開いた姿で、くくりつけられた美紀は、恥かしさも忘れたように、身を、くねらせる。

「何だ、どうして欲しいんだ、はっきり言ってみろ！」

美紀が何を求めているか知りすぎる程、知っていながら、修一は意地の悪い質問をした。

「じらしちゃあ、いや！　早く！　ねえ、おねがい。がまんできないの……ねえ」

「だから、どうして欲しいんだよ。よし、言わないな！　それなら、このまま放っておいてパチンコにでも行くか」

「いや！　ねえ、あれを、あれを……」

「何だ？　あれって……」

「いじわるッ！」

「おいおい、言いもせずに、いじわるはないぜ。……はっきり言う

までは、おあずけだ」
　修一はニヤリともせずに、仁王立で美紀のベッドにとび上がると、つと片足を上げて爪先を、耳たぶから首すじ、そして乳房へと、くすぐるように這わせ始めた。修一の足の爪先が美紀の脇腹を、なぞった時、
「ああっ、ひいっ！」
　まるで電気にふれたかのように、身体を硬直させた美紀は、
「お、おねがい。も、もうやめて。くすぐるのは、嫌。ねえ、あれを……あれを」
「あれって何だ！」
　修一の足の裏が、美紀の肩を踏み押える。
「ムチを……ああ……ご所望とあらば、そろそろ、赤スジな。ご所望とあらば、そろそろ、赤スジな」
「ようし、とうとう言ったな。ご所望とあらば、そろそろ、赤スジな」
　ベッドの上の小開き戸をあけると、つい最近、買い入れたばかりの猛獣使いが使うような長いムチを、とり出す。
　細蛇を思わすムチを輪にして握り、その皮の感触に、ニヤリと口唇をゆがめた修一は、美紀が希望しているムチを与えようとはせずそのムチの輪で脇の下を、くすぐるのだった。
「ひいっ！　ああっ、くうっ……。いや、いや、そんなんじゃないの。いや、やめて！」
　恥かしい姿で縛りつけられた不自由な身体をくねらせ、ロープをぎしぎしいわせながら、見るだけでも恐怖を誘うムチでのくすぐりさまは、他人が見れば残酷の一語につきる。だが美紀は結構、それで愉しんでいるのである。さんざんじらされた末の方が効果的であることも、よく知っているのだ。
　ベッドから飛び降りた修一の持つムチが、空気を切る不気味な唸りを生んだ。
「ひいっ！　ああ……っ」
　おどろに振り乱した髪が、右に左に、まるで別の生きものでもあるかのように揺れ動いた。

☆

　修一は、つい先程までの痴態の残像を振り払うように首を振りながら、ひとりごちた。女から小遣いをもらって暮す毎日には、もうあきあきしてきていた。
　組が解散する前は、たとえそれが法にふれる行為であろうと仕事があった。一度は堅気の世界にもどろうと、一切の組関係の人間とも縁を切り、仕事をさがしてはみたものの、二十九才にもなって二十一から八年間もの空白は履歴書にも埋めようがなかった。
　あれやこれや考えながら、美紀に教えられてSM雑誌を読んでいるうちに、ふと途方もないことを思いついていたのだった。
　それはSM企業をつくることである。サド男にはマゾ女を、マゾ男にはサド女を供給するのである。約半年前から、ふと修一の頭の中に芽ばえた妄想は、一つ一つ現実の形を、とりはじめていた。そのために、いろいろと研究もした。需要は、いくらでもあった。
　SM雑誌の読者欄にのっているM女を求める声や、S女王を求める呼びかけは、半分がその雑誌社の捏造記事だと割引きしてみても相当な数に、のぼるはずである。
　修一は、このSM企業で、少なくとも億という単位の金をかせげ

る見込みであった。そのための準備は、もうあらかた出来ていた。
資本金は美紀の店を担保に入れて作った金が六百万円。自分の手足になってくれる部下については、恰好なのが二人いる。組が解散する前は、競輪のノミ屋の使い走りをしていたチンピラだが、使い方で十分、役に立つ。
枕元にある電話が、けたたましい音をたてた。思考を中断された修一は、あわてて受話器をとった。
「もしもし」
少し、間のびのした、聞き覚えのある声がした。
「おう、ボロ武(たけ)か！」
「へえ、兄貴ですか」
「うむ、おめえ一人か」
「いえ、ピノキオと一緒です」
「そうか……よし、今どこだ！」
「へい、おっしゃった通り、ビクトリアにいます」
「よし、すぐ行く。待ってろ」
電話の相手は通称ボロ武。本名は武村孝次という親の付けた名前がありながら、何を着ても風采の上がらない男で、本人は意気がって古着屋で、いろいろなものを買って着るのだが、どうにも借り着のようで板につかない。そんなところからついたアダ名だが、いかにも言い得て妙だった。
もう一人の男は、木崎昭夫と、しゃれた名がありながら、ツーンとがった鼻が、童話に出てくるピノキオ人形に似ているところからついたアダ名が、そのまま通り名になったのである。本人は鼻筋のとおった、いい男のつもりでいるらしいが、どう見ても鼻が目立つだけで、いい男とは言いかねる容貌であった。
十五分後、修一は喫茶店ビクトリアの奥まった一室で、ボロ武とピノキオを相手に密談をしていた。
このビクトリアは突きあたりが個室になっていて、喫茶店だと信じ男に連れられて入って来た女が、赤く泣きはらした目をして、よく出てくるので評判だった。そこで、どのような事が行なわれたのか、この店の個室を利用した経験のある者には、すぐ察しられた。
それだけに一旦、扉が閉じられ、中から錠をロックすると、完全な防音装置が施されていて、少々の声や物音は外にもれる気づかいはなかった。
「よし、これで決まった。いよいよ明日から実行だ！　とにかく根気が第一だ。絶対あせっちゃだめだぞ」
「わかってますよ、兄貴」
「どうだ、ピノキオ」
修一が持ってきたSM雑誌を夢中になって読んでいたピノキオはあわてて顔をあげた。
「へえ、わかってますよ」
「よし、それじゃ解散だ。連絡は、毎日とれよ、十時までは電話の前にいるから。美紀が出ても余計なことは言うな。もしオレがいなけりゃ、またあとで電話しろ。いいな」

☆

目が覚めると割れるように頭が痛かった。
洋子は両手で頭をおさえようとして、自分が普通の状態でないことに気がつき、ガク然とした。うしろ手に縛られていたのである。
一瞬、なぜ自分が、そんな状態でいるのか、夢でも見ているような

イメージギャラリー……『縄のタンゴ』……岡　たかし

と、通りがかった車からママが声をかけたんだわ。……それから車にのせてもらって……。そうだ、あの時に車の運転をしていた男の人が、ちょっと寄り道をしたいが、いいかってママに聞いていたっけ……それから車が工事現場みたいな板囲いのしてあるところへ入って行ってとまると……〉

突然、二人の男が、後部座席のドアをあけて乗り込んで来た。いきなり、臭いの強い布きれを押し当てられ、そのまま気を失ってしまったのだ。

〈あっ、そうだ！　ママは？〉

立ちこめていた霧が晴れたように正常な思考がもどると、同じように布きれを押し当てられて、もがいていたママの姿を思い浮かべて自分の周囲を見わたした。

どこかのビルの一室らしく、薄暗い豆電球が高い天井にともっていて、隅の方に鉄製のベッドが置かれてあった。窓もなく道具類のない部屋は、だだっぴろく寒々としていた。

ミニスカートの膝が、むき出しになり、太腿もあらわにもがきな気を失ってから、ずっと縛られていたのだろう。もう両手はしびれ切って感覚がなくなっていた。それでも何とか不自由な身体で立ち上がり、ドアに向かって逃げ出そうとして、後方から引っ張られたように、その場にぶざまに、ひっくり返った。

〈そうだわ、私、お店へ出る途中だった。美容院を出て歩いている気持だった。

頭が割れるように痛い、その上、今にも、もどしそうな程の強い吐き気がする。激しい頭痛と吐き気をおさえながら、自分がどうして、そんな状態でいるのかを必死になって考えて見る。

がら、うしろ手にゆわえられたロープの端が、両手が自由であっても、とどかない程の高いところにつなぎとめられているのに気づいた洋子は、激しい恐怖におそわれて、思わず声をあげた。

「だれか！　助けて！　たすけて！」

と、まるで、その声を待っていたようにドアが開くと、男が一人とび込んで来た。そして男はものも言わずに思い切り、平手で洋子の頬を、なぐりつけた。

「ひいっ！」

「やかましい！　しずかにしろ！」

あまりの痛さに一瞬、声も出ずに恐怖に、おののく目で男を見た洋子に、男はニヤッと笑った。

「いや！　帰して。いや！」

「やかましい！　しずかにしねえか！」

男は手に持った鞭で床を、なぐりつけた。ビシッ！　と床を打ちつけた音は、まるで鞭が洋子の身体に打ち下ろされた様に思えた。

「しずかにしねえと、痛い目を見るぜ」

男は、またもニヤッと笑うと、鞭の先で洋子のあごを、こじ上げた。残忍な目つきだった。男が大森組のチンピラでピノキオと呼ばれていた三下だとは、洋子は知るよしもなかった。

強者には、あくまで卑屈に、相手が弱者と見れば情容赦なく暴力で威かくする。組のバッチをさかさに、何度か堅気の衆をおどしつけて相手を威かくするよりも、ニヤッとなしくしていれば、痛い目を口びるをゆがめて笑った方が、相手に恐怖を与えることを、知りつくしているピノキオである。

あまりの恐ろしさに思わず失禁した洋子は、それすら気付いていなかった。めざとく、見付けて、洋子の足もとを覗き込んだピノキオは、鞭先でミニスカートから、はみ出た太腿を、つっついた。

「おや、おもらしを、なすったな」

太ももを這う鞭を、のがれようとはじめて自分が失禁してしまったことに気づくと、カアッと耳朶まで羞恥に染めた。

「いや！　やめて。帰してちょうだい。ね、お願い。家へ帰して！　にがして。お願い」

ぐいぐい、攻めこんでこようとする鞭を、よけながら、壁際までにじり寄って、哀願をくり返す洋子に、なおも、鞭の攻撃は情容赦なく襲いかかってくる。

「いや、いや！　だれか、助けて！」

「やかましい！」

業(ごう)をにやしたピノキオの鞭先が、上に打ちおろされた。

「ひいっ！　かんにんして。ぶつのは、嫌。やめて……」

あまりの激痛に思わず悲鳴をあげた洋子だったが、今一度ふりあげられた鞭を見ると、もう声を出す勇気さえなくなってしまった。

「ようし、いいこだ。そうして、おとなしくしていれば、痛い目を見ずに済むのだ！　よく、おぼえておけよ」

ピノキオは、ふり上げた鞭を、ゆっくりおろすと、鞭先で洋子のほほをピタピタと、たたいた。

そのとき、ドアの外で猛烈な足音がするとドアが開かれ、シュミーズ一枚の美紀が、うしろ手錠をかけられ、突きとばされるようにして入ってきた。

「アッ、ママ……」
「あッ、洋チャン」
ころげこむように洋子に、よりそった美紀を、じろっと睨みつけたピノキオは、鞭をピシッと床に打ちつけて威嚇した。
「いいか、静かにしてろよ。ここは地下の三階だ！　泣いてもわめいても、誰も助けにこねえ。ただ俺は、うるさいのがきらいなたちなんだな。ギャアギャアわめきやがると、またこいつが、おみまいにやってくるぜ！」
どすのきいた声で鞭をふりまわし、十分威嚇をしておいて、ドアをあけて出て行った。外から鍵をしめる音が、かすかに聞こえた。
「ママ、どうして、こんなことになったの。ねえ」
「シイッ、しずかに。ごめんなさい、私がいけなかったの。前に勤めていたとき、店によく来たお客さんだから、つい安心して車に乗せてもらったの。あんたに声なんか、かけなきゃよかった。ごめんなさい、まき添えにしちゃって」
「ねえ、私たち、どうなるの。ねえ」
「さあ、しっかりするのよ。命までも取られやしないわ。とにかくあいつらを、怒らさないことよ。おとなしく言う通りにしてましょう。あんただって、もう生娘じゃないんだから、わかるでしょ、我慢するのよ。そのうちには隙を見せるはずよ。それまで出来るだけさからわずに、おとなしく言うことをきいていてね。わかった」
「ママ……いたいの。腕が、もう、がまんできない。ねえ」
「わかったわ。向こうむいて」
美紀は、うしろ手錠の不自由なからだで、洋子のいましめを解きはじめた。洋子には随分、長い時間のように思えた。まさか、この誘拐劇が、このママと三人の男たちの企んだ罠だとは、思いもよらないことである。
予め、今日にそなえて何度も何度も練習を、くり返してきた美紀だったが、うしろ手錠の不自由な姿勢では、洋子のいましめは、そう簡単には解けなかった。それでも長い時間をかけて、ようやく解き放たれた洋子は、血の気を失った両手首に血が戻りはじめると、刺すような痛みを感じながら、はじめて涙を流した。
「ねえ、ママ。今度は私が解いたげる」
美紀に後ろを向かせ、両手首に喰い込んだ手錠を何とかはずそうと、いじってみたが、手錠というものの構造を知らないために、今までより却って強く手首に喰い込ませて、美紀に悲痛の声をあげさせただけだった。
「よして、もういいの。前より手首が、しまって、つらいわ」
「ごめんなさい。ママ、どうしよう……」
「いいのよ。気にしないで。それより、あなた、ベッドへ上がって少しおやすみなさい。体力を残しておくのよ。そうでないと、いざというとき、逃げられないわよ」
その時であった。ドアの鍵をはずす音がすると、二人の男が入って来た。一人はピノキオだ。もう一人は頭から、すっぽりと黒い三角頭布のような覆面をかぶり、目のふちを、くりぬいた男だが、美紀の目には身体つきから、一目で修一だと知れた。
乗馬用に使う鞭を両手に握り、ぐいっと、しなわせた修一は、
「おい！　誰の許しで縄を解いた。ここでは俺の命令以外に勝手なことは許さん！」
美紀は、その声を聞くと、激しい血のうずきを、おぼえた。何度

イメージギャラリー……『誓約書調印式』……須坂旭

か打ち合わせをしておいた通り、進行しているのだが、今にも自分に向かって飛んでくるであろう鞭を見ているうちに、芝居でなく悲鳴が出てきた。

「ごめんなさい。私が、いけないのよ。この子に罪はないわ。許してやって」

「やかましい！」

鋭い罵声とともに、修一の手にした鞭が、美紀の形よく、ふくらんだ胸にとんだ。

「いいっ！　いたい、やめて！」

「何っ、やめてだと！　ここでは、そんなことば遣いは許さん」

修一が、あごをしゃくると、犬の首輪と手錠をもったピノキオが洋子に、せまった。何をされるかわからないまま、思わず後ずさりをした洋子は悲鳴をあげた。

「いや、いやよ！　やめて、やめて……」

「やかましい」

ピシッと鋭い鞭の音が洋子の肩に鳴った。

「ひいっ！」

「やめて、ゆるしてやって。洋ちゃん、おとなしくするのよ。逆らっちゃ、いけないわ」

肩に感じた鞭の痛みと、美紀の声が、逃がれようとする洋子の足をすくませ、あらがいの気持を萎えさせた。ヘタヘタとくずれるように坐りこむと乱暴にうしろ手に手錠をかけられ、その上、犬の首輪を首に巻きつけられ、手錠についている短いくさりで、たかくにしぼり上げられてしまった。更にくさりの先端を首輪につなぎとめられた洋子はあまりの情けなさに声をあげて泣き伏した。

「よし、おめえは、もういい。外で待ってろ」

「へえ」

ピノキオが、未練げにドアの外に姿を消すと修一は、ゆっくりした口調で話し始めた。

「いいか、二人とも、よく聞け。お前たちは、これから俺の命令には絶対、服従をするんだ。お前たちが、これからしなければならないことは追々仕込んでゆく。とにかく俺の命令に逆ら

ったやつは、どうなるか。おい、女！」
修一は、芝居がかった声を、はり上げ、ぐいっと鞭先を美紀の胸元に、つきつけた。
「嫌！　なにをするの！」
「やかましい！　くらえ！」
激しい怒声とともに、つづけさまに鞭がふりおろされた。
「やめて。ひいっ！　ひいっ！　おねがい。ぶたないで」
「よーし、そうだ。忘れるな。お前が俺に逆らえないことを先ず自分のからだで覚えることだ。よし、そこへ、ひざまずけ。そうだ、その調子だ。よし俺の靴に口づけをしろ」
美紀は後ろ手錠の屈辱の姿で、かがみ込むと、修一の靴に唇を、はわした。

☆

「おい、美紀。どうだ、洋子の様子は？」
一週間前、初めて洋子という第三者のいる前で、修一の加虐の鞭に、マゾの花を咲かせた美紀は、出勤前の仕度をしながら艶然と笑った。
「あの子、素質あるわよ。ピノキオに仕込まれて、もう大分、仕上がって来た感じね」
「そうか、それで次のカモは……」
「そうね……珠子は、どうかしら……」
「うむ、ちょっと年をくってるが、まあいいだろう。どうだい、マゾッ気の方は」
「大ありよ。それより、別かれた亭主が、ちょくちょく店へやってくるのよ。心配なのは、その点ね」
修一の考えでは、少なくとも、五人の女を集める必要があった。それも出来るだけマゾッ気のある女をである。もっとも、美紀に言わせると、大抵の女にはマゾ気があるそうで、あとは男の仕込み方一つだという。
だが、修一は慎重に事を運んだ。SM雑誌を店の事務室に持ち込んで、新聞広告で応募して来た新しい女の子に留守番を頼む。退屈になってきた女がSM雑誌をめくり出すのを、隠し穴から覗いていると、その女のマゾッ気がわかるという寸法である。
といって、女なら誰でもいいというわけにはいかなかった。美紀の店から姿を消しても誰もあやしまない、家出して来た人妻だとかやくざな男のヒモから身を隠す必要のある女だとか、ふいに姿を消しても怪しまれないだけの素質をもった女は、そうざらには、いなかった。
それに商品として使う以上、やはり人並以上の美貌であるにこしたことはない。修一は出来るだけ女を金で集めたかった。だが、金を目当てに集まってくる女にマゾの演技を仕込むより、素質のある女を誘拐してきて仕込んだ方が安がりであるし、その上、美紀の言うように、女の眠っているマゾ性は男が力で引き出すものである、という言葉に惹かれたためでもある。
誘拐監禁、傷害恐迫、強制ワイセツ罪と、洋子を誘拐してから、もし修一が法に、てらして罪を問われるとするなら、これだけの罪名がつく。洋子が一日も早く、被虐性に目醒め、自分から男の加虐に身をもやす女にならなければ、修一の企てた、この遠大な計画はいつも法の名のもとに危険にさらされるのだ。
修一はピノキオの洋子に対する調教ぶりを見に行くために、外出

の仕度を始めた。

☆

薄暗い地下室の階段を、ピノキオの懐中電灯に照らされながら降りた修一は、

「どうだ、仕上がりは？」

「へえ、だいぶ、おとなしく、なりやした」

「おとなしくなった、だけか」

「いえ、そのう……」

「なんだ……」

「へえ、少しあ、マゾッ気も出てきたようすです」

洋子の監禁された部屋の前に立った修一は覗き窓を、のぞいてみた。洋子はベッドの上で前手錠をかけられ、ブラジャーとパンティだけの姿で、うなだれている。修一はピノキオに、あごを、しゃくった。

ピノキオが鍵穴にキーを差し込んで、わざと音をたてる。びくっと、その音に身をふるわせた洋子は、とびおりるようにベッドをおりると、キチンと正座をし、手錠のかかった手を床につけると、まるで貴人を迎えたように深々と頭を下げた。

修一は用心のため、用意してきた三角頭布を被ると、ピノキオをしたがえて、ゆっくりと部屋の中へ入った。

「どうした。挨拶を、せんか！」

激しいピノキオの叱咤にビクッと身をふるわせた洋子は、ピノキオの足もとに、いざりよると、ピノキオの靴に唇をおしあてた。

「ばかもん、おれじゃない。ご主人様にだ」

洋子は、あわてて修一の足もとに、とびつくと、音をたてて修一の靴を、なめた。

「ようし、だいぶ、従順になったようだな」

修一は満足そうに呟くと、ベッドに腰をおろした。

「さあ、はじめろ」

「へい」

ピノキオは鞭を片手に握り、洋子に向かうと、ゆっくりと命令を下した。

「ようし、立て……。パンティを取るんだ」

その声に、一瞬、反動的に立ち上がった洋子だが、いくら鞭の痛さに、おびえていると言っても、女としての恥かしさは、まだまだ残していた。

「このアマ！　なめやがって！」

ピシッと激しい音がして、むき出しの洋子の背に鞭が、とぶ。

「ヒイッ、やめて、やめて。ぶたないで」

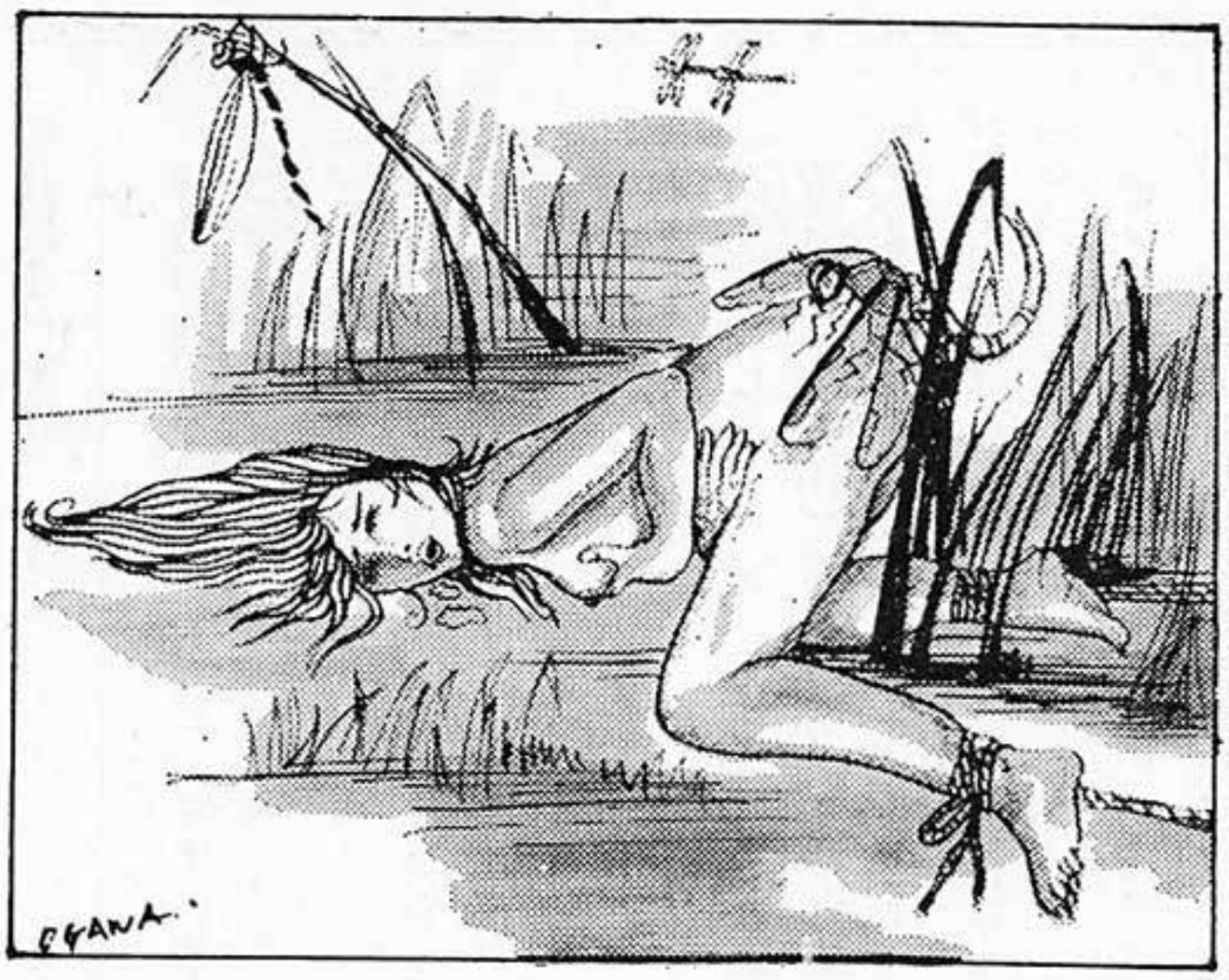
「なにい！　やめてだと！　そんな言葉遣いを、だれが教えた！」

たてつづけに炸烈する鞭の痛みが、女の羞恥も自尊心も、かなぐり捨てさせた。

「お許し下さい。わるうございました。ぬ、脱ぎますから、お、お許し下さい」

鞭の痛みに耐えかねて、思わず、許しを乞い、この得体の知れない男たち二人の前で、自らの手でパンティを取り、恥かしい姿を晒さなければならない、おぞましさに洋子の眸から、もう渇れ切ったと思っていた屈辱の涙が、したたり落ちた。

――（第一話　完）――



カット・小川茂正

告白 「女と犬の性」について

宮田信正（みやたのぶまさ）

五月号の読者通信で、尼崎市の南政子様のお便りを拝見して、そうした経験のある私は非常に興味を引かれました。そして、七月号では、小杉千恵様が『犬と人との性』という文章で、人獣交婚について疑問を投げかけられているのを読み、私は益々自分の体験を話してみたい気になりました。

そして東京の甲斐千恵子様が、南政子様へ答えられた「私のペット飼育法」という文章が七月号にのりました。八月号で甲斐様が書かれた「わたしはケモノ」は、七月号の文章の続きのようですが、この方の通信も、私は大いに興味を持って読みました。

大変お恥かしいことながら、実は、私の妻の維左子（いさこ）も、月に四、五回は必ず犬とセックスを行なっています。

と申しますのは、私が交通事故のため、約二年間、病院へ通っていた時のことです。背椎を強打した結果、神経を損傷してしまったとかで、私は悲しいことに、男性としての機能が全く役に立たぬようになり、妻とのセックスは全然出来ない体になり果ててしまったのです。

しかし、それが欲望の方が全然、湧いて来ないというのでしたら、まだ諦めもつくのですが、その方は不思議に人一倍強く起こってくるのです。

妻も、まだ三十前の女盛りですから、爛熟した身体を、もて余しましし、セックスに飢えて日夜悶々としていました。

病院から帰ってきた私の身体をつかまえて昼日中からフェラチオしてくれたりしたので

すが、私は遂に役に立たず、私自身も残念でなりませんでした。

この時になって、私は交通事故の恐ろしさを、まざまざと思い知ったのです。私は三十才にして、生ける屍のような廃人になり下がってしまいました。

ある日のこと、子供がないために飼っている牡犬のジョンの体の一部が異常に膨隆しているの見つけました。そして庭を掃いている妻の足を前足で抱えて、なかなか放さないのです。

妻は、このジョンの異様な様子を見て、私を嘲笑しました。

「貴男はジョンより駄目な男なのね」

妻に、何と罵られても、一言も言い返すことの出来ない自分が情けなく哀れでなりません。でも、私としては、どうすることも出来ないのです。

売り言葉に買い言葉といいますか、その時の私には、こんなみじめな言葉しか、口に出すことが出来なかったのです。

「そんなに、男がほしければ、誰でもいいから浮気でも本気でも、してくればいいんだ」

「私が浮気でもして、世間の人に、もし見付かったら、ええ笑い者になるわ。浮気をするぐらいなら、ジョンとする方がええわ。犬は絶対に世間の人に喋らないから――」

そんなに、しんみりと言う妻に、私は心ならずも怒鳴ったのを後悔しました。

その夜、例によって、妻は私にフェラチオをしたり、いろいろと挑発を試みてくれましたが、やはり私は駄目でした。気持だけは十分にありながら、男性の機能が、さっぱり役に立たないということは、なんというじれったい、惨めなことでしょう。

やるせない悲しい思いの中で、私は昼間、妻の言った言葉が胸に灼きついていました。

もし妻が、誰かと本当に浮気でもしたら、この家にいてくれるだろうという、気弱な心が起こってきました。それに、男性としての機能が駄目なのにも拘らず、人一倍、盛んな私の性欲からくるアブ的な好奇心もありました。

「君が浮気の出来るような、ふしだらな女でないことはよくわかった。君は昼間、犬とした方がええと言ったね。なんだったら、一度ジョンを使ってみたら、どうなんだい？」

私は真心こめて、つとめて優しく妻の維左子に言いました。

「貴男がそんな体では、どうしようもないでしょう。貴男さえ許してくれるんだったら、私、ジョンと一度してみたいわ。ジョンだったら、絶対に誰にも喋ることはしないから、その点は安心だわ。ウフフ……」

妻は暫く考えているようでしたが、半ば冗談のように笑いにまぎらわすのでした。

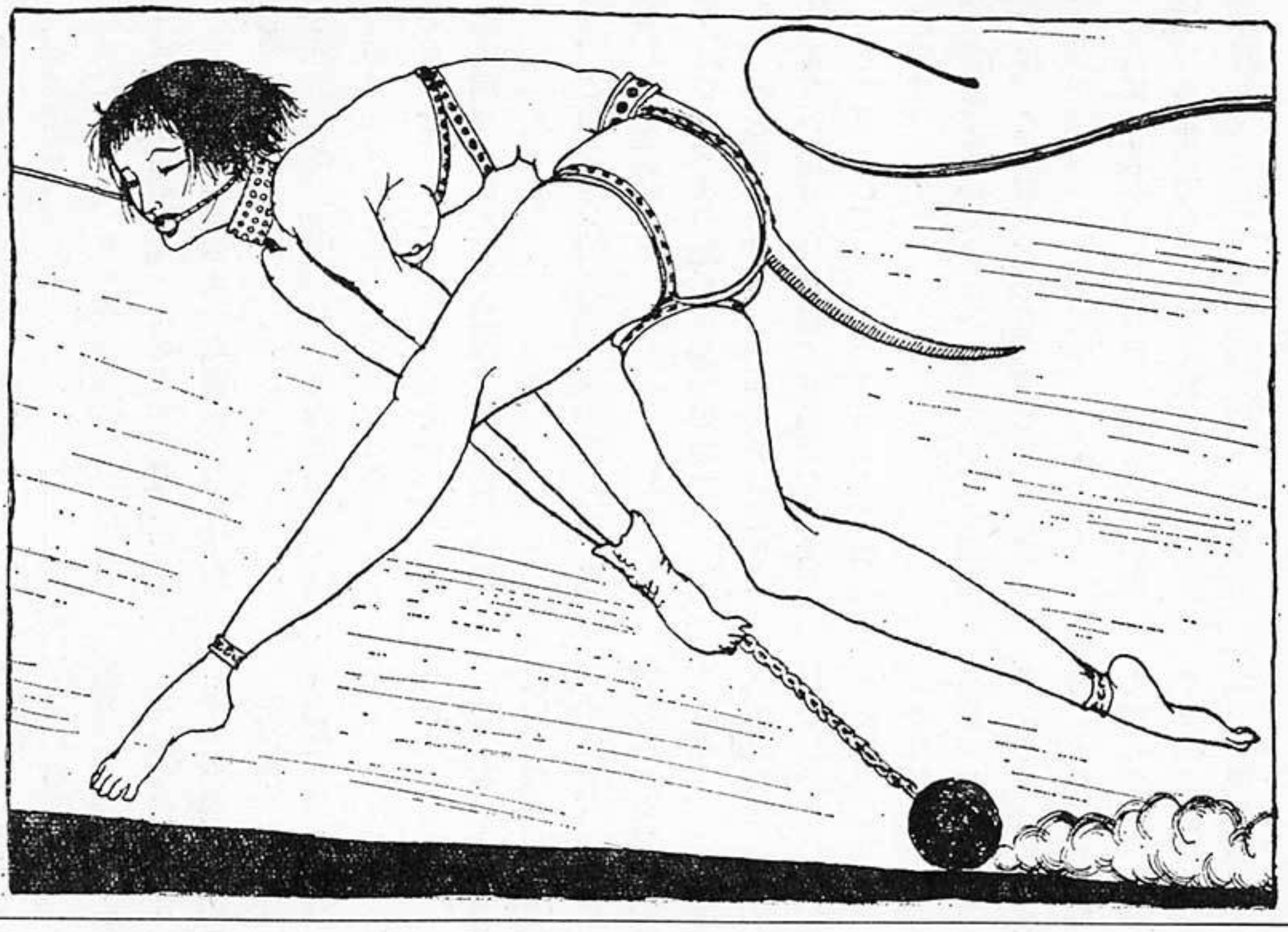
「……だけど、犬とした時、もし離れる事が出来なかったら、どうしよう。私、初めてだから怖いわ。その時は、貴男、手助けして下さるわね。貴男が見ていてくれるんなら、私ジョンとしてもいいわ」

「大丈夫だと思うよ。道端で犬がしているのを見たことが何回もあるが、十分か十五分で必ず離れているから……」

「それなら、私がすっかり終わるまで貴男、ずっと見守っていてね」

「そりゃ、僕も好奇心があるから、見ていたいよ。それにジョンが僕の代りに君を愛する

……僕のイメージ画集……『飼 イ ヌ 訓 練』……室井亜砂路……



んだから、僕が見ている方がいいだろう」

お互いに後日、どんなことがあっても、後悔しないことを堅く約束したのです。私も妻とジョンのことが、うまく出来る様、全面的に協力することを誓いました。いやそうするより私としては仕方がなかったのです。

話が決まれば、妻は今すぐしてみると言って、犬小屋からジョンを連れてきて、土間へつないでおいて蒸しタオルで体全体を拭いてきれいにしたのです。座敷へ上げるために、四本の肢へ、靴のように私の靴下の古いのをはかせて紐で止めましたが、ジョンは、これを大変、嫌がり、肢をふりまわし、口で喰いちぎって取ってしまいました。

それで、座敷へ上げることは諦めて、土間へゴザを敷いて、その上に古座ブトンを三つ縦に並べて場所を造りました。

ジョンは生まれた時から飼っているので、私達二人にはよく馴れていて、なんでもよく言うことをききます。仔犬の時、妻が口うつしで餌をやっていたので、大きくなった今でも妻の口によくキッスをします。

妻はジョンの……に対する……から始めました（彼女は私に対しても、こういった前戯をするのが大好きでした）。十分……させておいてから、自分は四つ這いでうつ伏せになりました。そこまで、上り框（あがりかまち）で腰を下ろして見ていた私は、ジョンの前肢を妻の背中の上へ誘導して乗せてやったのです。

それから、ジョンは激しく……を動かしたのです。約三分程した時、妻は急に、悲鳴を挙げたのです。と同時に、ジョンの動きも止まり、口から長い舌を出していました。

しばらく見ておりますと、ジョンは前肢を降ろし、後肢の一方を、尻の上を越して、反対側に向き、尻と尻とが合う位置になったのです。その時、妻が痛がって、ジョンが引か

ないように、じっとさせて——と、悲鳴を挙げたので、私はジョンの首環を引きつけて動かないようにしようとしましたが、どうしてもジョンが前へ行きたがりますので、元のように、前肢を持って背中へ誘導しました。

首輪にはめた革紐を引っぱって、ジョンが動かないようにしていますと、十分、二十分経っても離れようとしないのです。

妻も私も、その時、もし離れることが出来なければ、どうしようかと、不安でなりませんでした。やきもきしていましたが、三十五分程してやっと離れることが出来たのです。

それから六日後、再び妻は、ジョンとしたいから私に手助ってくれと言いました。

第一回の経験から、私は四つ這いになった妻の肩越しに、ジョンの前肢を、自分の両手で持ってやることを考えつきました。その結果犬に引かれる事なく、スムースに妻が犬とすることが出来たのです。

……すことが出来たのです。

ジョンの動きが止まる寸前は、必ず力強くぐぐっと押しつけます。回を重ねる毎に、無理のない体位をだんだんに身につけてきました。この様にして、少なくとも月に四回、多い時は九回も、妻は大いに満足した様です。

〜〜〜

私が手玉に取った紳士

稀代のサジスチン春日ルミの体験談

春日ルミ

私は、男性を責める時に着る下着は、自分でミシンを踏んで作成していましたが、その内、私の、その時に着ていました下着を、譲って欲しいというファンが増えてきて、たちまちのうちに、下着という下着は一枚もなくなってしまいました。

なにしろ、私が自分の身体に合わして、いろいろの型に変えて作成したバタフライやパンティ、スキャンティですから、写真を添えると、私が実際に穿いていたものだという証拠にはなるのですが、なにしろ、変わった型のを一枚宛しか作りませんから、それを譲ってしまうと、もう後はないわけです。

そのうち、私が平常、家で穿いているズロースを、汚すだけ汚して送ってほしいという

人が現われてきました。

普通、女性の下着というものは、毎日換えるのが、あたりまえのことですし、私も、入浴後は必ず新しく洗濯したものを着けるのが習慣でした。

それを、一週間も十日も、穿きっぱなしにして洗濯しないものを送ってほしいというのです。時には、一日穿いているだけでも、汚れて変色するくらいですからそんなのを続けて穿いているというのは、考えただけでも、ぞっとします。

ですから、常識としては、そんなことは出来るはずはないのですが、そこにマゾの男に自分の体臭のしみ込んだ下着を、嗅がせてやるのだという衝動が、私の身体の中で、かっかっと燃えていましたため、普通だったら、気味の悪いはずの、その行為も、余り気にはならなかったのです。

私は一つの下着を、ずっと、はき続けて、もうこれ以上は汚せないというところまで、徹底的に汚しきっておいて、それをビニールの袋に入れて密封してから、彼に送ってやりました。

三日間も、はきづくめで汚しに汚した私の下着を手にした彼の感激の手紙は、それはそれは大したものでした。

私の体臭を嗅ぐために頭から、すっぽりとかぶって、そのまま悦びに、むせび続けたということを、細々と書いてありました。

几帳面な性格らしく、大学ノートに、小さい字で、きっちりと一字一字くずさずに、少し誇張を混じえて、微に入り細を穿って書いてあります。

その便りを読んで、正直なところ、私も凄く興奮してしまいました。まだ、見たこともないEという男性を、自分の手で責めているのだという錯覚にとらわれて思わず知らず熱くなってくるのでした。

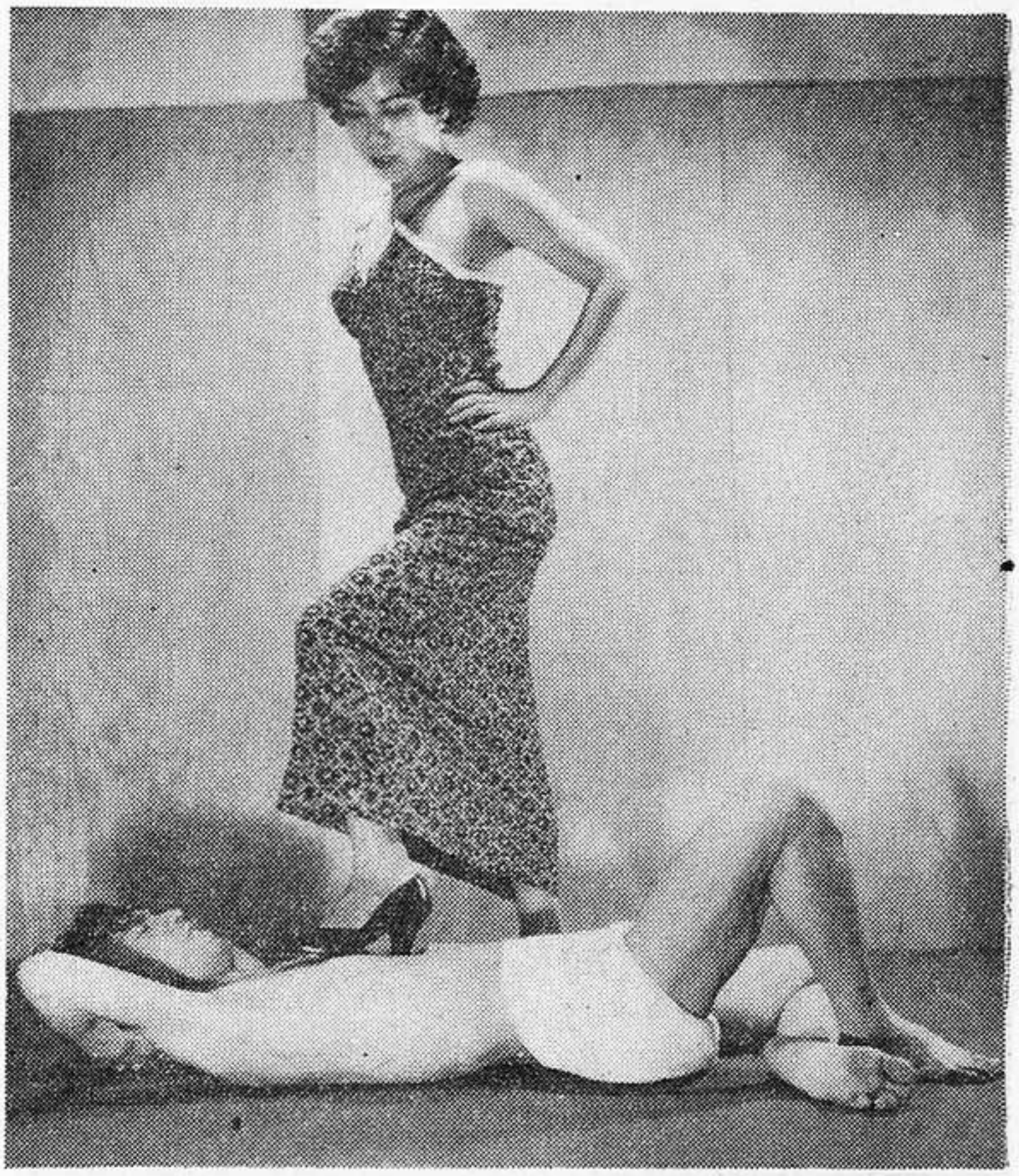
女性としては、自分の汚した下着を他人、とくに男性に見せるということさえ、大変恥かしいものです。ましてやその下着を頭からかぶったり舐めたり、あるいは、もっともっと、いやらしいことに利用されるということは、嫌なことです。

それなのに、私にとって、不思議なことにその相手がマ

ゾの男性だということになりますと、言うに言えない快感を覚えてしまうのです。マゾ男性が、そんなことをするだろうと考えただけでも、胸がわくわくしますが、このEの場合のように、手紙で私に告白してきますと、もう現実に、その男を責めているような気持になってしまうのです。

私は、早速、自分のそんな気持を書いてEに手紙を出しました。彼からは、すぐに速達で長文の返事がきました。一字一字に熱を帯びているように思える、その文章は、マゾ男というものは、こんなにも熱心なものかと、私を感心させました。

Eの手紙は、いつも速達で、時には一日に二回も、午前と午後、配達される事もありました。彼からは、すぐに速達で長文の返事がきました。一字一字に熱を帯びているように思える、その文章は、マゾ男というものは、こんなにも熱心なものかと、私を感心させました。



Eの手紙は、いつも速達で、時には一日に二回も、午前と午後、配達される事もありました。彼からは、すぐに速達で長文の返事がきました。一字一字に熱を帯びているように思える、その文章は、マゾ男というものは、こんなにも熱心なものかと、私を感心させました。

掌を返したようになったのでも、よくわかりました。

さて、このようにして、私とEとの間に、手紙のやりとりが二十数回も続いたでしょうか。回を重ねる毎に、彼の方がますます熱をあげてきて、自分の書いている文章に酔っているみたいなところがありました。

私も彼の文章につられて、もう、その頃からは、まるで自分が生まれながらの女王様のような高慢な態度になっていました。Eに関しては私は絶対的な権力者として君臨してもたものや、読者通信といったものも相当、貰いました。その全部には勿論、返事を出したわけではありませんが、それでも、自分の気にいった便りには、気が向けば返事を書いてやるという気持になっていました。

それが、このEと繁く文通するようになりだしてから、気分的にも時間的にも、他の読者の方と文通する気にならなくなってきたのは不思議なことでした。

Eの熱が最高度に達したかと思われる頃、自分の県には、風光明媚なところが沢山あるから、一度、見物がてら御来駕頂けないかという懇願の手紙と共に、献上金と称して、若干の金子を送ってきたのです。

その頃、私は一人暮しで、誰に気兼ねのいらない、のんきな生活をしていましたし、小さいながらも一戸建ての家は、戸締まりさえ厳重にしておけば、三日や四日、留守にしておいても何ら支障はなかったのです。

女学生の時に、九州旅行や東京旅行をした以外に、遠くへ行ったことのなかった私は、久しぶりに、女の一人旅も悪くはないと思い

まで、胸の高ぶりを感じない私でしたのに、Eの手紙によって、いろいろのSMプレイのシーンを想像しますと、彼をいじめたくて、いじめたくて仕方がなくなりました。

ことに、私が強制的に彼の顔の上にお尻をすえてしまうといった場面なんかを想像しますと、もうそれだけで体中の血が熱くなって胸がふるえてくるようになります。

今までに、私が実際に、M男性をいろんな仕草で責めていた時も、純粋に楽しい気持がしたのは事実です。服装を手製で作ったり、責具、たとえば犬のくさりとか首輪、鞭、羽毛なんかをデパートで買ってきたりしたのもそうした期待が、私をそそのかしていたのです。Mの男を虐めてやる楽しさといったものが、自然に、私を、そういう風に、しむけて行ったのです。

それが、Eという特定の四十六才になる男性と、たった二人きりでの関係のプレイということになりますと、私には、もっともっと濃厚な、いわば動物めいた期待が、心の隅に兆してくるのでした。

人間としての見栄も外聞も、すべて、かなぐりすてて、動物的にふるまいたいという気持が、次第次第に、私の心の中を占めてきて立ちました。そんなことを考えている間も、Eからは相変わらず速達にて、私に責められている時のプランを、いろいろ濃厚に書いてくるのです。

最初の頃は、私の下着を通じて、私との主従関係を形成していましたのに、やがて、直接、私の足を舐めたりして歓喜にむせびたいといったような、彼の願望状態を刻明に書いてくるようになりました。

私にしても、下着とか、靴とかいったものを媒介にした主従関係よりも、そうした自分の肉体に直接タッチされる方が、たとえ、文章の上であっても、凄く興奮しました。

普通のセックスだけだったら、そのように

それが、このEという男性を一つの餌食として実現出来そうな気がしてきたのです。

春日ルミというS好みの人間が、Mがかった人間を責めるという、ただ、それだけのことで、二人が最高に動物的に燃えたい、と、そう願ったのです。

それ以外のことは、彼の氏名や職業や身分などについては、私は全く興味を持っていませんでした。それよりも、私の彼に抱いていた関心は、果たして、どのようなマゾ人間かということでした。折角プレイをするのだったら、やはり私好みのマゾヒストであってほしいと、正直思いました。

〝私好み〟ということは、人間の皮をかぶった二匹の動物となって、狂いまわりたいということでした。Eは勿論、犬とか、馬とか、豚とかいった動物になりたいのでしょう。仮に人間でいたいとしても、奴隷か、下僕（しもべ）ぐらいが関の山です。

そして、春日ルミという私を、女神か女王様か、少し下っても女御主人様として奉りたいのが、本音でしょう。私としては、女くさい人間以外であったら、よかったのです。少なくとも、プレイの間中は、人間以外の者でいたかったのです。女神でもいいし、動物であっても、よかったのです。

少なくとも、動物的なエネルギッシュな精力には憧れていました。春日ルミという女性は女神の持つ神秘的な尊厳性と、猛獣の持つ疲れを知らぬスタミナを兼ね備えているということを理想にしていました。

空のよく晴れた朝、私はたった一人、列車の人となったのです。市井の人達と同じように、名所旧蹟を巡るレジャーを目的に、大阪駅を出発したわけです。

その都市の中心街の目抜き通りを正面にした駅へ着くのに、七時間ばかり、かかりましたが、日はまだ高く、駅前は行き交う車と人とで雑踏していました。

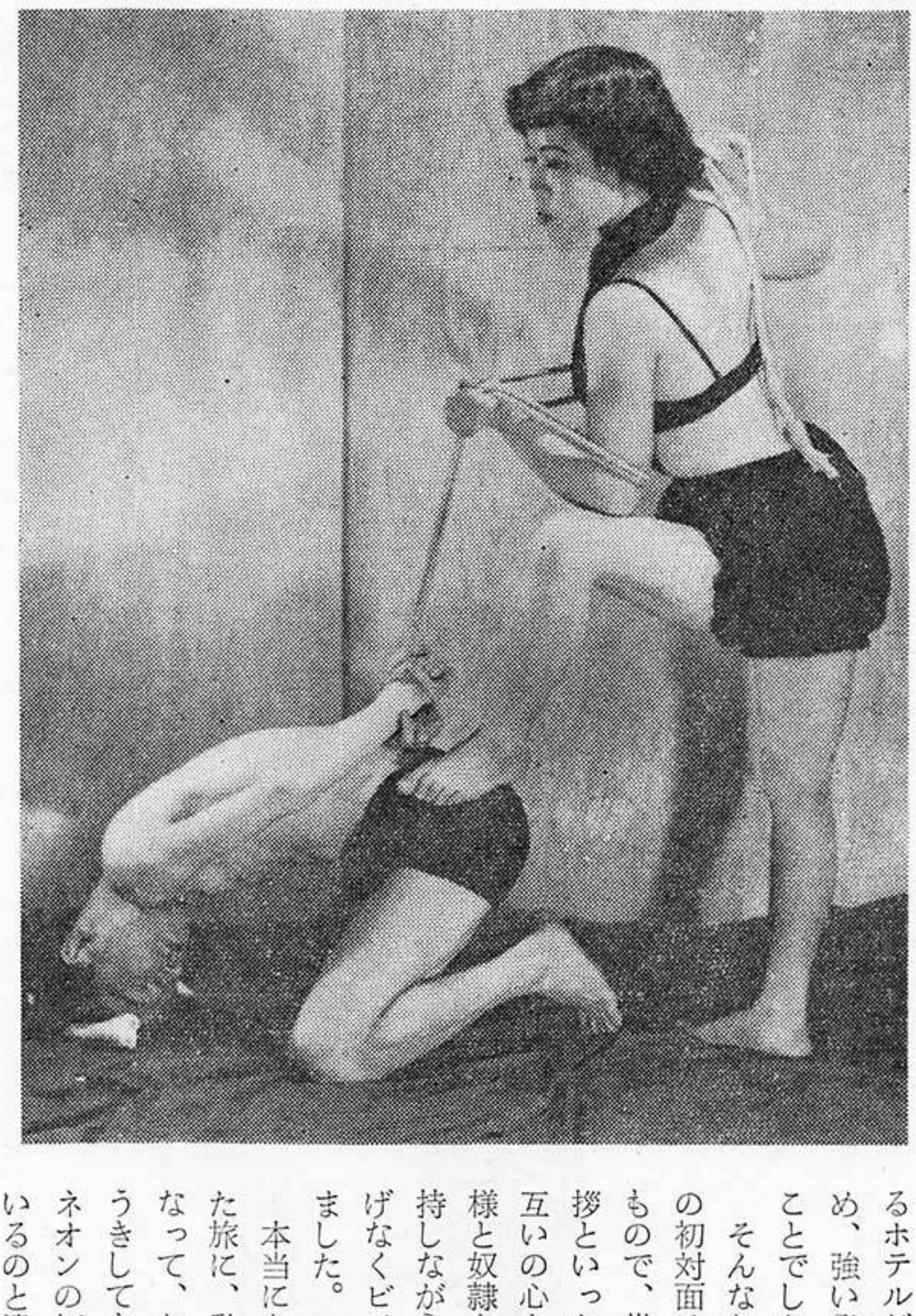
ホテルへ着いて、ゆっくり落着いてからEに電話して、びっくりさせてやろうと考えて私は、今日の一人旅のことを一言も彼には連絡しておりませんでした。だが、駅の正面にあるホテルへ入ったところ、ウイークデーだからと思って予約していなかったためか、あるいは女一人と見たためか、もう暫く待ってほしいということで、フロント係は部屋へ案内してくれないのです。

それで私は、不本意ながらロビーからEに電話して駅前ホテルにいることを告げたのです。彼の驚きようは大変なものでした。それよりも、私をのは畏れ多いと、電話もそこそこに切って、私のいるロビーへ駈けつけて来ました。

「先生のお知り合いの方とは存大層、失礼申し上げました。一て頂ければ、最高の部屋へお通したのに、何とも不調法の極みで……」

フロント係はEに怒鳴りつけられて、平身低頭、もみ手をして詫びています。私は二人のやり取りを傲慢な態度で眺めていました。

Eは私のことを、大恩人のお嬢さんで、私にとっては、神様のような方だから、粗末にしたら承知しないぞと言っていました。彼が重役をしている会社の傍系会社の経営しているホテルだそうで、そのため、強い発言権があるとのことでした。



そんなわけで、私とEとの初対面は全くあっけないもので、世間普通一般の挨拶といったものはなく、お互いの心と心とでは、女王様と奴隷といった関係を維持しながら、表面は、さりげなくビジネスに徹していました。

本当に久しぶりに出てきた旅に、私の心も解放的になって、なんとなく、うきうきしてきます。青や赤のネオンの灯も、いつも見ているのと違った感じを与えてくれます。同じ日本の国内といっても、私にとっては、始めて訪れる都市ですから、やはり、なんとなく、うきうくエキゾチックに思えたのです。

その夜、夕食が済んでバスで、ざっと汗を流したあと、くつろいでいるところへ、ノックして、Eが入ってきました。

Eは部屋へ入ってくるなり、土下座をして両手をついて頭を下げました。

「春日ルミ女王様。知らないこととは申せ、奴隷として、お迎えにもまいりませず、大変申訳ないことを致しました。その罰に、どうかこの奴隷を存分に、お仕置し下さいますよう、伏してお願い申し上げます」

彼の態度は真に迫っていました。これから、この始めて見るEを、思うがままに弄んで責めたり、いじめたり出来るのだと思うと、私は言い知れない喜びに、全身が、わくわくしてきました。ソファーに寝そべっていた上半身を起こして、語気もきびしく命令しました。

「奴隷の分際で、そのように背広なんか着込んでいるのは不届である。今すぐ、女王様の前で、着ているものを全部脱いでしまいなさい。さあ、早く脱ぐのです」

「はいはい、かしこまりました」

Eは背広の上衣、ネクタイ、ワイシャツという風に自分で脱いでいって、ブリーフ一つになって、床の上に正座しました。

服を脱いでパンツ一枚になったEは、今は全く、その肩書も公職も、何もかも、かなぐり捨てて、一匹のマゾ男に化してしまったのです。少なくとも、私にとっては、そう見えたし、また、Eの値打ちも、マゾヒストとしての、それなのです。

〝この男が、私の下着を頭からかぶったり、汚れたところを舐めたりした動物なのか〟

私は心の中で、そう思って、床の上にじかに膝を揃えて正座しているEの顔を、まじまじと見つめました。顔つきだけから見ると、普通の人間と、どこといって変わったところはありません。むしろ精悍な感じさえする、その面構えの中に、どうして、私に対して何十通もの、あんな臣従の手紙を書いてきたような、マゾの性癖があろうとは、思えましょうか。私は、その時ふっと、あるいは、あの手紙の主と別人ではないかと思ったくらいです。

「お前が、ルミ女王様に臣従したいと願っている奴隷のEであるか?」

「は、はい。奴隷のE奴でございます。この女王様のお部屋にお入れ頂いた間、

何卒、私奴を最低の人間の奴隷として、いや、もし、女王様のお許しが得られますものならば、忠実な犬として、飼育し訓練して下さるよう、お願い申し上げます」

「よしよし、その願いは聞いてあげよう。まず、こちらへ来て、私の足を、舐めてごらん。犬だったら、それ位のことは出来るだろう」

「はい、かしこまりました」

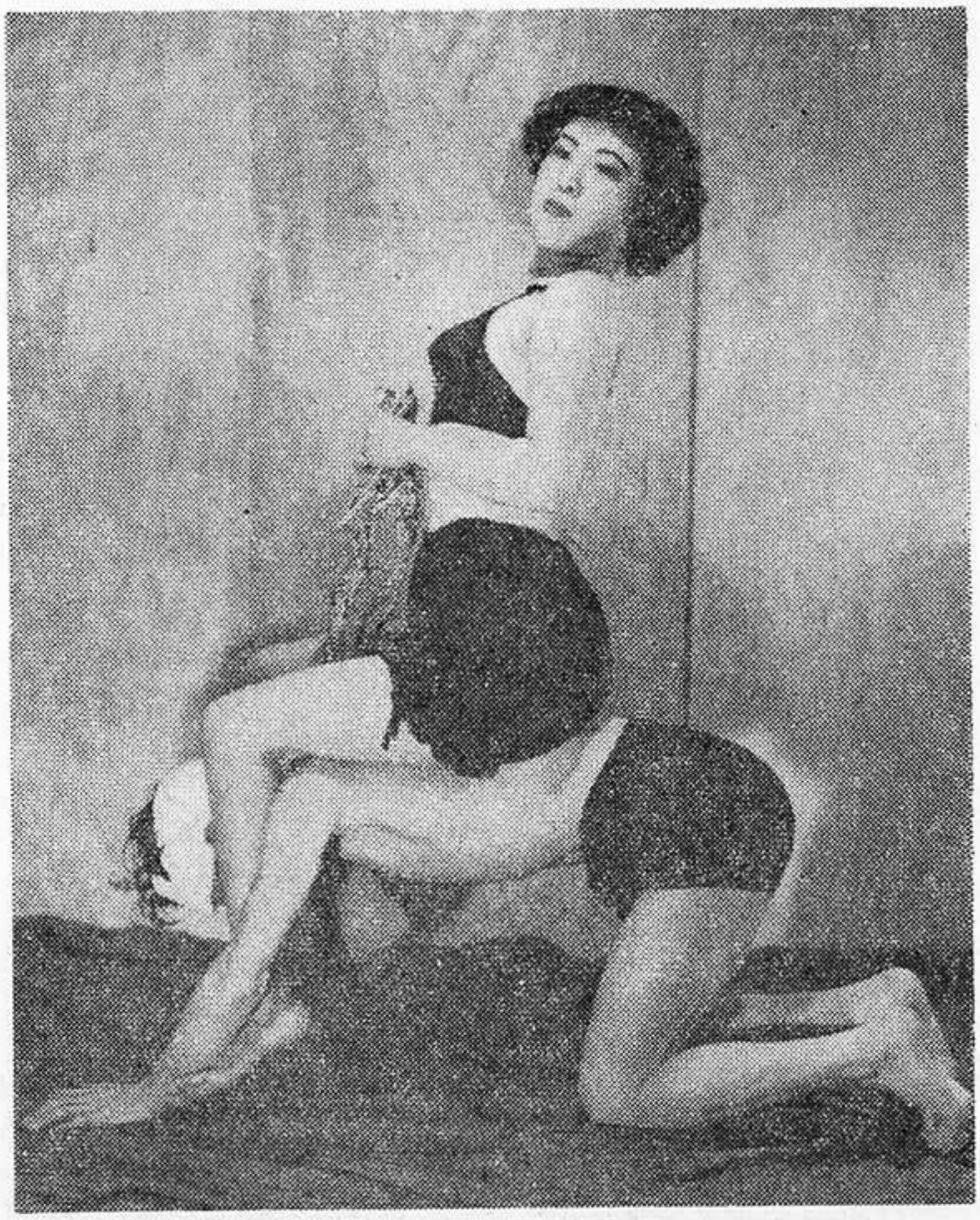
入口の床に、ちゃんと正座していたEは、両手をついて四つん這いのまま、這うようにして、私の足下へ、いざり寄ってきました。

来るなり、私がスリッパを脱いだ右足を前へ差し出しますと、目がけて自分の口をパッと開けました。

私はそれを、ひょいとはずして、の裏で押えつけて、床へ頬がつけました。

「どう、お犬さん。この足、舐めてみる」

彼の鼻先へ左足を、にゅっと、その爪先



た。頭を右足で踏まれたまま、彼は舌を伸ばして、私の出した左足を舐めようとします。でも私は、近くまで足先を寄せながら、彼の舌が伸びてくると、さっと引くのです。

お犬さんはハアハア荒い息を吐きながら口から涎を、さかんに流しています。私はテーブルの上にあったお菓子を足の親指と人差指の間に挟んで彼の口の前に差し出しました。

餌にありついた飢え犬のように、頭を踏みつけられながらも、Eはぐっと顔をのりだして私の足の指に挟んだお菓子にパクつきました。こんなに美味しいものはないという風に口にするなり、くくくと鵜呑みしています。

お菓子を飲み込んでしまっても、お菓子の匂いの残っている私の足の拇指を、すぽっと口に含んで、ペチャペチャと舐めはじめました。指と指の間へ、彼のネチネチした舌が入ってきた時、私は思わず身ぶるいするような快感を、ぞくぞくと覚えたのです。

初対面の彼に対して始めて足で与えた茶菓子が、私と彼の奇妙な挨拶となったのです。

Eという一個の男性を、今、ここに犬に変身させて私の足下に屈服させているのです。

これからは、意のままに、自分の好き放題

に弄んで、自分の快楽のために、最大限に利用することが出来るのです。そうです。Eという人間犬はルミ女王様のセックスの快楽を高めるためにのみ生きている飼犬なのです。

飼犬Eの舌が巧みに指のあたりを舐めまわしてから、足の裏へ舌を這わしてきた時、私は、「ううううう」と押し殺したような声が突き出てきてソファへのけぞってしまいました。男性との正常な交わりでは得られなかった、凄い快感が全身を襲ったのです。

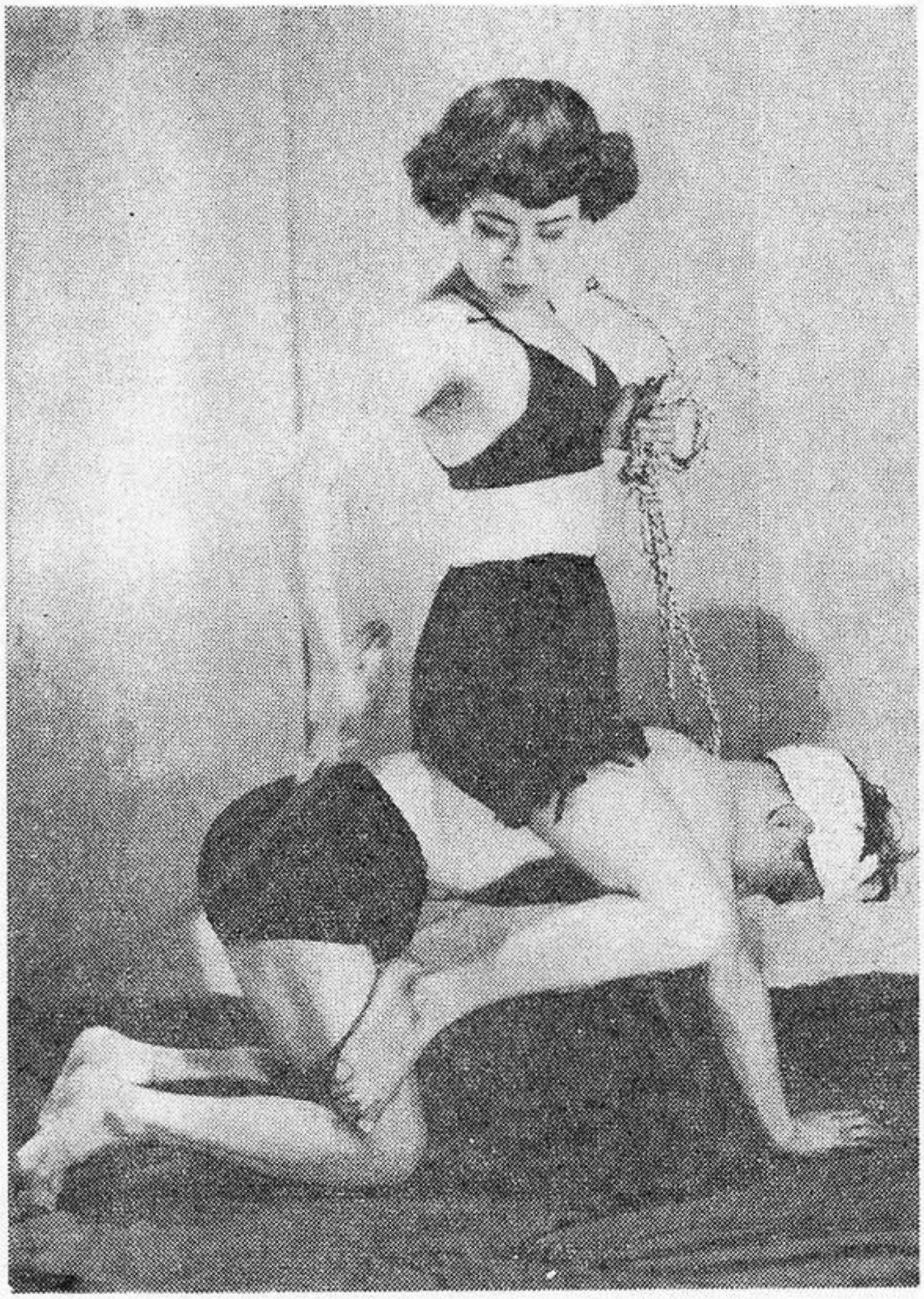
私は、あまりの快感に足で彼の顔を蹴とばしていました。

こうして私とEとの邂逅は、奇妙なSMプレイから始まったのです。

何回にも亘る文通の結果、二人の間には、こうなるより仕方のないアブノーマルな二本のレールが敷かれていたのかもしれません。二本のレールの上を、ならんで走ってゆくより仕方のないアブノーマルな極限された世界だったのです。

私はテーブルの上の、もう一つのお菓子をとると、口にして唾液を少しつけ、ペッと床の上に吐きだしました。

「さあ、ワンちゃん、お食べ。ルミさんからの贈り物だよ」



私の足を舐めていたEは、吐き出されたお菓子にとびつくと、如何にもお美味しそうにむしゃむしゃと、むしゃぶり食べるのです。

私は右に左にと、口に一度、含んだお菓子を、ぺっぺっと吐きだします。彼は素早く、それを拾って食べています。その早いこと、本物の犬そっくりです。私は、この人間犬が大変、気にいりました。今日こそ、このよく仕込まれた人間犬を相手に、平常から描いていた自分の夢を実現しようと考えました。

私の描いていたSMのパラダイス。それをこれから実際に、ここで行なおうとしたのです。それは、このEのようなマゾ人間でないと決して出来ないことを強要するのです。

「ワンちゃん、こちらへおいで……」

私は立ち上がって、革製バッグの中から真新し

い、犬の首輪を取り出しました。私は百貨店の屋上にある犬用品の売場を見るのが好きです。このセパード用の首輪も、黄と黒の、まだらの房のついた撃留用の曳縄も、先日デパートで買ってきたばかりのものです。

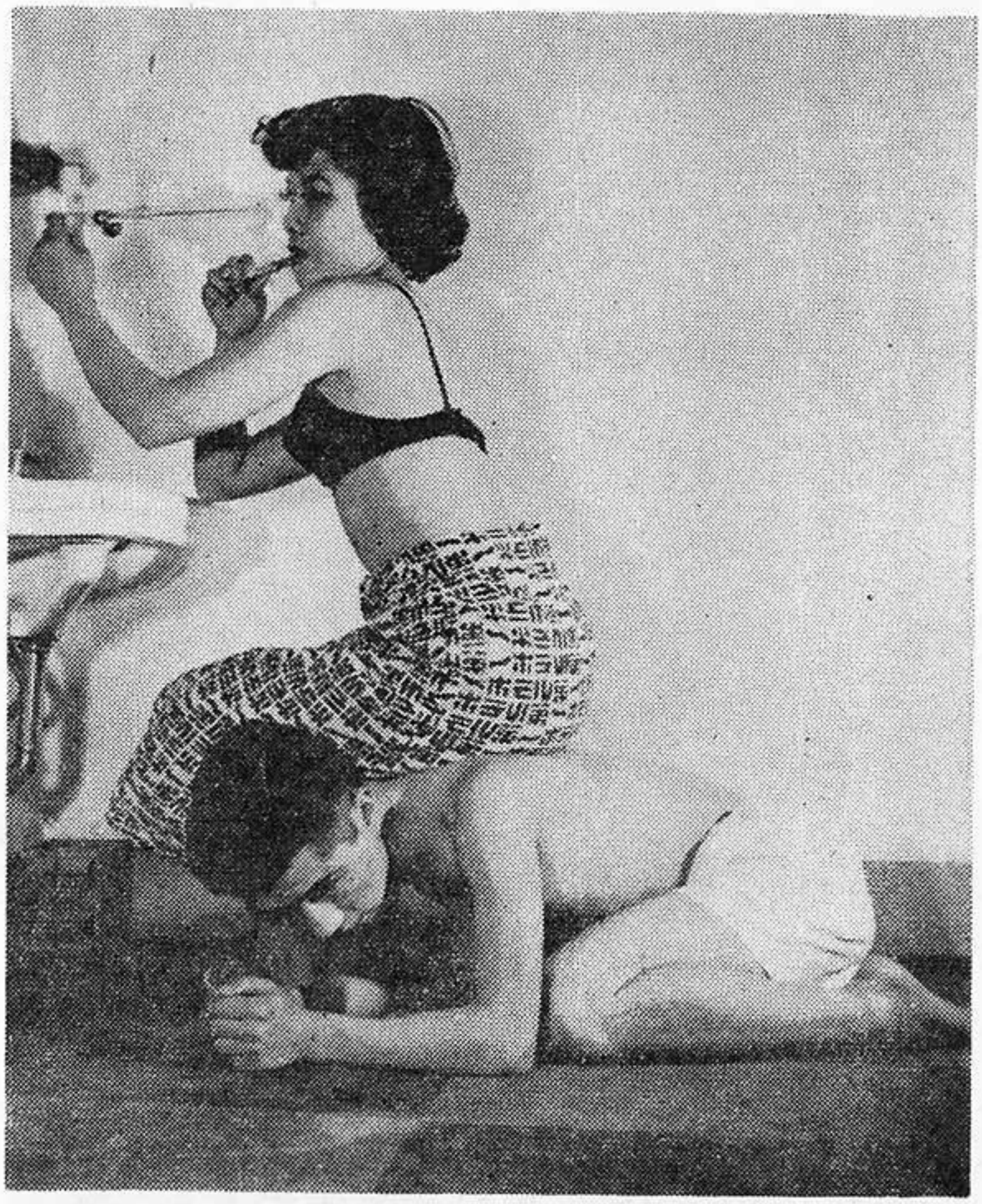
私はEの首に首輪を巻くと曳縄の鐶を、かちりと嵌めて引っ張りました。この牡犬はこれで完全に私の支配下に置かれたのです。この和洋折衷の二間続きの部屋は、私にとっては、女王様の謁見の間であり、彼にとっては、奴隷の部屋となったのです。

Eは四つん這いで本当の犬のように上手に歩きました。私は縄を曳きながら部屋を一周させたあとで、どっかりと人間犬の背に跨がりました。四十九キロの私の全体重を、まともに受けて彼は、少し、ぐらつきましたが、すぐに態勢を立て直して、私を背中に乗せたまま、歩き出しました。

この時、私は鞭を持って来なかったのを後悔しました。実は少し長くて私の鞄に入りきらなかったのですが、こんなんだったら、別に紙にでも包んで持ってくればよかったのです。鞭の代りに、縄の先についた房を振りまわして、人間犬の尻を、ぶちました。

「そらそら、右へ行くんだッ」

私の命令通り、右へ行ったり左へ行ったり直進したりする人間犬は、次第に裸の身体が汗ばんで、口からは、ハアハアと大息を吐いています。

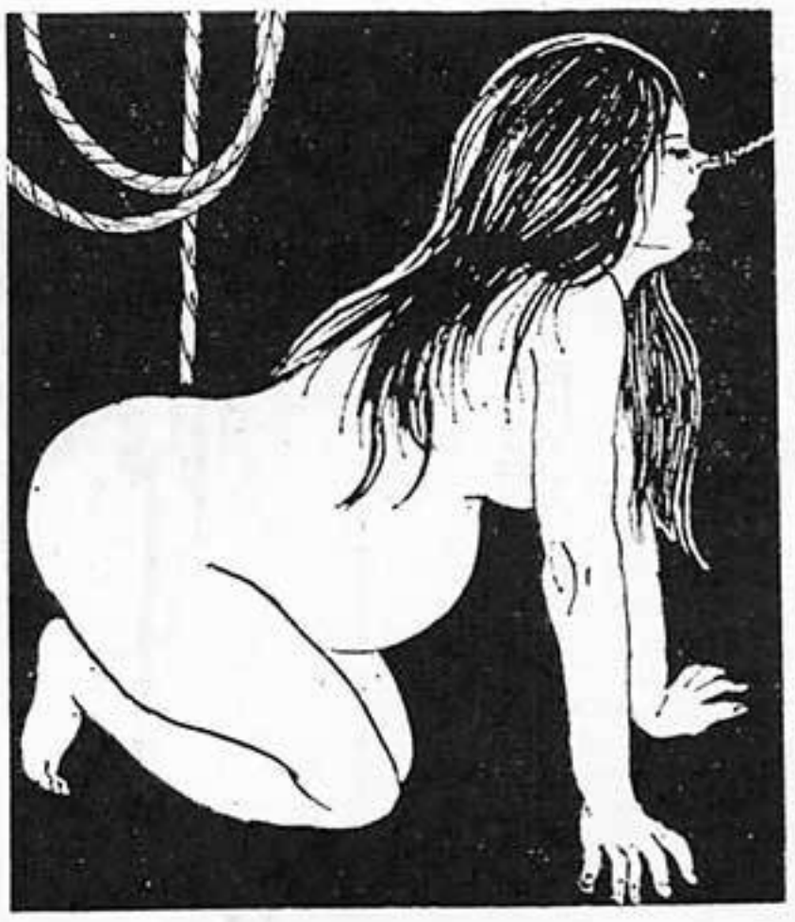


私は、足を伸ばして彼の耳を指で挟み、頬を足の裏でペタペタと叩き、前へ前へ進むように督励しました。でも、この人間犬の調教も、十分ばかり歩きまわって、乗りつぶしてしまいました。

別室で背広を着込んだEは、入口の所で真顔になって、「明日の朝9時に、運転手に迎いに寄こさせ、ご案内させますからゆっくり、ご見物下さい。私はまた、夜になったら奴隷としてお伺いしますから――」と言ってじりともしませんでした。

私は、そのどのようなプレイをやってやろうかと楽しい思いで、その夜は、まんまんでした。

――（この項おわり）――



カット・小川茂正

腹ボテ女の……ハダカが見たい

願望

大原女生

昨年、福井桃子さんの腹ボテ状態の写真が、彼女の「お喋り」とともに連載されていた頃、二度ばかり短文を投稿してから、しばらく沈黙していた小生なのですが、今度八月号で、塚本鉄三氏の筆になる「〔ペン〕と〔カメラ〕のルポルタージュ――〝同棲時代〟の甘い優雅なSM生活」の中に、思いがけない南加津子さんの妊娠七カ月の腹ボテ姿を発見して、じっとしておられない気持で早速ペンをとりました。

今後、引きつづいて加津子さんの八カ月から臨月までの、より大きなお腹の、すばらしい腹ボテ写真が見られることを期待して、胸がワクワクするのを、どうすることもできません。

塚本氏の文章から、小生には、腹ボテのお腹が激しく喘いで、さらに大きく膨らみ、またもとに戻る――この躍動する腹ボテ腹のすさまじい動態を、ありありと想像することができました。

腹呼吸をする昆虫のように、男性のサディズムをくすぐらずにはおかないような光景が、静止した写真からでも窺えるような名文なのですが、それだけに余計、直接に目撃することができれば、どんなにか素晴しい〝見もの〟であろうと、ヨダレの出そうな気持にさせられました。

塚本氏は、妊婦について、その腹ボテ姿の礼讃（四七――八ページ）で「青白く膨らんだ腹部」という形容をしておられます。小生はこの形容とともに、ルポの中のさりげない字句、「ごろりところがって」「身体を横たえている」「一糸もまとわぬ」等々に、ジーンとくるものを感じとり、腹ボテ女――マナイタの上に白い腹を晒しているサカナ――を連想してしまいました。

小生のこの連想は、更にエスカレートして、出刃庖丁の刃を膨らんだその腹に受け、ハラゴもろともハラワタを、すっかり抜きとられて、料理されてしまう人魚のような南加津子さんを描き出し、そしてウットリと、この〝憧れの腹ボテ人魚料理の図〟に酔いきってしまうのです。

それはそれとしまして、それほど塚本氏の表現はナマナマしく、腹ボテ女の腹を描写して、小生の胸をおどらせてくれています。

× × ×

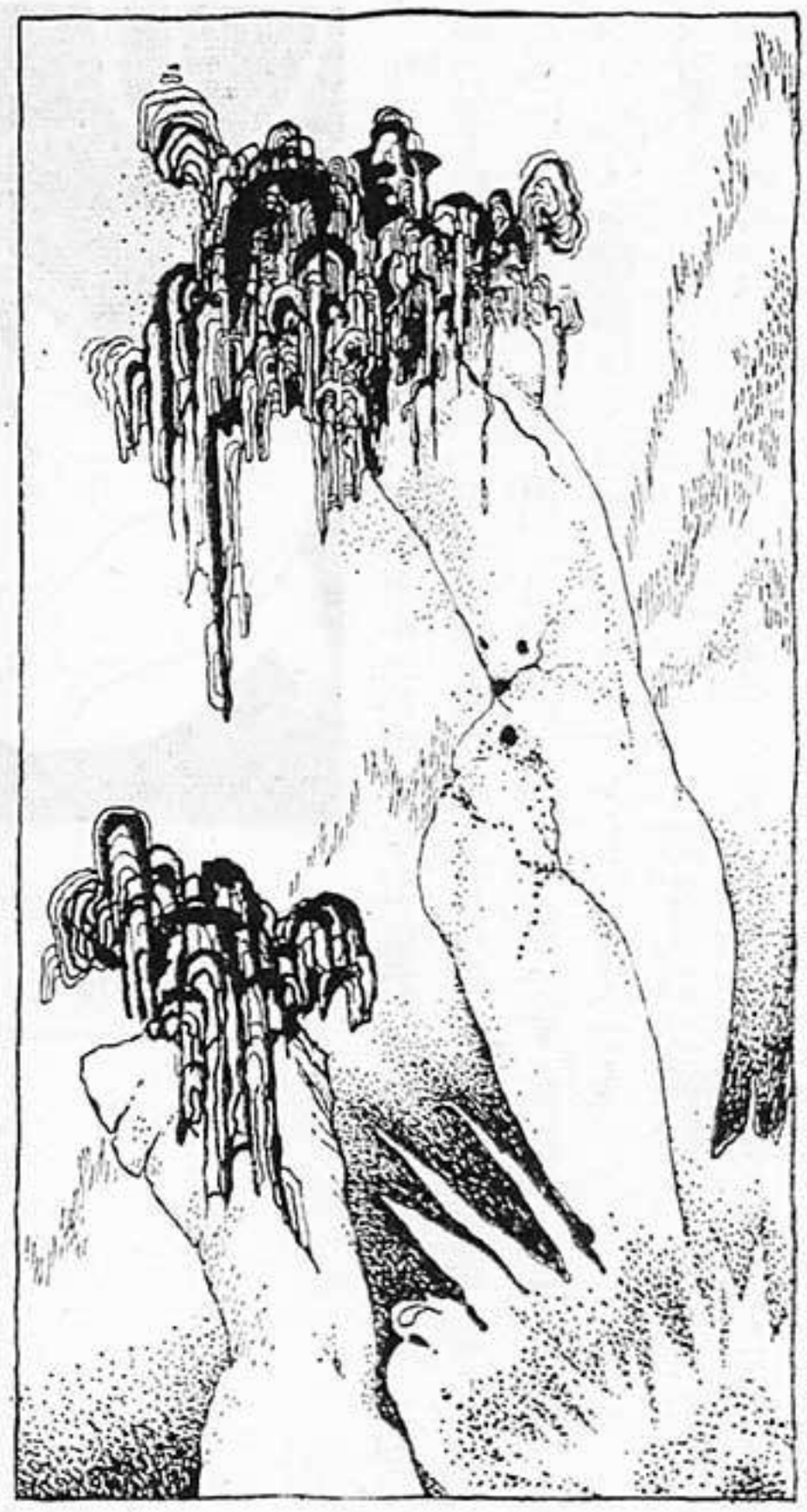
八月号の塚本鉄三氏のルポルタージュを何回も何回も読み返し、すっかり感激してしまったままに拙い文章ですが、こんな文字をつらねてしまいました。「正真正銘のマゾ女」と塚本氏が言われる加津子さんに、臨月腹になっても、その偉大な腹ボテのハダカを誌上で見せて欲しい。出来たら念願の「腹ボテ女のハダカ逆さ吊り」を実現していただけないものだろうかと、ひそかに願う小生です。

懸賞入選体験小説

〝ミミクリー〟と〝イリンクス〟

時田憲文

カット・室井亜砂路



美容院通い

健一が美容院でトリートメントをしてもらうようになったのには、ちょっとした理由があったのだ。

二回目か三回目かに美容院に行った時セットを、してもらったことがあった。健一自身それがどういうものであるのかはっきりわかってはいなかった。

「カットと、それからセットしてもらえますか」

「セットですね?」

美容師のオオムのような繰り返しの言葉が返ってきた。

カーラーが何本も巻かれと言われて、ドライヤーを被せられた。

初めてのことで、熱くなっても「熱い!」と言えず、額に汗をかきながら、じっとガマンしていた。

二、三十分たって、ドライヤーが取り除かれ、カーラーがはずされ、ブラッシングされた自分の髪を見た健一は、びっくりした。

セット前より十センチは高く、十分に逆毛を立てられてバーのマダムのようであった。

美容院を出た健一は直ぐスカーフを被り、きつくあごの下で結び、何とか低くしようと思った。アパートに帰ってスカーフを取ってみると、いくらか低くなっているみたいだったが、逆毛がそのままなので、たいして変わらなかった。

今度は櫛でやってみたが、毛がほつれて櫛が通らなくなってしまい、あきらめてしまった。鏡に映る自分のヘアースタイルを眺めながら

『こんなヘアースタイルが男性に似合うわけないじゃないか。セットと言えば女性と同じようにして……』

と、つぶやくのであった。

こんなことがあって以来、健一はカットとトリートメントを注文するのだった。

トリートメント剤を地肌にすり込み、熱い蒸しタオルで頭髪全体を包み、ビニールキャップを被り、ドライヤーの中で二十分程、すごすだけのことである。

ただそれだけのことではあったが、健一にとって、美容院にいること自体が重要な意味があった。

その瞬間、つまり、美容院の中にいる時が唯一の自我に目覚めている時なのであった。コーヒーの好きな人が、喫茶店で時間を消費するのとは違っていた。閉ざされた孤独の中にいるのではない。一人か二人の美容師と健一とで作りあげるべき未開の社会が存在していて、決して孤独にはしてくれない美容師と自我が、そこにあり、理性と欲望との限りなき戦いが続けられたのである。

カットからセットへ、セットからトリートメントへ、トリートメントからパーマへ、と健一の注文が変わって行ったとしても、それは、むしろ自然なことであろう。健一は一分でも一秒でも長く理性と欲望を戦わせたかったのであるから。

「パーマ、かけてもらえますか」

鼻にかかった声でしゃべり、後で大きく肩で呼吸をするのだった。

「パーマですか？　どのようにいたしましょうか」

美容師は健一の髪を、いじくりながら言い続けた。

「部分だけにいたしましょうか。それとも、全体にかけてください」

言いながら「チラッチラッチラッ」と健一の方に視線を向けていた。それは決して無理からぬことであった。誰でも健一に、ある種の好奇の目差しを向けるであろう。健一が美容院に入って来た時のことを見れば。

大きなマスクをし、スカーフを被り、右腕を肩から吊り下げた、その姿は、誰彼の区別なく興味を引くであろう。しかも……。

コートを脱ぎ、すすめられたいすに腰を降ろし、頭に被っているものを取ろうとした時

「おとりいたしましょう」

と言って美容師は鏡を見ながらスカーフを取った。と、その下にもう一枚、スカーフを被っていたのだった。マスクを取り丁寧にたんだスカーフの上に置いてブラッシングを始めて又びっくりさせられた。両方の耳の中に脱脂綿がつめられていたのだった。

「かかる所までですね？」

直ちに準備が始まり、わけもわからぬ薬品が、あちこちの棚から持ってこられ、何枚ものタオル、数えきれない程のカーラー等がワゴンに載せられた。

親指の太さ程のカーラーを巻きながら、美容師が話しかけてきた。

「外はお寒いでしょう」

「……」

「風邪をひかれたんですか？　今年の風邪はかなりしつこいそうですから大変ですわね」

「ええ」

「腕はどうなされたんですか」

「自転車に乗っていて、自動車に引っ掛けられて……骨折です」

「まあ、それは、お気の毒に」

健一にとっては、こんな会話でさえ大変なのである。両方の鼻の穴に脱脂綿が詰め込まれてあり、特に話しをしている時は呼吸が、しんどかった。常に肩で「ハアーハアー」していなければならなかった。

今度は、ここの先生らしき、少し年をくった美容師が、話しかけてきた。

「寒い時など、よくスカーフを被ることがあるのでしょうね？」

「ええ」

「女性の方はネ、よくお見うけしますけど、本当のところ、男性がスカーフを被った姿は今日が初めてです」

「……」

「やはり暖かいですか」

「はい」

「ねえ、先生。今日みたいに風の強い日は、やはりスカーフなんかを被らないと髪が痛むでしょう？　だから男性の場合も、きっと同じだと思いますけど」

「それは長い髪の場合よ。短い人には、あまり関係ないのよ。お客様、左手が早いようですので大丈夫でございましょう？」

「ええ、でも、もう慣れました。お長いようですね」

どことなく、とげのある会話だった。

百本近くのカーラーが、はずされ、髪全体が後に引っ張られるような気がした。

小一時間程して、カーラーが巻かれたので、髪全体が後に引っ張られるような気がした。

シャンプーされた。

後に引っ繰り返るようにしていなくてはならず、首の短い健一にとって喉が圧迫され、唾液が呑み込めず、その間の一分一分が、何時間にも思われる程、長く感じられた。

二カ月後、健一は同じ美容院へ行った。

「カットされたんですが又この寒さでしまっておりますね」

「ええ、それで又、パーマをかけてもらいたいのですが」

「お客様は、髪の伸びが早いようですので大変ですわネ」

健一は二カ月前と同じかこうだった。

「腕の方は……だいぶ髪が痛むのですが又この寒さで関節炎を起こしてしまい、当分だめです」

「まあ、それはそれは……」

そんな会話をしながら、二人の美容師は準備に、とりかかっていた。

健一には、何となくおかしくてしようがなかった。

お互いに知りつくしていながら、そんなことを、おくびにも出さず、良く言えば、相手をたてながら、悪く言えば騙しながら日常的な会話しか、起こらなかった。

健一は二カ月前、パーマをかけてもらってすぐ別の美容院でパーマを取ってもらい、かかりすぎた所だけカットしてもらったのだ。

店をもつ程の美容師ならパーマがカットのために取れたのか、薬品によって取れたのかぐらいの区別はできるはずである。この美容師が、そのことに気がついていると健一には思えてならなかった。

『お客様、たびたびパーマをおかけになりますと髪の毛自体が痛んできますので、もう少し間をとっておかけになった方が良ろしいかと存じますが、となぜ言わないのだろうか。美容師なら、それくらいのことを言っても、かまわないと思うのだが』

健一は、何かが起こるような気がした。

パーマを、かけ終わり、若い方の美容師にマスクをつけてもらい、スカーフを二枚、被せてもらい、コートを肩からかけてもらって、いる所に年をくった方の美容師が現われた。

「お客様、度々パーマをおかけになるのは、大変でございましょう？」

「……」

「ウィッグ等、お買いになられてはいかがでしょうか」

「ウィッグ？」

「御存じありませんか。手軽にそう、帽子のように被るだけで、今までの自分とは、まったく違った自分を作り出せるのでございますが……ヒロミさん、奥においてあるのを、一つ、持って来てくださる」

「はい、先生！」

ヒロミと呼ばれた美容師は、すぐ奥に消えた。

「かつらのように堅苦しくお考えにならなくても、およろしいのですよ。本当にお帽子の一種だとお思いになれば……ブラッシングだけで、すみますし、自分の髪をカットされてあったコございませんしね……さあ、どうぞ」

そう言いながら健一の肩に掛けてあったコートを取り、強引に椅子に坐らせ、頭を包んでいたスカーフとマスクを、はずした。

「先生、これでしょうか？」

ヒロミ、という美容師がウィッグを手にして戻って来た。

その方を見ずに、

「そうよ、どうもありがとう。ちょっとブラッシングしておいてくださる？」

と言って、何本ものヘアピンを使って健一の髪をアップにした。

ブラッシングされたウィッグが健一の頭を包み込んだ。

「先生、なかなか、お似合いですわね」

「そうね、ロングだからむしろ無理かと思っていましたけど……お客様、いかがでしょうか」

「ええ、なかなか……ピッタリですね」

健一は何て答えてよいのか一瞬、迷った。

肩に届く程の長さがあり、外向きに毛先がカールされていて、前髪は、ちょうど額が隠れる程度にそろえて、カットされてあった。

「いかがでしょう。試しに一日程、お使いになられては」

「でも……何だか女性っぽくて――」

「あら、そんなこと。今の若い方は、みなさん長いですわよ。どうしても、お気に召しませんでしたなら、明日お返しくだされればおよろしいのですから、騙されたと思って試してごらんなさい」

「なかなかチャーミングですわ」

若い美容師までが健一を、たきつけた。

「きっと、女の方が振り返ってみますわよ」

健一は会話を続けているうちに、体全体がほてってくるのが分かった。鏡に映る自分が女性のようであり、強いて断わる程でもないことに最初から気付いていながら、なかなか「はい」と言えなかったのだ。

自己陶酔したいと思っている所に、他人の感情が入ってきたことに対する一種の反発が起こったにすぎなかった。

自分の姿を見れば見る程、体内の何処かに潜んでいた女性への思慕と言うべきか、それとも他人にあざけり笑われたい気持とでも言い現わせそうなものが、ムクムクと湧き上がるように込み上げてきた。

男性という性を持ちながら、女性になりたいという潜在意識が強烈に浮かび上がってきたのだった。

身心共に〝女性〟になりたいとは思わなかった。もしそうであるなら、まず〝男性〟であることへの不満を語らねばならない。

健一は〝男性〟は、それで尊重し、しかもその上〝女性〟になりたいと思うのだった。

健一にしてみれば、それが〝美意識〟への目覚めだったのだ。

『なぜ人間だけ、雄の方が汚らしく、醜いのだろうか？』

という、疑問につながって行くのだった。

『何と言えばよいのだ？　女性の服装全部、貸していただけないでしょうか。男物の服装では、外を歩けませんので、とでも言えばいいのか。ここは貸衣裳もやっているはずではないか！』

「では、お気に召しませんでしたなら、明日にでも、お返しくださいませ。お代金は、そっくりお返しいたしますので」

そう言いながら椅子を、くるりと回し、手鏡をかざして、健一の襟足の方まで見えるようにした。

「では一日、お借りします」

健一は椅子から立ち上がった。

「おいくらになりますか」

「ウィッグのお代も一応、戴きますので、六千五百円になりますが」

健一は一万円札を出した。

「これで、とってください」

「ヒロミさん、三千五百円のおつり」

若い美容師に手渡した。

〝先生〟自らが健一の肩にコートをかけ、小さいスカーフを首に巻き、大きいスカーフを頭から被せ、あごの下で軽く結んだ。そしてコートの下に隠れていたウィッグを、つかみ出すようにしてコートの上に垂らした。

外に出ようとした時、あいにくの雨となっていた。

「女物でよろしかったら、どうぞ」

そう言って傘立てに立ってあった一本の傘をさして、健一に手渡した。

帰りの道すがら健一の頭の中に、いろいろな思いが駆け巡った。

健一の潜在意識を完璧に読み取ったような〝先生〟の態度。

サディストが、より強烈なマゾヒストになりうるのは、やはり二つが表裏一体となっているからであろうか。

健一が、だいぶ大きくなった頃の二つの出来事を、今でも思い出すのである。

それは小学校の五年生の時だったと思う。

夏の暑い太陽が、さんさんと降り注ぐ頃であった。庭の中で、割と乾燥している所にアリの巣が二つ、あった。その近くに腰を降ろし、健一の足元を通るアリ一匹一匹を虫メガネで追跡したのである。

真黒な体をしたアリは、まさに虫けらのように異臭をのこして死んで行った。

それは一秒もかからなかった。

真夏の太陽の光を集めた凸レンズの焦点は容赦なくアリの背中に襲いかかるのだった。

そんな時、健一は無限の喜びにひたり、時のたつのも忘れる程だった。

もう一つは中学二年の頃だったと思う。

正（ただし）という悪友と二人で野原に出かけて行ったときのことである。

野生の菜の花が、あちこちに咲いていた四月頃だった。

手に一メートル程の棒切れを持って、

「今宵の虎徹は血に飢えておる」

と言って野原に飛び込み、草の上に羽を休めているモンシロチョウに襲いかかった。

棒切れで、舞い上がるチョウを何十匹と殺すのであった。しかも、その虎徹が血に飢えるのは一日や二日だけではなかった。一週間も十日も続いたのだ。

草原に散ったモンシロチョウを尻目にして

「今宵は、よく眠れるのう」

などと嘯（うそぶ）くのであった。

当然サディストになってしかるべき健一がなぜに他人に恥かしめられることによって、性的興奮をおぼえるようになったのであろうか？

健一の世界は、というより健一の感覚は、敏感に今日の出来事を、とらえていた。

……イメージギャラリー……『世話のやける赤ゃん』……原　由貴子……

『あの〝先生〟はサディストに違いない！　明日、行かなくては！』

サディストはマゾヒストを、マゾヒストはサディストを追い求めているに違いない。とするなら健一はサディストだったのだ。そしてマゾヒストを求めているうちに、理想とするマゾヒストに自らが、なってしまったのである。そして今度はサディストを求めなくてはならなくなったのだ。

☆

健一は昨日と同じ姿だったが、コートの下が、ちょっと違っていた。下にジャンパースカートを着ていた。

「いらっしゃいませ」

ヒロミという美容師が、お客用の長椅子に腰掛けて、健一の方を見た。

入口に一番近い椅子に一人のお客がいた。

「どうぞ！」

読んでいた雑誌を棚に置いて、スリッパをすすめた。

「昨日、お借りしました傘、ここに置いときます。ありがとうございました」

「いつでもおよろしかったのに、ねえ先生」

「わざわざ、すみませんね」

健一は長椅子にコートを脱ぎ、スカーフとマスクを取って、手に持って椅子に坐り、前にあるカウンターの上に置いた。

「いかがでしたか？」

「はい……やはり、どうも似合わないようなんで……」

「お客様、いかがです。よく、お似合いでしょう？」

そういいながら、〝先生〟は自分がやっていたお客を健一の方に椅子ごと向けた。

「まあ本当に。とっても、かわいらしくて、お似合いじゃございません？」

「本当にねえ」
「私なんぞ、あと十才ぐらい若かったら、あのようなヘアースタイルに、してもらいますわ。ねえ、先生」
「実は、あれ、ウィッグなんですのよ」
「まあ、あれが……信じられませんわ」
健一は、そんな会話をじっと聞いていた。
「やっぱり、取ってください」
「はあ……」
気のない返事をして、ヒロミという美容師は〝先生〟の方を「チラッ」と見た。
「お客様がそう言われるのですから、お取りして、セットができるようにブラッシングしておいてね。私の方はもうじき、終わりますから」
ウィッグを取りヘアピンをはずし健一の髪をブラッシングしている時に隣が終わった。
「ヒロミさん。シャンプーしかけ〝先生〟は急に止めて奥よくかからないでしょう」
「はい、先生。……お客様、どうぞ」
二カ月前も昨日も、さんざ苦しめられた椅子に再び案内された。
そこに坐らされただけで喉が圧迫され、口の中に溜まった唾液を飲み込むのが苦しく、飲み込む時は、息を止め、
「ゴクン、ゴクン」
と、音をたてなければ飲み込めず、呼吸が苦しくなるのである。
といって唾液を飲み込まなければ唇から、だらしなく涎となって下に垂れることになってしまう。
坐らされると同時に、肩で息をするようになった。
「私がするから、いいわよ」
そんな声が聞こえた。
「お客様、苦しそうですね」
健一は喋れず、頭を軽く動かした。
「少々、お待ちくださいませ」
シャンプーしかけ〝先生〟は急に止めて奥に何やら取りに行った。すぐに戻って来た。
健一の目と鼻まで、水がかからないようにタオルがかけてあり、ある意味では目隠しの役目もしていた。
「ちょっと、口を開けてごらんなさい」
健一は言われるままに口を軽く開くと、女性の指が健一の唇を軽くつまむのを感じた。
「こうやっておくと少しは楽になりますよ」
そう言いながら、唇と歯ぐきの間に何かを詰め込み、歯の上に何かを置いた。
「歯で噛んでごらんなさい」
歯医者のような口調だった。
健一は何をされたのか、まったく、わからなかった。ただ、何かを口に噛まされていることは触覚で、わかった。
十分後、鏡の前に坐らされて初めて、わかった。〝おしゃぶり〟だった。そして唇と歯との間から白い脱脂綿が、のぞいていた。
健一の、びっくりした顔に気づいて、
「もう店も終わりですので他人様に見られるようなことはございませんし、私共の方は、お気になさらなくても、けっこうですので」
と言って店のカーテンを引き、不用の電燈を消した。
健一は何かを喋ろうと思ったが、口を動かすと、確実に〝おしゃぶり〟が落ちるので黙っていた。そして「ジーッ」と、鏡の中の自分を見つめていた。
健一の小さな口から、ピンク色の〝おしゃぶり〟が顔をのぞかせ、ベビーフードを被っても似合うような気がした。
ここの〝先生〟が押す乳母車に健一自身が乗って町中を歩いている姿を想い浮かべた。
「どうぞ、お待たせいたしました」
やっと終わった。健一は、ほっとした。
『おしゃぶりを取ってもらおう』

いつまでも、そんな姿でいられるわけがないことを知っていた。

「して差し上げます」

〝先生〟自ら後に回り、鏡をたよりにマスクを手にし

「涎が流れ出しますといけませんね。私共に新しいガーゼがございますので、当てガーゼにしてお使いくだされば、万一の場合でも、だいじょうぶかと思いまして」

言いながら、大判のガーゼのハンカチを折りたたみ、マスクより少し大きめにして健一の口元に当て〝おしゃぶり〟を奥に押し込むようにしてから、耳にマスクのゴムをかけたのだった。

☆

相手の心理を十分に読み取り、いや、それ以上に、潜在意識まで読み取った〝先生〟に健一は屈服せざるをえなかった。

健一の意識を、全てほじくり出し、太陽に一つ一つ、透しているように思えた。

健一が肩から吊っている右腕の骨折が、にせものであり、風邪などと言っているのも、鼻の奥に脱脂綿を詰め込んだにすぎず、もっともらしい理由でスカーフを被っているのもすべて出鱈目であることを、そして、そうしたい、そうされたいのが健一の欲求であることを、十分に、知っているように思われた。

マスクをしたい、という欲求から始まった一連の行為は結局のところ、健一がSEXを選択できずに、その代替的行為としてのものなのだろうか。

大学受験で、ある地方都市に行った時のことであった。

列車の中で一浪だと自称する人と、ずっといっしょだった。その人が、いろいろと浪人中の経験談を話し最後には性体験にまでいったのである。何となく興味をそそられる話にまでなってしまったのである。

旅館にいても面白くないので、夜の町に出かけてみた。たった一夜しか過ごさぬ町という意識が、どこかにあったのだろう。

ネオン街から少しはずれた、いわゆる裏通りを歩いていた時である。

「ねえ、君。私とデートしない?」

二十才ぐらいにしか見えないグラマーな女性に声を掛けられた。

十八になるまで女の子とデートなるものをしたことがなかった健一は、すぐ承知した。

「お茶でも、どうですか」

健一は自分の方からどういうふうに誘えばいいのかわからずに、こんなことを言った。

「いいわよ、私についてらっしゃい」

女性は独りで歩きだした。

健一は女性に振られる心配から何も言わずついて行った。

健一より一メートル程、先を歩く女性は、時々後ろを振り返ってみるだけで、何も喋らなかった。

「ここから入ってね」

普通の家としか思えない玄関の前に立ち、ノブを回した。

健一は言われるまま、独りで中に入った。

「いらっしゃい」

四十近くの婦人と、小学生ぐらいの男の子が出て来た。

「どうぞ」

スリッパを、すすめた。

「靴は、この中に入れておきます」

婦人は健一の靴を傘立ての中に入れた。

「こっちよ」

さっきのグラマーな女性が、どこからともなく現われて来た。

二階に行く広い階段を登りきるとドアが二つあり、女性は右側を開いて中に案内した。

「なかなか静かでしょ。ここは初めて」

「……」
「ビジネスだけど……二千五百円のところ、あんた学生さんだから二千円にまけとくわ。どう？」
「いいよ」
「前払いで、お願いするわ」
健一は、その金額を払ってやった。
「着替えてくるわ。あなたも脱いで」
女性は部屋から出て行った。
健一には、デートの意味が、やっと理解できた。ゆっくり部屋の中を見回した。
大きなダブルベッド。傘のついたスタンド洋服ダンス。テーブルに椅子。ルームエアコン。ラジオ。ただそれだけだった。
「初めての時、男の方が、よく素っ裸になるけど、そんなことすると女に、ばかにされるからな！」
列車の中で聞かされた話を思い出した。
コートと学生服を脱ぎ、下半身は全部、脱いだ。
「おまちどうさま」
先程の女性が、ピンクのガウンを肩から羽織って入って来た。
電気スタンドのスイッチを入れた。場違いのような赤い光が、ポツンと点った。
ルームエアコンとラジオのスイッチを入れ、天井燈を消した。
「さあ、入りましょう」
女性から先に入り、布団をめくって、健一を中に入れた。
赤い光が決して場違いではないことがわかった。
「ルルルッ――」
軽い音をたてて、ラジオが流れだした。
甘い音楽が流れだしたのを、つけた。
世界に引きずり込むように思えた。
女性のやさしい指が、健一の体から離れた。
だんだん上にあがって来た。
「まだなのね」
そう言って、上下運動を繰り返した。
どういうわけだかラジオの音が聞こえなくなり、エアコンの唸りだけが健一の頭に、こびりついた。
その女性はスタンドを消し、健一を自分の体の上に乗せた。
健一の両手は、たわわな時どうなの。
「ちゃんとしてるよ。本当だよ」
女性は天井燈を、つけた。
健一には相手の体が、まぶしかった。そして視線は、ひとりでに一点に注がれた。
「あまり見ないでよ。あなたの、だいぶ黒いわね。オナニーのやりすぎよ。だいじな時に役立たずになるわよ」
健一は小学校の高学年から経験があったから、その言葉にギクッと来るものがあった。
「それ、本当？　十分、気をつけることね」
「十分、気をつけるよ。本当だよ」
それ以後、彼はSEXに対し、興味が全然であった。体中の力がわかなくなったもないのに、浣腸して喜ぶことまで含まれるのだろうか？
「さあ早く……私はだめじゃないの。しっかりしてよ」
女性の指が健一の体から離れた。
「まだだよ。もうちょっと待ってくれよ」
「重いわ」
上になっていた。
「オナニーぐらいやっているんでしょ。そんなの、エアコンと、ラジオのスイッチを入れ、布団をめくって、健一を中に入れた。
赤い光が決して場違いではないことがわかった。
「ルルルッ――」
軽い音をたてて、ラジオが流れだした。
甘い音楽が流れだしたのを、つけた。
世界に引きずり込むように思えた。
女性のやさしい指が、健一の体から離れた。
だんだん上にあがって来た。
「まだなのね」
そう言って、上下運動を繰り返した。
どういうわけだかラジオの音が聞こえなくなり、エアコンの唸りだけが健一の頭に、こびりついた。
その女性はスタンドを消し、健一を自分の体の上に乗せた。
健一の両手は、たわわな時どうなの。
「ちゃんとしてるよ。本当だよ」
女性は天井燈を、つけた。
健一には相手の体が、まぶしかった。そして視線は、ひとりでに一点に注がれた。
「あまり見ないでよ。あなたの、だいぶ黒いわね。オナニーのやりすぎよ。だいじな時に役立たずになるわよ」
健一は小学校の高学年から経験があったから、その言葉にギクッと来るものがあった。
「それ、本当？　十分、気をつけることね」
「十分、気をつけるよ。本当だよ」
それ以後、彼はSEXに対し、興味が全然わかなくなったもないのに、浣腸して喜ぶことまで含まれるのだろうか？

イメージギャラリー……『仲の良い主従』……志羽利也

怪我でもないのに、腕を吊ったりすることもか？

いや、決してそうではない！

健一には今まで、わからなかった。幼児の頃、雨の降る小屋の中での、あの遊び自体、すでにアブノーマルなものであったことに。

ふと、小屋の中で遊んだ頃より、もっと以前の記憶が甦って来た。

それは三つか四つ頃のように思われた。

「いいよ」

父が会社から帰ってきて、母が食事の準備をするまでの、ひと時であった。

まわらぬ舌で答えた。

ふざけながら健一は父に縛られたことが何回もあった。両手両足を縛られた健一は「うふふふ……、ははは……」

芋虫のようにに転がされている姿を微かに思い出すのであった。

この頃から悪い血が出来あがっていたのだと喜んでいるのだった。その笑い声を今でも脳裏の何処かに留めてあるように思えた。

「ほどいてやろうか」

「いいよ」

まわらぬ舌で答えた。

芋虫のように転がされている姿を微かに思い出すのであった。

この頃から悪い血が出来あがっていたのだと健一は思っていた。父との遊びも、正樹との遊びも、恐らく健一しか記憶していないであろうことは容易に判断できた。

『父も正樹も正も、決して自分のようにはならなかった。なぜ？　なぜなのだ』

事実と想像が交差する程、遠い遠い過去の出来事が、健一を支配している。

単なる好奇心とか、耳年増のようなことが原因ではなく、単なる遊びにすぎないような小さな出来事の積み重ねが、健一をアブノーマルな世界に引きずり込んだという事実が、より気持を悪くさせた。

『自分には正か悪かの選択権さえなかった』

スカーフを被って女の子に話しかけた時、それは原因ではなく、すでに結果にすぎないことに気がついた。

限定された時間内、空間内から逸脱した遊びを健一が始めた時、遊びはどうなるのだろうか。

ホイジンガやカイヨワらの言う対称性を持ったものにすぎない。実務的社会等に対応するものとしての世界を作りあげたのである。何の〝遊び〟は称しなければならないのか？

☆

一カ月後、健一は同じ美容院に仕事、生産マスクをし、スカーフを被り、〝遊び〟ストッキングにミニスカート、ハイヒールという姿に、女物のコートを羽織っていた。

「今日はまた、一段とかわいらしくて、すてきですわ！」

健一を、まったくの女性と見做して、黒髪といかがいたしましょう？」

「栗色に染めてほしいのですが」

「ヘアダイですか？　そうですねうのは、見た目に何となく重苦しいね。お客様など、うんと明るい色になっても十分、引き立つと思いかがでしょう？」

「……」

「ヒロミさん。準備する間、お客様の顔、あててくださる？　栗色の髪に似合うように」

すぐ、カミソリと短いハサミと、毛抜きが用意された。

その手際よさは、一カ月前から準備されていたみたいであった。

「お客様、ちょっとの間、目をつぶっていただけないでしょうか。危いものですから―」

言われるままに、健一は目をつぶった。

マツ毛が切られ、マユも切られ、そのあとカミソリで剃り落とされ、むだ毛が一本一本毛抜きで抜かれていった。

「あまり、おかしくされると、こまります」

声で、それだけ言った。

「ええ、わかっております」

鏡に映った自分を見て健一は、びっくりした。鏡の中に一人の女性、自分とは似ても似つかぬ美女を見たからである。

太くて濃かったマユは細く薄くされ、マツ毛は、すべて切られてしまっていた。

驚いた様子に満足の笑みを浮かべて、仰向けにしないように、お化粧いたしますので」

と平然と言った。

最初から、おかしいのだ。パーマとヘアダイは続けては、髪が痛んで、どうしようもなくなってしまう。それを「はいそうですか」と、行なおうとすることじたい、本当に変なのである。

黒のゴム性の布で首から下を被われ、はけのようなもので地肌に、少しずつ、液体を垂らし始めた。

またたくまに、頭全体、その液体で包まれた。

半時間程たって〝おしゃぶり〟を持ってきて、健一のすぐに〝おしゃぶり〟が、ずっと入っ口の中に押し込んだ。

シャンプーのあいだに、健一のおなかの中で、二度程、グッグッ、グッグッ」

「グルッ、グルーン、

と鳴ったのに気がついた。

シャンプー後、ドライヤーを被せられ、乾かされた。

口の中には〝おしゃぶり〟が、ずっと入っていて、仰向けに倒されている時は割と楽だったが、起こされて、坐っていると〝おしゃぶり〟は不便であった。口元から一筋、また一筋、涎が垂れた。

今の健一には、そんなことは、たいした問題ではなかった。

三個のイチジク浣腸を飲み込んだ体内に、どのような変化が起こりつつあるのか、十分すぎる程、わかっていた。

一個のイチジク浣腸で予め出しておき、さらに三個、九十グラムの浣腸液を体内に注ぎ込み、三個のタンパックスのスーパーをアヌスに突き刺しておいた。

少しでも気を弛めると、全てが飛び出してしまうように思えて、下腹にぐっと力を入れていた。

「お客様、これで、お拭きくださいませ」

そういって、ハンカチを手渡した。

「お熱いですか」

新発足　懸賞〈告白、手記、体験〉原稿募集

☆賞金☆

優作　一篇につき　五万円
良作　一篇につき　参万円
秀作　一篇につき　弐万円
佳作　一篇につき　壱万円
可作　一篇につき　五千円

☆規　定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。

一、締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別すること「告白懸賞」とお書き下さい。

そう言いながら、ドライヤーの中に手を差し込んだ。

健一の額の汗を勘違いしたのだ。

「ググッー」

「グォー、ブッー」

「ゴロゴロ、グッー」

あらゆる音が、しだした。

美容師にきかれないように力を入れた。自然に歯にも力が入り、唇もぶるぶる震えてきた。

『どうしよう？　トイレに行かせてもらおうか。でも、もうじき、おさまるかもしれないし。いや、早く言わないと歩けなくなるかもしれない』

頭の中にいろいろなことが、矢継早に浮かんできた。

「いかがなさいました？　ねえ先生、お客さんの顔色が……」

美容師にきかれないように力を入れた。自然に歯にも力が入り、唇もぶるぶる震えてきた。

健一は唇を指差した。

「ばかねえ、おしゃぶりしていたんじゃ、喋れないじゃない」

そういって取ってくれた。

健一は同時に流れだした涎を拭おうともせず、

「おトイレに行かせてください?!」

蚊の鳴くような声で言った。

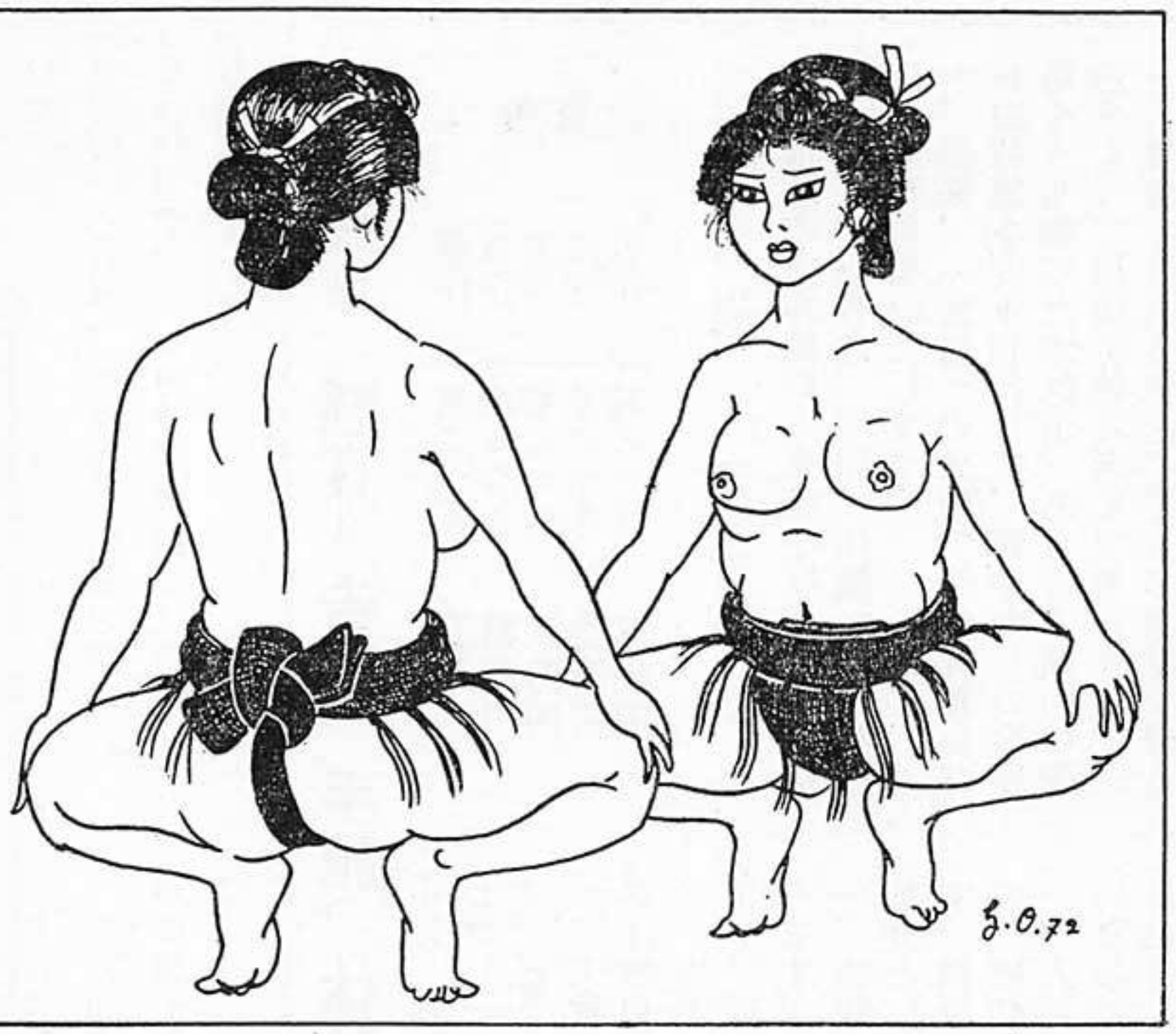
後、十秒も持たないであろうことが、健一には解っていた。

汚物の中で真赤になって坐り込んでいる自分の姿が「チラッ」と脳裏を横切った。

と同時に、ヨハン・ホイジンガの遊びの定義が浮かんで来た。

「一定の時間、空間の限界内で完了し、緊張と喜びの……」

――終り――



――文――献――研――究――

女相撲書誌拾遺

(3)

雄松比良彦（カットも）

五三）佐賀県文化館。久保大来氏の「雨乞い行事」の記事の中に、「雨乞いの女相撲」：杵島郡中通村地方で天神森に土俵を作り村の若い娘さんや嫁さんたちが面白おかしく女相撲をとる。

○（S二十六―九の東京浅草座同セントラル劇場などに、ストリップショウの女相撲（ハイヒールをはいた）が出ていてその写真は最近の二～三誌に出ている。）

○**雑誌「キング」**S三十一―三（一九五六）S二十八―一の同カジノ座、S二十七―一の

○「週刊朝日」S二十七―一一―二十号ロータリーに十数人の女相撲の興行ありと報じている。おそらく前年末、高田馬場のものの続き。（カット入）

○**「新郷土」**（雑誌）S二十八―七（一九

講談社。異色ルポ「女相撲の村を訪ねて」河原敏明。波多津・浦の女相撲を探訪、ここの記録としては、「読売」、「伊万里市史」とならんで詳しいもの。写真入。

○**「日本民俗学大系」**第九巻S三十三（一九五八）平凡社。扇田、力芸。

○**「随筆事典」**第二巻雑芸娯楽編、朝倉治彦編。S三十五（一九六〇）西京堂「摂陽奇観」の引用。

○**「日本祭礼風土記」**S三十七（一九六二）慶友社。伊万里市田島神社の十月十七日祭礼に女相撲とある。しかしわたくしの調べでは

近年は全くない。

○「週刊土曜漫画」S三十七―四十四―六（一九六二）東京秘密地図第五十九話、清水正二郎。エロティックショーとしての女相撲興行のいきさつ。

○「伊万里市史」S三十八――十（一九六三）「女相撲」として波多津町の浦（「浜」とあり）部落のものが復興したいきさつ。地元のもっとも正確な記述であろう。写真入。

○「日本歴史大事典」第四巻。S三十九、（一九六四）、河出書房新社、松島栄一氏署名で略史の項目。

○「日本逸話大事典」第三巻。S四十二、（一九六七）人物往来社。「ペンの踊」（未詳）を引用して義残後覚および明治のもの。

○「近世事物起源考」速水達夫著。S四十三（一九六八）魚住書店、略史。

○性風俗事典」中野栄三著。S四十三（一九六八）大文館。「見世物」の項に女相撲。

○「日本祭礼行事事典」S四十三（一九六八）修道社。波多津コンピラ社、三日十日の項に（その日ではないが）、ここで女相撲がしばしば行われる、とある。しかし上記のように、最近は全くない。上記、田島神社も出ている。

○「女の残酷風土記」草川隆著。S四十六（一九七一）日本文芸社「風俗艶語百科」に女相撲。節会に女力士が出たとあるのは、虚構としては面白い。

○雑誌「問題小説」S四六―十二（一九七一）「色は浮世の外右エ門」神保朋世画、志津五郎文。「色里三所世帯」の絵物語。原書とはまた違った面白い女相撲の絵入り。

○「愛奴・一」団鬼六監修、白浜静麿撮影S四十七（一九七二）芳賀書店。「太陽と女闘美」の題で現代娘力士の仕切り、取組五枚の写真集。かつて「雑考」で「土漫」のもの以外、写真に見るべきものなしとしたが、これは褌も、締め方も正格であり、きわめて注目すべき出来のものである。

○「ピンキー」S四十七―六―二十六号―学園お色気運動部、六尺褌のナンセンス娘相撲の写真。

○「ビッグ情報」S四十七―八―九号。「ウ「いにしえ才女は」花川助七作、谷田俊郎画大貴族藤原某の宴の余興に女相撲。

○「週刊文春」S四十七―八―九号。「ウチの母ちゃん女相撲日本一のねばり腰」例のP・M・の優勝者のルポ。

○「日本の民俗・佐賀」市場直次郎著。S四十七（一九七二）第一法規。東松浦郡杵島郡一たいに女相撲ありと。神埼郡東背振村小川に雨ごい。古玉神社の女相撲奉納額写真。

○雑誌「相撲」S四十七―七日号。一一P

が、「奇ク」の読者：芦浦素舞夫氏が、他誌にかかれたもので、SMファンS四十七―六に「狂乱悶え花」、同九月号に「女獣の嬌宴」SMトップ同一二月号に「倒錯の館」。氏のモノマニアたる足の裏やロープなどの Pot-Pourri の中に女相撲も出る。一般SM雑誌としてはこういう行き方でないとうけないのかもしれない。

山姥といえば神仙怪異のたぐいで、すこし如何かと思うが、民話のなかで女が相撲したというものに

○「日本の民話」（日向）北江島重孝編。S三十四（一九五九）未来社。宮崎市の牟田町での永野馬太郎氏（九十）の語りで、「おたね」という山姥が、相撲自慢の男の子をいましめるため、村相撲で頬かむりをして自分が相手になり、赤子のように扱った話。

日本各地で女相撲の民俗、伝承などの記録された地名は次のようである（臨時の行事や興行関係以外）：秋田県扇田、同雄勝町十分一（これは虚構？）山形県西田川郡温海町、佐賀県伊万里市波多津、同神埼郡仁比（山）村、同郡東背振村小川（内）同県武雄市甘久同県東松浦郡一たい、同県杵島郡一たい（前述、旧中通村など）、佐世保市相ノ浦（これは伝説）、長崎県長崎市式見町。

以上で拾遺は終る（S四十八―四―十現在）最後に、平井通氏の御著作について一言しておく。従来もまた将来も、唯一の女相撲文献として長く風俗史家等の典拠となるものと思うので、誤説誤記誤植等を正すことは、平井氏もむしろ喜ばれる事と信ずる。氏の女相撲の諸著、大体どれも同じような内容のくり返しであるから、新刊「おんなすもう」の口絵に「空音」と誤って「女角力濫觴」が出ているのも「雑考」にのべたが、これを故人も本当に「空音」だと勘違いしておられたとしても、これも化粧褌だから、この点不審である。「街談録」明和八年は六年の（多分）誤植、「化物気質」の同八年は七年の誤記。「摂陽奇観」の巻三十五は三十三が正しく（これは奇しくも、わたくしの「雑考」でも三十五と誤植があった）、「違式註違条例」はすでにM五末に東交府で出ていてM六といわれているのは地方の分。また、これで女相撲が禁止されたとは朝倉氏の説を用いられたのだろうが、条例の「男女相撲」はそれが飽きられて盲人との興行になったものである。それは大分下って明治六年である。次に平井氏の女力士のいでたちの五期の分類（江戸三、明治以後二）は便利だが、これも朝倉氏（江戸）の説を延長したものである。またその第一期に腰布のみのものと、緋縮緬の男ふんどしをしめたものとあるとされているが、後者の根拠は不明。別に考証されぬかぎり、採用出来ない。前者の腰布姿のものとして「青舐銭」があげてあるが「空音」は誤り（「雑考」）。新刊「おんなすもう」の口絵に「空音」と誤って「女角力濫觴」が出ているのも「雑考」にのべたが、これを故人も本当に「空音」だと勘違いしておられたとしても、これも化粧褌だから、この点不審である。「街談録」明和八年は六年の（多分）誤植、「化物気質」の同八年は七年の誤記。「摂陽奇観」の巻三十五は三十三が正しく（これは奇しくも、わたくしの「雑考」でも三十五と誤植があった）、「違式註違条例」はすでにM五末に東交府で出ていてM六といわれているのは地方の分。また、これで女相撲が禁止されたとは朝倉氏の説を用いられたのだろうが、条例の「男女相撲」は

男と男、男と女、女と女をいうのか、男と女だけをいうのか、当時も今もはっきりせず、明治前半には男と男の相撲も禁止論が出、論者はこの条例をひいたといわれる。女相撲の禁止がこの条例による、とは明言しかねる。禁止の明らかなのはM二十三―一一―二十七で、通ちょうとなったのはずっと後、T一五―三―二十四である。M二十三―一一の回向院の興行が江戸期（全裸褌一本）の最後として注目しておられるのを、報道上着衣は真実は全裸褌一本だったのを、報道上着衣とした（例の映画「徳川女系図」の女力士たちも、ポスターではブラジャーをかき加えてあった）というような事が判明すれば別だが第三の証左の出るまでは「読売」の報道を尊重する。既述のように、平井氏は「読売」は見ておられぬと思われる。氏はM三十三（一九〇〇）生れだからこの辺は実見録でない。

結局、氏の所論で真に女相撲史上かけがえのない価値をもつのは、氏が実際に見聞された分、つまりT一二―一二―〇一のと思われる分、京都興行以後、敗戦後までの諸興行の記録であろう。これらは新聞報道で拾えぬものもあり、今日貴重な唯一の資料である。斎藤夜居氏が「図書新聞」に記されているところによると、平井氏は生涯を通じ女体賛美に生きられたとか。この先人に心から敬意を表するのである。

なお「雑考」で未見とした氏の「デカメロン」の分はその後判明、同第三号S六―四と第四号S六―五。「変態黄表紙」の分は同創刊号S三―十二と第二号S四―〇二に分載され、これは中断されたままになっている、これらが氏のデビュー作のようである。戦前版の「見世物女角力誌」がS四十八―三の京都丸物の古書市に出たが、注文殺到で入手出来なかった。小冊であるが三千円の高値になっている。

昭和四十八年四月十日

（附記）次の資料につき一言しておく：

○「千代田城大奥」永島今四郎。太田贇雄著、M二十五（一八九二）（最近復刻も出た：S四十六、原書店）奥御膳所の新参舞、初午祭のお末の相撲の出典。三代の人々にひろく読まれたので、これらの話が巷間流布することとなる。しかし本書の内容、とくに下巻・大奥の内幕については、従来から諸説があり、著者らは直接、かつての大奥の人々や関係者の説話によるものとしているが、一方、同様の人々から全く実状と違う、あるいは作り話ばかりとの、きつい反論も出ている。今の我々には知る由もない。三田村翁も古老の言として、「後世を誤る書」だといわれたとされる。いろいろ調べたり、縁者の言伝（のまた言伝）を幼時に聞いたことなどから、わたくしの印象では、本書のとくに上記の条（おなど、すこし出来すぎている感じで、語り手の作意が多い様に思われる。あれこれで「雑考」では落しておいたが虚実のいかんを問わねば大切な資料なのでここにふれる。長年にわたる大奥の一時期にはこれに類することがなかったともいえまい。ともあれ、映画「徳川女系図」をはじめ、江戸城大奥に女相撲ありとのすべての典拠はこの本である。

――ご投稿下さる方へお願い――

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつきかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

連載・時代S小説

紫蘭の門

カット・岡たかし

(26)

風流極道軒

極楽筆

前号まで――元禄屋から借りうけてきた久我雅子を、佐渡刑部、種彦、芳年の三人が小梅の寮で責め嬲っている。径一寸五分で周囲に七つの小鈴をもつ七宝鈴が片足吊りにされた雅子に迫り、〝極楽筆〟や〝馬尾筆〟が、これにつづく。

真新しい絵筆を見せびらかして迫ってくる芳年に、

「お、お許し下さいませ！　すべては、申し上げた、はずでございまする……」

久我雅子は、吊られた縄をきしませて必死に訴えたが、返事はなかった。

が、そばから佐渡刑部が、

「フッフッフッフッ、姫。いままでに十数人の男たちに責められたということはわかり申したが、そのうち、誰に、いつ、どこでのときが、一番楽しうござったかは聞いてはおらぬ。逐一、白状するがよい」

もはや完全に罠におちた小兎一匹。ゆっくりと料理するにかぎるという風情を、言外にあらわして言った。

「そ、そのようなことを申されましても」

すすりあげるようにいう雅子は、頬に垂れかかる黒髪を払うこともできない緊縛された身の上であった。が、

佐渡の七宝鈴が耳元で鳴りひびくと、われを忘れたように雅子は、喘ぎ喘ぎ言った。

「……昭、昭吉さんに……」

言下に「嘘じゃ！」という一喝が飛んだ。

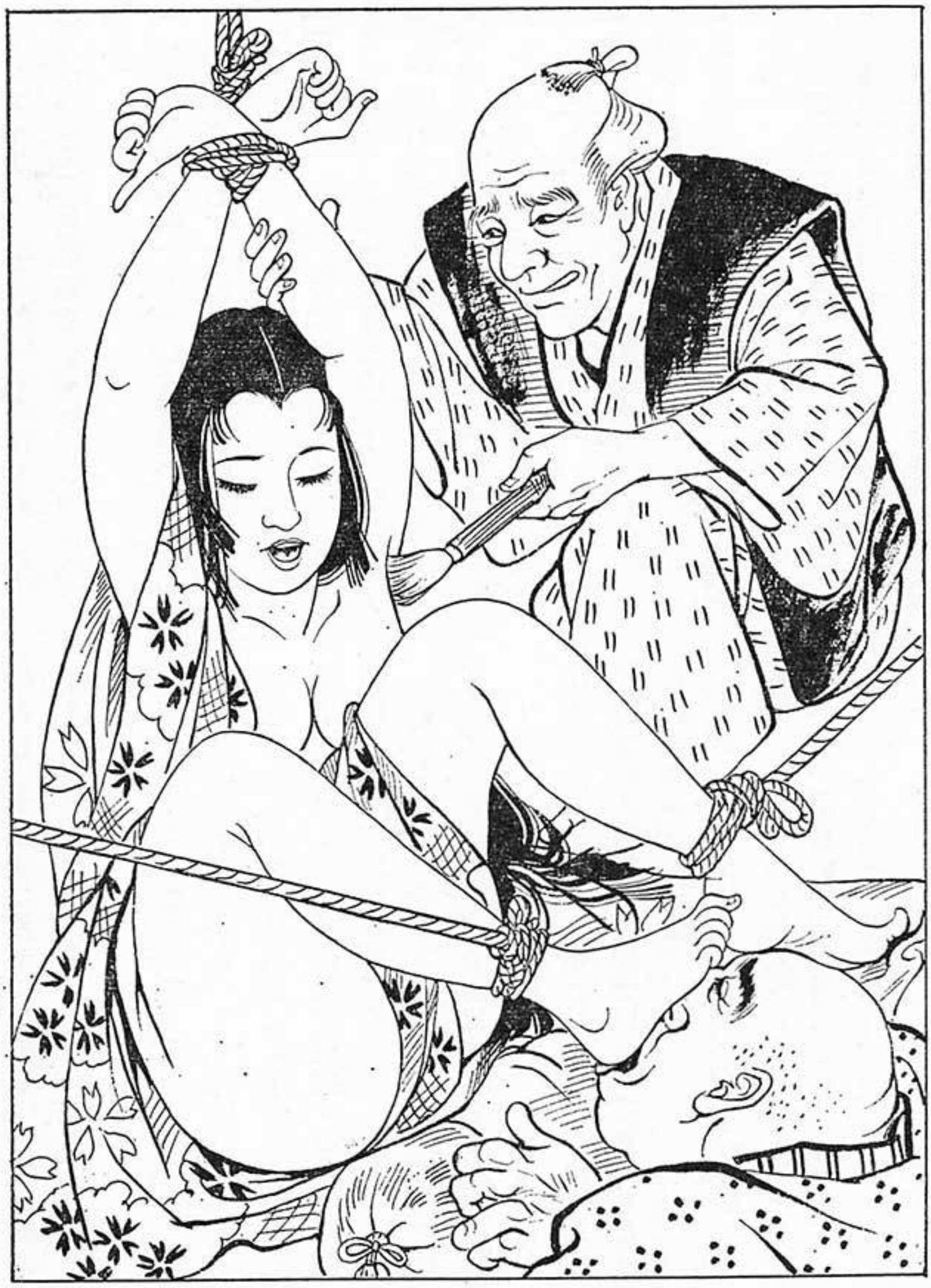
「嘘じゃ、嘘じゃ。なんで、そのように大嘘をつかれる。この佐渡の耳は、地獄耳」

狐のような目で見つめられた雅子は、高く吊りあげられている右脚をふるわせて目を閉じた。蒼白い静脈が一条、琥珀のように燦めく太腿に浮き上がり、ただ一つで支えている左脚の膝が、ガクガクッと音をたてて、ふるえた。

その筋肉の動きを、浮世絵師の鳥尾芳年が見逃がそう、はずもない。無言のままで、手にしていた幾本かの筆の中で、とりわけ大きな絵筆を取って、肌を撫ぜたのである。

「キ、キャア……」

狸や豚の毛とは異なり、〝巨象をも斃ぐ〟と云われて、京都は東本願寺を始め全日本の仏閣神社に飾られてある〝おどりなす女の黒髪〟よりも、その筆の穂先は、いっそう艶やかで、秘めやかで、そして、剛い。



その創造者である元禄屋は、これを名付けて〝極楽筆〟――女を極楽に往生させる（悟らせる）ための筆の謂であろうか。さすがは日本中の富財を一身に集める元禄屋の、つけそうな名では、あった。

「どうじゃな、白状いたさぬか。昭吉ごとき男ではあるまい。この蔀たけた裸身を燃えあがらせたのは」

元禄屋から借りうけていた〝極楽筆〟で、芳年が責めはじめたのを見ながら佐渡刑部は七宝鈴をこれみよがしに雅子の鼻先で、振りたててみせた。

「存じませぬ……そ、そのようなこと！」

いくらなんでも自分が悦虐に溺れた瞬間などを、どうして口に出すことができようか。

「お許し下さいませ。そ、それだけは……」

「許さぬのう。芳年、姫は白状する気にさせてほしいそうじゃ。おてつだいして差上げるがよかろう」

「承知つかまつりました」

極楽筆の剛く鋭い尖端が、佐渡の指示を受けて尚いっそうに躍りはじめる。

「ア、アウ。アッ、ア、アッ、アッ、アウ……」

額に、玉のような汗をにじませて雅子は、白い咽喉をのけぞらせつづける。

それは錐で嬲られるのにも似た疼痛で、五体を旋風のようにおしつつみ、虚空に巻きあげ、奈落へと叩きこむ。

「アウウウウ……」

喘ぎが、いつしか鳴咽へと移り変わった。菊亭貴子に較べれば、雅子は被虐反応が、はるかに早い女であった。しかも、すでに孔雀の羽で、さんざんに責めぬかれたあとであ る。こらえようとしても、こらえきれない悦虐の焔が、極楽筆の尖端から、吊りあげられた右足へと、乳房へ、鼻孔へと衝きあげてきて、いくら鎮めようとしても歯の根が、ひと

りでにカチカチと鳴ってしまう。
「お、お許しを、佐渡さま……芳、芳年さん……や、やめて下さいまし……」
ねばねばしていた口の中が、なんだかカラカラに乾いてきて、雅子のあいだで舌を、ひるがえした。
「フッフッフッ。咽が乾いてきたと見えるが水気はひとところに集まるらしいものよのう種彦」
「いかにも、いかにもそうでございまする」
盃の酒をあわててのみほした種彦に、芳年が声をかけた。
「種彦さん、そこのギヤマンの壺をとって下さらんかの、手が離せぬによって」
「こ、これですかい」
チラッと目をやって、（そうだ）と頷いてみせたものの芳年は、片時も極楽筆を、とめようとはしなかった。
「なにをやるつもりじゃな、芳年」
佐渡の問いに、
「勘定吟味役ともあろうおかたが、ご存知ないとは」
無遠慮に云ってのち、
「南蛮紅毛の地にゴムという樹がありますそうな。その樹の幹に傷をつけて液を、とり出しますそうな」
芳年が示した極楽筆は、漆のように黒いはずであった。これが――。
「フッフッフ。ゴムとか申す樹は、拙者、存ぜぬが……」
ニヤッと始めて笑ってみせた芳年は、種彦のさし出す透明なギヤマンの壺――現代風に云えばフラスコであろう――を左手にうけると、
「姫。いかがでござるな。フッフッフッ」
うっすらと瞳をひらいて、縄目から、とび出している自分の乳房ごしに下を見やった雅子は、それこそ全身の血が逆流するような衝撃をうけて、おもわず、
「や、やめて、やめて！　お、おやめなされませ！　やめて！　やめてェ！」
すさまじい叫びと縄がきしみ、悶える間鋤（あいすき）や駒鋤を加えるような真剣さで揮っていった。
錯乱の瞬間とは、これをいうのかも知れない。掛燭が何度か揺らぐあいだに、雅子は、そのけだものじみた絶叫を、高い鳴咽へ、つぃで喘ぎへと移していった。
「ア、アッ、アアア……もう、もう、ほ、ほんとに、お、おやめ……くださりませ」
激しく鳴りひびいていた鈴の音が、次第に低く、ゆるやかになり、ギヤマンの壺をもつ芳年の左手が、やっと、その震えを止めた。
透きとおったそのギヤマンに、かすかに春の霞が、たなびいたとみえたのは、そのときであった。
紅い唇のうちで雅子の舌がのけぞるのが、はっきりと見え、サザンカの小枝から一輪の

花が音もなく青畳の上に舞い散った。

も佐渡も、灼けつくような視線を、雅子から

はなそうとはしなかった。

甘美な告白

「昭吉さんと和吉さんに嬲られたが、種彦さんは、そのうえに、妾の唇を、雅子からと雅子が白状させられたのは、サザンカの花が、今度は雅子の肩に散りかかったときであった。

が、佐渡の狡猾な目は、いっそう細められはしたものの、満足した微笑は、うかんではいない。

「唇を汚されたときが、いちばん恥かしかったと申すのか、日本橋の本宅で、それを取りあげたのう」

人さし指と親指で、珊瑚樹の卵というものの乳首を、もてあそびながら、

「またしても嘘をつかれる。公は嘘をつくものと江戸城中でも噂じゃが、姫にかぎってと思っておったに」

「……嘘では、ございませぬ。昭、昭吉さん……」

あとは言葉にならないまま雅子は、わなわなと身をふるわせるほかは、なかった。

早く、いまの屈辱から逃がれたいと縋るような気味よさそうに見やった種彦は、その心中を見抜いている佐渡には通じなかった。

「芳年。どうじゃ？」

とギヤマンの壺をながめ、

「まだまだ不足じゃな。ふたつめの一本、筆をふやしてはどうかな、そこにあるそれを、のう、種彦」

佐渡が目でさししめした、三寸ちかくの穂をもった、大きな絵筆であった。

「どうやら馬の毛と見たが、どうじゃ」

「これはお目が高い。まさしく駿馬の尾よりつくりましたるもの」

芳年が答えるより早く、それを取りあげたのは種彦であった。

「雅子姫！　お覚悟、召されい！」

軸の径が一寸くらい、長さ一尺五寸もあろうその筆を、雅子の鼻さきにつきつけた種彦は、ニタニタッと淫らに笑い、

「姫。フッフッフ、新手（あらて）の強兵をひきつれて参りましたぞ。御覚悟はいかがかの」

「た、たね、種彦さま……」

あとは言葉にならないまま雅子は、一刻もなと身をふるわせるほか、なかった。

そんな雅子の羞恥を小かさにかかって種彦が責った種彦は、

「どりゃ、芳年さん。私もおてつだいさせてもらいますよ」

両膝立ちの姿で極楽筆を持つ芳年のそばに腰をおとして身がまえると、もうどうしようもないほど馥郁とした沈丁花の匂いが鼻をつく。

「まったく得難い香りですじゃ。練りあわせることは、できますまいかのう」

と、ひとり言のように云い、

「雅子姫！　お覚悟、召されい！」

軸の径が一寸あるということは、穂の部分は、それ以上の一寸二、三分――つまり、四センチをこえようほどの太さであろう。まだ一度も使用されたことのない大筆である。

「ヒ、ヒャアアア……」

極楽筆を錐にたとえれば、これはまさしく抜身の槍であった。

悲鳴をあげてのけぞる雅子の耳に、

――ガチッ……という異様な音がきこえたのは、二本の筆の軸が触れ合ったことを示すのであろうか。

「ゆ、ゆ、ゆるしてェ！」

尻上がりに高くなっていく悲鳴に遠慮するかとおもいのほか、かさにかかって種彦が責

めつけると、芳年とても負けてはいない。
「車懸りの陣形かの。それとも魚鱗の城攻めか鶴翼の責めか」
ほてった顔を左右にふりたて、黒髪を乱して苦悶にのたうつ雅子を眺める佐渡の細い目に、いつしか妖しい嗜虐の炎がメラメラと燃えあがっていた。
「姫。哭くがよい、叫ぶがよい。フッフッフッ、よしよし、もそっと……よい声を挙げてもらおうかの」
不気味な声でいった佐渡は、軸受けのなかからこれまた太目の筆をとりあげると、二人の持つ二本の筆に沿わせ、懐から細い紐をとり出し、三本の筆を揃えざま、その軸のなかほどをキリキリッと括りつけた。そして、
「さあ、持て。それぞれ、自分の筆の軸の端を持つのじゃ」
佐渡の意図のわからぬ二人ではなかった。三本を一束にしてその中央を括り、その括り目を支点にして、三つの軸をおし拡げるとどうなるか——当然、穂先は軸端と同じように押し開かれることになるのは必定であった。
試みて見られるがよい。筆でなくとも箸でも鉛筆でも結構。三本を揃えてその中央を括る、そして、むかし大日本帝国陸軍の兵士がそうしたように「叉銃」（さじゅう）する、つまり床（ゆか）に立てる。銃口、つまり、箸、鉛筆の尖っている部分が、即ち、いま、極楽筆などと三本の筆の穂先にあたる。
そして銃尾——即ち軸のねもとを三人の男が、それぞれ握り、自在に操って責めようというのである。
雅子の乾いた唇からまるで堰をきったように鳴咽がほとばしり出るのも当然と云えた。
が——、
さすがは、雅子であった。
ひとしきり鳴咽を、ほとばしらせたあと、急に、顔をたてなおして三人を見ると、
「佐、佐渡さま……」
ねばねばした声をあげ、ゴクッと生唾をのみこんだのである。
「な、なんだ……」
予想外のよびかけに三人が同時に顔をあげて好奇の視線をあびせるのを、
「お、お、お願い……」
「さよう。姫が、いちばん楽しかったのは、どうしましょう……妾……アッ、アッ」
じれったそうに何度か唇をかんだ雅子の口から、やっと次のような言葉が洩れた。
「さ、さ、猿ぐつわを……手拭いを、口に、お願い、お願いですっ！」
三人が思わず顔を見合わせた。
それは——せめて、あられもない叫びだけは男たちの耳に入れたくない——という、いじらしいまでの女心であった。
だが、しばしの沈黙ののち佐渡の口から出た言葉は、そのせつないまでの女心を一挙に吹きとばしてしまうものであった。
「フッフッフッ、その願い、聞いてやらぬではないが、のう、姫。こちらの条件をのんでくれるかの。それというのは葉室のこと」
「葉、葉室……」
雅子の眉が、ひそんだ。その名は、いまの屈辱をさらに一層、昂めるものではないか。
「さよう。姫が、いちばん楽しかったのは、フッフッフッ、つまり〝恥かしかった〟のは葉室邦行に思うがままに嬲られたときであったろうがの」
自信たっぷりに云った佐渡は、
「白状するのじゃ。いつ、どこで、誰が見て

いるまんまえで、葉室とやらに抱かれたか、またそのときは縛られておったのか、それとも手足を誰かに握られていたのか……ことこまかに白状するのじゃ。さすれば、姫の願いを聞きとどけてやらぬでもないわ」

「ア、アウ……な、なんということを……」

怨めしそうに佐渡を眺めたものの、もう雅子には、抗うだけの気持の余裕はなかった。

芳年と種彦は、ここが好機とばかりに筆の軸をくる、くるっと廻しつづける。

「葉、葉室には、いいえ、葉室さまには……一度……」

自分に横恋慕し、ついには暴力と権力に訴えて犯した男にまで敬語をつけるのは、公卿の姫として育てられた庭訓の悲しいまでのさがであった。

「一度だと。それは一度、逢ったということであろう。一度、逢った。それが五日も六日も逢いづくめということもあるまい」

「そ、そのような……わずか半日でございまする」

「その半日の間に何回、葉室に抱かれた。五回か、十回か」

「ま、まさか……」

雅子の瞳が、うっすらと開いた。そして

「……三回……たしか三回でございました」

その言葉に嘘いつわりはないと思った佐渡は、ほこさきを転じた。

「縛られておったのか」

右手で筆の軸を廻しながら左手で、雅子の乳首を抓みあげるためには、ちょっとばかり種彦が移動する必要があった。

「佐渡さま。私が……」

即座に右に寄った種彦であったが、その左手も、また反対側の乳首を摑んでいた。

「ア、アアア……」

「云え、云うのじゃ。雅子！　縛られておったのか、それとも」

「アッ、アッ……はじめは縛られておりました……のちほど……」

「のちほど、どうした！」

「押えられまして……ア、アウ！」

「誰に、誰に押えられたと申すか」

「利倉屋さま」

「それから！」

「鞭兵衛さまや……昭吉さん、和吉さん」

「ほかにも居ったであろうが！」

「ハ……ハイ。鞭兵衛さまの子分衆が」

雅子は、もう夢うつつであった。それだけに、なんのためらいもなく、白状しつづけるのであった。

「十人以上ものの男たちが見ているなかで葉室に三回も抱かれたというのじゃな」

「ハ……ハイ」

「その時、誰が右手をつかまえておった！」

「……鞭兵衛さま」

「右手はたしかか」

「左手は！」

「最初は昭吉さんでございましたが……あとは、次々と」

「次々と、どうされまして……ア、アッ、アウ……」

「次々と交代なされまして……ア、アッ、アアアアアッ……和吉さん！」

「右脚も押えられておったの」

「ハイ。多分、和吉さんがしっかりと、アウ！」

「鞭兵衛の子分の黒馬さん……」

「ハ、ハイ」

「左脚は！」

「和、和吉……の黒馬か」

二番番頭の和吉が押えている三本の筆は、その括り目を支点に回転させられると、ハズミがついて〝叉銃〟されてしまわろうとするものである。

風車のように、回転している衝撃というものは、筆舌に尽しがたいものがあるというべきだろう。

雅子のうけている衝撃というものは、筆舌に尽しがたいものがあるというべきだろう。

「アウ！　佐、佐渡さま。もう、もうお許し

……イメージギャラリー……『手荒な愛情』……岡　たかし……

子分の黒馬たちは、そなたの、この裸身に、いかような無礼を働いたと申すのじゃ！」

「……」

何度か唇をうごめかせはしたものの、どうしても言葉が見つけ出せないのであろう。次第に白蝋のように頬が、あおざめてくる。

「佐渡さま、あのおりはたしか黒馬たちが」

と、よこから芳年が口を出し、

「元禄屋さまの御命令があったとかで、黒馬たちは、あて馬のような恰好になりまして」

「それで、どうしたと申す、芳年」

「また聞きではございまするが、それぞれに放尿いたしましたとか」

「なんじゃと、放尿」

「はい。五人の子分衆が、それぞれに」

佐渡の顔が、奇妙に歪んだ。

「姫。それはまことか！　あのように無頼な男どもが放尿したと申すのか！」

蒼ざめていた雅子の顔が、かすかに上下に振られたが、それもつかの間、

「ヒ、ヒ、ヒエエエッ！……」

すさまじいばかりの絶叫を、ほとばしらせるのであった。

「ふーむ。こともあろうに、この肌を無頼の男どもの尿で汚されたと申すのか」

を！　ヒ、ヒヒイ……キャアッ！」

耐えきれないような絶叫をあげる雅子に、佐渡は、なおも迫っていく。

「葉室は、ともかくとしても、鞭兵衛の子分たちは、どうであったの」

「いえ！　そ、それは……まだ……」

思わず知らず答えはしたものの、あとは女として到底、口にできることではない。息をのんで、ためらうのを、

「申せ！　フッフッフッ、雅子姫。鞭兵衛の

「……ハ……ハイ……ア、アウ！」

絶叫のあいまを縫って雅子は、とぎれとぎれに、うわずった声をあげた。

「ふむ、なるほどのう。しかし、姫。青畳の上で、大の字なりに手足を押えつけられて、一人ずつが放尿したとすると、さぞかし濡れたであろうな」

「それはもう、濡れたの濡れないの」

馬尾筆をあやつりながら種彦が、雅子のかわりに、

「青畳二枚が、もうくちゃくちゃに濡れましたそうにございまする。そのうち、姫、自身も粗相したとか」

「ほう、それはそれは。姫、どうじゃ。種彦は、姫も放尿したと申しておるが本当かの」

かすかに開かれた雅子の瞳は、どんよりとくもっていた。

「まことか、どうじゃな」

「……佐……渡……さま……」

あとは、ふくよかな、あごをたてに振ってみせると、

「ど、どうか……猿、猿ぐつわをお、お願い……」

「もうひとつ訊ねたいのじゃが、そのあとはいかがいたした。汚された体を洗いきよめねばなるまい。誰が、どのようにして」

「ア、アウ……佐渡さま……」

雅子が悲鳴をあげたとき、佐渡がギヤマンの壺をとりあげた。

「佐渡さま。沈丁花の精のように匂っておりまする」

芳年が鼻を、ひくひくさせた。

「老中領田殿に云わせると百薬の長、長寿の秘薬じゃそうじゃ」

「フッフッフッ……ニヤッと笑った種彦は、瑠璃色唐桟の着物の裾をはねあげると、ずるずると越中褌を、

その、まだ昨夜の新吉原の女郎の匂いが残っている褌を嗅ひきずり出した。

「ヘッヘッヘッヘッ……」

てれかくしのように笑い、

「こんなものでもよろしうございましょうかねえ、雅子姫」

と顔の前で、ひらひらさせてから、

「なんなら噛まなくてもよいのですよ。そのほうが、たっぷりなまみの声が楽しめるというものですからね」

そう言っているまも、三本の筆は、なおも回転をつづけている。

「ア、アウ！……お、お願い……たねひこさまァ！　早く……なさって、猿ぐつわをしていかがいたした。汚された体を洗いきよめね

頂戴な……」

「これでもよいっておっしゃるんですね、私のフンドシを口のなかに入れてもよいとおっしゃるんですね」

雅子が、やるせなそうに頷くのを見てとった種彦は、

「それでは、お言葉に甘えて、そうれ！」

新しいものではあったが、ところどころに黝いしみのついている木綿の布を、くるくるっと、まるめると、

「佐渡さま。鼻を抓みあげてください」

手の指々が鼻孔を抓みあげると、

「わかった！」

よくとおった鼻筋をすべりおりた佐渡の右が餌を求める緋鯉のように開く。

「よい女というものは、口の中まで、みればみるほど申し分がございませんねえ、姫」

わなく唇のなかへ、種彦がフンドシをグイッと押しこんだのだが、考えてみればフンドシというやつは、猿ぐつわとしてはまことにぴったりのもので、まるめると、ちょうど口の中がいっぱいになるくらいの大きさになり、紐がまた頬から後頭部にかけて二重に回すに応わしい長さである。なんなら今夜、御令閨さまにでも恋人にでも試して——と云っても、いまどきこのクラシック・パンツを利用さなっているお方が少ないかも知れぬ。ならば、日本手拭いに、左右五十センチの強い——強ければ強いほどよい——紐をつけて、いや恋人につけさせられては……。自分が嚙まされることになる猿ぐつわを、自分でつくる姿は、意外と、いじらしいもの。

さて、豊かな頬がくびれるほど強烈に後頭部へかけて締めつけられた紐の上下で、紅い唇が無性になまめかしい風情をただよわせている雅子であったが、

「これで、いくら哭かせてもよいというわけですな、姫」

佐渡がいうとおり、猿ぐつわを嚙まされることを雅子が希望したということは、これから、さんざん哭かされることを観念しきっているということであり、そこまで神妙な心遣いを示してくれている女を哭かせることが出来なかったら、それこそ佐渡たちの男が立たぬというものであろう。

「では、いよいよ七宝鈴を」

種彦のさし出す黄金の鈴をうけた佐渡は、極楽筆を、はじめ三本の筆をようやく退け、

——ジャン、ジャン、ジャン、ジャン！

たかく鈴を鳴りひびかせて雅子の瞳を、ひらかせ、

「ム、ムムムッ——！」

唾液で、じわじわと濡れている猿ぐつわを小気味よさそうに眺めやり、

「そうれ、待ちに待ったる、この瞬間！」

径一寸五分ほどの鈴のまわりに七つの小鈴のついた七宝鈴を見せつけたかと思うと、雅子の呻きが長く尾をひいて、喰いいるように見つめる種彦と芳年の咽がゴクリと音をたてスーッと大きく息が吐かれた。

「とどめをしておこうかの」

満足しきった顔をあげた佐渡は、鈴の環からのびている紫色の太い紐を、こってりと脂肪ののった左太腿へと括りつけていった。

そして、ポンとへそのあたりを軽く叩き、

「姫。お姿は、このままかな。それとも畳の上へ大の字にしてやろうか。どちらじゃな」

どちらともとれるように顔をふる雅子に、

「御自由になされて下さいませ——というのだな。さて、では拙者はこのままでな」

「佐渡さま。私は、やはり畳の上で大の字にしとうございます」

「よかろう、思いどおりにすることじゃ」

はやくも仙台平の袴をぬぎすてる佐渡の肩口へ、ひらひらとサザンカの花が一輪、こぼれ散っていった。

同時に

酒盃をあげる佐渡刑部の顔は、いかにも溜飲をさげたというふうに、はればれとしたものであった。

すぐ眼のまえに、いま征服したばかりの女体が、掛燭の光をあびて、うごめいていた。

種彦と芳年が、佐渡の許しを得るなり、片脚吊りの縛りから雅子を解放し、仰向けに大の字なりに、してしまったのである。

両足首に縄をまいて八の字形にひらいて牢格子に結びつけ、手のほうは左右にのばして芳年が押えつける。

「女というものは、とうてい一人の男では満足できないもの、五人の男が同時に仕掛けなければ、まことの悦楽を感じないもの、と元禄屋が、つねづね申しておるが、まさしく、そのとおりじゃの」

猿ぐつわを噛まされた豊頬は歪んでいたが雅子の閉ざされた瞼の具合、睫毛のふるえを眺めながら、

「何人かで同時に責めてもらってこそ被虐感も、ひとしおと申すもの。フッフッフ、一人の男では、とても手が及ばぬ。五人とは申さいでも最少限、三人は必要じゃろうてのう」

盃をおいた手が、妖しく波立っている乳房をなぶると、両手を押えている芳年は桜色にそまった耳朶から頬、肩さきへと熱っぽく舌さきを、あてがっていく。

雅子は、もう夢うつつのなかにいた。

公卿の娘だという誇りも忘れ、三人の男にむんむんと、なたちこめる沈丁花の香りのなかで、三人の男たちが、ギヤマンの壺をかたむけ、まるで女王蜂の巣から採った甘い蜜のように舐めはじめたのは、それからさらに二刻もたったころであった。

それは、なにものにもまさる、快さであり、すべては、ぴったりと雨戸を閉ざした部屋の中でのこと。もう陽は、とっくに西に傾いていることであろう。

雅子が、いかに恍惚の境地にあるのかは、その西陽をあびて、気の早い江戸ッ子たちは門松や竹しめ、橙、海老と、新玉の歳を迎える準備に愛宕権現の市に集まり、つく羽や凧、破魔を求めて浅草観世音の歳の市へと家族うち揃って三々五々と群れつどっていた。

○　○　○

老中・領田下野の邸で、豊太閤の遺した五夜のロザリオの謎を元禄屋が解くことのできたのは、それから間もなくのことであった。

――（つづく）――

「や、や、止めないで……お願い！」

と熱い吐息とともに嘆願したことからも推察できた。

掛燭のあかりをうけて琥珀色に輝く太腿を

「命預けます」の完結に寄せて……

春子曼陀羅

柴利好

（写真は故伊藤晴雨撮影のもの）

——（1）——

拙作「命預けます」も、八月号を以て漸く完結した。昨年九月号以来、ほぼ一カ年にわたる編集子ならびに読者各位のご高庇に、心から深甚なる感謝を捧げる。そしてこれを機会に本編のヒロイン「春子」を中心として、若干の後記めいた述懐を試み、長らくのご愛顧に対する謝辞に代えたいと思う。

本編「命預けます」は、緊縛と言うSM行為を横糸とし、偽りのない夫婦の情愛を縦糸として、編んだつもりである。物語の内容は今更述べるまでもあるまいが、これを一言にして尽せば、緊縛を通じて営まれる理想的奴隷妻春子の被虐の生活が、その全てである。

実に「春子」こそは、私が観念上理想化した奴隷妻の概念の全容を、一人格として凝集

させた女性像である。かねがね私は「女は縛られた姿が、一番美しい」と信ずるが故に、「命預けます」において「縛られるために生まれて来た女」として一人の女性、「春子」を創造したのであった。そして彼女に、深い愛情と信頼とによって結ばれた夫に、献身的に奉仕する理想的な奴隷妻の姿を与え、なお一層、厳しい緊縛を通じて、真性のマゾヒスチンに、育て上げたのである。

しかも作中の春子は連日、縛られ続ける被虐の生活の中に心身共に喜悦を覚え、幸福を感ずる奴隷妻として完成しながらも、一方では縄目を離れた妻としての正常な暮しの中でさえも、非の打ちどころのない貞女として、夫への至誠の限りを尽くす従順可憐な女なのである。

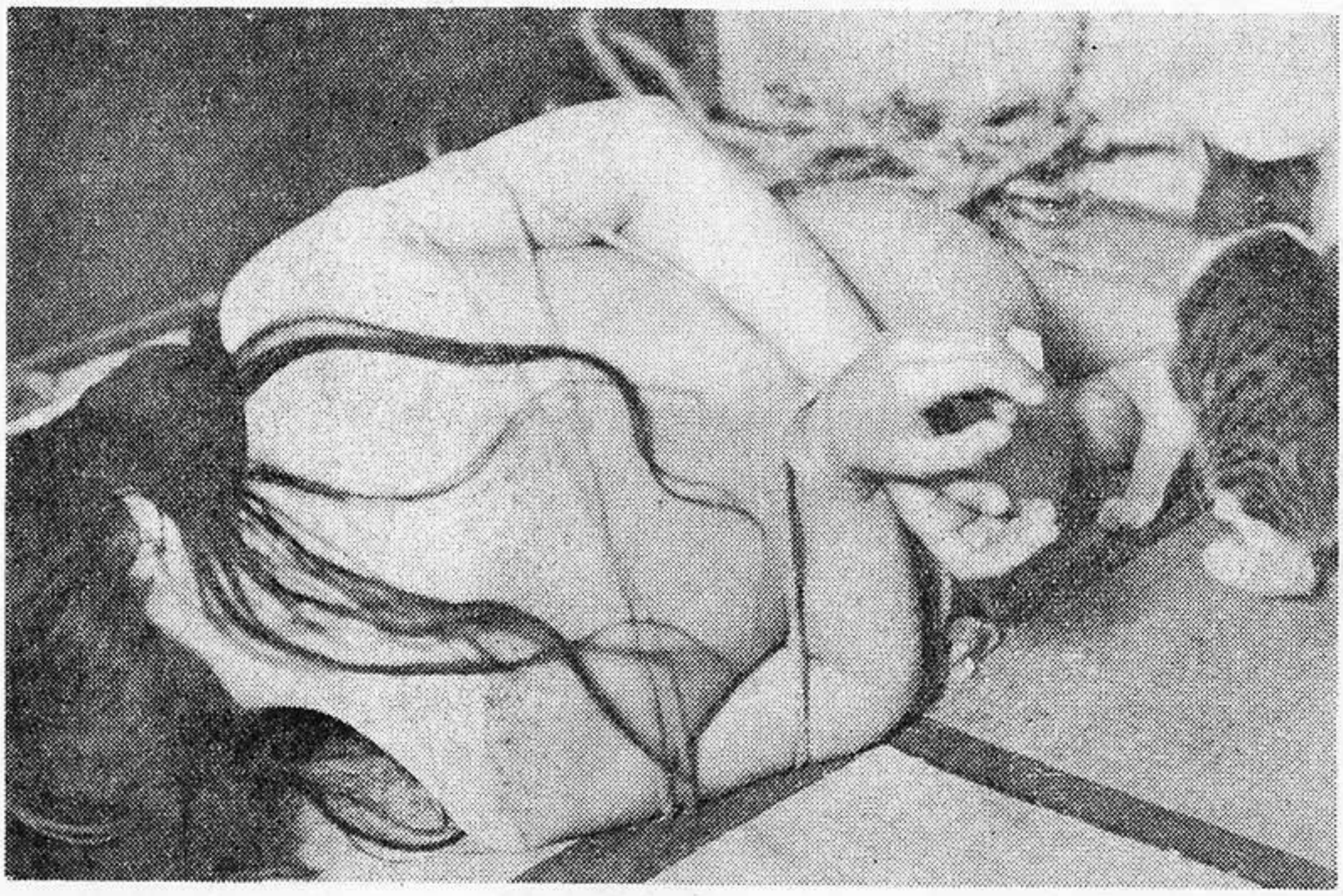
さて、この春子が、何故このようなM性を持つに至ったかに必然性を持たせるために、私は宿命的な生母からのM性遺伝を、その根本として掲げた。つまり、まずこれによって彼女の体内に、逃がれようもないM性の種子を植え付けたのである。続いて、そのM性をさらに拡大強化し、如何なる虐待にも耐え貫くに必要な精神的、肉体的試練を課す手段として、無慈悲にも三つの悲惨な境遇を彼女に負わせた。すなわち「継子虐め」「曲馬団」「魔窟」と言う三種の苛酷な被虐環境を用意し、年を追うて順次、彼女をこれらの被虐の渦に落とし入れて行ったのである。

この被虐の三態について、私は、十数年も以前の本誌上に「へなぶり」と題する小文で虐待の代表的パターンとして述べたことがあるのだが、古くからの読者の中には、あるいは、ご記憶の方もあろう。

——(2)——

このようにして作り上げた春子は、私にとって理想的な奴隷妻であるとともに、他面ではその姿の中に、私がもしも女であったならば、彼女のような被虐に生きる女性でありたいと言う仄かな願望が潜んでいることを卒直に告白しよう。すなわち、春子こそ私の理想的奴隷妻であると同時に、私自身の理想像でもあったのである。

したがって作中の春子の良き夫新吉は、奴隷妻所有者としての私の姿なのであり、そして狂



言回し役を勤めた浩介は、このような夫婦を親友として持ち、ともにSMPに興じ合いたいと願う、私の心の顕われでもあった。これを要するに、作中で春子、新吉、浩介として三様に描き分けた主要人物は、何れも私の心中に棲みついたSM嗜好が分極象徴化された姿に外ならない。

ところで、私はこの作品の結末を、初めは春子の悲劇的な死で終わらせようと考えていた。すなわち彼女は三角関係の苦しみに耐え兼ねて、進んで「死の折檻」を求め、自らの生命を絶つ哀話として構想していた。そうすることが、この作品の終幕としては本筋であったかも知れない。

しかしながら、筆を進めて行くに連れ、私はこの春子と言う女が可愛くて仕方がなくなってしまった。折角これ程までに苦労させ、育て上げた可憐な理想妻を、このまま亡きものにするには忍びなくなって来たのである。それがために、最後に門川医師を登場させることにした。そして、一命をとりとめさせた春子を、夫新吉とともに果てしない流転の旅に出させたのである。

彼女のSMショーの舞台が、いつまで続けられるものか、肉体的限界はわからない。けれども、とに角、この世の中の何処かで、二人が愛し合いながら、いつまでも楽しく生き続けて行って欲しかったのである。そうでもないと春子があまりにも可哀想で堪まらなかったのである。親愛なる諸賢には、この私の感傷的なわがままを許していただけるだろうと思う。「それで良かったんだよ！」と、きっと納得して下さることと信ずる。

この「門川医師」を出現させたのは、SMPに際しての災害防止上の配慮は、現実問題としても非常に重要だと信じるからである。話が個人的になって甚だご迷惑かも知れないが、私が秘かに尊敬する山本武男氏は、その手記の中で、富子夫人が急性盲腸のために、「鎖パンティ」の秘密が病院で露見してしまった経緯を述べておられる。この手記を拝見した当時、私は早速、SMに際しての、こうした緊急事態に備えて、あらかじめ医師の

特定をなさるようにと、ご提案申し上げたことがあった。すなわち、作中の新吉の心配に対する浩介の提案が、そのまま当て嵌まる。これは単にフィクション上の問題のみに止まらず、高度なSMに耽ける場合に不可欠な事柄として、ゆるがせに出来ない当然の配慮だと思う。

――（3）――

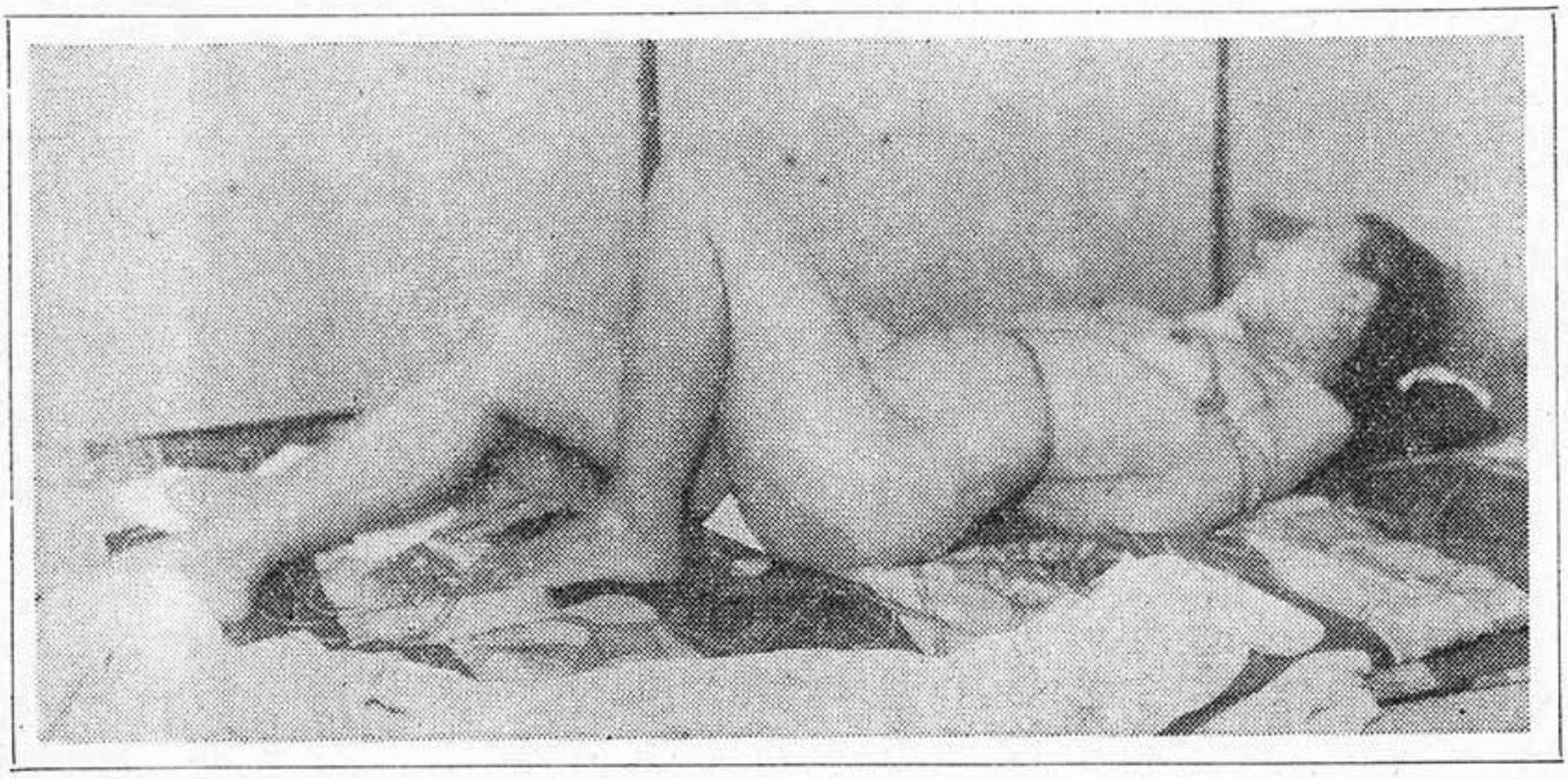
そもそも、小説の中でヒロインの容姿、とくに容貌を適確に表現するのは、なかなか難しい。春子が生来のマゾヒスチンであることを、その容貌描写の中に具現するために、私は、まず眼が大きいこと。その他の顔の造作が、万事小作りなことの二点を挙げた。そして、これらを、より明白に印象づけたいがために「夢二描く美人」であると付言した。

それは、この記述によって得られた容貌のイメージが「淋しげで、一見して虐められるタイプ」の女性の一典型であることを説明したかったに過ぎない。とは言え、これは、眼が細く、眼元冷たい被虐性に非ずと言う意味では決してない。

なお、春子の声音（こわね）が、まるで鈴の音のように清らかな美声であったことや、日常の言葉遣い、立居振舞いが、つつましくて控え目であったことなどを強調したのも、皆、私の好みにしたがって、彼女のM性を少しでも余計に表現したいとする意図からなのである。

ところで、この夢二式美女に関して、最近一つの発見をした。しかも、この発見がSMに特に、緊縛に大いに関連のある事柄なのである。竹久夢二が愛した女性は多いが、その中の一人に「お葉」と言う人がいた。このお葉が、なんと伊藤晴雨の情婦なのであった。この女について当の晴雨は「秋田生まれの東北美人系の瓜実顔で高島田に結わせ、縛って写生するには絶対にいい容貌と体格」だったと評している。私は夢二が好んでモデルにした女性が、このようなSM関連者である事実を露知らないままに、そのモデルによって描写された女性像を、SM嗜好のシンボルとして設定していた訳である。

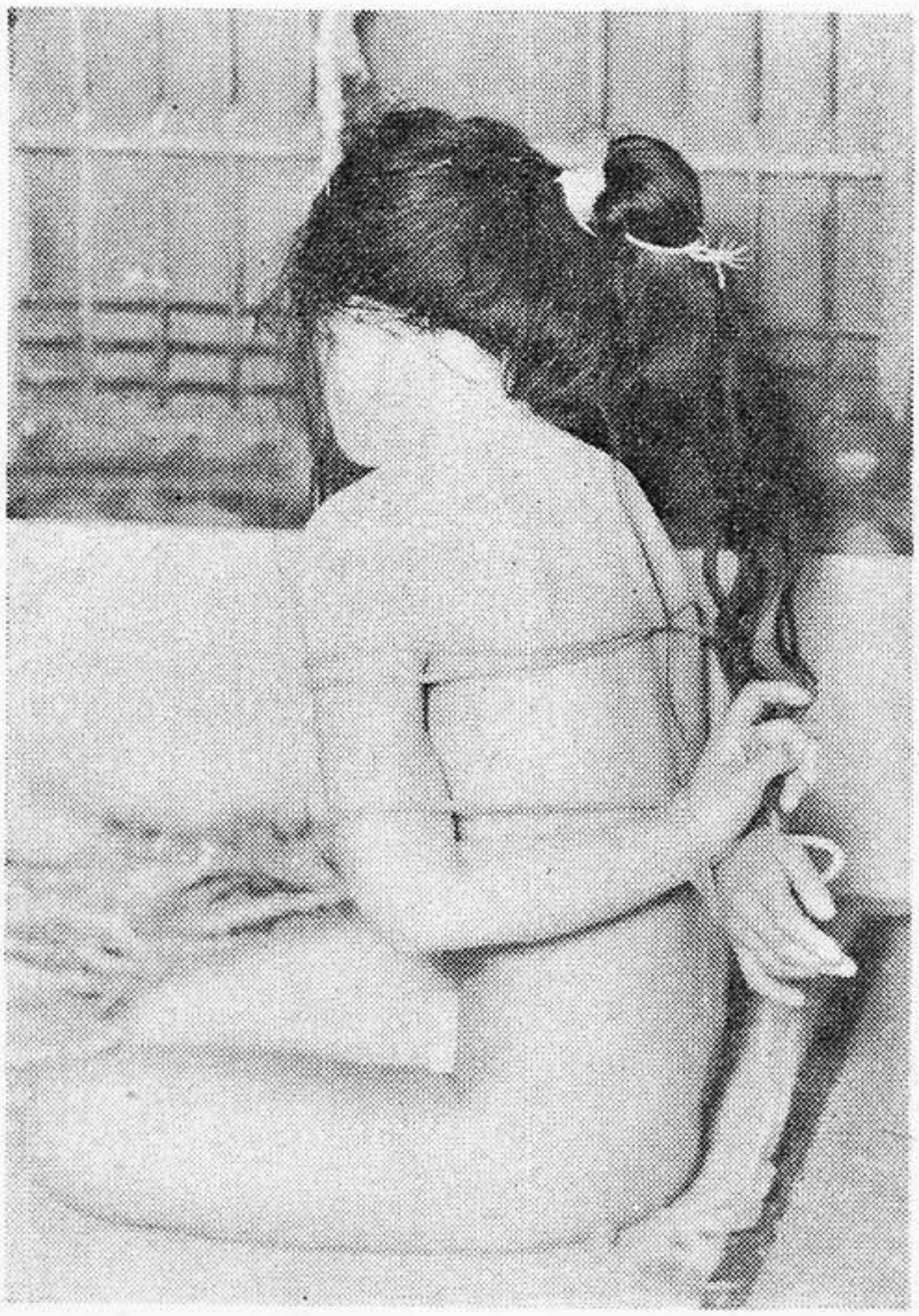
さらにこのお葉は、夢二の別の愛人山田順子と瓜二つであったとも言われる。そして夢二の初めの夫人岸たまきは、上記二人より以上に大きな瞳の持主だったように思われる。彼夢二は、こんな顔立の女性を余程好んでいたのだろう。何にしても、彼女達をモデルとして描かれた女性の容貌上からは、少なくと



もサディスティックな印象は感じられない。

夢二が生涯をかけて心底から純愛した女性は、哀れ二十三才で夭折した笠井房乃であった。その彼女が東京の親元から、当時、京都高台寺に在った夢二家に家出決行の決意を述べた手紙の中で「……追手のこないようにして置いてどんなにでもいじめてね……」と認めているのは大変興味深い。管見では、ここで言われた「いじめる」とは、撲ち叩きする虐待ではなくして、熱烈な肉体的愛撫の謂いと解釈される。けれども、こうした手紙の中で、このような文言を抵抗なく使った女性心理は、本質的には矢張りM性に通じるものがあると考えるのは独断であろうか。

ともあれ、私がこのところで述べたいのはただ、奴隷妻春子の容貌描写に当たって偶々引き合いに出した夢二式美人で本尊が、こともあろうに緊縛絵師晴雨の被縛モデルであったと言う事実である。偶然とは言え、因縁の不思議を痛感せざるを得ない。（夢二に関する記述はすべて細野正信著「竹久夢二」保育社刊カラーブックスに拠った）



（4）

ヒロインの名前を何とつけるか随分、迷ったが、何しろ被虐に明け暮れる女の呼び名なのだから、なるべく淋しくて哀しい形容がふさわしいのではないかと、月並だが、秋、冬、雪、静、などと、淋し気な文字を色々考えてみた。がヒロインを、その果無い生い立ちや逆境にもめげず、純真明朗な性情を失わない可憐な女として描くには、それよりも、かえって明るい名前の方が適当と思われたので、結局「春子」と定めた。この結果は、暗澹たるテーマの展開に際して、「春」と言う明るい字面（じづら）が一つの救いとしての言外の効果をもたらした点で成功だったようだ。

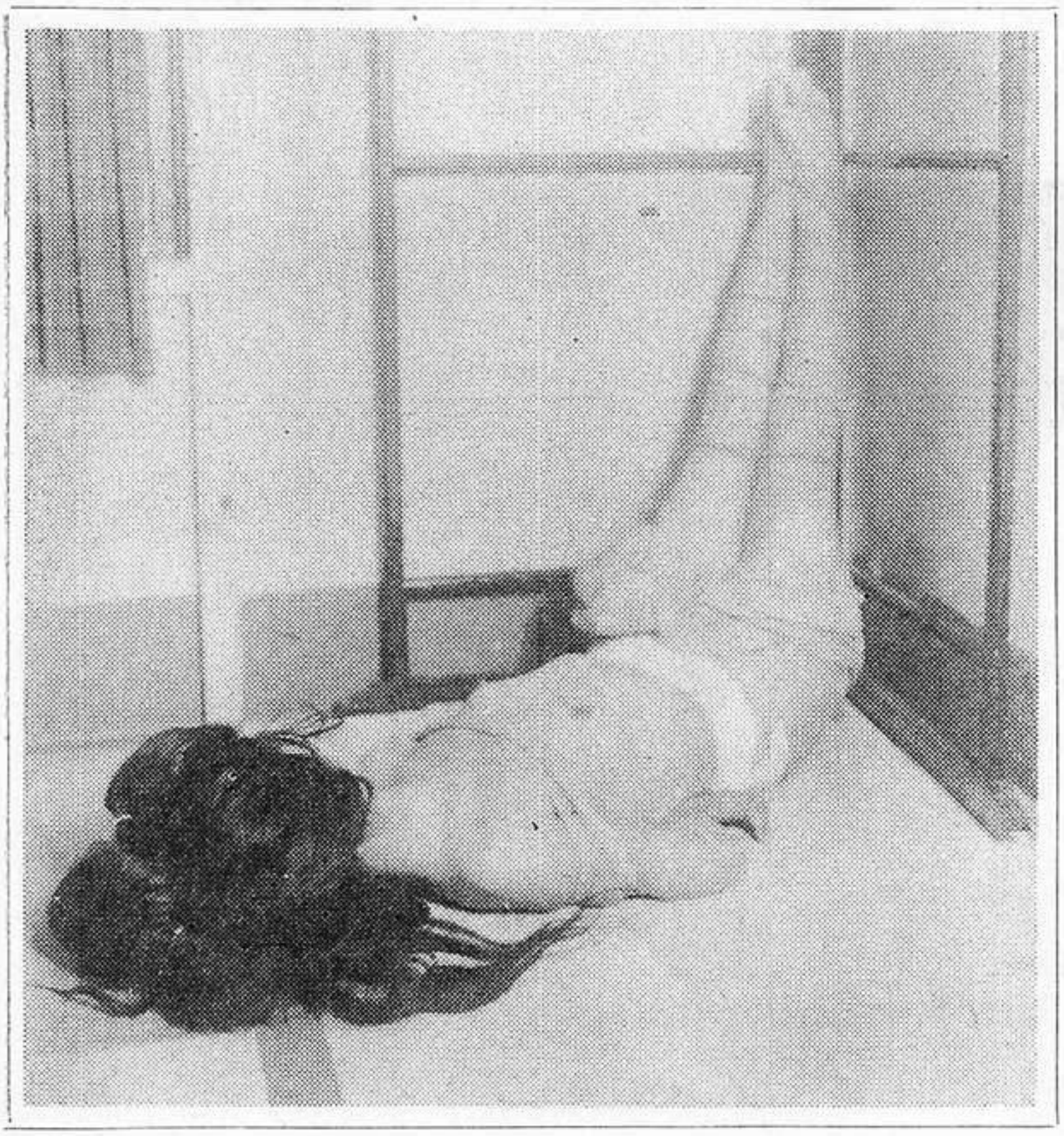
この春子と言う名前が、奴隷妻の手紙に、奴隷妻の代表的人物として例挙されているテーマの展開に際して、「春」と言う明るい字面（じづら）が一つの救いとしての言外の効果をもたらした点で成功だったようだ。

この春子と言う名前が、奴隷妻の現実的志向者である笠井奈保子さんの中で、彼女宛の一ファンの方からの〝春子〟と呼ばれたものと勝手に諒解したからである。これが誤解であれば誠に申し訳ないけれども、春子の生みの親、育ての親である筆者としては、ぜひそう呼んで欲しい。将来必ず、そう呼ばれるようになってもらいたいと

願うものである。

作品の題名は、終章の最後に掲げた石坂まさを氏の傑作演歌の題名「命預けます」をそのまま使わせていただいた。薄幸な運命に弄ばれた一人の女が、どんな底生活の中で、ゆくりなくも巡り合った異性に対して、すべてを捧げ尽して悔いない恋心を表現するのには、この題目が最もふさわしいと考えたからである。しかも石坂氏の作詞の内容そのものが、拙作のヒロイン春子に対して、ピッタリと適合しているように思えたから、なおさらである。正直に言えば、私はこの作品執筆に当って終始、この石坂氏の作品名を、ご覧に暗く哀しいメロディを耳朶の奥底に復誦して慕情を込めて、筆を運んでおったのである。「命預けます」と言うことは、只管に春子への読者諸賢が石坂氏なっただけで、ほとんどに違いなのこの名作を、直ちに連想なさったらすれば、むしろ本いと思う。創作技術上から編で終末に掲げた歌詞、冒頭に録した上で泣き沈む浩介の愁嘆場を描写し、これを導入部として、引き続いて浩介の回想を借りて本筋に這入る形式を使う術もあった。あるいは作品内容とこの演歌そうした方が、初めからとの交流が行なわれるか的効果をもって諸者のイメージの固定化に役立ったことだろう。しかし創作の大筋で、作品の終幕場面を最後まで伏せながら、筋道を追うに連れ次第に局面を展開させつつ、終末に近付くほど逐次、情感を盛り上げて行く正攻法を心掛けたため自然と最後までこの歌詞の引用を差し控える結果になった訳だ。

本編のクライマックスは、申すまでもなく春子の最後の責め場「生き埋め」であることは誰方にもご承知願えるであろう。さらにこれに続くフィナーレとして浩介の愁嘆場を設けることにした。これは彼の心中に湧き起こる春子への無限の恋慕の高まりに今一度、本編最後の盛り上がりを求めたつもりである。こうして佗しい想い出多い居酒屋を最後の舞台と定め、その幕切れにこの「命預けます」の歌声を流すことによって、そこにそこはかとない余韻を残そうと意図したのである。この企ての成否についてのご判断は、諸賢のお心に任せることとしよう。

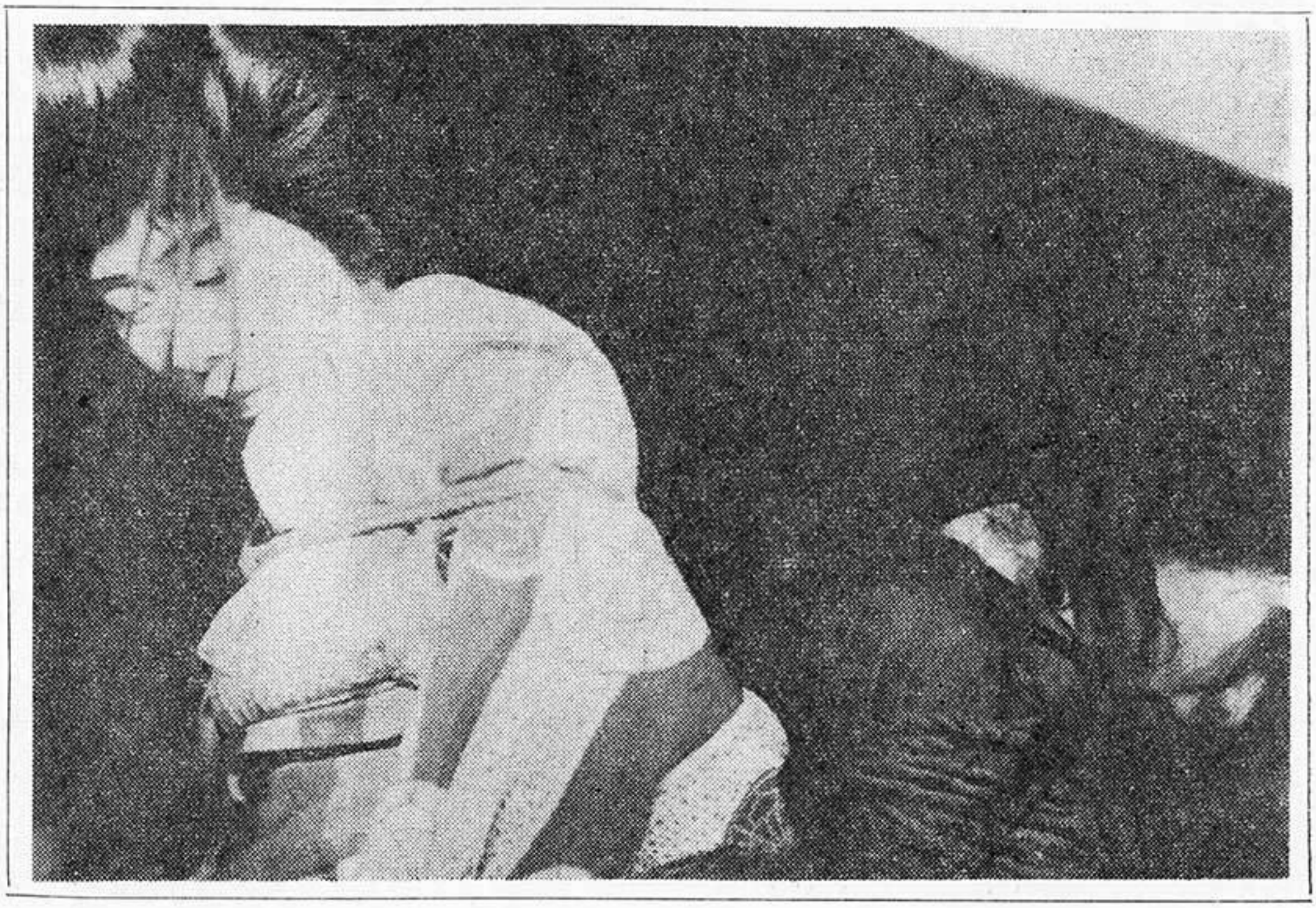


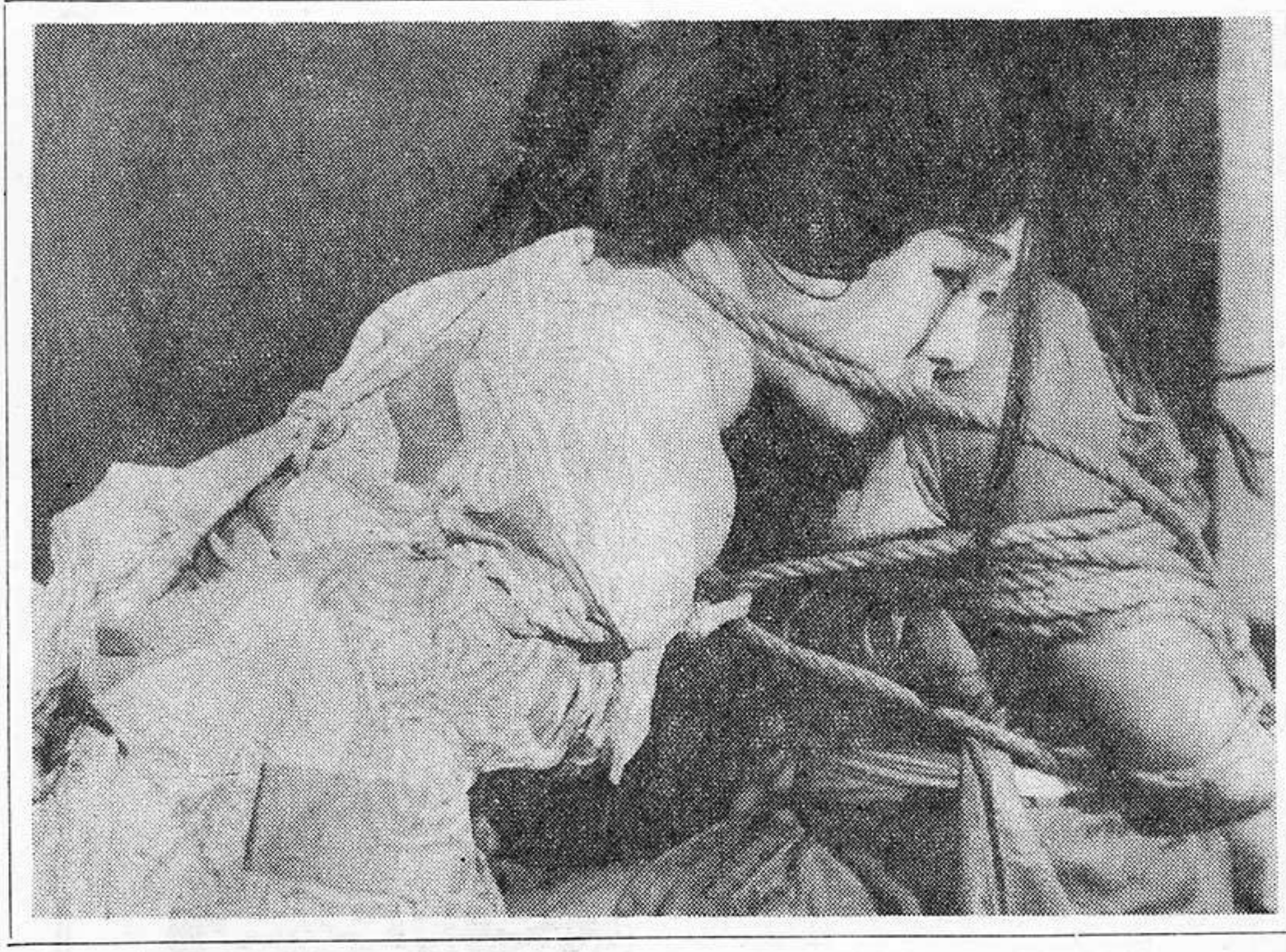
――（5）――

本編は元来、長編読切りとして構想執筆したものである。それ故、節の組立ても文脈も皆、そのような配慮で行なったつもりである。しかしながら、普通連載物に見られるような、毎号ごとの山場は置いていない。それがために、月刊誌上の分割掲載には相当の無理があろ、月刊誌上の分割掲載には相当の無理があったことは否めないように思う。その意味で編集子に毎号、誌面構成上、少なからずご苦労をお掛けしたことを、お詫びしなければならない。それにつけても再度の掲載中断に際しての、格別のお心遣いを、あり難く思う。

一投稿者に過ぎない筆者として、不逞な希望を許されるならば、本編に特別関心を寄せられる向きは、本編を最初の章から中断なく一気呵成に読破していただきたいと願う。そうすれば、全編に鏤めた鮮烈なSMと、至純の愛情の綾なす錯綜した律動感を、各章の行間に一入、強く味得せられ、また別段の興趣をもって、ご観賞いただけるのではないかと愚考する。

長編フィクションよりも、短くても真実味のある種類の物をとの編集子のお言葉は、禿筆菲才を顧みて、いまさらながら慙愧に堪えない。しかもなお、本編が割合に好評であることを伝えて下さった、ご厚情を万謝している。上掲のように笠井さんの一ファンからのお便りでは久保省太氏は「注目していた展開が楽しみだ」と申され、春子を奴隷妻の代表として処遇された。伊東潤一氏は「好きになれそうだ。これからの評して下さった。黒田守氏からは愚生がSMの「本物」であることを、ご指適いただいた。石川実男氏は「真のSMの世界は女性の奴隷化にある」と言う意味で命預けますは楽しい」と述べられ、そして拙稿「奴隷妻覚え書」については全面的に賛意を表しておられる。これらのお言葉の一つ一つが、本当に身に染みて嬉しい。クラリーノのCMではないが、書いて良かったなあと思う。





さらに浜左重喜氏から「楽しく読み次回が待たれる。春子のような女は生涯得られないかも知れないが、SMに理解ある女性を現実に探し当てるまでは、奇クを心の支えとして自分を慰め、人間として強く生きたい」との、ご決意のほど、胸つまる思いで拝誦した。拙作ではあるが、不幸な境涯にあられる兄に、こんなにまで楽しんでいただき、幾分でもお役に立ち得た事実を深く肝銘するとともに、兄のご多幸を衷心、希うものである。

何はさて措いて、本編の制作に際して、私は出来るだけ冷静に、振舞うように心掛けた心算だった。が、それにもかかわらず今にして思えば、あまりにも激しい春子への慕情が、すべてに先行してしまったようだ。

したがって万事が第三者的客観性を欠き、恥かしながら、少なからず自己陶酔に堕した嫌いなしとしない。つまり、あまりにも甘過ぎたと笑われても、それは作者自身の未熟さの然らしめたものだから致し方ない。

作中の奴隷春子は、本編の終結をもって私の手元から去って行った。けれども、彼女は私の心の中に、いつまでも優しく温かい微笑を湛えて美しく生き続けていてくれる。拙作を長らく読み続けて下さった愛読者各位にお かれても、願わくば、この可憐な春子の面影を末永く忘れずに、慈しんでいただきたい、と祈ること切なるものがある。茲に改めて大方のご芳誼に対する御礼を申し述べて筆を擱こう。

――（完）――

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る
団鬼六作『花と蛇』特集第四弾
本誌S42／1よりS44／4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いめに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号『花』
定価五〇〇円（送共）

――おことわり――

本号では〈第六十一回〉となるべきところですが、連載六十回を機会に、先般、送稿途中に〝蒸発〟しました〈第五十一回〉分を再稿、欠番補填を致したいと存じます。次号からは再び〈第六十一回〉より続ける心算ですので、よろしくご支援下さい。（筆者）

尻飾り

美しいイギリスの修道尼、アン・ブラウンと、これも負けず劣らずの美形、カリフォルニアで大農場を経営する百万長者の箱入娘とが、ほぼ一週間かかったといえば、有明の御料（ごりょう）になるまで、どんなに気の遠くなるような検定や手続をふまなくてはならないかが、わかろうというものである。二人の肉体は内外この二人の輓畜は、エミー司令の検査をパスしたので主馬寮に配属されることになった。

二人は、もはや個々の輓畜ではなかった。二人一組みで一体と見做される。一人が病気だからといって、他のウマで替えることは、あり得ないのである。厩舎でも一つ軛につながれ、文字通り起居を共にして暮すことになった。

とはいえ、有明の目に触れるまで、それから、ほぼ一週間かかったといえば、有明の御料馬になるまで、どんなに気の遠くなるような検定や手続をふまなくてはならないかが、わかろうというものである。二人の肉体は内外から徹底的に調べられ、その筋力のギリギリの限界まで追求される。美畜は哭き、且、呻いた。そして、自らを襲い続ける苛酷な運命に戦き、それを呪うのであった。

下級の輓畜なら、馬鹿にされ、荷車でも引っぱっていれば、寧ろ楽だったといえよう。しかし、第一等の御料馬となるからには、比類を絶した調教が要求され、同時に、その水準を常に維持するだけでも、終わりのない努

力を避けることが出来ないのだ。

その日、この輓畜のペアは「白雪」と命名された。実際、二匹の柔肌は新雪の起伏を思わせるような白さだった。肌料で磨きあげられた裸身はあらゆる高価な美燦として輝くばかり。きらめく黄金の馬具飾りを身につけ、金色の御料車を牽いて立つ姿は、思わず、ため息が出るほどの美しさだった。

事実、只今、有明の出御を待つ正階前の広場に居程ぶ貴妃高官たちも、この有明の「新車」に対して、羨ましさというよりも若干の嫉妬の念を抱いていたに違いないのである。

定刻キッチリに、例の白い寛衣を、ひるがえした有明は、身軽に、正階を駈け降りて来た。そして百官が跪坐敬礼するのに軽く会釈しながら、真直に「白雪」のところに歩み寄った。

「よく出来た。すばらしいアンの乳房をギと、いいながら恰好のいい掌に包まれて、ユッと摑む。

「……。」

顔をしかめながら、それを避けることが許されない美畜は、熱い有明の掌に包まれて、幽かに胸を慄わせるのであった。それにつれて、乳首に結びつけられた小鈴が、

「リン、リン、リン」

と涼やかな音色を奏でるのであった。

今日は訓練連隊の若紫騎兵小隊の戦技実演が催されることになっていた。それを見物するために、多くの高位高官たちが招待されたのである。

有明は、この機会に、この希有の美畜を乗り試めして見ようと考えていた。

戦車には、有明に並んで高橋待従が同乗する。彼女の、見事な手綱さばきによって「白雪」は生き返ったかのように跳躍した。

真先に走り出した戦車が走り込むと、そこて、高官たちは、或は轎を急がせて訓練連隊に向かった。

練兵場に、次々と戦車が走り込むと、そこにはもう若紫騎兵小隊が今日は正装（全裸）で愛馬の手綱を取って集結していた。

有明は「白雪」に跨がると、ゆっくりと楕円形のグラウンドを一周した。それは、彼の新しい「乗り物」を参会者に誇示するかのようであったが、実のところ、彼は、その素晴しい乗り心地に満足して、うっすらと汗の滲み出してきた二匹の美獣の、そのあらわなバックを見とれていたにすぎない。有明が停止を命じない以上、高橋淑子も手綱をひくわけには行かなかったのである。

それ程、有明を乗せた戦車は辷るように走った。轅装置は、先ず最初に輓馬が振動を感じるような仕組みになっていたから、そうでなくとも静かに揺らさないように走ることを余儀なくされる筈だったが、それだけでは良い輓畜とは言えない。静かではあるが力強く早くも遅くも手綱さばきの命ずるまま、自由自在に走り廻れることが心要だった。そして今日「白雪」は、それが群を抜いた駿畜であ

第五十回まで＝秘密裸女王国の独裁主有明は、世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、畜従隷従を強いている。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され、巧妙に統制管理されて人女性の苦難は特に甚しい。日本女性だけのアマゾン騎兵は、車架にロックした白人裸女の脊に跨がる。カンヌ映画祭のとき捕獲された女優望月レイ子も大変な苦難の後、漸く訓練隊に配属され、新兵として激しい日課に明け暮れていたが、その愛馬はイギリス娘、かつて幽かな慕情を寄せ合った相手だった。

ることを見事に立証したのである。

ふと、われに帰った有明が合図をすると、高橋淑子は待ち兼ねたように鞭をふるった。ビクッと身を慄わせたアンは、相棒と足並みを合わせながら、スピードを、はやめ、忽ち正面の玉座前に近づく。

軍楽隊が喨喨と吹奏する中を、有明は身軽に大理石の段をあがり、しつらえてあった玉座、第四種女体椅子（裸女六人組）にドッカと腰をかけた。これによって百官は、はじめて夫々の順位位階に定められた位置に坐することができる。

新編成された若紫騎兵小隊、これも美々しく完成した若紫幢旛を授与することが行事の主たる目的であった。

再び、高らかに楽の音が起こって正面の扉から金色に輝く戦車が走り込んできた。

予め生きているうちに鞣され、あの哀れなスきイケニエとして屠殺されたラヴ女の皮膚が、今は丁寧に縁どられて若紫幢旛となってらかに掲げたエミー司命、星てきたのである。

星の戦車も「白雪」ほどではないにしても

この国のナンバー3にふさわしい粧いをこらし、さらにそれを牽く輓畜の方も、今日は健脚を誇るヌビア娘だった。黒檀を磨きあげたように固い光沢を見せる二匹の肌は、噴き出す汗の滴で艶々と濡れている。

ヒラリと馬車を降りた星恵美子は階段をかけ上がって有明の足下に跪き、持参の幢旛を捧げた。

親授式のとき切り落とされた首を除いて、爪先まで注意深く残して切り開いた人間の鞣皮は一メートル五十センチばかり。手足の部分だけは飾り房のように垂れ下がっている。左側から寛衣を落として全裸になった若紫の局、俗名佐瀬直美が進み出し、これも有明の足下に開股跪坐の敬礼をした。

若紫の手に幢旛が正式に授与された。高らかに喇叭の音が響いた。

幢旛を奉持した若紫の局は、階段を下りてグラウンドに立った。

横一列に並んでいた若紫騎兵小隊の最右翼の一人が進み出て若紫の前に立った。

小隊長の小川少尉である。愛畜、大柄なスエーデン娘の手綱をひいている。

若紫の前で足を揃え開股跪坐礼を行なう。

そのままの姿勢で幢旛の旗竿を受ける。小隊長が、それを高く差し上げると、小隊全員が開股跪坐して、

「アーッ」

と、口々に叫んだ。バンザイに相当する軍隊用の掛け声である。

幢旛授与が終了すると、それは正面玉座の直下に安置され、記念のアトラクションがアナウンスされた。

さっきから見物している高官たちが、此所彼所を指さして、クスクス嗤っているのには理由があった。

軍用畜（第45回参照）には、前足に相当する枷車の他は一糸も纏うことは許されていない。かつて女達の頭部を飾っていた金髪、銀髪、はたは黒髪などは無残にも剃りとられてクリクリ坊主にされている。これは鉄のクラス女囚（畜位、物位）に共通のことであったから、これらを人間とは思っていない高官たちにとっては何等、異とする風俗ではない。

今日、特別に変わったことが一つあった。それは軍用畜たちが皆、尻尾をつけていたということである。

レセプション（入国）のとき、鉄のクラス

の女囚は、このように五カ所のヘアを悉く剃りとられるのだが、これらの体毛は肉体番号別に整理して保存されることになっていた。

最近になって、誰のアイデアだか知らないけれども、これでカモジを作って軍用畜の尻飾りを作ることが提唱され、有明の決裁を得たのである。そして、公開の場で着用されたのが今はじめてだったから、大いに参列者の関心を呼んだのである。

皮肉なことだった。かつて自分の頭部を覆い、朝夕、梳り、労わってきた頭髪を、今は自分の尻飾りにさせられているのだ。

カモジには直径二センチ程のステンレス球が糸のように細い鋼鎖で、結びつけられている。この球を支えにして尻尾にしようという着想だった。

したがって補獲時の髪の状態によってカモジの長さや色も様々だった。たとえば、ステーデン王族のプリンセスだった小川小隊長の乗馬は、地上にいたとき、その長い金髪の美しさを、もてはやされていた。今、彼女の尻尾に見えるカモジは、正しく、かつて彼女が誇らしげに風に、なびかせた金色の髪の毛だったのである。それは長く垂れ下がって殆ど踝のあたりまで届いていた。

それを、初めて見せられたとき、昔とは打って変わって、牝獣としてしか扱われない苛酷な運命を辛うじて諦めつつあった、このプリンセスも、さすがにこらえ切れず永久に飛び去ってしまった地上の栄光を想い起こして狂おしく、泣き叫んだという。

小川晶子の命令で、小隊は一せいに乗馬して、思い思いの方向に展開した。

ジャンヌの馬は肉づきのよいカナダ娘だったが、尻の燃えるような赤毛が目立った。小川少尉の馬のような六十騎の若紫小隊が花を散らしたように動きはじめる。

小学生の帽子取り競技を想像されたい。ここでは、しかし帽子の代りに尻尾の争奪戦が展開されるのである。取られた者は列外に出なければならない。

六十、いやウマを加えれば百二十もの、それも選りすぐった美女たちが組んずほぐれつの接戦を繰り返す光景は、まさに、壮観だった。敵に尻を向けたら負けだから、皆、全力をつくして追う立場になろうと疾駆する。斗争本能は男女老若を問わず人間個有のものだという。乗り手の昂奮は、軍用畜にまで伝染して行った。特に尻飾りを奪われる時、ひどく傷む。いや、その屈辱感の方が耐え難いのであろう。斗いは次第に、騎手よりもウマの方にヒートしてゆく様であった。

望月レイ子、F—〇一八号も、甲高い声をあげて必死に勇戦した。彼女の乗馬は、カンヌ映画祭の時からの仲良しのイギリス映画スクリプターのジュリー・シェリバンだったから、まことはイキが合っていた。ジュリーは美しいブロンドの尾をひるがえして走った。

突然、望月の眼前でジャンヌが転倒した。速度がつきすぎているのに無理に回転しようとしたからである。カナダ娘が、ひっくりかえった。投げ出されたジャンヌは打ちどころがわるかったと見えて暫く起き上がれない。

咄嗟に、望月レイ子が飛び降りて、ジャンヌを助け起こした。痛そうに顔を、しかめているものの、ジャンヌも、ようやく気を、とり直して、

「大丈夫よ、ありがとう」

といって、カナダ娘を起こしにかかった。軍用畜には枷車が固定してあるから、一旦、横倒しになると簡単には、起き上がれないのだ。

「ギャーッ」

望月がギョッとして振り返ると、その声はジュリーのもの。誰かが尻尾を奪って行ったらしい。そして、その名残りのように鮮血がしたたり落ちていた。

島狂乱

妙なもので尻尾争奪競走に勝ち残ったのはひっくり返ったジャンヌだった。最後に残った彼女と小川晶子との一騎打ちは素晴しい接戦となった。二人は、それぞれの愛畜をはげまして、グラウンド狭しとばかりに荒れ廻った。

結局は乗馬技術とか、軍用畜の能力では殆ど互角といってもよかったので、あとはスエーデンのプリンセスが余りにも長い尻毛を持っていたことで、差が出てしまったといえよう。スピードをあげると、美しい金髪の束は風に乗って、一メートルもの吹き流しとなった。勿論、ジャンヌが好機を見逃がす筈がなかった。一瞬、猿臂をのばして、その先端をとらえた。指にからめてギュッと引く。小川少尉の跨がる愛畜は哀声をあげて、タタラを踏んだ。

ヒラリとカナダ娘の脊から飛び降りたジャンヌは、

「失礼いたしました」

と小隊長に敬礼して、うしろに回り、たった今、奪いとった黄金色のカモジを、再びプリンセスに返してやった。少しでも、自分が負かした上官の屈辱感を癒そうとする思いやりである。

それを合図にしたようにアマゾン女兵たちはグラウンドの中に出て夫々の愛畜の尻飾りを見つけて、もとに戻しはじめた。出来た順番に再び横一列に並んだ。

ところが、いつまでたってもウロウロしている一騎があった。どうしても自分のウマの尻尾が見つからないのである。

ドーッと洪笑が起こった。

見ると、有明が、それを持っていたのであ

る。さっき、あまりにエキサイトした女兵が尻尾を思い切り、投げとばした。それが、事もあろうに、マスターの足もとに落ちたのである。

それは兎も角、そのウマは地上ではショートカットだったらしく、尻毛の長さは、せいぜい十センチばかりでしかない。それではサマにならないというので、それを真ん中にして、まわりに他の体毛を植えつけてあった。その奇妙なデザインを、有明がシゲシゲと見ていたので、一同が笑い出してしまったというわけだ。

そのアマゾン女兵は、愛畜ともども、はずかしさに全身を真っ赤にして、有明の投げ返した尻尾を頂戴したものである。

有明、その他の貴妃大官を送り出してから伊藤香織連隊長は改めて若紫小隊に訓示してマスターが今日の競技を大変、楽しまれたことを伝え、その代り尻尾を投げつけた兵士の罪は特別に許されたといった。そして全員に褒美として一晩の「島」遊びを許可した。

古兵たちは複雑な表情を見せたけれども、望月レイ子などには、それがどんなことを意味するのかマルッキリ見当がつかなかった。

アマゾン女兵の営所には、島曲輪（しまくるわ）、略して「島」と、呼びならわしている、閉ざされた一画があった。

昔の軍隊には、娼婦が不可欠であった。日本軍が駐屯するところ、必ず女達が群れ集（っど）うようにである。トップの位置が性戯室の一画が出来た。それでも将校などは、わざわざ日本から来た芸者まがいのものを買う機会があったが、兵隊になると大概はピーといって、現地の女しか、買えなかった。それも、列を作って待つという状態で、情緒などあったものではない。

それを模して作ったのが、この島曲輪だった。勿論、娼婦に当るのは男性だったし、その目的も、ともすれば女性的に戻りやすいアマゾンの心理から、男性コンプレックスを吹きとばすことにあった。

ピーに使用されるのは性獣（第25回参照）だったが、男女の生理的相異から、そう連続して役立てるというわけに行かない。

その解決策として考案されたのが、いわゆるラダーコンベヤーシステムだった。最近、東京などの大都市で採用されはじめた駐車塔と殆ど同工異曲だと考えていただきたい。つまり、その自動車の代りに、性獣が縛りつけられるわけである。トップの位置が性戯室の床面と同じ高さになり、最下部に洗滌室が設

けてある。

前に説明したように性獣は四肢を切断されて首と胴体しかないから、コンベヤーに組み込んだ水マットの上に転がされ、首輪をロックされると逃げることはおろか、起き上がることすら、出来なくなってしまう。

タワーは五基、作られていて、一基に夫々八名ずつの性獣が用意されているから、若紫騎兵小隊の六十名全員をダブらずに処理する事は出来なかったが、一人が下へ沈んで行き自動シャワーで洗滌されてラダーを昇り、再び次のアマゾン女兵の前に現われるまでに、ほぼ二時間から三時間はかかるので、休息時間としては充分で、何等、不都合は起こらないのである。

さて、それぞれの愛畜（軍用馬）を綺麗に洗ってやり、騎馬戦での裂傷などの手当を済ませた若紫騎兵小隊の全員は、自分たちもシャワーにかかってリフレッシュをした上で、三三五五、「島」曲輪に集まってきた。

ここは許可された者以外は入場出来ないので、かなり厳重なチェックが行なわれる。もちろん、将校たちは各人で性獣を飼うことも可能であるというので、こんなところへは来ない。あくまでも、下士官と兵のための施設だった。

入口に置いてある便器のようなものに体を圧しつけるようにして坐ると、光電管が自動的に入墨されてある肉体番号を映し出す。

このシステムは、宮殿に出入する場合の検査と同じである。

その肉体番号が、あらかじめ登録してある番号と一致すると、はじめて前方のドアが開く。

一歩、その扉を入ると、その中は完全に自由な雰囲気となる。すなわち、厳重な階級制度が外され、島曲輪の中では全員が平等とされるのだ。それは丁度、徳川時代の遊廓で木戸内は武士も町人も平等に扱われたのと似ていた。

入口で先ずマリファナを渡される。麻薬ぎらいの有明のところで、マリファナが用いられるのは、ここしかない。それは島入りをしたアマゾン女兵たちから、一切の抑制心を解放させることを目的としていた。これによって、女兵たちは羞恥心を喪い、平気で破廉恥な行為にふけることになってしまう。

酒も又、自由である。その上、待ち時間を退屈させないため、あらゆる娯楽設備が、とのっていて、劣情をそそるようなポルノが上映され、流されるミュージックも、いやが上に本能を、そそるような選曲だった。

準備が出来ると、それぞれに渡された呼び出しベルが鳴りはじめる。先着順だった。

望月レイ子が呼ばれたのは、入島してから殆ど一時間以上、経ってからであった。ちなみに曲輪には時計など一切、なかった。そして島を許された女兵は、翌日の点呼、私語封止の解除される八時までに内務班に帰ればよいことになっているから、丁度その一時間前に呼び出されて、リフレッシュすることが要求されるのである。つまり午前七時までは何をしていても、よいということになる。勿論ねむければ寝てしまってもよい。ただ、最低一回だけは性獣とマッチする義務がある。

望月もマリファナに幻惑され、その上、内藤伍長に無理矢理、飲まされたスクリュードライバーで、もうフラフラだった。しかし刺戟された本能だけは檻から放たれた猛獣のように荒れ狂って、飛び上がる程の情感が奔り出るのであった。

彼女はよろめきながら、それでも指図され

た通りN05と書いた扉を開く。

そこには先客がいた。

三メートル四方位の、小部屋である。床が一メートル巾に三等分されていて、上からみると丁度、三色旗のように見える。手前が緑中が白、向こうが赤であった。全部、温水を循環させたソフトなウォーターマットで出来ている。

先客は赤いマットに転がって、もう、すっかり出来上がってしまっているのが、よくわかった。

望月レイ子を認めるやいなや、女は起き上がって、うわずった声で叫んだ。

「はやく、はやくよぅッ」

さんざ望月をシゴいた村上上等兵だった。しかし、今は駄々っ子が何かを、ねだるように望月に手をさしのべている成熟した「女」でしかない。

白いマットの真ん中で、二人はガッチリと抱き合った。はじめての望月レイ子には何が何だか、わからなかったけれども、木村ともの向こうにある牝獣のようだった。

性戯室には一人で入ることは出来ない。必ず補佐役が必要である。本番者が赤のマットの向こうにあるでる出口から出て行ってしまうと補佐役であった者が、今度は本番者になってそちらに移る。白いマットが中央の性獣は自動的に沈んで、次の番の者が補佐役になるまでに、次の性獣と交替してゆく。

かくして、島から島へ、うつろな視野に緑のマットに降りて来た「殿下」の成れの果ての、白い肉体が映った。

「は、はやく」

しどけなく訴える望月レイ子は、もう完全に理性をなくしていた。

――（未完）――

木村とも子が更に激しくのけぞった。

木村とも子に、しがみついて、さっきから切なげな叫喚を洩らしていた望月レイ子が、

「イヤ、イヤ、アア」

と泣きはじめた。歯を抜いてしまった殿下の唇が這い廻りはじめたからである。

セリ上がって来たのは一匹の獣である。

二人とも知る筈もなかったことだが、かつてシェイク・アル・ゼバルの主として勢威をほしいままにしていた「殿下」の成れの果ての性獣に変えられたあった。彼が性機能を失くされたい。

経緯は第25回を参照

「アッ」

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

戦争という、人と人とが殺し合う惨虐行為は、いつの場合でも可弱い女性が、凌辱という最悪の試練を受けた。負ける筈のない日本が敗れ去ったあと、異国の辺境に於いて日本女性の上に、如何なる悲惨な事態が起こったか。これは、その悲しい体験者の綴る一哀話である。

敗戦秘話

北満哀歌

汚辱にまみれた身体検査

鈴鹿晶子

カット・マエダヒオミ

まんじりともしなかった夜が、ようやく、あけてきたようでございます。

薄暗い裸電球が一つ、ポツンと淋しく天井に光っていた地下室にも、朝のうす明りが、どこからともなく忍び寄ってきて、冷え冷えとした湿気を帯びた空気の中にも、なんとなく、ほのぼのとした暖か味が漂ってまいりました。

思えば悪夢のような一夜でございました。

私たちは着ていた物をすべて脱がされ、荒縄で後手に縛り上げられたまま地下室へ投げ込まれて一夜を過ごしたのでございます。

夏とはいえ、北満の夜は急激に冷え込みます。しかも、地下室は壁も床もコンクリートで造りでございますので、部屋の中は、まるで初冬のような冷え方でございました。

着る物どころか、体をかくすタオル一枚さえもない私たちは、不自由な体を寄せ合い、お互いの肌の温(ぬく)もりで、寒さを防ぎあったのでございます。

それだけではございません。

夜に入ると、ロシア兵が身をよじって嫌がる山口夫人と宇都宮夫人を、無理矢理、引っ張ってまいりました。

夜中になって戻ってきたお二人は、本当に精根つき果ててしまったという、それはそれは、見るに忍びない程のひどい疲労ぶりで、まるで死んだ者のようなありさまでございました。二人を連れ帰って来たロシア兵は、あたかも重い鉛の人形を引きずってくるようにズルズルと、地下室へ降りる階段の途中から突き放したのでございます。

お二人は、しばらく階段の下で、うずくまり泣きじゃくっておられましたが、立って歩く力さえ奪われてしまったのでしょう。這いはじめた赤ん坊のようにヨタヨタと、いざりながら、私たちの所へ、にじり寄ってこられたのでございます。

どんなにか、ひどい凌辱かしめが行われたのでございましょう。つぶらな瞳を上げされず、ただ苦痛を訴える噛み殺したような呻き声を、一晩中もらしていらっしゃったのでございます。そんなお二人に対して、私たちは慰める言葉も、みつかりませんでした。

「奥さま、ずい分と冷え込んでまいりましたわ。ずっと、お寄りになりませんこと」

体を寄せ合って、肌の温(ぬく)もりを、わけ合うのが、精一杯の慰めの言葉でございました。

女中のお八重さんも、呼び出されて連れて行かれましたが、彼女はまだ帰ってきてはおりません。夜を徹しての凌辱を受けているのでしょうか。

〝私も、いつかは呼び出されるのだわ〟

そんな事を考えると、にかりたてられて、眠る気持がいいですせんでした。トロトロとまどろんだだけでございまして甘い吐息やお晶(あき)子お姉さま。圭子、体に滲み込んでお腹(なか)とお腹、太腿と太腿と「圭ちゃん。晶子、お互いの肌の温もりが快変、暖かいのよう。のでしょうか。「まあ、そう。これでどぉ?」

圭子ちゃんは、可愛いい、とても温かくて押しつけてくるりがとう。とっての吐く、生温かな圭子ちゃんの吐く、生温かたまらなく愛(いと)しくなり、つぼみのような唇に、ソッと口づけをしたのでございました。

「ウッ」

一瞬、圭子ちゃんは、とまどったようすでしたけれど、私が、唇を重ねてまいりますと、「圭子ちゃん。晶子、貴女が大好きよ」

と、もう一度頬を上気させながら、彼女は、ポッと「私もよ、お姉さま……」

に覆いかぶさるように体を寄せてきたのでございます。向うから強く吸ってきたのでございます。

二人の胸と胸、お腹とお腹、太腿と太腿とがピッタリと合い、お互いの肌の温もりが快く伝わり合いました。

「圭子ちゃん、これでどぉ?」

「お姉さま、ありがとう。とっても温かくて気持がいいですわ」

私にとってもまいるのでございました。

体に滲み込んで「圭ちゃん。晶子だって、貴女のお蔭で、大変、暖かいのよう。

「まあ、そう。うれしいわァ」

圭子ちゃんは弾んだ声を挙げ、一層、体を押しつけてくるのでございます。私は、そんな圭子ちゃんがたまらなく愛(いと)しくなり、つぼみのような唇に、ソッと口づけをしたのでございました。

「ウッ」

一瞬、圭子ちゃんは、とまどったようすでしたけれど、私が、唇を重ねてまいりますと、「圭子ちゃん。晶子、貴女が大好きよ」

と、もう一度頬を上気させながら、彼女は、ポッと「私もよ、お姉さま……」

に覆いかぶさるように体を寄せてきたのでございます。向うから強く吸ってきたのでございます。

「香川先生、お腹の赤ちゃんは、大丈夫でしょうかしら？」

宇都宮夫人が消え入りそうな声で、弱々しく訊ねました。

「奥様は六カ月でございましたわねえ」

「ええ」

「お体を冷やすのは、あまりよくないことなのですけれど……。でも、何分、夏ですのでねえ、心配はいらないと思いますわ」

「いいえ、それだけではないのです……」

宇都宮夫人は声を詰まらせ、しばらく絶句しておられました。

「あの、昨夜のことが……」

恥かしさに打ちひしがれたように、言われたのでございます。

「あ、あ、それで……昨夜は……どうで、ございましたの？」

「はい、それは、もう、恐ろしいことの連続で、まったく、この世の地獄のようでございました。何人もの男たちが……私の体にむさぼりつき……休みなく……お薬や……色々なお道具で……激しく責めたてるものでございますから、もうクタクタに疲れ果ててしまいましたの」

「まあ、お薬だけでなく、お道具までも使ってですの？」

「ええ、それはもう、色々なものがございましたので声が、こんなに涸れてしまって……」

そういえば宇都宮夫人のお声は、いつもの気で激しく動くものなど……」

お道具といいましても、私には全然、何のことか見当もつきませんが、お薬という話をきいて、昨日の先生が、すさまじく取り乱しになられた、お姿を思い浮かべました。

お薬だけで、あれだけ激しい狼狽ぶりを見せるのですもの、その上に、お道具を使って責めたてるのだなんて、どんなにか、ひどい折檻であったのでございましょうか。

「それも、前だけじゃございませんのよ」

「前だけじゃないって……？」

「後も責めたてられましたの」

「後って？　あの、アヌスのことですの？」

「ええ」

「まあ、お可哀そうに」

このお話も、私には余り詳しい事情はわかりませんが、看護婦という仕事の性質から、アヌスという言葉が体の、どの部分を指すのかは、わかります。

「もう、おしまいの頃には、どこをどう悪戯（いたずら）されているのか、わからないほどでございましたの。自分の体が自分でないようになってしまいましてね。恥かしい声を挙げ通しでしたので声が、こんなに涸れてしまって……」

そういえば宇都宮夫人のお声は、いつもの気で激しく動くものとは異なり、風邪を美しい響きをもったものなど……」

お道具といいましても、私には全然、何のことか見当もつきませんが、お薬という話をきいて、昨日の先生が、すさまじく取り乱しでございますのよ」

一緒に連れて行かれた山口夫人が、横から口を、はさみましたが、それは滅茶苦茶な、いたぶせるのですもの、その上に、お道具を使って「あんな恥かしい思いをしたことは、今まで一度だってございませんわ。女は、愛する人り方でしたの。私と宇都宮の奥様とを並べておいて、皆の前で、思いっきり責め上げるのですもの……。本当にロシア兵って、噂通りの野蛮な男たちですわね」

「全く、噂通りの野獣ですわね」

先生も昨日の出来事を思い出されたのでございましょう。大きく頷かれて、溜息をつかれたのでございます。

「私なんか、浣腸までされたのですのよ」

「えっ、浣腸ですって？　浣腸って、どういうことですの？」

「おわかりにならないのも、無理ございませ

んわ。常識では考えられないことですもの。浣腸をして、いじめるのですのよ」

「李さんったら、皆の前で大きな浣腸器を持ち出してきて、お腹がパンパンにふくれ上がるほど、液を注入するんですのよ。そして出来るだけ我慢させられますの。その苦しいこととったら、まるで、お腹の中が煮えたぎるようで、生きた心地もしませんでしたわ」

「まあ、そんなに、ひどいことをされたのですか……」

ございますの。浣腸器だったら、すぐ手近にありますから……」

「その上、御不浄なんか、使わせてくれませんのよ」

「じゃあ、それも皆の目の前で……？」

「そうなの。それが一度だけじゃないんですのよ。五回も続けざまにされて、本当に全身の力が抜けきってしまいましたわ」

「いろいろと、大変でしたのねえ」

「もう、思い出すのも嫌でございますわ。それより先生、お腹の赤ちゃんは、本当に大丈夫でしょうか」

「そうね、多分、何も障害はないと思いますけれど……」

「こうなった以上、私の体は、もう致し方ございませんが、お腹の赤ちゃんに、もしものことがあったりしては、主人に対して、どう申し開きをしたらよいものか……」

大きな土建会社の社長の若夫人で、普段は荒っぽい土工たちを、顎で使っていた気丈な山口夫人も、泪にむせぶのでございました。

その時、階段のドアが開き、パッと明るい朝の陽光が、さし込んでまいりました。

「皆さん、お早うございます」

女中のお八重さんの顔が見えました。

「オホホホ、仲良く輪になって、楽しそうなことですわね。みんな、上へあがってきなさい。朝の点呼ですよ」

「は、はい」

仕方なく、私たちは、綿のように、くたくたに疲れはてた体を、ひきずるようにして、階段を上りました。

「応接間へ行きなさい」

お八重さんは後から鞭で追いたてます。

応接間には、十人ばかりのロシア将校が集まり、朝からウオッカを飲んでいました。昨日みた、ロシア将校の顔も混じっています。もうお酒がまわったのか、大きなダミ声を張り上げて歌を唄っている将校も、いました。

しかも、手には竹の根で作った細身の鞭を持っているのです。そして、階段の上から、勝ち誇ったような素振りで、私達を見おろしニヤニヤ笑っているのでした。

「お八重さん、朝の点呼って、なんですの」

先生が訊ねられました。すると、どうでしょう、今までとは、まるで違った態度で、私たちに命令するように、語気を荒げて、きめつけるのでした。

「うるさいわねえ。ぐずぐずしてないで、早く上がってくるのよ。いつまでも、モタモタしていると、この鞭が物を言いますわよ」

手にした根竹の鞭を、ヒュウヒュウと、これみよがしに振ってみせるのでした。

「は、はい」

仕方なく、私たちは、綿のように、くたくたに疲れはてた体を、ひきずるようにして、階段を上りました。

「応接間へ行きなさい」

お八重さんは後から鞭で追いたてます。

応接間には、十人ばかりのロシア将校が集まり、朝からウオッカを飲んでいました。昨日みた、ロシア将校の顔も混じっています。もうお酒がまわったのか、大きなダミ声を張り上げて歌を唄っている将校も、いました。

しかも、手には竹の根で作った細身の鞭を持っているのです。そして、階段の上から、勝ち誇ったような素振(そぶ)りで、私達を見おろしていたではありませんか。

「オヤオヤ、皆サン、朝カラ裸デ、オ行儀ノヨイコトデスネ。ハハハハハ……」

今まで隅にかくれるようにしていた李さん

は、私たちの姿を見ると、つかつかと出てきて、いかにも性悪そうに笑いました。

「ソコノ壁ノ前ニ、一列ニ並ビナサイ」

李さんは、マントルピースの前を指さしました。私たちは、おずおずと身を固くして、一列に並びますと、今度は、お八重さんが口を出してきました。

「皆さん、気を付けをするのですよ」

私たちは、悲しい気持で爪先を揃えて姿勢を正しました。

「オホホホ、小学生じゃあるまいし、先生、ここで気を付けといったら、股を大きく開いて前へつき出し、司令官殿に、よく見て戴けるような姿勢をするのですよ」

そう言って、智恵子先生のお尻を、根竹の鞭でピシッピシッと叩くのでございます。

「そ、そんな、はしたない格好なんて……」

「へえー、それ位の事が恥かしくって出来ないっていうの。おかしいわねえ、きのう、ヒイヒイ泣いたり喚いたりしたのは、どこのどなたなんでしょうねえ」

「まあ、お八重さんったら……」

「甘ったれるんじゃないのよッ」

お八重さんの口調が、突然、がらりと変わりました。

「先生ッ、お八重さんって、心安く言うのは止めて貰いたいねえ。もう、昨日までのお八重とは、わけが違うんだ。先生は、ここの捕われの奴隷、私はロシア軍付きの通訳さまなんだからねえ」

そう言って、ピシッと先生のお尻へ、力一杯、鞭を振りおろすのでした。

「私がロシア軍の諜報員だったとは、誰も知らなかっただろうね。もう、戦争はロシア軍が勝ったんだから、これからは、私がみんなの御主人様なんだよ。いいかい。私の言うことをきかないと、これだよ」

ひとりひとり、私たちのむきだしになったお尻を叩いて歩くのです。

「わかってるわねえ、晶子(あきこ)！」

「は、はい」

「お八重だなんて、呼びすてにしたら承知しないからね。お八重様って呼ぶんだよ。山口夫人も、わかってるわね」

「はい、はい。そう、お呼びいたします」

「はばかりながら、このお八重は、若い頃からロシア人相手に、マムシのお八重という名で鳴らしたお姐さんなんだよ。ツベコベぬかすと、ただではおかないから……」

そう言えば、お八重さんは、この街へ来る前は、ハルピンでロシア人相手のいかがわしいお店で働いていたとの専らの噂でしたし、事実、彼女のロシア語は相当なものでした。白系ロシア人の患者さんが見えた時には、通訳をしたりしていましたが、そんな特技を買われて、金で動く汚ない心を見すかされて、スパイになっていたのでございましょう。

「気をつけーいッ」

もう一度、お八重さんが、頓狂な声で号令を掛けました。私たちは慌てて、お八重さんの指示した通りの恥かしい姿勢をとったのでございます。

「こらっ、圭子っ。もう少し大きく股を開くんだっ」

圭子ちゃんの太股を鞭で、つつきます。

「宇都宮夫人、アナタハ一番オ腹ガ張リ出テイルノダカラ、思イキッテ、大キク脚ヲ開キナサイ。下カラスクイ上ゲルヨウニシテ、ウント前へツキ出サナイト、前カラハ、何モ見エナイジャナイカ」

李さんも口を出し、宇都宮夫人のお腹を皮の鞭の柄で叩くのでした。

「そうそう、それでいいのです。さあ、みんな、順番に、自分の名前と年令を、司令官殿に報告するのです。みんなの真前におられる

僕のイメージ画集……『真昼の調教』……室井亜砂路

方が、この街の占領軍の司令官のニコライエフ中佐殿です。じゃあ、先生、皮切りに貴女から先に始めなさい」

「はい、私、香川智恵子でございます。年は二十四才になります」

「カ、ガ、ワ、チ、エ、コ」

ニコライエフ中佐は、たどたどしい口調で口真似をしております。続いて、誰の番だろうと、ためらっておりますと、李さんの鞭が風を切って床を叩きました。

「はい、済みません。私、二十才、鈴鹿晶子でございます」

「伊吹圭子、十八才でございます」

「高松でございます。二十六才です」

「ナンカ月ダッタ。ニンシンシテイル女ハ、ソレモ報告スルノダ」

「はい、妊娠五カ月でございます」

「大坂でございます。二十五才で、現在三カ月でございます」

「山口文子でございます。三十才で、只今、妊娠三カ月でございます」

「宇都宮でございます。二十二才です。妊娠は六カ月でございます」

ニコライエフ司令官は、自己紹介する一人一人の女を、淫らな目付きで覗き込むようにしていましたが、全員が終わった所で、何かお八重さんに尋ねました。

「先生、ひとみちゃんは、今、どこにいるのですの?」

「はい、隣町の女学校の寄宿舎へ入っております」

「いつ、帰ってくるんです」

「……お許し下さい。ひとみちゃんにまで、こんな目に、あわさないで下さい」

「うるさいわねえ。つべこべ言いなさんな」

「オマエハ、私タチニサカラウノカ」
お八重さんと李さんの鞭が同時になって、先生は床に叩き伏せられたのです。
「は、はい、この土曜日に帰ってくることになっております」
お八重さんが、司令官に何やら報告しますと、ロシア将校たちの間に、新たな、ざわめきが起こったのでございます。そのざわめきが終わるのを待つようにして、お八重さんが口を出しました。
「じゃあ、みんなに、ここにいらっしゃる将校の主な方を紹介しておきます。真中におられるのが、さっきも言いました、この町の司令官殿のニコライエフ中佐殿。その右におられるのが、ジューコフビッチ参謀殿。左の方が、ツルゲトロスキー副参謀殿です。尚、いろいろと、みんなのお世話をして下さる方が後に立っているイワンノビスチ軍曹殿です。その他、多勢の方々がいらっしゃいますが、とに角、この病院は将校宿舎に指定されたのです。今日からは、みんなはロシア軍の奴隷なんですよ。ロシアの兵隊さんの言われることとは勿論、李さんや私の言うことに対して、反対は絶対に許しません。もし反対したりすれば、きびしいお仕置があることを覚悟しておくのですよ。いいですわね」
「はい」
「えーと、今からの予定ですが、朝御飯がすんだら、身体検査にかかります。まず、晶子から行なうそうですから、先生と晶子とは、すぐ診察室へ来なさい。他の人は、呼び出しがあるまで、地下室で待っているのです」
「あの……お八重さま」
「なんですか、先生？」
「私たちに、何か、体をかくすものは、いただけないでしょうか」
「甘ったれるんじゃないよ。犬や猫と同じ身分なんです。着物を着ている犬なんかいません」
「では、これからずっと、何もいただけないのでございましょうか」
「当り前よ。これからは、ずっと生まれたままの姿で、生活するのよ。用のない時は荒縄で縛って、どこかへ、つないでおきます。大事な奴隷に逃げられたりしては大損ですからね。李さん、恥かしいところを隠したかったら、荒縄で隠してあげられるわねえ」
「ソウダナ。ゴ希望ナラ、女ノ一番ヤワラカクテ、敏感ナトコロヲ、締メアゲテアゲマショウカ。ドウデスカ、皆サン」
李さんは顧ったお八重さんの肩に手をかけて顔を見合わせ、楽しそうに笑っています。
「オホホ、李さん、それも楽しみですわね。しっかりと縛ってやって頂戴。じゃあ、今から、朝御飯だからね、縄だけは、ほどいてあげましょう」
二人で縄を、ほどきにかかるのでした。

羞恥の身体検査

智恵子先生と私とは、李さんとお八重さんに、挟まれるようにして、診察室へ連れてこられました。
中の様子は、昨日までとは、がらりと変わっていました。巨戸棚に、ぎっしりと詰まっていた医療器具や机などは運び去られ、そのかわり、部屋の真中に、大きなダブルベッドが置いてあり、それを取り囲んで椅子が、いくつも並べてあります。そのほか、何に使うのでしょうか、ベッドの真上の天井からは、鉄の輪が二つ、ぶらさがっております。
司令官をはじめ、多勢の将校たちが、ベッドの周囲に坐って、お酒を瓶ごとラッパ飲みにしたり、煙草の煙を濛々と上げながら、カード遊びに興じていました。

将校たちの間を立ち回って、耳打ちをしながら、何か打ち合わせをしていたお八重さんが、私の方を向いて言いました。

「晶子、お前から身体検査をします。先生は私たちの仕事を手伝うのです。いいですか」

私は、どんなことをされるのかと生きた心地もしませんでした。将校の一人は鞄から紙を出して筆記の用意をしています。もう一人の将校は写真を撮る準備をしだしました。

「晶子、今から、私の訊ねることに、正直に答えるのですよ」

「はい」

「えーと、年は二十才でしたわね」

「はい」

お八重さんが、用紙を持っている将校に通訳しますと将校はカードに記入しています。

「性交の経験は？」

突然、そんな恥かしいことを聞かれたので、私は、胸がドキドキと高鳴り、顔が火のようにほてって返答に窮してしまいました。

「あのう……」

「性交の経験があるのか、ないのか、きいているんですよッ」

「あの……あの……」

「嘘を言っても通用しませんよ。今から、精密な身体検査をするんですから」

私は、その恐ろしい言葉を聞いて、いても立ってもおられない気持でした。実は私、処女ではありませんでした。去年の夏、この町に駐屯していた警備隊の若い技術将校の生駒さんと恋愛をし、すべてを捧げていたのでございます。でも、こんな恥かしいことを、みんなの前で、どうして答えることが出来るでございましょうか。

私は、ただ口ごもったままで、顔を真赤に染めて、うつむいておりました。

「先生ッ、アンタカラ晶子サンニ聞クノデスヨ。ソレガアンタノ仕事デス。ソウシナイトコノ鞭ガアンタノ背中デナリマスヨ」

李さんが鞭を振りあげて、ピュウピュウと空で音を立てました。

「お、お許し下さい。聞きます。聞きます。晶ちゃん、正直に答えて、お願い。そうしないと、又ひどい目にあわされるのよ。きのうの恐ろしかったこと、覚えてるわね」

「先生！……わたし……」

「晶ちゃん、お返事して、お願い。経験はあるの？　それとも、ねえ、どっちなの？　早く教えて……」

「でも、先生……」

「晶ちゃん、あるのでしょ」

「ええ」

私は恥かしさのあまり、消え入るような小さな声でお返事をしてから、思わず両手で顔を掩ってしまいました。

「いつですの？」

「去年の夏……」

「去年の夏なのね。去年っていうと、晶ちゃん、じゃあ相手の方は、あの生駒さんじゃなくって？」

「は……はい……」

「矢張り、そうね。実は先生も、そうじゃないかと思っていたのよ。だって、あの頃の晶ちゃんの、のぼせようたら、普通ではなかったのですもの」

「まあ、先生。私、恥かしくって……」

「お八重さんですかッ」

先生は、つい口をすべらして、お八重さんと言ってしまわれたのでございます。

「何が、お八重さんですかッ」

先生が、あっと気がつかれたときは、すでにおそく、根竹の鞭がピシッピシッと宙に鳴り、先生の白い肌に無惨な、みみず脹れが、二筋三筋と、みるみるうちに、その数を増してゆきました。

「言い方を忘れたのですかッ」
「ヒイーッ。す、すみません、お八重さま。どうか、お許しになって……」
「あれだけ言ってあるのに、私を馬鹿にしないでよ。私を甘く見ると承知しないよ」
お八重さんは尚も、笠にかかって智恵子先生の背に鞭を振りおろします。
「はい、必ず誓いますから、ヒイーッ、どうか、お許しを、ヒイーッ、願います」
髪をふり乱して泣き叫ぶ智恵子先生のお姿を見て、私も黙ってはいられません。
「お八重さま、先生を許してあげて下さい。私、どんなことでもいたしますから……」
私は、お八重さんの腕にとりすがって、お願いいたしました。
「お八重サン。モウ、ソレグライデ、イイデハナイカ。アトノ楽シミニオイテオケバイイデスカ」
李さんの取りなしで、お八重さんの毒舌と鞭は、やっと止まったのでございます。
「フフン、晶子も、なかなか隅におけない女だねえ。まだ、ほんの小娘かと思っていたのに、もう男を知っていたのね。その時は、どんな気持だった？」
「はい、心から彼を愛しておりましたわ」
「ははは、馬鹿だね、そんなことを訊いているんじゃないんだよ。痛かったかい、それとも気持が良かったかいと訊いているのさ」
意地悪い質問をしておいて、蓮っ葉な調子で淫らに笑うのです。私には、とても答えられません。ただ、うつむいているばかりでございました。
「先生ッ、貴女は自分の役目を忘れたの？」
またも、お八重さんの鞭が先生めがけて、まるで生き物のように、肌に容赦なく喰い込んでゆきます。
「ヒイーッ、ああっ、晶子サンハ……」
「でも、先生、わたし……答えて……」
「思い出すのよ。痛かったの？　それとも、嬉しいという気持があったの？」
「……あのう……。少しは嬉しさを覚えましたの」
ど、でも、少しは嬉しさを覚えましたの」
「おほほほ、御馳走さまでございます。まあ、訊問は、それ位でいいでしょう。これからも、何でも素直に答えるのですよ。では、次に計測をしましょうか。先生、晶子の身長や胸囲などを計らせて、立たれまし
「はい、えーと、身長は一メートル五十九センチでございます」
「バスト、ウエスト、ヒップを計るんだ」
「はい、バスト八十六センチ。まあ、晶ちゃん、立派ねえ、八十六センチもあるなんて、羨ましいわ」
「先生だって、お見事ですわ」
「いいえ、私のように、おバアちゃんになってしまっては、駄目なのよ」
「まあ、ご冗談ばっかり……」
「お八重さま、ウエストは五十八センチ、ヒイイ体ダナ、晶子サンハ……」
私の体をヌメヌメと這いまわります。
「李さん、今日は、それ位で我慢しなさい。晶子は、まだ司令官殿さえ、お手にとっていらっしゃらないのですからね。そのうち、たっぷりと楽しませてあげますから……」
「ヒヒヒヒ、楽シミデスナ」
李さんは黄色い歯を醜くむきだして、みだらに含み笑いをするのでした。
「晶子、次は写真を撮ります。最初は、朝の点呼の時のような姿勢をとるのです」
私はもう、恥かしさよりも、鞭が怖ろしく

イメージギャラリー……『除幕式近し』……マエダ・ヒオミ……

て、素直に応じました。

「そうそう、両手は頭の後で組んで……大きく胸をそらしなさい。脚は、もっともっと、大きく開いて。思いきって開くんだ。そして太腿のつけ根を前へつき出すのです。そう、それでいい」

スイッチを入れますと、壁に取りつけられている写真撮影用の強烈なライトが、私の体の隅々までを照らし出します。

大勢の男たちは、野獣のようにギラギラと目を輝かせながら、じっと、見詰めているのでございます。カメラを構えた将校は、私の前後左右から、色々な角度から、何回もシャッターを切っていました。

「次はベッドの上へ仰向けに寝るのです」

私はベッドの上へいざるようにして上り、仰向けに寝て、膝と膝とをぴったりと合わせて、その膝を心持ち立てていました。

「ダメダメ、ソンナニ股ヲツボメルヤツガアルカ。膝ヲ大キク開クノダ。ソシテ、両手デ左右ニ、ヒロゲルノダ。ソコヲ写真ニトルノダカラ……」

李さんが、私の最も恐れていた、いやなことを申します。でも、いくらなんでも、とても、そのような、はしたない真似は、私にはできるものではございません。立てていた膝を揺すって、もじもじしておりました。

しばらく、ためらっておりますと、智恵子先生が私のベッドに近寄ってこられ、跪いて私の耳元で、ささやかれました。

「晶(あき)ちゃん、私たちは、もう人間の感情を棄てしまうのよ。奴隷になったんですもの、仕方ありませんわ。何事も、今までのことは

忘れてしまいましょうよ。そして、あの人たちの言われた通りにしましょうね。ね、いい子だから、晶ちゃん、わかってくれるわね。李さんは、ここのところを、こうなさいって言ってるのよ」

先生は、ご自分の手で、私の両手を優しくおとりになって、恥かしい……へ、そっと導いて下さったのでございます。

「まあ、先生……」

「晶ちゃん、それで……のよ。恥かしがらないで、指に力を入れてごらん」

「はい、こうですの、先生！」

私は先生に言われた通り、左右の指先に力を入れました。

「李さん、これでよろしいのでしょうか」

先生が、おずおずと訊ねられました。

「ナニヲ、言ッテイルノダ。ソレジャ、何モ見エナイジャナイカ。ソコノ写真ヲ見レバ、誰ダカ、スグ、ハッキリワカルヨウニスルノダ。ウントヒロゲテ、奥マデ見エルヨウニスルノダ。イイカ、コウスルノダ」

そう言うなり、ざらざらした手で乱暴に、ぐいと力を加えるのでした。

「ソノママデ待ッテイロ」

天井からの強い電光は、そんな哀れな私の姿をスポットライトとなって、浮き上がらせております。並いる男たちは身をのりだして覗き込み、私の体のあちこちに触れては、野卑な哄笑を挙げるのでございます。

私は余りの屈辱に堪えかねて、思わず目を閉じてしまいました。とすかさず、李さんの怒声が、とんできました。

「晶子ッ、目ハアケテイロッ」

シャッターを切る音が、先生のおっしゃる度となく聞こえました。

味な感触に、私はビクッと虫の這うような不気あたりが、なんともいえないとしました。お尻のるのかさえも、自分でない、もぞもぞとすりかねています。目は、です。

私は今、自分が、どのような格好にされてるような奇妙な気持なのは、はっきりとわかぼうと霞んで、開いていても、何も見えません。

ベッドの上に寝かされていながら、何か、こう、宙に浮いているような感じでした。

「じゃあ、次は四つん這いになりなさい。そして、今度は、自分の両手で、お尻を左右に大きくひろげるのよ」

「あらッ、お尻をですって？　お尻など、なぜ？　どうして……」

「おほほほ、そのうちにわかってきます」

智恵子先生が寄ってこられて、今度も、手助けをして下さいました。

「晶ちゃん、お尻をつき出すようにして、持ち上げるのよ。そう、膝を立てたままで胸からお腹までを下へつけるような気持で、お尻だけ上げるのよ。そう、それでいいの。そして、両手で左右に大きく割ってごらんなさい」

私は恥かしさも忘れて、先生のおっしゃる通りに、思いっきりお尻を両手で開ききっていました。またもや、シャッターの音が、私の真うしろの方で盛んにしました。

先生の介添えがありましたものの、この姿勢は長く続けていますと、それは、それは、苦しいものでした。私のお尻に、突き刺さるように集中している男たちの視線がたまらなく、終わるなり、私はころりとベッドの上に横倒しになってしまいました。でも、すぐにもう一度、仰向けになるよう命ぜられたのでございます。

李さんは、目盛りのついたゴム製のパイプのようなものを持ってきて、お八重さんに手渡しました。

「晶子。いよいよ、これからが、身体検査の本番ですよ。楽しい思いをしながら、身体検

査をしてもらえるなんて、幸福なものねえ。あんたは幸せ者だよ。ウフフフ」

薄気味悪い笑みを浮かべています。

「膣圧を測ってあげます」

「ちつあつって、なんでございますの？」

「貴女のものがね、男性をどれだけ締めつける力があるかということを調べるのです。元気な時の膣圧と、今から、二時間余り、貴女を徹底的に責めあげて、疲れきった時の力と比較するのです。これを調べておくことは、今後の調教の上で大切なことだし、それよりも第一、疲れた時の膣圧が、極端に弱いというのでは、大勢の男性のお相手をする時に、失礼になりますからねえ」

お八重さんは先生に向かって器具を渡しました。それは長さ二十センチ位のソーセージほどの太さのゴムパイプの先端に、玉子大のゴム製の球が取りつけてあり、パイプには目盛りがついています。

「先生、これが膣圧計です。貴女が晶子さんのを計ってあげなさい」

「お八重さま。これは、どんな風にして使うのですの？」

「先生は、産婦人科の医者のくせに、使ったことがないのですか？」

「はい――」

「お上品ぶってる人は、これだから、話がわからないんだわ。自分の膣圧も知らないで、よくも、ご主人を満足させることができたわねえ。これは、この下についている玉子形のゴム球の部分を、すっぽりと隠れてしまうまで、奥へ突っ込めばいいの。そして、力一杯締めつけさせるのよ。そうすればパイプの目盛りの所へ針が上がってきて、膣圧の強さがわかるって仕掛けなの。目盛りは大体、普通の人の膣圧を一〇〇として、それを標準としてつけてあるのよ」

得意になって説明してから、お八重さんは、私を覗き込みながら、涎をたらさんばかりの声を出しています。

智恵子先生は、そのお道具を持って、私の足の方へまわり、しゃがみ込まれました。

「晶ちゃん、先生。これも、すべて私たちに与えられた運命ですわ。日本が戦争に負けさえしなかったら、私たちも、こんなみじめな目に合わなくて、すんだんですもの。それに、私、先生に、いろいろ親切にして頂けるなんて、かえって嬉しいみたいですわ」

「ありがとう、晶ちゃん。そんなに言ってくれて、私も気が楽だわ。許してくれるのね」

「許すだなんて、先生。私だって、きのう、先生に、あんなことをしてしまって……」

「ああ、勘忍。やめて、あああ、……」

お八重さんの意地の悪い目で見つめられて私は膝を合わせることもならず、思わず知らず、声が出てしまいました。その声につられるように、将校たちや李さんまでもが、私を覗き込みます。

「晶子、オマエノハ、桃色ノ、ナカナカ奇麗ナ肌ノ色ヲシテイルネ。見テイルダケデ、体中ガゾクシテクルヨ」

李さんは、私を覗き込みながら、涎をたらさんばかりの声を出しています。

智恵子先生は、そのお道具を持って、私のまわり、しゃがみ込まれました。

「いいえ、先生。これも、すべて私たちに与えられた運命ですわ。日本が戦争に負けさえしなかったら、私たちも、こんなみじめな目に合わなくて、すんだんですもの。それに、私、先生に、いろいろ親切にして頂けるなんて、かえって嬉しいみたいですわ」

「ありがとう、晶ちゃん。そんなに言ってくれて、私も気が楽だわ。許してくれるのね」

「許すだなんて、先生。私だって、きのう、先生に、あんなことをしてしまって……」

「それは言いっこなしだわ。お互いさまだも

のね。じゃあ、いいわねえ。でも、この器具の先の丸い所は、晶子ちゃんには、少し大きすぎるようだわ。最初は少し痛いかも知れないけど、頑張るのよ。我慢してね」

智恵子先生は、私の太腿に手をかけられると、そっと優しく左右に押し開かれたのでございます。

「いい？　晶ちゃん、始めるわよ」

「ええ、先生。どうぞ、ご遠慮なさらないで下さい。晶子、どんなになっても、我慢いたしますから……」

「そうそう、少しでも痛まないように、この球の部分を……しておきましょうね。それから、晶ちゃん、これは大きなものですから、奥へ充分に入ってしまうまでは、脚は思いっきり大きく開いたままにしておくのよ」

智恵子先生は、そう言葉を交わされる間も惜しいようにして、じんわりと優しく揉んでいらっしゃいました。

「晶ちゃん、……わよ、いいわね」

「あっ、あああっ……」

瞬間、ズキンと電流に打たれるような強烈なショックが、全身をつっ走りました。思わず口から声が悲鳴となって洩れ、ひろげていた脚を無意識に、つぼめようとしたのでございます。

「あっ、あっ、先生っ、あああっ」

固い大きな塊りが、体いっぱいにひろがるように、のめり込んでくる感触がたまりませんでした。

「あっ、晶ちゃん、脚をとじちゃ駄目って言ったでしょ。口から息をゆっくり吐いて、さっきのように大きく開くのよ。頑張るのよ。それとも方も楽なのよ。もう少しの辛抱だから、我慢して頂戴ね。ねえ、大きくって、痛くって、もう、痛くって、痛くって……」

「だって、先生。晶子、もう、痛くって、はり裂けそうなの」

「そんなこと、心配しないでいいわ。大丈夫よ。もっともっと、大きいものだって、大丈夫なんだから。そう、そのように、大きく開いて、じっと我慢してるのよ。お尻なんか振ってはお駄目。もうすぐですからね。お口をあーんと開いて、力を抜いてごらん」

私には、何がなんだか、わかりませんが、多勢の男の方たちが、そんな私を、じっと見つめているのに気づくと、私は思わず体を固くしてしまうのでございます。

「先生、まだですの？」

「ええ、もうすぐ済みますわよ。でも、あんまり急いで、晶ちゃんの大切なものに、傷をつけては大変でしょう」

「……でも、まだ、まだなんですの。まだ全部、入らないんですの」

「もう少しの辛抱よ。頑張るのよ。それとも辛抱できないほど痛いの？」

「いいえ、そんなことはないんですけど、みんなが、見ていられますから……」

「もうすぐよ。晶ちゃん、いい娘だから、じっとしているのよ」

仰向けに寝かされている私には、覗き込むようにしている男の人たちの好奇心に満ちた顔しか見えません。小柄な李さんは、大男の将校達の脚の間から、顔をのぞかせて眺めています。日本の娘のを始めて見るので、きっと珍しいのでしょう。

そんなことを考えていますと、今までの疼痛が、すうーと、嘘のように消え去り、私は張りつめていた肩の力を抜いて、ほっといたしました。目から思わず涙が、すーうと頬をつたって流れました。

「はい、終わったわよ。丸い部分は、全部、隠れてしまったわ。どう？　すっかり痛みはとれたでしょ。どんな具合？」

「ええ、なんだか、体中の力が抜けたみたいで、ここんとこだけが、ほおばってるみたい

イメージギャラリー……『新入りイビリ』……須坂旭

な変な気持なの。それに、なんだか……したものが、ぴったり張りついているようで晶子こんな気持って始めてですわ」

「そうお、でも、痛くはないんでしょ？」

「はい、お蔭さまで、痛みは、すっかりとれました。ホッとした気持です」

「ああ、それをきいて安心したわ。先生は、最初は晶ちゃんが、堪らないほど痛がるんじゃないかって心配してたのよ。じゃあ、さっき、お八重さまが言ってたように、太腿の奥に力を入れてごらんなさい」

「こうですの？」

私は脚をつぼめ、膝頭のところで、そっと力を入れてみました。

「駄目、駄目。晶ちゃん、もっと、きつく締められるでしょう。晶ちゃんのように、若い人が、これ位の締め方じゃいけなくってよ。もっともっと、下腹に力を入れて、りきんでごらんなさい。出来るでしょ」

「はい、先生」

私は太腿をピッタリと合わせて、渾身の力をふりしぼって締めつけたのでございます。じっと目盛を見ていた将校たちが、一様に、〝ほう〟と嘆声を挙げました。

「まあ、晶ちゃん、物凄いわよ。グングン、目盛りが上がってゆくわ」

「先生、今、どれ位ですの？」

「素敵だわ。百五十を過ぎてるのよ。普通の人は百位だって言ってたけれど、もっと頑張ってごらんなさい。これだったら、まだまだ上がるかもしれなくってよ」

「こうですの」

私は先生にほめられて嬉しくなり、下腹をへこまし、お尻の穴をすぼめるようにして、一層、力を入れて締めつけました。

「まあ、晶ちゃんたら、百七十三まで上がったわ。凄いわねえ」

カードを持ったロシア軍の将校は、お八重さんと言葉を交しながら、しきりに目盛りを覗き込んでは数字を記入しています。

「イイイ、先生。晶子、もうこれで、力一杯よ。もう、これ以上、締められませんわ」

私の全身には脂汗が、ふき出ています。

「晶子ッ、モット、締メツケロ。ソレソレ、モット締メツケルノダッ」

李さんが、怒鳴りました。

「は、はい。でも、もう、これで、力一杯の。おお、これ位で、許して下さい」

「ウルサイ、マダマダイケル。ソレソレ、モット締メツケルノダ。ソレトモ、マタ、コノ鞭ガホシイノカ」

李さんの鞭が、ひゅうと空を切って、床の上で、ピシッピシッと音を立てました。

「あああ、は、はい、ま、待って下さい」

「晶ちゃん、李さんがおっしゃるように、もう一度、努力してごらん。全身の力を下半身に集めて締めつけてみるのよ」

私は髪をふり乱し、全身の力を下腹部に集め、歯を喰いしばり、あらん限りの力をふりしぼって、締めつけたのでございます。まるで、火の玉を押し包んでいるような感触で、体中の血が一気に逆流したかと思うと、かあーっと、全身がほてってきたのでございました。

「せ、先生。李さんも、これで、よろしゅうございますの。晶子は、もう……」

私の体は、張りつめた弓のように、ピィーンと、のけぞり、硬直していました。噴き出た汗は玉となって流れ落ちてゆきました。

「もっとよ、もっとよ。晶ちゃん、貴女の体は、私の体から取りゆけそうだわ。うんとだったら、まだまだ、もう駄目……。これ太腿に力を入れて、きゅーっと、絞ってごらん。今よ、今よ。さあ、力を入れて……」

「はい……でも、先生」

「晶ちゃん、貴女、もう駄目……。これ超えたのよ」

「まあ、本当？」

「ええ、本当よ。百八十を将校たちも、びっくりしてたわ。世界新記録じゃないかだなんて、騒いでたわ」

「まあ、晶子、恥かしいわァ」

「素晴しいわ。晶子、名器の持主なのよ。素敵だと思わない？」

智恵子先生は、私の胸に頬を寄せ、まるでいたわるように優しく、全身に頬ずりをして下さるのでございました。

――（この項終り）――

S M 随想
縄と革

加留梨雅

六月の下旬に、浅草ロック座でパリの〝プシーキャット〟のショーを見た。感想は、日本人とフランス人（パリ人）の感覚の相違という一語につきるようだ。

〝プシーキャット〟のショーは、華麗ではあるがエロティシズムは感じられない。芸という点から見れば、日本人の遠くおよぶところではあるまい。アクロバティックな動きを彼女達は見事に演じ、パリの観客はそういう踊りコの動きを楽しんでいるのだろう……ということは理解出来る。しかし、日本ふうの〝特出し〟に慣れ、自然と期待していた小生には、いっこうに面白くはなかったのである。

結局、少なくとも小生にとっては、踊る女性の肉体そのものが問題なのであり、パリの観客にとっては、その肉体がいかに見事な動きを演じるかが問題であるようであって、そこに差があるらしい。

さて本題だが、この〝プシーキャット〟のショーの中で鞭打ちがある。場内放送曰く、「あなたが初めて見るショーであろう」と。

西洋における、この種の趣向は拘束具と鞭打ちと相場は決まっているようで、革製拘束具と鎖が用いられる事が多い。このショーも同様で、革のマスクをつけた責め役が、十字架に手を鎖で縛りつけられた女を鞭で打つのである。勿論ショーであるから、激しい打ち方ではないのだろうが、尻が見る見るうちに赤く染まった。

それを見て小生が面クラッタのは、その場面が、SM行為とはこうであろうと普段想像している雰囲気とはウラハラに、至極、きらびやかであったからである。ショーだからとも思うが、革製の衣裳は艶があって、小生の感覚からする陰湿さとは、だいぶ違う。

SMは所詮、日蔭の花である。太陽のサンサンと照りはえる自然の中で女を縛ってみても、SMのイメージは湧くまいと思う。まぶしすぎる感じだ。SMプレイにマンネリ化した者が、たまさかに屋外で変化を求めるのなら面白かろうが、あくまで一般的ではないだろう。縛りは屋内に限る。

SM行為は陰湿な性的風土がなくてはならぬ。日本人の抑制的な性構造はSM行為を生み易いと思う。現に奇クは二十五年以上も生きつづけているではないか。

緊縛という用語が成立していることを考えても日本におけるSMには縄がつきもので、西洋の革製拘束具との対比は興味ある問題であるが、両者の相違の最大は融通性の有無であろう。使用場所限定の拘束具と違って、縄は、日本の曖昧なる精神風土を象徴するかのごとく、実に変化自在、融通無碍であって、どのようにでも使用しどのような縛り方も可能なのである。一条の縄が行使者の技倆によって、生きた魔物の如く女体をがんじがらめにし、猿ぐつわにも使え、鞭の代用にさえなる誠に巧妙きわまりない道具なのだ。

小生の好む陰湿なるSM風土には、縄ほどふさわしいものはないのだ。そしてその縄は、真新しいものより、女体の汗と脂で汚れたものの方が、はるかに素晴しい。

奇クの緊縛写真には、いつも感心させられるが、それは、使い慣れた縄の持つ粘着性が感じられるからだと思うのである。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

妊婦憧憬者の性癖巡礼

追憶の妊婦群像

大原茂

―福井桃子―

毎月のことながら、新刊の奇クを手にする度毎に、私は期待と興奮に胸弾ませるのは、ファンの一人としての習性だろうか。

昨年の、あの素晴しい福井桃子さんの妊娠以来、新人の妊娠モデルの出現がなく、妊婦マニアの私は淋しかった。

それが、図らずも、八月号で南加津子さんの見事な美体に接して、全く感激してしまった。旧来の女性の方々と倶に、私のコレクトブックに収まったのは勿論である。

私は南加津子さんの美しい妊婦姿に魅せられ、憧れた結果、啄木の歌をかりて、左記の歌を詠んで彼女に捧げたい。

かにかくに、妊(はら)みし女(ひと)ぞ、恋しかり
たわわな乳房、大いなる腹

見る人によっては、グロテスクで恰好が悪いと思われる妊婦の姿態も、私の目を透せば眇(すがめ)か。ヴィーナスかニンフに映るのは眇か。

だが、私のこのような性癖も、一朝一夕で培われたものではない。私の場合、生まれた環境のせいかもしれない。人間は環境に支配されやすいというが、うがった言葉である。

私が妊婦の裸体に接したのは、小学二年の時であった。男三人、女六人の九人兄姉の末っ子に生まれた私は、当然のことながら、母の妊婦姿を見る術もなかった。十六違いの長兄の元に嫁(とつ)いできた嫂（兄嫁）が、私にとっては妊婦ヌードの初体験であった。

雪深い東北から嫁いできた嫂は、女学校出たての幼な妻であったが、六尺豊かな長身の兄には似合いの大柄な女性であった。

嫂が来てからは、私の面倒は専ら彼女がみてくれた。風呂に浸りながら、白いスベスベした肌は湯玉をはじく程に張りがあってシミ一つなかった。暮に嫁いできた嫂が、青葉時になる頃には、妊娠のために、平らだった腹がプックリとカーブを描きはじめ、ピンク色だった乳暈も色濃くなった。

庭の青桐で蝉が、やかましくなる頃、嫂の腹は、ますます大きく、せり上がり、太鼓腹になってきた。

私は女体の変化というより、妊娠の不可思議さに打たれた。二本の円柱とも思われる太股に支えられた巨腹は私の目の前にあった。

「お腹が大きくなったので驚いたでしょう。あと十日位で赤ちゃんが生まれるのよ」

彼女は、そう言いながら、お風呂に入って、すぐ嫂は女の子を生んだ。

九月に入って、両親の愛は孫に移ったので、私は孫なので、両親の愛は孫に移ったので、私は憮然としたが、嫂は相変わらず私を可愛がってくれた。私も姪(めい)が可愛いので、学校から帰ると日がな背中にくくって子守りをした。

一年おいて、また妊娠した時は、最初ほどのショックもなく、嫂には悪いが、月々の肉体の変化を観賞した。

二人目の出産後に、兄夫婦は勤務先の都合で千葉にある会社の社宅に移転した。

今でこそ私は一米七〇ほどの身長があるが当時六年生の私は、三年位にしか見られず、華奢で小柄であった。兄夫婦のような大柄な人に憧れて、特に角力が好きで父にせがんで国技館へ通ったものである。

その頃、幕内に照国（現伊勢ガ浜親方）という秋田出身のアンコ型力士がいた。色が白くて女性の肌のように艶やかで、その太鼓腹の美しさは忘れることはできない。一幅の名画を見たような初体験であった。

優しく洗ってくれる嫂の大きな乳房が、力を入れるたびにフルフル揺れて、私の肩にふれた。乳暈もコゲ茶色に変色し、乳首も小指の爪ほどに太くなっていた。

九月に入って、すぐ嫂は女の子を生んだ。

彼女が十七。私は八才で叔父になった。初孫なので、両親の愛は孫に移ったので、私は憮然としたが、嫂は相変わらず私を可愛がってくれた。私も姪(めい)が可愛いので、学校から帰ると日がな背中にくくって子守りをした。

一年おいて、また妊娠した時は、最初ほどのショックもなく、嫂には悪いが、月々の肉体の変化を観賞した。

二人目の出産後に、兄夫婦は勤務先の都合で千葉にある会社の社宅に移転した。

今でこそ私は一米七〇ほどの身長があるが当時六年生の私は、三年位にしか見られず、華奢で小柄であった。兄夫婦のような大柄な人に憧れて、特に角力が好きで父にせがんで国技館へ通ったものである。

その頃、幕内に照国（現伊勢ガ浜親方）という秋田出身のアンコ型力士がいた。色が白くて女性の肌のように艶やかで、その太鼓腹

が嫂の臨月腹を思わせた。彼女も東北出身なので、何故か親近感を憶えて声援を送った。

嫂は三回目の妊娠をした。三回目の妊娠は七カ月だというのに、臨月のように大きく、腹の増大する早さが、前二回より急ピッチなのが少し異常だった。

案の定、双児らしいと判った時、この辺の風習では、双児は畜生腹といって忌み嫌っていたので、日々増大する腹を見ては憂鬱な気分になっていたようだ。

私は、小学校最後の夏休みを千葉の兄の家で過ごすことにした。四キロも歩けば海に行けるし、間もなく臨月に入る嫂の腹は、たとえようもない膨大さで、立居振舞いにも大儀だったので、私が母に命じられて、手伝いがてら、留守番に来たのだった。

伝い歩きできるようになった下の子の子守りや、自転車で十五分ばかり掛かる町までの使いは私が専ら引き受けた。後年、私が分譲フォトで観賞させてもらった増田みゆき夫人の双胎臨月腹も、一米七〇を越す長身女性の妊娠腹の雄大さに比ぶれば、小柄な夫人の妊娠腹は、いささか小さく見えた。

今年の六月号に掲載されている『鉄三SM談義』の中の沖縄美人の座間明子さんに姿態が大変良く似ていて、この八マゾに目覚めた女人群像〉の挿入写真を見ていて懐かしさがこみ上げてきた。何故ならば、嫂は、この出産のために一命を落としてしまったからだ。

あの日のことは、終生、私の脳裡から離れることはないだろう。目を閉じれば、三十年も過ぎた今でも明瞭に蘇ってくる悲しい思い出だった。少年とはいえ、生命の誕生と、若い命の終焉を、目の辺りに目撃。このようなショッキングなシーンは、医師ならともかく一般の人には、数少ない体験だと思う。

その日は朝から蒸し暑かった。明日にも出産が始まると察知したのか、嫂は私に風呂を沸かすように言った。陽も傾きかけて、彼女は大儀そうな足どりで、チビ二人を連れて浴室に来た。着ている浴衣の前が合わないほどに、孕みきった巨腹を、抱えるようにしている。

屈むにも不自由なため、私は幼い姪を裸にして中へ追いやった。嫂の体は、暑さのためとは思われぬほど、汗が滝のように流れて、豊満な両乳の間や巨大な腹がキラキラ光っていた。

据風呂なので自由のきかない彼女に、私の肩をかしたが、八十キロ近い体重によろけてしまった。湯は

――ヌーデストマガジン（妊婦）――

を潰して生きた心地もなかった。

先に行く筈の産婆を後回しにして、通り道の郵便局に飛び込み電報を打つと、一時間余りも避難を余儀なくされた。産婆を頼んで帰る頃には雨も上がり、西の空が明るかった。

家に足を踏み入れると、姪達の泣き声が聞こえ、室内が、なんとなく、生臭い。

「嫂さん、産婆さん、すぐ来るからね」

私は電灯のスイッチを入れた。室内が明るくなって、一瞬、光景に呆然となった。

シーツは血に塗れ、一つの小さな嬰児は臍の緒をつけたまま、ころがり、もう一つの命は、今産まれようとして頭を臨ませていた。

子供が、どのようにして生まれるかも知らない私には、例えようもないショックであったが、咄嗟に嫂の胸に手を当ててみると、すでに心臓は止まり、呼吸もなかった。

チアノーゼが著われ、雪白の肌は青紫色に変わっていたが、嫂の顔は穏やかで美しかった。結局、母娘三人、助からなかったが、幼い二人の子供を残して、さぞ、心残りだったと思う。

心臓不全が原因であったと、あとで医者から聞いたが、私は優しかった嫂のことが、忘れられず、妊娠した女性を見るたびに、彼女のことを懐かしく追憶するのだった。いつも私の脳裡に浮かぶのは、便々たる白い太鼓腹と、むくれ返ったような臍窩であった。

少年時代の哀しい思い出の一ページであった。

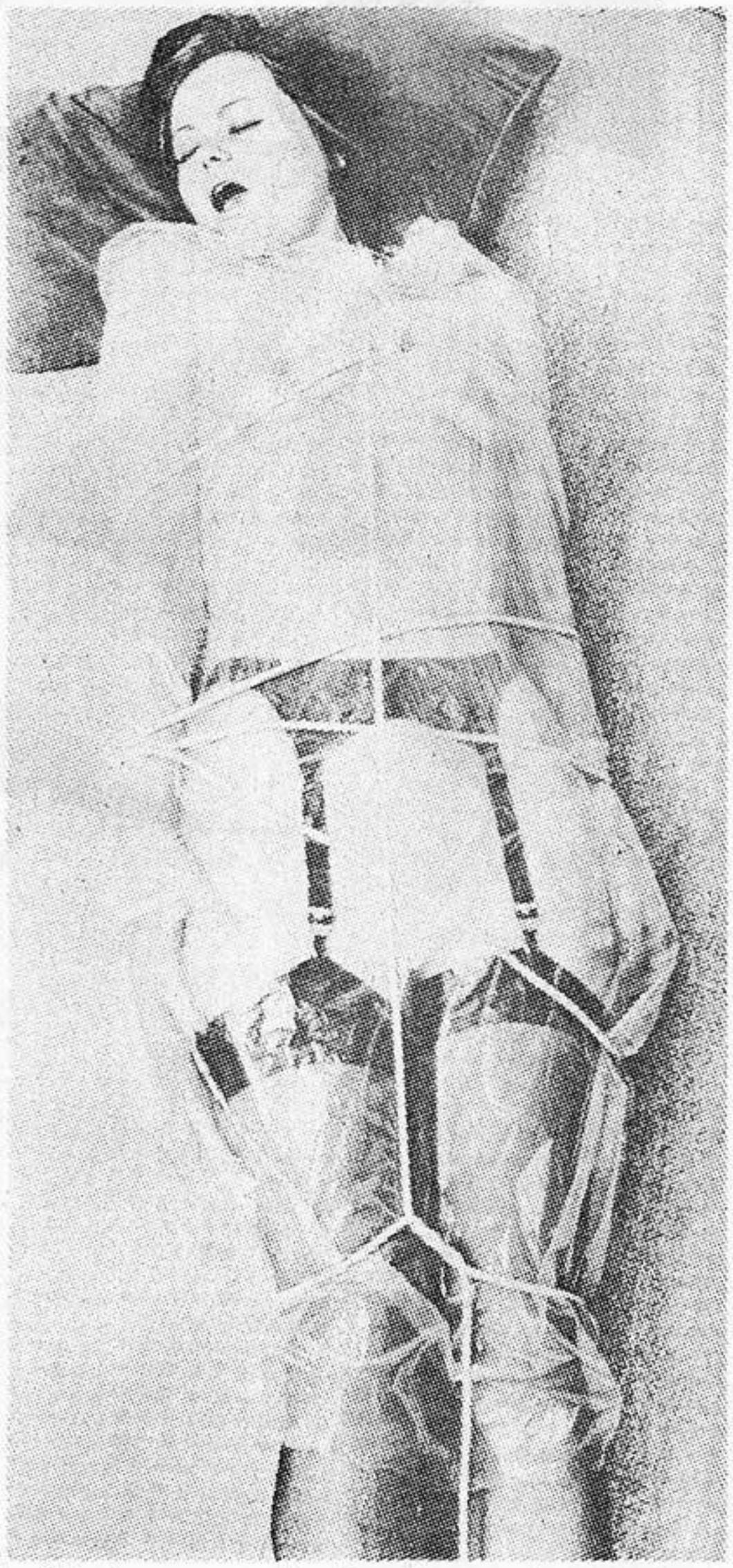
〝事実は小説よりも奇なり〟というが、その事実を小説ほどの表現力で表わすことの出来ない自分のペンの稚拙さが、いらだたしい。

運命の悪戯というものは、まことに皮肉なもので、私も妻を妊娠中に失う破目となったのだ。私が二十二才、妻の正子は十九回目の誕生日をあと一カ月後に迎えるという臨月に入った月のことであった。

戦後の混乱期から世の中もやっと立ち直りかけている頃であった。食糧事情もかなりよくなって、子供の頃、貧弱であった私も年と共に成長して一米七〇弱の身長と六四キロの体重を持つ、いっぱしの若者になっていた。

私の勤務先に正子が入社してきた。身体つきが亡くなった嫂に瓜二つで、グラマー好きの私は、この大柄な娘に一目惚れしてしまった。顔は嫂ほどの美人ではなかったが、東北

—ガリーマガジン（スウイングリー）—



正子との結婚を申込んだが「養子になって百姓を継いでくれる者でなくちゃ駄目だ」と私が平身低頭して頼んでも、頑として首を縦に振ろうとしなかった。

私達は来る時の意気込みも何処へやら、悄然として東京に帰って来た。こうなったら、早いとこ、子供でも作って、孫の顔でも見せれば翻心してくれるだろうと、王子のアパートで世帯を持った。

その頃、二人共通の楽しみであるドサ廻りの剣劇一座を毎晩のように、早い夕食を済ませて通った。千住の町も、焼跡や疎開跡地に次々と家が建ち始めたので、ボロの劇場は、いつも満員であった。

このみすぼらしい小屋が私達夫婦にSMの目を開かせたようなものである。柿落（こけら）としの日、母と三人で観劇した。場内の桟敷は従来通りであったが、改装によって両側に通路が設けられ、その通路を隔てる仕切りに、場内をぐるりと巡って、異様な、絵が掲げられていた。俗にいう〝責め絵〟である。

泥絵具で毒々しく描かれた、その色彩画は御殿女中が松の木に吊られてムチ打たれている図や、伝馬町の牢内での女囚の海老責め、巨大な腹をした妊婦の雪中での後手縛りなど

出身というので、白い肌理は相通ずるものがあった。美醜は問わず、雪国育ちは色白が多いという定説は頷ける。

大柄なせいか、高校中退の十七才と言っていたが実際は二十位に見えた。私より二センチほど背が高く、愛嬌がある上に、柔和な物腰が私の心を捉えた。

私は田舎育ちの正子を何かと面倒を見、寮にいた彼女を家へ呼んで御馳走したりするうちに、将来を約束するまでに発展し、身体の関係が出来たのも自然のなりゆきだった。

同じ職場にいると、何かと中傷する者も出てきたので、相談の上、二人共、退職し、家の近くにアパートを借りて住まわせた。

私は母や兄姉に、正子と結婚したいと話をしたら、家族全員が賛成してくれた。だが、母が、「こちらの家で、いくら賛成しても、正子さんのお母さんの承諾を貰うのが先決だよ」と言った。正子が家出同然で村を出て来たと聞いていたので、その点が、チョッピリ心配であった。

正子の母は戦争未亡人で、猫の額ほどの土地を耕して正子の妹と二人で暮していた。

私は正子と二人で雪深い山間の村を訪ね、

など、五十枚近くの絵の陳列であった。

私は、子供の頃から、多少のS気はあったものの、いわば休火山で鳴りを潜めていたのだが、この絵を見ることによって、サジスチックな気持に点火されたごとく、自分の胸内に沸々と煮えたぎるものを感じた。

これこそ、私にとってはSの芽生えであった。地獄絵の、おどろおどろした土佐の絵金ほどの凄惨さはなかったが、妖しくも恐ろしい凄愴美を持った責め絵であった。真偽のほどは確かではないが、伊藤晴雨画伯が描いた作品だと書いてあった。

ドサ廻りの劇団が入るので、毎日のように演目（だしもの）が変わり、芝居好きの私と正子は、連日、足繁く通った。私はその度に、陳列してある責め絵を堪能する程、眺めた。そのうち、正子の方も、その絵に興味を覚えたらしく、じっと画面に見入っている時があった。

私は従順な性質の正子はマゾではないかと内心、思い、それとなく謎を掛けてみると、コックリ頷いて、恥かしげに下を向いた。

それからというものは、秘かに若い夫婦の間で〝プレイごっこ〟が始まった。

実家の物置からロープを持ち出し、休みの前日などは手馴れぬ手つきで正子を縛ってみた。羞恥で染まった正子の全裸を縛ろうとするが、まだ娘々した正子の肌にロープを掛けても中々うまくゆかなかった。例の責め絵を頭に思い浮かべながら、縄を手にしたが、柔らかな肌が痛ましく感じるのは、私にS気が薄いのか、フェミストのせいか。

豊かな乳房に上下よりロープで圧迫すると瓢箪型にくびれ、薄茶色の乳暈で、いろどられた乳首がない。いわゆるメクラ乳首である。

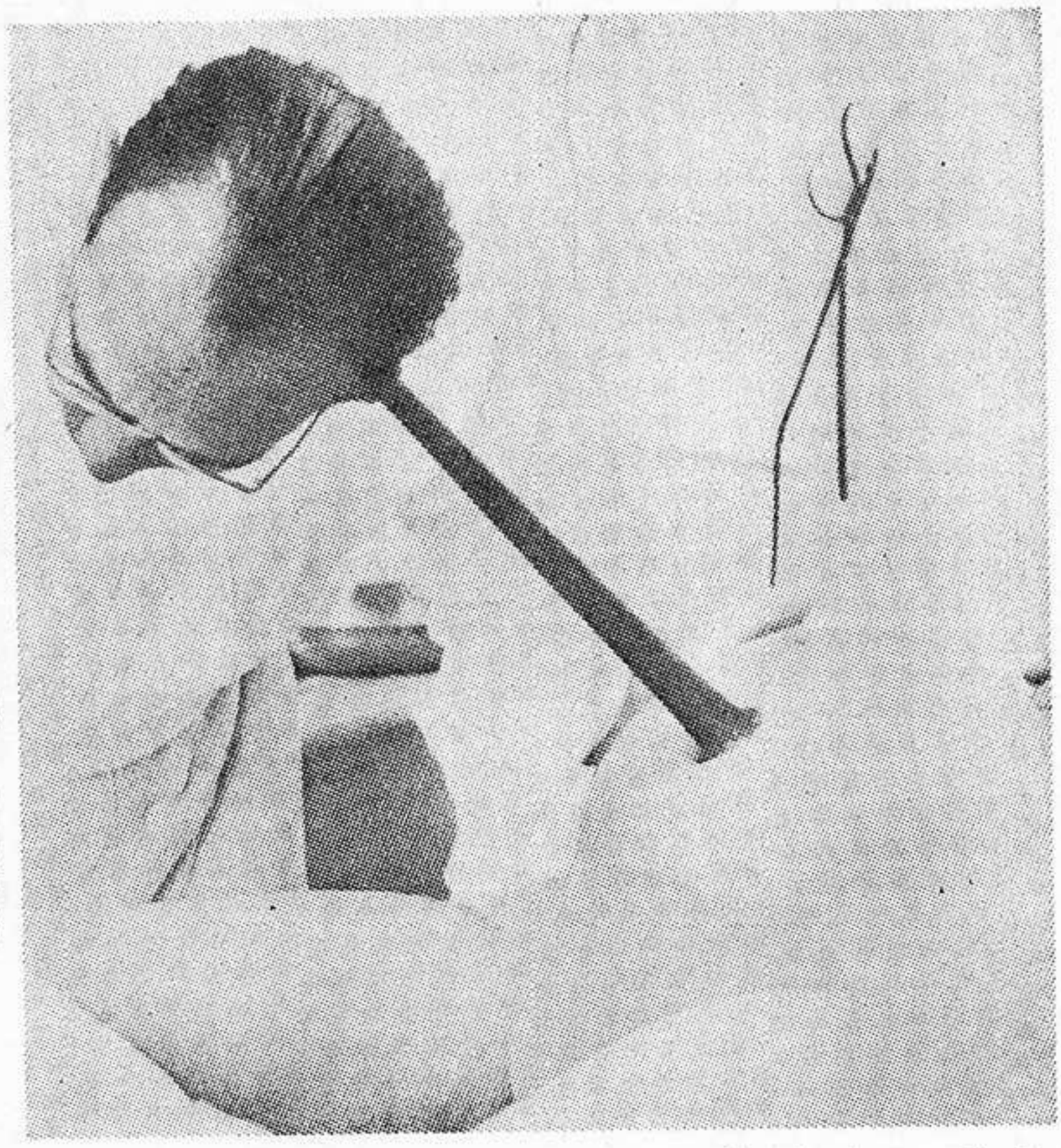
菱縄縛りや海老縛りの高等技術など望むべくもなく、ただ、ぐるぐる巻きにしただけで、初縛りはあっけなく終わってしまった。

正子の妊娠がわかったのは、同棲五カ月目であった。

「赤ちゃんが出来たらしいわ」と羞らいながら私に伝えたのは、桜には、まだ早い三月の初旬であった。父親になる実感は湧かなかったが、やはり嬉しかった。

梅雨明け頃には、大きな太鼓腹に膨れ上がって、その正子のヌードを見る度に私の興奮度は昂まり正子の大きな腹に顔を埋めた。

七月に入って、暑さも日増しに烈しくなり、何かと不便を感じた



――チャイルド・イズ・ボーン（赤ちゃん誕生）――

ので、私達夫婦はアパートを引き払って実家に帰って来た。母と嫂の遺児二人の三人住居には、勿体ない位の、広さだったので、私達二人にも住み心地は悪くなかった。

正子の身体も九カ月に入ろうという時で、腹の大きさも極限に近く、肩で息しているほどであった。その時、私の計った彼女のサイズは、バスト九四・五、ウエスト一二二、ヒップ九七であった。（今でも残っている大学ノートの記録による）

正常時の正子から比較して、バスト、ヒップで五糎増、ウエストで五〇糎増だった。腹部の内容量の大きさに驚くとともに、それだけの胎児を内蔵する女性の強靱さに感歎せざるを得なかった。

実家に帰ってからは、階下の三間が自由に使え、それに風呂場もあったので、昼夜の別なくプレイを楽しむことが出来た。

その頃、興味のある小説に出会った。ある雑誌に載っていた『十六夜清心（いざよいせいしん）』という題の小説で、作者は貴司山治、挿画は岩田専太郎であった。内容は吉原の女郎上がりのお小夜と、情夫の破戒僧清心事、あざみの清吉がつるんで、上野車坂の強欲金貸の婆さんを強請（ゆす）る件（くだり）である。

「婆さん、済まねえが、女房を質（かた）に、五十両貸して貰いたい。返さなければ、叩き売ったって、かまわないぜ」

と頼み込むと、婆さんが、傍の女に一蔑をくれて言い返す。

「ほほう、仲々の別嬪じゃないか。百両でも一文も貸す訳にはいかない貸したい位だが、姐さんも姐さんだよ。虫もねえ。だいいち、姐さんだよ。虫も殺さない顔して、よく臆面もなく来られたもんだ。その突き出た腹は、もう生み月っていう、でかさじゃないか」

婆さんになじられて、清吉はお小夜を顧りみて、威丈高にいってよ」

婆さんが強請（ゆす）られてたまるかと、威丈高に構えると、お小夜がニッコリと笑って、いきなり着物の裾をつかみ、腰巻ごと捲くり上げて、その大きな臨月腹を突き出した。

「お婆ちゃん、このお腹で、五十両貸してくれウチの人が、このお腹のことかえ。と言ってるんだけど……」

突き出た太鼓腹を、これ見よがしに、店の番頭や丁稚にも見せ、男共の目の遣り場に困る姿に、にこやかに微笑んでいる。

「亭主も悪だが、姐さんの方が役者が一枚上だね」と婆さんも呆れて、とうとう金を強請られるという場面があった。

岩田画伯の挿画も、着物の前部を押しひろげた太鼓腹の絵が素晴しく、今でも印象に残っている。

私は早速、この場面の再現を思い立って、正子にプレイをやろうと話した。日曜日の午後、家人の留守を幸いに、通常はあまり着物を着ない正子に、浴衣を着けさせたが、前がはだけるほどに腹が大きく突き出て、私の思惑通りの姿に思わず快感が背筋を走った。

「本を読みながらでも良いから、台詞（せりふ）を言ってごらん」

私に催促されて、正子は蚊の鳴くような声で、恥かしげに読みだした。裾をまくると、むくれ返った可愛い臍が覗いていた。

正子の全裸を見馴れている私だったが、小説と現実とがオーバーラップして、その肢態に華麗なエロチシズムを見た。たまらない興奮に燃えた私は、無意識のうちに、白い太鼓腹に頬ずりを繰り返した。

色白の肌を讃えて、羽二重餅だとか、雪白の肌だとか言うが、真実その通りである。正子は色白だったが、毛深い方だった。色白な肌のため、それが特に目立った。二の腕や下

肢には、濃い生毛が生え、腋毛は勿論のこと正中線に沿って千島列島のように連なって、下腹へと続いていた。

特大の鏡餅にモズクを添えた感があったのだが、それも今は、一糎ほどの疎林になっている。それは二カ月ほど前に剃毛を施したからだった。まだ戦後の混乱期で、恥ずかしい話だが、どういうわけか、虱が蔓延した。何処でどうして貰ってきたのか、清潔好きの私にしては、どうも、げせない。

家風呂の釜休みに銭湯へ行ったので、その時に移ったのかもしれない。私かでないが、毛虱まで貰ってしまったとは、笑噺にもならない。よく悪所通いで娼婦などから伝染するというが、私は正子に童貞を捧げたほどで、彼女以外の女を知らなかったので、巷の通説も当てにはならない。

そういうわけで痒くて堪まらず、私の方は水銀軟膏で退治したが、粘膜が近くにある女性には剃毛が最高だと友人から聞いたから、正子の方は剃毛することにした。

七カ月に入ったばかりで、ウエストのくびれも消えて、下腹部のせりあがりも見立ってきたが、仰臥すると膨らみもくずれて、ぽってりとしたスロープに変わった。

私は戦後間もなく、亡くなった父の遺品の日本剃刀を手にしたが、自分の髭以外、剃ったことのない手が震え、一瞬、躊躇した。

風呂場の三和土に仰臥している正子は、静かに目を閉じて、丸太のような太腿を投げだしていた。なんとなく、彼女を凌辱している気になったが、正子自身、悦びの姿を現わしているために、私は斜めに構えて日本剃刀を持ち直した。

休日の午後は静かだ。

母は所用で留守だし、姪達は遊びに行ってたなびいていた。

私は声にならない声で号泣した。出産を旬日に控えて、正子は不帰の客となってしまったのである。今でも残念に思うのは、戸籍上の妻としてしか記載されてない事である。

二十分もすると剃り跡も生々しい蒼丘が、なめらかな肌をあらわした。その毛根に捕らえきれなかったホワイトチーテが喰い込んで無数の掻傷が発生していた。私は口細のピンセットで、くらいついている小虫を摘まみ、傷跡にはホルムを擦り込んだ。

エロチックな作業であったためか、私はたちまちにして暴発してしまったが、この時の素晴しい快感は、未だに忘れられない。

正子が、それから暫くして突然、死んだ。私にとっては、悪夢のような出来事であった。彼女の死ななければならない原因は、私には何一つ、見出せなかった。

病名は子癇という、妊婦にとっては最も恐れられていた病気であった。

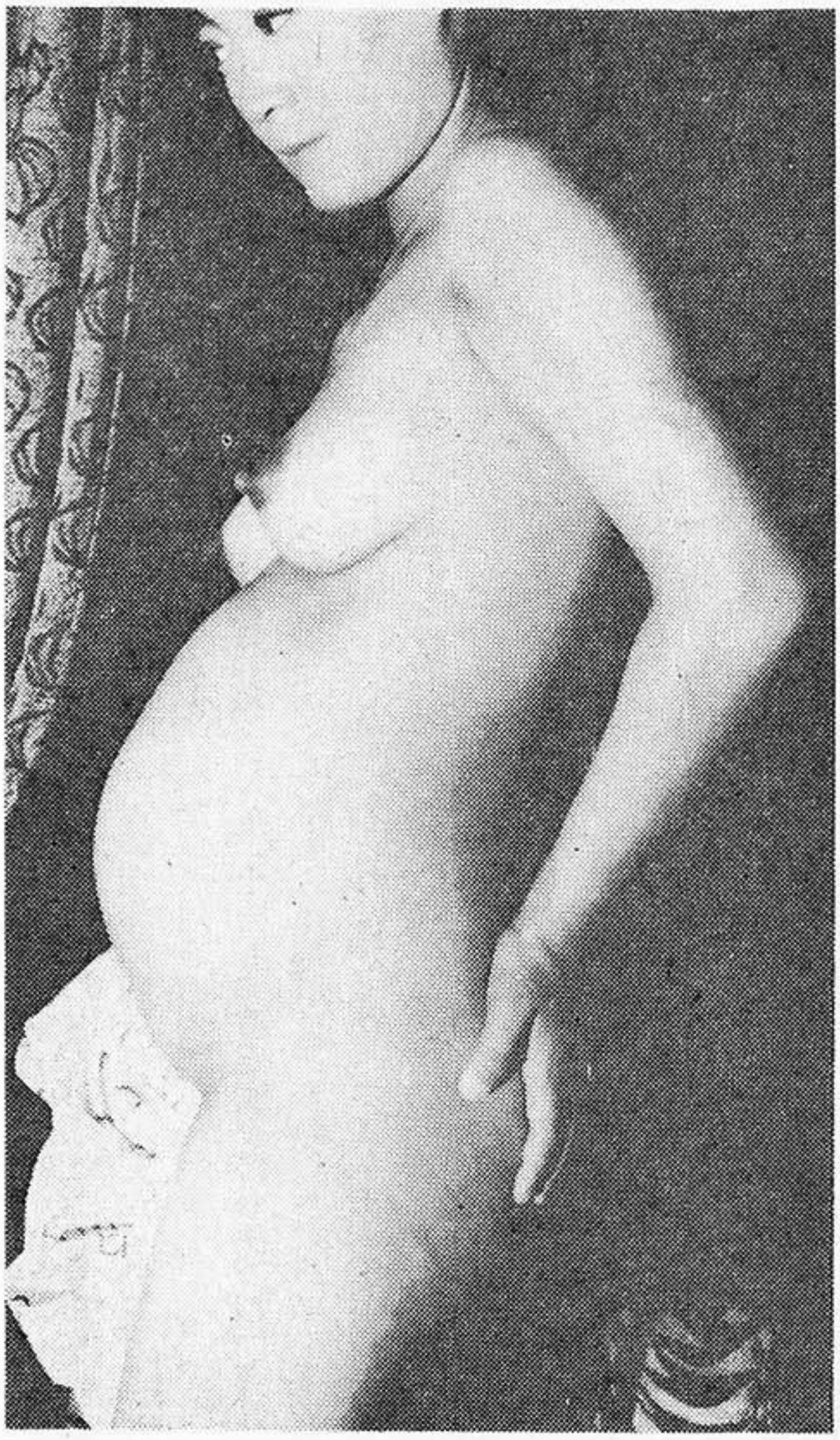
運悪く家人が外出中のこととて、私の勤務先に知らせがあって、取るものもとりあえず家へ走ったが、正子は不帰の客となってしまっての廊下も洗い清められ、正子の顔には白布が掩われ、北枕の頭には、線香の紫煙が無情にたなびいていた。

私は声にならない声で号泣した。出産を旬日に控えて、正子は不帰の客となってしまったのである。今でも残念に思うのは、戸籍上の妻としてしか記載されてない事である。

葬式に参列した正子の母に、恨みつらみを並べたてられ、遺骨も骨盤の一部を残しただけの分骨で、早々に田舎に帰ってしまった。

最愛の妻を失った私の打撃は大きく、一年近くも仕事が手につかず、放心自失の日々であった。だが、悪い事は重なるという諺の通り、正子の死後、二年を経ずして、私は米軍のトラックにはねられ一年半も入院するという重傷を負ってしまった。

その交通事故の結果、身障者になってしまい、その後遺症の為、二十年以上、経った今



——中河恵子——

安物のモヘアのハーフコートの襟を寒そうに立て、まだ消してない軒灯の光に、貧相な顔をさらして佇んでいた。一度、何気なく通り過ぎてから、顧ると女が声を掛けてきた。

「オジサン、お茶、御馳走してくれない？」

私は二つ返事で女を伴い、ひさご通りに古くからあるKという喫茶店へ連れ込んだ。

室内の暖色の螢光灯の下で見た女は、街頭で見た時よりは健康的で、幼い感じだった。

椅子とテーブルの間が狭いので、突き出た腹がテーブルに、つかえるくらいだった。

「君、いくつ？」

「今年、中学を卒業したの」

「じゃあ、十六なんだね」

少女は、こくりと頷いた。山谷（さんや）のドヤに愛人と同棲しているから泊りは出来ないと言うので、時間遊びをする事にした。当時二千円が相場だったが、五千円を与えて、鶯谷のホテル街まで、タクシーを飛ばした。

国電の線路脇にある旅館の、次の間付きの八畳に通された。二階なので窓を細目に開けると駅のホームが、まる見えだった。

寒い戸外から入ったストーブのついた部屋が熱い位に感じた。赤いコートを脱がせると細かい花柄のブルーのマタニティドレスを着

でも、独身を余儀なくされている。

それからの人生は、私にとっては、オマケの人生だと考えて、妊婦に関する資材集めを唯一の楽しみ、唯一の趣味としている。

妊婦に関する文献に目を通したり、奇クの分譲フォトを求めてコレクトしたりの生活に生きる悦びと生き甲斐を感じている。

幸いにして、私は正子の妊婦裸体鑑賞以来三人の妊婦の裸体を見る機会を持った。

十年程前であった。ある週刊誌に、妊婦の売春婦が浅草公園に出没する。その年令も十代だという記事があった。当時、私は実家を離れて上野にある会社の寮に居たので、十分足らずで行ける六区に足繁く通い、お目当ての女の子を探し歩いた。

売防法の実施で吉原が閉鎖され、町の辻々に、それらしき女が屯ろして春をひさいでいた。私がその女に逢えたのは、雑誌で知ってから二十日程してからで、ひさご通りの店を閉めたパチンコ屋の前であった。

ていたが、前が大きく盛り上がって、一目で妊婦と、わかる姿であった。

「一緒に風呂へ入ろうか」

「ええ、いいわ」

大して羞かしさも見せずに、私の目の前で着衣を脱ぎ始めた。一枚一枚、着ているものが剝がれて、肌があらわになると、手足は案外、細いのに、太股だけは肉づきよく、円く張っていて、太鼓腹を支えていた。

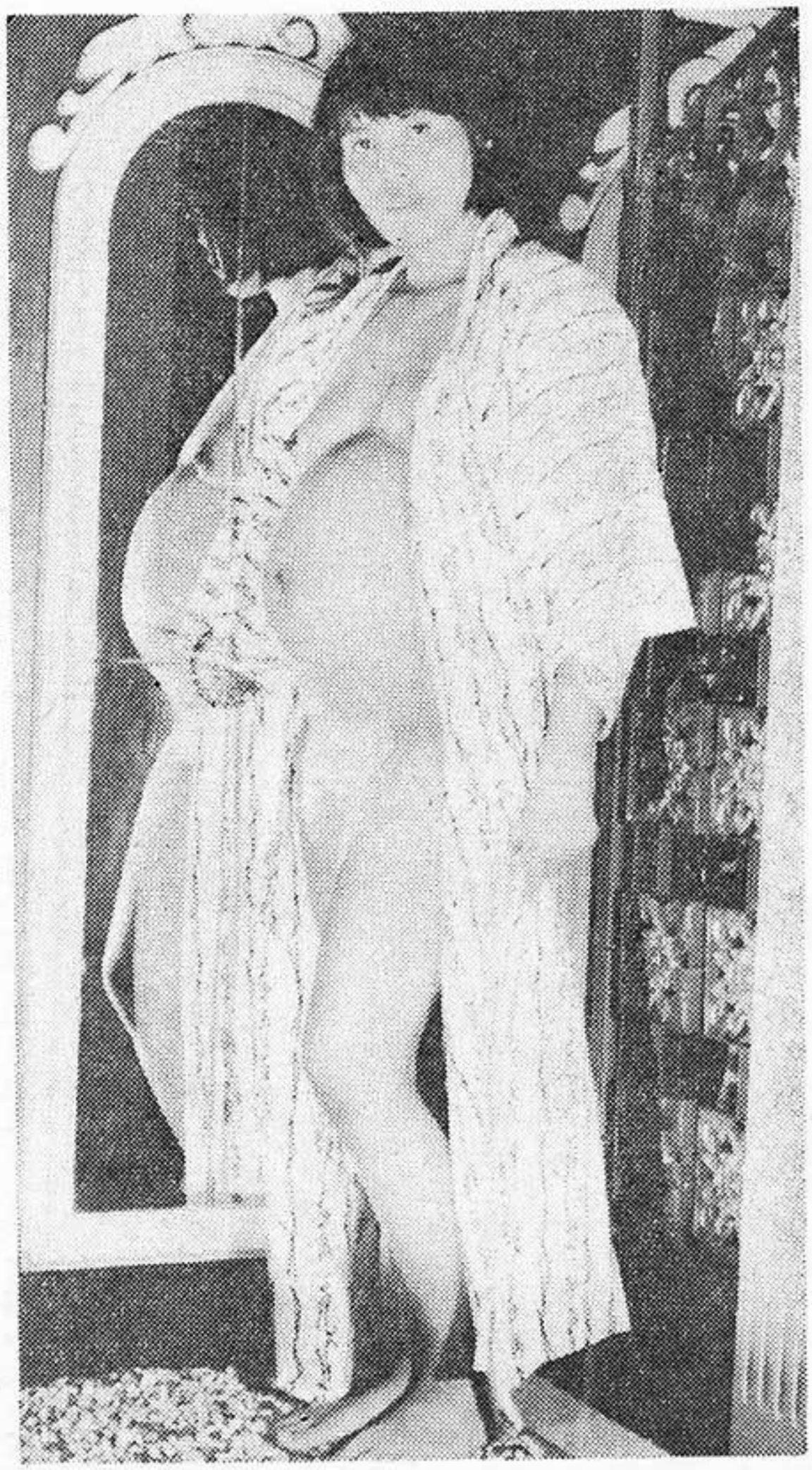
下腹には申しわけ程度のビキニパンティをつけていたが、妊婦の為に大きく張った乳房には、ブラジャーを着けていなかった。

グミの様な赤い乳首が、腕を動かす度に、ゆらゆら揺れて幼いエロチシズムを感じ、いやが上にも、私の神経を昂ぶらせた。

私は先に裸になると浴槽にとび込んだ。冷えきった体に湯触りが快く身を湯に沈めた。

「オジサン、入るわよ」

声をかけて女が入ってきた。戸口に背を向けて湯に浸っていた私が顧ると、目の前に、大きく膨らんだ蛙腹と薄い茂みが目に灼きついた。いつまでも、じろじろと見ているわけにはいかないので、「寒いから、一緒に入ろう」と、体をずらして隙間を作ってやると、するりと足の先から湯に、すべり込んだ。



金の為とはいえ、嫌な顔一つ見せず、見ず知らずの男と同浴しなければならない少女に哀れさを感じた。顔をつき合わせると、どうみても子供の顔であり、こんな大きな蛙腹を持っているとは、どうしても信じられぬベビーフェースの娘であった。

彼女に正子のありし日の姿がオーバーラップして、結局は抱く気になれず、彼女の体の隅々まで洗ってやり、湯で濡れて光った膨大な妊娠腹だけを、つくづく鑑賞した。昂まった物の処理はハンドワークに止めた。

考えてみると、私の半生には、十年目位に妊婦とかかわり合いがあり、その順でゆくと今年か、来年あたりに、何か、私の心に触れあう女性が出現する様な気がしてならない。

孕んだ娼婦との出逢いから二年後に、福島県の飯坂温泉で妊婦の裸体を観賞する機会があった。会社の慰安旅行で当地に来た時のことである。前夜、飲めや歌えのドンチャン騒ぎをしたが、酒に強くない私は早々に引き上げ、早寝したお蔭で、六時には目が覚めた。町営の混浴風呂があると聞いていたので、

——木　戸　悦　子——

東京では絶対に味わえない混浴のムードに浸ろうと友人を誘って出かけた。早朝の湯泉街は静かだった。その上、日曜日でもあったのでプールの様に広い浴室には、年輩の男女とその子供。それに朝日が差し込む窓際には、若いカップルが一組、こちらへ背を向けて洗っているだけだった。

私は何気なく奥の方へ目をやった時、洗い終えたのか、上がり湯を浴びて立ち上がった女があった。坐っていた時には、気がつかなかったが、立った姿を見ると産み月近い太鼓腹なのである。

下腹はタオルで覆っていたが、ポッテリとした特大の乳房と、ドーンと見事に突き出たまんまるい西瓜のような球体に、朝日の強い日射しが映えて金色に輝いて見えた。

女と視線が合っていないのを幸いに、ジックリと、この美しい蛙腹を落着いて観察させてもらった。時間にしては、ほんの五、六分ぐらいのものだったが、私にしては、まことに貴重な、ひとときであった。思わぬ余得にあずかり、目の保養をさせてもらった。

その日の盤梯山スカイラインのドライブのバスの中で、私は朝の出来事を思い出しては一人、北叟笑んだものである。

次に妊婦の裸体を見たのは、三年前、父の故郷、北海道へ旅した時のことである。

富良野の故郷は元より、留朋の伯母や、苫小牧の従兄と、道内に転在する親戚を訪ねて登別温泉に一夜の宿をとった。

千人風呂で有名な旅館〝K〟で、風呂好きの私は寝る迄、数回、入浴した。北海道に遊んだ女の白い肢体は、私の目には、まるでニンフを見る思いであった。小柄ではあったが夜目にも色白の肌と、異様に膨らんだ大きな腹が妖しく目に映った。

〝妊娠している――〟

そう思うと、私は胸はドキンドキンと早鐘を打った。私は鏡にうつった白い大きなお腹を飽かず眺めた。下腹に、くっきり浮かぶ、黒々とした茂みが印象的であった。

顧ってジロジロ見るわけにも行かないので、髭を剃るふりをして、曇ってきた鏡をタオルで拭い、じっと目を凝らした。

この十年ばかり、妊婦マニアのコレクターを以て自任している私にとって、生の妊婦ヌードは、金で解決出来る問題ではないので、タナボタ式の喜びを味わったものである。

女は私の坐っている場所より七米ほど離れたカランの前に坐って体を洗い始めたが、時折、私の方に窺うような視線を送ってきた。

私は態と知らん顔の半兵衛を決め込んで、言葉を掛けようにも気羞ずかしさが先に立って機会がなく、ただ黙々と洗っていた。

パシャッと湯の音がしたので、鏡を覗くと女は前も覆わずに、湯舟の縁に立っていた。薄明りの淡い湯煙の中に、浮かぶように佇んだ女の白い肢体は、私の目には、まるでニンフを見る思いであった。小柄ではあったが夜目にも色白の肌と、異様に膨らんだ大きな腹が妖しく目に映った。

〝妊娠している――〟

そう思うと、私は胸はドキンドキンと早鐘を打った。私は鏡にうつった白い大きなお腹を飽かず眺めた。下腹に、くっきり浮かぶ、黒々とした茂みが印象的であった。

顧ってジロジロ見るわけにも行かないので髭を剃るふりをして、曇ってきた鏡をタオルで拭い、じっと目を凝らした。

この十年ばかり、妊婦マニアのコレクターを以て自任している私にとって、生の妊婦ヌードは、金で解決出来る問題ではないので、タナボタ式の喜びを味わったものである。

女は私の坐っている場所より七米ほど離れたカランの前に坐って体を洗い始めたが、時折、私の方に窺うような視線を送ってきた。

私は態と知らん顔の半兵衛を決め込んで、

鏡越しに映る彼女の身のこなしの一々の仕様を熱い目で、じっと覗いていた。私は、単なる女性のヌードだったら、これ程の興奮は感じなかったろう。

その間、二十分程の観賞であったが、私にとっては、何物にも換え難い貴重な時間であった。思っても見なかったハプニングに、旅館の床についてからも、興奮の為に気が昂ぶって寝返りばかり打って、夜明け迄、寝つかれずに閉口した。

以上が、私の半生に於ける、ささやかな妊婦ヌードの体験である。私のこの少ない体験を補って呉れたのは、内外のカメラ雑誌や、ヌーデストの紹介誌、ガーリマガジン等に、思いがけなくも、数葉の妊婦のヌードフォトが載っている時だった。そんな雑誌を見つけると、高価なものでも、その妊婦のヌードフォトの為に買ってしまうマニア振りだった。

奇譚クラブ四十六年十二月号で、松本一彦氏が「外国誌から妊婦フォトを拾う」で紹介して下さった外国妊婦ヌードの傑作、『チャイルド・イズ・ボーン』（赤ちゃん誕生）を手に入れる為に、神田の書店街を数十軒も尋ね歩き、遂に、神保町交叉点角の稲垣書店という医学誌専門店で見つけた時は、今迄の労が報われて嬉しかった。

辞書を引かなければ英語の読めない私だが挿入の写真（無修整）の見事さと、巨大な妊婦腹をしたイギリス女性の出産記録を余す所なく写し出された件りの素晴しさに、夜の更けるのも忘れて辞書と首っ引きで読んだ。

奇クが松本一彦氏の貴重な記事を掲載して下さったことを、熱烈な妊婦ファンとして、心から感謝している。因に、この本は、三千三百円だった。だが、何と言っても、私のコレクションの大勢は、奇クに登場し、その妊婦美態で、私達妊婦マニアを熱狂させた妊婦女性陣の分譲フォトであった。

その中でも、分譲中止で手に入らない児玉夫人の作品を除いて、他の方々のは、数々の私の楽しみが、また一つ、増えた。

下手な文章を永々と書き綴ってきたが、突き詰めて考えてみれば、矢張り、雀百まで踊り忘れず――で、これは死ぬ迄、私に付いてまわる性癖だろうと思う。

街を行くマタニティ姿の女性を見かけると無事の出産を願う気持が起こってくるのは、娘や正子に対する悲しい思い出が、私を感傷的にしている為であろう。

あと何年、生きられるか分からないが、私は妊婦憧憬者として、金原奈加子、中河恵子、皆さんも、普通のモデルから、妊婦モデルに転進されて、妊婦ファンを喜ばして下さったという医学誌専門店で見つけた時は、今迄の労方達であったからだ。これは、私一人の欲ばった希望であろうか。

私のコレクションの中で、こうした妊婦フォトを分類するのも楽しい仕事の一つになっている。

増田みゆき、安原さゆり両夫人の巨腹型、田中美佐子、中河恵子さんの美人若妻型。木戸悦子夫人の貴婦人型、金原奈加子、富田由美子さんの稚妻型、福井桃子さんの妖艶バンブ型、と各々個性があって、面白い。

今度、八月号でお仲間入りした南加津子さんは、果たして何れのタイプに入るのやら、私の楽しみが、また一つ、増えた。

街を行くマタニティ姿の女性を見かけると無事の出産を願う気持が起こってくるのは、娘や正子に対する悲しい思い出が、私を感傷的にしている為であろう。

あと何年、生きられるか分からないが、私は妊婦憧憬者として、金原奈加子、中河恵子、皆さんも、普通のモデルから、妊婦モデルに転進されて、妊婦ファンを喜ばして下さったという医学誌専門店で見つけた時は、今迄の労が報われて嬉しかった。

辞書を引かなければ英語の読めない私だが挿入の写真（無修整）の見事さと、巨大な妊婦腹をしたイギリス女性の出産記録を余す所なく写し出された件りの素晴しさに、夜の更けるのも忘れて辞書と首っ引きで読んだ。

奇クが松本一彦氏の貴重な記事を掲載して下さったことを、熱烈な妊婦ファンとして、心から感謝している。因に、この本は、三千三百円だった。だが、何と言っても、私のコレクションの大勢は、奇クに登場し、その妊婦美態で、私達妊婦マニアを熱狂させた妊婦女性陣の分譲フォトであった。

その中でも、分譲中止で手に入らない児玉夫人の作品を除いて、他の方々のは、数々の私の楽しみが、また一つ、増えた。

下手な文章を永々と書き綴ってきたが、突き詰めて考えてみれば、矢張り、雀百まで踊り忘れず――で、これは死ぬ迄、私に付いてまわる性癖だろうと思う。

街を行くマタニティ姿の女性を見かけると無事の出産を願う気持が起こってくるのは、娘や正子に対する悲しい思い出が、私を感傷的にしている為であろう。

あと何年、生きられるか分からないが、私は妊婦憧憬者として、金原奈加子、中河恵子、皆さんも、普通のモデルから、妊婦モデルに転進されて、妊婦ファンを喜ばして下さったという医学誌専門店で見つけた時は、今迄の労

――〈終〉――

カット・岡　たかし

読切小説

浩が行く

――口なしの花の嘆き――

久留木　栄

（一）

黒塗りのクラウン・デラックスが署長公舎の裏口にとまると、白髪の品のよい紳士が降りたった。背の低い物静かな感じの男で、合図をすると車は直に闇の中に消えた。

男が裏口をくぐると、これはまた対照的に精悍そのものの、でっぷりこえた和服姿の男が待っていた。

やがて二人は奥まった書斎で相対した。予め言ってあるのだろう。上品な奥さんが、お茶を入れて行ったほか、近くに誰も近寄る気配もなかった。

この屋敷の主人、でっぷりこえた男は、山野警察署長の福島芳蔵、五十二歳。油ののりきった働き盛りで、部下が百二十三人、この県では中ぐらいの規模の警察署長だった。招かれた男は山野地区防犯協会長の井上光、六十一歳。医学博士で、内、外、精神科の綜合病院を経営していた。

福島署長は、お茶を、ちょっとすすると、

「さっそく用件に入りましょうか。こんなに困ったことはないんです」

と語りだした。

山野警察署の捜査係長に池田俊二郎という万年警部補がいた。五十三歳、署長とは警察学校の同級生であった。この男、根っからのまじめ人間だったが、どうしたわけか老いらくの恋をした。相手は山塩光枝という二十六歳のホステスで、三年前、忘年会の流れで知り合い、そのまま意気投合して結ばれ、いまでは一週間に二回ほど通う身になった。ところがこの女は、いまをときめく暴力組織山城組組長、山城英雄四十九歳と、同組幹部、潮田渉四十四歳の遠縁の女であることが、さい

きんになって、わかってきた。

山野警察署では暴力団壊滅頂上作戦というのをたて、この二、三年間、暴力組織の壊滅に全力をあげてきた。このため、他の暴力団には、殆ど絶滅するくらいの打撃を与えたがしかし、この山城組だけは一人の逮捕者も出さず、いぜんとして勢力を持ち続けて、派手な本引きトバクをしているという噂だったが一度も検挙出来ず、また証拠もつかめず、警察としては対策に苦慮していた。しかも相手は警察の動きを、よく知っていた。その理由が、どうやら池田の口から光枝の口を伝わって流れているらしいというような、黒い噂がある。

これが公になることは、まずかった。警察の威信にかかわるだけでなく、自分の友人はおろか、自分の将来にもかかわる問題であった。だから警察の内部にも、わからないように処理する必要があった。それだけに何とか思い切った手を打たねばと思ったものの、よい手段も思いつかず、自分の部下を動員させる証拠もなかった。光枝が二人の暴力団幹部の遠縁に当たるというだけで、同じ組織の者と断定するわけには、いかない。まして恋愛は自由な現在、表だって追及もできない。福島は困った。そして、せっぱつまって井上博士に相談したのだった。

（二）

説明を聞き終わって井上博士は、しばらく瞑想した。福島が部外者の自分に相談したということは、警察内部にも知らせたくないという配慮が大きいと博士は考えた。これは、むつかしい仕事だと判断したが、顔はニコニコしていた。しかも相手に地位も欲しい、名誉も、お金も、という男どもにとって、こうした問題が一番、困りますす。だから、あなたも部下に命じて調べさせるわけには、いかんのでしょうネ。そうなると、これは人を使ってしなければならないが——。うまく行くとは保障しがたいですネ。それでよければ人を、お世話します。その男に、命運をかけてみませんか……」

「命運をかける？」

「そうです」

福島は、ちょっと考えた。頭の中で池田を放置したときと、人に依頼したときの損得がかけ回った。できれば自分の手でと思うが、それは、むつかしい。〝やむをえない〟……と、判断せざるをえなかった。

「かけてみましょう」

福島は、きっぱり言った。

「そうですか。私としては、うってつけの人だと思しょう。それでは、その人を紹介しまうんですが……。ともかく、変な男です。名前は山根浩。どこに行っても名前を名乗らないので、人は着物から勝手に名をつくる。黒いスーツに黄いネクタイだから黒木一平と呼ぶバーもありますす。頭を裕次郎カットにしているので赤木裕次郎という人もいます。私は浩ちゃんといっているんですが……」

そう言いながら井上博士は、警電でなく局線（公衆）を借り、行きつけのバー〝蛾〟に電話した。

「広子か、ワシだ。浩ちゃん、きているか。至急、警察署長公舎へ来てくれるように伝言できんかな。ワシは、あと一時間、来るまでそこで待っているから……」

博士は、ほぼ一方的に低い声で、そうつぶやいて受話器を置いた。

それから福島署長と雑談を、はじめた。

「ところで、あなたは、その山塩という女の子にあったことがあるのですか」

「会いましたよ。とぼけて、のみに行って。なかなかセクシァルなホステスでネ。あれじゃ、池田の奴は骨抜きになるな」

「ほう、そんなに、よい子ですか」

「よい子です。どうです。博士。一度、見に行っては」

「いや、よしましょう。そのうち、否応なしに見せられるでしょうから」

「というと……」

「いずれ、わかれさせるんでしょ。そうなったら、どうなります。警察は、ひどいことをしたと放言する女を、ほっておくわけにはいかないでしょう。口を封ずるにも、警察の情報を流しただけでは罪にならない。となると何か方策を考えねばならないでしょう。そこまで考えねばこの仕事はできないし、うまくいきませんよ。池田係長は転勤させれば上乗でしょう。女には引導を渡さねばなりませんよ。もしその女から情報が流れていたのが真実なら、暴力団の方でも、女の口を封ずる必要が出てくるかもしれませんネ。そうなると女の身柄も、安心して生活できるよう保護してやらねばなりませんよ。なかなか根が深い問題のようですネ」

井上博士は、やはり先を読んでいた。福島はホッと、ためいきをついた。相談をしてよかったという安堵の、ためいきだった。

(三)

それから約一時間後、突然、ヌーッとその部屋に背の高い男が現われた。夫人の案内もなく、全くどこから出現したのか——そんな疑問を抱かせる不思議な現われ方だった。

黒木一平と呼ばれる原因になったという黒いスーツに黒いワイシャツ、黒いスラックス姿に、胸のまっ黄なネクタイだけが、やけに鮮やかだった。

山根は異様な服装をし、黒いトンボメガネをかけた不思議な、においを持つ男だった。浩は人に名を名乗るような世界の男じゃないというのが口癖だったが、こう正面きって紹介されると、さすがに名乗らないわけには、いかない。だがその間、にこりともせずに、署長の動きをみていたのは、さすがだった。

それと知って、署長も幾分、緊張ぎみだった。緊張以上に気が張りつめていたのかもしれない。だが、こんな立場になると、署長はさすがに千軍万馬の人で、態度も平静なら、たたきあげた強者らしい風格があった。

「ま、すわれよ。わしが、ここの山野警察署長の福島芳蔵だ。いま、さっきから井上さんに向きを変えた。その機を逃がさず、博士が署長に紹介した。

「この男です。署長さん。味方にすれば、これくらい頼もしい男は、いないが、敵に回せば、絶対こわい。山根浩、無職、無趣味、無欲の厄介者です。風変わりな奴で、気が向かないと、用事は、おろか、三度の食事もサボる。そんな奴です。浩ちゃん。福島署長さんだよ」

このあいさつを聞いていても浩は顔色一つ変えるでもなかった。しかし、

「山根です」

と、ぶっきら棒に言った。このように名を名乗ることは、まことに珍しいことだった。浩は人に名を名乗るような世界の男じゃないというのが口癖だったが、こう正面きって紹介されると、さすがに名乗らないわけには、いかない。だがその間、にこりともせずに、署長の動きをみていたのは、さすがだった。

それと知って、署長も幾分、緊張ぎみだった。緊張以上に気が張りつめていたのかもしれない。だが、こんな立場になると、署長はさすがに千軍万馬の人で、態度も平静なら、たたきあげた強者らしい風格があった。

「ま、すわれよ。わしが、ここの山野警察署長の福島芳蔵だ。いま、さっきから井上さん

に、お願いしていた。どうか、わしの片腕になってほしい」

と頭を下げた。

黒木は、ゆっくりと博士のそばに坐り、そんな署長の態度を見ていたが、そのさそいにはのらず、博士に

「で、御用の趣きは何ですか」

と内容の説明を求めた。

「署員の不始末のことだが――」

と、署長にかわって井上博士が事情の説明をはじめた。浩は、それをじっと聞いていたが、聞き終わると、

「で、私の役目は」

といった。博士は、すかさず

「証拠、つまり池田係長から光枝、光枝から山城組への証拠を、にぎってほしい。証拠がつかめたら、光枝を外部から当分、隔離し保護する方策を考え、実行してほしい」

「わかりました」

浩は、ゆっくりと答え、はじめてニヤリと笑った。それがすべてだった。

話がすむと、あっという間に、その場から姿を消していた。それが、あたかも自然のような、ふるまいで、ハッと署長が気付いたとき、浩はもう、その場には、いなかった。

（四）

「変わった男ですなあ……」

「全く……」

と二人が浩について語っているころ、浩はもう、光枝がつとめているバー〝宇都木〟へ向かって歩いていた。

宇都木は町の繁華街にあった。経営者は、この町の資産家で紡績工場を経営している平田常夫の姪で、未亡人の平田郁子という、四十三才になる年増だった。郁子は常夫に連れてこられた浩を何度も、みていた。つまり浩とは、かなり深い面識があったが、浩の名前は知らなかった。常夫に聞いたら「勝手に名付けたら、いいじゃないか」と、いわれ「それで、いい」と浩に聞くと、笑っていたのでそれいらい、常夫の友だちという意味で友常と呼ぶことにした。

浩が顔を出すと

「あーら珍しい、友常さん。ひとりなの？」

と、郁子が声をかけた。

「ああ」

「常さんとこに、行ってるの」

「ああ、たまにね」

「たまにね……うちにも、たまになのネ。今日は、どんな風の吹き回し？」

「ママの躯をぬすみたくなったのさ」

「あら、いやねえ――でも友さんが欲しいんのなら、いつでもあげるワ」

昔、郁子に地回りの男が、いんねんをつけたことがあった。それが、いつの後を追い回しからか、いなくなった。それを処理したのが浩であった。そのことを郁子は、ずっと後になって常夫から聞かされた。はじめ浩を、どことなく、うす気味の悪い男と思っていた郁子も、それいらい、浩を慕わしい男と思うようになっていた。

だが、それとは、かなり深い面識があったが、浩の名前は知らなかった。常夫に聞いたら「勝手に名付けたら、いいじゃないか」と、いわれ「それで、いい」と浩に聞くと、笑っていたのでそれいらい、常夫の友だちという意味で友常と呼ぶことにした。

浩が顔を出すと

「あーら珍しい、友常さん。ひとりなの？」

と、郁子が声をかけた。

「ああ」

「常さんとこに、行ってるの」

「ああ、たまにね」

「たまにね……うちにも、たまになのネ。今日は、どんな風の吹き回し？」

「ママの躯をぬすみたくなったのさ」

「あら、いやねえ――でも友さんが欲しいんのなら、いつでもあげるワ」

昔、郁子に地回りの男が、いんねんをつけたことがあった。それが、いつの後を追い回しからか、いなくなった。それを処理したのが浩であった。そのことを郁子は、ずっと後になって常夫から聞かされた。はじめ浩を、どことなく、うす気味の悪い男と思っていた郁子も、それいらい、浩を慕わしい男と思うようになっていた。

だが、それとは、かなり深い面識があったが、浩の名前は知らなかった。常夫に聞いたら「勝手に名付けたら、いいじゃないか」と、いわれ「それで、いい」と浩に聞くと、笑っていたのでそれいらい、常夫の友だちという意味で友常と呼ぶことにした。

浩が顔を出すと

「あーら珍しい、友常さん。ひとりなの？」

と、郁子が声をかけた。

「ああ」

「常さんとこに、行ってるの」

「ああ、たまにね」

浩とは、そんな、つきあいだった。

派手な大柄の牡丹の模様の混紡の和服を着西陣の帯をしめた郁子は、花やいだ雰囲気の女で、浩は、その正反対である。

「これが、いいんでしょ」
とコップにジョニ黒を、なみと、ついでやりながら、郁子は、ほんとに、こんな飲み方を一流のバーでしていたら、いくら金があっても、たるまいと思うのだった。
浩は、あいかわらずニコリともせず、それをとると、とまり木の前にチョコンと、こしかけ、口にあてた。その風貌とは無口な恰好は、どこからみても浮世離れした芸術家に、ふさわしかった。浩が常夫の片腕で、すごい実力者と聞かされていなかったら、郁子は浩を、とても信ずる気にはなれなかったであろう。
「いったい、何なの？　今日は」
と聞いても、浩は答えてくれなかった。いつも、そうであった。この宇都木は、のみにきても、殆ど口をきかず、多くて二口か三口だった。
その浩が珍しく、郁子の耳に口をつけ、
「光枝って、どれ？」
と聞いた。郁子は、しばらく浩の顔をみていた。それから「カオリさん！」と呼んだ。
呼ばれたホステスがボックスに帰ってきた。
「ビール、もういらない？」
「二、三本、追加たのむわ。なかなか、しつこいのよ、あの男」
カオリはママと、そうやりとりし、ビールを持ってボックスに帰って行った。

（五）

「あのこが、光枝よ」
「あ、そう……」
浩は顔色一つ、変えなかった。ゆっくりとウイスキーを、なめつ、すがめつしながらべ、卵色のカーディガンは、つつましやかであり、もしママの郁子から説明を受けていなければ浩ですら、見間違ったと思われるくらいであった。
こんな、いい女が、万年警部補の情婦！　どう考えても、浩には信じられないことであった。その理由は、いったい、何であろう。
き、もっぱら、その人に入こんどの事件は案外、根が深いのではないかう話だけど……。そんなものを探り出してみようか。ふと……そんなものを探り出してみようか。ふと浩は、そう思い、はじめて仕事に身が、いるのを覚えた。

（六）

光枝は、繁華街をぬけた小さな横丁のはずれにある鉄筋アパートの二階に住んでいた。

台所と寝室だけの、いわばマンションに近い家であった。池田から光枝へ、光枝から暴力団へ情報が流れるとしたら、この住居が一番怪しい。だが、それなら、どんな手段があるのか。電話か、それとも口伝てか。すれば、誰から誰にか。

それに池田が果たして、このマンションで光枝にあっているのか、いつ立ち寄るのか？まだ浩には、そんなことは何もわかっていなかった。この先、どんな手段で、この家の中を調べ、情報をつかんだら、よいのか。踏み込んで暴力に訴えたがよいか、もっと科学的技術を利して情報を集めたがよいか、それもわからない。

浩はマンションを見上げながら、しばらく考え込んだ。

そのころ、光枝は家の中で一人の男と、あっていた。男は、もうずい分、前から来て、待っていたらしい。初老の男であった。問題の人――男は池田俊次郎であった。

池田は光枝が作ってくれた丹前に着替え、部屋の片隅に、あぐらをかき、本を読んでいた。その本は週刊誌でもなく、月刊誌でもなかった。雑誌のようなもの、つまり、その道では知られるアングラー雑誌〝SMクラブ〟だったのである。ゴマシオ頭に、めがねをかけた老人には似つかわしくない本だった。しかも、取締当局の取締り官が読むには、ふさわしくない本だった。だが、こうした本は案外、堅い職業の人たちの間で読みつがれるものである。しかも俊次郎は、こうした本を読むのが唯一の楽しみであった。

若い頃、戦地でスパイを拷問したという経験を持っ俊次郎は、戦後、警察に入り、刑事で一線を回るうちに、いつしか同僚たちに、とり残されて、出世をあきらめねばならなくなった。一人息子も独立し、妻と二人暮らしの生活は、何不自由なかったが、その時、俊次郎は、まったく不自由なかったのである。

昔、上官だった楠田准尉がクーニャンを責めた図が思い出された。その頃は若さと正義感を持ち、責めがセックスに通ずるという考えは持たなかった俊次郎は平気で立ち合い、将校に羨望さえ感じたものである。ところがいま、人生の屈折した世界を泳ぎ回ってみてそれが、はじめて性につながることを本能的に悟ったのだ。悟ったにしては余りに遅すぎた――そこに俊次郎は自分の生活の中の歯車のどこかが狂うのを知った。順調に回ってい

この町に来て二年ほどたち、光枝とかかわりあいかができて間もないころ、強盗事件があった。毎夜おそくまで張り込んでいた俊次郎はある日、ホステス風の女と若い労務者風の男がデートするのを見、何げなく注意して、追い返したが、あわてた二人は一枚の写真を残して立ち去ってしまった。その写真がSM写真だった。それとは知らずポケットにしまいそのまま忘れてしまった。その忘れていたものを……俊次郎は翌日、思い出し自宅の書斎で、とり出し、あっと驚いた。むくつけき大の男が色白の女を責めている図柄で、女の臍にくい込んだ縄目が痛々しかった。それをみているうちに俊次郎は、ジーンと体の奥に、しびれるものを感じた。

昔、上官だった楠田准尉がクーニャンを責めた図が思い出された。その頃は若さと正義感を持ち、責めがセックスに通ずるという考えは持たなかった俊次郎は平気で立ち合い、将校に羨望さえ感じたものである。ところがいま、人生の屈折した世界を泳ぎ回ってみてそれが、はじめて性につながることを本能的に悟ったのだ。悟ったにしては余りに遅すぎた――そこに俊次郎は自分の生活の中の歯車のどこかが狂うのを知った。順調に回ってい

たメカニズムに歪が出てきたのである。
それから更に数日たって、強盗がつかまった夜、祝い酒に酔ったあと、光枝に、ふとこの写真を見せてみようと思った。
バーの片隅で二人だけになった機会に
「変な写真があるんだ。これが事件解決のカギになったのさ」
と俊次郎は、関係のなかったデートと事件の二つを巧みに脚色して話しかけた。
光枝は、笑って話にのったのだが、俊次郎がポケットから、とり出した写真をみて、ぎくりと、かたずを、のんだ。
「これが、それなの？」
「そう」
「へえ、すごい写真ね。こんな事に持っているところをみると、俊さんも、そんな気があるんでしょ」
「ま、まさか…」
「かくさなくて、いいわ。あるワ。いまは、これ専門の雑誌もあるくらいよ。どう、その雑誌を見てみない？」
「見てみたいな、だが、どこにある」
「ここには、ないワ。自宅にある。もうすぐスタンバーだから、いらっしゃい」
「行って、よいかしら」
「あら、遠慮することはなくってよ。どうせどこを、どう調べられても、かくしようのない生活なの。心配することはないわ」
「そうか」
「あなたを煮たり、焼いたり、しようとは思わないのよ」
そういう会話のやりとりのあとで、俊次郎は目に見えない糸に繰られるように光枝のアパートを訪れ、そこでSM雑誌を、みせてもらった。その夜、二人は結ばれた。
もう、とっくに五十歳をこえていた俊次郎は気力のあるたけを振りしぼって燃え、光枝を満たした。当然、誘因になったのは縛りであり、縛ったまま交わるということが、かくも甘美であることを俊次郎は初めて知った。
それは、禁断の実をたべたアダムのようであった。それから俊次郎は、むさぼるように、その方面の勉強をはじめ、一年後には、いっぱし、権威になっていた。
新しい喜びを知った俊次郎はカモを目の前にし、舌なめずりをしていた。俊次郎が、たんぜんを脱ぎ捨て、ロープをもって襲いかかる。光枝のからだが縦横に、からめられ自由を失う。その当たりは、あまりよくなく、しかも暴力手入れにからんでの風評は俊次郎をくさらせた。
確かに光枝を縛るようになって、光枝の家で光枝に警察での出来事やグチを、しゃべることが多くなった。だが俊次郎は、光枝がそれを他言するとは考えてもみなかった。光枝は常に優しく、俊次郎に盲従しているように覚えた。実は、それは俊次郎の錯覚であったがこうして人のよい刑事係長は、自ら深味に、はまっていったのである。
素人の女が求めて縛らせる。そんなことはまずない。女は、その素質があるにしても、それを発掘し、完成するまでに長い年月が、かかるものである。光枝には、その味を植えつけた男がいた。俊次郎は、その事に気付くべきであったが、生一本な男だけに、そこにまで考えが及ばなかった。光枝の白い膚。その膚に、くいこむ白い縄。汗と脂がにじむ、そのシムホニーに酔いしれていた。光枝はこうして、ちゃっかり、俊次郎から情報をとり、影の男に流していたのである。
その夜も光枝はカモを目の前にし、舌なめずりをしていた。俊次郎が、たんぜんを脱ぎ捨て、ロープをもって襲いかかる。光枝のからだが縦横に、からめられ自由を失う。そのうちに肉体は、うるおい、喜び、精神は、さらに相手を自由に繰っ

て、高揚して行く。

光枝は、そういう自分の生活に満足していた。俊次郎との関係は別として、日影者の生活には明るい太陽の喜びはありえない。ひそかな月光の愉悦しかないのである。そう思っていた。

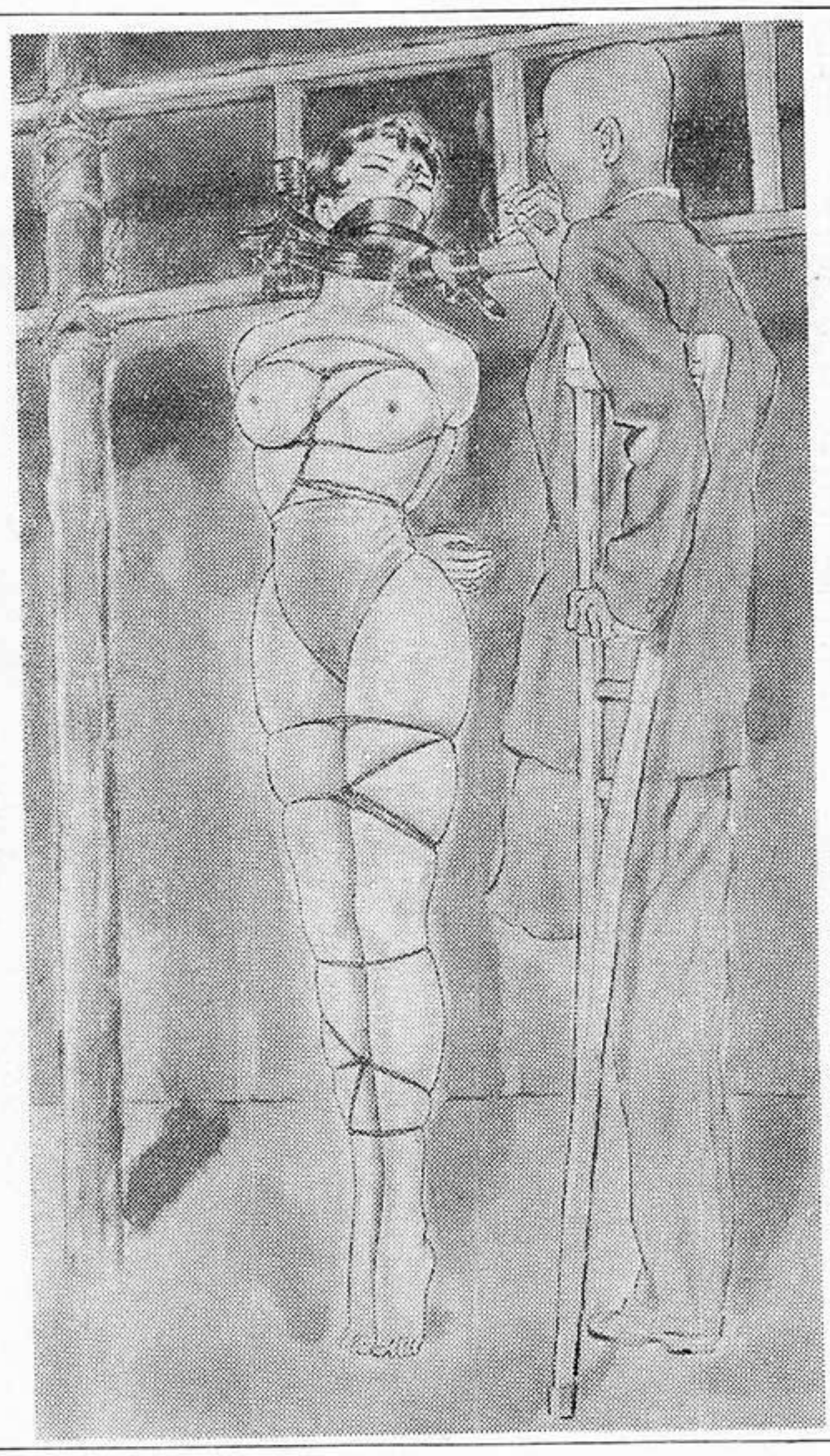
思えば光枝もまた、不幸な一群の女たちであった。浩がこっそり、テラスから窓にとりつき、中をうかがったとき、俊次郎は縛りに全力をあげ、光枝は抵抗を試みながら俊次郎を誘導していた。その姿を見たとたんに浩は一切が理解できたと思った。これなら対策も割に立てやすいと考えた。

（七）

浩は、ゆっくり光枝を見張ることにした。その生活を看視するのである。こうしてわかったことは、光枝が案外つつましい女であることだった。市場で買う食料品、スーパーで買う衣料品などに、それは現われていた。俊次郎は一週間に、ほぼ二回、月曜と木曜の夜にやってきた。火曜と金曜の昼間には、必ず一人の逞しい男が、やってきて、光枝を求めた。また、光枝は水曜と土曜日の午前中、家を二時間ぐらい、あけ、草月流の花を習いに行っていることが、わかった。日曜は十分、休養をとっているようであった。

こうした状況から考え、俊次郎といま一人の男がパトロンで、二人のデートのときは、必ずといってよいくらい、SMプレーが行なわれた。男のたずねてくる昼間は、このアパートは皆、出勤したりして殆ど、人がいなくなっているので、二人の行為は、だれはばかるところもない大胆さであった。それに比べると俊次郎との夜の行為は、まだまだ、つつましやかである。それに、光枝は電話をもっており、しきりに電話が、かかってきた。

こうしたことを調べた上で浩は、光枝がお花に出かけた留守、つまり水曜日の午前中に侵入。電話器に盗聴器をとりつけ、さらに



イメージギャラリー
「復讐という名の嗜虐」
四孝　馬

寝台の下にも装置することを考えた。そしてそれは実行された。

浩のような人間にとっては、玄関のカギはあってないようなものであった。ゆっくり、戸をあけて室内に入ってみると、光枝の部屋は台所と寝室の二間で便所と浴室が、いっしょになっていた。小さな部屋だった。光枝はうすいカーキー色のカーテンで直射日光を、さえぎり、有田焼の、花びんを、かざっていた。台所は冷蔵庫が一つ、寝台にはテレビが一台、電話は寝室の枕もとに置いてあった。

浩は手袋をしたまま、すばやく電話機を切り、受話器のボックスの中に小型の盗聴器を、しかけた。そのあとで寝台の下に、もぐり、床板のかげにも一台、盗聴器を、しかけた。無線のスイッチを入れればもうOKだった。約五十メートルほど、はなれた空き地に止めた自動車の中で増幅してみると、かなり小さな音でも聞こえる。

この盗聴器の声を録音にとることが第一の仕事であった。

準備が終わると浩は井上博士の部屋に、いつしか、影のよう、しのび込んでいた。

「どうした、うまくいかないのか」

「う、う、うん」

首を振りながら浩は、冷たく笑った。

「コレか」

博士は銭を示すように指を丸めた。

「う、う、うん」

と、浩は首を振りながら

「万事OKです。きょうあたり、暴力団取り締まりに関する捜査会議を開いてもらいたいと思いましてネ」

「ふうむ、どうして、また急に」

「なに、ちょっとした実験ですよ。一犬ほえれば万犬虚を伝う、といいますからネ」

「なるほど」

博士は浩とは長い、つき合いである。浩の意味するところが、わかったとみえ、やおら自分の机の上の電話器を、とりあげた。

「あ、あ、山野警察署」

と鷹揚なものである。浩は再びシニックな微笑を浮かべた。ベルが鳴る。

「あ、署長」

という博士の声には、張りがあった。

「どうです、きょうあたり緊急防犯会議というのは。暴力団対策に対する世論の高まりから、情報提供を、どうすればスムーズに行くか、というのは、いかがですか。そちらも頂上作戦への協力と周知徹底方を会議するという音が、二つ三つ、たてつづけにし「あ

（八）

その翌日は木曜日である。俊次郎が光枝の家を訪問する日に当たっていた。約五十メートルに離れた空き地に車をとめた浩は、車のソファーにねころび〝SMクラブ〟をよみふけりながら、盗聴器の声に聞き入っていた。盗聴器はテレビの声を伝えていた。それにまじり、時たまゴホンゴホンという俊次郎のせきがした。「遅いなあ」という、ひとりごとも聞かれた。

十二時を過ぎたころ、戸をあける音がして光枝が帰ってきたらしい。

「あなーたあ、待った？　ごめんなさい、少し、よっぱらったの。いやなお客がいて、早く帰れなかったのよ。待ちくたびれた？」

という甘い声がすると同時に、戸をあけせきする音が、

ら、もう、そんな、いやーん。乱暴な！」という声がし、しばらくして「どうだ、痛くないい？」という、俊次郎の声がした。「ちっとも。のんで、しびれているのかしら。それとも、あなたに、しびれたのかしら。でも何だか、あなた、きょうは元気ないワね」と光枝が答える。

「うん、きょう防犯会議があって、山城組の情報が少ないと叱られちゃった。近く、手入れをするそうだ。組長の舎弟の城佐久造が麻薬の入手先をゲロしたので、本部から捜査に来るとも言っていたな。どちらにせよ、ワシにとっては同じことさ。暴力追放といっても本部の考えどおりにしか行かない。ワシらの考えは常に無視されるものさ。机上作戦どおり行くものか――」

俊次郎は、自分の地道な努力と本部の方針のくいちがいの不満が思わず口をついた。

「で、手入れは、いつごろ？」

「四、五日、先だろう」

「それじゃ、また当分、会えないね」

「かもね」

「じゃハッスルしてよ。うんと、いじめていの。光枝の、この泣き声を覚えていてよ」

「ああ、よしよし。光枝は頭の下に手を組ませるのが好きだったね。そら！」

「あっ、ふ、ふ、ふ、ヒャー。く、く、くるしい。くすぐるのは、やめてえ！」

と、派手な光枝の悲鳴が、きこえてきた。全くオーバーな奴めと浩は首をすくめながらもうこれで十分と、録音盤のキーをきった。しかし盗聴器は、あいかわらず派手な悲鳴をあげつづけていた。その悲鳴を伴奏に浩はSMクラブを読みふけった〝拷問プロ〟という小説があり、派手な責めシーンがあったが、その描写を上回る悩ましさで、光枝の悲鳴は大げさだった。しかし、その悲鳴も、やがてあえぎにかわり、次第に妙な静かさに変わった。しばらくして、

「もう帰るの？」

という寂しそうな光枝の声がした。

「ああ、また。できれば月曜に」

そういう俊次郎の、間のびした声で人声はすっかり、たえてしまった。そのあとは光枝の、すすり泣きでも聞こえそうな、しじまがあった。浩は盗聴器のスイッチを切り、そのまま、そこへ泊まり込んだ。

（九）

翌日は逞しい男の来る日、金曜日である。光枝は午前九時ごろまで、ゆっくり、ねたらしい。浩は盗聴器のスイッチを午前八時半に入れたが、そのつかまえた最初の音は、電話をかける音だった。

「あ、おじさん、光枝よ。うすのろが、きのうきて、また、しゃべっていったわ。四、五日先に、手入れがあるって。本部指揮らしいワ。城佐久造がゲロしたんだって」

「城が？　それは、くさいな。あいつは麻薬のことは知らないハズだ。ともかく、手は打っておこう。きょうは満は来たか」

「まだよ！」

「あいかわらず、ガツガツしているか」

「以前より、ひどいようよ。こわいみたい」

「お前は、その方が、いいのだろう。少しは手加減するように言ってはおいたが……俊次郎のこともあって、お前がハッスルしすぎると、満は満で言っていたぞ」

「あいかわらず、ガツガツしているか」

「以前より、ひどいようよ。こわいみたい」

「お前は、その方が、いいのだろう。少しは手加減するように言ってはおいたが……俊次郎のこともあって、お前がハッスルしすぎると、満は満で言っていたぞ」

と、満は満で言ってるのろだけに、こわいわネ」

「まあ、いやな、おじさん。俊次郎と満は、ちがうのよ。でもバレまるで別人よ。人が、ちがうのよ。桑原桑原。それから満に村たら俊の方がうすのろだけに、こわいわネ」

「それゃそうだ。桑原桑原。それから満に村上組の、野田がねらっていると、知らせてくれ。こんどの情報を分析してみると、案外、

敵もさるものかな。当分、要注意だね」

「じゃ、またね」

電話は、それだけで切れた。どうやら相手は組長の山城英雄らしいということだけは、わかった。だが「満」という男の正体は、まだ、つかめなかった。浩は山城組の構成員について、知っているかぎりを頭に浮かべてみた。その結果、満という男は小野満ではなかろうかと推定した。小野満は中央から山城組に派遣された男で山城組の上部団体、大東組の若衆頭である。すると光枝は、その彼女というになるのか——と浩は考えた。だがそれは少し不自然である。組長の話の中で妙に村上組の野田が狙っているという言葉が気になった。

九時半かっきり、ガチャリと玄関の開く音がして人が一人、入ってきたらしい気配が伝わって、きた。多分、満であろう。

「いらっしゃいませ」

という光枝の言葉に、親しさのほかに、どこか恐怖感があり、よそよそしさがあった。それは俊次郎や山城に対する話には、みられない口調だった。

入って来ても男は一切、無言だった。カギをつめる音がし、女が茶を入れるらしい音がした。それに対しても男は、いっさい無言だったが弱そうな声が、してきた。

「おじさんから電話で村上組の野田が、ねらっているといってきましたワ」

「あ、そう、わかった。そんなことは、ここでは聞きたくないって、おじさんに言ってくれ。ここはオレの欲望を満たすとこだ。君の義務は何か—君は知っているはずだ」

「ハイ、知っています」

「じゃ、そのように、しな。人身御供は、人身御供らしい振舞いをするんだな」

「ハイ」

「じゃ、誓いの言葉から、いえ」

「ハイ」

といったものの、しばらく間があった。それから光枝は、かぼそい声で、

「私は、あなたのオモチャです。あなたのおいでを一日千秋の思いで、お待ちしておりました。私の体を、あなたの思うままに、おなぶり下さい。殴っても、縛っても、蹴っても結構です。おう、お、お、お慈悲ですから、あなたの強い力で私に生命を与え下さい。口にはツメモノを、手にはカセを、足には鉄輪を、尻にはムチを与え下さい——」

と言った。その光枝の哀愁を帯びた声。

それに対しても男は、いっさい無言だったが鋭く「口を開け」と一言、言ったきりで、それから全く、平常な声は聞かれなくなった。光枝はサルグツワを、されたらしい。そんなくぐもった悲鳴が盗聴器から流れはじめた。

浩は、そこで録音盤のスイッチを切り、付近の岡にのぼっていった。その高い木の上に光枝の家の中が見えるようカガミを、しかけていたが、あいにくカーテンが、かかっていて、窓から明瞭には見えなかった。しかし、白い肉体が二つ。一つの争いをしていることは明瞭であった。浩は何ともやりきれない感じで岡を降り、それから、ゆっくりと町の雑踏の中に消えた。

（十）

それから二、三日たった土曜日の午前中、浩が乗用車をとめていたところに一台の白塗りの救急車が止まり、黒目鏡、黒っぽい背広姿のセールスマン風の男が降りて、光枝のマンションに入って行った。男は呼び鈴を押すと、

「どなた?」

という光枝の声につれて、

「小野満さんから御注文の品を、おとどけに来たものですが……」
と、いった。
「満から？　何かしら」
と、光枝が戸をあけると男には、よくわからなかったが、
いかにも人なつっこい姿で頭を低くさげ、
「実はオモチャの万正堂ですが」
と、いった。
「オモチャ屋？」
「おとなのオモチャ屋ですよ。革製ですが、こう」
「まあ——」
と光枝は思わず顔を赤らめ男に従った。
りには、いっさい目もくれずと、はめてみましょう」
ゃ失礼しますと、台所に上がった。光枝は仕方なく玄関をし
「満が、また、何を注文したのですの」
そういう光枝は、もう幾分気をとり直し落ち着きを、取り戻していた。台所のテーブルの上に黒い鞭を置いた男は、とり出しながら、
「実は、これとこれなんです」
と品物を光枝の目の前に広げた。その一つは誰の目にも、よくわかる手錠だった。俊次郎が持ってきて、時々利用する奴である。その外のものは、黒い革の造りで、光枝には、よくわからなかったが、
「まあ、手錠」
と、つぶやき、鋭い反応を示した。
男は、全然、こだわらないように、
「これは御存知ですネ」
と、まず金属の手錠をとってみせた。光枝は一応プラスチックの球を、ご注文でして」
と男は柔らかい革にとりつけられた白い球を見せた。ついで、それを光枝の口にくわえさせ、あれよあれよという間にサルグツワをはめてしまった。その間、ほんの十分ぐらいだったろうか。光枝が我を取りもどしたときには、光枝の体は完全に拘束されていた。
「ま、おくさま。せっかく使っていただいたのですから、しばらく皮の感触でも味わって下さい。それにしても満さんは変な趣味がありで、奥さんも大変でしょうね」
黒目鏡の男は、そういって食卓用のイスを持ち出し、光枝を腰かけさせた。それから家の中を、ぐるりと一べつした。
光枝は、その動作を見たとき、ちらりと初めて、この男に対する疑惑が、わいた。
「どうです、奥さん、もうきているので柔らかでしょうか。満さんどは別の仕事だ。奥さん、もう少し、辛抱して下さい」
というと、男は窓から体をのり出し、外にいいつつ、男の紳士的態度に誘われるまま光枝は一つ一つ、自由を失って行く。何とか言いたい、と思っても、その隙がないのだ。
「サルグツワも羊皮製です。口につめる、つめ物は人によって好みが異なりますが満さんは一応プラスチックの球を、ご注文でして」
と男は柔らかい革にとりつけられた白い球を見せた。ついで、それを光枝の口にくわえさせ、あれよあれよという間にサルグツワをはめてしまった。その間、ほんの十分ぐらいだったろうか。光枝が我を取りもどしたときには、光枝の体は完全に拘束されていた。
「ま、おくさま。せっかく使っていただいたのですから、しばらく皮の感触でも味わって下さい。それにしても満さんは変な趣味がありで、奥さんも大変でしょうね」
黒目鏡の男は、そういって食卓用のイスを持ち出し、光枝を腰かけさせた。それから家の中を、ぐるりと一べつした。
光枝は、その動作を見たとき、ちらりと初めて、この男に対する疑惑が、わいた。
「さあ、こんどは別の仕事だ。奥さん、もう少し、辛抱して下さい」
というと、男は窓から体をのり出し、外に向かって大きく手を振った。それが何の合図

……イメージギャラリー……『熱愛の報酬』……岡　たかし……

だったか知らない。しばらくすると白衣を着た男が四、五人、やってきて、難なく光枝をかかえあげた。光枝が、いくら抵抗してもムダだった。すっぽり頭から白衣の袋を、かぶせられた光枝は、まるで荷物を運ぶように連れ出され、待機してあった救急車にのせられた。車は一路、井上病院へ。

あとに黒目鏡の男が一人、残った。黒目鏡を、はずすと浩の顔が、あらわれた。浩は用心深く手袋を、したままで寝台の下と電話機から盗聴器を、とりはずした。それから、ゆっくりと、山城組の電話番号を鳴らした。

「小野満さん、いますか。ジョーです」

と浩は口にハンカチをあてて、言った。小野満が出ると、

「兄貴。光枝が、さらわれた。奴だ。野田の奴じゃねえかと思うよ。あっ、いま……」

といって電話を切り、続いて浩は村上組の野田に電話をかけ、満が、なぐり込みをかけるよう準備をしているぜ…と、たれ込んだ。こうして浩は、そこを出ると、ゆっくり井上病院に向かって歩き出した。

（十一）

光枝は、俊次郎と満とから、かわるがわる縛られ、イヤという程、縄目の味を知らされていた。俊次郎のは、力はなかったが、縄のかけ方が、たんねんで、ゆるみがなかった。一方、満の方は粗暴で、縄と縄との間に肉がくいこんだりして痛かった。それに縛る途中わけもなく叩くので、やりきれなかった。しかし二人から縛られているときは、恐怖感よりも安堵感があった。満のやり方には奥底に、ぞっとするところはあっても、山城の親せき

というこことを考えてみると、万一の心配はなかった。ところが、黒目鏡の男に手足を革で縛られたときばかりは恐怖が先に立った。

しまったと思ったとき、目先が真暗になった。いくら、もがいても巧に作られた手錠も足錠も全然、ゆるまなかった。それから、サルグツワは尚一そう、きびしかった。それに大きな布袋をかけられ、多勢の男に連れ去られる。一体どこへ行くのか……全く光枝には見当もつかず、恐怖感だけがつのった。このまま失禁で病院についたとき、光枝は恐怖のまま失禁していた。

「困ったお嬢さんだな――本当に」

と一室に連れ込まれ、白布をとられたときに最初に口を切ったのは、白衣を着た男たちの一人だった。

「全く驚いた。さっそく始末させよう」

と連れの一人がいった。二人が去ってしばらくすると、白衣を着た看護婦風の女たちがやってきて、光枝をみると、いきなりハサミで光枝の着物を切りはじめた。有無をいわさない仕草だった。そして手錠足錠姿のまま素裸にすると部屋の片すみにある戸をあけ、別の部屋に連れ込むと、そこは便所兼シャワールームになっていた。光枝は、そこで頭からシャワーをかけられ、それからバスタオルでふかれると木綿の白衣を着せられた。そでを通さないので、まるで白衣で包まれたといってよかった。そのまま光枝は前の部屋に連れ戻された。よくみるとその部屋にはベッドが置いてあり、まるで病院のようにきれいに整理してあったが、そのベッドに光枝を寝かせた看護婦たちは、皮のさるぐつわのかかった頭のてっぺんをベッドの金具に、はめ、足錠も終わった。同時に自分のこの世界での仕事を別の金具に、とめて出て行った。警察とも、いよいよ、おさらば光枝は、まるでイモ虫のようにベッドに、はいつくばらせられ、昆虫のようにピンで、とめられたことになった。

看護婦風の女たちが去ると、あたりは静かになった。この静かさは光枝には耐えられない静かさだった。だが、誰もこない。耐えなければいけないわけには、いかなかった。ぐるりとあたりを見回すと、窓には鉄格子がはいっていた。

いったい自分は、どこに連れてこられたのだろうか。なぜ！　光枝の頭では、どう考えても、わからないものだった。こうして時は容赦なく過ぎて行った。

そのころ、署長公舎で福島署長と井上博士が、ひそかに会談していた。その隣室に池田俊次郎がいた。池田は、いま浩がとってきた録音盤を署長から聞かされたばかりだった。署長は卓上の電話をとり、捜査課長に山城、村上組に目を放さないよう。小野満が野田のキャバレーに殴り込みをかけるという噂がたっているからと指示していた。すべて浩の工作によるものだった。そうした捜査指揮を聞きながら、俊次郎はぼんやりと、ここ二年間のできことを思い浮かべていた。光枝との恋も終わった。同時に自分のこの世界での仕事も終わったというホロにがい感じがしていた。

署長が、ゆっくりと入ってきた。

「俊さんやどうする？」

と署長はくつろいだ調子でいった。そういわれると俊次郎は、さらに恐縮する。昔、同僚だったとはいえ、いまは署長である。

「は、はい、署長、わるうございました」

「何をいう。そう堅苦しく考えることはいらんよ。昔の同僚じゃないか。女のことぐらい苦にすることは、いらん。このことは、さっきもいったように、ワシしか知らんことだ。だから、忘れるんだな、光枝のことは。こちらで何とかするから、一切、知らぬ存ぜぬがよいよ。いいな」

「は、はい、署長」

「その署長は、よせよ。とにかく、まかしときだ。それはそうとして、これを機に転勤はどうだ。刑事畑から足を洗って防犯に移るのもよいかもしれんな。いくら働いても刑事は消耗品の様なものだよ。さいわい本部の防犯課に空席がある。警部職の席で、さしずめ後任が、いない。君が警部になったらと思ってたが、こんど、特例で警部昇進も可能という線が出てきた。さっそく本部長に依頼したところ、きのう、警部昇進の内定を伝えてきた。君としては渡りに舟といってはどうだ、ゆっくり、そこで勉強してみては」

「や、やめなくてすむのですか」

「何？　何をいっている。昇進するのだ。愛は自由じゃないか。それにこの四年間、君のハッスルで検挙率は県一の実績をあげることができた。部下がよく言わないのは、コキ使われるからだ……。警察の動向を流したという、自責の念もあろうが、かといって、たいした秘密を言ったわけではない。そのため相手が君を信用し、逆に、こんどの場合、こちらの陽動作戦にひっかかった。……まあ五分と五分。考え方によっては、こちらに有利だったかもしれん。そう気にせんでも、よいよ……」

福島署長は、そういって、らいらくに笑った。その笑いにつられ池田警部補も、ついホロリとし、ニコリとした。しかしその実、福島署長のワキの下は冷汗が、びっしょりだった。

〝昇任か！　これが自分の責任だからな〟という苦いものが署長の胸の中にあった。しかし池田は、そうとは知らず、喜びをあらわして帰って行った。

池田が去ると、しばらくしてその場に、ホロがい空気が流れた。

「景気直しに一杯、いこか！」

「よござんすネ」

福島署長と井上博士は顔を見合わせてニヤリとした。さっそく酒肴が運ばれた。さしつさされつしながら、署長はなにげなく、

「それにしても、こわい男ですね」

と浩を評した。

「頼もしい男ですよ」

と博士。

全く浩は頼もしい男だった。その浩のおぜん立てで、小野満が村上組の野田から射殺されたというニュースが伝わってきた。その野田も満の舎弟に撃たれ、重体という。にわかに、この町の暴力団関係は緊張してきた。この報告で一番、喜んだのは署長だった。

「やったか！」

と、ひとこと言い、井上といっしょに再びロリとし、ニコリとした。しかしその実、福島署長のワキの下は冷汗が、びっしょりだった。暴力団が騒げば騒ぐだけ勢いよく乾杯した。暴力団が騒げば騒ぐだけ取り締まれるのだった。

「やったぞ、オレはやりぬいた。禍福転生ということは、こういうことをいうのだな」

署長は自信を、さらに深めたことだろう。博士は、しばらくして署長公舎を辞した。酒の、ほどよい酔い心地を、黒塗りのセドリックにもたらせ、博士は

「さて、あの女を、どうしたものか」

と自分の病院の一室に収容した山塩光枝のことを考えていた。小野満も死んだ。池田俊次郎も去った。とはいえ、いま放置してしまえば、どうせ、まともには暮らせまい。そんな環境が光枝の身辺にあった。何とかして更生させたい。それには遠い所に住む友人にあずけ、そこの病院で、お手伝さんか何かに育ててもらうより仕方あるまい。博士は、そんなことを考えていた。

そんな博士の親心を知るや知らずや、光枝は不安におののき、ベッドの上で、次第に強まってくる被虐感に、よいしれていた。体をゆり動かし、もだえ、涙してふるえ、オリの

ような闇の果てに落ちて行っていた。

それにしても、あの黒目鏡の男がにくい。あの男は、だれだろう。あの男は満とも俊次郎とも、ちがった点がある。もしや自分が自由をとりもどしたら、あの男にあう機会があったら、思い切り甘え、いじめられてみたい。

その浩は、そのころ、光枝がつとめていた

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分　1冊　四〇〇円（送共）
三月分　3冊　一二〇〇円（送共）
半年分　6冊　二四〇〇円（送共）
一年分　12冊　四八〇〇円（送共）

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、手に入れたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛（郵便番号五五八）表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替（大阪四二七八三番）』のいずれかをご利用願います。普通郵便封入は違法ですから、必ず〝現金書留〟にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添附致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に〈本号にて前金切〉の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎年二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とをお知らせ下されば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

たら、思い切り甘え、いじめられてみたい。

そんな魅力があった。

その浩は、そのころ、光枝がつとめていた

バー〝宇都木〟に顔を出していた。最初に浩をみつけたのは、やはりママの郁子だった。

「あら、友さん。どんな風の吹き回し？」

「さあ、ハエ（南風）かしら」

浩はとぼけながら、あいかわらず、とまり木にとまり、ウイスキーを求めた。

「カオリといったかな。あの子見えないね」

浩が、たずねると郁子は額にシワをよせ、

「気があるの？」

「う、うん」

「あの子、暴力団のヒモがついてるのよ」

「そう。じゃ、それで、やめたのかな」

「さあ！　でも無断欠勤は珍しいワ」

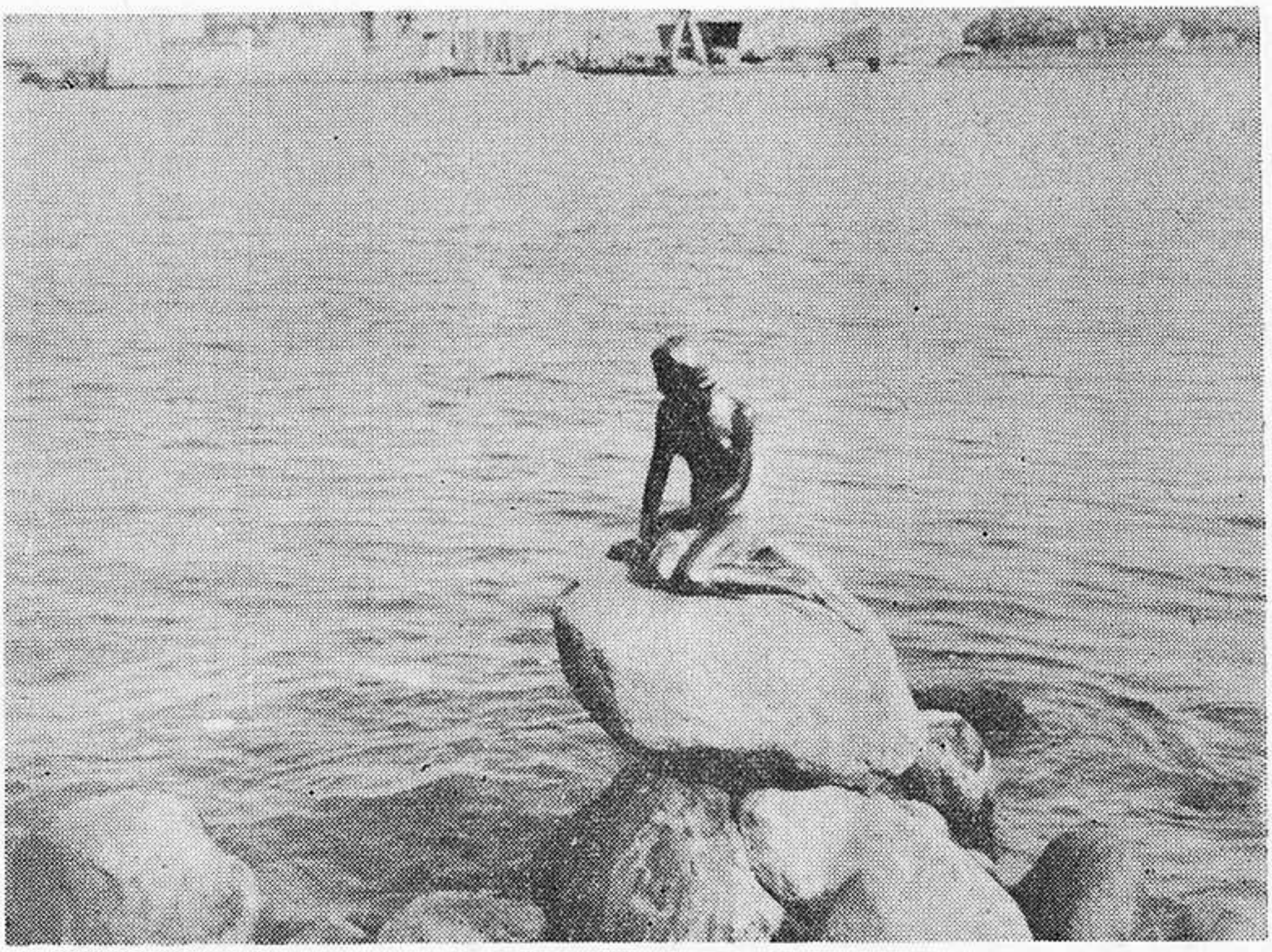
郁子は、まるでひとごとのように話した。

浩も一向に感情を、あらわさなかった。いまでの活躍は、どこかに置き忘れたという感じで、悠々と酒をのみ、好きなだけのむと、

「バイバイ」と笑いながら漂然とネオンの町に消えて行った。

マダムはその男の背中を、いつもながら、穴のあくほど見つめていた。不思議なふんいきに包まれた後姿が、黒いシルエットとなり夜のしじまにとけ込んでしまうまで、マダムは、まんじりともしなかった。

――（了）――



コペンハーゲンの港に臨む散歩道にあるアンデルセンの童話にちなんだ『人魚姫』の像

SM落書帳

ヨーロッパポルノ紀行

長谷田亀治

六月下旬から七月中旬にかけてヨーロッパを駆け足で旅行してきました。ロンドン、パリ、ローマといったお決まりの観光コースを避け、アルプスの山々と北欧ポルノを、たっぷり楽しむという〝マイ・プラン〟による、気楽な一人旅です。

『ジキルとハイドが考えそうなツアーやなあ。いったいアイガーとライブ・ショーになんの関係があるのや』

スケジュールの作成、航空券、ホテルのリザーブなど、いろいろ今度の旅行の相談に乗ってくれた大学時代の同窓でKツーリストの営業部長をやっているY君も、この奇妙な取り合わせに、びっくりしていました。

大阪空港を午後6時25分に飛び立つルフトハンザの北回り707ジェットは東京↓アンカレッジを経由して翌日の午前7時50分（現地時間）フランクフルトに着きます。時差を加えて約18時間の空の旅です。ここには西ドイツのツーリストビューローの本部があり、世界の主要都市からのエア・ラインが集中しています。伝統ある大学の町、ハイデルベルク

や、ローレライで有名なライン下りの観光船の乗船地、ビルゲンへも1時間程度で行ける西ドイツ観光の起点ともいえるところです。このフランクフルトを振り出しに、チューリッヒ↓ベルン↓インターラーケン↓グリンデルワルト↓ルツェルンと右回りの円を描きながら回って万年雪に輝くアルプスの雄大な景観と、澄み切った空気を満喫しました。文字どおり心を洗うような清遊です。このあと再びチューリッヒへ帰り、ここからアムステルダムに飛び、ストックホルム↓マルメ↓コペンハーゲンを歴訪してライブ・ショーやポルノグラフィ、そして北欧美人のボディ・エクスプローラ（探究）とセックス・アニマルを地で行く……続けました。今月の『SM落書帳』はこれらの見聞をもとにした『ヨーロッパ・ポルノ紀行』のお粗末です。

終末点にきた北欧ポルノ

ストックホルムは〝北欧のベネチァ〟と呼ばれるとおり、サルチェ入江とメーラン湖に包まれた、石造建築の多い美しい都市です。ちょうど白夜の季節で午後の11時ごろまで薄明りが残っており、午前2時ごろには、早や白々と夜が明け始めます。ホテルで旅装を解いた私は市の中心街セルゲルガタンでカメラショップを経営しているエーリッヒ・オーヤーさんを訪ねました。彼はサイド・ワークとしてポルノの通信販売を手がけており、定期的に品物を送ってくれる、ディラーの一人です。事前にアポイントメントをとっていたのに、高い郵便で金曜日の午後にかかわらず待っていてくれました。（注＝ストックホルムでは週休二日制が完全に行なわれていますから、金曜日は午前中でビジネスを切り上げてしまいます）

初対面のオーヤーさんは

『遠い日本から、よく来てくれた』

と大歓迎してくれました。近くのレストランでおそい昼食をご馳走になったあと、カメラ・ショップを閉店し、旧市街に持っているサイド・ビジネス専門のオフィスで、いろいろ、話し合いました。お互い〝中学生英語〟程度ですが、意志は十分に通じ合いました。

『当地のポルノ業界の現状は？』

『さっぱりダメだ。私のリストには最盛期二千九百人の顧客が記載されていたが、いまはたった百二十人に減ってしまった。これも80パーセントがドイツ人だから、今度のドイツのポルノ解禁で、おそらく総て失われるだろう。この仕事を止めて本来の仕事に専念するときがきたようだ』

『わずか数年でブームが去った原因は？』

『アメリカが最大のマーケットだったが、同国のポルノ解禁によって輸出が大打撃を受けた。私の顧客も、ほとんどがアメリカ人だったが、さっぱり注文がこなくなった。手近なところにポルノがあふれているのに、高い郵送料を負担してまで取り寄せる必要がないのだろう。もっとも最近、規制が始まったというが、どこまで輸出が回復するか……それとデンマークの業者が〝これでもか〟〝これでもか〟とばかり俗悪なものを乱造してダンピングをやり、業界のルールを、すっかり乱してしまったことも大きい。まあ、この映画を見たまえ』

オーヤーさんは隣接した試写室へ私を招き入れ、最近のデンマークものを映写してくれました。ストーリーを紹介しますと

①『チルドレン・ラブ』アラブへロケを行ない、まだ体毛も生えていない七、八歳の少年、少女を集めてグループ・セックスをやらせています。おそらくその日の糧にも困っている難民の子供に、いくばくかの金を与え撮映したものと思われますが、人道的にも許せ

ぬ行為といえましょう。

②『プレグナント・ラスト』出産直前の、みごとなカエル腹の若い妊婦を、二人の男がさまざまな体位で、さんざんに犯します。強烈な刺激によって妊婦は最後に陣痛を起こして苦しむという、すごいものです。

③『インセスザウス・ラブ』70歳近い祖父と祖母がハイ・ティーンの孫と孫娘を相手に近親相姦を演じます。これに外出から帰ってきた中年の両親が加わってマンジ巴のセックスを、くり広げます。実際は赤の他人同士でしょうが、醜悪以外の、なにものでもありません。

④『パッショネイト・ピッシング』二組の若い男女がファックを終えたあと、まず女性が男性に、続いて男性が女性に、それぞれの口へおびただしい量のピス（尿）を延々と直接、注ぎ込んで飲ませます。

かつて流行した犬、豚、ロバ、ウナギなどを用いるアニマルものも、もはやあきられて昔日の面影はまったくありません。エスカレートに次ぐエスカレートで、どうやらポルノも終末点を迎えたようです。前記の映画を見ていておよそ人間の頭で考えられるものは総てのものが出尽してしまったような印象を受けたのですが、どんなものでしょうか……。〝好きもの〟を自負する私ですが、さすがに胸が悪くなってしまいました。

『こういう異常なファックものは社会に害毒を流すだけだ。私はデンマークの連中を軽蔑するよ。きれいごとかもしれないが、ポルノはあくまで真の女性美を追求し、それを表現するものでなくてはならない』

オーヤーさんは、さすがに戦前派だけに、しっかりとしたバックボーンが通っており、熱っぽい口調で自分の信念を話してくれました。

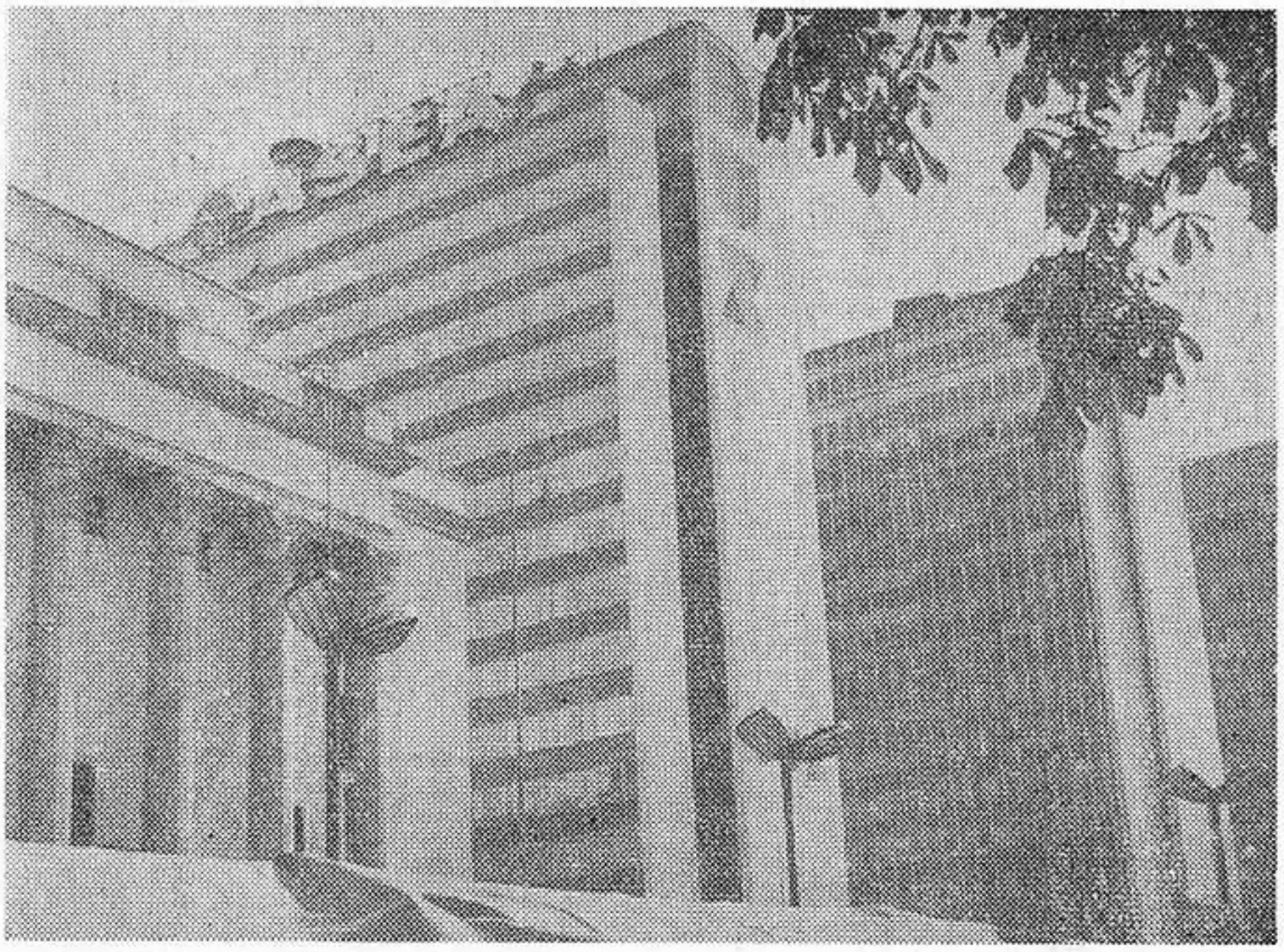
オーヤーさんはロッカーの引き出しからコダックの6×6版で撮影した、おびただしいカラースライドのフィルムを、出してきました。小さな8ミリとちがい、画面が大きく、金色に輝く、うぶ毛までが、鮮明にとらえられている、息を飲むほどの逸品でした。

『君の気に入ったものがあれば、記念に進呈しよう。将来、日本がポルノを自由化し、君にそれを手がける気持があるのなら、全面的に協力するよ』

私はオーヤーさんの好意を素直に受け、30枚ばかりをセレクトしてポケットに入れました。

『久しぶりにプライベイト社のミルトン氏に会いにいこうと思うのだが……』

商売仇だけに、私が遠慮がちに切り出すと、オーヤー氏はさっそく電話をかけてくれまし



セックス・キャバレー『カカド』があるコペンハーゲンの中心街ベステルブロー

た。しかし金曜日の午後ですからオフィスには誰もいないとみえ、応答がありません。

『週末には、いつも、かわいこちゃんを連れて郊外へ泊りがけで遊びにいくのだ。君が訪ねてきたことを伝えておくよ。彼はロールスロイスを買って乗り回しているが、大変な羽振りだ。プライベイトが創刊されるとき、私も頼まれて手伝ったが、私は残念ながら彼のようにポルノ・ビジネスに徹し切れなかった。いままで私や家族たちの生活を支えてくれたカメラ・ショップを放り出すわけにはいかなかった。おかげでいつまで経っても金持にはなれないが……』

オーヤーさんは、しんみりとした口調で身の上話を始めました。

オーヤーさんはバルト海に面したエストニヤ（現ソ連邦）の出身です。ナチス・ドイツの機甲師団がヨーロッパの全土を席巻しつつあった1940年の8月、突如、ソ連軍がエストニヤ、ラトビヤ、リトアニヤのバルト三国に進駐し、有無をいわさず併合してしまいました。ドイツ・ソビエトの秘密協定によってこの三国がソビエトの勢力範囲と決まったからです。翌41年6月独ソ開戦と同時に三国は、たちまちドイツの占領するところとなりましたが、このとき19歳のオーヤー青年は動乱の祖国に見切りをつけ、着の身、着のまま、単身、小舟をあやつってバルト海を漕ぎ渡り、対岸のストックホルムへ逃がれたのです。

知人とていない他国で生活苦と戦いながらこつこつとお金を貯め、戦後ようやく小さなカメラ・ショップを持つことができたといいますから、その間の苦労は筆舌に尽せぬものがあったにちがいありません。結婚して二人の子供を持ったオーヤーさんは30年に近い年月、この店から上る機械5パーセント、DPE20パーセントという、わずかのマージンで一家の生活を支えてきました。それだけに苦楽を共にしてきたこの店には限りない愛着を覚えるのでしょう。ポルノ・ビジネスに徹し切れなかったゆえんでしょう。ポルノ・ビジネスに徹した戦前派のオーヤーさんの気持が私には痛いほど、わかりました。

ポルノの話が、とんだところに脱線してしまいました。もとに戻してマルメのディラーを訪ねたときの話をしましょう。首都のストックホルムを東京とすれば、マルメは大阪ともいえる商業都市です。狭いエーレスンド海峡をはさんでデンマークのコペンハーゲンは目と鼻の先。連絡船やフェリーボートが、ひんぱんに通っています。ヨーロッパ大陸に対

するスカンディナビヤの門戸ともいうべき港町ですから活気があふれているのも当然のことでしょう。ここには『ロンデックス社』があります。この社はポルノが解禁になった数年前、コペンハーゲンで大規模な〝セックス・フェア〟を開催し、世界の耳目を集めたスウェーデン随一のディラーです。このとき、日本の週刊誌も大きく採り上げましたから覚えておられる方があるかも知れません。ただ店頭での小売りはやらず、もっぱら各地のポルノ・ショップへの卸し売りと、通信販売をやっています。

私が訪ねたときは、サマー・バカンスのシーズンに入っていたため、従業員も交代で休暇をとり、オフィスには6人しかいませんでした。仕事は総べて分業で、世界各地からの注文書を仕分けするもの、商品を選別するもの、発送するもの……など目の回るような忙しさです。なにしろ外国為替業務まで扱い、封入されているドル、マルク、フラン、リラなどの各国の通貨をその場で自国のクローネに換金して会計に入金する係までいるのですから、その規模のほどがしのばれるというものです。フィルムやマガジンなどは壁に沿って幾段にも仕切られた棚に、通し番号を打って山積みされています。注文はこの社の専用のオーダーフォームを用い、カタログナンバーオンリーですから、まるでベルトコンベアに乗せられたように、てきぱきと片付いていきます。活気に満ちた彼等の仕事ぶりを見ていますと、オーヤーさんの〝ポルノ悲観論〟が、うそのように思えました。

ここで私の目を引いたのは壁に飾られた超特大のポルノ・ポスターです。サイズはB1（73×103センチ）各プロダクションがPRのため腕によりをかけて製作したものだけあって、モデルといい、ポーズといい、一点の非の打ちどころもない、素晴しいものでした。もの欲しげな私の視線に気付いた一人が

『1枚くらいなら差し上げましょう。ボスはバカンスに出かけて留守だが、はるばる来られたお客だから了解するでしょう』

と親切にも声をかけてくれました。天にも昇る気持で私が〝サンキュー〟を連発したのは、いうまでもありません。どれもこれも欲しいものばかりですから、迷いに迷いましたが、結局、緑の芝生の上で、くり広げられている絵の様に美しいシックスティナインのポスターに決めました。全然といってよいほど猥褻感がなく、高校の性教育の教材に使ってもよいような（ちょっとオーバーですが…）作品です。

『折目がつかないよう、うまく包装して送ってあげましょう』

と、いたれり尽せりのサービスぶりです。

みんな忙しそうなので約30分で辞去し、フェリーボートで対岸のコペンハーゲンに渡りました。7年前、私が初めて、この都市を訪ねたときは、ポルノが解禁され、ブームを迎えるころでしたので、雨後のタケノコのようにポルノ・ショップが乱立していましたが、いまはもう、数えるほどしか残っていません。

「たしか、このへんに……』

と記憶を頼りに歩きましたが、すでに跡片もなく、なんの変てつもない普通の店が並んでいました。〝弱肉強食〟はポルノの世界にも生きていました。胸の中を風が吹き抜けるような気持に襲われたのも、エトランゼの感傷からでしょうか。

『ポルノは真の女性美を表現するものでなくてはならない』

オーヤーさんの言葉が改めて思い出されました。

ストックホルムの旧市街。『プライベイト社』やセックス・クラブ『ガイガール』もこの一角にある。

素晴しいライブ・ショー

ストックホルムへやってくる観光客が必ず出かけるところといえば、いわずと知れたセックス・クラブです。ここでは素晴しいライブ・ショーがソフト・ドリンク付きで、僅か50—60クローネ（3000円—3600円）で、公然と楽しむことができます。〝シャヌア〟〝ガイガール〟〝ファニーガール〟〝ナナ〟などが一流ですが、私はオーヤーさんが推薦した〝シャヌア〟を最初にのぞいてみました。このクラブは、ときどき当地へ静養にやってくるブリジット・バルドーも、よく顔を出すという有名クラブです。ところが、いくら探しても、それらしい店が見当たりません。何度も同じところを往きつ戻りつして、やっと探し当てました。私は『どうせクラブなんだから、はでなネオンが出ているだろう』とネオンを目標にしていたのですが、シャヌアは入口にほど気をつけないと見落としてしまいそうな小さなネオンが、ひっそりと地味な構えでした。それでいてまたたいている悪名高い？　日本の団体客もヨーロッパの観光コースから大きく外れているストックホルムまでは足を伸ばし切れないとみえ、一人もいませんでした。

このクラブの内部は豪華で、ふん囲気は最高でした。世界中を荒し回っている人気絶頂のカプルが演じるライブ・ショーです。とくにジュリエットのノーブルな美貌と、どんなファッション・モデルにもひけをとらないみごとなプロポーションは、そこの道のスターに恥じないものがありました。ジュリエットのやわらかで、しなやかな裸体がアクロバットのダンサーの様に、しなやかに、まるで水が流れるようにスムーズにあらゆる態位によるファックが演じられ、ジュリエットのダンサーの様に、しな

りました。大勢の観客の前で最高に恥かしい行為を営み、何度もクライマックスに達しながら、これっぽっちも、いやらしい感じを起こさせず、夢幻的というか、まるで素晴しい芸術品を見ているような気持にさせたのは、さすがでした。いままで、こんなに美しく、みずみずしい生命感にあふれたファックは見た事もありません。このほかに二人のニグロを含む三人のショー・ガールがあり、バイブ式のディルドを使うマスターベーション・ショーなどがあり、幕間にはサウンド入りのブルー・フィルムが映写されます。これで60クローネですから、誰もが満ち足りた充実感を覚えるのは当然のことでしょう。

　このクラブの地下にはポルノショップがあり、日本の留学生くずれらしい青年が店員をしていて

『いらっしゃいませ』

と頭を下げられたのには驚きました。置いてあるフィルムは5月号『北欧ポルノよりみたSM随想』でも、ちょっと紹介しました例のレス・ブラウンのシリーズものが圧倒的です。お土産に、ぜひお求めください。試写室がありますから、一度ご覧になりますか』

　と盛んに推めました。サウンド入りもありましたが、これは、まるで素晴しい程度、それもドイツ語オンリーです。北欧のポルノ産業にとって経済大国、西ドイツが最大のマーケットであることが、はっきりわかりました。私はこのクラブで演じられているライブ・ショーを収録した400フィートの長尺物を買いました。

　愉快で興奮されられたのは〝ガイガール〟でした。このクラブは、市発祥の地、オールドタウンの中心街にある15世紀の古びた石造建築のビルのなかにあります。内部は〝シャヌア〟ほど豪華ではありませんが、古風な酒倉の造りで、中世ヨーロッパのムードが、たしかにセックス・パワーを、お試しください』

　というアナウンスがあります。驚いたことには、これに応えてステージに飛び上がる勇気のある〝ジェントルマン〟がいる事です。おそらく〝サクラ〟だと思っていたのですが正真正銘のアメリカの観客でした。彼等のグループから激しい拍手と口笛が、わき上がりました。男は少しも悪びれる様子もなく、堂々とショー・ガールにフェラチオをしてもらっています。彼女も

『こんなに、おいしいものはない』

　といわんばかりの表情で喜々として演じています。のりにのった男は、ちゃっかり本番にまで発展し、

『ゴー！　ゴー！』

『ヘーイ、ヘーイ』

　彼等のグループは大喜びでヤンヤの声援をするのか

『ウッ……』

　という、声にならない、うめきをもらしますが、あとは彼女らの口からは万国共通の悩ましい悦楽の叫びが、もれ始め、やがてそれが魂ぎるような絶叫に変わり、なんと生々しい感じを受けました。場内のふん囲気が盛り上がってくると

『ご希望の方はステージに上がって、ご自由にセックス・パワーを、お試しください』

　というアナウンスがあります。驚いたことには、これに応えてステージに飛び上がる勇気のある〝ジェントルマン〟がいる事です。おそらく〝サクラ〟だと思っていたのですが正真正銘のアメリカの観客でした。彼等のグループから激しい拍手と口笛が、わき上がりました。男は少しも悪びれる様子もなく、堂々とショー・ガールにフェラチオをしてもらっています。彼女も

『こんなに、おいしいものはない』

　といわんばかりの表情で喜々として演じています。のりにのった男は、ちゃっかり本番にまで発展し、

『ゴー！　ゴー！』

『ヘーイ、ヘーイ』

　彼等のグループは大喜びでヤンヤの声援をするのか

ポルノ商品が山積みされた『マルメのロンデックス社』の内部

送っていますし、かなり年配の男がステージへ馳け上がろうとして細君らしい女性にたしなめられていました。日本人なら、いくら旅の恥はかき捨て―といっても、衆人環視の中で、こうは大胆不敵にふるまえないでしょう。私はうらやましくて、頭に血が昇ってしまいました。

〝ファニー・ガール〟も〝ナナ〟もショーのプログラムは大同小異ですが、どのクラブも驚くほどの美人ぞろいです。ショー・ガールたちは全身に、特殊なボディ・オイルを塗っているため、ライトに映える皮膚はまばゆいまでに光り輝いて実に魅力的です。それに彼女たちがニンフォマニアの集団かと思えるほど客席と一体になって傍若無人にセックスをエンジィしているのは驚異でした。なにしろ旺盛な肉食でバイタリティに満ちあふれている彼女たちのことですから、その性生活も淡白な私たち日本人の想像を絶するものがあるのではないでしょうか。

〝ナナ〟では、つい最近まで日本の留学生くずれが〝男優〟として出演していたそうですが体を悪くして辞めたといいます。一日に何回もステージに上がるのですから、スタミナのない日本人では、いくら命があっても足りないのは当然のことです。

いずれにしても、こうしたライブ・ショーが、ストックホルムのナイト・スポットには不可欠の存在として、なんら法律にふれることもなく、明るく、大らかに行なわれています。〝日活ポルノ〟で大ハッスルした日本の警視庁も、舞台が海の向こうのスウェーデンでは、いくら日本人が出演し、日本人が見物していても〝公然猥褻罪〟を適用して検挙するわけにはいきません。さぞかし残念なことでしょう。

大味だった北欧女性

カソリックとちがって戒律のゆるやかなプロテスタントのスウェーデンは、フリー・セックスの国というのが定説になっています。統計によりますと未婚女性の98パーセントが婚前交渉を楽しんでいるのですから、文字どおりの〝セックス天国〟です。しかしこれはあくまで同国人同士か、あるいは外国人でも

この国に長く住んでいる人に限られ、旅行者などは見向きもされません。プロの女性もいるのが関の山です。彼女たちは私たち有色人種にいわれのない優越感をもっていて、交渉もきわめて事務的ですし、なかには下半身だけ脱いで上半身は服を着たままという横着者までいます。それでなくてもブラジャーを外せばいくら、フレンチ・キスをやればいくらと、目の前に人参をぶらさげられた馬よろしく次から次へとチップをしぼり取られるのなど、どう考えても情けない話です。それに味がよいのならまだしも〝プッシィ〟なんてかわいいニック・ネームをつけておきながら、まるで死んだバカ貝のように、でっかくて締まりのない代物ときては、これ以上シラけようがありません。

と教えてくれたのです。ちょうど台北の、〝酒家〟のようにホステスを自由にハントできるシステムになっているのです。値段は、ショートで300クローネ、約1万2千円です。（注＝スウェーデン・クローネは60円、デンマーク・クローネは40円）外国旅行から帰った人から

『美しい金髪女性にすごいサービスをしてもらって、最高のセックスをやってきた』

というような話をよく聞かされますが、私の経験からいわしていただければ、こんな話は眉唾もので、頭から信じているとバカをみるのが関の山です。彼女たちは私たち有色人種にいわれのない優越感をもっていて、交渉もきわめて事務的ですし、なかには下半身だけ脱いで上半身は服を着たままという横着者までいます。それでなくてもブラジャーを外せばいくら、フレンチ・キスをやればいくらと、目の前に人参をぶらさげられた馬よろしく次から次へとチップをしぼり取られるのなど、どう考えても情けない話です。それに味がよいのならまだしも〝プッシィ〟なんてかわいいニック・ネームをつけておきながら、まるで死んだバカ貝のように、でっかくて締まりのない代物ときては、これ以上シラけようがありません。

と教えてくれたのです。ちょうど台北の、〝酒家〟のようにホステスを自由にハントできるシステムになっているのです。値段は、ショートで300クローネ、約1万2千円です。（注＝スウェーデン・クローネは60円、デンマーク・クローネは40円）外国旅行から帰った人から

『美しい金髪女性にすごいサービスをしてもらって、最高のセックスをやってきた』

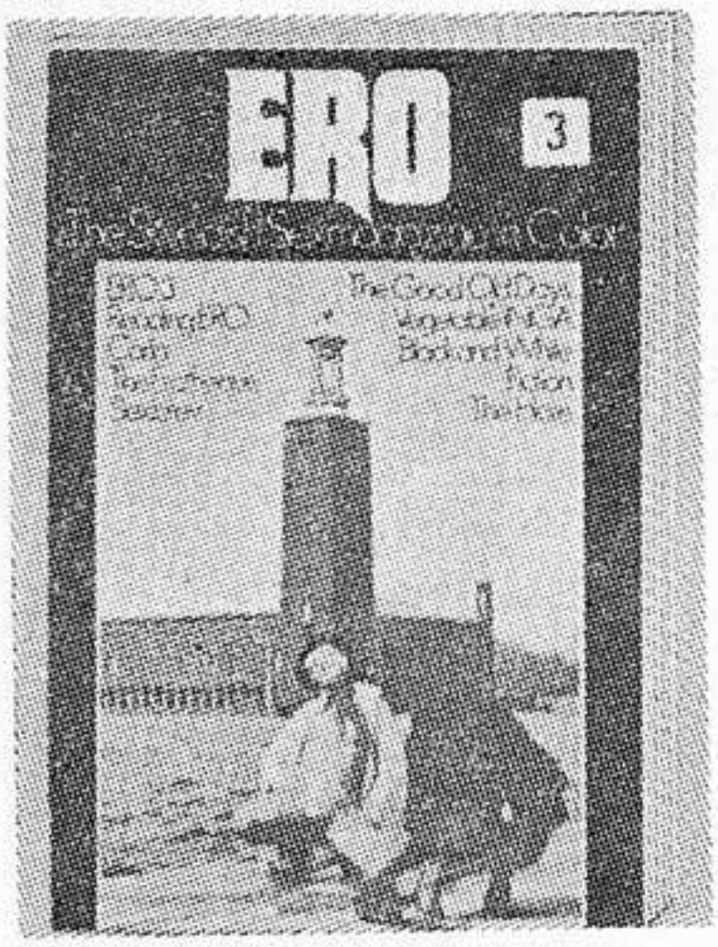
というような話をよく聞かされますが、私

こうした過去の経験を頭に置いて私は女たちを物色しました。サービスが期待できず、値段がいっしょとなれば、できるだけ、かわい子ちゃんを選んで指名するのが賢明というものです。私は群がるホステスの中からハリウッドのセックス女優、ラクエル・ウェルチによく似たキング・サイズのグラマーを選び出しました。

交渉は彼女のアパートで行なうのですが、エキストラ・チャージ（追加料金）を払うという約束のせいか、〝ラクエル嬢〟のサービスはこの種の女性としては最高に近いものでした。まず部屋に入るなり、バスを推め、自分も全裸になって体中を洗ってくれました。とくに特定目標に石けんをぬりたくり、何度も何度も念入りに洗うのです。もっともこれはサービスというより、病気を持っているかどうかを調べるのが目的のようでしたが……私もプッシィを洗うふりをして泡だらけの手を伸ばしますと熱い吐息をもらすではありませんか。手応え十分。これに力を得た私の手は遠慮することを忘れましたが、驚くなかれ手首から先が、すっぽり。いくら石けんで滑らかになっているとはいえ、仰天しました。さすがに〝ラクエル嬢〟も白目をむいてしまいました。

ベッドでは、いきなりのフェラチオはよいのですが、なにかおかしいと思ったら、いつの間にか、ちゃんとゴムに包まれていたのです。さすがにプロフェショナルだけあって、その手練の早業はみごとなものでした。しかしこれでは靴の上からかゆいところをかくようなもので、もどかしさはどうしようもありません。それに不公平にも〝ラクエル嬢〟と

入江と湖に囲まれたオールドタウンにある古風なレンガ造りのストックホルムの市庁舎（右の建物）と、この市庁舎をバックにしたポルノ雑誌『エロ』第3号



きたら私の鼻先を、例の巨大なる偉容陣営を以て脅かし、奉仕を、せがむのですから、たまったものではありません。なんといっても相手は娼婦なんですから大いに閉口しました。もっともすから大いに閉口しました。もっとも北欧の女性は体質的にメラニン色素の沈着が薄いせいか、商売がらにもかかわらず実に美しく、不潔感がないのが救いでした。

『エキストラ・チャージ』

と叫びますと〝ラクエル嬢〟は、しぶしぶゴムを外しましたが、さてとなると、にぎりこぶしで抑天させられたほどの〝ウルトラ級〟ですから、まことに大らかで索漠たるものです。しかしたがないので、再び元にもどりましたが、こちらは、さすがに絶妙で、その道のエキスパートでした。

私が、あっと思った瞬間、彼女が、のどの奥で歓喜の？　うめきをもらしたのが、まことに印象的でした。さしずめ、デンマーク版〝トルコ風呂〟というところでしょう。日本のトルコ嬢なら大変に、いやがることを、この〝ラクエル嬢〟は、むしろ歓迎の様子で、けっこう自分でも楽しんでいたあたり、大変なもうけものをしたような気になりました。

アムステルダムでは〝飾り窓〟をひやかしに行きました。政府公認？　の娼家が約50軒くらい軒を並べています。大きな総ガラスのショーウインドーのなかに全裸に近い娼婦がはいっていて買手のつくのを待っています。男性にとっては、じっくり見極めた上で指名出来るわけですから、昔の日本の女郎屋以上に合理的なシステムです。しかし本来がハンブルグのレーパーバン同様アムステルダム港に入港する荒っぽいシーメンが相手ですから甘いムードというようなものは、これっぽっちもなく、すれっからしの年増娼婦ばかりでさっぱり食指が動きません。それだけに値段も50マルク（約5千円）という安さです。

この地区には約10軒のポルノ・ショップがあり〝セックスミージアム〟というライブ・ショーをやっている劇場の入場券を35マルクで売っています。その内容はストックホルムと大同小異で変わりばえはしませんが、出演の男女が、まったく、くたびれ果てていて、お粗末でした。例えていうなら、ストックホルムが高級レストランなら、ここは一膳めし屋でしょうか。最前列が空いていたので行こうとしたら

『リザーブ・シートだから』

と断わられました。果せるかな開演間ぎわにガイドに引率された10数人の日本の団体客がやってきて、この席に納まったのには苦笑を禁じえませんでした。経済大国日本の〝国威発揚〟を目のあたりにみて、まことに心強い思いがしました。

正反対を行く西独とアメリカ

西ドイツの連邦議会が、性関係の刑罰を大幅にゆるめる刑法改正案を254対203という大接戦のすえ、可決したのは六月八日のことです。なにしろポルノについては、SMもの、ホモもの、人獣混交ものを除いて完全に自由化し、売春についても女性の売春の自由を認め夫婦交換もOKという、けっこうづくめの改正案です。コチコチ頭の野党からは

『女性という尊敬すべき存在を、あたりかまわず、むき出しの欲望の対象にさらすのは、もってのほか。性道徳の最後の防波堤は、あくまで守るべきだ』

という、ごうごうたる非難の声が上がりましたが

『いまさら、なにを……』

という思いだったでしょう。フランクフルトでは三軒ばかりポルノ・ショップをのぞきましたが、製品のほとんどが見馴れた北欧製で、それも輸入税？　がかかっているのか20パーセント近くも高く20～30マルクもするのです。西ドイツならではのユニークなものを期待していたのに、さっぱりでした。もっともフェイスのよいモデルを使ってファック・シーンさえ撮っておればよいポルノのことですから、例えソビエト連邦や、レッド・チャイナ製でも大同小異でしょうが……

『自由化になったので目下、たくさんのプロダクションで量産されている。もうしばらくすれば出回るだろう。あなたは少し早く来すぎたようだ』

店主が、こう説明してくれました。日本と

同様、たくましいエネルギーを持つ西ドイツだけに、本腰を入れてポルノ産業に取り組むとなると、ポルノを外貨獲得の重要輸出品にしている北欧諸国にとっては大変な脅威でしょう。先にも書いたように、もはや終末点にきているポルノの壁を西ドイツが、どんな方法で、ぶち破るか。彼等のオリジナリティに期待したいものです。

話は変わりますが、まるでタイミングを合わしたように、この西ドイツと正反対に六月二十一日からポルノ規制に乗り出したのがアメリカです。ニクソンは支持者であるミドルアメリカ（保守的な中間層）の意向を尊重した上で、取締まり最高裁の人事を自派で固めた上で、年間数億ドルに乗り出してきたのですから、年間数億ドルといわれるセックス産業は致命的なダメージを受けることになるでしょう。すでにニューヨークでは最大のポルノ映画の供給元である〝アロー映画社〟が手入れされ、8ミリフィルム、プリントなど78万ドル分（20億円）が押収されました。同社は犯罪シンジケートと密接な関係があり、その資金源になっていたそうですが、この手入れによってニューヨーク、ニュージャージー、コネチカット、ボストン、アトランタなどのポルノ・ショップは大打撃を受け閉店の止むなきに至りました。また、デトロイト、ミルウォーキーでも自発的に店じまいする業者が、あい次いでいるといいます。

そればかりか、州によっては、〝プレイボーイ〟〝ペントハウス〟などという名の通った男性専用雑誌までがヤリ玉に上げられ、ジョージア州では再上映されていた〝カーナル点数を稼ぐつもりで始めた弾圧でしょうが、〝猥褻〟の規準をめぐって今後、激しい論争が巻き起こることは必至でしょう。すでに『憲法で保障された言論、表現の自由を守るためにはポルノも、やむをえない』という考えと『ポルノは社会の害毒である。公序良俗を優先すべきだ』という意見が真っ向から対立しているそうです。

もっとも成人用劇場で上映されるアメリカのポルノ映画は美しい女優やモデルを使い、そのものズバリのファック・シーンが、ふんだんに登場する、ものすごいものです。それだけに〝好き者〟が、わんさと押しかけるとみえ、興行収入は驚くべきものがあります。一例をあげると〝デープ・スロート〟（深いのぞ）は製作費4万ドルで興収は300万ド

ル〝不道徳なティーズ氏〟は3万4千ドルで2000万ドル〝ビクセン〟は7万2千ドルで6000万ドル……なにしろ投資の100倍に達する利益があるのですから、業者にしてみれば黙って引き下がることなど、とうていできない相談です。ポルノ映画のメッカであるハリウッドのサンタモニカ街ではフィルムが劇場から引き揚げられ、別のルートに流されているそうですから、典形的な悪法といわれている、かつての〝禁酒法〟の時代のようにポルノ規制が犯罪シンジケートを太らすだけの結果に終わるのではないでしょうか。

×　×　×

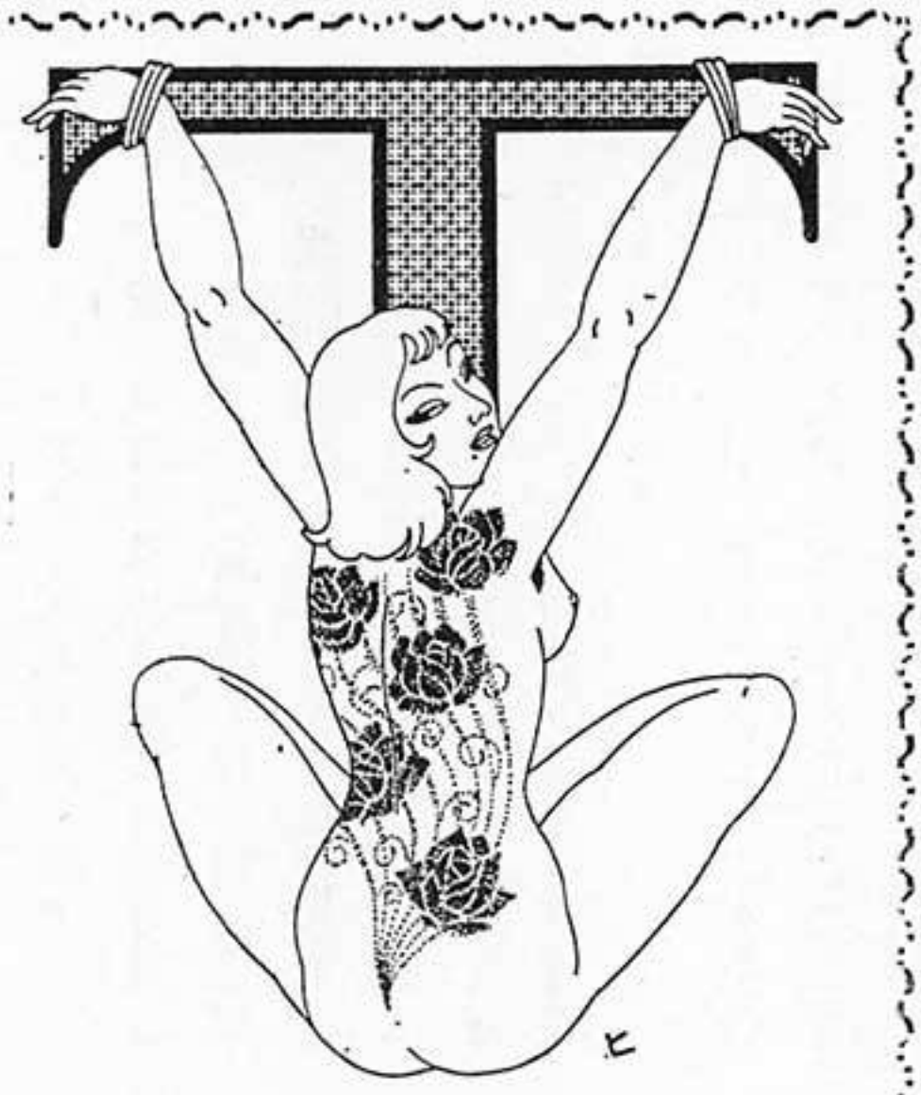
2週間あまりの短い旅行でしたが、行動が制約されるグループ・ツアーとちがって、自由きままに振る一人旅は、やはり大きな魅力があり、得たものも大きかった様な気がします。とくに第二次大戦を同盟国としてともに戦ったドイツの年配の人たちの親日的な態度は印象的です。見も知らぬ異邦人の私にビールを、ごちそうしてくれたり、自分の家に泊まれと誘ってくれたり……戦争に敗けて焦土の中から立ち上がりながら、経済大国として今日の繁栄を築き上げた両民族の間には共通した〝なにか〟があるようです。これがいっそう彼等の近親感を誘うのでしょう。

帰途はオープン・チケット（注＝空席さえあれば、どのエア・ラインの、どの便でも自由に利用できます）でしたので南回りで香港まで帰り、台北に立ち寄って二年来の恋人である美術学校へいっている魅力的な小姐とのデートを楽しみにしていたのですが予想外の出費が続いてコペンハーゲンで、ついにパンクしてしまいました。〝往き大名（もともとしがない御家人程度ですが）の帰り乞食〟でコペンハーゲンからJALの北回りを利用する羽目になってしまいました。妻は

『自分一人が、いい目をして……』

と、ふくれ返っていますが、目下の私の最大の関心事は、ストックホルムやマルメで買って郵送を依頼した品物が無事に着いてくれるかどうか、ということです。

まだいくつかの国を訪問したいという気持を感じる。



カット・マエダヒオミ

パリ雑感

風物詩＝SM＝

＝真行彰＝

週刊誌はもとより一般誌にも、またテレビでも「SM」なる語がとび出す時代になったが、週に何度かは書店に足を運ぶ私は、五年ほど前には想像も出来なかったSM誌の氾濫を目の前にして、やはり一種の、とまどいを感じる。

数多くのSM雑誌、緊縛写真集が、ところ狭しと並べられてあるという現象には、マニアの一人として複雑な気持を抱かせられるのであるが、それはともかく、これら似たり寄ったりのSM雑誌の中で、本当のM女性が登場し、内容のある読物を提供してくれるのは奇譚クラブをおいて他にはないと、心底から私は思っている。この奇クなれ

ばこそ、今までに数々の鬼才を育てあげ、長い歴史とともに、世のSM愛好者に安らぎを与えてこられたのであろう。

さて、私は今冬、パリを訪れる機会にめぐまれ、約一カ月間滞在してきたのだが、単なる異国の魅惑のみではなく、かなり以前に『O嬢の物語』を読んでいた私としては、サドを「花の都パリ」の裏面探訪に当てた国としてのパリに、強く惹かれていたものであった。

彼の地での仕事の合間に、ことは云うまでもなく、オーバーの襟を立てて、夜のパリを、さまよったものである。

サン・ドニ通りで金髪の娼婦をカラカイ、セックス・ショップ（つまり大人のおもちゃ屋）を覗きまわったりしたのであるが、サドの国フランスだからSMに関する本や雑誌は、日本よりはるかに質量ともに勝っているに違いないと、きめこんでいた私の考えは、大分、見当違いであったことを知らされた。

大人のオモチャ類は、日本と殆ど変わらず、もしかすると、日本からの輸出品が並べられているのでは……とさえ思った。本は、単なるエロ本においても、日本のものの方がカラー頁もあり、背景や状況設定も行届いていて勝っているような気がする。フランスのはセックスそのものを扱ったものが多く、細やかな？　エロティシズムに慣れている日本人の目には余りにも単純すぎ、味気なく映るのではないだろうか。

SM関係についても同じで、サディズムとは、要するに相手を虐めて苦痛を与えること、という素朴な定義が、そのまま生きているようだ。

従って、羞恥心とか悲哀感を感じさせ、想像力をかりたてるという要素を持ったものには殆どお目にかかれなかった。

縄を使った縛りは少なく、たいていが手錠や鎖、それに革の拘束衣である。時たま、縄での縛り写真をみかけても、縄がゆるんでいたり、いかにも不器用な縄掛けであったりして、およそ緊縛美とはほど遠いものと云わざるを得ないのが実情であった。

また、これらの本は、たいてい透明ビニールのカバーで包まれ、中を立読み出来ないようになっているところなどは、日本とあまり変わらないが、ズラリと並べられているところを眺めてみても『奇譚クラブ』に類するような雑誌は見当たらなかった。しかし、店の隅っこのほうに、余り大きくないSM写真集があることはあった。だが、大分、以前に撮った写真であるらしいことがすぐわかり、ポーズも平凡なものばかりで買う気は起こらないものだった。

ただ、日本では見られないようなことが一つ。それは、アベックでセックス・ショップに来て、仲良く何ごとかを囁き合いながら、堂々とそれらの本を物色し、大人のオモチャを手にとってみたりしている風景にぶつかることだ。私の行った四軒のセックス・ショップで、どの店にも少なくとも一組のアベックは見かけた。（それに力づけられたわけではないが、私も一度、女性を誘って行ったことがあった）

一番大きな店で見かけたのは学生同志らしいアベックであったが、彼と彼女は寄りそって、壁に展示されていた革の拘束具や鞭を見詰めながら、何かしきりに囁き合っていた。もちろん私は興味を持って、それとなく窺っていたのだが、それを買った様子はなかった。しかし、二人の顔付きは、ただ物珍しさで眺めているという表情ではなく真剣そのものだといえた。しばらくして、女性が男の耳元で何か云って二人は出ていった。私は、二人がホテルに行ったのではないかと思うが、そこでSMプレイが行なわれたかどうかは勿論、知らない。

ともあれ、フランスのセックスは即物的で、およそ情緒に欠けている感じで、SMについても、緊縛美なる言葉が存在する日本のSM感覚とは、かなり異なるように見受けたのである。

〔カメラ〕と〔ペン〕のルポルタージュ

天神祭に来た女

〈正真正銘のマゾ女の巻〉

塚本哲三

マゾは誘発する

愛染まつりに始まり、住吉神社のお渡りで終わる大阪の夏祭も、七月二十五日の天神祭の頃は、一年中でも一番、暑い。

この暑い天神祭の日に、私の所へ責められに来る女があった。毎年のように、きまって天神祭の日に、電話連絡があって、住所も明らかにしない、この女を、私は、いつしか、『天神さん』と呼ぶことにしていた。

今年も、ひょっとしたら、電話が、かかってくるのじゃないかな——と、思っていたら案の定、天神さんから電話があった。

「御無沙汰しましたけれど、今日は、ご都合いかがですか。お差支えなかったら、私、いじめて頂きたいのですけれど……」

控え目な彼女の声を聞いたとき、私は急に専制君主国の暴君のような気持になった。

〝どのような無茶な凌辱プレイをやったってこのマゾ女だったら、悦びこそすれ、いささかも悔むことはないのだ〟

そう考えると、私の身体のなかに、異様なまでの心の昂まりがあった。いや、心だけではない。現実に身体の一部だって、急激に充実感を持った。電話を聞いただけで、そんなことになるなんて、やはり私って、助平なんだなあ——と、改めて思う。

どんなに忙しくたって、こいつに誘いをかければ、のこのこと出かけてくると、見すかされての電話なのか。彼女の哀願調の言葉からは、そんな感じは少しも受けなかったが、私は、マゾ女の誘いに素直にのった。

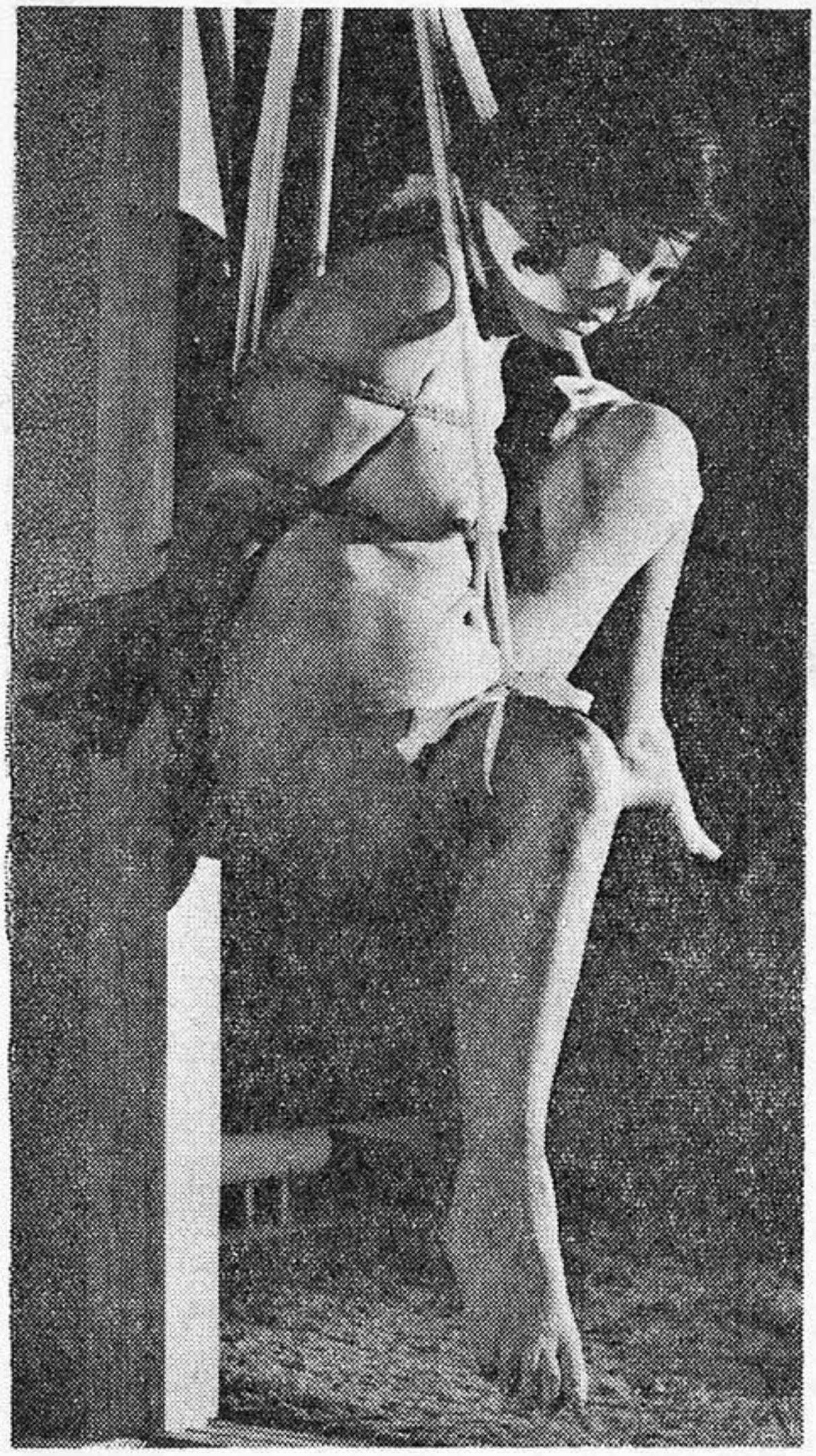
「私、一度、天王寺公園か、大阪城公園なんかで責められてみたいわ。この頃、七時すぎまで明るいでしょう。だから、その頃までに場所をきめておいてプレイしたら、面白いんじゃないかしら?」

彼女は私に、そんな提案をしていた。夏祭の太鼓の音を耳にしながら、野外のSMプレイをやるのも悪くはないなあと思う。

私はかつて、やはりマゾの性格の強い女性を伴って〝夜の野外〟のプレイをやったことが何度かある。勿論、夏のことであったが、海岸の松の木に裸にした女を縛っておいて写真を撮ったのである。

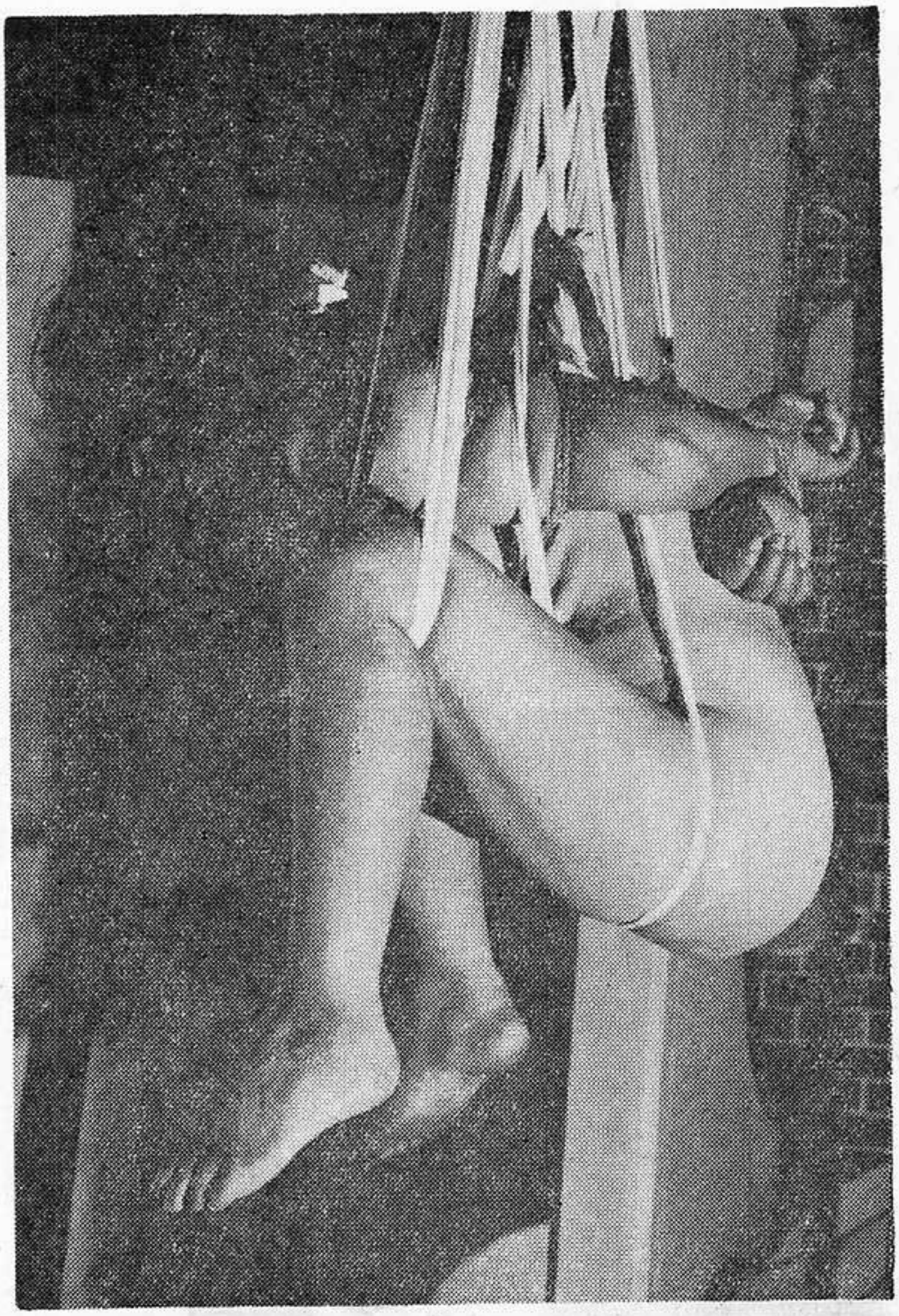
真暗でピントを合わすことが出来ないので三脚にのせたカメラは、目測で計った距離をセットし、シャッターはバルブにしてフラッシュを一発、これで撮影の方はOKというわけだが、どこからくるのか、夥しい蚊の襲来でオジャンになってしまった。

海岸の砂浜でのプレイも、予想外に強い風が海の方から吹きつけてきて、その風が巻き



顔や二の腕に襲ってくる執拗な蚊を、私の方は払いのけることが出来るが、裸で松の木に縛られている女の方は、たまったもんじゃない。それこそ蚊責めの実験のようなもので全身、腫れ上がってしまった。松の木の背後でマグネシュームを焚いて、逆光で緊縛女体を浮かび上がらせるというプランも結局、蚊の襲来でオジャンになってしまった。

群には、まいってしまった。



のムードを、もろに駆り立てられることがある。この女も、巧まずして、その全身から、にじみ出るようにして、私を挑発した。それこそ、天性のマゾなのであろう。

四つ手網責め

外気は三十度を越す暑さであったが、一歩室内へ入ると、一遍に汗が引っ込んでしまうくらい、冷房が、よくきいていた。

私は湯から上がってきた天神祭の女の浴衣を引き剝ぐと、抱え上げてベッドの上へ仰向けに投げすてた。もう、始めから写真なんか撮る気はなかったので、今日は責め一点張りで淫虐さに徹底してやろうと考えていた。

女をベッドの上へ仰向けに寝かせておいて手足に、それぞれ縄を結びつける。幸いなことに、マットレスの四隅には、運ぶのに便利なように把手がつけてある。その四隅の把手へ、女の手足の縄を括りつけてしまう。

女は、仰向けに大の字に固定されてしまうのである。私は、これを〝四つ手網責め〟と名づけていた。お誂え向きに枕が二つある。これを女の尻の下へ敷いてやるのだ。

こうして、お膳立てが揃ったら、ほとんど上げる砂で、目や口に砂が入り込み、もう、カメラを操作することなど、とても無理だった。他人に覗かれるかもしれないというスリルは、多分に二人の気分を盛り上げてくれはしたが、所詮、長居することは、むずかしかった。やはり、SMプレイは、密室で秘かに演ずるのが、上策ではないのか。

だが、彼女が、淀川の堤防のようなアベックが密会するような場所で責めてほしいというようなマゾ心を吐露することによって、私の責め心は、いたく刺戟された。とことんまで、この女を、責めて責めて、責め抜いて、音(ね)をあげさせてやろうと思った。

相手によっては、その言葉や態度で、SM

の女は、期待で胸をわくわくさせて、私が、まだ何もしなくても、身体をもじもじさせて身悶える。なにしろ、お尻の下の二つ重ねた枕が、いやが上にも、女体を珍妙な開股縛りにさせているからだ。

これで、ライトを点灯してカメラを構えるに火がついたように燃えさかってくる。

――と、いうことになれば、女のマゾは一遍

そんな格好で、カメラをショートでアップを狙ったことがある。はじめての女で私はサジスチックな気持の昂まりから、手まで添えていろんなエッチな写真を撮ってしまった。

次に逢ったとき、私は自分の不作法な行為を詫びたところ、「あの時が最高によかったわ」という返事が返ってきたので、大いに安心したことがある。もっとも、この天神祭の女はそんな気遣いのいらないマゾ女だ。これからどんな責めを加えてやるか、そのテクニックだけを考えればよいのである。

まだ、この女が房々としていた頃である。

私は、〝恥毛編み〟という責めとも、遊びともつかぬSMプレイをやったことがある。

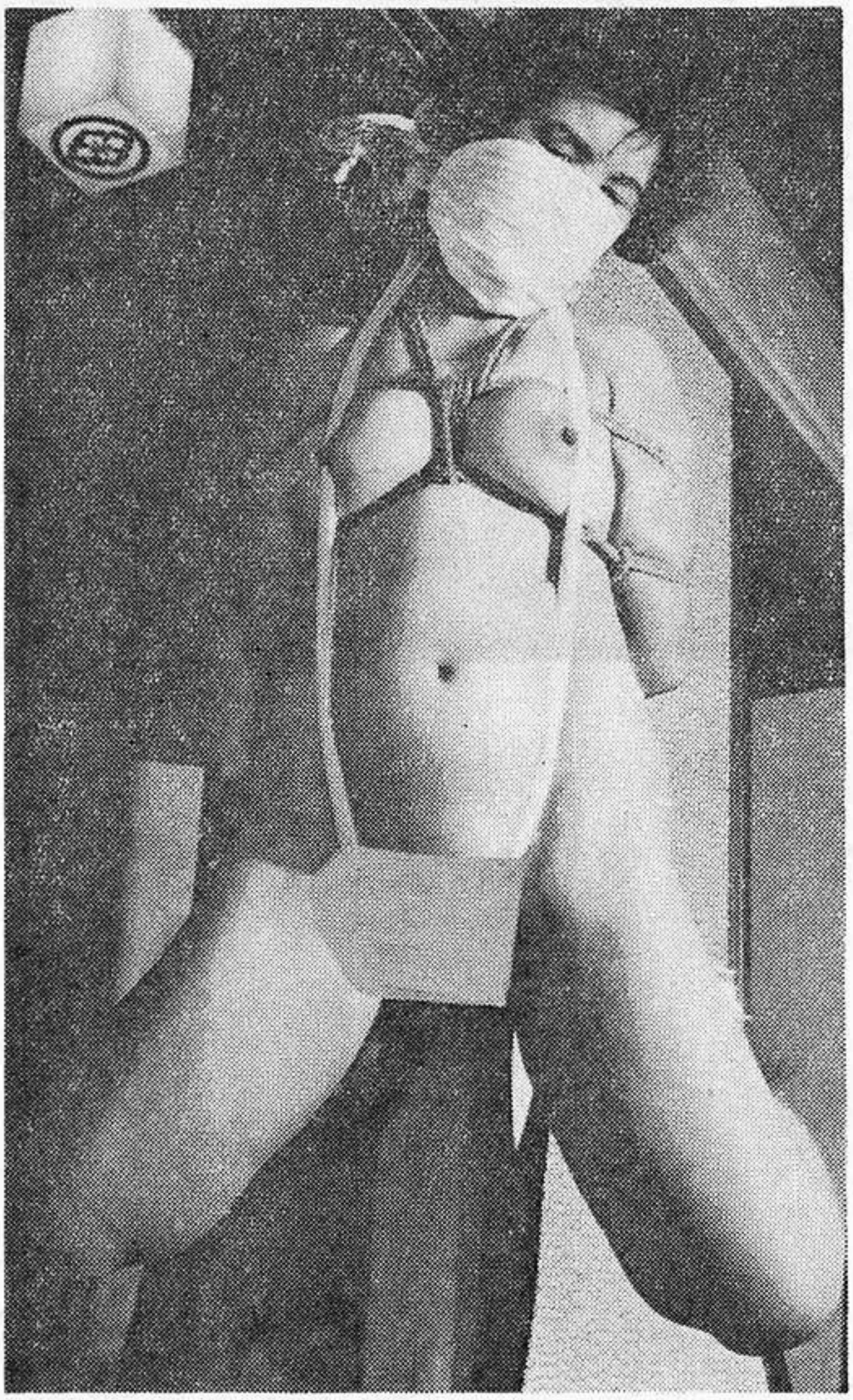
三つ編みを左右に分けて、小さなリボンをつける。これは、カメラの被写体としても、結構面白いものだ。もっとも、こんな写真は発表出来る代物ではないが、いろんな形に髪を編んでおいて、マジックインキで、そのまわりや下の部分に、顔やなんかをいろどるとそれは、それは面白い写真が出来がる。

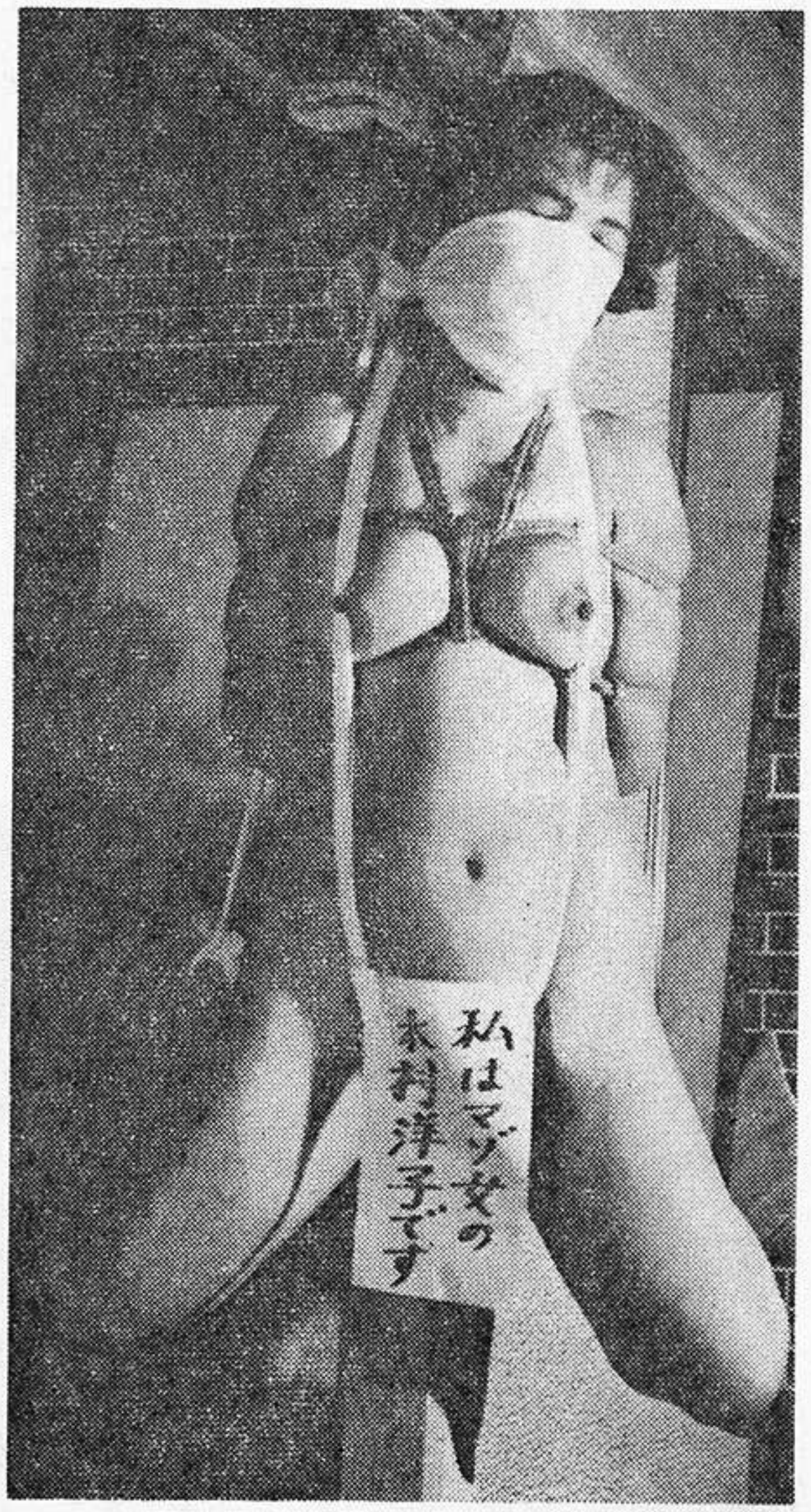
四つ手網縛りでは写しにくいので、蒲団を利用した変わった縛り方をしたことがある。

掛蒲団をくるくると巻いて縄で縛り、一本の太い丸太棒のようにしておく。ころがした蒲団の丸太棒の上へ、女を仰向けに寝かせて手と足を、それぞれ、蒲団の裏側へまわさせて縛っておくのである。足の縛り方を変えたり、丸太棒の位置を変えることによって、いろんなバリエーションを楽しむことが出来るのだ。

見られることや、写真を撮られることを喜ぶのは、マゾ女に共通したところだから、不精をせずに、こまめに、責める必要がある。

筆やら、クリップ、メンソレータム、こけ





し、バイブといった責めの小道具は、どんな責めに使うか、奇クの読者の方だったら先刻ご承知のことと思う。目下のところ、その詳細な記述が出来ないのが残念だが、さっき書いた〝恥毛編み〟にしたって、これは、なかなかの刺戟的な責めである。嘘と思われるなら、一度、彼女に試みられて、その反応を、ごらんになられるとよい。

やがて、女は、「剃って」と、のたまう。

まあ、この蒲団の丸太棒縛りでの剃毛責めは、電気カミソリでも、安全剃刀でも、ゾリンゲンの洋剃刀でも、あるいは荒っぽく、鋏で虎刈りにしたって、もともと、責めなのだから一向に構わないわけだ。

私は、この女に関して、最初は剃毛責めだったのが、やがて、〝抜毛責め〟にエスカレートしてしまった。今の彼女が、ほとんど禿山に近い状態なのは、この私の暴挙の、しからしむるところだと慚愧に堪えない気持だ。

毛抜きで一本一本、抜いてゆく、あの楽しみは、剃毛では味わえぬスリルである。毛根をつけたままで抜けてきた毛を、紙の上に、ぺたぺたと貼りつけてゆくときの、あのマゾ女を占有するという満足は、まことにこたえられない。白い女体を目の前にして、この女を、自分の気侭に、思いのままに弄ぶことが出来るというS的な気持を満足させる快味は何物にも換え難いものである。マゾ女を自分専用の玩具にするということは、Sの醍醐味でなくてなんであろう。

「そんなことをしたら、なくなってしまう。それだけは勘忍して……」

哀願する言葉もなんのその、ピュッ、ピュッと毛抜きで一本一本、抜いてゆく。そのときの悲鳴が、また、何ともいえない責めの伴奏曲になるのだ。

五本、十本、二十本——と、抜き進んでゆくと、最初、あれほど耐えられない悲鳴をあげていた女が、諦めたのか、あるいはまた、他の原因があってのことか、次第次第に、おとなしくなってきて、この責めを楽しむような素振りを見せはじめてくると、私は馬鹿らしくなって、途中で止めてしまう。

あくまでも、自分の楽しみに責めるのであって、そのマゾ女の楽しみのために、責めをやっているのではないのだから……。

自分の好きな責めを好きなときにやるのが

面白いのである。女が、もう止めてしまうのかと、物足りない思いでおっても、私が飽きてしまえば、その責めを中止して、次の責めの趣向を、こらすのである。

この女に対する責めで忘れることの出来ないのは、〝クリップ責め〟である。クリップは、文房具店で売っている大中小、強弱さまざまなものが手に入る。荒物屋へ行けば、洗濯用のが、いろいろある。まあ、金属製のヤツの方が、責めとしては面白い。

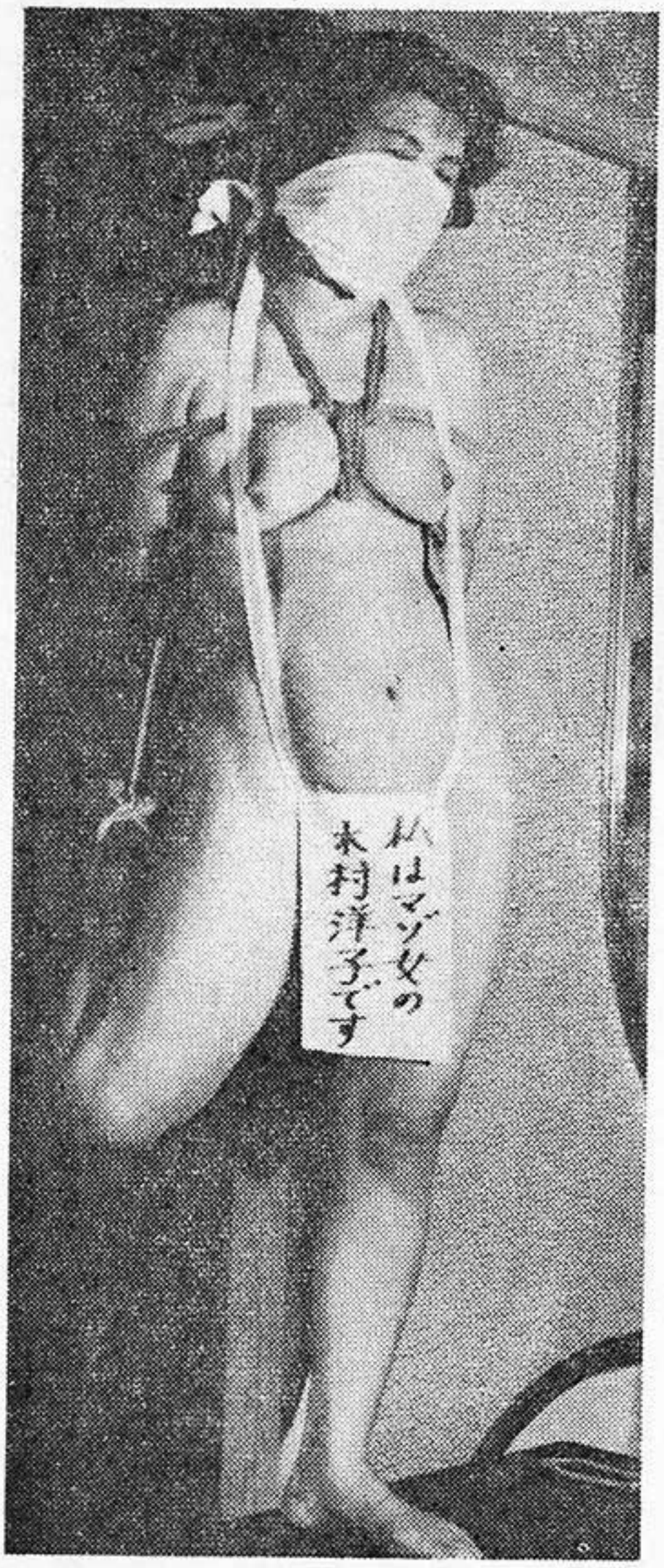
このクリップで、女体の各処を挟むわけであるが、足の指や掌を挟んだって、これは、たしかにあまり面白くない。鼻とか頬っぺたそれに、お臍のまわりや乳首なんかは、手の自由を奪っておいてから挟むと、責め手は、そう苦労しなくたって、相当、責めの効果を挙げることが出来る。

たとえば、目隠しをしておいて、「さあ、どこどこを挟むぞ」と言葉をかけてから、さっと、その指示した場所を通りすぎて、思いがけない他の場所を挟む方法や、「今、どこを挟んだか、言ってみろ」と、女に体の場所を言わすのなんかも、面白いものだ。

だが、なんといっても、この〝クリップ責め〟の圧巻は、女体の中でも、最も女らしい女ならではの場所がある。それは何処であるか、奇クの読者であったら、ハハンと、お気づきのこととは思うが、少なくとも、同時に三カ所は、バッチリと挟むことが出来る絶好の責め場所がある。

痛がるどころの騒ぎではない。それこそマゾの悦楽を、最高に味わうところを、私は極力、クリップ責めにしてゆく。

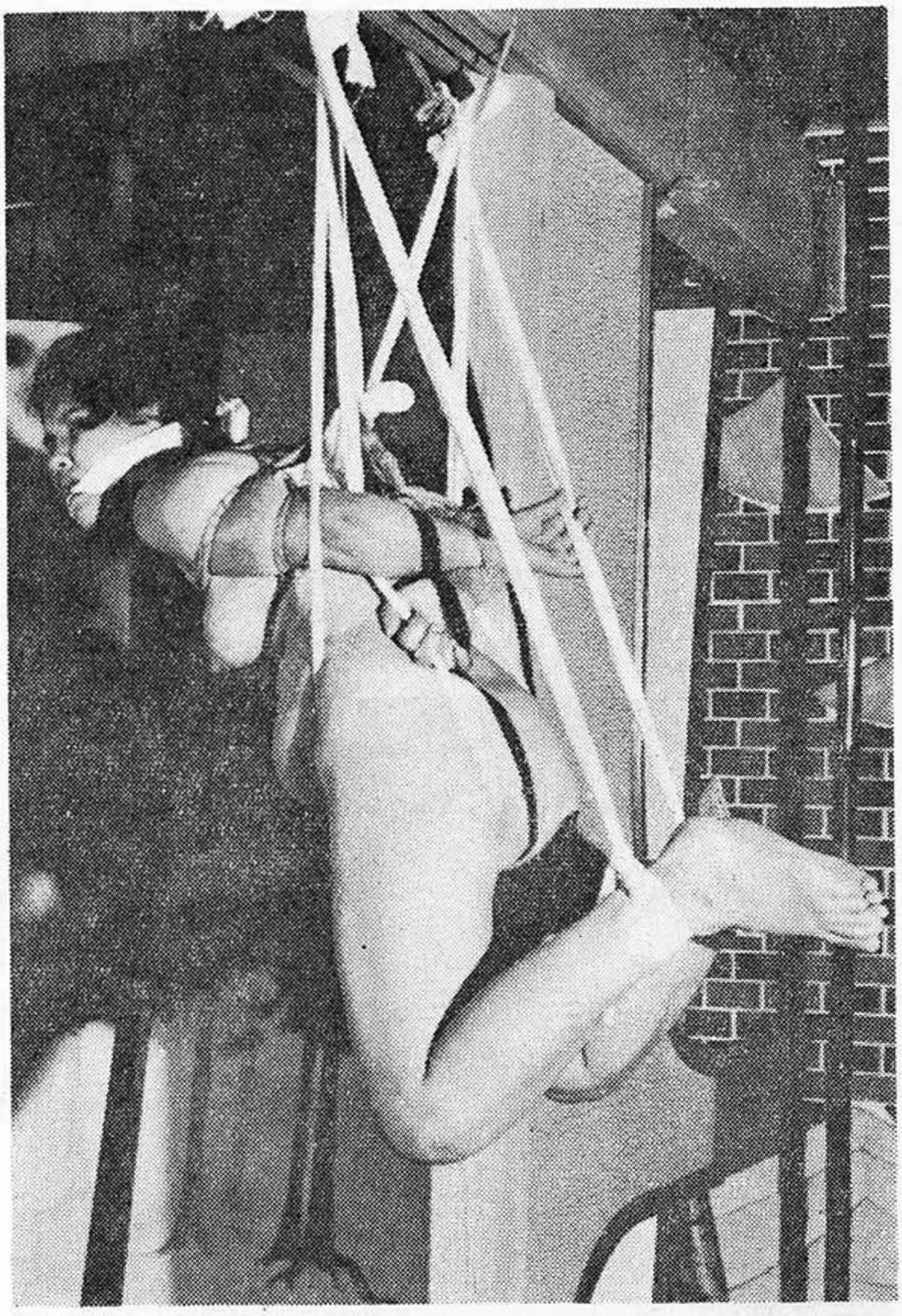
これを詳細に記述すれば、これだけでも、雄に一篇の長篇ポルノ小説が書けそうに思うのだが、目下の日本の現状では、とても許されそうにもない。若し仮に、将来、絵画や写真の方は、さておいても、文章の方だけでも解禁になったとすれば、何をさておいても、私に、そうした文章を書く場を与えてほしいものだ。そのときは、存分に腕を揮って書きまくりたい。



鶯の谷渡り

さて、このマゾ女、といっても、それは秘められた密室においてのことだが、それ以外のときは、世間普通一般のＯＬと何ら変わったところはない。

少し時間があるから——と、いうことで街の喫茶店で落ち合ったのだが、いざ逢ってみると、四時半までに、自動車の教習所へ行かなければならないと言う。一緒についてきた



T氏が、「それじゃ、プレイをする時間があまりないじゃないか」と不服顔である。

「仕方がないから、終わったら私が教習所まで送って行こう」ということで教習所のある北大阪に近いモーテルを選んで飛び込んだ。

そんなわけで、その日は、最初から大分トサカに来ていたT氏がハッスルした。私は部屋の隅に椅子を置いて、そこにどっかりと腰をおろし、カメラを膝の上に置いたままで、専ら見物役に回っていた。

そして自分では直接、手を下すことなく、口先だけで助言するのである。

「もっと二の腕のところの縄を締めつけて、後手首を上へ挙げなきゃ駄目じゃないか」

他人が縛っているのを見ていると、つい文句を口に出したくなり、手首が下がってくる。縄が緩かったりしてくる。縄が緩かってくる。縄が緩かったり、手首が下がっていたりすると、だらしなく見えて仕方がない。だが、T氏にしたら、あとの素晴しい責めのための準備段階なのだから女の手の自由を奪っておけばよい——というぐらいに考えていたのだろう。

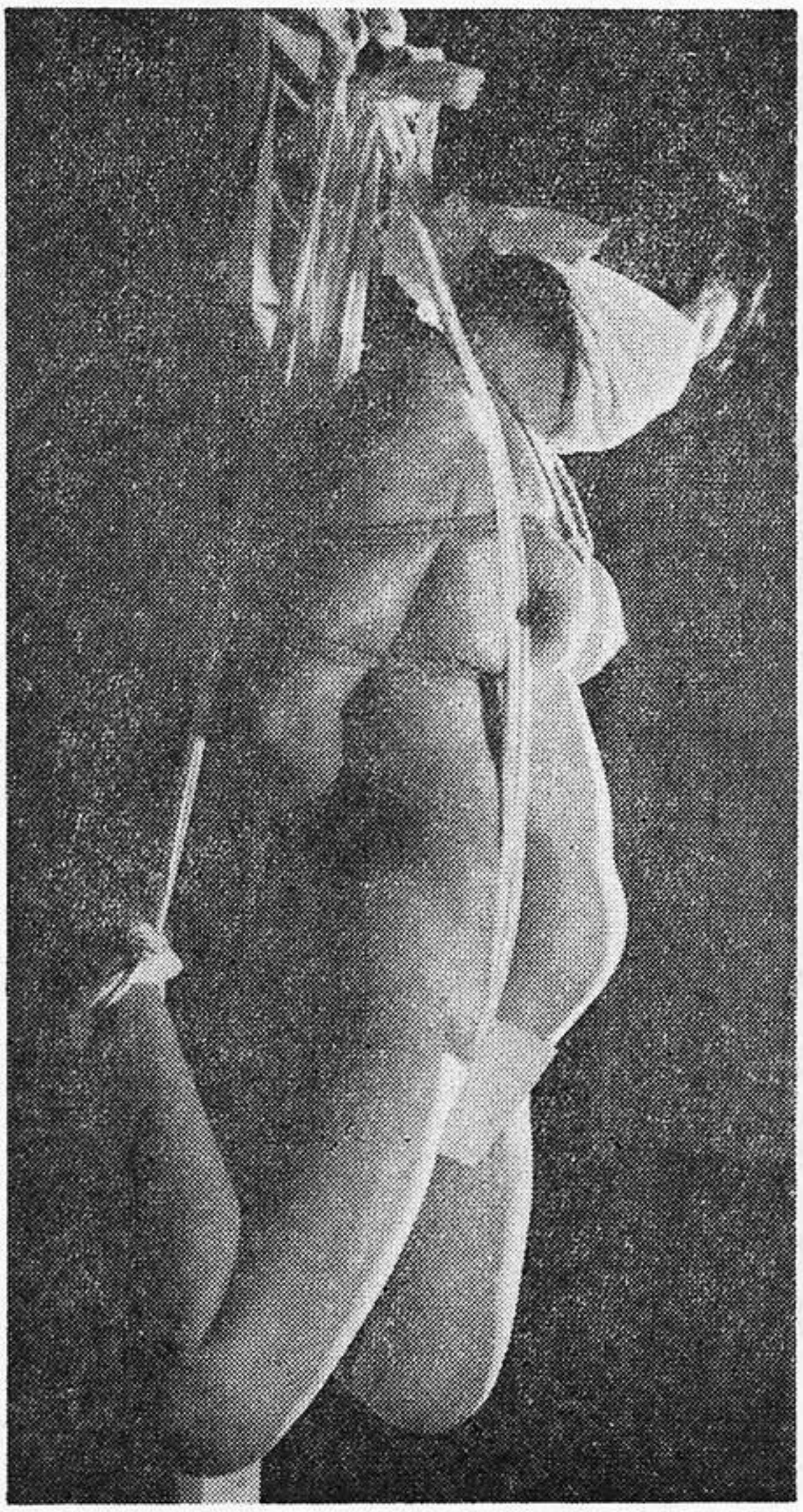
部屋の隅から隅へ、対角線に縄を張りめぐらし、その縄を女に跨がらせたのである。

全裸の女が後手高手小手に縛られて、縄を跨がらせられている——といった図は、まことに奇妙な責め図絵である。両端で固定した縄の高さは、女のお臍ぐらいの高さであるがピンと張ってあるわけではないので、跨ぐことは跨げるのだが、女は爪先立っていないと股に喰い込んできてしまうのだ。

なにしろ、両手の自由がきかないのだから両足で爪先立っている女は、不安定きわまる格好で、右へフラフラ、左へフラフラ。辛うじて、股の間の縄に支えられて、転倒することだけは助かっている。

そんな目に合わされながらも、必死になって身の安定を保とうとしている女を、私は哀れに思いながらも、実際は、時々、椅子から立ち上がっては、意地悪い視線を、縄を挟ん

だ女体の一点に走らせたりしていた。
「歩け、歩け。歩くんだッ」
T氏は、ズボンのベルトを抜くと、爪先立って、ともすれば真逆さまに転げようとする女体の安定を計っている女の脛をハッシと打ちすえた。
「ああ、やめて。ぶたないで――」
女は、よろよろと、よろけながらも、やっとのことで、倒れるのだけは、こらえた。今の彼女にとっては、転げないで、ただ命ぜられたことをしなければならないと、それだけを思って、なんとか、それを果たそうと頑張っているように見えた。
私は、自分が手を下した責めではないので、この綱渡りの責めは、あまりにも惨酷すぎはしないかと思った。でも、いまさら、それを言い出すのは変で、言い出せなかった。
T氏の厳命に対して、何とか、それを実行しようと、懸命になっている全裸の女に対して、私は微かな嫉妬の念を覚えた。
むごい命令に対して、女が反発し、この責めを拒否しないかと、淡い期待をもって眺めていた。それに、どうだろう。次にT氏のベルトが、女の臀部に炸烈し、その弾みで、見事に転倒してしまったのにも拘らず、女は、ベルトのムチを非難するどころか、心ならずも転んでしまったことを詫びていた。
「すみません、転んでしまって。張ってある縄が高いもんですから、歩けなくて転んでしまいました。次には、きっと、うまくやりますわ」
肩口をカーペットで、したたかに打っていながら、女は怨み言一つ、言うでなく、再び自分で、その縄を跨ごうとさえ、している。
T氏は軽量の女を、ひょいと抱え上げて、もう一度、女に縄を跨がせる。懸命に歩こうとする女。ベルトを揮って、女の太股や肩口や、臀部を面白半分に叩いているT氏。
女は、じりじり、じり――と、縄を跨がったまま、歩いて行く。
一体、これは、どうなっているのだ。
私は側面からと、斜め前からと、アングルを変えてシャッターを切っておいて、この責めのなりゆきを、じっと見守っていた。
「歩け、歩け。休まずに歩くんだッ」
ベルトのムチは、前進を強要するように、



臀部ばかりではなしに、背中や肩や、縛られた後手首にまで振り下ろされる。

進めば、進むほどに、跨がった縄は高くなってゆく。それでも、女は殉教者のように、命ぜられた通り、必死になって歩いている。

この日の責めは、残念ながら時間がなかったので、この〝鴛の谷渡り〟の責めを、もっともっと、突き進めてゆくことは出来なかったが、それでも、あとになって、彼女に訊ねてみたところ、あの綱渡りは、物凄く快かったということであった。

愈々、縄が高くなって、もう、どうしてもこれ以上は、前へ進めないという際になって女は、「ひゃーッ」という悲鳴とともに、跨がっていた縄から、ころげ落ちてしまった。

だが、今度は、かくもあらんと、予測していたT氏が、大きな腕を差しのべて、床へ体を打ちつけない前に抱え上げていた。

「おい、もう時間がないから、早く、合戦に移れよ。討死の場面は、俺が見事に見届けてやるから、心おきなく果たせよ」

私が、そそのかすと、彼は、女を抱えたままで隣室へ退いた。しかし、勝負はあまりにもあっけなく、あっという間に決してしまって、その後の面倒は結局、私が見る始末となってしまった。

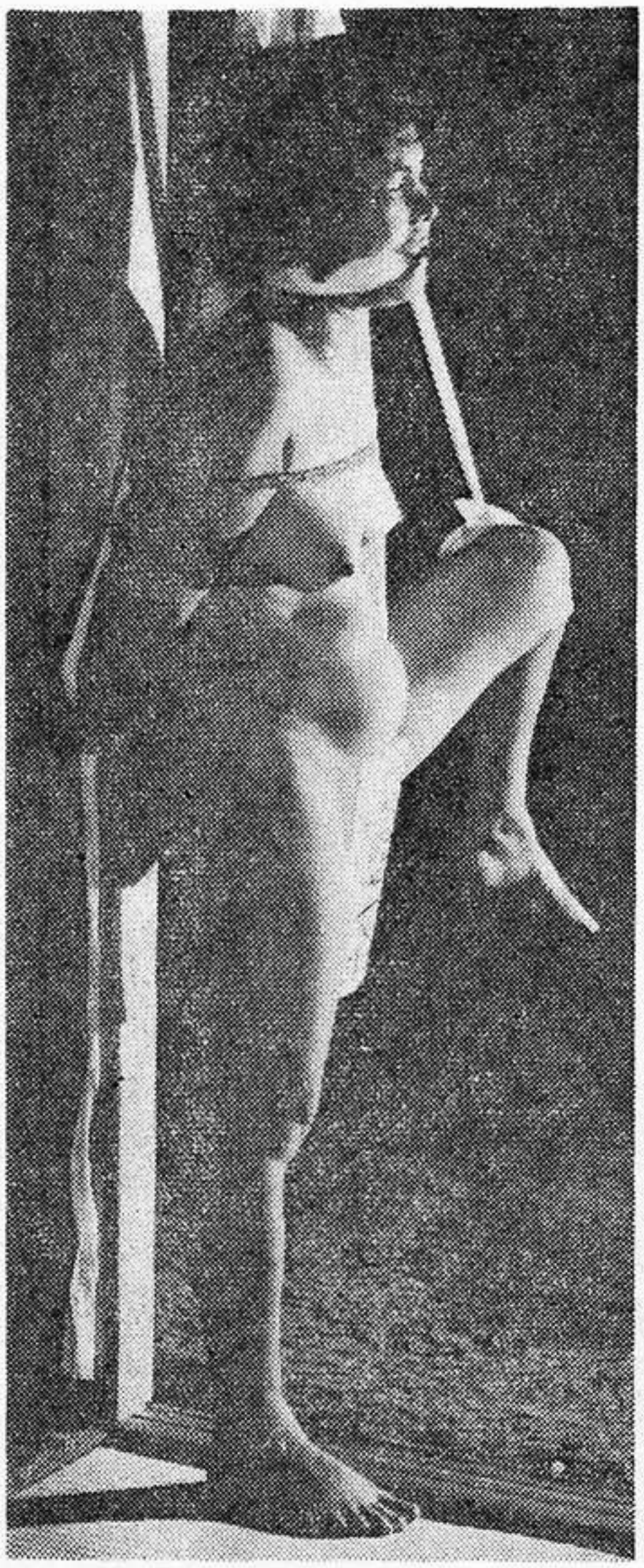
「どうも、責めで、いきり立ってしまったもんで、あとのプレイが、うまくゆきませんでした。汗顔の至りです」

彼は顔を掻いていたが、「若いから、仕方がないさ」私はT氏を、なぐさめた。

極楽往生

さて、四つ手網縛りの女に対する責めであるが、この縛りをされた女は、四方八方、破れかぶれの無防備な状態である。で、私は、先ず彼女の脇腹か、腰の近くに位置して、どっかりとお尻を据えて、リラックスして責めにかかるのである。

〝責め〟といったって、所詮、〝お遊び〟の一つなのだから、そんな親の仇と対したときのように真剣になる必要などない。自分のし



ようとすることを、女に見られるのが嫌なら目隠しをしたらよいし、なんだかんだと、口を出されるのが好ましくなかったら、猿ぐつわを噛ましたらよいだろう。

私は、女の表情や、とくに視線が、どの様に動くのかを見るのが楽しみだから、ほとんどといってよいくらい目隠しは、やらない。それに、責めの途中で、いろんな〝お喋り〟をやる楽しみを味わいたいときは口はフリーにしておくことが多い。責められながら、女が口にする言葉は結構、面白いし、それによって〝責め〟のムードを一層、高めることになることが多いものだ。

時には、猿ぐつわをしておいて喋らし、意味が十分、通じないからといって、それをネタに「もっと、はっきり言わないか」と、責める手もあって、マゾ傾向の女に、こうしていじめてやると、自分が猿ぐつわされているとも忘れて、おかしな位、あわてるから妙である。もともと、憎くって責めるわけではないのだから、理由にならぬ理由を、その都度、その都度、見つけて、いたぶってゆけば意想外のことが現われてくるものだ。

女はどこを一番に責められたく思っているか——。また、ずばり、焦点へ直ちにピントを合わせるか。あるいは、末端から、末端からと中心部へ、じらしながら責めの触手を遡らしながら責めてゆくか。その料理の方法は、いろいろとあるが、何れを選ぶかは自由である。

単刀直入型よりも、迂余曲折型の方が、M女には喜ばれそうな気がするが、一挙に本陣を突いて陥落させる方が、極楽往生するという場合もあるかもしれない。

私は、どちらかといえば、ねちねちと、じらしながら責めたい方だから、お喋りをしながら、腋の下を擽ったり、お臍のゴマをとったり、ヘンなところを引っ張り、先ず、いたずらから責めを開始する。

果ては、自分の裸のお尻を、ぺったりと女の顔の上に乗せるというような責めも、この『四つ手網縛り』である。女も尻の下で悦虐にむせぶよう来るのである。マゾ性も本格的である。

この〈天神さま〉は、そんな四つ手網に縛っておかなくったって、四つ這いに犬のようにさせておいて、足を突き出して、「さあ、舐めるんだ」と命令すれば、さも美味しそうに舐めにくる。これは、何も足の先だけに限らず、男の身体であれば、どこだって、命令されれば必ず喜んで舐めにくる。

「男の体の中で、どこが一番、好きか」と聞けば、「やはり汚いところの方が味がよい」との返事であるが、場所そのものよりも、男

え向きに好都合である。天神祭の女は、この責めを、こよなく愛していた。

やれ突け、それつけ

△天神祭の女▽は、そんな女だったので、私は、とことんまで責め抜いた挙句、凌辱という一幕で成仏させて、それで仕上げをしてやろうと考えていたのだ。

勿論のこと、このタフなM女を、簡単に成仏させてしまっては、天神様の手前も申し訳ないので、それまでには、粘っこく、執拗にネチネチと責め抜いてやろうと考えていた。

江戸時代の末期、江戸や浪華の盛り場で、『やれ突け、それ突け』という淫靡な見世物が流行したことがある。今なら、さしずめストリップ小屋というところだろうが、一風変わったところは、槍のような棒の先に、タンポをつけて、突かせるのである。

何を突くのかといえば、若い女を後手に縛って台の上に坐らせ、足を左右に大きく開かせ、着物の前をめくってしまう。

そうしておいて、タンポつきの槍を持ったお客に前を突かせるのである。

「やれ突け、それ突け」というお囃子に合わの口から出る強い命令が快いそうだ。

前部よりも後部に対して、より強い関心を持っている人だったら、この四つ手網縛りを利用する際、仰向けにせずに、うつ伏せにさせたら面白い。枕を二つ、下腹部へかませると、お尻はピョコンと突き出た格好になる。

このまん円いお尻が、まったく無防備の状態で晒されることになるのだから、責めの格好の攻撃目標になる。ムチを揮うのもよし、浣腸器を用いるもよし。また興至れば、諸君が直接、この牝馬に跨がって御してもよい。

この四つ手網縛りで一番よいことは、苦痛がなくて、拘束に対して長く耐えうること。それに、下がベッドであれば、ますますお誂

せて、若衆は槍で目標のものを突こうとするが、なにしろ目標が目標だけに、手元が狂って、うまく命中しない。

見ていた見物衆は、その度に、ワッと喚声を挙げ、我も我もと、槍の希望者が現われるという趣向である。

さしずめ、この天神祭の女なんかは、自分の大切なところを、見物人の前にさらけだして、タンポ槍の的にしたいと願う、第一の希望者ではなかろうか。抜毛して、つるつるになった肌へ、墨でいろんな顔なんかを書いて突かせたら、さぞかし、飛びきり人気が出るのじゃなかろうか、などと考える。

そんなことを考えながら、私は紙とマジックインキを持ち出してきた。女は、いそいそと、私に近づいて寄り添うようにして坐る。私のすること、ためすこと、それらの一挙手一投足のすべてが、自分の性癖を限りなく満足させてくれるのであるという暗示から、次に何が起こるか、胸をわくわくさせている。

私はマジックインキを女の手に持たせて、紙を指さして言った。

「字を書いてごらん」

「ええ、字って、どんなことを書くの?」

「そうだな、お前の、今、思ってることを、なんでもいいから、書いてごらん」

「そんなこと、何を書くのよ。私には、さっぱり、わからないわ」

「そうか、それだったら俺が言ってやろう。お前の本心をな。言う通りに、そこへ書くんだぞ、いいな。本当は花電車の珍芸で書かせるところだが、今は、それは許してやる。そのかわり、うまく書くんだぞ」

〝天神祭に来た女〟

〝私はマゾ女の木村洋子です〟

〝このマゾ女、売りもの〟

〝変態女、洋子〟

そんな文句を紙の上へ、次々に書かせていった。はじめは、ためらっていた女も、私が手を握って一枚目を書かせてからは、興がのったように、素直に次々と書き出した。

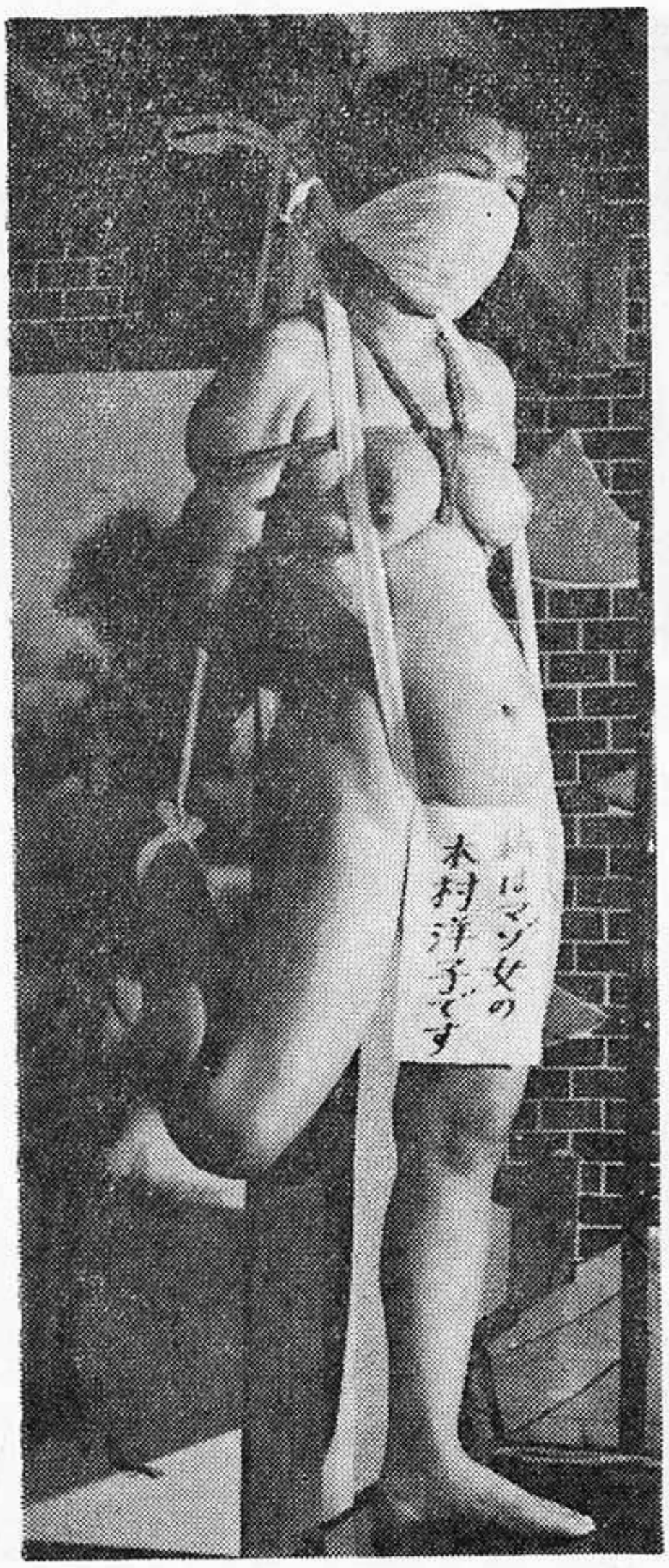
〝私を凌辱して〟

「いいぞ、いいぞ、うまく書けた。もっと、何か、奇抜な文句を書いてみないか?」

「いや、いや、もう、これで結構よ」

「そうか、それじゃ、こっちへ来い」

私は手馴れたロープを手にして女を高手小手に縛り上げていった。ククク、ククク、と女の口から、蛙の鳴くような声が洩れる。二の腕も胸も、くびれよとばかり締めつける縄の快味が、女を呻かせたものか。私は何ら手加減もせずに、縄をぎゅうぎゅう、肌に喰い込ませてから、縄止めをした。



いつものことながら、思いっきり縄で女体を縛り上げたときの気持の良さ。身体中に、しみわたるように溜漫してゆく。

「ざまあみろ。なんというざまだ」

そんな捨台詞が、思わず口をついて出てくるような気持であった。

「こんな縛りなんか、ほんの小手調べだ。今日は、お前の予想もしない責めで、きりきり舞いをさせてやるからな。泣いたり喚いたりしたきゃ、そのときにしな」

私は鴨居に縄の輪を作った。

滑車がなくったって、こうして作った縄の輪を利用して、女を吊り上げることが出来るのに気づいたからである。

この女に対する吊り——。そうだ、最も女としては恥かしい、花の満開した凌辱向きの吊りだ。吊りは吊りでも、苦しめるための吊りだ。吊りは吊りでも、苦しめるための淫虐さをりではなくて、辱かしめるための吊りだ。

『やれ突け、それ突け』の見世物のように、いみ割れたように鎮座ます。ライト上回るプレイを展開させようというのだ。

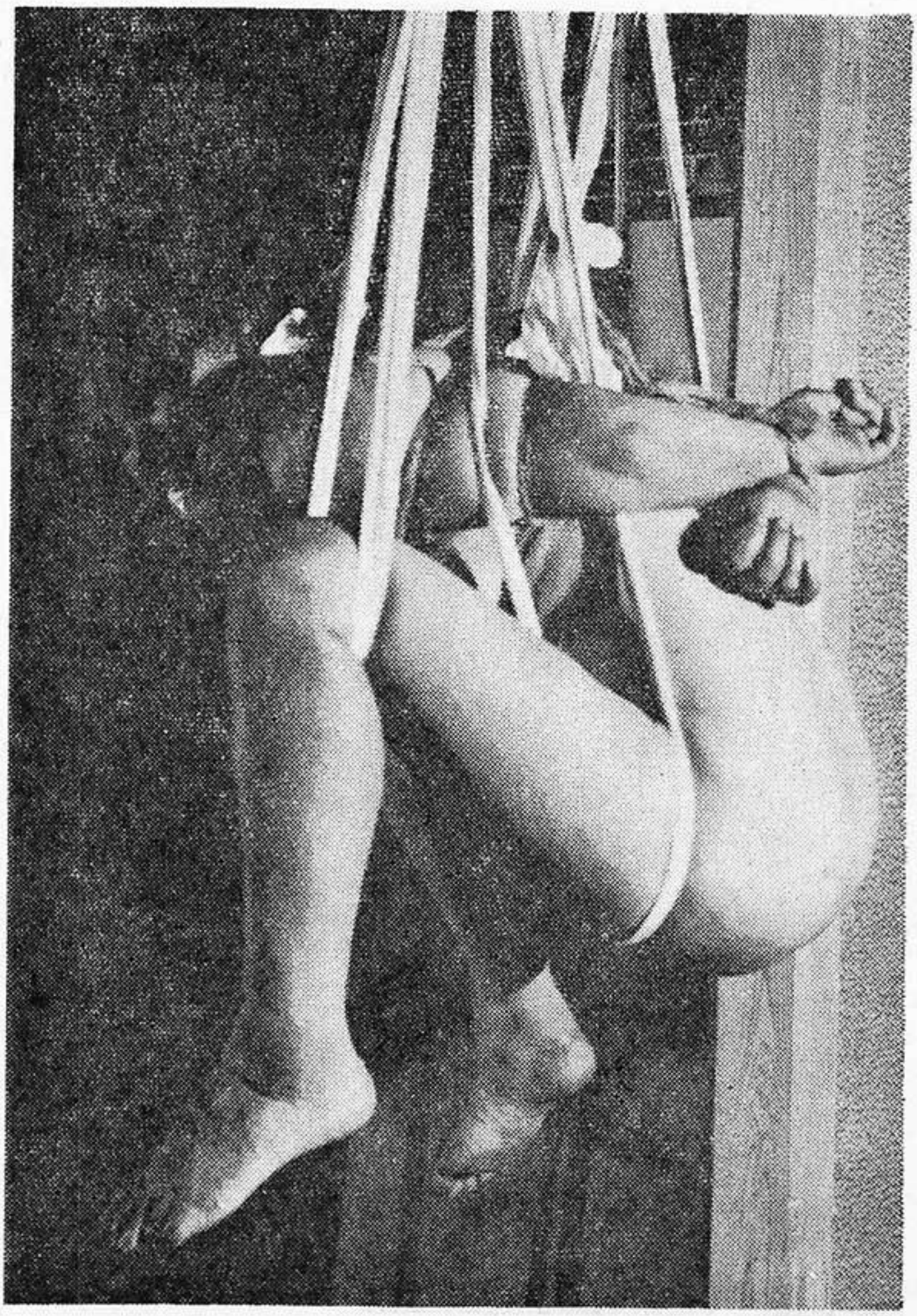
女の体は、引き上げられるにつれて、異様な格好に股を、足を開いてゆく。どんな形になるのか、それは、私にも予測できない。

ツ、ツ、ツ、ツー。

女は苦痛とも何ともいえぬ微かな呻きを洩らして、宙に浮いていった。

私は吊り上がった女の真下に、どっかりと胡坐を組んで坐り、上を見上げる。

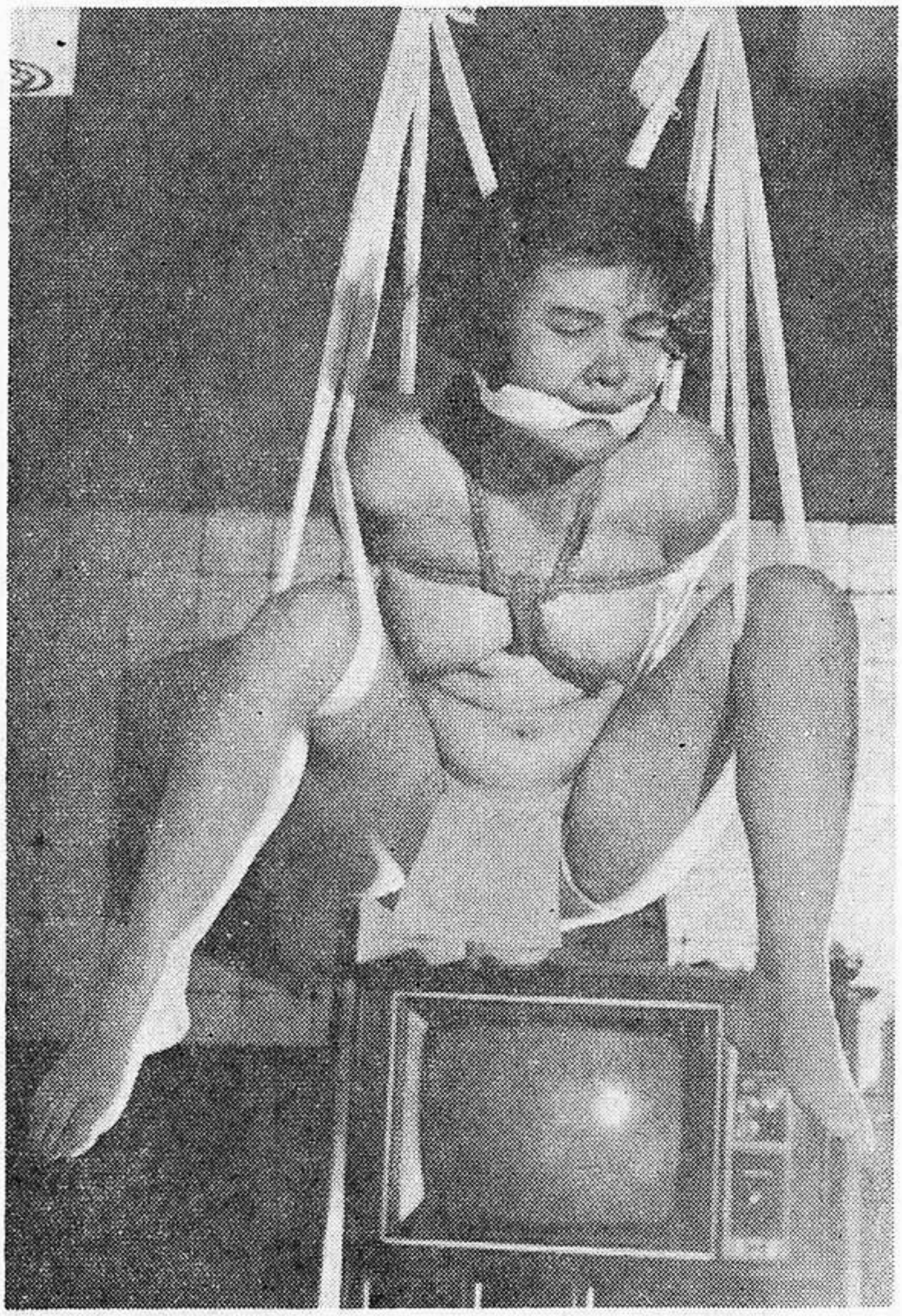
もう、何物にも隠されない女体が、目の前に、いみ割れたように鎮座ます。ライトを下から照らして、女の羞恥心を、いやが上にも、かりたてる。



今や女は、自分では、どうすることも出来ない。ただ、これから襲ってくるであろう責めを甘受するために、そんな、あられもないポーズで待っているより仕方ないのだ。

私は、決して慌てなかった。

下からライトを照らされて、女がどんな変化をきたすか、じっと注意深く観察した。



こうした際、カメラを向けると、数人、いや数十人の男たちの好色な目で覗き込まれたと同じ動揺を、いつも女は、するものだ。

そのときの女の変化を、私は正確に記憶している。それを、今ここで、詳細に報告すると、日本の現法規に抵触することになるので遠慮しなければならないのは、至極残念ではあるが、これもまた、やむを得ない。

普通、女は、そうした体の変化を、他人にさとられることさえ、最大の恥としたものだが、さとられるどころか、赤々と照らしたライトの中で、下から見上げるようにして、覗かれるのだから、M女としても、たまったものではないだろう。

私は、意地悪く、時間をかけて、ネチネチと、執拗に、目で、視線で、いたぶり抜く。

「洋子、お前の○○○は、今、……」

私は詳細に、しかも極力、卑猥な俗語を使って、変化の模様を逐一、実況放送する。

女にしたら、もう、耳も掩いたくなるような気持だろう。両手を後手に、がっちりと縛られているのだが、それも出来ない。

私の言葉のいたぶりで、それは益々、変化する。それを私は、また口に出して、女に知らせてやるのだが、ここで慌ててはいけない。

〝女責め〟の肝腎なことは、ここで、一呼吸も二呼吸も、いけないことだ。

一挙に〝極楽往生〟させてしまっては、その後に、索漠とした気持が残るだけだ。極楽往生を遂げても、紫雲たなびく、極楽の境地を彷徨させるのは、やはり、それ相応のテクニックが必要である。

気の赴くままに行動していては、結果はよろしくない。畳みかけるようなタイミングの良さが、女体を歓喜のルツボに叩き込むことになるのだが、間をとることを忘れてしまっては何もならない。

さんざん、じらしにじらし抜いてから、や

れ突け、それ突けのタンポ槍ならぬ近代的な〝ファイターUP〟と呼ぶ強力なバイブレーターが私の手で餌物を狙っていた。

戦斗機並みの頼もしい名前を持つ、この大型バイブは、USのパテントをもつ文字通りタフな奴で、尖端のイボイボ付きの振動盤は主人の命令通り、疲れを知らぬ働きを見せてくれるのだ。

この〝天神祭の女〟にとっては、これくらい逞しい奴でないと、物足りないだろう。

ブーン……という快音。

狂ったように頭を振るイボイボ野郎。

さあ、どこからでも責めるぞ。

いやはや、ウハァ、ウハァどころの騒ぎではない。

私は、この縛り方、この吊り方の妙味を、いやという程、味わったものだ。

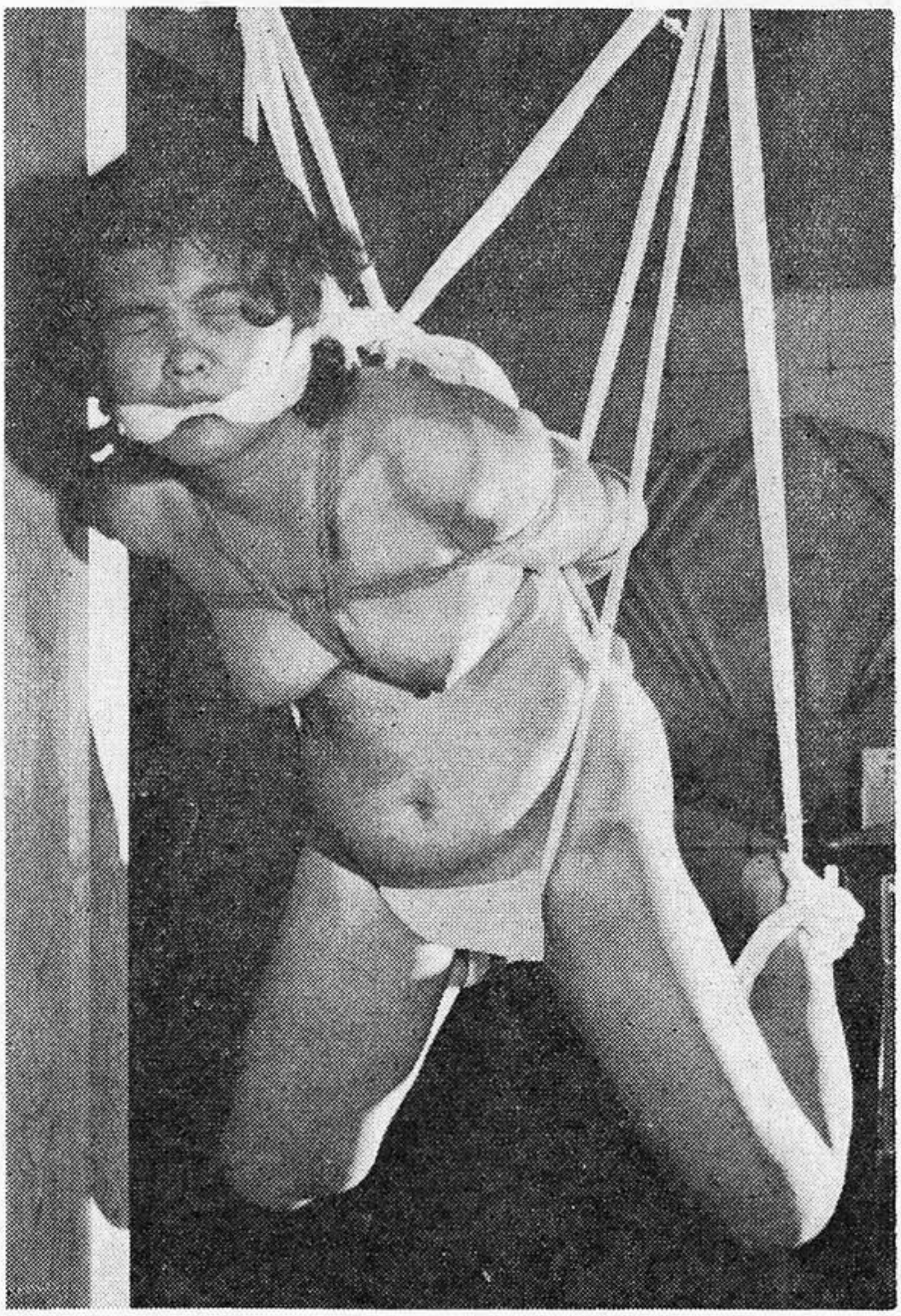
一人で眺めているのは惜しかった。

引導を渡す

ここで私は、女に行きつくところまで行かせずに、蛇の生殺しのままで、するするっと縄を緩めて、下へおろした。

ボロ屑のように、くたくたと畳の上にころがって、まるで反応するのを忘れてしまったかのような女の体を、そのままにはしておかないで、再び変わった縄の掛け方をして、鴨居へ引き揚げる。

右足が極端なまで、一直線に、真横に、張った。玩具の人形だったら、股のつけ根のところで、ポキンと折れてしまいそうな、不自然なポーズだった。

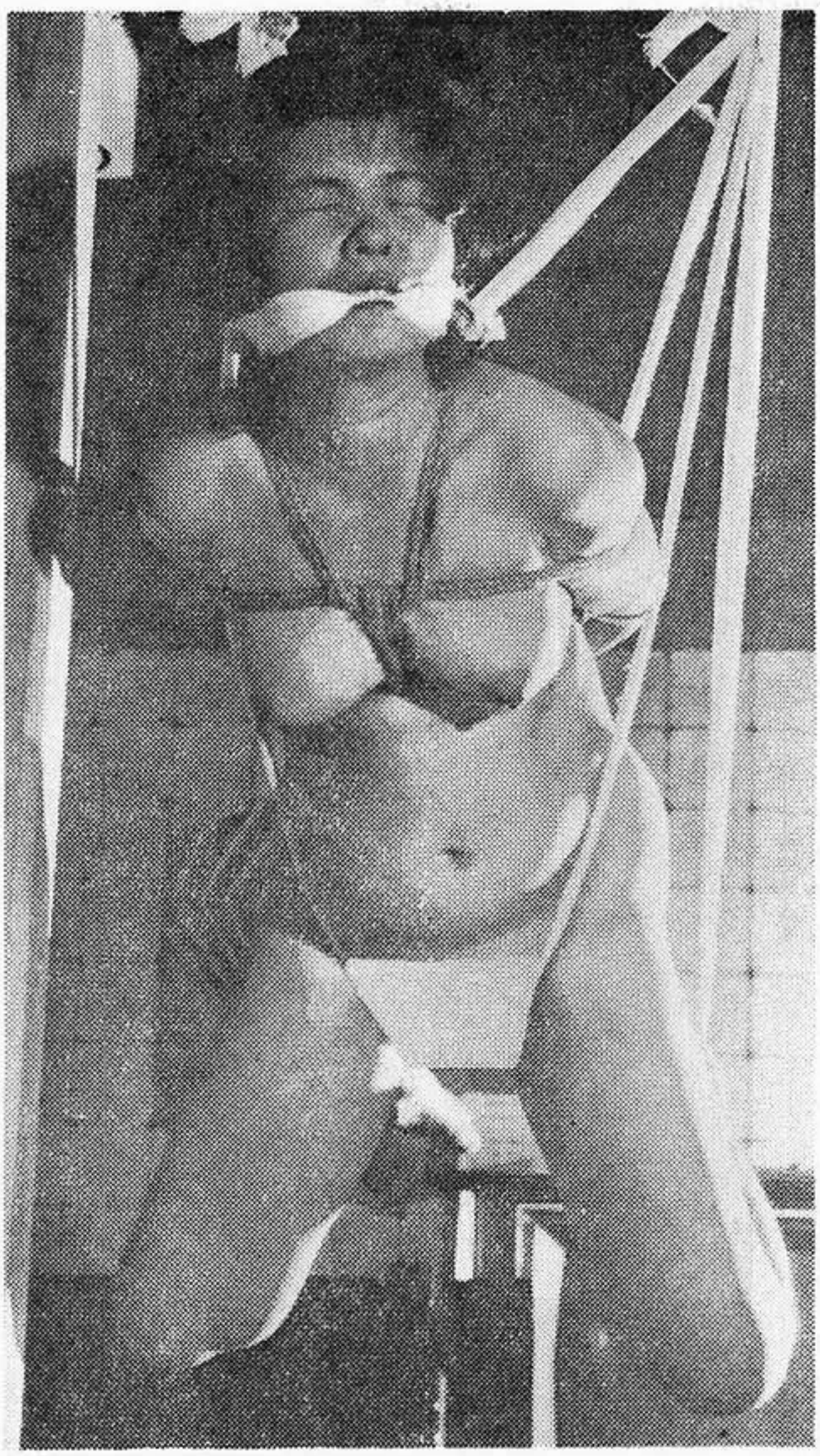


「ううう、ううう、いーいー」

苦痛に、ゆがむ顔。猿ぐつわの下からは、悲鳴にも似た呻き声が洩れる。

じんわりと胸のあたりに浮かぶ脂汗。

だが、この女は耐える。苦痛が激しければ激しいほど、快感もまた、強いのであろう。



眉の間に皺を寄せながら必死に辛抱する。

私は、そんな女の様子を見定めてから、ゆっくりと落着いて縄止めをした。

さっきは、例えば、赤ン坊がオシッコをさせられるときのようなポーズであったが、今度は、スケートで、すってんころりと尻餅をついて、足を挙げたときのような、あられもない格好である。

下から眺める風景は、見事という外はない素晴しいものである。私が抜毛の作業をしたその成果が、今、ここになって、ようやく現われてきたということがいえる。

刈り残しの下草を除草するため、私は毛抜きを持ち出してきた。女にとっては、自分の下で屈んでいる私が、一体、何をやらかしているのか、さっぱりわからない。

それをいいことに、私はリフトアップした車に、グリスアップする要領で、下から見上げながら、いろんな責めの小道具を使用して〝いたぶり責め〟に入っていった。

毛抜きの次には、クリップである。

これを使うのには、少々要領がいる。急にパッと挟むと、痛いばかりで興を失ってしまう。徐々に、少し宛、ゆるゆると緩めていって、いつの間にやら、強力なバネで、しっかり挟みつけている——と、いったのが、責めるコツである。

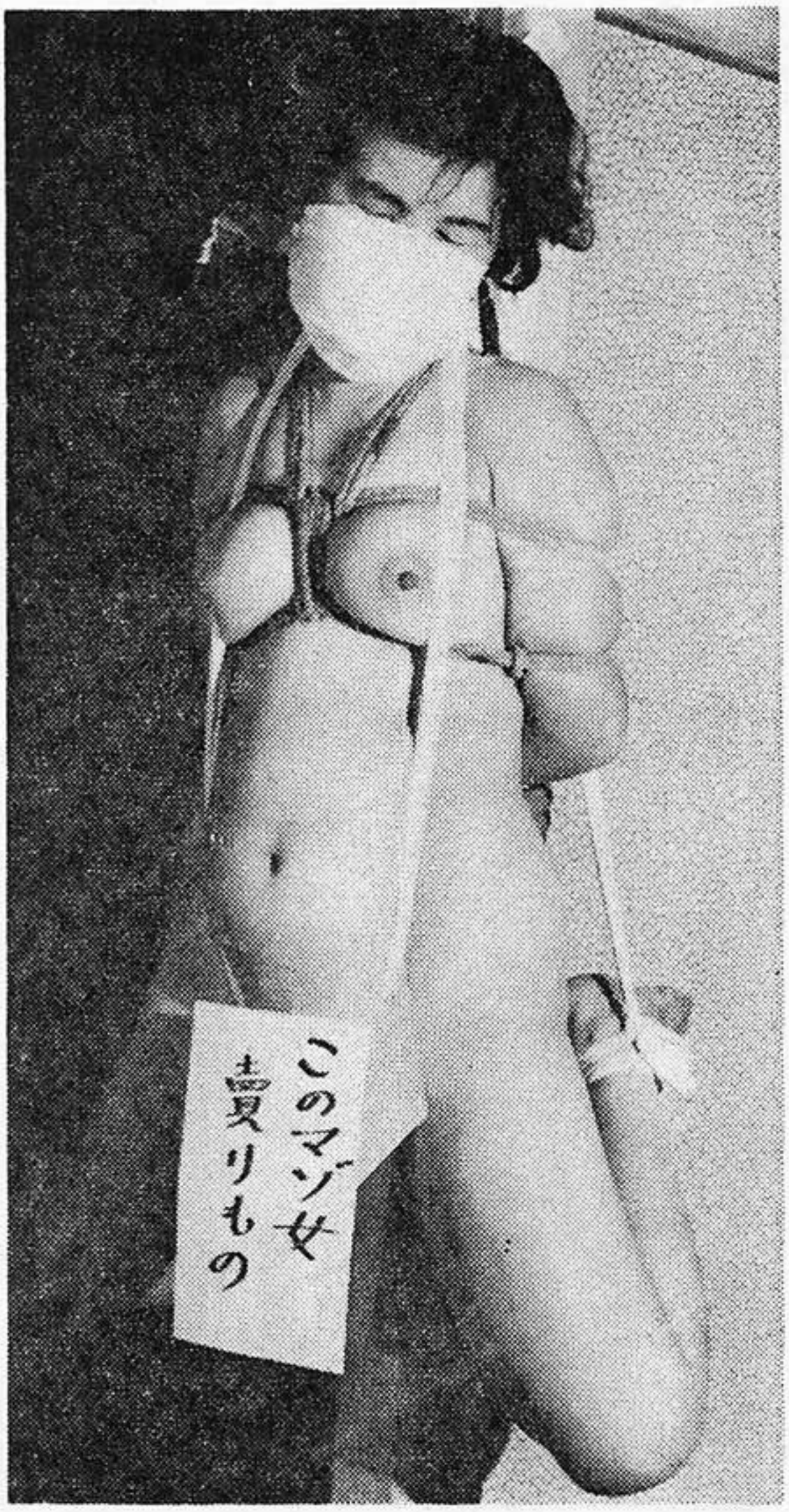
いくつものクリップがぶら下がっている。こんなのは、素晴しいテクニックではないか。

責めといったって、荒々しいのばかりが能ではない。むしろ、ソフトタッチの責めこそ、その後が面白いものである。

この際、使用する小道具を列挙してみると百匁蝋燭（太いばかりがよいのではない、色つきのキャンドルも面白い責め具だ）、エネマシリンジ、ポンプ式浣腸器。イルリガートル、いちじく浣腸、カテーテル……。

カテーテルで思い出したが、こんなポーズで、カテーテルをセロテープで止めておいて小便のたれ流し——という趣向は、どうだろう。女を徹底的に辱かしめるのには、これ以上の暴挙はないだろう。

口からはビールを、じゃんじゃん飲ます。そうして、腕組みをしながら下で待っている



と、カテーテルを通して黄金水がチロチロと女の意志とは別に、たれ流しになってくるのだ。

浣腸器は、どんな器具を用いたって、もう嫌も応もない。満開の菊花に対して薬液を注入するのだから、その爽快さったらない。筆舌につくし難い。だが、このポーズで浣腸責めをやるのに使って興味あるのは、エネマシリンジである。洗面器に微温湯を一杯、汲んできて、エネマシリンジの嘴管から迸り出る温水で責めまくるのである。

エネマシリンジの良いところは、ゴム球を握る強弱によって、迸出する水流を、強くしたり弱くしたりすることが出来ることだ。攻撃目標によって強弱を変化させること、それと、同じ目標であっても、強弱、弱々、強、弱、強々——と、刺戟に変化を与えることが必要である。

単一な刺戟に対しては、感覚はすぐに慣性を帯びてしまう。予想外な個所への予想外の責めを加えることは、刺戟を一層、高めることになる。刺戟ばかり強くても、マゾは必ずしも喜ばない。間を置いて、刺戟を中断することも、刺戟の一つになるわけだ。

三つの洗面器に、熱湯、微温湯、冷水の三通りの液体を準備しておいて、これをエネマシリンジを用いて迸出させ、目標地点に攻撃を加えてみ給え。何をされているか、さっぱりわからない女にとって、これは恐ろしい責めになる。

もしも、責め手の貴下に、底知れぬ妖しい男性的な魅力があるとしたら、ここで口説的暗示法を用いれば、その微温湯を、世界に類稀なバラモン王朝伝来の媚薬として、女に感じさせることも出来るのだ。

空想癖の強いマゾ女を暗示にかけて迷わすくらいは、いと易い。冷水を槍の穂先のように感じさせることだって出来る。だが、これは、飽くまでも、マゾ心の昂揚と、その満足のためにのみ用いることを、おすすめする。

エネマシリンジを三つも準備するのは、かなわないと言われる方には、三枚のタオルで代用される方法を、おすすめしたい。

手でさわったらヤケドしそうな蒸しタオルと、襟元に当てたら、思わず、ぞっとする冷たいおシボリ。それと夏の日向水位のぬるま湯に浸したタオルといった三通りの小道具。

といって、これは別に作るのに困難はない。熱湯のHの栓から湯を汲み、冷蔵庫から氷を取り出せば、それで準備はOKである。

自分では見えない鋭敏な個所へ、他人の手で当てられる蒸しタオルというものは、実際よりも何倍か熱く感ずるものである。ましてや、思いもかけぬ時に、突然それをやられると、女は飛び上がるように驚く。

氷のように冷たいおシボリにしたって、そうである。熱い熱い——と思って、熱い方に警戒していると、ふいっと、冷たいタオルが襲ってくるのだから、緊張の連続である。そこで、その緊張を解いて、春風のように、なごやかにさせておいてから、再び責めに移るのである。

そんな責めをして、どんな効果があるか、ということになるが、それは、そのあとの女の感泣度を見れば、もっともだ——ということに気づいて貰えると思う。

さて、今日の責めプレイの結びの一番だがやはり、こんな素晴しい格好に吊り下げた以上、とどめの責めは、浣腸に限ると思った。かくあるべしと、いつも鞄の底に忍ばせてあった〝イチジク浣腸〟が威力を発揮することになる。

もう、こうなれば、お腹が痛いとか、恥かしいとか言っている暇はない。なんといっても、ポーズがポーズであるから、待てしばしはない。女にしても、思いっきり、あられもないところを、微に入り細を穿って眺めてほしいのだから、そこはそれ、遠慮も会釈もなしに排泄を開始した。

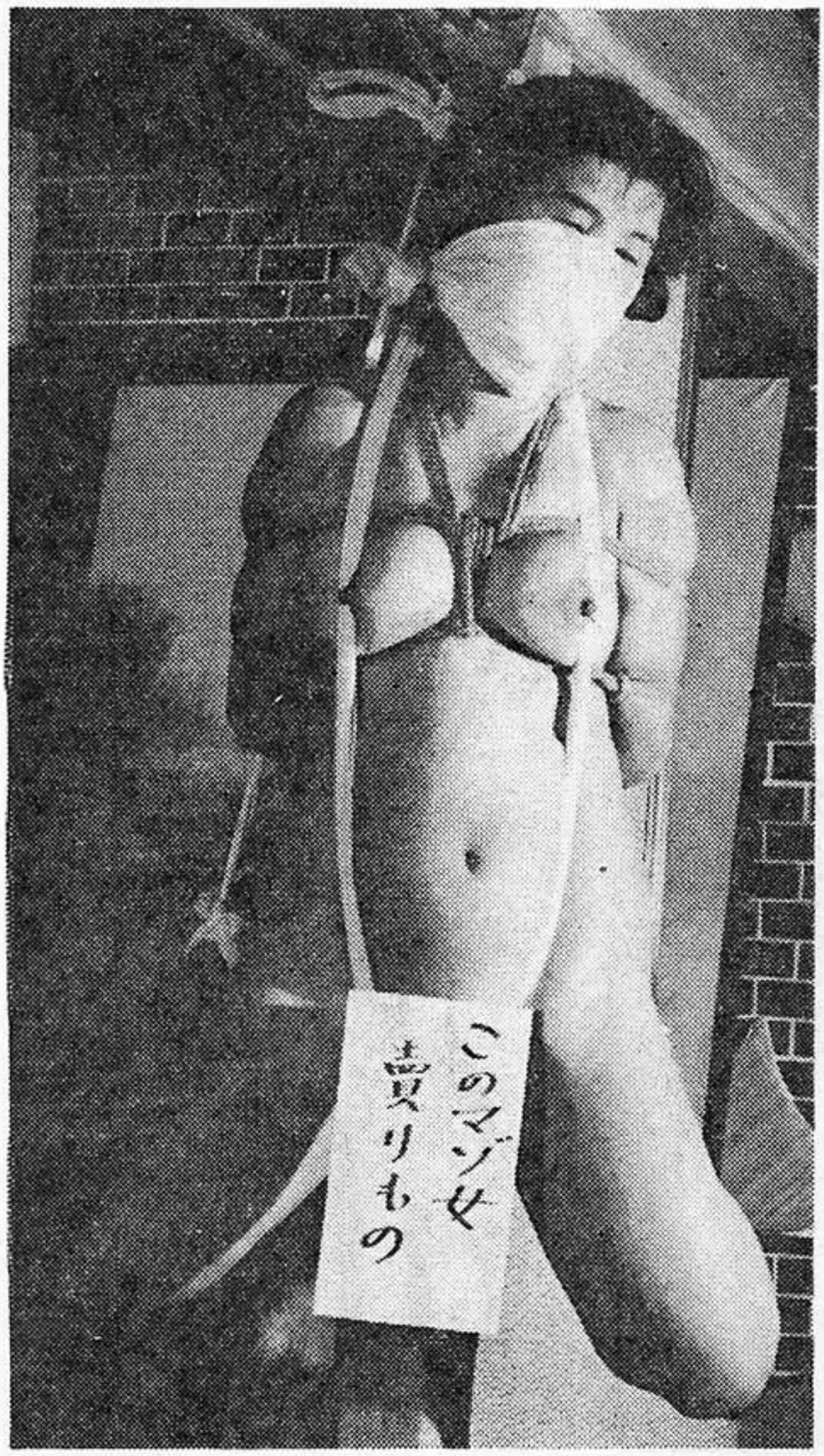
私は、そんな有様を見るばかりではない。カメラを下からあふって、ロングでアップで何枚も、何枚も、不必要なくらいに撮りまくるのであった。

アニマル的娼婦

〝プレイの時は娼婦の如くあれ〟——か。

私は手持ちの責めの小道具を使って、女を責めまくった。吊り責め縛りも、縛り方を三回、変えた。吊ってゆく女体の支点を変えると同じ女の体でも、奇妙に新鮮に見えた。

そして、一旦、床へ降ろした女を、再び縛



り方を変えて、宙に吊るすと、新たな羞恥に身もだえするのであった。

三度目に女を床へころがしたとき、唾液でベトベトになった猿ぐつわを、はずした。

「ねえ、もう吊るのは許して。それよりも、私を、思いっきりみじめな姿で犯して。お願い。娼婦のように目茶苦茶にしてほしいの」

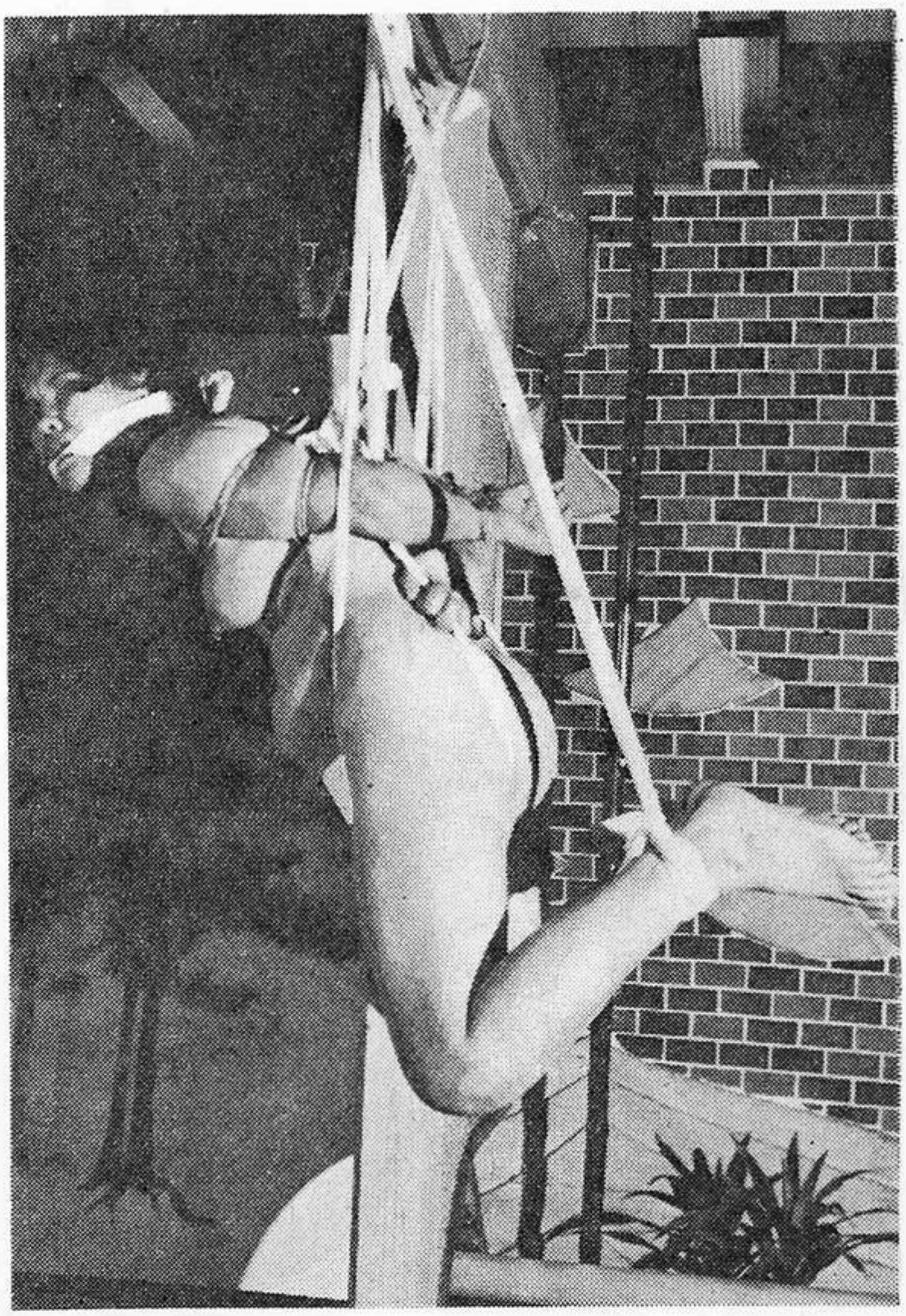
口がきけるようになった女は、熱い吐息と共に、そんなことを口走った。

私は、女に対して、哀れさを感じて、縄をほどいていった。最後の縄を解き終わるなり女は私に、がばっと、抱きついてきた。骨細の女体が、私の腕の中で、微かにふるえていた。私は女を、ぎゅっと抱きしめたまま、隣室のベッドの上へ運んでいった。

ねじきれば折れそうな、この、か細い身体のなかに、どうして、あのような、ふてぶてしい、責められても、責められても、こたえないタフな精神が宿っているのだろうか。

彼女が嘗て私に言ったことがあった。

「雑誌に佐野みさ子さんの花電車のことがのっていたでしょ。私も、あんな訓練を受けてみたいと、いつも思うのよ。私が、いろんな珍芸を出来るようになったら飛田新地の中なんかでやっているという秘密ショーに出てみたいわ。一度、私を飼育してみてくれない」



そのとき、私は、機会をみて、珍芸を教え込んでやろう——と、返事をしておいたが、もともと、彼女が私に連絡場所を明らかにしないタフな精神が宿っているのだから、いろんなことが出来なかったわけだ。

こんな格好で鶏卵を飲み込んだり、吐きだしたりさせるのなんか、こりゃ、面白い見世物になるぞ——と、私は、女の体をベッドの上で、蛇がとぐろを巻くように曲げてみた。

「犯して。ねえ、犯して……」

女は、つぶやくような小さな声で、私の耳もとで囁いた。

「お前の大好きな縄は、ここにはないぞ」

「いいの、いいのよ。縄なんか、なくったって、私、ショーで見世物になっているつもりでいますから、ライトを照らしてから、私をおもちゃにして……」

外気温は三十度を遥かに越している筈なのに、この部屋は、裸でいると寒いくらい冷房が、よく効いていた。特に、足の先の方が、じっとしておれぬくらい、冷たく感じた。

不思議に思われるだろうが、それは、長い時間であった。さっきの吊り責めに使った時間よりも長い時間だったということを、あとになって気づいて、私は、自分でも驚いたほどだ。時計の時間を見てみなければ、自分では一時間ぐらいの経過だと思っていたのだ。

本当は、それの三倍も使っていたのだ。

私には、このようなタフな女が最も適していた。もっともM女といえば、スタミナのある女が殆どだった。タフというよりも、いわば宝石を掘り出すための道程が、山あり、谷あり、川ありで、まことに長くて変化に富んでいるということが言える。

だから、多くの人は、その秘宝に到達するまでに息切れがして相果て、この女は、これだけの女か——と、諦めてしまう。

本当は、それから遥か先に、M女としての桃源境が存在しているのだ。

マゾ女の秘境についての具体的な詳細は、努力（このことと思う）を重ねると、女はいずれ述べたいのように見えてくる。

世音菩薩の化身秘密ショーの性的な見世物の舞台に立たせられて、多くの好色的な男客の目に晒されていると空想して燃えに燃えているのだろうが、私の方は、崇高な観世音菩薩の化身を抱いているのだ。

女は、自分が

いや、実際に、自分の気持を、これほどまでに満足させてくれ、しかも、思いのままにさせてくれる女が、観音様の化身でなくてなんであろう。今日のところは、〝天神祭に来た女〟だから、天神様の使いの女神というところだろうか。

私は、非常にゆったりとして、満ち足りた気持であった。これほどまでに、女を熱狂的

にさせ得たという男性としての自信が、身体の隅々まで、満ち溢れているといった充実感であった。

「この女は、完全に自分のものだ」

そう、はっきりと確信できる一瞬である。しかし、私は、離れなかった。女のしぶといしかし、私は、離れなかった。女のしぶといしかし、私は、離れなかったら、生理というものを弁えている男であったら、たとえ、激戦数合を火花を散らして交え合ったとしても、ここで敵に後を見せては、九仞の功を一簣に虧くことを知るべきである。

余韻を楽しむかのように、女は、うっとりとした目なざしで声をかけてきた。

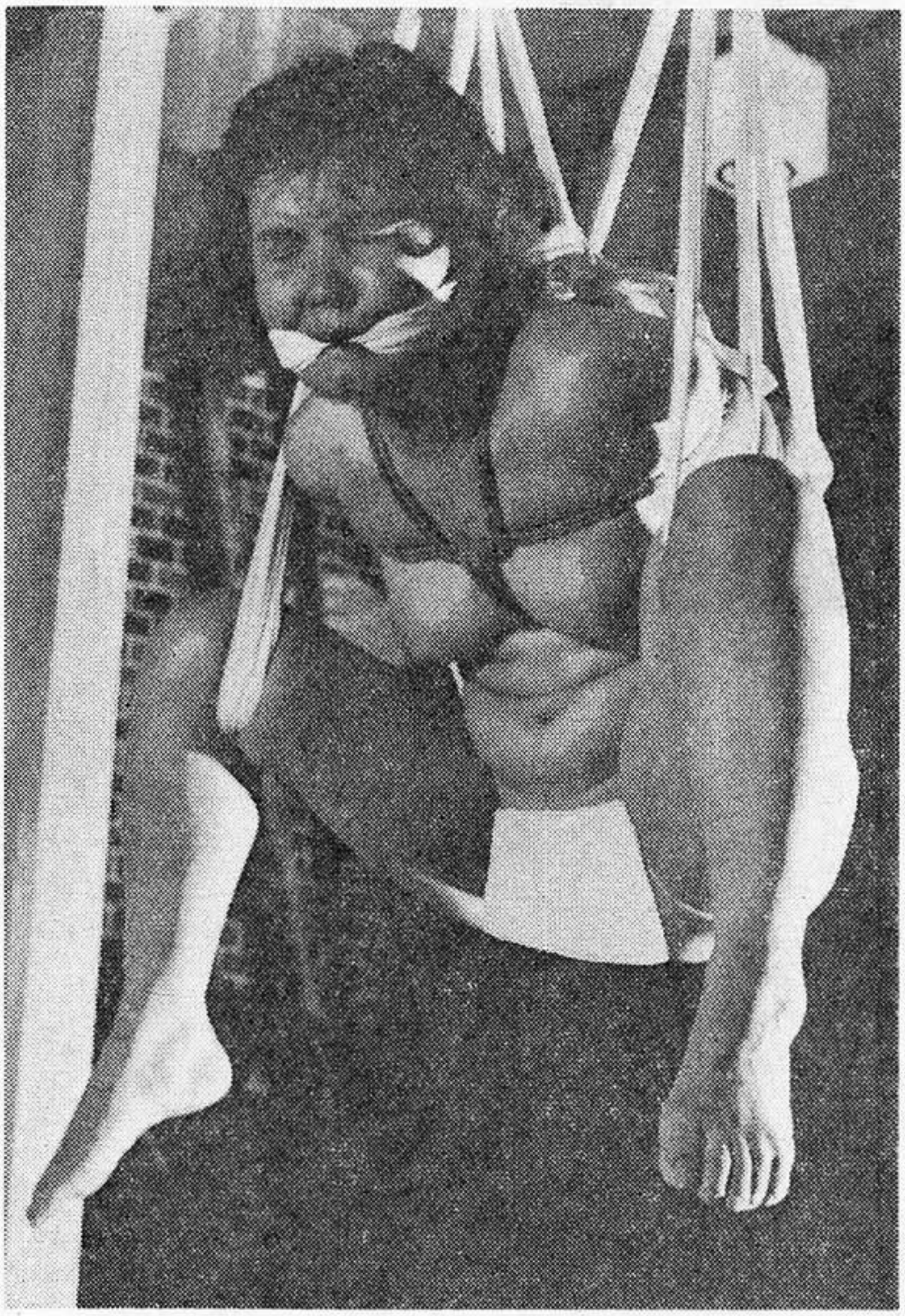
「雑誌に、南政子さんって方が、読者通信に出していたけど、あの人に逢えないかしら」

「ええ？　南政子？」

「たしか、五月号に出ていたんだけど。なんでも、犬となんとか……」

「ふふん、そんなのが、あったかね。それにしても、キミは、雑誌をよく読んでるんだね。南政子なんて、今、言われるまで記憶になかったな」

「奇譚クラブは出たらすぐ買って、毎月、読んでいますわ。買ってきた晩は、隅から隅まで、一気に読んでしまって、それからは、好きなところだけ、何度も何度も読みますの。



だから、覚えてしまいますわ」

「そりゃ大したもんだね。それで、僕が犬とのこと、算段したら、やってみるかい？」

「ええ、やってみますわ。私、この頃は、いつも、そんなことばかり考えてますの。そんな心当たり、ありますの。あったら私、ぜひやってみたいんです。小杉千恵さんって方も

書いてらしたけど、あんな方と、お逢いしていろいろ話してみたいわ。ええ、話だけでもいいんです。そりゃ、実際に、犬をけしかけられたら、最高だと思いますけど……」

「実際に、その場になっても、尻込みなんかしないだろうね」

「ええ、覚悟しています。どんなことになっても、私は、嬉しいんだって――」

「そうか。それだったら、心当たりがないこともないから、一つ、段通りをしてみるか」

そんなお喋りをしていると、不思議なことに、ドッキングしたままの宇宙船のエンジンが再び活動を開始するのである。

「一体、貴方、何を食べておられるの？」

スタミナ源について、女から、よく、そんなことを訊ねられる。私は、食事なんか、普通のありきたりの物を口にしていれば、それでいいのだと思っている。ただ、極端な偏食は、まずいだろうが、好き嫌いを言わず、何でもかんでも腹に入れておけば、二時間や三時間の激戦には耐え得る筈だ。

天神祭の太鼓の音が、遠く、近く、風に乗って聞こえてくる。

私は、この女とのお喋りを、もっと続けるために、その準備行動を起こすべく、体位を変えていった。

この密室へ足を踏み入れてから、もう何時間、経っているであろうか。大川沿いに、ざわめいていた天神祭のお渡り見物の雑踏も、やっと静かになったようである。

「あの、南政子さんのこと、よろしく、お願いしますわね。お友達に私のような女でも、お友達になってもらえるかしら？」

「そりゃ女の方が、安心するんじゃないかね。編集部で聞いて、連絡できるようだったら連絡してあげるよ。僕も、そんな人獣交婚の写真を、是非撮ってみたいもんな」

私は、まるで自分が犬になったような気持で行動していった。

カット・岡　たかし

連載・M派交友録（四十三）

グラマーな猛女

――植座たき子の巻（6）

鬼山　絢策

海藻の魅力

最近、たき子の浴室は大きく改造された。

今まで使っていた湯槽と釜が、くっついているが、このバスには湯抜き穴がないからお湯を満タンにすることが、できた。

釜は浴室の外の脱衣場に据えつけた。点火しておけば、いつでもお湯が出るようにした。

床のタイルには、ピンクのスポンジを一面に敷きつめた。これだと、坐っても冷たくないし、寝転んでも痛くない。

側面のタイルを、はがして四方に大きな曇どめの鏡を、はめこんだ。

これは、もちろん、橋本宇吉の好みによるものである。

たき子を世話するようになってから、もうかれこれ、二年になる。宇吉は二人の愛の楽しみにヴァラエティをつけるために、いろいろ工夫してきた。風呂場の改造も、その一つである。

風呂場が完成された日、宇吉は、はりきって二人で一緒に入った。

「きれい。ほんとに、きれいだわ」

なみなみと、たたえられたバスのお湯にはバスクリーンが入れられて、薄緑色の湯が波打っている。タイルの白、薄緑の湯、赤いマ

ット、青いタイルの壁、銀色の鏡と、風呂場は、かなり派手な色彩で、たき子の好みに合っていた。

たき子は、子供のようにザブーンと湯槽にとびこんだ。

「足を、のばしてごらん、十分に」

薄緑の液体の中に白い豊かな肉体が、ながながと伸びている。

「ね、楽だろう。これが、ほんとうの日本人の使うバスだよ。外人はバスへ入っても半身は起こしている。だから、あんなに狭いのだよ。日本人は首まで、お湯に沈めないと、お風呂に入った気が、しないだろう。これなら楽々と入れる」

実際、この超特大のバスを見つけるのには苦労したのだった。

宇吉は、たき子の足の方から湯槽に静かに入って行った。ザーッと緑色の湯が、あふれる。

たき子の身体の下に、スーッと足を入れて行くと七十キロのたき子の大きな身体が、フワーッと浮いた。

「ほんとに楽だわ。思いきり、足を伸ばしてお風呂に横になれたなんて、生まれて初めてよ」

宇吉は、たき子の身体の下へ瘠せた長身をスーッと差し入れた。頤のあたりまで湯に沈めて宇吉も、こういう風呂に入ってみたいという望みが達せられて満足だった。部屋の中では、重いたき子の肉体が、綿のように軽いのも快かった。

宇吉は、すべすべした両腿を撫でた。

「ウフーン、くすぐったい」

たき子は両足を湯の上に、あげた。

宇吉は、その足の間に、ゆるやかに前進した。たき子は宇吉の両肩に、ふくら脛を、のせた。両手は相変わらず、たき子の太腿を撫でていた。

「君はこの頃、また一段と綺麗になったね」

薄緑色の湯の中に海草のように、そよぐ藻が浮いて見える。その上の小高い丘陵。更に大きな丘があって、宇吉のところからは脇は丘の向こう側にかくれて見えない。更に、その先には、少しも束縛を受けない二つの乳房が伸び伸びと両方に開いている。

そのまた先に、たき子の笑顔があった。

たき子の身体は、どこを見ても、普通の女よりは大きかった。日本人ばなれしている。

宇吉の初恋の人であるサリーもグラマーだったから、ちょうど、たき子ぐらいである。

シカゴの下宿先の娘だから毎日、顔を合わせていて、親切にしてくれた。だが、それはあくまでも親切だけで、それ以上のことはなかった。

彼女にはハンサムな恋人が居た。平気で恋人と抱き合って宇吉の見ている前で熱烈なキスまでして見せた。嫉妬を感じないではなかったが、所詮、高嶺の花と諦めていたのだ。

六十八にもなって初恋の人のイメージそっくりの若い女性を手に入れようとは……。

——ほんとに、たき子はすばらしい女性だ。世の中には美人もグラマーも大勢、居るが、たき子のように何もかも揃った女は滅多に居ない。この女を手離したくない——

宇吉は更に前へ身体を、ずらせた。ふくら脛が背中の方に回って、豊かな弾力のある太腿が、宇吉の両頬を、はさんだ。美しい顔がぐっと接近した。

「こないだ、村中さんが来たわ」

やわらかい感触に酔っている頭の上から、目をさますような言葉が降ってきた。

「エッ、村中が、何しに来たの？」

「ううん、大したことじゃないけど……」

「何の用事だったの」

「このマンションの継続事務をやってきたと

報告に来たのよ」
「ふーん、それで？」
「それだけ」
たき子の方で接近して、更に強く宇吉の顔を、はさみつけた。
「ねえ、パパ。このマンションは、あたしのものじゃないのね。はじめて知ったわ」
宇吉の顔に苦渋の色が見えた。
「パパの奥さんのものなんですってね」
「村中が、そんな事、しゃべったのか」
「ねえ、パパ。あたし、このマンション欲しいわ。あたしのお城ですもの。こうしてお風呂も、よくしてくれたし。パパは、あたしに飽きたら、あたしを追い出して、また新しい女のひとを、このお城に住まわせるつもりなの？」
太腿にグッと力が入った。
「イヤイヤ、とんでもない。そんな、つもりは全然ないよ」
「じゃ、どうして、あたしにくれないの」
「そりゃ君を、ひと目、見た時から好きになったから、こうしてこのマンションに住んでもらうことになったけど、正直言って最初のうちは、君の気心が分からなかったろう。すぐ、ぼくを捨てて若い男と、くっついてしまうかもしれない不安があったのだよ」
柔和な宇吉の表情が、この時は引き締まった。たき子は、ついぞ、こんな恐い顔を見たことはなかった。
――これが仕事をする、さすがは金融界に、切れ者、橋本宇吉の顔である。
――だが、ここで、ひるんではならない。
「でも、もう二年、たったわ。今のあたしをどう思ってるの」
「うん、もう二年、たったね。早いものだ。君を得て、ぼくの人生観は変わった。幸福なものだね」
「ねえ。あたしを、どう思ってるの、パパ」
たき子は両ひじを湯槽のふちにかけ、殆ど全身が、お湯から浮き上がっていた。
宇吉は首を左右に回して、かまぼこのように、すべすべした内股に接吻した。
「ますます、君が好きになった。サリー、ぼくから離れないでおくれ」
「あたしがパパを裏切るような女だと思ってるの」
宇吉のすぐ目の前に、巨大な肉体があった。これが、たき子の〝武器〟なのだ。たき子は真正面から〝武器〟をかざし宇吉に迫った。
宇吉は突進しようとした。が巨大な肉の壁が両頬をはさんで、せきとめた。
――答をきくまでは通さない――
そんな女だとは思わない。思いたくない」
「君を、そんなら、このお家を、あたしに頂戴」
「そんなら、こうして住んでいる以上、この藻が宇吉の鼻を、くすぐった。
「もちろん、このものだよ」
家は君のものだよ」
「ああ、うれしい。だからパパ、大好き！」
肉の壁は弛められた。長い間、お預けを喰っていた犬が許されたように、餌にとびついて行った。
うまく行った。村中なんかに頼まなくてもよかったんだ。あたしが、その気になれば、簡単なんだ。サア、おあがり。御褒美としては、お安いもんだよ。ほんとの犬になったような滑稽な顔を見下ろして、たき子は、そのうな顔を、グッと思いきり、腿で抱き締めてやった。
宇吉は、どのみち、このマンションは、たき子に与えるつもりで居た。それが、いつどんな時、とまでは考えていなかったが、たき子が自分の名義でないことを知って、せがまれた以上、今が与えるチャンスだと思った。

それにしても村中二郎が余計な差し出口をはさんだことには激しい憤りを感じていた。

彼が何のために、そんなことを、たき子に知らせたのか？

ことによると、村中とたき子の間に、関係があるのではないか？

そう言えば村中は、たき子と会ったことがないと言っていながら、たき子の身辺のことを、よく知っている。たき子の間に、関係などを描くようになったのは同じマンションに住む安井という画描きの紹介によるものだと言ったことがある。そうして宇吉の顔色を、のぞきこむように見たが、村中ごとは、嫉妬めいた感情がはしっきに、それを見せる宇吉ではなかった。しかし、安井という男を意識せずには居られなかった。

だが、考えてみると村中が一番くさい男なのだ。もともと、たき子をとりもったのも村中だから、宇吉が知る以前に関係があったかもしれない。ただ村中には、飼い犬が手を噛けてやっているから、まさかと思っていたのだが。むような真似はすまいと思っ

橋本宇吉は村中にマンションの名義変更の手続きをやらせ、完了した時点で、村中をきびしく責めた。これで、たき子と村中との事務的な、つながりは一切、断たれたのだから、今後は、たき子に近づかぬことを厳重に言い渡した。

コリーちゃん

「サ、これでこのマンションは、完全に君のものだよ」

「お金よ。それと、あたしの身体が欲しいと言ったわね」

たき子は、またズバリと言ってのけた。

宇吉は権利書と実印をたき子に与えるという二十万円の礼金と、あたしの身体——という条件を、たき子は、かくさずに宇吉に告げた。

「で君は、その約束を果たすつもりかね」

「アッハハハハ……」

たき子は大きな身体を、ゆすって笑った。

「あのコリーちゃんにあたしが。アハハハ」

「何だね、コリーちゃんて」

「あの人の顔、コリーに似ていない？　あごが細くて、とんがっていて。あの人、あたし人間と思ってないもの」

たき子は村中とのいきさつを、モデルをしていた時から全部を話した。

「だけど村中が何のために君に、そんなつげ口をしたのだね」

「パパに紹介して、このマンションに移った時もオレのお蔭だと言って要求してきたわ。

パパには悪いけど一度だけと思ってつき合ったことあるのよ。でも、あの人イザとなるとダメなの。ふしぎがってたわ。いつも元気なのにダメになるのは、どうしてだろうってそれ以来、コリーちゃんとしてやったのよ。だから犬に残念がるのよ。だから犬に呼んでるの」

一度、秘密のせきを切ると、たき子は洗いざらい、ぶちまけた。

宇吉は、開けっぴろげなたき子が気に入った。

「よく打ち明けてくれたね。何だか、ぼくも君の犬にしてもらいたくなったよ」

たき子は紅色のサテンのガウンを着てソファに腰かけていた。黒い襟のかかったもので宇吉の好みで買ってきたものだった。このガウンを全裸の上に羽織ると、宇吉は目を細めて「たまらなくなる。魅力的だ」とガウンの裾にキスした。たき子も、このガウンは好きなのだ。

宇吉が犬になりたいと言うと、たき子はヒョイと足を組み替えた。裾が大きく割れて、お脛の近くまでチラと覗けた。男の心臓をドキつかせる。白い足が膝小僧まで剝き出しになって、そのかすように向けられた。

宇吉は、じゅうたんの上に跪き、たき子の足を両手に持って、その甲に唇をつけた。

「ウフッ、くすぐったい」

たき子の足が宇吉のあごをはねのけて上を向いた。宇吉の舌は、その足の裏を舐めた。

「君は足の裏まで、きれいなんだね」

「あら、足の裏は、きれいじゃないわよ」

宇吉の唇は膝から太腿の方へスーッと上がってきた。組んでいる足をどかそうと両手に持って持ち上げようとする。たき子は足に力を入れて持ち上げさせまいとする。

「ね、ひらいておくれよ」

たき子は組んでいる上の方の足を高々と上げて宇吉の首へ膝の内側を巻きつけグイと手前に引き寄せた。宇吉は幸福感を、しみじみと味わった。

「村中は、どうしたの?」

「フフフ、一生懸命らしいんだけど、どうしてもダメなのよ。ハアハア肩で息をしてさ」

顔一面にムンムンする熱気と香気が浴びせられてくる。

「だから、あたし怒って蹴とばして、こういう風にしてやったのよ」

「彼は、どうかね、上手だった?」

「コリーちゃん? 大したことないわね。パパの方が、ずっと、お上手よ」

宇吉は、自分にも犬の名前か何かつけられているのではないか。陰では、その仇名で呼ばれているのではないかと想像した。

「ねえ、パパ。コリーちゃんと会うなと、さっき言ったけど、一度だけ会わなきゃならない用があるのよ」

「エッ! それは、どういうこと?」

宇吉は、首を上げた。

「いいのよ、続けてよ。あたしね、コリーちゃんが、うまくパパを口説いて、この家を、あたしにくれたら二十万円やるって約束しちゃって後悔してるの。バカなこと言っちゃったわ」

たき子は今になって、その金が惜しくなったのである。

「だって、コリーちゃんのお陰じゃないでしょ。あたしパパに言いにくかったんだもん。それでも勇気出して言って、よかったと思うわ。パパと、あたしの間だけで、できたのにあんな奴に二十万も、くれてやること、ないと思うのよ。でも、約束は約束でしょ」

たき子は宇吉の後頭部へ手をあてがって、グイと手前へ、ひきつけた。

「まあ、いままでいろいろ手続き上のことで

世話にはなってるしね、そのお礼も兼ねてと
いう意味も含んでるのよ。でも、惜しいわ二
十万なんて、大金ですもの、あたしにとって
は。ねえ、パパ。パパもコリーちゃんに、い
くらか、お礼するんでしょ」
　たき子は、両手で宇吉の首をつかんだ。
「うん、それはするよ」
「それを、あたしから、させてよ。パパと、
あたしと両方から取るなんて、それほど役に
立ったわけじゃないでしょ」
「そうだね。わしは奴に、ずい分、目をかけ
てやったつもりだが、蔭で裏切るようなこと
をしている。もう、あいつは使わないつもり
だよ」
「あたしがパパのものになったのを妬いてる
のよ。必ず、あたしを盗んでやる決心したん
だって。あたしに、そう言うんだもん」
「不埒な奴だけれども、まあ働いた報酬は払
わなければならん。よし、わしが二十万、出
そう。その代り、それで、わしとも君とも奴
から手切れになるようにすることだね」
「あたしも、それを考えていたの。それには
いい方法があるのよ」
　たき子は宇吉の想像もしてないわよ」
なプランを話した。

ポルノ雑誌

「あんたも、ひどいひとだな。一体、俺のこ
とを爺さんに何て言ったんだい」
　翌日、村中がカンカンに怒って、電話して
きた。
「べつに何も言やしないわよ。でもマンショ
ンが、あたしのものでないことは、あんたか
た自分のことだけ考えて、あたしが波滅する
ことは全然、考えないさ。約束は約束
だからな」
「問題ないってのは、どういうこと？　あん
に会うことをパパから禁じられてるのよ」
もん、しかたないでしょ。あたしも、あんた
「とにかくな、約束通り爺さんを説得して、
と攻められると、村中は、しどろもどろにな
ってしまうのだった。
「でも約束は守ってくれるんでしょう。実は
ぼく今、金の入用に迫られて困ってるんです
よ。あなたの約束をアテにしてたんですから
助けて下さいよ」
　全く村中という男は奇妙な男で、小才の廻
るところはあるが、頭をおさえつけられると
すぐヘナヘナとなってしまう男である。
「若手のパリパリの課長さんが、そんな弱音
を吐くもんじゃなくってよ。フフフ」
　電話に向かって平身低頭する村中の変身振
りが、また、たき子は、おかしかった。
「払わないとは言ってないわよ」

「ま、いいわ。パパに見つかったら大変だけど、一度、会ってあげるわ」

安井安芸雄は一カ月の予定でアメリカにデザインやイラストの研究に出かける前に一週間も旅館にカン詰めにされて各社の仕事を片づけて行った。

だから、たき子は、もう三週間も安井と会っていない。毎日、一度は顔を合わせていた彼が居なくなってみると、いまさらながら淋しさがヒタヒタと迫ってくる。

安井に聞かれはしないかと毎日、心配していたイヤホーンも、その心配がなくなった。それで却って張り合いが抜けてしまった。

日が経つにつれて、たき子のモヤモヤした気持は強くなって行った。

一週間に二度ほど来ることに一生懸命になっている橋本宇吉の愛撫だけでは、もの足りなくなっていた。安井のような力強い愛撫を受けたいと、欲求不満が、つのって行った。

たき子は、絵を描くことに一生懸命になった。せめてそれで、紛らわそうと努めた。

「この頃、あなたの絵は冴えてきましたね」

と鬼山編集長が、ほめたほどだった。

――そうだ、あの鬼山を誘惑してやろうかしら……安全無害な男なんてオツにすましているところが憎らしい。吠え面かかしてやろうか……

だが、セックスの対象としては鬼山のような四十男は魅力がない。それに変態だし……

イライラすると、いろんなことを考える。

そんなある日、ドサリと重い郵便物が届けられた。開けて見ると、アメリカのポルノ雑誌だった。安井がアメリカから送ってよこしたものだった。

十冊ばかりのオールカラーの写真は、白人あり、黒人あり、中には日本の女性？　かと見られたが、どうやらチャイナらしい女もあり、さまざまな人種の狂演シーンだった。

ポルノをたき子は、はじめて見るわけではないから、それほどびっくりさせられた。人のだけは、さすがに驚きもしなかったが、黒それと全部を見終わった時、日本のポルノと少し違った傾向を発見した。

それはファックシーンが比較的少なく、それに代ってフェラチオ、クンニリングスのシーンが非常に多いことだった。

日本の春画、或はエロ写真と称するものは、その90％がファックシーンである。

それがアメリカの慣用度は20％ぐらいしかない。あとはフェラチオ、クンニリングス、フィンガープレイ、その他で占められている。

――これがアメリカのセックスを表現しているのだろうか？

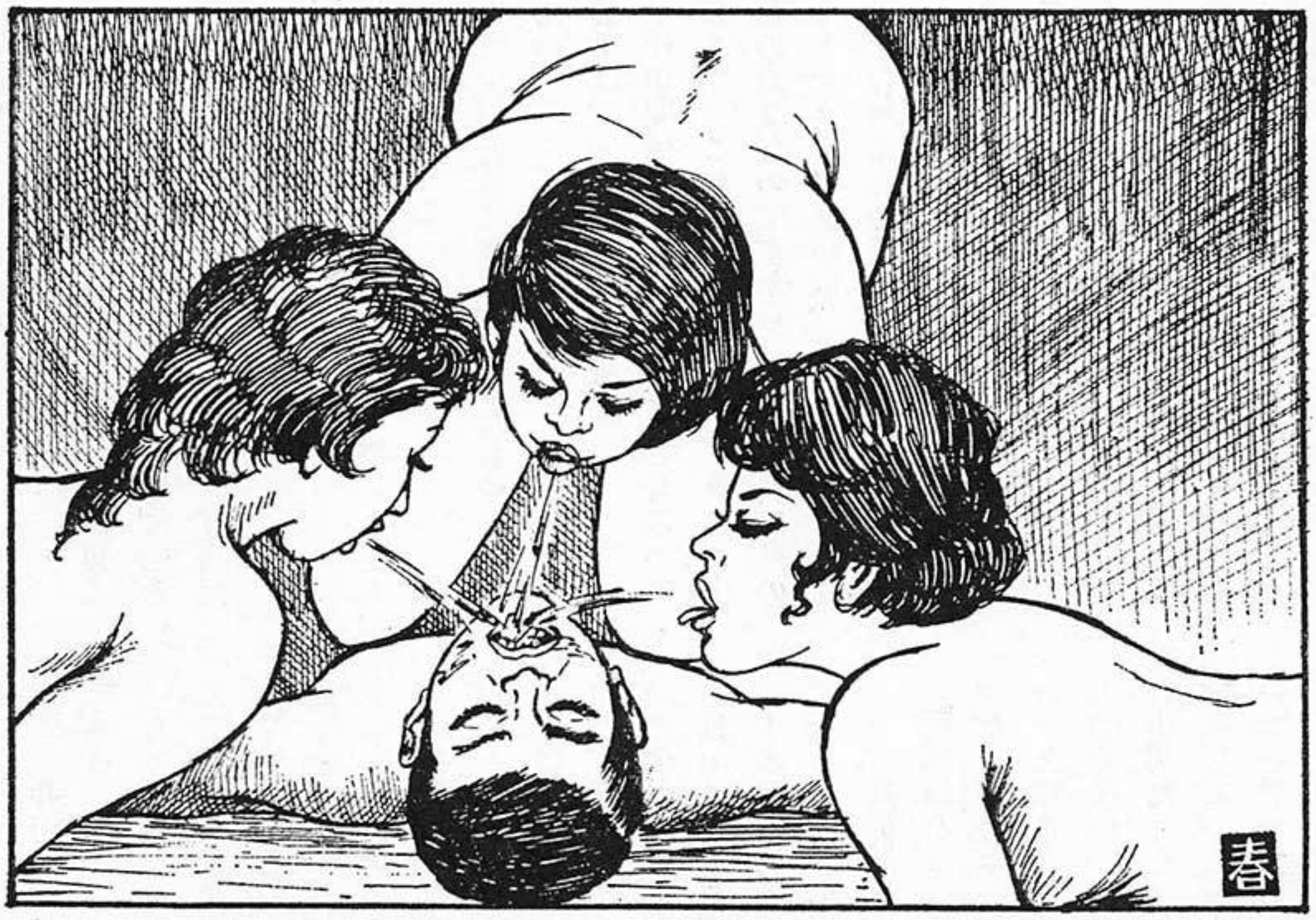
つまりフェラチオの時間が短く、前戯、後戯が非常に長い。それを長く楽しむ傾向があるのではないか？

たき子は、そんな風に考えた。

また日本ではフェラチオとかクンニリングスは不潔な行為、或は変態的な戯れという考え方が古くからあった。実際は江戸時代の錦絵にも散見されるのだから、昔から行なわれていたのだが、それは恥ずべき行為として男女とも極秘にしていたのだった。それが性の研究が開発されるにともなって、それもセックスを楽しむ上での必要な行為であると見られるに至った。現代の日本でも、かなり開放的になった。一般の人々もセックスについて話す時、オーラルセックスは、抵抗なく話し合える時代になった。

とは言えまだまだ欧米の風習から比べると、何となく不潔感とか変態感を意識して、その慣用度はるかに尠い。と言うことは

……ナミオM画廊……『痰吐きゲーム』……春川ナミオ……



それだけ、まだ性に対する無知のバロメーターとなるのではないか。

写真を見て、いろいろ考えた。――パパが、あたしにしていること、あれは、変態でも何でもない。老人として当然の、セックスの一方法なんだわ。

それにしても、少しMがかっているかもしれない。しかし、それも仕方のない事なのだ。老人が若い者に対する格差の現われなのだ。

立場を替えて老婆が青年を愛したとしたら、やはり老婆は青年に対して同じことをするだろう。ただし女は、いくつになっても受け入れることができるから、その点が男の老人と違うところだが……。

気まぐれ

「先生、いいもの、お見せしますわ」

鬼山が訪ねて来た時、たき子はポルノ雑誌を出して見せた。

「ウーン、なかなかいいのを集めましたね」

「先生好みのが多いでしょ。フフ」

「ええ、フェラチオには興味はないけど、クンニリングスの方は面白いのがありますね。しかし、私の考えているのとは少し違う」

「それ、どういうことですの」

「これは単なる愛戯にすぎません。つまり男性の方が、男性自身の意志によって行なっているということです。男性の方が能動的なのが気に入らないんです」

鬼山は共感を求めるような目で、たき子を見つめた。

「私の好みは、女性の方が能動的であらねばならない、ということです」

「でも写真では、意志まで現わすことはできないんじゃありません？」

「いや、できます。女性の命令により男性がそれに従う。それをポーズで示すのです。残念ながら、この中には、そうしたのが、あま

りにも少ない。たった一枚しかない。これだけです」

鬼山が示したのは、中年の禿頭の男の顔に跨がった美女が煙草をすいながら、傍に居る若い青年と笑いながら話し合っている写真だった。

「これは、いい写真ですね」

「先生は、そんな写真ばかり撮ってらっしゃるの」

「そうです。どうですか、あなたもやって見ませんか」

「御褒美は、何をくださるの？」

「イヤ仕事関係と結びつけて考えてもらっては困ります。これは、あくまでもプライベートで私の道楽なのですから。モデル料は私のポケットマネーですから、あまりたくさんは差し上げられませんが……」

「あたしお金を欲しいとは言っていません」

「では、何をお望みですか」

「フフフ、先生に委せるわ」

写真のモデルは絶対やらないと言っていたのだから、鬼山はたき子が、その気になったのを喜んだ。これも安井安芸雄のお蔭である。安井が居たら、たき子は、そんな気まぐれを、おこさなかったろう。またアメリカのポルノ雑誌に刺戟された故もあったろう。これもまた、安井が送ってきたのだから、安井のお蔭である。

もっとも、その前に、かねて、たき子が望んでいた別冊の表紙は、たき子が描くことにきまった。これも安井が居たら当然、安井が描くとこなのだが、安井が居ないから、たき子に お鉢が回ってきたので、たき子も「あたしがモデルになるのは表紙を描かせてもらうお礼といった意味じゃありませんからね。仕事とは別のことよ」と鬼山の口まねして答えたが、多少は、そのお礼の意味も、まざっていたのかもしれない。

鬼山は男性モデルに誰を選ぶか苦心した。1米72もある雄大な、たき子に配するには できるだけ、小男が面白いと思った。

で、阿保順二を選んだ。

阿保はバー〝家畜人ヤプーの館〟で知り合った青年で「一度、是非モデルに使って下さい」と頼まれていた。見たところ、やっと1米53ぐらいしかない。いまの若者には、珍しい小男だった。しかも彼は、背の高い女性を いじめられる実演を、彼は、やっている。

「ヤプーなどとは全然、違いますよ。パンティなんていう障害物がないからね」

「頑張ります」

いつもニコニコしている阿保が怒ったような目で鬼山をみつめ、妙な返事でOKした。

だったが、その店が分からなかったが、春木俊野に聞いて歌舞伎町の「青蛾」というスナックのバーテンをしていることが分かった。

鬼山が行ってみると、スタンドの中でニコニコしている小男を女達は「アホちゃん、アホちゃん」と可愛がって頭をなでたりする。結構、店の人気者だった。

鬼山が、たき子のアウトラインを説明すると、彼は一も二もなく、目を輝かせて「是非お願いします」と、のってきた。

彼の傾向は「ヤプー」で見せてもらったから、鬼山は大体のことは知っていた。彼はコプロの系列なのだ。つまり〝豚派〟である。

「今度は飲ませてもらえますかね」

「サア、それは分からない。成り行き次第だろうね」

「ヤプーのKさんは飲ませてくれなかった、いくら頼んでも。残念でしたよ」

ヤプーでは、Kさんはじめ、店の女の子にいじめられる実演を、彼は、やっている。

「ヤプーなどとは全然、違いますよ。パンティなんていう障害物がないからね」

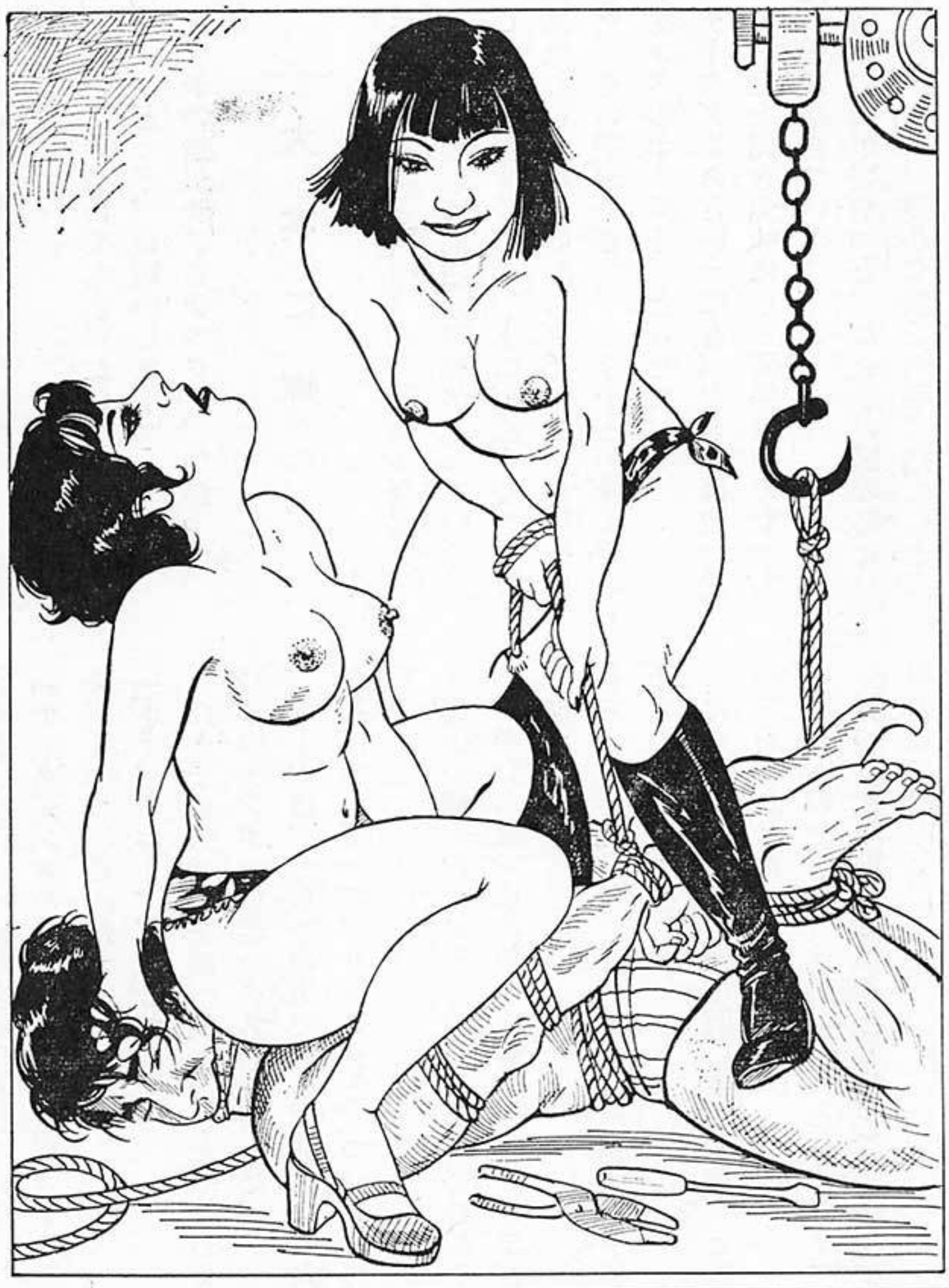
「頑張ります」

いつもニコニコしている阿保が怒ったような目で鬼山をみつめ、妙な返事でOKした。

潰された小男

翌晩、十二時を、ちょっと廻った頃、鬼山は、たき子を連れて「青蛾」に現われた。
店の扉を潜るようにして入って来た、たき子を見上げて、阿保はサッと緊張した。
阿保ばかりではない。店に居るママも、もう一人の女も、二、三人居た客達も、たき子を見ると、まるで外人でも見るように改まった目で、それとなくジロジロ見ている。
〝なるほど目立つ女だな。この女を連れて歩く時の橋本老の得意さが分かる〟——
と鬼山は思った。
「いらっしゃいませ。何になさいます?」
ママが、つつましく声をかけてきた。
「オンザロックで、いいわ」
阿保は店のサントリーの角びんに手をかけた。隣にジョニ赤が置いてある。鬼山は首を振ってジョニ赤を、あごで指した。
たき子は強い。ダブルでグイグイやって半分ばかりあったジョニ赤のびんを空にした。
ここへ来る途中で阿保が今夜のモデルだと話しておいたが、たき子は彼をチラと見たきりで、あとは無視して絵の話を鬼山に、しかけてくる。
阿保はふだん、エヘラエヘラと愛嬌がいいのに今夜は妙に、時々たき子を、まぶしそうに盗み見ている。
「アホちゃん、今夜はイヤにシュンとしてるじゃない。失恋でもしたの?」
店の女の子に、ひやかされると、
「ヒヤー、そう見えますか。実はボク、恋をしちゃって、モッカ悩んでるんです」
と、ようやく、おどけて見せた。
「ヘエ、アホちゃんが恋をしたの。相手のひとは、どんなひとかじゃないの」
店の女は、いつもの調子づいてきても、たき子に一べつされるとしまうのだった。
頃合いを見はからって勘定してもらうと、一万二千円ほど、取られた。
阿保がママに小声をかけた。
「お待たせしました。先生」
たき子に見とれている鬼山を、たき子は笑いながら、ひやかし、パンティを脱いだ。
新宿区役所裏のホテルを選んだ。
「いや、もう少し肥ってたら、いいなと思って、見てたんですよ」
「眠くなると困るから、早いとこ、やろう」
ボストンバッグから鬼山が電球やらコードをとり出すと、阿保が、こまめに手伝った。
たき子はヌードになるのに、さして抵抗は感じず、スルスルとスカートを脱いだ。
「アボちゃんも裸になんなさいよ」
「アボちゃんは、やめて下さい。アホーと、呼んで下さい」
「じゃ、アホーお前も裸になるんだよ」
たき子は笑いながらブラジャーを、はずしパンティ一枚になった。
鬼山は、たき子のヌードをはじめて見た。こんな見事なヌードは、はじめて見た。
スラリとして足が長く、均斉のとれた雄大なヌードだった。前にストリッパーの玉井ひろ美を撮ったが、彼女も60キロはあった。だが、たき子より少し背が低く、それだけ肉づきが豊かだった。鬼山の好みとしては、もう少し、肉が欲しかった。1米72というが、上背が、これだけあると、あと5キロぐらい重くてもいいなと思った。
「何してんのよ、先生」
たき子に見とれている鬼山を、たき子は笑いながら、ひやかし、パンティを脱いだ。
「いや、もう少し肥ってたら、いいなと思って、見てたんですよ」

「あら、これ以上、肥ったらイヤだわ。いま65キロあるのよ」
「75キロぐらい、ほしいな」
「冗談じゃないわよ、先生。早くポーズ、つけてよ」
カメラのアングルをグンと低くしてファインダーから覗いてみると、さすがに凄い迫力だった。シングルのポーズを五、六枚、パチパチと撮った。
ノロノロとスロモーで、ブリーフ一枚になった阿保を、彼女の下に配した。
たき子は至極、無雑作に巨大な太腿で阿保の自由を奪った。
それは牝豹が小犬を捕えたような構図だった。
「ホラ、アホー。舌を出しなさい」
彼の舌は赤く、きれいな色をしていた。意外に長い。だが、その舌も、やがて見えなくなってしまった。
彼の顔が、見る見る、紅潮する。
「どう、苦しい？」
たき子は上から阿保の顔を見下ろし、ユラユラと身体を、ゆすった。
「サリーさん、片足を立てて下さい。そう、右足」
鬼山は少しずつポーズを変えさせて、シャッターを切って行った。
十分もたったかと思うころ、たき子が突然積極的になった。今まで別の美しさをあらうな緊張した表情は、わしていた。
はりきった太腿の上に両手を床についてしまった。
突然、四つ這いのようについていたのがまった。
これは余り恰好のよいポーズではない。
最初、阿保の上に跨がった時から、しばらくは、彼女のポーズはいつも美しかった。
鬼山はテーブルを二人の傍に寄せて、その上に乗って腑瞰で撮って見た。
小雀は、より小さくなり、苦悶する表情もよく捉えることが、できた。
それは、いいのだが、たき子の顔が異常に大きくなり、それに比例してバスト、ヒップと、下へ下がるほど貧弱になってしまい、腿などは細っそりとしてしまう。
〝どうも両方うまくは行かないもんだな〟
鬼山は撮影に夢中になっていて、下敷きの男に注意を忘れていた。
「あら、おかしくなっちゃったわ、この男」
と鬼山は思った。だが、写真としては、そのポーズを矯正



……イメージギャラリー……『荷造り』……岡　たかし……

身体をおこした、たき子が片腿を持ち上げた。

阿保は溺れ死んだ人間のように、口を大きくあけて、のびていた。

たき子は身体の上から退いて傍に、しゃがみこむ。鬼山はハッとして阿保を観察したが胸が大きく動いて呼吸しているのを見て安心した。

「こんな小さな男を、あんまり手加減なしに責めすぎたよ。ま、大丈夫のようだけど」

阿保は目をとじていたが、しばらくして薄目をあけた。瞳が鈍く動いていたが焦点が定まらないらしい。

鬼山は、その顔をアップで撮った。

「ああ……」

阿保は、かすかに声を出して目をパッチリあけた。

「ボク、どうしたんですか」

「気がついた？」

「ボク、夢を見ていました。とても楽しい夢です。大空にフワフワと上がって行くようなサリーさんの腰につかまって、青い海の上を水上スキーのように辷って行ったんです。ボクは水面スレスレに辷って水の中に潜ったり浮かんだり、そのうち、空へ、フワフワと舞い上がって行って……あとは分からなくなっちゃったんです」

「君はサリーさんに潰されて気絶してたんだよ」

「すみません。でも、いい気持でした」

「だらしがないじゃないか。あのくらいで潰れちゃうなんて」

「ほんとにすみません。今度は頑張ります」

なるほど、彼がモデルをOKする時「頑張ります」と言ったのは、この意味か——と鬼山は思った。

「もっと、いじめてもらいたいか。アホー」

「ハイ、どうぞ、お願いします」

たき子の瞳がサジスチックに、ひかった。

大木に蝉

ホテルの浴衣と羽織。その羽織は合成ウールらしいが紺地に面白い模様が入っている。

これを、たき子のヌードに羽織らせた。腰のあたりしかないのがエロティックな味を出した。その羽織を着た、たき子と阿保にチークダンスのポーズを、とらせた。

チークダンスといっても、たき子は突っ立って、足を開き気味にし、阿保は膝で立ってたき子に抱きついた。

阿保の頭が、やっと、たき子の脇のあたりまでしかない。豊かな腰を両手で抱えたところは大木に蝉がとまった感じで、この対照が面白い。

阿保は眼前の「女の兇器」に、はじめ恐怖感をおぼえているようだった。さっきまで、ひどいめにあった恐ろしい〝兇器〟だから無理もない。たき子は両手を腰にあてて、上から薄笑いを浮かべながら見下ろしている。

「チークダンスってのは、もっとピッタリ顔を、くっつけるんだよ」

「ホラ、アホー、どうしたの」

「ああ縛り？　そうねえ」

たき子の方で腰を前へ突き出した。そしてゆるいテンポで〝ボックス〟を踏んだ。

鬼山は改めて、たき子と阿保の体格を見較べた。

リードは、たき子の方である。阿保は巨大な腰につかまって、ヨタヨタと、ついてまわる。

「どうもね、それをやる気は、しないなあ」

鬼山の構えるカメラの前で、この奇妙なチークダンスは、ゆるやかに旋回して、さまざまなポーズを見せた。

男性が貧弱な体格の場合は縛る必要がない。

「ちょっと足をあげて、彼の上に乗せてみて下さい」

男性が、いくら暴れたところで、とても強大な女性に勝てないのが一見して分かるような現在の対照では、縛る必要はない。縛りによって苦痛を与えるという意味はあるが、そのロープの役目は女性の足や尻が十分に果たしてくれるように思える。

たき子が右足を阿保の腕の中からサッと抜いて肩へかけた。

「どこへのせるの。此処、それとも此処？」

肩へのせた足がヒョイと上がって、楽々と男の頭を踏んだ。

鬼山は、そんな風に思えた。

これほど女性と男性との体格の差の甚だしい対照に出あったことがないので、その点で鬼山も戸惑っていた。

「縛られた上で乗っかられたら、相当きついらしく、きれいだよ」

踏みつけのシーンを撮っているうちにフィルムが切れた。

ちょっと休憩している時、阿保が持ってきたボストンバッグの中から白いロープを、とり出した。

「あの、これは、やらないんですか」

「ああ縛り？　そうねえ」

鬼山は改めて、たき子と阿保の体格を見較べた。

「どうもね、それをやる気は、しないなあ」

男性が大きく、女性が小さい場合は、緊縛は効果的である。強力な男性の体力を封じておいて凌辱するというムードがおきるのだが男性が貧弱な体格の場合は縛る必要がない。大な女性に勝てないのが一見して分かるような現在の対照では、縛る必要はない。縛りによって苦痛を与えるという意味はあるが、そのロープの役目は女性の足や尻が十分に果たしてくれるように思える。

鬼山は、そんな風に思えた。

これほど女性と男性との体格の差の甚だしい対照に出あったことがないので、その点で鬼山も戸惑っていた。

「縛られた上で乗っかられたら、相当きついらしく、きれいだよ」

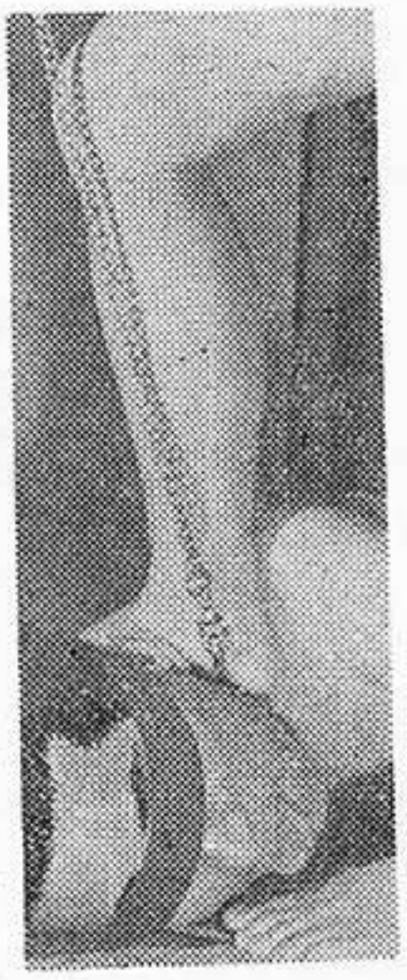
踏みつけのシーンを撮っているうちにフィルムが切れた。

「大丈夫？　我慢できる？」

「大丈夫と思います。頑張ります」

「こんな男、縛る必要ないじゃないの」
たき子が煙草を喫いながら笑って言った。
「そうね、従順な奴隷を縛る意味がないからな」
これで緊縛は、とりやめと決まった。
「じゃ、あの……Uの方は、どうでしょう」
阿保は、たき子の顔色を、うかがいながら鬼山にきいた。
「サァね、やってくれるかな」
「なに？　Uって」
「ウリーンのことさ。我々M派の仲間では、液体の方は略してU、個体の方はKと言ってるんですよ」
「固体って？　あ、そうか。Kって固体のイニシァルた、とったの」
「そうじゃない。コプロラグニーのイニシャルですよ」
「ヘエエ、じゃ、メンスは何て言うの？」
「鋭いねえ、いきなり、そこまで頭が廻るとはねえ。メンスもコプロの、はんちゅうに属するんだ。元来、ウロラグニーもコプロのうちに入るんですよ。異性の排泄物愛好という意味だからね」
「フーン、あのアメリカから送ってきた中にそういうのは、ひとつもなかったわね」
「ここで、そんな解説をやってても、しようがないな。彼は、それを、あなたに望んでるんですがね。どうです、恵んでやりますか」
たき子は、一息大きく煙草を吸いこむと、フーッと阿呆の方へ煙を吹きかけてから、じらすように、思案する表情を崩さない。
「そうねえ……」
阿呆は、たき子に吹きかけられた煙草の煙でも、それをよけるのは失礼に当たるとでも思っているのか、さすがに目をしょぼつかせはしたが、顔を外らしも伏せもせず、じっと煙に巻かれるに任かせていた。
その様子を眺めていたたき子の口許が、微笑とも受けとれるような僅かな動きかたを示したようだった。
「気が進まないようなら、彼の希望などどうでもいいんですから、止めときましょうよ」
鬼山は、わざと中止提案をした。
たき子の眸が鬼山に向けられた。
「飲ましてあげても、いいわよ」
「え？　ほんとですか」
阿保は目を輝かせた。たき子は汚い獣でも見るように、
「その代り、飲ませたあとは、あたしの身体に一切、触れさせないわよ」
「どうしてですか」
「分かりきってることじゃないか。汚ならしいもん。その唇でさえも、触れさせないよ。そんなことが分からないのかい、アホー。それでもよけりゃ、飲ましてやる」
これは、阿保にとって哀しい難題だった。一切、身体に触れさせないということは、彼女と絶縁することを意味しているからだ。
「そんな話、もち出すもんだからオシッコが出たくなっちゃったわ。あたし、トイレへ行くわよ」
たき子は意地の悪い微笑を浮かべて阿保を見ながら立ち上がった。
「あ、ちょっと待って下さい」
「どうする？」
阿保は問いかけるように鬼山を見た。
――それは君が決めることだ――
鬼山としても口をはさむ余地がなかった。
「飲ませて下さい。是非、飲ませて下さい」
「フフ、ほんとに、お前はアホーだね。よしサ、アホー、おいで！」
たき子が浴室に行くのを見て鬼山は、あわててサッシュにとりつけてあったライトを、はずしながら、
「ちょ、ちょっと待って下さい」

「あら、いやよ、先生。そんなとこまで写真に撮らなくても、いいじゃないの」
「だめですか」
「だめよ、いくら何でも」
「はずかしい？」
「はずかしくなんかないけど、あんまりカッコいい図じゃないでしょ」
「しかし、アメリカのポルノの中にもなかった貴重なシーンですよ」
「でも、先生はMの中から女性美を見出すために写真を撮ってるんでしょ。オシッコするとこなんか、どう見ても美しい場面とは思えないわ。アハハハハ」
これには鬼山も一本、参った。
「ああ、もう我慢できないわ。アホー、ついといで！」
たき子はサッサと浴室へ入る。鬼山は慌てて放しにして入った。
浴槽の脇に洋式トイレがカーテンを半分ほど、ひいて据えられていた。
たき子は便器の前に立って、片足を便器の上にかけた。
「アホー、ここへ顔を、お出し」
阿保は、たき子の後ろで尻餅をついたような形で足をのばして坐り、そのまま、後ろ向きに尻をずらせて近づくと、グッと仰向けになり、便器と、その上につくられた片足のアーチの間に、顔を少しずつ、突っ込んで行った。
鬼山は、浴室の外からカメラを向けた。斜め後向きのたき子のポーズは、必ずしも鬼山の欲するポーズとは違っていたが、撮影を拒否する、たき子にポーズの注文は、つけられないから、それで我慢した。光量も不足しているので、はずしたライトの熱い電球を摑んで危うく、とり落としそうになった。阿保が、それをとって、椅子の背の上にクリップでライトを、とめた。
「何してるんだい、アホー。ぐずぐずしてると終わっちゃうよ」
「ハイッ、ただいま！」
阿保は急いで浴室に行き、しめた扉を開けこすれた。
「いいかい？」
パシパシパシッ……
と激しい音が、した。阿保の顔面に夕立ちのような強い雨音だった。
鬼山は、夢中で五、六回、シャッターを、きった。
いずれも満足すべきアングルではないのであとはファインダーを被写体に接近させて、覗いていた。
最初から同じポーズで続けられた20秒ほどの間、たき子は一気に放出したのだった。
ゴホンゴホンゴホン。
阿保が急に咳込んだ。
「アッハハハハ。馬鹿野郎ッ。アハハハ」
胸を反らせて嘲笑う、たき子の表情が、美しかったが、斜め後ろからしか撮れないのが鬼山は残念だった。
「ああ、汚い、汚い」
たき子は浴室のシャワーを捻って、下半身を、たんねんに洗った。
阿保は顔を真赤にして、なおも激しく咳込んでいたが、その顔は泣いていた。
——（続く）——



高橋千寿代様のお召しを待って

隷従の誓約

光林裕二

五月号で高橋千寿代様のご通信を拝見し矢も楯もたまらず、早速に奴隷志願をした私は、オスであることのサガ故、清純可憐な女性を苛めてみたい気持がないわけではありませんが、自分が美しい女王様に調教していただきたいというM願望の方が遥かに強い魅惑として心の中に定着している者でございます。

七月号で千寿代様から、「奴隷としての最初の仕事は、待つことのみ」とのご命令をいただき、千寿代女王様の気品と尊大さに胸うたれて、体の中を戦慄に似たものが走り抜けた思いがして興奮を禁じ得なく、その瞬間から、まだ一度もお目通りの叶わぬ千寿代様の奴隷としての私の生活が始まったのでございます。勿論、一日も早くご引見を賜りたいのですが「待て」というご命令は、奴隷としての私の適不適をお試し下さっているものと存じ、千寿代様のお情けを感じとって、私はまたまた、戦慄と興奮にシビレテしまうのです。

M奴隷の役目は五体のすべてを捧げて女王様に奉仕申し上げることと存じ、私はすでに千寿代様の私有物であると考えております。

千寿代様には家畜であり、物であり、そして生殺与奪の全ての権を捧げた卑しい生物であるところの私という存在をお忘れなく、未だに僅かながら私の心の奥底に潜む、オスであるが故の不純な気持を、厳しいご調教で叩き砕いて頂けることを、切にお願い申し上げる次第でございます。

私は、誌上に登場される多くのM女性の肉体の美、羞恥表情の美しさを見るにつけ、己れの醜いヌードを恥じざるを得ません。なんら鑑賞的価値のない私の裸身ではございますが、せめて、その自由の大半を失いながらも、懸命に女王様のご指示通りに動き、ご奉仕申し上げようとする、不ざまさに免じて、完全な家畜として、また便器としてご使用賜りたいものと伏してお願い申し上げ、ここに隷属の誓約を、させて頂きます。

――隷属誓約書――

一、私、光林裕二は全ての人格を放棄し、高橋千寿代様の奴隷として頂くことを誓います。

一、奴隷は、千寿代様の如何なるご命令にも絶対に従います。

一、奴隷は、千寿代様の許可なしには、一切、人間としての口を利きません。

一、奴隷の肉体は全て千寿代様の私有物ですので、如何なるお扱いにも、決して不満や異議は申しません。

一、奴隷は犬として、馬として、ブタとして、千寿代様の残飯でもお与え頂ければ、命ある限り、如何なる時でもご奉仕を怠りません。

一、奴隷は、千寿代様のお気の向くままの、どんな厳しい緊縛を頂こうとも、また、どんな冷酷なる戒具をお試しになられようとも、お許しを乞うたり、ネをあげないよう、一生懸命、努力致します。

一、奴隷は、理由の有無にかかわらず、千寿代様の下される如何なる責め、調教にも、絶対服従して、異存は唱えません。

一、奴隷の生殺与奪の権利は千寿代様にあることを、たえず確認して、どんな状態にある場合にも忘却は致しません。

奴隷、光林裕二拝

高橋千寿代様

――〝耽奇房〟我楽多控〈第七回〉――

排泄戯考

――辻村　隆――

『幻の少女』ヤスコの、スカトロジックな探究を発表して以来、同好の仲間から、大分、趣好が変わってきたねと、よく訊ねられる。

確かに、近頃はアナルへの関心が昂まり、クリスタール、インターコースのあとの排泄や、羞恥責めの一環のプレイとして、女性が尿意を訴えたりすると、占めたとばかり、わざわざ縛り直して、ノコノコと、トイレまでついてゆき、羞恥にくるまりながら、直視に、裸身を、こわばらすのを、じっくり見て愉しむという、悪趣味に傾倒してゆく私を自認しているのであった。

同好仲間は、そんなスカトロ的趣味を、最近のものと思っているらしいが、これは私のすべてを知らぬ連中のことであって、正直言って、この悪趣味、かなり根深いものがあるのである。私の過去のカメラ、ハントにも、それが本筋ではないが、排泄シーンが、しばしば登場している。縛ってトイレへつれてゆける女性はいいが、縛られると緊張して、出るものも出ないという女性や、後始末を考えて、どうしても縛られるのはイヤという女性には、縛ることを強要しない。その代り、交換条件として決定的瞬間などはバッチリ撮らして貰っている。

もともと排泄は、人間が生きてゆく上の最大の必須行為で、上は貴人から、下はルンペン乞食に到るまで、老若男女を問わず、一日に数度は必ず、やっている、ごく当然な日常茶飯事に過ぎない。但し、そうした大小の排泄行為は、第三者に見せるべき性格のものでもなく、ちっぽけな個室で、孤独にすませているのが、一般的な常識である。

それが一旦緩急の、SMプレイという範疇で行なわれるとなると、その日常茶飯事が、俄然、興味津々たる行為と変化する。

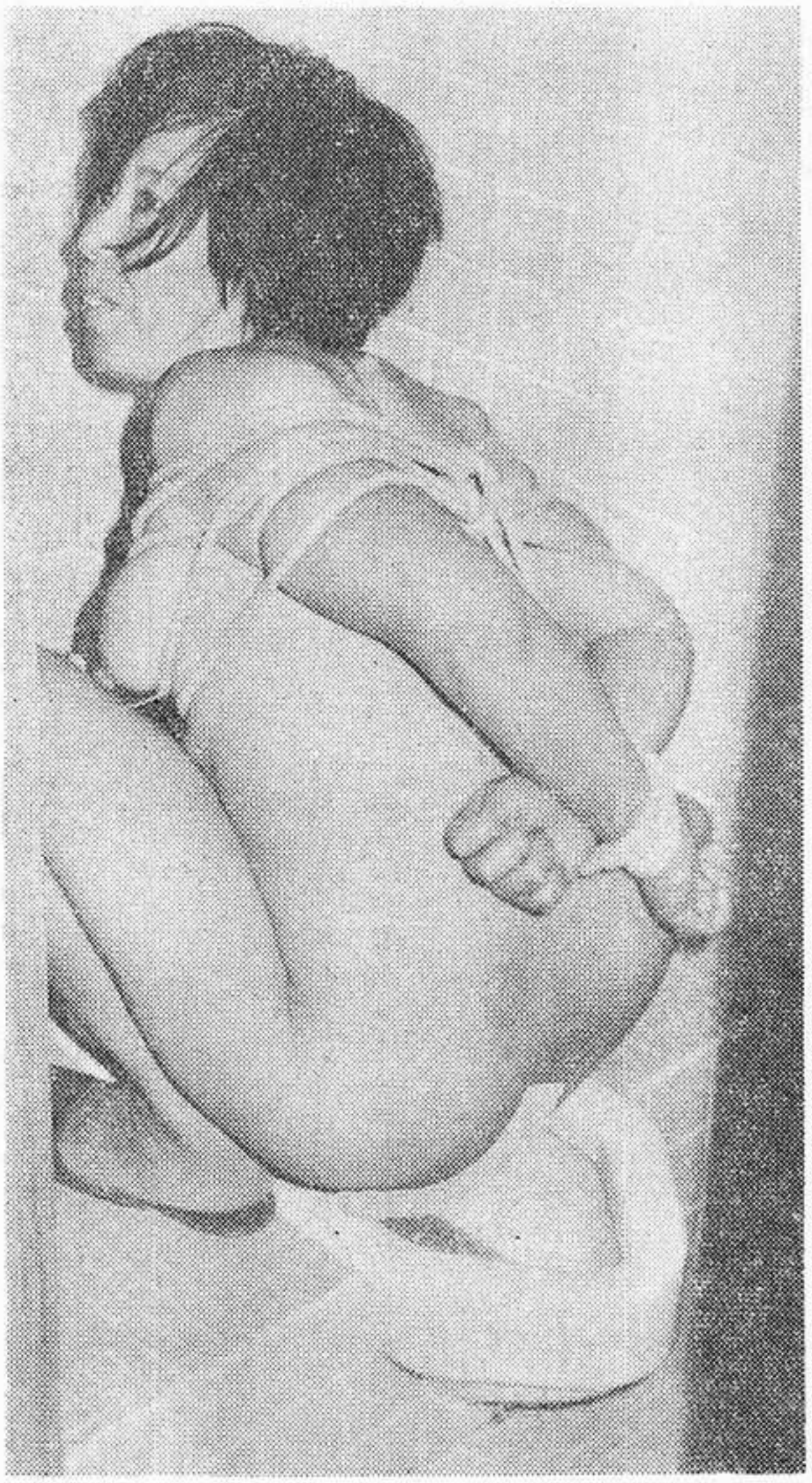
排泄もSMプレイの一環となると、おのずから女性の態度は変わってくる。

蹲踞の、余り恰好よくないポーズを見られているという羞恥が、俄に拡大され、独りやるなら、何の変哲もない生理現象も、あからさまにみられているという感覚が、否応なく羞恥に繋がってゆくのである。

況してや、緊縛されての排泄となると、自由はきかないし、後始末も、自分の手で行なえないとなると、SMプレイに、かなり没入した女性であっても、一応は拒否したくなるのも、また無理からぬ次第であった。

単なるハルンの放出ならまだしも、時によっては固形を伴うことすらあり、クリスター

（A）佐野みさ子



ル、インタコースとなると、これは必然的に普遍的な、コクのある匂いを漂わせなければならない。その挙句、むくつけき中年男に後始末をして貰わねばならぬとあっては、いかなる女性と雖も、羞恥を覚えるのは当然過ぎるほどに当然であろう。

しかし考えても見給え――相手が、しわくちゃのオバンや、赤ちゃんや、ブスの醜女なら、いざ知らず、若々しい可愛い子ちゃんや爛熟の人妻、さてはまた、SMプレイに意気投合した被虐の歓びに、のたうつ女体となると、この日常茶飯事は、もはや、ただごとでは済まなくなるのである。

勿論、人それぞれの好みもあって、SMプレイに耽溺しても、スカトロ的異臭には辟易するという御人もあり、これは一概には、SM人なら、誰しもそうだというわけにはゆくまい。しかし、それは所詮、相手の女性次第ではなかろうか。

若しも仮に、貴君が、今をときめく美女のブロマイドを眺めて、オナニーに耽る若者の中には、もっと極端な空想を描いているのが居るかも知れないが、熱中するさなかの妄想は、私の述べたようなことを、頭に描いていないとは、いい切れない。いや、むしろオナペットの対象の女性の、未知のポーズに、あらぬ思いを走らせているのが、大半ではなかろうか。

スに、君は欣然として眺め、彼女の代りに後始末をするに違いない。

天地真理ちゃんのような可愛い子ちゃんを、自分の眼で確かめたくなるであろう。

そんな不逞な妄想を抱いても、実現不可能と諦観しているから、なんとも思わないだけで、可能性ありとすれば、試みたくなるのは人情ではなかろうか。

輝く美貌、楚々たる栗原小巻嬢も、人間であれば、当然、一日数度は、個室の御厄介になっている筈だし、可愛い子ちゃんの天地真理にしても、オシッコしないわけにはゆかないであろうが、その実態を探究したいという不逞な妄想を抱いたとて、それは罪にはならない。可愛い子ちゃんは、若い青年のアイドル、則ち、オナペットである昨今、天地真理

そんな有名人やスターでなくても私はある程度、カメラ、ハントという、試みによって、数多の女性のナマを、この眼で拝する栄に浴してきた。

その結果、屋上屋を願って、範囲で、内潜する、スカトロジックな趣向を、も果たしてきたのである。

排泄への願望は、何も〝幻の少女〟ヤスコに始まったのではない。その胚胎は、既に二十年の昔にさかのぼっていたのである。

排泄シーンは、今迄の、カメラ、ハントにも、チラチラ隠見している筈であるからさまに、以前はそこまで言及出来なかっただけである。

私は或日、暇にあかせて、耽奇房の薄暗い間に沈潜し、膨大な蒐集の、過去の資料を開いていった。

凝集した、排泄のシーンを求めて……。

あるわ、あるわ。私の予想以上に多い。

例えば、渡部好美となると、SMプレイのその都度、羞恥の極のポーズをとらせて、排泄を強要しているので、トイレのフォーム、刹那の落下の瞬間など数十枚近くもある。どれ一つ、とり上げても懐かしく、彼女とのプレイの記憶につながっている。

私の内潜したスカトロ趣味を証明する一人一枚のフォトを、抜き出して数えてみたら、四十八人あった。どうしても発表を憚る女人もあって、それらをオミットしても、二十数人はある。その思い出に繋がるスカトロ戯考の、今なら話せる、その竹ふしの思い出を断片的に綴ってみたいと思う。クサイなあ、なんていわないでチョーダイ。

×　×　×

ここに、カメラ、ハントの最終（悦虐の遍歴――四十八年三月号）を飾った、佐野みさ子の、クリスタールプレイによる排泄シーンがある。

〝悦虐の遍歴〟から、これをピックアップしてみよう。

（懼らくは、二リットル以上の液体が、彼女の胎内に充満しているのさわりのシーンだではなかろうか。

「ああ、苦しい。もう我慢出来ない……」

切ない訴えを無視して最後の一滴までも吸いあげ、すっかり注入し終わった私は、一つ気分で直視した。

「あああダメ。もうダメよ。本当に……」

悲痛に叫ぶ、みさ子の必死の声。

柱から解き放すと、両手で、膨らんだ腹を押えて、かけ出そうとするのを、ぐいと羽掻いじめにし、地団太ふむ、みさ子に素早く縄をかけて、しっかりと後手に縛り上げる。

「さあ、これを咥えてゆくのだ」

屈辱のエネマを口に咥えさせ、トイレを開いてやる。

あわただしく白い陶器に跨がるみさ子に、もう待てしばはなかった。

一杯にドアを開いて、意地悪く、私はカメラを構える。

けたたましい澱音――。（中略）

「もう、いいですわ」

流石に、羞恥を満面に泛かべて、みさ子は振り返って私に声をかけた。

女体を跨ぐようにして、片足でペタルを踏みつけ、勢いよく流される廃液が、すっかり消去し終わってから、体をうつぶせて腰をあげた、みさ子の後始末を、ゆっくりと、し終わり、立ち上がった彼女と眼が合った時、女はハニカミの笑みを、うかべた。

「愧かしかったですわ。一番、愧かしい恰好をみていらっしゃるんだもの」

「お前が始めてみせた羞恥じゃないか。だから、その羞恥を確かめてみたかったのさ」

――（中略）――

縛られた女体を、男の胸に投げかけて、トイレのドアの近くで抱擁する奇妙な男女を、ノーマルな人間がみたら何と思うだろう。

一つのプレイをなし遂げた喜びは、汚辱にまみれて、赤裸々なプレイを展開する当事者でなければ、恐らくは、理解に苦しむ行為に違いなかった――）

カメラ・ハントの最終篇では、こうして、私のスカトロ趣味を、かなりナマナマしく前面に押し出している。排泄中のフォトAも、かつてなく、大胆なものであった。

私はその時、アナルへの激しい意欲を覚えた。

佐野みさ子は、おしゃぶりが誠に巧みであった。吊り責めを混じえ、数種の緊縛プレイのあと、心はアナルへ走っていたくせに、彼女の巧みな技に負けていた。

暫時の休養――そして、彼女の挑戦に今度こそはと、本気になって、見事に果たし終えた。

そこのところを、こう書いている。

（ポンプでの注入を、幾度となく繰り返しては、ゆっくりと吸い込まれてゆく液体の反応如何と、みさ子のA感覚を観察していたのであった。

（中略）

「嬉しいわ。抱きたいの、あたし……ねえ、一度、解いてよ」

「ダメダメ、縛った侭だ」

「あなたの体重に押しつぶされて、洩れても知らないわよ」

「栓をしておいてやる、これで――」

回転させると、羽虫の響きが、私の手に伝わって来た。

みさ子は大きく呻いた。無理矢理の鈍痛が神経に伝わったのであろう。

私は、もはや逡巡しない。蹂躙しつくすすべてが、そこにある。ベッドの上へ引きずってゆくと、心労の影を漂わせ乍らも、大脳神経は鋭い程、冴え渡って、斟酌もあらばこそ欲望の狩人は、愛の獲物を求めて、身を躍らせたのであった）

この描写では、アナル・セックスは、想像程度にも感じられない。私はチャンと詳述したのだが編集部が削ってしまったのである。

（無理矢理の鈍痛が、神経に伝わったのであろう）から、（私は、もはや逡巡しない）の間、二十行近く削除してあった。

カメラ・ハントは、最後の最後の、最終篇まで、兎も角も危い個所は、よく削られた。まあ、そのお蔭で無事、何事もなく終わったのかも知れないが正に隔靴掻痒の感である。

佐野みさ子は、A感覚も感度良好であったが、それを附記することは、あながち蛇足でもなかろう。

長い間、便りのなかった彼女の夫から、数月前、珍しく便りが届く。三葉の強烈な緊縛の近影と共に――。

『前略お元気ですか。この処、関東では毎日暑い日が続き、少しグロッキーです。みさ子とのプレイも、暑さのせいか、しばらく遠のきまして最近ほとんど、やっておりません。

ロマン派生からは、時々、要請がくるのですが、仕事の都合で、思うようにまいりません。辻村様のお仕事は如何ですか？　私も大いに、みさ子をお貸しして、辻村様に協力したいのですが、子供の問題等で、それが出来ないのが残念です。

もし近々にでも、辻村様が上京する予定があり、その日が私も休日でありましたなら、一日、私共の家にお泊り下さい。余り強烈なプレイは出来ませんが、子供が寝たあとにでも、みさ子を辻村様の風呂のお相手をさせますし、辻村さんがおのぞみなら、おしゃぶりの奉仕、セックスもO・Kですし、アヌスも

結構です。考えただけでも、楽しいですね。一応、八月の上京予定を、お知らせ下さい。お待ちしております。お身体に気をつけて、がんばって下さい。佐野生　拝』

確かに、考えただけでも愉しい。

愛すべき代理妻の夫の前で、ハッスル出来るかどうか。それはアタックしてみなければ分からない。豊満で、被虐度百パーセントのこの感度のいい人妻と、再会する日も、近いかも知れない。（私信を勝手に公表してゴメンなさい）

×　×　×

もう既に二年前になるが、昭和四十六年十月号のカメラ・ハント〝悦虐の生態〟で発表した、三浦純子さんの排泄シーンも、当時、誌上に掲載されたものの一枚である。

三浦敬一、純子夫妻と、その前年の九月初旬、始めて出会ってプレイし、約一年余り後彼の訪問を受けて、夫公認のもとに、純子夫人と、一対一のSMプレイをした時の記録である。

三浦純子に対しても、私はアナルへの欲求が強かった。だからチャンと、こう書いている。

（B）三浦純子

（私のSMプレイに、最近クリスタールの責めが多くなったことは、私自身、もっとも自認している。それは、ワギナを羞恥の対象と考えなくなりつつある最近の風潮に、より以上の女性の羞恥を求めようとする、一つの現われなのであろうか。

アヌスを責めの対象とする時、女性は確かに狼狽し、屈辱を覚え、激しく羞恥する。それが、SMのプレイずれした私にとって、新たな、鮮烈な興趣に、つながるようになってきた。かつては不浄とされたワギナは、今や輝かしい蠱惑の源泉と変貌している。しかしアヌス自体は、排泄の出口として、今でもやはり不浄視する憾いがあり、その排泄を、第三者に露呈することは、羞恥の極みのように思われている。謂わば、それは醜悪以外の何ものでもないと考えられ、生まれてから死ぬまで、ついて廻る、絶対の必要行為であり乍らも、それを口にし、ましてや第三者にみられることは、この上もない屈辱と、羞恥の塊に外ならないと、既成の美徳の観念は盲信していた。

その羞恥の美徳を抛擲させ、麻痺させるところに、SMプレイの醍醐味が、生まれてくる――）

こうして読み返してみると、二年前も今もアナルに対する私の信条は、ちっとも変わっていない。

第一回目の浣腸の排泄は狭いバスの中で行ない、彼女は羞恥に、かきくれる。私の胸はジンジン疼く。SMプレイの真髄『花と蛇』のシーンを地でいったものである。

排泄の羞恥に悶える夫人の一節の抜書。

（私はわざと、時間を稼ぐつもりで、縄尻を再び、シャワーのカランに結びつけて直立させ、もうぬるくなった湯槽へ、ドボリと体をつけて、ユラユラ体を浮かせ、全身を慄わせて、懸命に便意をこらえる、純子の顔を、熱い嗜虐の血をたぎらせて見守るのであった。

純子は奥歯をカチカチいわせ、激しく腰をゆすって、地団太を踏み始めていた。哀願の不明瞭な発音は、トイレへ行かせてェと叫んでいるように聞こえた。女の双眸は苦悶に歪み、私を睨んで叫んでいる剣幕は鋭かった。

どうしようもない屈辱の限界で、女は、つい切ろうと、体ごと抗を、こころみ

湯槽の上がりかまちに腕をのせ、私はわざと冷然とした口調で命じた。全身に屈辱感を剝き出しにして、純子は激しく首を振る。

汚穢と悪臭にまみれる、凌辱の極致を見られたくないのであろう。しかし便意の忍耐にも限界がある。

私はパッとバスから上がると、ずぶ濡れの体の侭で必死の形相で、もがきつづける純子を、羽掻い締めにして押えつけ

「さあ、早く、遠慮なく、するのだ」

と羽掻いじめの両手で、乳頭を、じりじり揉み続け、

「辛抱していても、無駄だぞ。早く、早く」

と、せき立てる。一縷の望みを絶たれたと知った純子は、もう待てしばしもなく、不躾けな撥音と共に、夥しい廃液を、いきなりドッと吐き出し始めた。狭いバス内に、特有の匂いが発散して、飛沫は私の両足にも飛び散った。（中略）カランにかけた縄尻を外すと、彼女はその場にヘタヘタと、しゃがみ込み、尚も残滓の放出に下腹を伸縮させ、冷たい感触の音を立てていた。

縄尻を握ったまま、片手で洗面器に湯を汲み出しては、ザブザブと流し始めると共に、洗い場の水栓を放って、ジャァジャァと水を流す。漸く平静をとり戻した純子は、それでも尚、じっとしゃがんで、最後の努力を続けていた。

その双臀に、数杯の湯をかける。

汲み上げた洗面器に半分程の湯を、しゃがみ込んだ彼女の両足の間へ差し入れ、飽くなき私の執念は、今一度、温湯の浣腸を試みようと、エネマをそれにつけた。

ありありと反撥の嫌悪の表情を現わして、純子は憮然として姿勢を崩さなかった。

「もう一度、腸内を綺麗に洗い浄めるのだ。その姿勢でうつむいて、浣腸するさまを、よくみるのだ」

そういって、私は圧力球に、ぐいぐい力をこめていった。蹲踞のポーズで、目を落とした純子は抗弁の出来ぬ猿轡の唇をわななかせ腸内を、温湯が突っ走るショックに耐えていた）

この日のプレイで、私は一度ならず二度までも、執念深くクリスタールに挑戦し、そのスカトロ的関心に胸を疼かせていたのである。

この貞淑で、如何にも人妻らしい人妻が、汚辱と羞恥にまみれて、排泄する過程が、私の嗜羞の血を、限りなくたぎらせるのであっ

た。門外不出のフォトには、その排泄刹那の瞬間が、まざまざと焼きつけられているが、ハッと息を嚥む美しさに、あふれていた。

純子にとって、この屈辱の繰り返しは、かなりの抵抗があったようであるが、緊縛、猿轡の拘束の裸身は、なすすべもなく、私の執拗なまでの嗜虐行為を、甘受するしか、なかったようである。

排泄する場所ではない、トイレのタイル上ということで、純子は堪えに堪えたが、やはり内心、激しい困惑と羞恥にくるまれていたのだろう。その点、二度目の浣腸はトイレの定位置ということで、さして抵抗もなかったようである。

その時の状況を、カメラ・ハントでは、こう書いている。

（二度目の浣腸を完了して、私はもう踌躇なかった。すぐさまカメラをトイレの前へ移動させて、ゆっくりと排泄の状況を探求しようとするつもりであった。

腰を持ち上げ気味にさせて、私は勢いよくあっさりとトイレへ連行する私に、純子はほとばしり出る水液の状態を、遺憾なく背後から観察していた。彼女に、バスでのような羞恥感はなかった。便器にしゃがむことによって、安堵の気持が支配すると共に、水液のみを知っているからでもあろうか。かなりの時間、純子は抓っても噛みついても、痛さは感じなかったであろう。

これがフォトBである。

私はそのあっけ気味にさせて、私は勢いよく、純子をベッドに誘い、欲望のおもむく侭に、愛虐の目標をアナルへ定める。）

彼女は、度胆をぬかれたらしく、反射的に拒否した。私は甘く口説く。

クリスタープレイにつづく、排泄のあからさまさが、大脳神経を異様にかき立てたのか、あわよくば、第三の性といわれるアナルに、異常な欲求を燃やしていたことは確かで

便器にしゃがんだ。

排泄物は出しきっているから、ここでは憚らく、水溶液ばかりであろう。

既に緊縛の限界も来ていて、両手は白く変じて、これ以上、強く縛った侭でおくのは、危険であった。感覚は麻痺して、この十指を抓っても噛みついても、痛さは感じなかったであろう。

腰を持ち上げ気味にさせて、私は勢いよくほとばしり出る水液の状態を、遺憾なく背後から観察していた。彼女に、バスでのような羞恥感はなかった。便器にしゃがむことによって、安堵の気持が支配すると共に、水液のみを知っているからでもあろうか。かなりの時間、純子は最後の努力をしていた。）

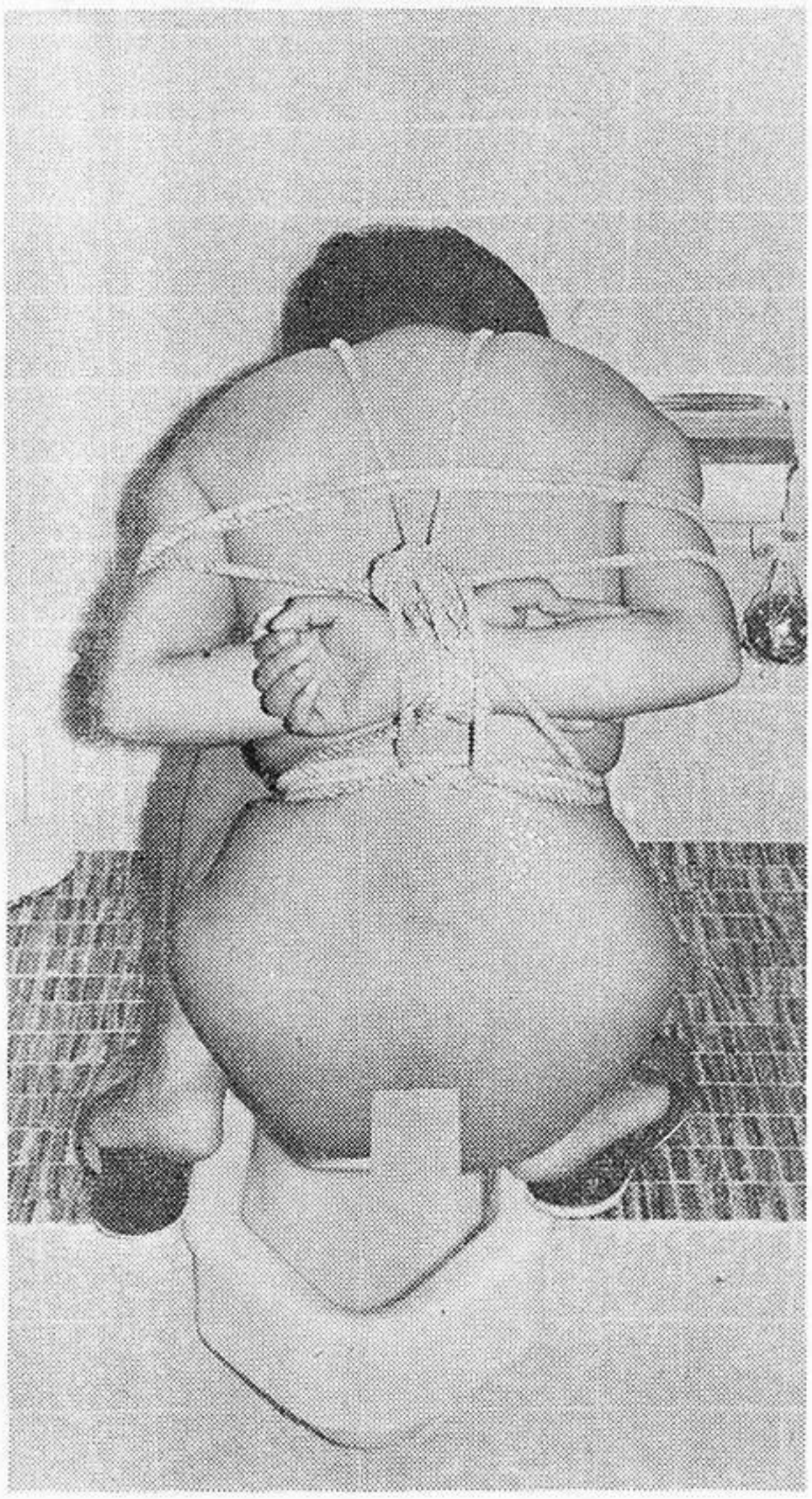
これがフォトBである。

私はそのあと、純子をベッドに誘い、欲望のおもむく侭に、愛虐の目標をアナルへ定める。

彼女は、度胆をぬかれたらしく、反射的に拒否した。私は甘く口説く。

クリスタープレイにつづく、排泄のあからさまさが、大脳神経を異様にかき立てたのか、あわよくば、第三の性といわれるアナルに、異常な欲求を燃やしていたことは確かで

（C）デパート店員カズヨ



ある。

純子は拒否した代償として、自らの意志でオーラル・インターコースを選んだ。ここで妥協すればよかったものを、更にバイブ責めや、バイブに細長い棒を装填、導尿したりして、その結果、私の神経はヘトヘトに疲れ果て「死に体」となり、この人妻の据膳の御馳走は、自ら、抛擲せざるを得なかったのである。

余りにも、強烈で、激しいSMプレイに終始するとセックスは昇華してしまう。これは私の過去のプレイの数々で、度々経験する敢えないカタストロフであった。

意馬心猿のくせに、焦れば焦る程、どうにもならない「死に体」――。これは、私のような、中年になって、さこそと感じられる悲哀なのではなかろうか。

プレイの宴果てて、帰る車中で、私がクリスタールと排泄の感想を求めたら、

「一番愧かしい恰好をお見せすることになるのですもの、とってもイヤですわ。でも、辻村さんがそのプレイによって、エスカレートなさるのなら、無下にイヤとはいえませんがこんなこと、あんまりなさらないで」

と腕を軽く抓られた。

三浦氏の仕事が多忙で、純子夫人の内助の功も絶対、必要である近頃、文通すらも途絶えがちになっているが、時折、瞼をよぎるのは、貞淑な人妻が、ひとたび、うちに潜めているM性を、激しく燃焼させた時、悶え、求めてくるあのナマナマしい裸身が、強い印象となって、私の心を疼かせるのであった。

×　×

過去、カメラ・ハントに登場した女性や、相手のプライバシーもあって、SMプレイのみに終わった女性、発表を憚る人など、数え上げると、二百人近くもあるが、これらの総ての女性に対して、スカトロ的欲望を満喫したかとなると、仲々そうではない。

排泄には、やはりタイミングが必要であって、一向に催してもおらないのに、オシッコをさせるわけにもゆかないし、単なるモデルの程度ならば、もうそれはモデルの限界だと、到底、許容しないトイレに行かせ、その瞬間執拗に粘って、トイレとやりかけた途端、えらく怒鳴られ、その侭、怒って帰った女性もあるし、気分が壊れたと、白けて、嫌な後味の侭で終わった女性もあって、スカトロジックなプレイへまで持ってゆく道程が、仲々並大抵うか。

排泄を、うまくSMプレイの一環として、とり入れるかどうかによって、相手に与える感情が、かなり違ってくる。緊縛し、SMプレイの間は、すごく協力しているから、これなら大丈夫と、SMプレイが一段落したあとトイレへ一緒にノコノコついていって、エッチねと、柳眉を逆立てられ、折角のプレイのいいムードが、最後になって白けた時もあって数え立てたら、それなりに失敗談も多い。

美しいもの、いいものは第三者には見せたいとは思っても、最も汚らわしいもの、不浄のものとされているものは、いかに気を許した相手であったとて、いやむしろ、相手が恋人や、愛情を感じた者には、尚更みせたくないのが、女人の共通の心理なのかも知れない。

それだけに、愛情を交した女性程、嫌がるのであった。それもこれもすべてがSMプレイの一環だと、相手に思い込ませるのには、やはり相手次第で、かなり難しい口説きが必要だった。

その点、クリスタールプレイをした女性は必然的に成功し易い。唯、そのクリスタールプレイへまで持ってゆく道程が、仲々並大抵

ではない。女性が浣腸を好むということは、例えSMプレイが出来たとしても、十中七八までは否定的で少なかった。その成果のアナルセックスへの道は、未だ細くて嶮しい。それだけは、私にとっては、やり甲斐のあるプレイとして、更に探究してみたくもなるのである。殊更にアナル探究に熱をあげる私は、もう根っからの変質人間になり果てたというのであろうか。

しかし私とて、これらの羞恥責め、羞恥の剔抉を求めて、一応はアタックしてみたくなるというのは、過去、余りにも多い女性とのSMプレイの結果、単なるプレイでは飽き足らなくなった挙句の、新味求道の活路ともいうべきものであった。

クリスタール——排泄——アナルへの憧憬……。その欲求の一つ一つは、別個のようであっても、こうして考えてくると、どこかで関連があり、願望は一つの軌道を走っているようである。スカトロ的な欲望は、これらの一連のプレイに、すべて共通したものを持っているのではなかろうか。

誌上を賑わす浣腸への願望。そして、それに繋がる排泄——。アナル責めの種々相。最後に辿りつくのは、アナルセックス。と、こうして考えてみると、浣腸も排泄も、すべてはアナルへの憧憬と欲望に繋がっているように見えるのは私一人の愚考であろうか。それらの、すべてを総称して、スカトロマニアといえなくもないと思うのである。

緊縛に端を発して、SMプレイの道程を経て辿りついた、スカトロへの欲望。それは、次々と一つの課題を経て、当然、辿りつく、SMプレイのルートであるのかも知れない。

ここにフォトCがある。カメラ・ハントに登場しなかった二十三才の、デパートの女店員であるが、大阪の有名デパートの、一階受付案内嬢なので、絶対、顔を出されては困るというので、結局はハント記事にしなかったのであるが、この未婚のカズヨは、同好仲間の会社社長D氏の、SMペットの女性の友達で、紹介してもらってプレイしたのであるが、ひとときを過ごしたが、私はA愛虐を、しきりに愉しんでいた。そのあと、D氏の彼女に思いがけぬほどの被虐願望の持主であり、クリスタールもO・Kの上、A感覚も抜群であった。

浣腸は、イチジク二個で行ない、廃液ではなく、固形の侭をみたい欲望にかられてのクリスタールであったが、果たせる哉、このCフォトのあとに、刮目の生態が連続的にカメラにバッチリ納められているが、これは筐底に眠っている。

アナルなら絶対、妊娠する心配がないとカズヨは割切り、私のA感覚への求めに応じたのである。

ロマンポルノの田中真理の瞳を、もう少しパッチリさせたような、この美貌のデパートガールは美しく燃え、私にとっては、貴重な五人目の経験であったが、未婚の女性にしては珍しかった。緊縛も、かなり強烈なものに耐え、彼女の情は相当に濃やかで、この様な娘がと、私を不思議がらせた。昭和四十七年三月の頃である。

会社重役D氏と、その彼女。私とカズヨの四人で、D氏の運転で、日帰りのプレイ旅行をし、榊原温泉で、四人一緒に入浴し、中食のあと、スワッピングめいたSMプレイに、りに愉しんでいた。そのあと、D氏の彼女に戯れ、試みに手をやると、ビクッとした様にその手を振り払われ、彼女は白けた表情になったが、あとでD氏に、このことを告げたらしく、あいつはシリに弱いんだよと、彼は笑って喋ってくれた。

カズヨは、去年の十一月に職場結婚し、もう妊娠したという仄聞に接し、今は縁なき衆

（D）森川美沙

「おシッコ、したくない？」

と、昂ぶる胸を押えて、さりげなく聞く。

「そう、いくらかはね。先程、おビールいただいたせいかしら」

ムラムラッと、神酒奉戴の願望が湧いてきて、思わず、

「のもうか」

と声が、うわずる。

「えッ！」

と、きき直して、

「何て、いったの？」

「便器かわりに、口で受けてもいいよ」

「まあ、あきれた。その口でキッス出来やしないじゃないの」

と、まだまだ、美紗には分かりかねるのであった。

縛られた侭、便器に近よる。蓋を押しあげると黙って坐る。あわててカメラを構える。

「腰を少し、上げてくれないかなあ」

「うつすの？」

「ああ」

「いよいよH趣味ね。まあいいわ、こう？」

と、じんわりと腰を挙げる。澄んだ液体がサラサラと音を立てて、白い陶器に撥ね返るのを、息を嚥んで、内光がまたたき、私の眼

生であるが、アナルへの関心、強い彼女が、SM気のない夫と、どのような夜の生活をしているのか、一度はきいてみたいと、しきりに思うのであった。

昭和四十六年十二月号の〝快楽のスーベニア〟で登場した森川美紗も、一度ならず、三度に亘って排泄のナマのシーンをカメラに納めている。〝快楽のスーベニア〟では、洋式トイレに坐っての、ハルンシーンであった。

この時は、SMプレイ自体、愉しかったので、つい筆がスムースに運び、84枚も書いてしまったが、排泄の一くだりは、案外、簡潔である。

（西洋式にこしらえたホテルのトイレは、バスの片隅に、便器を備えつけてある。それに

は、そのぶっつけ本当の瞬間を、またたきもせず熟視していた。

――（中略）――

彼女は悪戯っぽい口調で、

「辻村さん、おシッコしなさいよ。私、見届けたげる」

と、かつて、どのハント女性も言ったことのない言葉を口にして私の心の反応を確かめるように、じっと顔をみつめるのであった。

「弱ったな、あれ臭いよ」

「私には言ったくせに」

「でも……」

「いいじゃないの」

「じゃあ、思い切って、やるか」

「チャンと、おみせなさいよ」

戸惑い気味に、立った侭、便器に向かうが緊張のせいか、しばらくは催さない。

皓歯を覗かせて美紗は笑みをこぼした。

この一文、スカトロ趣味、横溢していて、あの日のプレイのいきさつを思い出して、今も懐かしい。この十二月号では、かなり精力的で、美紗のカメラ・ハントの外に東映ドキュメント映画〝『性倒鎖の世界』の、SM描写〟43枚も同時、掲載している。

この号の挿入フォトは、画面も大きく鮮明なので、このハントのあと、渡部好美と森川美紗がWプレイした時の、排泄のシーンをお届けしよう。フォトDが、それである。

渡部好美とのWプレイについて、書こう、書こうと思っているうちに、つい書きそびれてしまったが、執れ改めて、追憶記として発表するつもりである。

この時も美紗は、かなりよく呑み、酔いが彼女を放恣にし、奔放にさせていた。

渡部好美とのSMのレズのプレイに、S役を買って出て主導権を握り、存分に振舞い、女のさがの激しさを、まざまざとみせつけたのである。

昂揚した私は二人を雁字搦目に縛りあげ、好美によくみえる位置を与えて、エネマを握る。排泄への誘いは、ポリの湯桶一杯の温湯であった。

一分―二分――。美紗は牝獣の咆嗟をあげて、のけぞる。晒布で猿轡をかます私――。

とりはずし自由の、天狗のお面の鼻が吐出しを防いでいた。

苦悶の形相で、美紗は、緊縛の裸身を転々反側させる。

猿轡を洩れる絶叫が、もうダメ、もうダメ

(E)富田由美子

と、くぐもって尾を曳く。そろそろ頃やよし
と、太縄をときかけた時、美紗はもう、後手に縛られた侭で、トイレへかけ出していた。首にかかった太縄が、縺れて美紗の足に纏わりつく。

一瀉千里の激しさで、混濁の水勢が、便器にしぶきを上げる。女性の排便量は、男性に比べて少ないと聞いていたが、美紗の排泄の量は、相当の物量であった。

首を振って猿轡を外し、美紗はウンウンと呻く。

ややあって、どうしようというのであろうか。首をぐいと前に差しのべると彼女はトイレットペーパーを口に銜えクルクルと引き伸ばしていった。

だが、それまでであった。彼女は不自由な態勢に、もどかしげに私を振り仰ぎ、ペーパーを口から離して、

「さあ、いいようになさいよ」

と、みつめる瞼は濡れて、艶冶であった。

私は丁寧に後始末をしてやる。

「これで、さぞご満足、なさったでしょうねッ！　エッチ！」

美紗は捨台詞と共に、縛られた侭で、トイレを出てゆく。

トイレの水勢が、噴吐防止の役目を果たした天狗の鼻を丁寧に洗ってやった。

好美に今一度、排泄への誘いに使う為に。

美紗は、排泄を、あからさまにみつめられても、いつしか馴れてきたのか、羞恥も薄れて、私を拒まないばかりか、正しくはニンフである。

バスでひざまずく私に、勢いよく振り注ぐこともある。神酒を胎内に秘めたるが故に妖精という意味だという説もある。）

これは勿論、Ｓ性の方が強いのかで、いつか書いたように、〝エッチ〟の語源り切っていた。

美紗には、Ｓが共存していて、そんな時の彼女は、ごく自然に、痴態を悦ぶとか、痴漢は〝悦痴〟であって、Ｓ性の女王のように振舞った。が悦ぶことという意味だという、それと軌を一にしているが、美紗の本質は、美紗の本質も知れない。そんなに、若々しい初産の人妻や、稚妻の、ぽってりと膨れ上がった容姿は、正にしていたからであるものでもなかった。

私のスカトロジーの排泄シーンが、私には一つニンフ以外の何もの排泄シーンが、私には一つこの若い妊婦（にんぷ）の願望でもあったところ、箕田氏から、仲々に恵まれなかったとこ、箕田氏から、ハタチのニンフと呼称されているが、婦人（フジン）夫人（フウフ）主婦（シュフ）という風に、婦妊婦（にんぷ）が、妖しい精を胎内に秘めたるが故に稀である。妊婦（にんぷ）に対して〝プ〟という発音は妖精という意味だという説もある。）

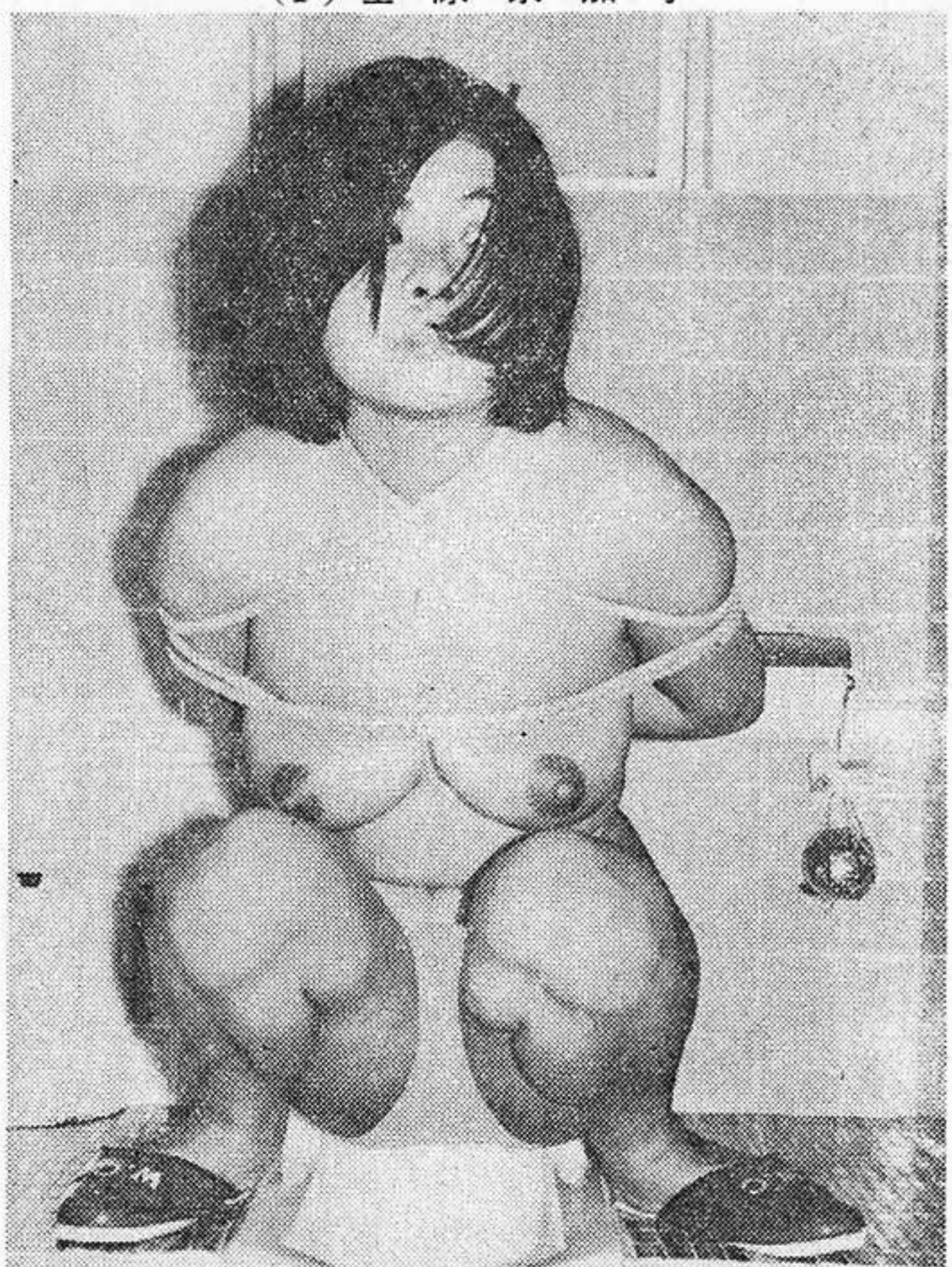
これは勿論、私のこじつけ的な、ＳＭ語録で、いつか書いたように、〝エッチ〟の語源は〝悦痴〟であって、痴態を悦ぶとか、痴漢が悦ぶことという意味だという、それと軌を一にしているが、美紗の本質も知れない。そんなに、若々しい初産の人妻や、稚妻の、ぽってりと膨れ上がった容姿は、正にニンフ以外の何ものでもなかった。

この若い妊婦の排泄シーンが、私には一つの願望でもあったところ、箕田氏から、仲々に恵まれなかったところ

（「あのう……」
「どうしたの？」
「オシッコしたいんです」
無理もない。最初にこの部屋へ入って、トイレに立って以来、行っていない。頻尿はニンフ特有の現象である。子宮の膨脹に反比例して、膀胱は圧縮されつつあるからだ。
「一寸、我慢してね。また、そんな時に限って、丁寧に縛ったもんだね」

慌てて解こうとするが、反って縄が縺れて仲々体から抜けない。やっと解き終わった時私の心にハッと泛かんだことがあった。いいチャンスだ。縛ってオシッコさせてみよう。
SMプレイによく使う手を、咄嗟に彼女に試みてみる気になった私は、解放されて歩きかける彼女のうしろから、サッと二の腕を摑み、素早く早縄をかけた。―（中略）―
「あのう、辛抱出来ないのです」

（F）金原奈加子



「その侭で、オシッコに行くんだよ」
由美子は、じっと私の顔をみつめた。
「縛られた侭で、して欲しい……」
強引に押し切ると、カメラを握って手洗いへ通ずるドアを開けた時、パッと一枚撮る。
ハッとこちらをふり向こうとしたが、縛られた洋式便所に腰を降ろそうとしたが、半腰でモゾモゾしている。それを目掛けて、再度、閃光が走る。
由美子の怨めしげな表情が崩れて、情けなそうな顔付になった。（フォトE）
「お願い、閉めてください」
ニヤッと笑って、ドアを閉めてやる。と、束の間もなく、溜まり水を打つ音が、判っきりと私の耳をついたが、短く消えて、私は尚もドアの外で耳を澄ませていた。
「あのう、済みました……」
泣くような小声が聞こえる。ドアを開く。
「縄を解いて下さいと、ペーパーが使えないんです」
「その侭、出ておいで」
「でも……」
「いいんだよ」
ヒョロヒョロと、由美子は、やや蒼ざめた

顔で出てくる。突発的な羞恥の行為に、どうしようもなく途惑っているらしかった。

長々とペーパーを引き出してチ切る。

「呀ッ、いけませんわ」

驚愕の表情を尻目に、私は払拭のプレイを続けていた。あきらめたのか、彼女の腿の力は、ゆるんでいった。

「ひどいことなさるのネ」

「プレイだよ、これも一つの……」

「すごく羞かしいわ」

「その羞かしさを掻き立てるべくね」

「イヤ、そんなの」――（中略）――

突然の私の行為に、由美子はすっかり度胆をぬかれ、縄をとくと、何を思ったか、慌しく、今一度、トイレへと消えていった。）

ニンフの放尿の顛末は、サラリと淡白である。浣腸による排泄でもなし、尿意は偶発的なものであったからだ。

私は、富田由美子の夫が、奇クの読者で、自分の妻の、カメラ・ハントの一件を必読することを脳裡に入れて書いていた〝あどけなきニンフ〟は全篇を通して、比較的おとなしいものになっていた。

あれから二年経って、世の中、急激にポルノ化した今、その時の、排尿の有様、本当の事を書いてもよかろう。

あの時、私はドアを閉めて出てなど行かなかったのである。中年男の図々しさで、泣きべそ掻いてこらえている由美子を叱咤激励し「いいから、いいから、さあ早く」と、しきりに、せかしたのであった。

愧らいのため、由美子は坐らず、股をすぼめ、中腰の侭であった。尿量は、さして多くない。膀胱の圧迫で、したいという気持はあっても、それは妊婦特有の頻尿の意識であったらしい。

田舎の農婦や、年寄りが、道端で、中腰になってやる、あのポーズである。ハルンは脚に伝って流れた。フォトでも分かる通り、実に情けなそうな表情がありありと出ている。

そのあと、私は由美子を抱きかかえるようにして、隣接するバスへ連れてゆき、温かい湯をザブザブとかけて、タオルで拭いてやり素早く口づけた。

呀ッと小さく叫んで身を引いたが、すぐに由美子は、意外にも私のするが侭に身を任せて、ぽってりと膨らんだお腹を、微かに波打たせていたのである。

正直いって、これだけのことである。書いてもよさそうなのに、何故あの時、私はそれを逡巡したのだろう。それは自分でも分からない。

富田由美子は妊娠八カ月であったが、その二年前の同じ月頃にハントした、童女金原奈加子は妊娠九カ月であった。

頻尿現象は同様で、プレイ中の彼女は度々とトイレへいったのに、私のその時の関心は専ら、妊婦の逆吊りにあって、トイレの排泄に、ついてゆかなかったのは、今もって惜まれてならない。出産後の彼女に会ったが、その時には、圧縮していたスカトロ的欲望を一時に爆発させたかのように彼女に浣腸を試み、カメラ・ハントのタイトルも、〝童女浣腸譜〟と、そのものズバリである。

昭和四十五年四月号には、排泄のシーンをこう書いている。既に、ポンプによって数回注入し、石鹸液は一〇〇cぐらい所を替えていたが、私は更にエネマを握るのである。

（奈加子は激しく眉をしかめる。クリスタールのプレイを知らぬ彼女にとって、それはもう苦痛以外のなにものでもなかったかも知れない。しかし私は、貪婪に追求する。

奈加子を四つ這いにさせる。

エネマの中心のゴム球を、ぐぐっと握りしめると、ズズッと音を立てて石鹸液が吸い込

（G）理容師ミキ

にして、便器にかけ上がらせる。
「イヤ、もう駄目です。あっちへいって」
「ゆかない。さあ、遠慮なくやるんだ」
「最低です、そんなとこ、見るなんて」
「イヤ、見たいんだ」
「ダメ、お願い。ああ、我慢出来ない。早くあっちへいって——」
地団太踏んで、奈加子は泣くように叫ぶ。
奈加子の若さが、到底、このプレイの終焉に耐えられぬようであった。
その姿をカメラに納めると、未練を残して私は、やっとあきらめた。既に顔面蒼白になった彼女は、その排泄を必死にこらえて、懸命の力をこめているようであった。
ドアをしめた途端、はげしい響きが私の耳を、つんざく。浣腸特有の撥音が、はね返ってくる。耳を澄ませて音に酔い、それが私を不逞にして、そっとドアを開いて覗き込む。気配で察して、振り向いた奈加子の眸に、始めて激しい屈辱の色が浮かび上がっていた。
もう彼女は一言も、いわなかった。そして苦しげに腰をねじらせ、体をゆすっていた。
白磁の陶器に、黒塊が二つ、三つ、大きく弧を描いて浮かび「ウンコによる健康診断」の本からみて、それは如何にも健康そのもの

まれる。更に一握りすると、かなりの圧力を掌に感じて、液体は奔流となって移行していった。容赦もなく更にもう一回、吸い込み、吐き出す。奈加子のもち上げた臀部は、横ざまに倒れていった。
「やめて、もう止めて下さい」
「我慢するのだよ、いいね」
「でも苦しいんです、おナカが」
私の手に返った嘴管から、残滴がしたたり落ちて、カーペットを黒く濡らす。
抱きつくようにして、早縄が呀っという間に、奈加子の上半身を、緊と後手に縛り上げていた。容赦もなく縛り上げられ、奈加子は腰をふるわせて、顔をこわばらせ、
「ああ、もう我慢出来ません。早く、早く、早くトイレへ行かせて下さい」
あわただしく、縛ったまま突き立てるよう

であった。特有の臭気が流れ、そっと私はドアを閉める。

羞かしい極限の態位を覗かれ、奈加子は涙を泛かべているようであった。この刹那、奈加子の私に対する感情が、懼らく変わったであろうことを承知しながらも、とことんまで追求せずにはおれなかった私の、ハイドの不倫な悪徳が、やむにやまれぬ究極的な行為であったのを、私自身が一番よく知っていた。

「もう、いいんです。出して下さい」

遠慮し勝ちな声に、ドアを開く。

この眼で確かめて流し終わると、私はベソを掻いた童女を、うつむかせて、丹念にきよめてやるのであった。）

この様に私のスカトロ趣味は、過去のカメラ・ハントの各篇に顔をのぞかせ、かなり横溢している。

フォトに斜線を太くいれていた頃だから、クリスタールも排便のフォトも、気を使っておとなしいものを選んであった。

排泄シーンは、両手を後手に縛ったバックからのものが一枚と、排泄を終わって便器から一段、降りて、しゃがみ込んだポーズの二枚が掲載されているが、その時には選ばなかったポーズが、このフォトFである。

便器で前向きにさせてよく見えるフォームをとらせ、ハントの文ほどでもなく、実際の奈加子は、羞恥に顔を赤らめ乍らも、よく協力してくれたのであった。

あの日は、このあと、更に二〇〇〇ccばかり浣腸して、再びクローズアップでとり、彼女のA感覚を試すつもりであったが、流石にこれは奈加子の激しい拒否で不発に終わってしまった。

十八才という年令が、その遊戯にまで、熟していなかったのであろう。

SMプレイによって、出産後のうれた体は燃え、私を拒否することはなかったが、愛虐目標をアナルに向けると、忽ち彼女は体を強ばらせ、汚いものにでも襲われたかのように逃げようとするのであった。

（H）　ポーカーフェストのマキ

(I) 川口有里子

×　×　×

緊縛や責めを伴わない排泄シーンは、カメラ・ハントの範疇に入らないとして、SMプレイの断層の谷間で、スカトロジックなシーンがあっても、以前は省略したり、カットしたりして、ハントにも余り登場していない。専ら緊縛やSMプレイの方に力を入れて書く結果、潜かな願望の排泄の方は片隅に、いつも押しやられ、陽の目をみぬことが多かったのであった。

昭和四十五年一月号〝ミキとマキの華麗なる戯れ〟で、理容師のミキの、洋式トイレで排泄中のフォトを発表したことがあるが、当時はフォトも小さく、軟調気味にボケていて一向に、はっきりしない。

その時のハントには、こう書いている。

ミキとマキは、レズ的な感覚で、ムチムチした、若い二つの女体をポリバスに沈めているが、一向に上がってくる気配がなく、私は焦立って、バスを覗くというくだりである。

（それにしても、長い――。かなりの時間が無為に流れていった。そういう風に仕向けたくせに私の心は、じれて焦立ち始めていた。

マキがバスに消えて、もう二十分近くなるのに、一向、上がってくる気配もない。待ちくたびれて、しびれをきらした私は、そっと足音を忍ばせてバスに近づく。パチャパチャと湯のうつ音が微かに聞こえる。ドアのノブを静かに廻して、広くもないバスの中へ首を挿し込んだ。

刹那、あっと驚きの声があがって

「いやッ、センセ――。あっちゃ、いけ」

仁鶴かぶれの調子で、ミキが叫んだのも道理。洋式便所に跨がって、排泄の最中であったからだ。軽い特有の臭気がバスの中に篭っていて、マキはバスの縁に両手をあてがって下半身を湯に沈めた侭、そのミキのポーズを見守っていたのである。このハプニングに、私のドッキリカメラは、直ちに、活躍を始めた。パタンと扉を閉すと、電池装填のストロボカメラを隠しもって、今度はいきなり大きく扉を開くと、正にペーパーで始末しようとするミキの羞恥の全景にパッと光らせた。

「イヤイヤイヤ。センセーのエッチ。知らない、知らない」

ミキは真赤になって立ち上がりかねて両手で体の前面を蔽って身をかがめていた。思いもかけぬハプニングシーンを撮って、私の胸は異様に燃え始めた。縛るのプレイではない。こうしたのみがハントなシーンの中に、異常なプレイがひそんでいるのを発見して、私は妖しいレスボスの戯れを、この眼で確かめたくなったのである。

立ち去らない私に観念したのか、体をそむけながら、ミキは湯桶で、何杯も何杯も汲み上げては、下半身にかけ、ザブリとバスに身を沈めた。

「センセーの、いじわる……」

私は黙ってニヤニヤ笑うばかりである。

「ウチ、のぼせて、もう死にそうになっていたんよ。マキがやっとこさ解いてくれて助かったけど、いつ迄放っとくつもりやったの」

「チャンと計算ずみさ」

口を尖らせてプーンと膨れてみせて、

「ひどいわ、ウチだけ虐めようか」

と逆襲してくる。マキはハニかんで笑っている。

「だからバスから上がったら、マキをウンと虐めりゃいいよ」

「それに第一、プライバシーの侵害よ。あんなとこ、撮るなんて……」

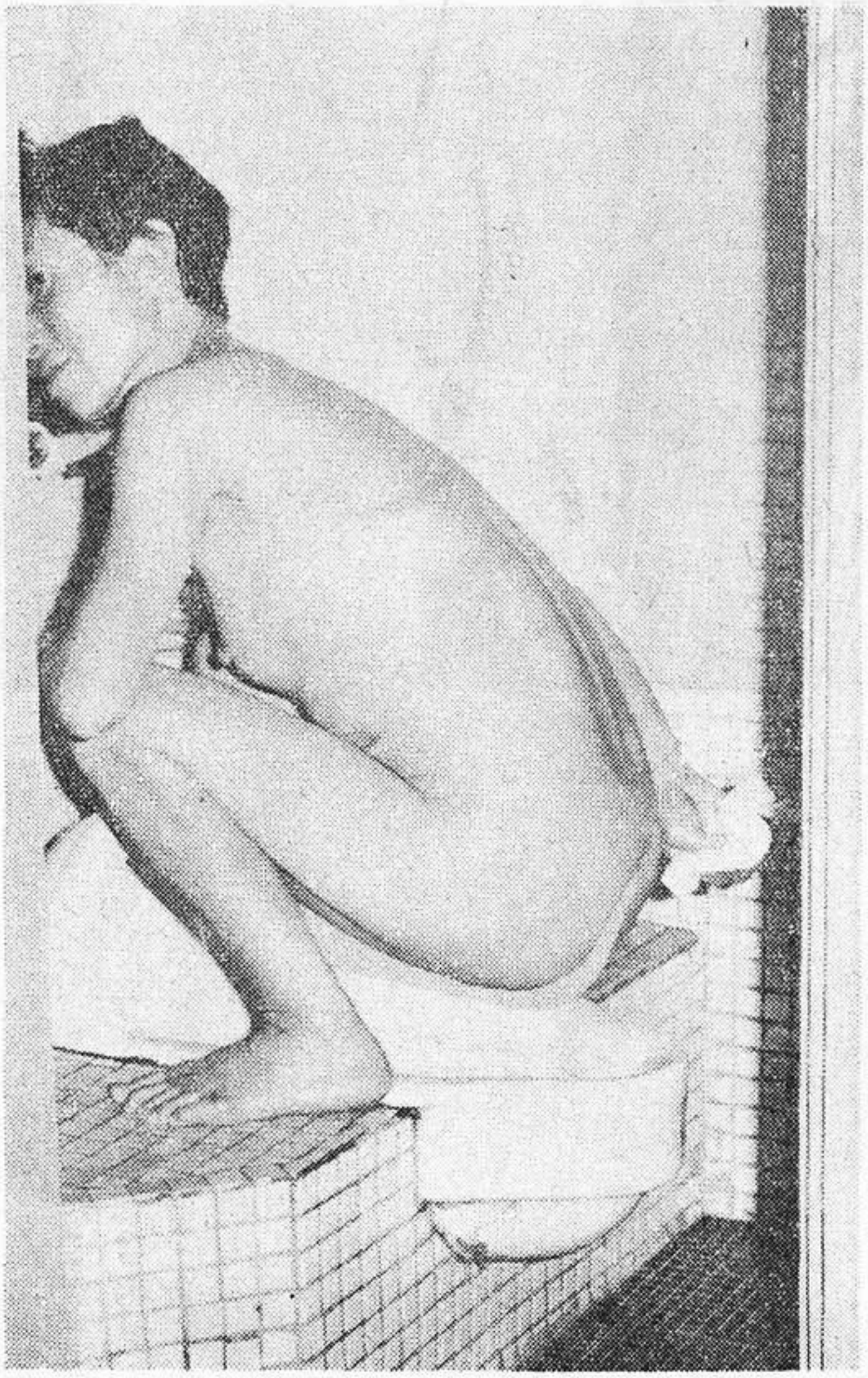
「いーだ。ねえ、マキ。二度と撮れないドッキリシーンだ。恰度、いいや。ニンフの戯れを、とってやろう。ミキ、抱きつくんだよ」）

てな調子で、バス・トイレが同居するビジネスホテルの一室で、若い可愛い子ちゃん相手のプレイが、延々と続くのである。

掲載のフォトは曖昧模糊として、到って判っきりしないので、フォトGの、正にペーパーを使おうとする瞬間を、もう一度よく観賞していただきたい。

文中、煩雑に亘るので省略したのが、マキのハルン放出のシーンである。

「ズルイわ。私のときだけ見てるやなんて。



（J）朝倉絹子

マキも絶対、するべきよ」

と、ミキはそのあと、しきりに強調する。

「だって、今したくないんだもん、無理よ」

マキは一応、拒否したが、

「せめて、オシッコぐらいは、するべきよ。私がウンコするところを、湯につかって、ニヤニヤして、見ていたくせに」

と、ミキは尚も執拗に喰い下がる。

「なーに、こんなこと平気よ。どうせ、二人とも、すっかりセンセーに裸、みられてるんだもん。どうってことないわ」

マキは、それが特徴の、ボーカーフェイスを崩さず、平然と洋式トイレに跨がると、サラサラと音を立てて、あっさり済ませた。それがフォトHである。

確かに、どうってことはない。まして、洋式ともなると、その状態は隠蔽されていて、蹲踞式にくらべて、かなり興趣をそがれてしまう。だからハントにはオミットし、フォトも省いたのであるが、一応、マキのハルン排泄の瞬間には違いない。

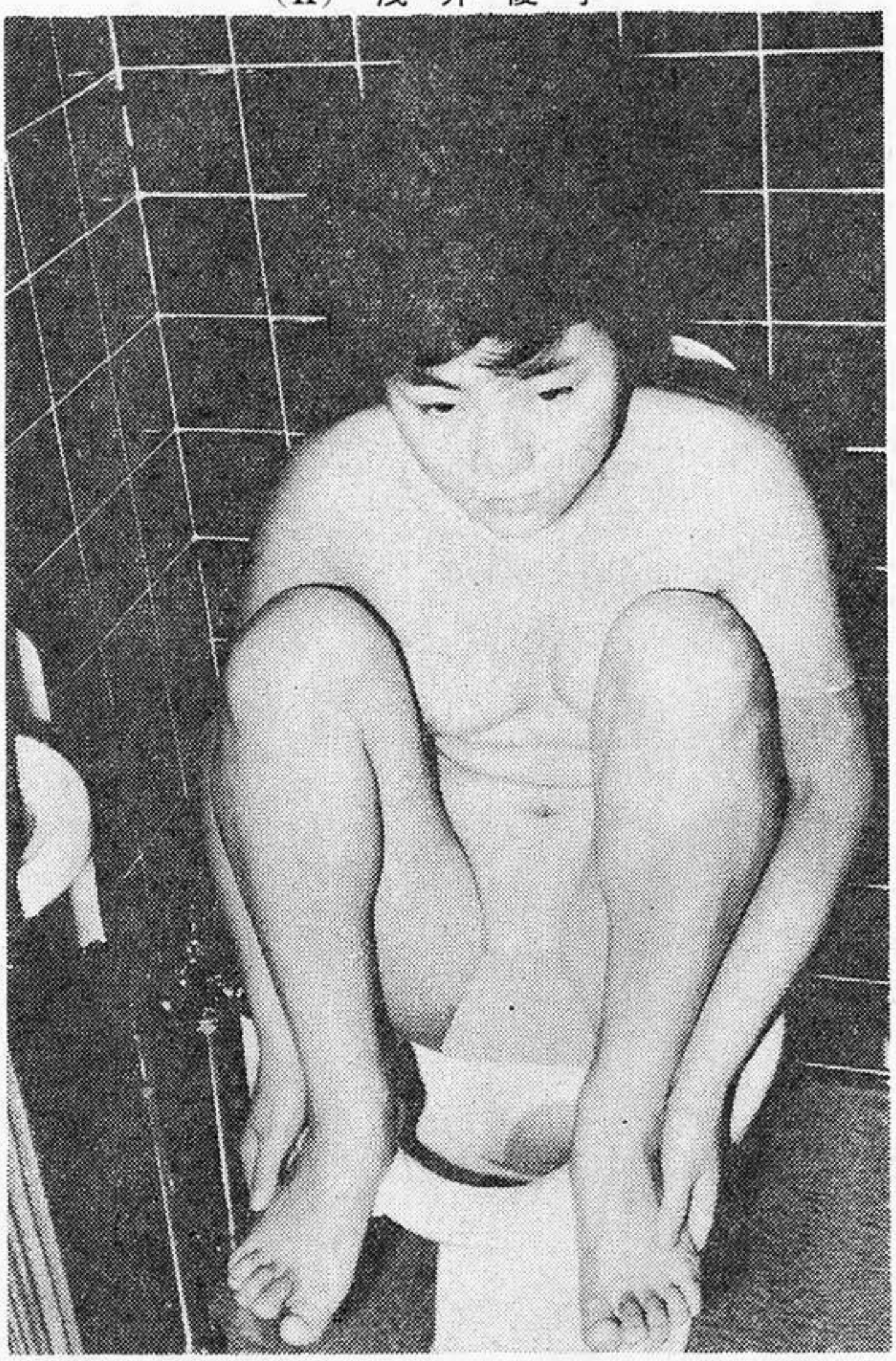
昭和四十四年一月号の〝その悦虐が失神をよぶ〟の、川口有里子の場合は、かなり事情が違っていた。題名が示す通り、この娘は、SMのプレイに、しばしば恍惚の失神状態になり、すっかり欲ばせてくれたが、私との始めてのプレイに、極度の緊張感からか、失神をよぶだけではなく、俄な生理をも呼んだのであった。拭えど拭えど滲み出て、その出血の多量さに、私は困惑する。

（携帯用のバイブレーターが、ビーンと音を立てて、音はすれども姿の見えぬ有様で、響いていた。

彼女は何かに必死に訴えようとして首を振っていた。その時、私は見た。台上をヒタヒタと濡らしてゆく、鮮血のしたたりを——。

ショックによる突然変異ということもあるものと、私はこの眼で直接に確かめた。十日も早い生理の来潮であった。流石に愧らい気な川口有里子は、階下へ駈けるようにして降りていった。拭い易い台上でよかったのだ。

（K）浅井優子



若し床下のジュータンの上であったなら、正しく始末に困るところであった。

タンポンの準備もなく、ティシューを急場凌ぎに使って、彼女はやや、白けた顔で上がってきた。これからという時になって折角盛り上がって来たプレイの想念に、さっと一掬の冷水をかけられた気持で

「どうする？」

彼女は頬を染めて、うつむいたが、

「こんな状態でも差支えなかったなら、わたし構わないけど……」

むしろ血を見て、女の被虐の欲求は、かえって拍車をかけられて昂まっていたのではなかろうか。

それを、まざまざと現わすように、言い終わって、川口有里子の眼許は、パッと紅をさしたように染まって、瞳はうるんでいた。

「その気なら私は構わないよ、やめないだろうね」

「大丈夫と思うけど、何度でもおトイレへ行きますわ」）

と、いう次第で、私はノコノコとトイレへついていったのだが、そのくだりは書いていない。

洋式のトイレに坐った有里子の姿で、窪底に秘めていたのが、このフォトIである。

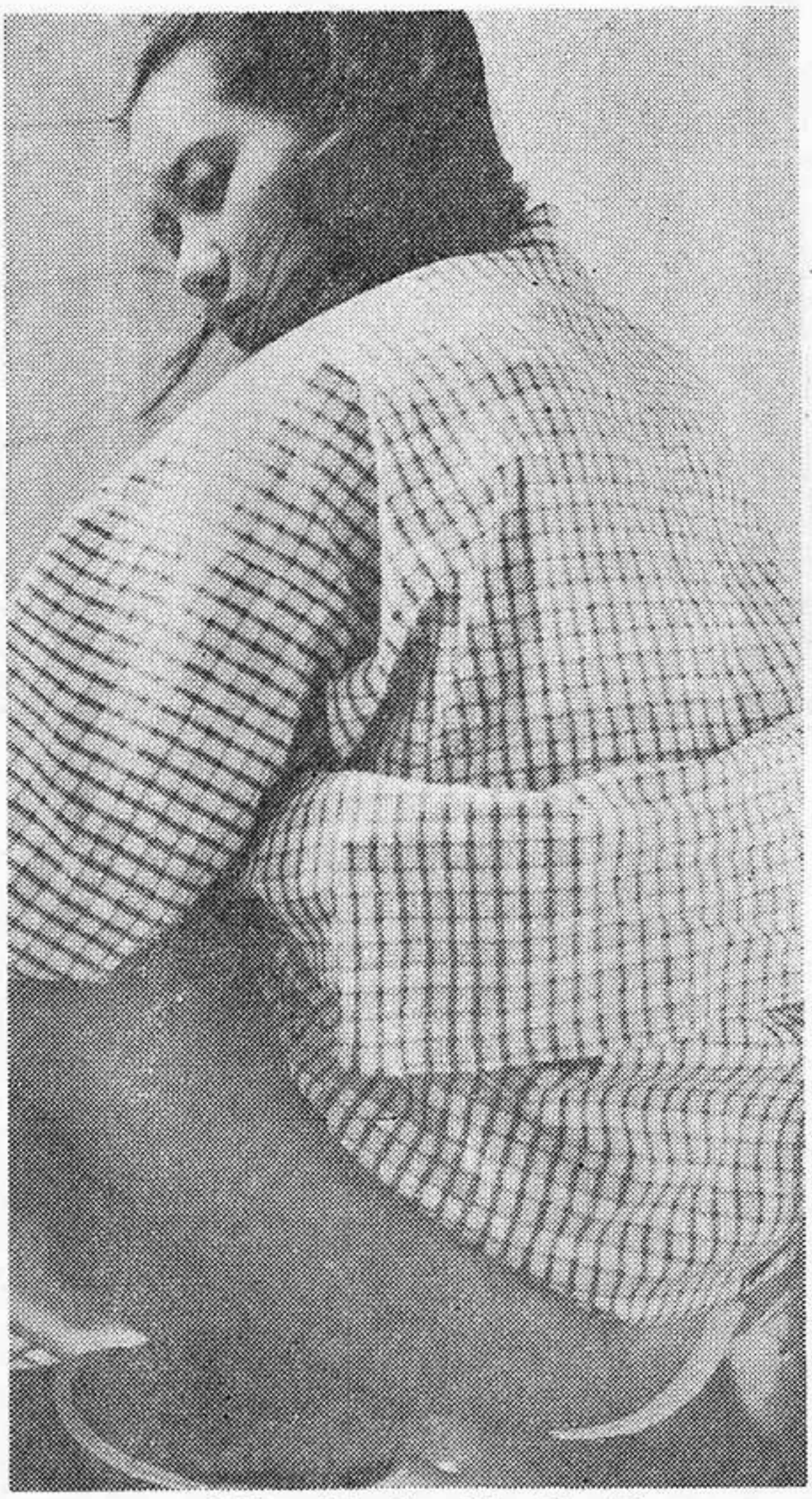
従順な有里子は、私のいうが侭のポーズをとった。

俄の生理にもかかわらず、私はむしろ、尚更に激しい嗜虐のほむらを燃やして、失神をよぶ強烈なプレイを続けたのであるが、それらの失神悦虐の数々のフォトに比して、数枚のトイレでのフォトは縛りもなく弱さを感じたのでオミットした迄であった。

昭和四十五年三月号〝悦虐に憑かれて〟で発表した、被虐の人妻佐倉絹子とは、その後も数度、悦虐のプレイをしたが、あの当時、同一の女性は再度、登場させないという私の信念で続篇は書かなかった。

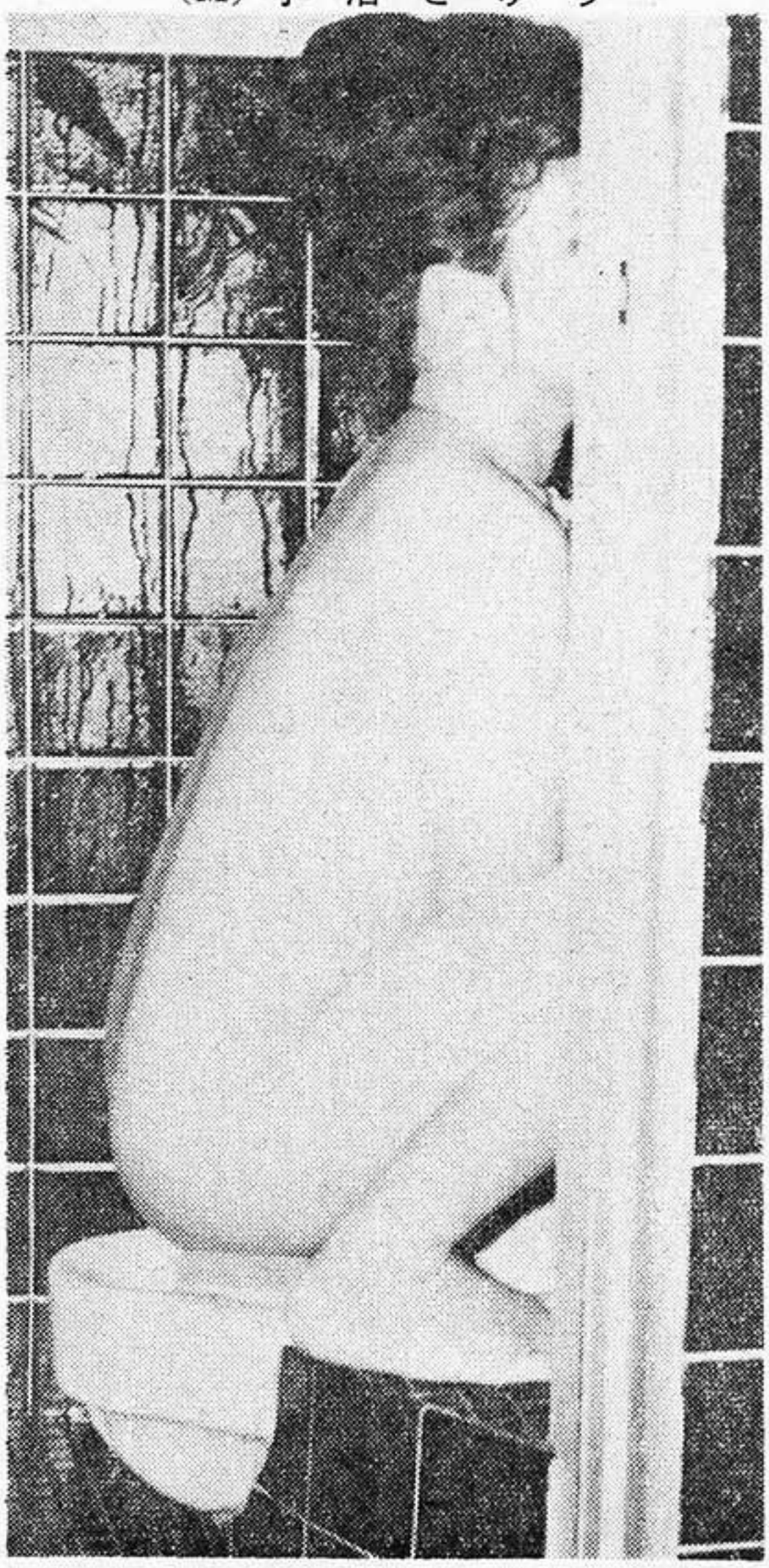
そんな信念云々よりも、有体にいえば、この被虐の人妻は、まるで堰を切ったように、少々のことでは物足りぬという淫M狂いし、終始し、そのプレイの中に、すっかり奔さに終始し、カメラよりも、凄まじいのめり込んだ私は、許りの貪婪さに、すっかり耽溺していたのである。

フォトJは、エネマによる浣腸プレイのあ



（L）伊吹真砂子

（M）宇治さゆり



との一枚である。

実をいうと、この密会、彼女は夫に内緒のことだったので、尚更、書けなかったのかも知れない。

容貌、肉体、さして取柄なくても、男を喰い殺すような、淫乱ともいえる迫力を秘めた人妻であった。

ある理由で、二年前に離婚している。セックスが、離婚の重大なウエイトを占めているらしいが、もうこれ以上、書くことはプライバシーの侵害であろう。

後日、彼女の余りの猛烈なM狂いに負けて同好の士E氏を紹介してやったら、その後、何もいってこないし、うまくいっているのか、いないのか、今の処、去る者は日々に疎しの状態である。

フォトKは、昭和四十三年三月号〝優子の涙〟の浅井優子との、三回目のプレイの時の排泄シーンである。

この時、私は剃毛を施し、この可愛い子ちゃんを絶唱させたのが、今も強烈な記憶となって脳裡の片隅に残っている。

「よくみえるように、してごらん」

といったら、この子は、洋式トイレに乗って、両足で体重を支えながら、さすがに羞しそうに、それでも素直に従い、私の胸をジーンと熱くさせた。

優子も今は二児の母――。何とはなく、隔世の感を覚えざるを得ない、秘めたるフォトの一枚である。

もっと懐かしく古いのになると、昭和三十年頃の、若かりし日の、伊吹真砂子が登場してくる。

この娘の放尿は、激しく逞しかった。

フォトLが、彼女との、幾度目のプレイかは、記憶に残っていない。うっすらとした記憶の糸を辿れば、SMプレイ果て、終わりを告げた時、浴衣を羽織った彼女がトイレへ立ったのをみて、フイルムがあと、三、四枚、残っているので、とり終わるべく、後を追いかけ、排泄中の彼女を、背後から写したのを覚えている。こうして考えてみると私のスカトロ趣味は、二十年も前から、既に胚胎していたようである。

フォトMは、SMカメラ・ハント以前の女性で、昭和三十九年八月号の〝奇譚三十九夜物語〟の第八十八夜（宇治さゆりと私）で発表した、当の本人である。

この当時、専ら緊縛が主体であったから、

こうした排泄の盗み撮りは、謂わば私の遊びでもあり、潜在するスカトロ願望の一つの現われのようでもある。

緊縛のあと、悦虐プレイをしてかねてのトイレ行である。

さりげなく盗み撮りしたので、後始末を残念ながら宇治さゆりの顔が恰度、隠れてしまっているが、私を意識していないので、ごく自然なポーズもあった。

トイレのドアを開け放ってゆくところに、私に対する親和感と、プレイで結ばれた気易さが感じられた。

そっと見守っていたが、排便のチャンスには恵まれず、立ち上がって私をチラリと見たが、さして羞恥の風もなく、大きく円な双眸が、挑むようにキラキラ光っているのを、覚えている。

こうして思い出の記憶を辿ってみると、見かけは同じようなトイレのフォトでもそれぞれ違った趣きがあって愉しい。

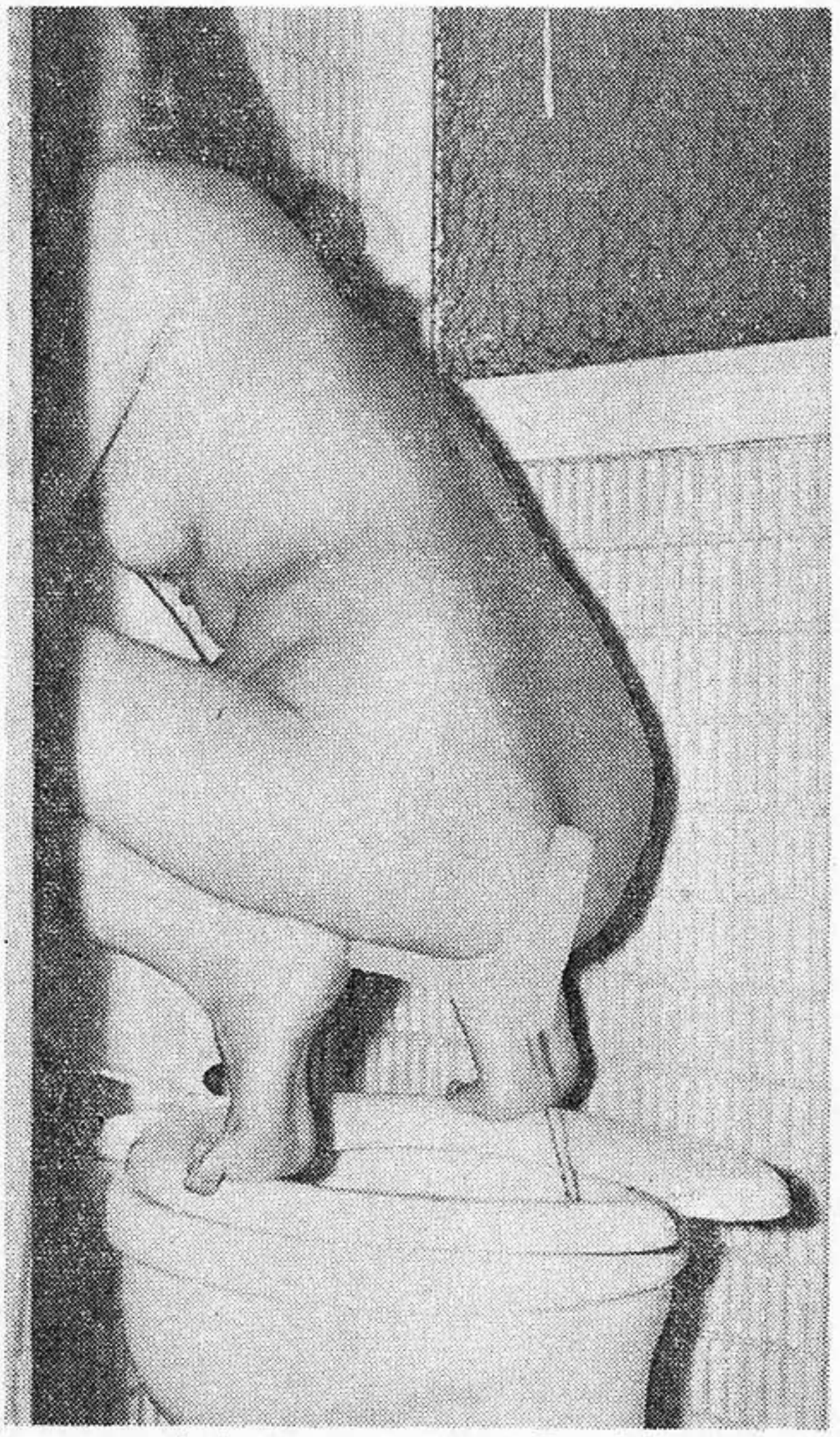
浣腸によるもの、催尿、催便にも、それぞれ生理によるもの。プレイの一環にも、スカトロ趣味による強要のもの。

と、バラエティに富んでいて、一つ一つが私の記憶の糸に、しっかりと繋がっているのであった。

女性達の要望で、カメラ・ハントに発表した排泄シーンは、かなの実験的浣腸欲を存分に充たしてくれた女性の一人である。

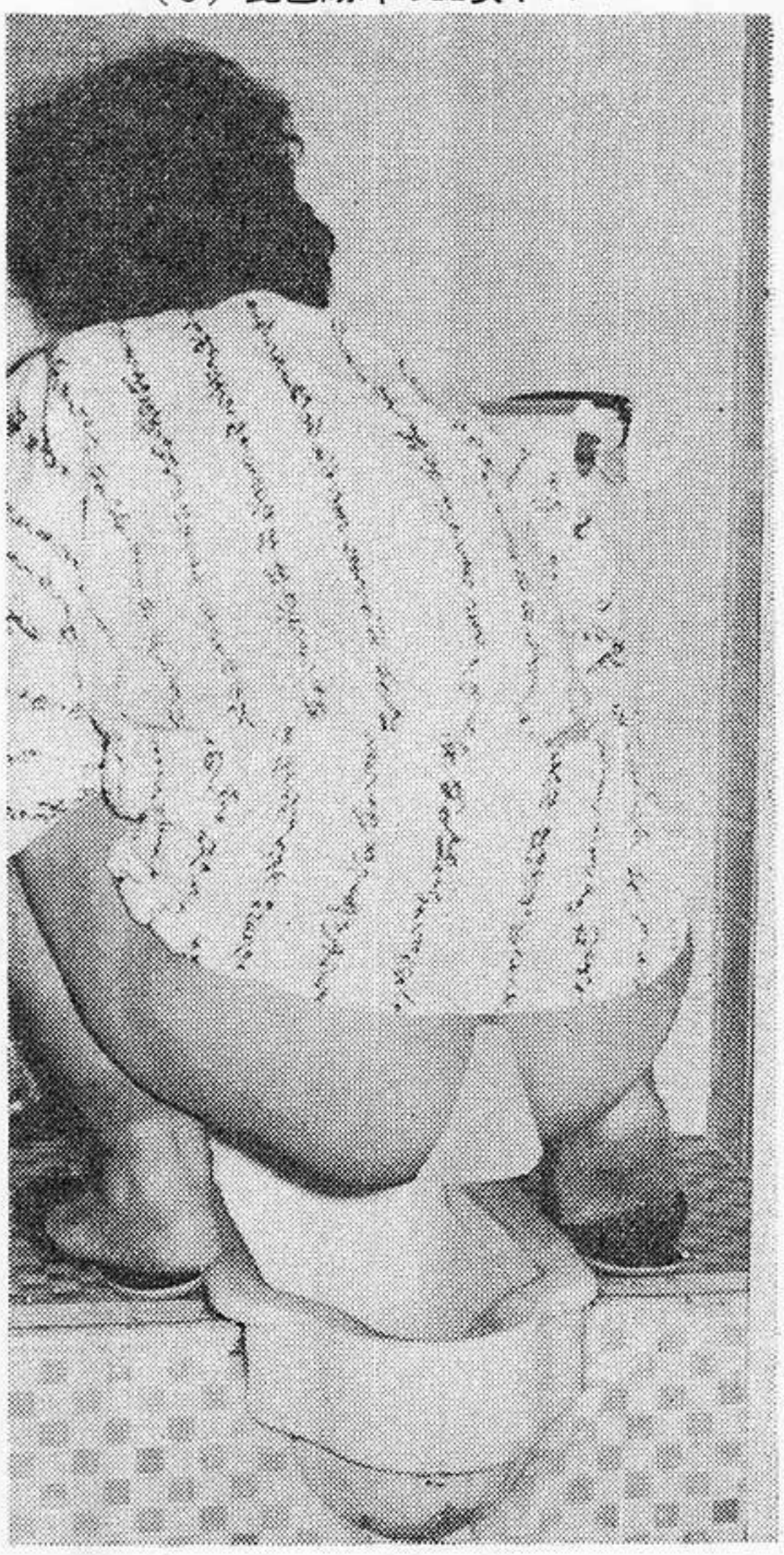
緊縛も甘受し、二十二才のグラマーであるが、如何せん、同好仲間の知人の妹とあっては、発表が憚られ、プレイの耽溺に満足するというだけの間柄で、三度ばかり出会って、繋がりは切れてしまった。結婚していったからである。

半年ばかり前に、東映々画のドキュメント『エロスの女王』を何の気なしに主人とみて



（N）カメラ・ハント以外の女性

（0）琵琶湖畔のM女ヤスコ



出演しているのでビックリしたと、さも懐かしげな電話があったが、爛熟の年頃の人妻にたら、いずれそのうち電話するからと、婉曲に断わられてしまった。望みなきに非ずとは思うものの、夫の手前、軽率に約束せぬところが奥床しかった。

高圧浣腸の浣腸液が、こんなにうまく撮れたフォトも珍しいのではないかと思っているのだが、誌上、果たして、どこまで許容されることやら——。

フォトoは、二度プレイした、肥満体の人妻である。私が、いつか楽我記欄で書いた琵琶湖畔のM女性といえば、記憶のある方も、おありかも知れない。

半農半商の、この人妻ヤスコは、農村女性だけに、陽焼けし、手足もカサカサに荒れていたが、M性は抜群で、死別した夫が、相当の嗜虐性の持主であったことを、まざまざと立証していた。

被虐の悦びを求めて、体を疼かせ、ついに思い余って、奇クに、私宛の私信を寄せてきて、その結果、出会った女性であるが、人妻とはいえ、その時には三人の子持ちの未亡人であった。

容貌や肥満体に、彼女は、かなり卑下していたようであったが、昭和三十六、七年頃の私は、ひたすらに被虐の女性を求めて汲々とし、張り切っていた当時だから、そんな点は問題ではなかった。

勿論、快諾すると、未亡人は顔を輝かせ、どんなプレイも甘受しますから、思う存分にやって下さいという。

京都のホテルで延々五時間、放恣きわまる緊縛の種々に終始して、鞭打ち、ローソク責め、剃毛、浣腸、アナル責めと、プレイの要素を盛沢山に、容赦もなく責めたてたのだったが、未亡人の歓びは止まるところを知らないといった状態であった。

戦いすんで、流石にタフを誇っていた私もヘバったものであったが、その最後の排泄シーンが、これである。

中味は何？　何を隠そう、私のハルンなのである。

ナマミの浣腸の、排泄の成果如何？

それがこのフォトのミソであるが、こうしてバックフォームを、ただ漠然と見ていただいただけでは、何も窺えないので、短釈試みたまでである。

フォトPのエイコには、緊縛のプレイは遂に出来ずじまいであった。

女子大生の彼女は、セックスはO・Kなくせに、緊縛となると拒んだ。縛られて、自由を奪われた結果、何をされるか分からないという危惧があったようである。セックスにしろ、自由意志で行なうのなら、私の出方次第でどうにでもなるし、ある程度の自主性を求めるところに、女子大生のプライドがあったらしい。自らの意志によるヌードや、かなりの大胆なポーズは易々としてとり、私の眼前に裸身を、あからさまに晒すことには抵抗は感じないようなのであった。

だから、洋式トイレでの排尿ポーズにも、私の向けるカメラを拒まず、むしろ素顔の、化粧っ気一つない、あどけない表情は、ニコニコ笑っていた。

そのプライド嬢のペーパーを使うところがこれである。女子大生という体面上、顔は出せないが、私の筐底には、さまざまな赤裸々ポーズが、ねむっている。

私の観察によれば、おんなとしての体験はかなり豊富なようである。モデルをアルバイトとしてきたが、セックスにつながって当然と心得ているらしく、さして、愧じる風もない。そのくせ、緊縛だけは、トコトンまで拒んだエイコには、矢張り彼女なみの、倫理感を持っていた様であった。

左足に、ずり下がったパンティを脱ぎもせず、終わると、すぐ穿いたエイコ——。

私にコンドームを求めたエイコ——。

今にして思い出しても、何となく清々しい記憶の残る娘であった。

緊縛を伴わない女性の排泄シーンも、こうして羅列してみると、かなり多い。私のスカトロ趣味が、一朝一夕にして湧き上がったものでないことに、今更乍ら諸賢は気付かれたことだろう。

×　×

かなりの女性を登場させても、私のスカトロ行脚は、仲々終わりそうにない。枚数にも制限があるので、ここらで、なじみのハント女性を、そろそろ登場させてゆこう。

昭和四十五年二月号〝あっと驚く人妻の豹変〟——ついで八月号〝むら子恋狂い〟で、

（P）女子大生エイコ

（Q）川路叢子

川路叢子は、一時、奇クのファンに、かなり騒がれた存在になって、しかも、この二篇のいずれにも、彼女の排泄シーンは登場しているのである。

重複するので、ここでは〝むら子恋狂い〟の方の、スカトロ状況を再録してみよう。

（どうしようというのだろう、私をぬがして——。考えるまでもなく、そのあとにくる魂胆は、凡そ私にも察せられた。鮮烈な刺激が体内をつらぬいていったプレイの数々に女体は、すっかり熟しきって、情事への陥没を求めていたに違いなかったのだ。

縄れて絡んでいた体が、すっと離れ、

「何だか、オシッコしたくなったわ。フフ艶消しね。きっと、あのビールのせいだわ」

間髪を入れず、

「じゃあ、縛ってさせてやろうか。前の時みたいに」

「あの時は随分、恥かしかった。でも今ならいいわ。あたしのみせるもの、すべてあなたにみせちゃったんですもの。いいわ、やっぱり、縛るの？」

「ああ、縛ってさせてみたい。簡単でいいからね」

胸縄をかけて、さっと両手を後にしばり、縄尻と、三脚から外したカメラを持って、バスに隣接するトイレの扉を開く。

型通り一段、上がって、むら子は、もう躊躇せず、私に背を向けて、しゃがんだ。

「それじゃ見えやしない。向きを変えてよ」

「ウフフ、やっぱり羞かしいなあ。でも、まあ、いいわ」

狭いトイレ内で、やっと方向転換すると、しゃがみ込み、妙に真剣な表情になったが、忽ち激しい音を、白い陶器に向かって沛然としぶきを、あげ始めた。

カメラを措いて、ペーパーを切り裂こうとすると、むら子がイヤイヤをするように体をにじらせ、私の顔に口を寄せて、

「ネエ、あなた、奉仕して……」

「えッ！」

と、ききかえすと、チラッと頬を染め、

「この侭で、いいのよ。あなたのお口で……分かったでしょ」

と、それが快楽に通ずる行為の連繋となる

のか、女はイヤイヤをして、ックと立った。）

むら子はハント女性の中で的であった。ハルンの濡れそを、私の舌によって行なって訴えたのである。それは言うラル・インターコースに通じる。私のスカトロ趣味は、むら子によって、満喫する。

そのシーンを回想してみよ（私は惹きつけられたようにの裸身で、ひざまずいた。独特の香気を鼻孔一杯に吸は長々とつづく。縛られた女らせ、またしても快楽の軽いであった。―（中略）―ほろ苦い香気を口辺に浮かて、私の奉仕子に接吻する。その香気を、王は背をのけぞわってもらうべく、唾液と共に、私は吐き出すように口移しに、むら子の口腔を濡らしていった……）

SとMが転倒した、この倒錯のプレイに、私もむら子も、何の不自然も感ぜず、暫くは陶酔の谷間にひたる。

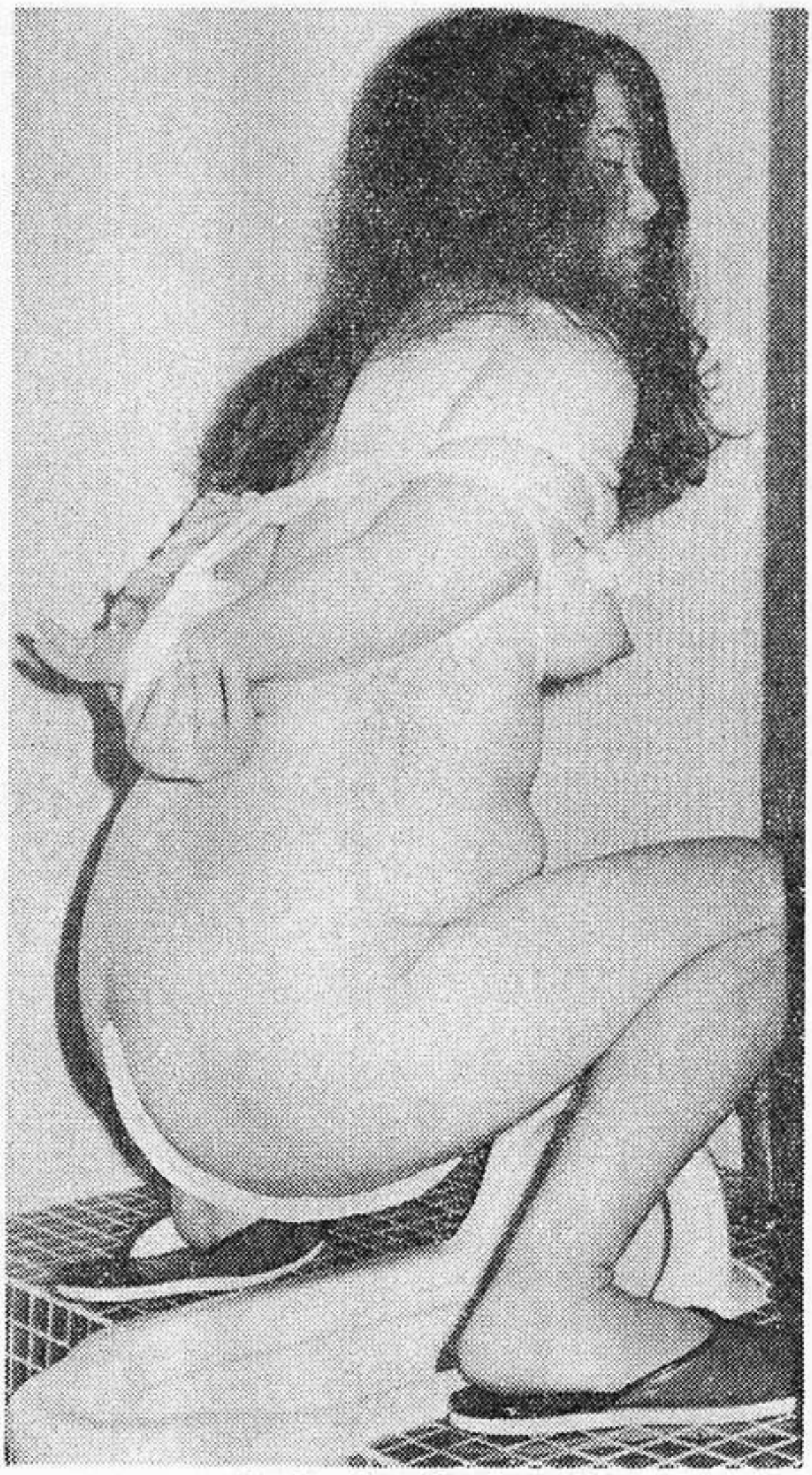
スカトロの欲求は、むら子の積極的な言動によって、こうして潜在的なものを一気に吐き出していた。ハントの文中では、私の嗜好には、その当時、未だ触れてはいない。どこまでもSMプレイの一環の行為として描いていた。

フォトQは、むら子の、放尿のシーンである。

彼女もまた、その行為によって、充分に倒錯の美味を満喫していたことであろう。

何故か、私とむら子の最終は、シックステだし、私は拝み込むようにして頼み、やっとィナインの、オーラル・インタコースを好んだ。むら子は勿論、緊縛されている。捕縛者は私――。そして、むら子の悦虐は、実に巧みに、私の悦楽のポイントを摑んでいたのである。

昭和四十七年四月号〝悦楽の倫理〟の喜多知子は、読者通信で知った、被虐願望女性で



（R）喜多知子

はいやだというSMプレイはするが、フォトの発表ある。

彼女もまた、その行為によって、充分に倒錯の美味を満喫していたことであろう。

何故か、私とむら子の最終は、シックステ

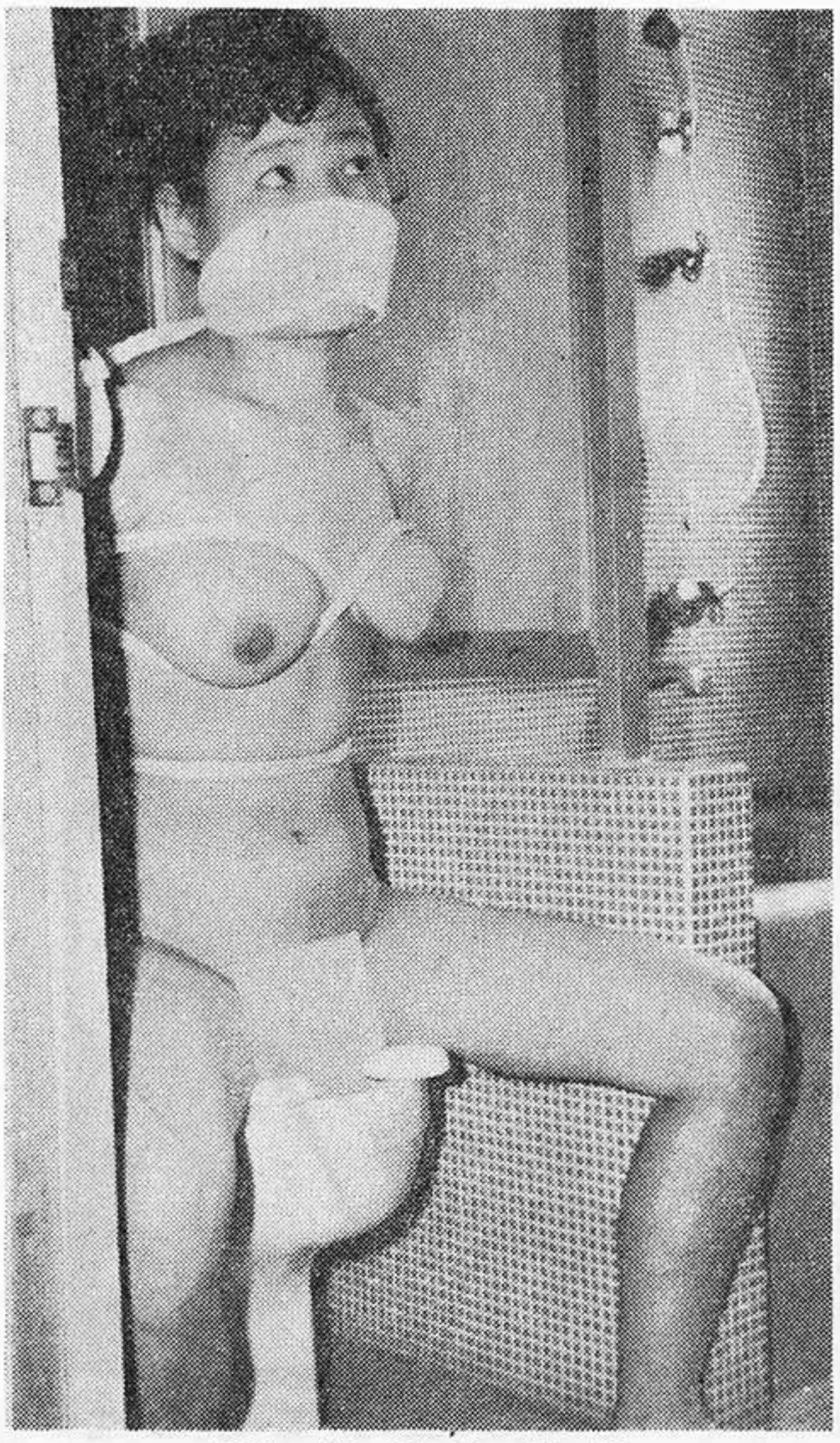
ィナインの、オーラル・インタコースを好ん

だ。むら子は勿論、緊縛されている。捕縛者は私――。そして、むら子の悦虐は、実に巧みに、私の悦楽のポイントを摑んでいたのである。

昭和四十七年四月号〝悦楽の倫理〟の喜多知子は、読者通信で知った、被虐願望女性で

顔の判っきりしないのを掲載するという条件

つきで、彼女の許可をもらった。
排泄の折、フォトを撮ることにも抵抗はなかったが、こんな羞かしいポーズはのせないでくれといわれ、私は発表を見合わせたのである。それがフォトRであった。
喜多知子は陶酔し、呻きには歓びが混じっていた。そして、縛った豊かな女体は、快楽の代りに、むら子にしたように奉仕した。判を訟歌して、のたうち廻った。
この時のハントの、発表のフォトは画面もっきり、スカトロ的欲求が渦を巻いての行為であった。
大きく、彼女との約束にも拘わらず、かなり顔が判っきりしていた。
悦虐のうつつの絶え絶えに、私はまたぞろ幾度となく、フォトの掲載を頼んだ。恍惚の忘我の状態では、彼女の意志は阻喪していたに違いない。
「いいわ」
と、判っきり、うなずく。それは或は、悦虐の応答だったかも知れないが、私は、フォト掲載の応答にとっていた。
蓮見事務官の機密漏洩のやり方にも似て、私も狡猾だったかも知れない。
果たして、このハントをみた彼女から、かなり手強い抗議がきた。
カメラ・ハントのタネが豊富だったなら、懼らく私は、プライベートのSMプレイとして、掲載しなかったかも知れない。しかし、運悪く、その時の私のSMカメラ・ハントは枯渇していた。記事にしなければ穴があくという状態のもとに、かなり強行したことは否めない。詫状を出して、それから、彼女との交信は半年以上、途絶えたが、ひょっこり貰った手紙には、私の行為を許容していた。
或は、誰かに知られないかという、不安と危惧の期間が何事もなく経過した時、再び私との、愉しかったプレイのひとときを思い出してくれたのであろうか。
一抹の悔恨の残るハントであった。このトイレのフォト掲載について、説明の便りを出したら、折返しOK・Kしてもらい、ここに改めて発表した次第である。
カメラ・ハントを幾度か賑わした、増田みゆきも、その排泄シーンは、今日まで陽の目



（S）増田みゆき

滑川幾代（T）

をみなかった組である。

何分にも彼女の場合バラエティに富みすぎた。

まるで歌手の都はるみの様な表情で、彼女は、洋式トイレの水中に、残滓の塊りを浮かべていった。

放尿はトイレの枠を越えて、タイルを濡らして飛び、みゆきのあどけない眼は愧らっていた。

この時のカメラ・ハントも書きたかったのだが断続的に〝鼻責版夫婦善哉〟〝みゆきのバースディ〟〝連縛無惨像（木村洋子とのもの）〟と次々発表していたので、これ以上、続けて書くのもように思え、つい書きそびれてしまったのであった。

この日のプレイで増田喜代司は、かなりの大量浣腸を行なうのか、みゆきの鼻責めを伴ーンがある。そして、私の前なればこそ、反って刺激を覚えるのか、再び激しい下瀉の排泄シうアナルセックスの公開へと続いたのであった。

唯、彼と一緒の場合、絶対といってよい程に鼻責めがともない、それは、他へのプレイ以上に執拗で長かった。鼻責め抜きのSMプレイは、彼にとっては考えられぬ事のようであり、それが私を、かなり辟易させたものである。

昭和四十四年五月号の東京カメラ・ハントは、一挙に二人の女性を登場させている。夜の部の〝乱倫の生態〟の滑川喜代の複数プレイは、まこと印象は今も深い、再び激しい下瀉の排泄シに強烈そのものであって、三葉に亘る排泄シーンの、強烈フォトは、生々し過ぎるせいもあって、下部がカットされて掲載されている。それはどんな状態の下に排泄が行なわれたのであろうか。

（喜代は事実、半死半生であった。三人の大

の男によって、寸分の休む間もなく責めつづけられては、如何にMに徹した女性とはいえたまったものではなかった。

痛みの個所を撫でさする気力もなく、その場に、まくれ上がった腰巻一枚つけてノビているのは、哀れな女のさがが、まざまざと覗かれて痛々しかった。

「ああ痛いわ、痛いわ。トイレゆきたいけど起き上がれない――」

打ち伏して、くぐもり声で泣くように彼女は呟いた。

「よし、連れていってやるよ」

貧婆なまでにSに徹した滑川慶次は、何と思ったか、女の両手を捻じ上げて、無茶苦茶のぐるぐる巻きに縛り、縄尻を握った。

「やめてえ。痛い、痛い、痛い。いうことききます」

と、うなだれる。快感を伴わない鞭打ちは苦痛以外の何ものでもないのだ。社長は一寸白けた顔で、大きく、くしゃみすると、下着と焦茶のスポーツシャツを上半身につける。

女の縄尻をとるようにして、入口近くのトイレに向かって、扉を開く。

「社長さん、させてやって下さい」

「いやッ、恥かしい。許して……マキいや」

激しく、ほとばしる音――。私の冷徹なカメラは、低いアングルから、それを捕えて走る。）

女は首を振って拒否する。

「黙れ、バカもん。いつもの通りやるんだ。いうことをきかぬと、これだぞ」

男は鞭をとり上げて、真赤に腫れ上がった彼女の臀部を、発止、発止と叩きのめす。

宙に二、三度、飛び上がって女は、

「やめてえ。痛い、痛い、痛い。いうことききます」

と、うなだれる。快感を伴わない鞭打ちは苦痛以外の何ものでもないのだ。社長は一寸白けた顔で、大きく、くしゃみすると、下着と焦茶のスポーツシャツを上半身につける。

女の縄尻をとるようにして、入口近くのトイレに向かって、扉を開く。

「社長さん、させてやって下さい」

「いやッ、恥かしい。許して……マキいや」

激しく、ほとばしる音――。私の冷徹なカメラは、低いアングルから、それを捕えて走る。）

このあと、私は喜代と狭い風呂に入って、傷だらけの裸身を柔らかく、優しくマッサージしてやって、大いにフェミニスト振りを発揮するのであるが、こんな本格的な、嗜虐の発揮は、私にも珍しい体験であった。一カ月以上も喜代の体の節々が痛んだとは、あとで夫の滑川慶次から聞いた話である。

フォトTは、彼女が雁字搦目に両手を縛りあげられ、股縄をかけられての排泄シーンの瞬間である。

賀山社長と滑川氏と私の三人で、相互に喜

人夫氏一順木青（U）

代を牝犬を、いたぶるように責めさいなみ、その嗜虐の宴は夜明けまで続いたが、彼女の艶肌は、いたいたしく腫れ上がり、傷ついて無惨であった。

最近の奇クサロン欄で、投稿の盛んになった青木順一氏夫妻とは、もうかなりの古い同好の仲で、彼の求めに応じて、私は既に数度に亘って、青木夫人とSMプレイをしたのであるが、私達のプレイを傍観する時の彼の眼は、情熱的な輝きを帯び、いつの場合でも、夫人が、幾たびとなく悦虐の境地を彷徨するまで、執拗にプレイを続けるのであった。つい私もつられて精魂を傾け、終われば、いつもヘトヘトになるのが例であった。

ハルンをかけたハンカチとか、こわばり汚れきったガーゼ布などを、夫人の口中に押し込み、その上から古チューブで、頬もヒン曲がるくらいに、きつく猿轡し、時には、尚その上から、黒革の顔マスクをかぶせて、窒息しないかと思う程に紐と締めあげ、散々にいたぶり、鞭打ち、究極は羞恥責めに移行するのであった。

そのお相手は、彼の親友のI氏の場合が多かったが、私にも偶にはお呼びがかかって、一緒になって夫人を責めまくるのである。I氏の場合、専らセックスに走りたがるが、私はバラエティに富んだSMプレイを主にするので、青木氏は歓んでくれるのだが、そうそう、いいなりにお邪魔も出来ない。ここ一年以上プレイから遠ざかっていたが、今年の四月下旬、度重なる彼の要請で、邸宅を訪れ、その日は、羞恥責めの、アナルへの責めを、私から提案した。私の申し込みなら彼は一も二もない。

雁字搦目に二人掛かりで縛り上げて、応接間の、まるでプレイ用のために作ったような一本柱に、犬の首輪を嵌めて息詰まる状態でつなぎ、彼は、イチジク浣腸を買い求めに出てゆく。

「ついでに封印しておきましょう」

突発の腹痛に、彼女が下半身をくねらせ、苦悶に身をよじるのにもお構いなく、彼は、接着剤のセメダインを持ってくると、チューブの中味を一握り注入し、ついで、周辺にぬりつけて、荷造り用の粘着テープを貼りつけたのであった。

この様な思いきった試みは、私にとっても始めてであった。強力な接着剤と、粘着テープの封印に、果たしてどうなるかと、期待に胸を躍らせる私——。

何といっても、これは、夫婦ならでは、出来る行為ではなかった。

彼は夫人を引き立てて、トイレへと連行する。ここは洋式トイレである。

夫人の眼は、うろたえ、思いがけない私の照準を怨ずるが如く羞恥に途惑っている。もはのいえぬ裸身は、なす術もなく私の行為を非難している様であった。

青木順一が、そそくさと戻ってくる。せっかちの彼は、休む間もなく買い求めてきたイチジク浣腸の箱を開き、とり出してキャップを取り払った。

一個、二個、三個、と、容赦なく空にして

傍の、手洗い用の水栓に首輪の縄を結びつけ私達は、気兼ねもなく、夫人の排泄の状態をじっと見守っていた。

もう耐えようもなく、夫人は羞恥を忘れて排泄に必死になっていた。

粘着テープの隙間が徐々に拡大してくるとみるや、グリセリンと共に、テープの個所は剝がれ、セメダインの塊が押し出されたのであった。

あとで分かったが、セメダインも粘着テープも水気には弱く、接着の効果はなかったのであった。粘着テープもまた、懼らく手を貸せば、容易に剝がれる状態にあった。

もともと汚穢好みの彼は、排泄に汚穢をさして感じないのか、排泄途中で、目触りなテープを剝がし、傍の汚物入れのポットに捨ててしまった。

臭気みちて、彼は、シャルダンのスプレーを、惜しげもなく、シャーシャーと辺りに吹きちらす。フォトUは、このあたりである。

香気と臭気のミックスした、奇妙な匂いが充満する。

私はその時、お添えものの、ハルンの状態を、洋式なればこそ、存分に拝見出来たのであった。この稿で発表したいと彼に電話したら、妻の顔が判っきりしないのなら構わないと許容してくれた。苦しげに眼を閉じてはいるが、彼等夫妻を、その近辺で知る人も多いので、一応、プライバシーのために、眼にマスクしたことを御諒承願いたい。

「あんたがお望みなら、どうぞー」

と、彼は到ってあっさりと、私と夫人の、アナル・インターコースを許容してくれる。

あとは浣腸の為のクリスタール——。

二リットルばかり注入して、排泄に、もう色はなかった。

仰向けにして両手足を一纏めにして、胸許で固く縛り上げ、腰高に座布団を二つ折りしてあてがい、夫に対し、最も見易いフォームとらせる。

舌端を鼓舞し、指頭は乱舞する。しかし、この絶対の据え膳にあい乍ら、私は、いつ迄経っても果敢ない『死に体』であったのであ

(V) 村上喜美夫人

る。

異常なまでの、排泄儀式である。私の好みは、チャンと抜目なく、既に私の欲望は昇華していたのだろうか。いつかの折のプレイで、カメラに納めたのであった。

じっとガマンの子は、いつ迄も、ガマンしたまま、今か今かと、眼をぎらつかせて見守る彼の前で、あえなくも、腹立たしくも、ガマンにガマンを重ねる一方であった。

大脳神経の奴が造反を起こしては、もうどうにもならない。

諦めた私以上に、ガッカリした表情は彼女であった。構えたカメラが、決定的瞬間をとり損ねて拗ねていた。

帰る電車の中で、今日の残念さを噛みしめていると、いきなりガマンの子が生き返り、外見からでもそれと分かるズボンに、私は我にもなく途惑い、困惑するのであった。

ああ、悲しきは中年男の実態——。

×　×

肥満女性の村上喜美夫人は〝豊満女体猥ら書き〟と〝豊満女体猥ら書き〟の二回、SMカメラ・ハントに登場してもらったが、プレイ中の排泄シーンは、そのいずれにも発表していない。

偶々、その折のハントには、排泄はなくとも、前後七、八回に亘ってSMプレイした仲の彼女である。私の好みは、チャンと抜目なく、いつかの折のプレイで、カメラに納めたのであった。

相撲とりの持ものが、小さくみえるのと同じ理屈で、喜美夫人の持ちものも、何故か小さく、陥没しているように、思えるのであった。

双臀の逞しさ、太腿部の豊かさが、そんな錯覚を与えるのかも知れない。

アナルのマニアになりつつあった頃、私はこの豊満な女体の排泄に興味を惹かれ、ポンプやエネマを使わずに、イチジク浣腸を、立て続けに三個、注入したのであった。

グルグル、グルグルと、グリセリン液の、のたうつ音が、耳朶を打つ。

場所は、よく密会に使う、プレイメイトの青年のアパートである。

浣腸プレイは、SMプレイの攻勢で、かなり機の熟した頃を見計って行なった。

彼女はダブつく腹部を波打たせ、必死に耐えていたが、どうやら限界点に達した。

肥満の体躯を愧じるように、浴衣で裸身を装って、狭いトイレに上がる。私は見え易いように前向きにさせた。蹲踞のポーズでは、後手では窮屈なので、簡単に前で両手を縛ることを宣言する。

易々として、彼女は私の為す侭である。

私の準備が出来るまで、呻き乍ら、必死にこらえている。

カメラを構え、合図すると、彼女は一寸、きまり悪げに私をみたが、それでも従容と排泄を始めた。

水滴が一つの様になって、私の眼を射る。と、同時に、グリセリン液が、逞しい黒塊が——。

特有の異臭が漂い始める。

それがフォトVである。

推積を、私は水洗で流す。

立て続けに私は、ポリ湯桶に一杯の湯を汲み上げてくると、クルリと位置をかえさせて定位置にし、尻を持ち上げさせる。

易々諾々、喜美夫人は私の命ずる侭に、高々と、小山の如き双臀を屹立させる。

払拭——。そして、休む間もなく、エネマから、大量の温湯——。

数分後、激しい吐出は、私の眼前咫尺の間で行なわれた。薄く染まった廃液の中に、僅かの残滓が浮かんでいるだけであった。

アナルへのインターコースを求めて、逡巡の女体に私は挑む。

喜美夫人は、その時、始めて失神していったのであった。

×　×　×

排泄プレイの数において、また、その行為に快感を覚えて、淑かな言動の中で、それを待ち望むのは、渡部好美であった。

これだけ数多く排泄シーンをとった女性も少ないというのに、ハントでの発表は、昭和四十七年七月号の〝Mアニマルの華麗なる対決〟での、谷山久美子とのWプレイの折の、ハント状況で、一枚発表しただけであった。

久美子と好美の二人に、同時に浣腸を施し嗜虐に疼く、排泄我慢くらべをさせた時のものである。

忍耐可能の程度――それは大体、二、三〇〇cc ぐらいまでであるが――の注入を試み、ビニール紐をとりつけた小型バイブを動員した上で、熱臘で封印する。

細身の肉に、ぎりぎり喰い込む緊縛。

そして私は、好美の顔に跨がる。

排泄をこらえ、バイブに責められ、その極限状態の侭で、私は激しくさいなみ続けてゆく。

それが、たしなみ深い好美を、狂ったように悶えさせ、燃え上がらせる、最大公約数のSMプレイの行きついた手段であった。

ビニール紐を引っ張って、私は、懸命に耐える好美を引っ立てるようにして、トイレへと連行してゆく。

最も観賞し易いポーズをとらせ、私の飽くなき嗜虐欲は、羞恥の極限を存分に観察してプレイの一幕は終わるのであった。

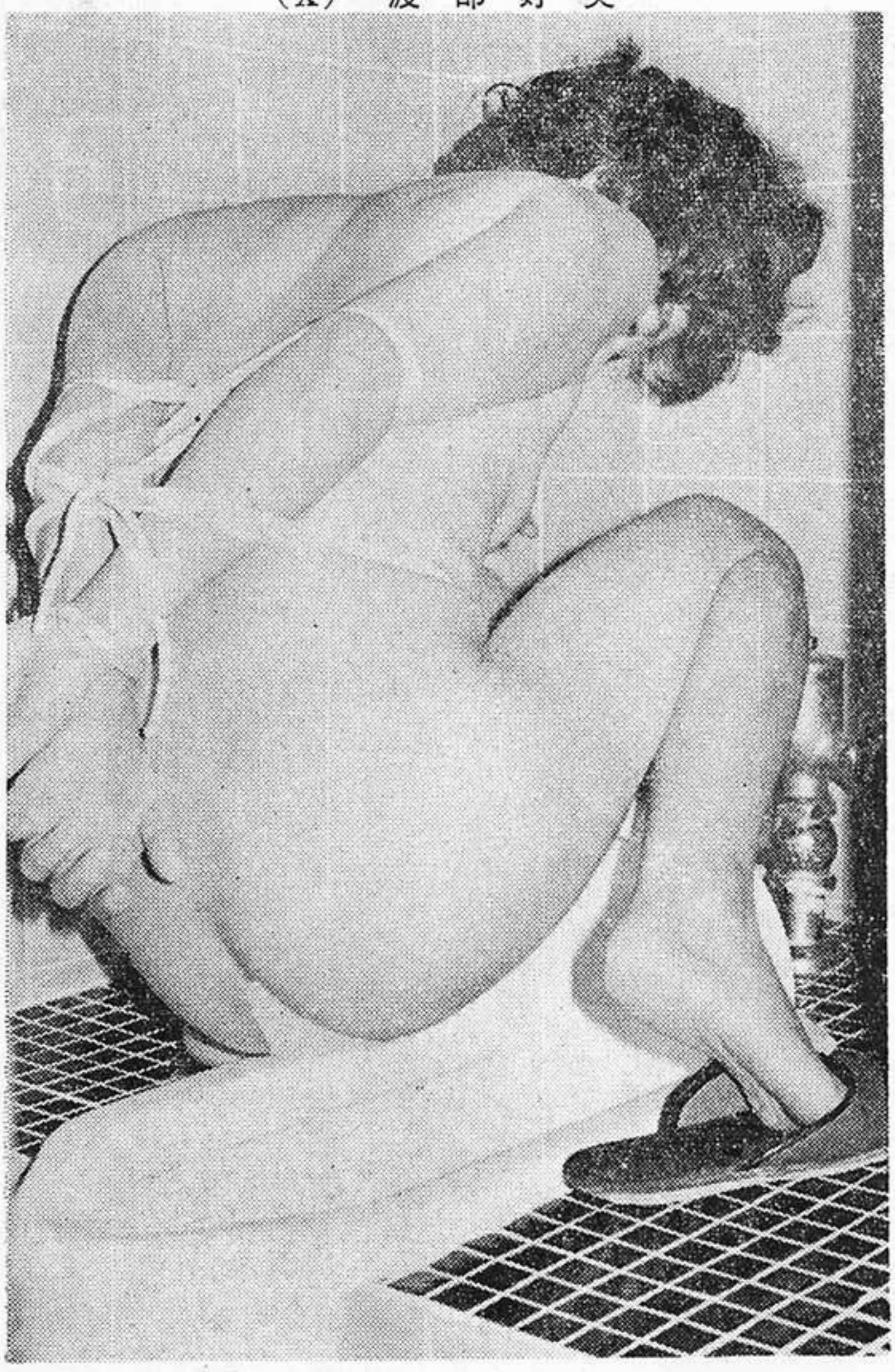
トイレでの排泄シーンの一枚、一枚に、私の思い出は秘められている。

フォトWも、その一つであるし、フォトXにも、甘い嗜虐の想い出があった。トイレの構造が違うから、同一の場所でないことは、すぐ判別出来る筈である。

その都度、まるでメモリーするように撮ってあるから、好美の排泄フォトだけでも七、八葉はあるが、〝Mアニマル……〟以外のも

(W)　渡部好美

(X)　渡部好美



のを、ここに、二葉、発表してみた。

何故かくも、好美夫人のが、とりわけ多いのであろうか——。

答は簡単である。

彼女は浣腸を、なんらためらわずに甘受するからである。

彼女は浣腸された侭の状感で、次のプレイに移行出来るからである。

彼女は排泄に快感を覚えることの出来るM女だからである。

彼女は代理妻として、意の侭になるからである。

私の排泄戯考は、佐野みさ子に始まり、渡部好美に終わった。

期したわけでもないが、この二人の女性は、私のスカトロ趣向を充分に、みたしてくれた。

新手を考案した時、アナルセックスへ走る時、この二人は、欣然と許容してくれるであろう。

佐野みさ子も渡部好美も、歴っきとした人妻——。それであり乍ら、夫の寛容さのもとに、代理妻、奴隷妻となってくれる。そして、私の欲望の吐け口になって好みの時に応じてくれる。

一見、奇異であり、常人には思いも及ばぬことが、SMの世界では、さして不自然でもなく罷り通っている。

そんな知遇に、私は非日常の生活に於いて最高のしあわせを、かち得たように思えるのである。

SMの世界にゴールはない。一つの行為が飽和状態になった時、更に、新しい刺激と快楽と、未知のSMプレイを求めて、私は飽くなき追究を続けてゆくことだろう。まるで宿命かのように——。

だからこそ、私は生きる歓びを満喫していると、声を大にして言い切ることが出来るのである。

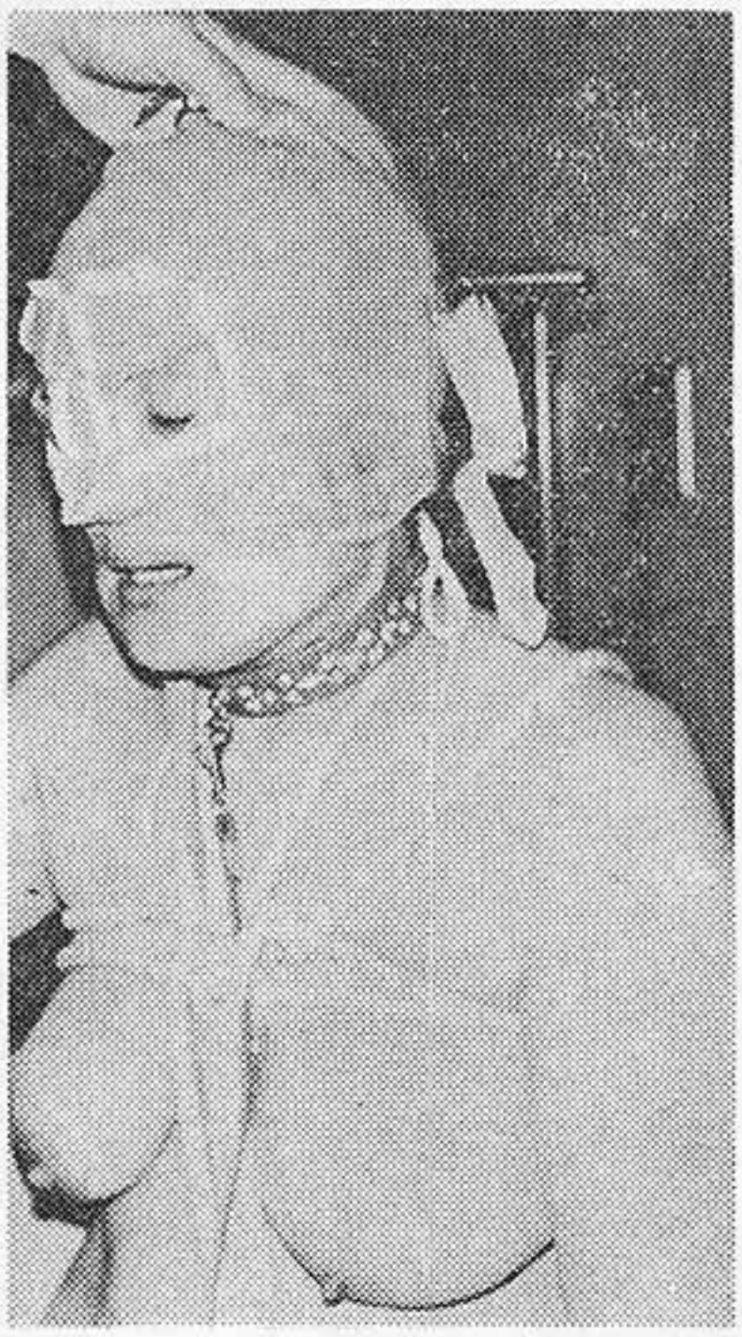
——(了)——

古都N市でのプレイ

妻責めの記録

古都N市でのプレイ

青木順一



去る日、古都N市のホテルで同窓会の集まりがあるからと家内がオメカシをして出てゆきました。

私は、この思いつきを早速実行することにして、プレイ・メイト（男性ですが）の二人に電話をいれたのでした。

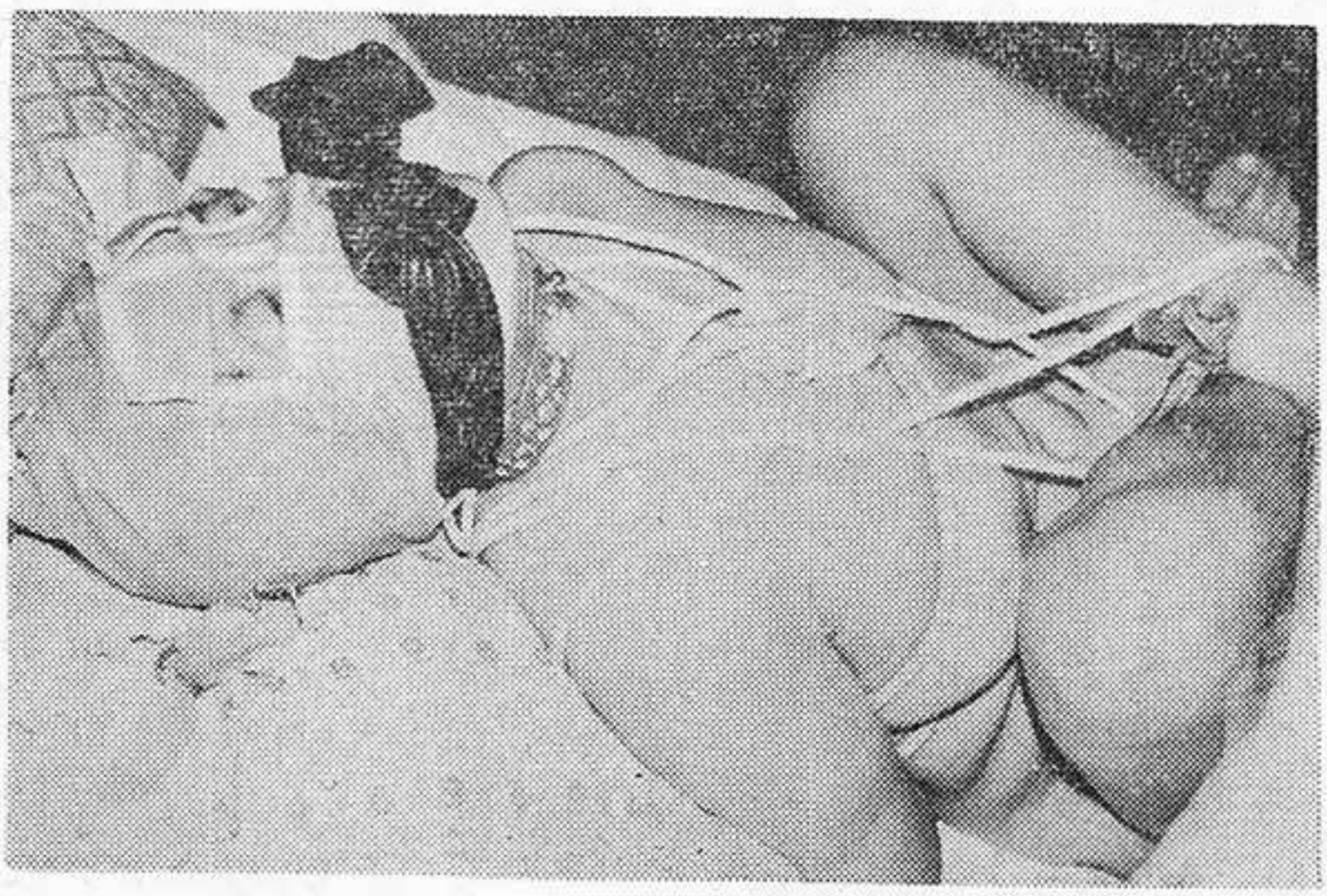
悪友たちがイヤというわけはなく、野郎三人を積みこんだ車は、家内の同窓会場たるホテルに向かったのでした。勿論、午後四時という解散時間に合せてです。

ホテルのロビーで、ワクワクする気持を抑えて待つことしばし。それと一目で分かる華やかな夫人連中に混じり楽しげに何か話しながら出てきた我が奴隷夫人は、私たち三人を認めたとたんに、なんともいえない表情をしました。その表情に、私は家内の羞恥とローバイと期待を見取りました。

一旦ホテルの外へ出た家内は、皆と別れのアイサツを交してきたのでしょう、すぐに又、私たちの傍に引き返してきました。こうして至極簡単に青木夫人の誘拐？　は成功し、四人の乗った車はプレイの出来るサカサクラゲを求めて走り出したのでした。

部屋を二部屋とり、友人たちには別室で待機してもらい、私はまず家内に奴隷への転落を実感させることにしました。つい先刻までの青木夫人は覚悟していたとみえて素直に奴隷への途を踏み出しました。即ち、自分を飾りたてていた新しいドレスを始め、すべてのものを脱ぎ捨てたのです。

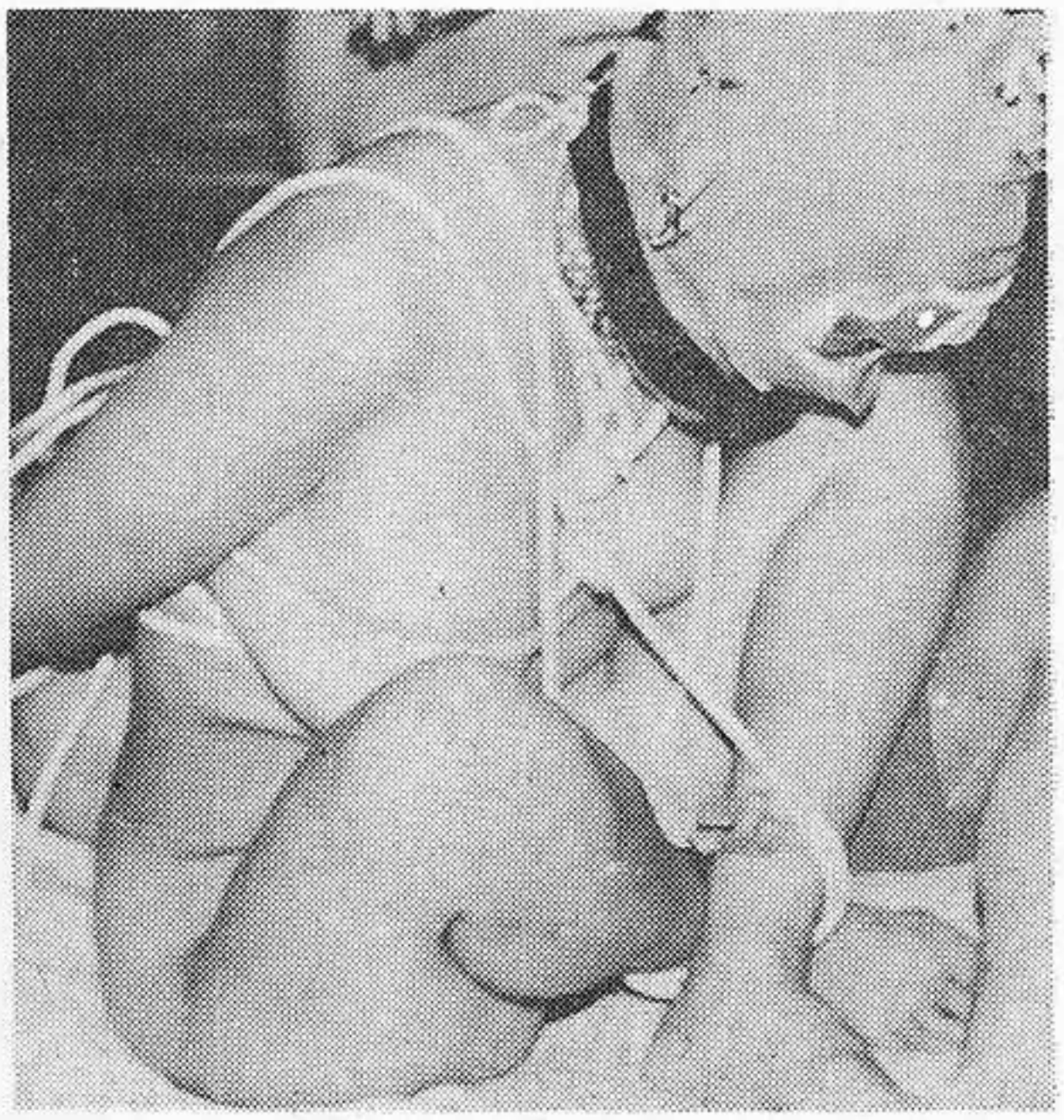
私はその、家内の素肌に縄がけをし、私好みの後手縛りにするとゴムのオムツカバーをはかせ、ゴム製の下着（乳房の丸く出ているもの）を着せてからイスに坐らせて、友人の来るのを待ちました。



"ずいぶん若返るものだ"と思いながらその後姿を見送った私は、ふと思いついたことに、胸おどるのを禁じ得ませんでした。

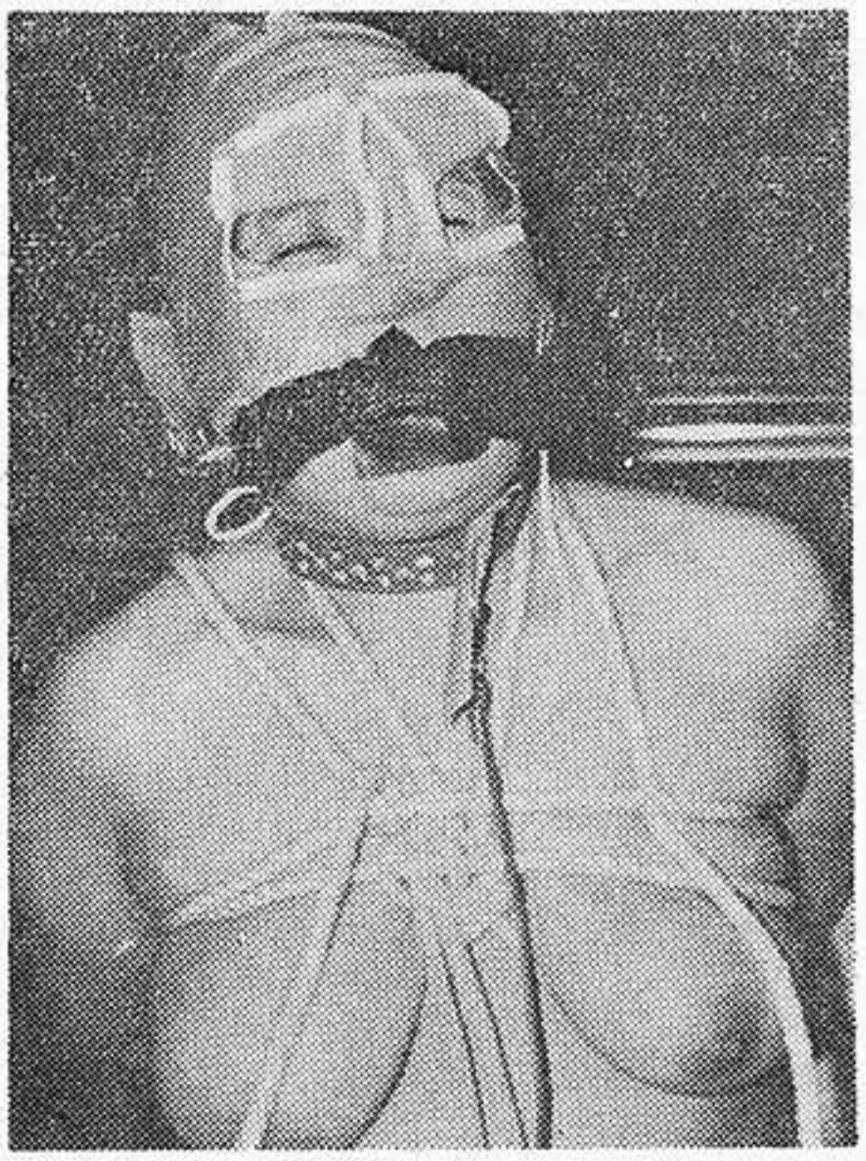
それは、新しいドレスとセイいっぱいの化粧によって、一般的な女の虚栄を見せびらかし合っていた同窓会の華やかな雰囲気から、一転して奴隷の悦虐に悶える家内の姿を実現させてやろうという思いつきだったのです。

いつもですと、すぐに、私の大好きなサルグツワを噛ませ、その臭気と息苦しさに悶える家内の様子をじっくり観察したり、むりに喋らせて、声にならぬ声を出しながら羞かしがる表情を楽しんだりするのですが、その時は友人にサルグツワの代用をしてもらうつもりだったのです。



家内が一番イヤがり、一番燃え上がるサルグツワを、友人の一人が見事に成し遂げてくれました。しかも家内は、私の命令どおり、サルグツワの不自由な声で、「春がきた」の歌をうたったのです。しかしさすがに苦しかったとみえうたいながら失神直前の様相を呈し始めて、私たちを慌てさせたものでした。

小憩後ゴム下着を脱がせて、代りにゴムの半頭マスクをかぶらせ、三人が寄ってたかって、夫々の得意な責め嬲りを始めたのでしたが、家内の嬌声や悲鳴が大きいので、口中詰のゴムグツワを噛ませ、ゴムの半頭マスクの上から、やはりゴムの帯で締めあげて、プレイを続行したのでした。



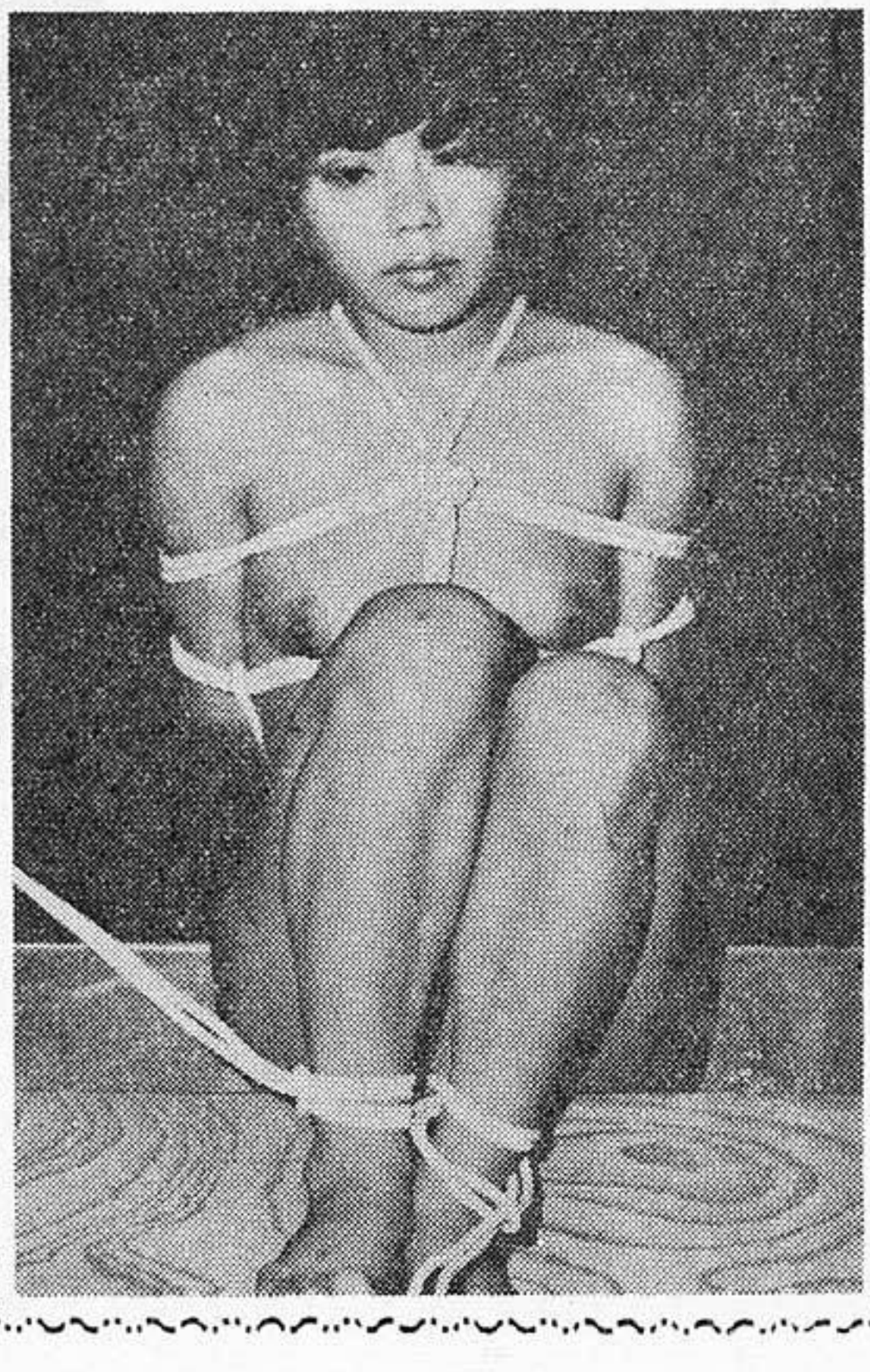
三重のゴム障害をくぐり抜けて洩れる家内の呻きは、私のもっとも好きなものの一つです。この、えもいわれぬ音声を、私は充分に録音しました。

家内がグッタリとなり、責め役三人も疲れを覚えた頃には、私の腕時計が三時間の経過を示していました。

……文中に各人のセリフや責め方、家内の反応ぶりなどを描けばよいのでしょうが、私は残念ながら、その任にあらずでして、小学生の遠足記に等しいことを、お詫び致します。せめて同封の写真で、その日のプレイぶりを、お察し願えれば幸です。

奴隷妾の悶え
じらし責めの？
北川まりこ

縄恋し鞭打ち恋しと悶えつつ
君を待ちわび独り帯解く
無意識に背肌に手首重ね居る
飼い馴らされし癖ぞ羞かし
柔肌に君が印せしムチのあと
日々に薄れて残るは淋しさ
鏡面の冷たさ乳房に移しつつ
来ませぬ君をうらみにぞ思う
口紅で自ら肌に書きつけし
「ドレイメカケ」の六文字に酔う
二の腕に腿に乳房にクリップを
挟めど悲しただ痛さのみにて
やるせなき想いに悶え喘ぎつつ
自縛の縄のモツレぞもどかし
後ろ手で胸の掛け縄しぼりつつ
君の名呼べど何かむなしき
水風呂に自縛の裸身投げ入れて
わずかに味わうマゾのよろこび
ずぶ濡れのままタイルに転れど
鞭打ち賜う君は居まさず
夜風吹く物干台へのぼりゆく
君のムチにて追わるる想いで
床板の隙間に膝を落としこみ
正座で待ちたし君の来るまで
本宅の方角向いて呼びかける
胸のうちなる声とどけかし
諦めてベッドに戻る階段に
逆さ縛りの想い出も悲しき
後ろ手で縄引き絞り倒れこむ
君の枕がわが涙吸いくれ
来ませぬはM女の心熟知せし
じらし責めなるお仕置ならむ？



〈通信〉

鈴木千鶴子さんへの呼びかけ

佐渡与太郎

前略。過日、交通事故にあわれて怪我をされたとの事、一日も早い御快癒を心よりお祈り申し上げます。突然お便り差し上げる非礼をお許し願い、広く門戸の開かれた「奇ク」読者欄を通して貴女にお呼び掛け致します。「奇ク」愛読者の一人として特に千鶴子さんにお便りを書く気持に傾斜させたものは、「奇ク」の最新分譲写真「SM組百態」を買い求めた時点からです。つまり分譲写真の千鶴子さんの被虐姿態に目を奪われ心も奪われてしまった時から書こう……書きたいと思っていたのです。貴女の悦虐表情はまるで生きて、目前で展開しているかの如くぐいぐいと小生の心を引きつけてゆきます。写真撮影の高度な技術もさることながら貴女の醸し出す被虐の表情と姿態とは、まことにリアルに溢れ、心を動かさずにはおられません。

小生の内部に燃える貴女のイメージは非常に感受性豊かで鋭敏でナイーブな神経を持った女性で……どちらかと言えば明朗で冴えてる頭脳の持ち主であるという事です。SMは勿論声を大にして自慢するような性格のものではありませんが、かと言って自分自身の性格を歪め、何か後ろめたい感じを持ち続けるのも決して得策ではないような気がします。ナチュラルな性向としてのSM（そんなものがあるかどうか分りませんが……）を貴女に見い出します。写真を見て本能的にそう感じます。自然に振舞いながらSMに没頭し集中できる神経は貴女の本性でもあり、何事によらずそれだけ集中力のある証拠でしょう。例えば貴女がSMとは全く関係のない男女間でも素晴しく情熱的になれる女性だと思う訳です。芸術家にも勝る貴女の内部の熱情は一度溢れたらこんこんと汲めども尽きぬ深山の泉の如きものだと察します。それは思い込んだら千里も一里の勢いと情熱を秘めています。それにも増して牝鹿を思わせるしなやかで柔軟な肢体、蠱惑と神秘をただよわせヒタと閉じられた瞳、官能的な魅惑の口唇など心に灼き付きます。

門口も奥行もさまざまな個人のSM観がありますが我流のSM観はまず女性の美をより一層引き出すと共に己の潜在的欲求を満たすようなものでありたいと思っております。女性における美的表現は単に自由奔放な行動と態位の中でのみ見付けるものではありません……又は逆転の美束縛の中での美もあると思うのです。或る哲学者は「戦争の中でこそ自由はある」と言いました。つまり自由の中の自由はなく不自由な中に自由はあるというのです。安易な論法で貴女を納得させようなどとはついぞ思いません。ただ……分譲写真を見て感じたままを正直に言っているだけです。小生の場合とてSMは性的欲求を昇華させますし……その点では生々しい欲望があるのも事実です。前戯的SM又は、手段としてのSMに近いとも言えます。以上の二点から小生は破壊、損傷を伴うSMを、極度に嫌います。相手との或了解の下に、羞恥と妖美を溢れさせる恥態を己の手で創造する喜びと楽しみはプレイをした者でなければ分りません。

常道を逸した様な恥かしい態位……つまり開股大の字縛り、片足

吊り開股、四つん這いをして、恥かしめ、羞恥に悶えさせたり、又浣腸やアヌス責めなど、言わば女性の最も弱く敏感な神経への集中的な責めを主体にしたいと思いまず。ハレンチなスタイルでの羞恥のきわみには、言葉よりも凝視する熱い視線の方がどれ程の効果を発揮するかよく御存知の貴女だと思います。一見、弱々しそうに見える身体に秘めた強靱な精神を持った貴女を責めるには野卑で淫猥な言葉も必要でしょう。

生命の限りなき燃焼とギリギリの緊張感の中には、或種の美しさが宿る。写真は動きの中の静止ではあるが静止の中から、再び動き——即ち恍惚としつつ燃焼する情感——を見たのは小生の読み過ぎであろうか。到達する境地の差は過程と手段の差にある。そしてそれは貴女もきっと薄々感じてはいると思うが、燃焼の差でもある。

小生は三十二才の男性で只今、温泉地のフロント係をしております。

「愛は何処にあろうとも
　星の光のそのように
　とこしえに遠く　又近くに」

遠くて近い貴女!!　今宵の一番星をあなたに差し上げます。最後に乱筆乱文の段お許し下さい。そして貴女の御快復を心よりお祈り申し上げます。

敬具

静岡県　佐渡与太郎

小杉千恵さんの投稿を読んで

小池明男

〈感想〉

奇ク8月号を読んでゆくうちに特に私がひきつけられたのは、ずっと以前から、告白や体験を投稿しておられた小杉千恵さんが、顔のはっきりした自分で写されたという全裸の姿を、M女通信『被虐願望のネガフォト』で勇敢に出されたことです。

前にも、彼女のヌードフォトは誌上に掲載された事はありますが、その時は顔は分らない様にしてありました。今度のフォトで見るとなかなか個性のある顔だと思いますし、プロポーションもスバラシイと思います。

文中で自分でも云っておられる様に、乳房も豊かですし、まだ赤ちゃんを生んだ事のない体の線もくずれていないとの事で、私は彼女が云っておられる深田菊子よりも、体はスバラシイと思います。

文章を拝見しますと、前に比べ相当Mに目覚められたと思われます。全裸のフォトを投稿し、その上、「みなさまの好奇心や淫ら心の眼でごらんになって頂けるのでしたら……」の文で、それが良く分ります。

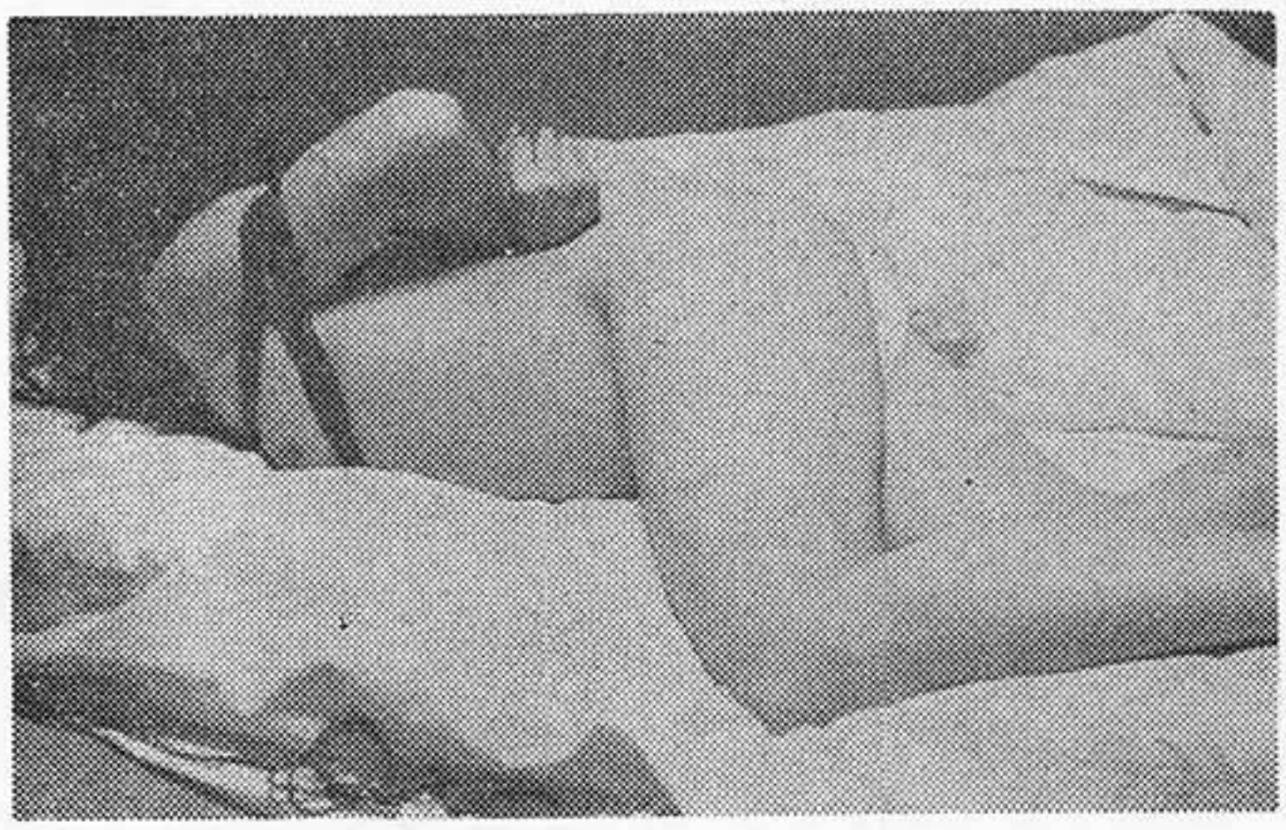
奇クの緊縛モデルとして誌上に自分の姿を現わし、マゾ性を思いきり発散させたいと空想しているのですが、家庭の事情や周囲の環境のためそれが出来ないのが残念だと思います。全通信の最後に書いてあります。全国の奇ク愛読者にとっては、大変惜しい事だと思います。

出来れば塚本鉄三氏の〔ペン〕と〔カメラ〕のルポルタージュに登場して、塚本氏に大いに責められて、その経過も奇ク誌上に発表される事を切望するのですが、彼女の事情で不可能な事は、かえすがえすも残念な事です。

そこで編集部にお願いするのですが、彼女の通信に書いてあった彼女からの投稿写真を、ぜひ愛読者に分譲してほしいと思います。彼女が文中で云っておられた「みなさまの好奇心や淫ら心の眼でごらん下さい」と云う願望が少しでもかなえられるのではないかと思うのですが、如何でしょうか。

百合子の雨水浣腸によるSMプレイ報告記

望月百合子



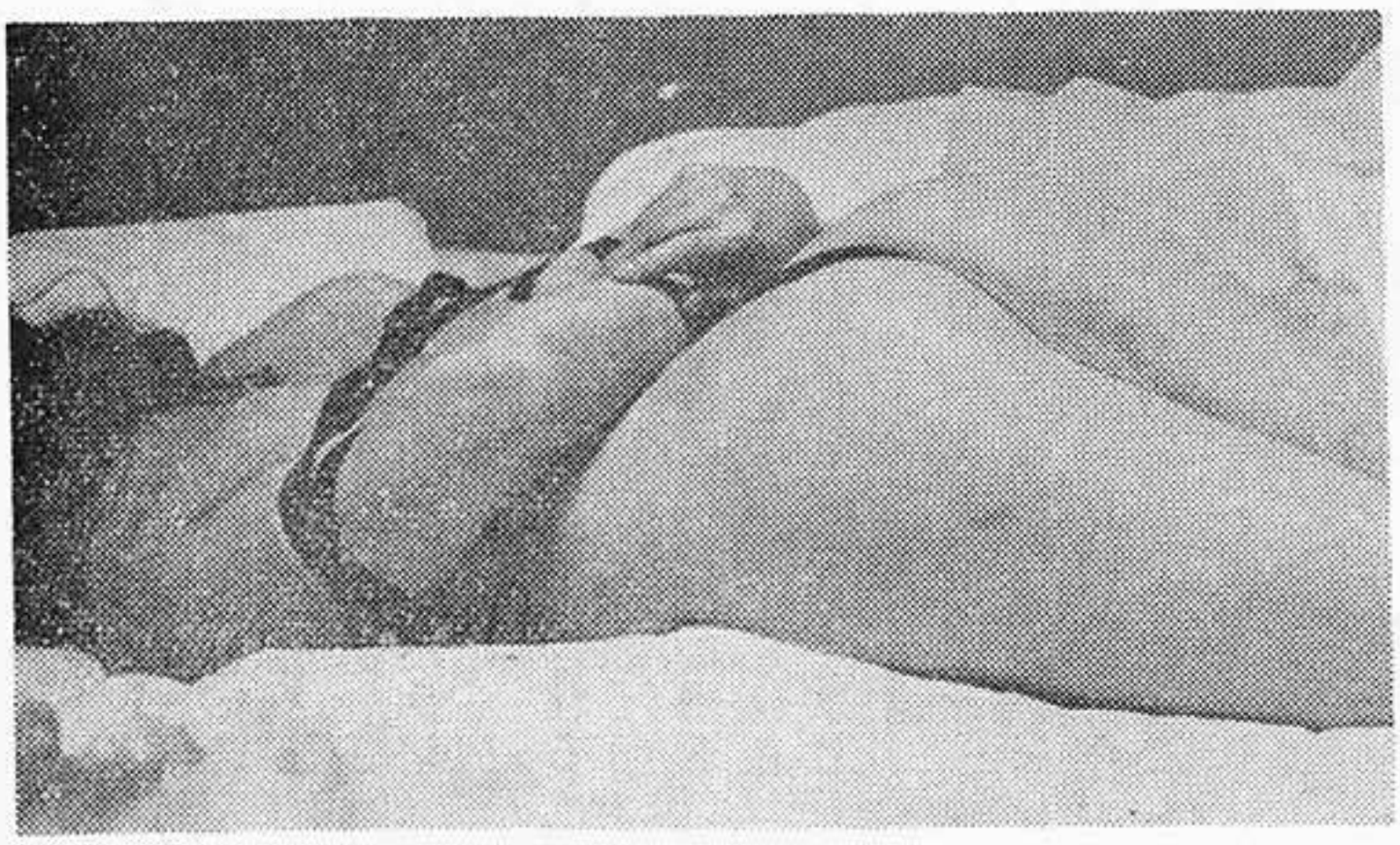
奇譚クラブのみなさん、いかがお過ごしですか。百合子のM性もますます目ざめてまいりました。

私の住んでいる所は、なにしろ田舎なものですから、前には川が有り、家の裏には大きな岩がありまして、すぐ山になっています。

近くには民家が三軒だけという非常に寂しい所です。ですから誰に気兼ねなくSMPが出来るのです。この間の土曜日の大雨の降った夜、夕食が終って後片付もすみテレビを見ていますと、彼が私に「おい、裸になれ」と、言うんです。もともと、土曜日には、どのようなプレイが行われるかと、朝から待ち遠しくて仕方ありませんでした。

すぐ服を脱ぎ、ブラジャーもパンティも脱ぎすてますと、「これを着るんだ」と、ビニールのレインコートを渡され、雨の降っている外に、放り出されてしまいました。彼は窓からスタンドを出し裏の山の方を照らしております。やがて彼が出て来て、「こちらへ来い」と、つれて来られたのが、松の木のところです。窓からのスタンドの光で、ビニールのレインコートから私の裸がすけて見えて、すごくおかしい気持です。

雨は盛んに降っています。でも松の木の下は枝が茂っているので少しはましです。彼は二〇〇〇CCのイリガートルを枝にぶらさげその口へブリキのジョウゴをのせました。何にをするのかと見ていますと、私の両足に別々にロープを縛って、私の幹に足を上にして吊るようにするのです。勿論、完全に吊るわけではありません。足を上にした程度ですが、それでも顔に雨が当って如何にも責められているといった感じが出ます。



ゆ　ぐりせたらしとが　でそ丸とに水ん雨雨いてのて　きルコるの

「おい、雨が上らない限り、お前お腹の中に雨水がドクドクと入るぞ」と彼がいって、私のレインコートをめくり、嘴管のついたイルリガートルのゴム管を近づけてました。

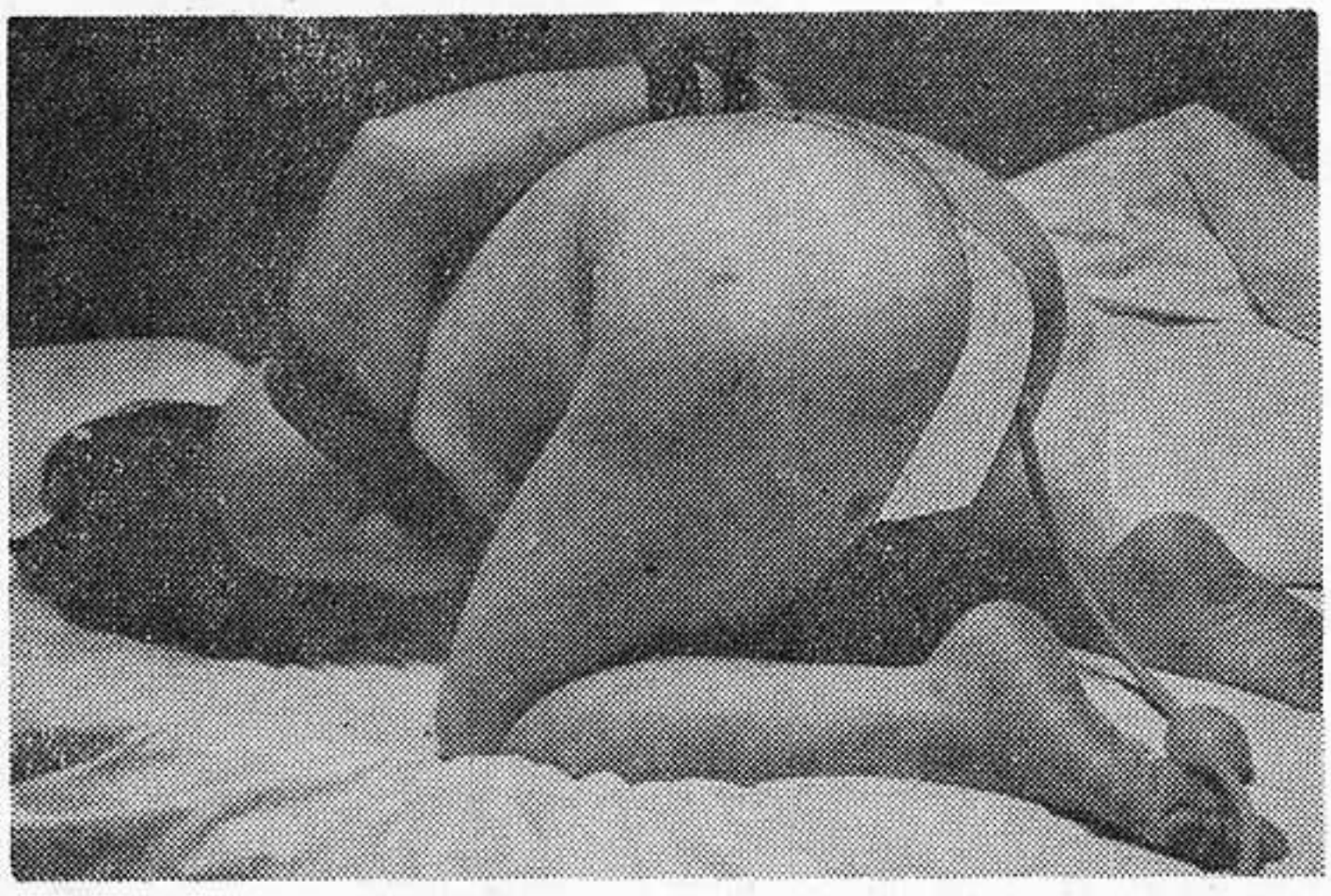
紙テープをべったりと貼りつけ嘴管を固定しておいて、彼は家中へ入り窓から私の様子を眺めいます。この辺は特に雨量の多所です。それに、なにしろこのですから五〇〇CCぐらいの、水がたまるのは、わけありませイルリガートルにたまった雨は、私のアヌスからお腹へ徐々流れ込んできます。20分もする、妖娠八カ月ぐらいに、お腹がくパンパンに張って来ます。おらく二五〇〇CCぐらい入ったしょう。

急にお腹が痛くなり、胸の附近苦しくなり、もう駄目かな——思った時に、彼が私の前に来ました。「もうだめ、これ以上は入ないわ」と言うのがやっとでし。もう、私の体は立上るだけでい一ぱいです。お腹に雨水が二ットル以上も入っているのにすには排出させてくれません。そのままの状態で納戸に連れてかれ、サッポロジャイアンツの

ある失恋のウタ

さの・みよえ

あたしには分かったの、彼の胸底にある欲求は何か、が…。あたしは見たの、彼の持物の中に混っていたあの写真を…。あたしは探ったワ、冗談めかしたお仕置のハナシで……。あたしだって知ってたワ、SMプレイのことぐらい……。あたしにだってあるの、縄目に対するほのかな興味が……。あたしは嬉しかった、彼の心を摑みとれるって気がして…。あたしは見たの、彼にハダカにされて縛られる夢を……。あたしは祈ったワ、彼の理性が若さの情欲に負ける事を…。あたしはやってみたの、深夜の寝床で自縛の真似事を……。あたしは焦れたワ、彼がなかなか求めてこないから……。あたしは話したの、彼に夢の中で縛られたってことを……。あたしはうろたえたワ、彼がマッ赤な顔して怒ったから…。彼が云ったの、ボクが縛りたいのはキミじゃないって…。



口元を栓の代りにされ、おまけにそのままの状態でビンを椅子代りにして柱に縛られ、両足はグッと上げられ、手は柱に回して縛られました。その五分間の時間の長かった事といったら、雨にずぶ濡れになりながら、とめどもなく汗を流しておりました。

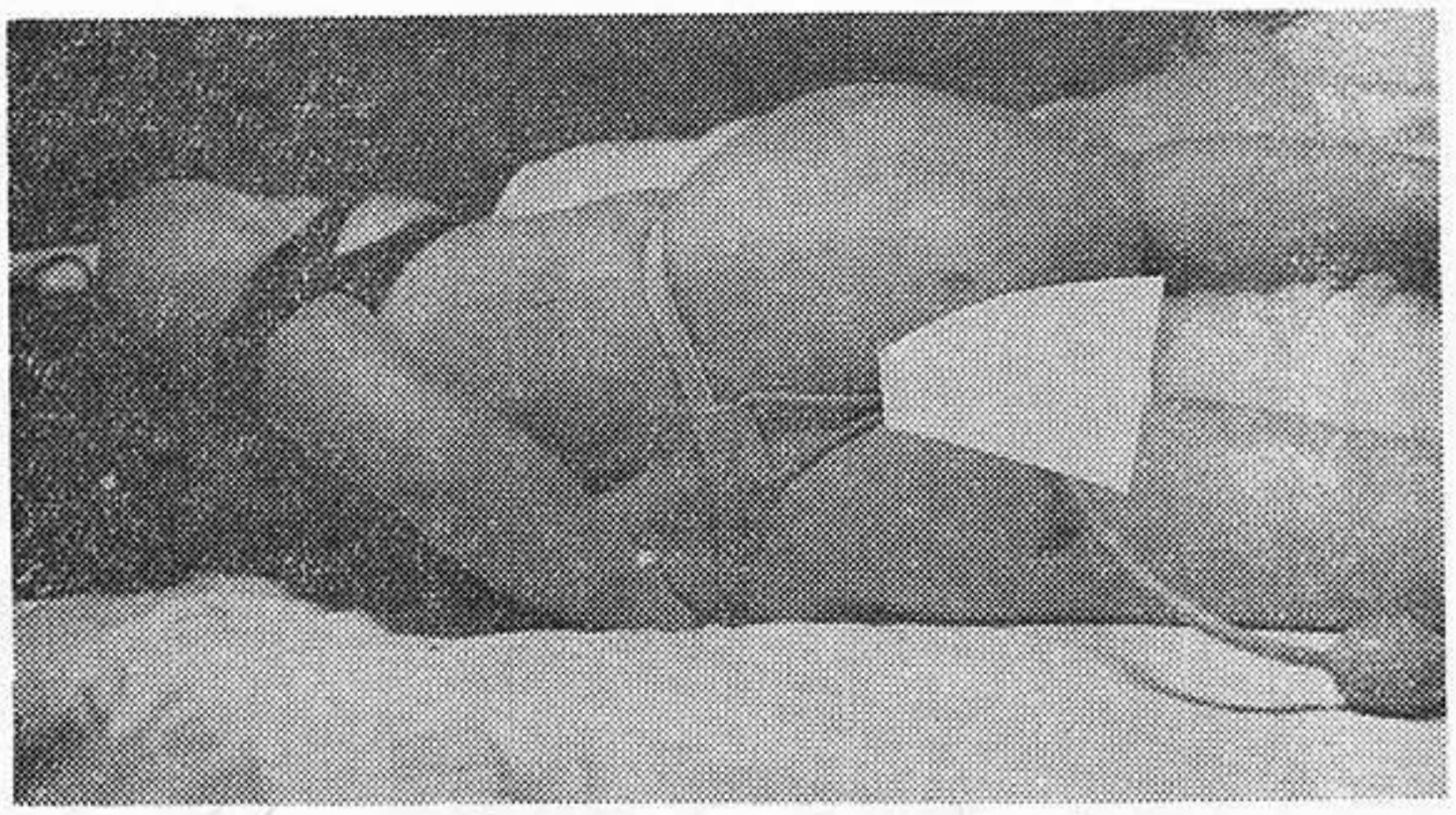
やっとの事で排泄を許され、一寸、休息してから浴室へ連れて行かれ、今度はグリセリンをストレートで一〇〇CC浣腸器のシリンダー部分まで挿入して浣腸されました。五分程して、お腹がゴロゴロ音を立て始めて、例のアヌスバンドの改良型浣腸栓（ローソクを削って出来たもの、前回よりも一周り大きく先で4センチ元で6センチ、長さ12センチ、バンドはゴムで出来ていて弾力性がある）

バンドをはずされると、水道の蛇口を開いた時のようにショーと出てしまいます。排泄したあとはアヌスも大きく開いていて、これだったら二〇〇CC浣腸器のシリンダーをのみ込むのも、そう苦痛じゃないみたいです。

お腹のお掃除が終ったところで、今度は、お布団の上にてエネマシリンジにて空気をアナールから二十回（ゴム球を押す回数）入れられます。こうして空気が出ないように栓をしておいてから、私達二人だけの事を楽しみます。今度は暑い日に、前の川で川プレイをやろうと相談しています。その時もまた、プレイの状況を書かしてもらいます。

とても好きよ、奇譚クラブ。どなたか、百合子とお友達になってくれませんか。そして二〇〇CCの浣腸器をプレゼントして下さる方はいないでしょうか。よろしくお願いしますわね。では、ごめんなさい。

（三重県・望月百合子）



編集部への便り
M野郎の願い
中田瓢吉

奇ク編集長様
始めてお便りさせて頂きます。小生は長い、そうです。恐らく奇クの創生期頃からの愛読者でございます。そもそものキッカケは広島県沼隈郡松永町の、弓手書店（現在は福山市松永町）の主人に「何か面白い本はないですかナ」と尋ねましたところ「これなんかどうです」と出されたのが奇クとその特集号（今は散佚しましたが厚さも恐らく今の奇クの倍位はあった）でした。

それが小生の長い長いM道程への出発であったとは、その当時は夢にも思わなかったことでした。文中、種々様々なアブの世界に目をみはった小生でしたが、中でも男性M記事には物凄くエキサイトしました。

たしか、M男が風呂場でS女性から、いじめられる記事でした。それを読んだ小生、恥かしながら（横井さんではないが）思わずオナニーに、恥ったのを覚えています。と言うことは、小生には先天的に、このM的素質があったということでしょう。それからの私は物に憑かれた様に、この種の本を漁りました。（と言っても当時は

梅川幸子さんへ
ゴムプレイのお誘い
丸山一郎

以前に『ゴム衣、泥責めプレイの体験』を発表された梅川幸子さん。貴方は文中で、「もし私のような何の取得もない、小柄な四十五才になるマゾ女を好いて下さるお方がございましたら……」「ゴムとかゴム装束に関心をお持ちのサド傾向の方なら、男女年令は問いません。是非々々私の望みを叶えて下さいませ」と呼びかけておられますが、私がその呼びかけに応じたいと思います。

あの文面から察するところ、貴女は、山へ、川へ、海へ、湖へ等の、所を変えたプレイは余りなさっていない様に思います。ナゼならば、文中にあるゴム装束の数を考えても大型ダンボール箱にやっと入るか入らぬかの荷量です。小柄な貴女お一人では、とても持ち運びは無理なハナシと思われるからなのです。手伝いが必要です。

渓流釣りにも興味を持ち、近県の河川の様子に詳しい私が、お手伝い致しましょう。又、私の家の庭には四坪程の、滝（人工）のある池があり、人間様のためには、少し浅いようですが、掘り下げることも出来ます。

人里離れた深山の渓流では、変化に富んだ滝や渕や瀬が連続しており、ゴム装束の貴女を縛って、カジキマグロを釣る太いワイヤーのリールに繋ぎ、水中に首だけ出して漬かった貴女を、竿を操って流れの中を歩かせるのに絶好のプレイ場となることウケアイです。海でも同じです。二人の奇抜なSMプレイで、休日の一日を楽しくエンジョイしましょう。

実は、もっと早く貴女に呼びかけたかったのですが、別れた妻との戸籍上の問題があったので控えていました。が、それも今は正式に解決しましたので、プレイ・プラス・結婚をも考慮出来ます。

お互いに社会人としては吹聴しにくい性癖を持つ者同士が、理解し合えるプレイを楽しみながら暮して行けたら最高の幸せです。

軽度のS性を自覚する私が、素肌をゴムに包んだ貴女を後手に縛り上げ、熟知した貴女のM性をくすぐり、引き出し、燃え上がらせる。そして、その激しい炎に、私もまた焼きつくされる……こんな

奇ク以外には、こうした書物はなかった様に記憶しております。

沼正三氏の「ある夢想家の手帖より」や、鬼山絢策氏の「らすれいぶ・二百字讃歌」等、感激した読物は枚挙に暇ありません。これらから吸収した知識によって、私自身のM性は頭が下がりますし、羨望の念を禁じ得ません。しかし小生も思えば、最早や齢四十を半ばにもなんなんとする現在、引っ込み思案にばかり落ち込んで、この侭、棺桶に直行では、先祖に対しても申訳ないと、深く悟る処があります。

今後は、実行面でも鋭意努力致してみたいと存じております。その点、出来れば、M野郎が一人増えたとでもお思いになって、御指導御鞭撻願えれば幸甚の至りに存じます。

就きましては、今回、芦屋市の高千穂順子様のお呼び掛けに一縷の望みを托し、お願い申し出た次第でございます。勿論、順子様とは私如き、教養も身分も違う様拝察致しますが、私の切なる願いでございますれば、何分、規定の許す範囲内で宜敷しくお願い申し上げます。

M野郎こと中田瓢吉

奇ク編集長様

生の域を出ない情ない状態でございます。勿論、バーの女性とか、トルコ嬢相手に、或程度のプレイじみたことも致しましたが、勿論隔靴掻痒の感は免れません。その点、辻村氏とか芳野氏、鬼山氏、和歌山の東氏等、実行派の方々に直行では、先祖に対しても申訳ないと、深く悟る処があります。

今後は、実行面でも鋭意努力致してみたいと存じております。その点、出来れば、M野郎が一人増えたとでもお思いになって、御指導御鞭撻願えれば幸甚の至りに存じます。

就きましては、今回、芦屋市の高千穂順子様のお呼び掛けに一縷の望みを托し、お願い申し出た次第でございます。勿論、順子様とは私如き、教養も身分も違う様拝察致しますが、私の切なる願いでございますれば、何分、規定の許す範囲内で宜敷しくお願い申し上げます。

M野郎こと中田瓢吉

奇ク編集長様

亡妻の面影を偲びて……妻とプレイを楽しんだ頃

河西逸雄

四月号に、『つつまレイ』という私の拙いSMプレイを載せて頂き大いに感激しました。活字になってみますと、まるで名匠の手になったような名文になっているので実は驚き入りました。

そして、幾度も幾度も、読み返しているうちに、また亡き妻の面影が偲ばれて、堪まらなく淋しい思いに駆られましたけれども妻はなプレーではあったけれどもよく協力してくれました。ささやかな二人きりの夜、晩酌をたしなみながら「どうだい、又遊ぼうか」という私の誘いに「そうですね」と応じて、手鏡でパフをいながら、「今日は、口紅を使しましょうか」と訊ねるのです。

私達は、いつも着衣のプレーですので、私は、その時の気分次第で好みの注文をするのですが、妻は着付け出す頃から、の気分になって来ます。

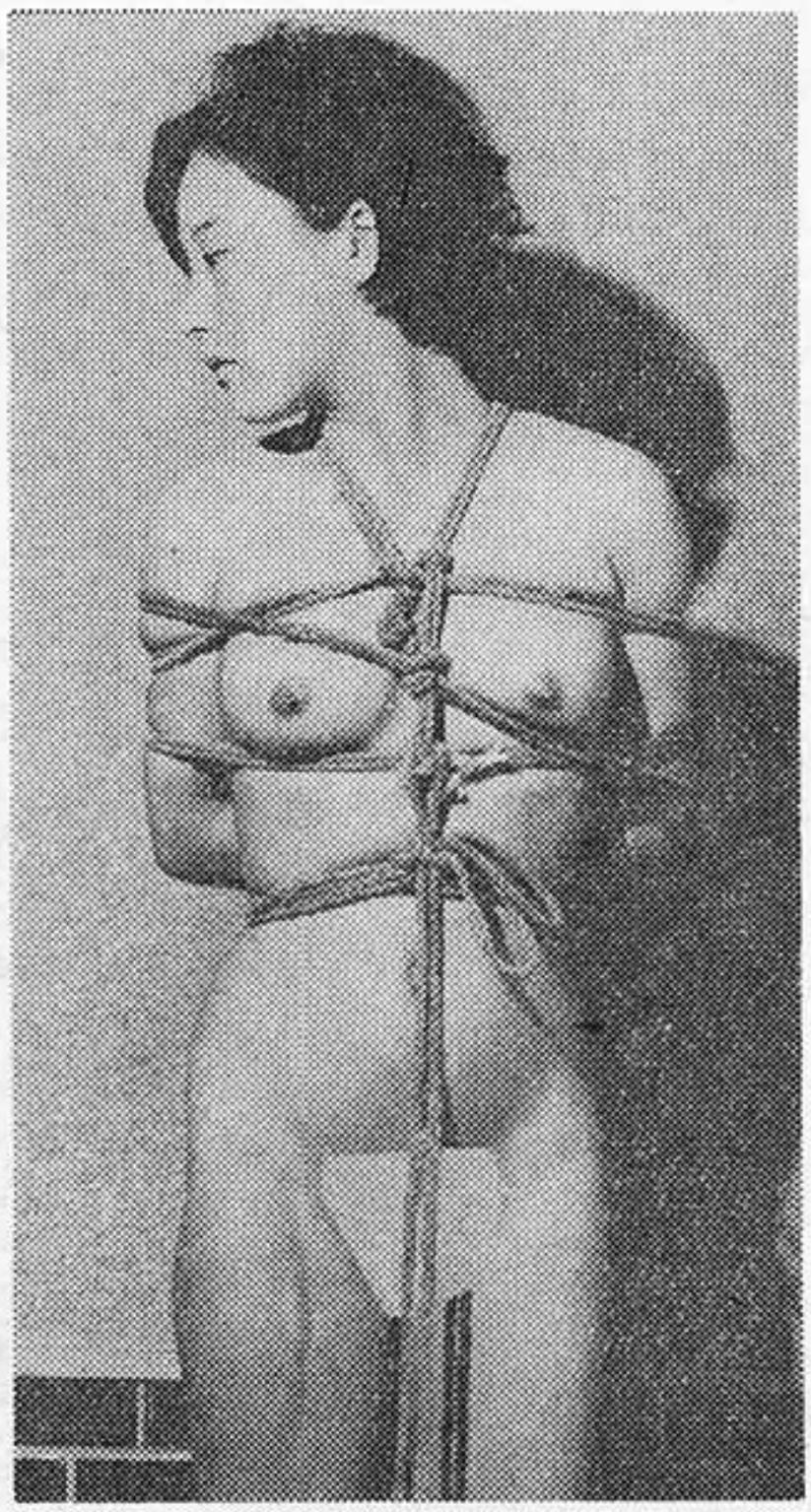
背後に立って行き、妻の胸元をはだけ、襟足を思い切り抜き衣紋にしてから、帯、又は伊達巻姿で坐らせます。それから紐、扱帯又はロープ等、その時の着付けに合ったもので、ユックリ胸を二巻き程度に締め上げて、両手首を背中に捻じ上げてシッカリ結えます。

暫く、そのまま坐らせてポーズを眺めながら、チビチビやるときは、正に私の極楽境でした。それから、背中をかかえる様にして立たせ、縄尻を持って引きまわしよろしく歩かせ、床柱を背に後手首を括りつけて坐らせるのが、私達のSMプレーのコースでした。

そうしておいて、妻に暫く捕われ女の気持を味わせるため、他の部屋で一プクして見るのも私の演出？　の一つでした。

私は元来、開股縛りや羞恥責めなんか、あまり好きではありません。女性美は飽くまで、つつましいところがよいので、何も彼もあけっぴろげでは、曲がない様に思われます。でも、たまにはエキサイトして、一寸いたずら気を出すこともありました。

柱から後手首を解いて、そのま



ま中腰に立たせます。そして、前をはだけさして裾を腰までまくり上げて、そのまま坐らせますと、妻は自らの双臀を直かに自分の踵に感じるのですが、それを自分がやった分には、何でもないでしょうが、拘束されたままでされたところに人には云われない嗜虐の味わいに堪えられないのでしょう。

「ああッ」

切ない声を出したものです。又あるときは、僅かにあらわになっている膝元を、徐々に割ってゆきますと、妻は身をよじって悶えるので一寸、すまない様な気になりました。

「こんな時は後手に結えない方がよいかな」

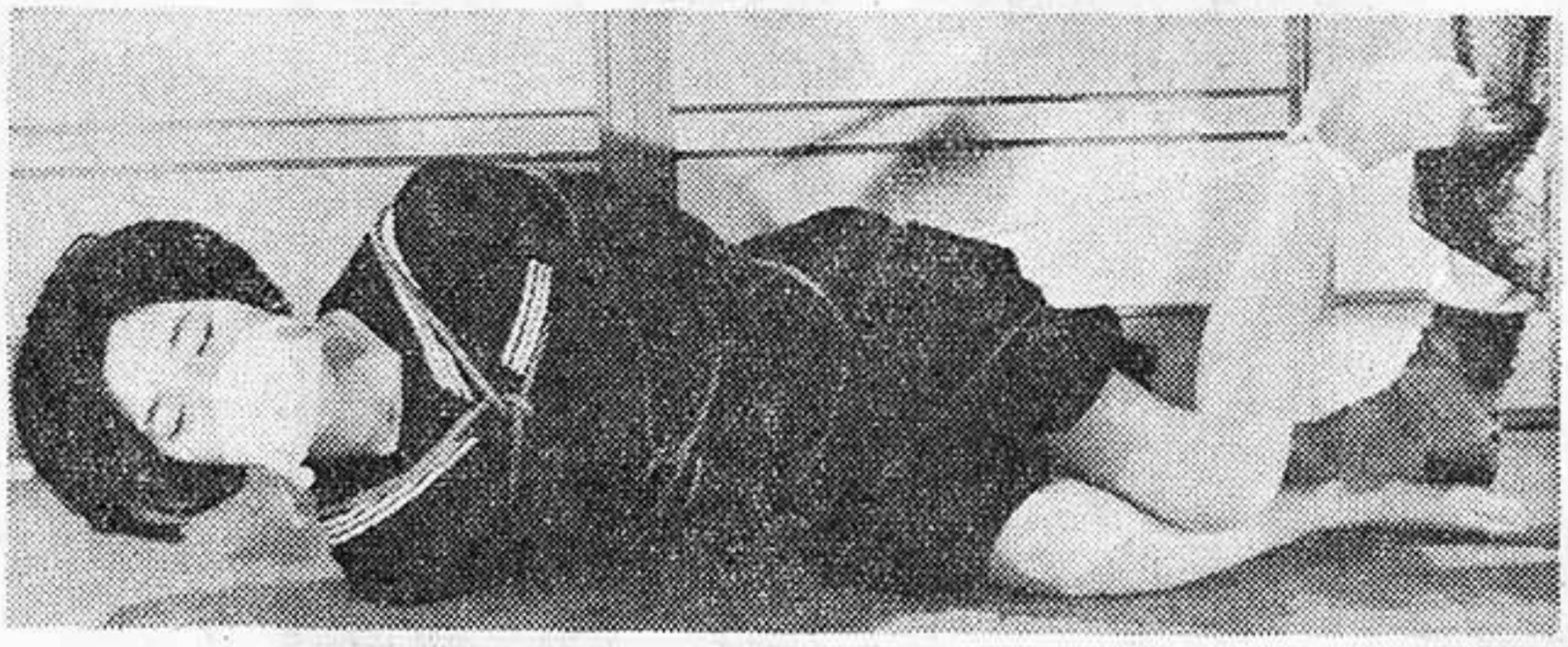
と言いますと、「それだと、どうしても手でさからわないわけに行かないんですもの」とむしろ、縛られている方がよいという様な口振りでした。

女は大体に於いてMなんでしょう。いつも、妻ばかりではと思って「一度俺を縛ってみないか」と試みさせてみたのですが「やはり妾が縛られた方が柄に合う」と云って、タッタ一回切りで止めました。

妻の思い出はつきませんが、こうして書いている間にも妻と一緒にいる様な気がして忘れ難い思いでいっぱいになります。

……グラビア・フォトに見る……きく・かおる……

奇クモデル・ベスト・テン



小生、全くもって、頭に来ておるのだ。

それは、何かというと、今月号（昭48年9月号）には、あの永遠の恋人、梨花悠紀子さんのフォトが、一枚も載っておらないのだ。

こんなことがあって、いいのだろうか。もちろん、たまにはあっていい。絹川文代さんは登場したが、大塚啓子さんだって、出ていないのだから。小生ら、ファンの気を不安にさせるのもたまには、よかろう。しかし、たまにだぞ。

最近の奇クのグラビア・フォトにあらわれた女性を、数の上で検討してみよう。（目次フォトを含む）昭和48年5月号から9月号までの5カ月間である。

一枚を一点とかぞえた。大きさは関係なし。また巻頭であっても、末尾であっても考慮しないことにした。

☆ベスト・テン一覧表☆

1位	西条　紀代	19点
2位	前田真知子	18点
3位	深田　菊子	17点
4位	松本　たえ	10点
5位	笠井奈保子	9点
6位	鈴木千鶴子	8点
7位	荒尾　慶子	8点
8位	高村　浩子	7点
9位	南　加津子	6点
10位	江口　淑子	5点
10位	三浦　純子	5点
10位	梨花悠紀子	5点

〔以上12人〕

こうしてみると、奇クの六人娘として西条紀代、前田真知子、深田菊子、笠井奈保子、鈴木千鶴子高村浩子の諸嬢があげられる。

また、人妻側として、松本たえ（娘さんに入れにくいので）、荒尾慶子、南加津子、江口淑子、三浦純子の五人があげられる。

そして最後に、小生の愛する梨花悠紀子さんがあらわれるのだ。最近、グラビアにも、本文にも、よく登場するので、そのうれしさの故に、最近、二十日すぎになったら、ソワソワして本屋をのぞいていたのに、なんたることだ。今月号は載っておらんのだ。これはどうしたことだ。

しかしながら、梨花さんの持つムードを多分にもっている前田真知子さんは、よく登場しておる故に、じっと我慢して、来月号こそと思っておる。

前田さんは、5月号からの奇クに於いて、グラビアフォトの巻頭を飾ること4回、これは登場率八割であり、すばらしい記録であります。（昭和48年7月26日誌す）

妖しい女性の魅力
妊娠腹について
＜カメラルポに登場した南加津子様へ＞

今井五郎

八、九月号に載った南加津子さんのフォト、誠に素晴しく、大いに縛りに対する意欲を、そそられた次第です。

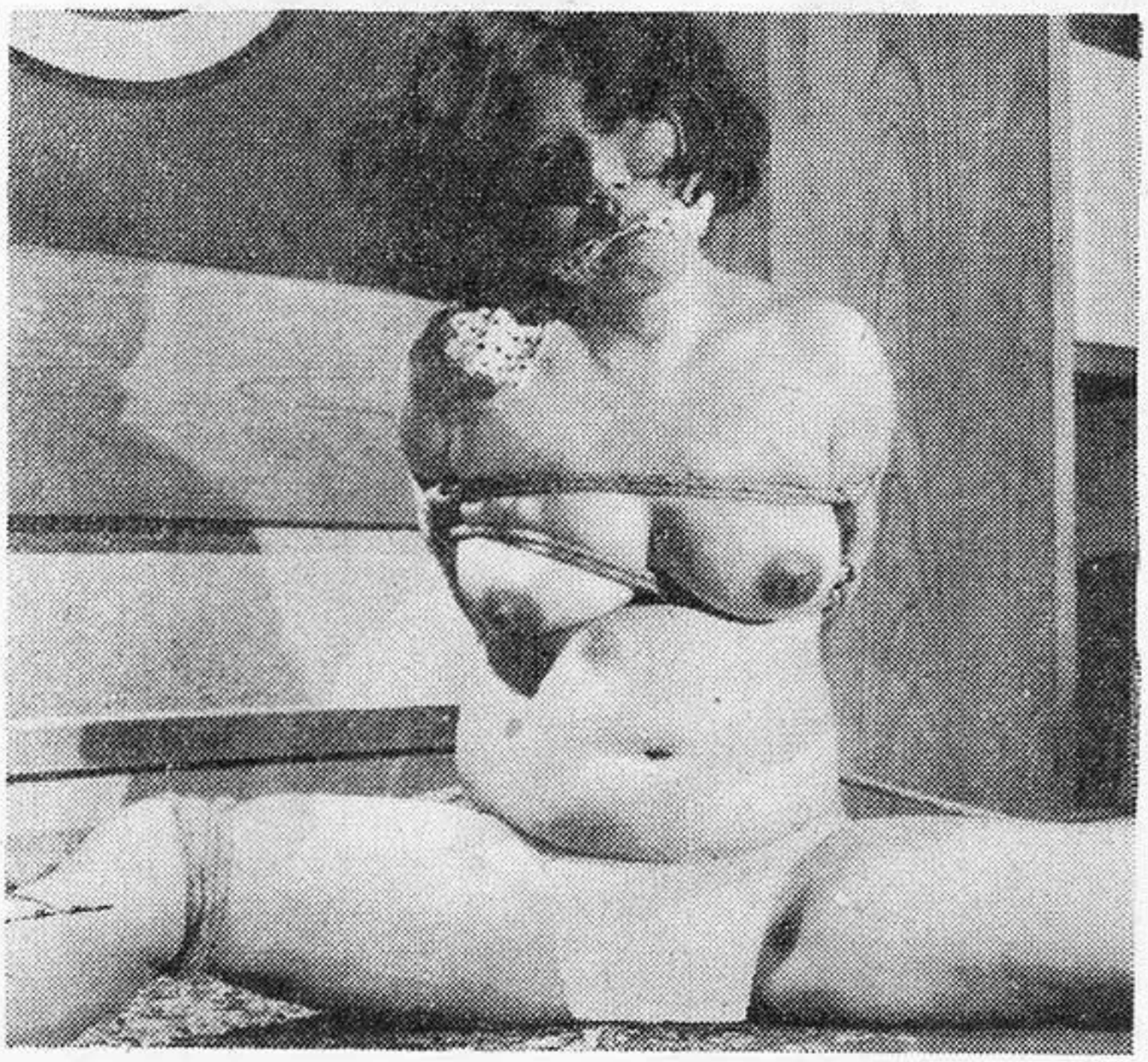
メロン腹とか蛙腹とか誠に言い得て妙であり、巨大なばかりの妊娠腹はグロテスクであると同時に女体の持つ神秘さに圧倒される思いでありました。

開股又開股のボリューム満点の加津子さんの裸身からは妖しげな香気さえ立ちのぼり、どうにも抗し難い強烈な刺激を覚えたのであります。

妊婦腹に美を感ずる人が奇ク読者の中に沢山いられることは承知しております。しかし、私のような不心得者は、もっとイヤラシイ想像を致すのであります。

男女が結婚し、せつせとナニに励み奥様のお腹が大きくなる。それは当り前のことです。ところがその当り前のことが私にとっては当り前でなくSM的妄念を生ぜしめるのであります。

今もそうでありましょうが、加津子さんは、このような大きなお腹になる前は、チャーミングな愛らしい乙女であった筈です。そして肉体も彫像を思わせるような美しい芸術品であった筈です。



今のような暑い季節には、海辺で水着姿の素晴しいプロポーションに、砂浜にネッコロガッテル男共は、映写カメラよろしくジーッと目で追ったに違いありません。

倒錯の神秘と不可思議さ

アブノウチト オモシロサ

持出矢目三

真面目に考えて、奇クの毎月号をひもといて、その中にきらめく倒錯傾向を眺めていると、その不思議な美しさや魅力に僕はうちひしがれたようになる。

お寺の縁で涼しい風に吹かれながら、うつらうつらとしていると、この世に生まれた不可思議さが、僕の二十八年の人生を奇妙な形で再現して見せてくれる。時折、首筋の附近に、うるさくつきまう藪蚊が来なければ至極天下泰平なのだ。

奇ク9月号を手にして、僕は先ず鈴鹿晶子さんの「ソ連兵の餌食になる日本女性」の一文を壊するという想念がありますが、まさに、それはサディスティックな行為と言えるのではありませんか。

『女を孕ませた』という言葉の中に私はS的快感を覚えるのです。楚々とした美人、可憐な乙女が犯され妊娠し、昔の面影はどこへやら、大きなお腹に肩を喘がせるなも巨大な横綱級の蛙腹と化したのでありますす。全く以て、なんということでありましょう。

妊娠とは、女体美の崩壊であります。極言するならば、女に妊娠させるということは、その美を奪う残虐行為なのであります。SMの一つの特性として美しい物を破

女体美に魂を吸い寄せられるような憧憬の念があった筈です。

ところがです。結婚という制度により一人の男性の所有物となった彼女は、多くの男性の憧憬の念をブチコワして、夜な夜な愛の交りを致し、揚句の果てには、かく

た。思わず背筋がゾクリとし、陰部の巧妙にカットされた部分に思いを馳せて思わずエキサイトしてしまった。SM一年生の僕に、懇切な解説と指導を、お願いしたいものだ。

村田恭子さん、貴女のナマぐさい体液の臭いのするような生々しい文章に僕は呻いた。一見、平凡のような貴女の独りプレイの中に秘められた強烈な魅力を僕は全身で感じとり、その余りの甘美さに目もくらむ思いで、いっとはなしに燃えつきた。

『人獣交婚』について、僕は何一つの知識も経験もないが、小杉千恵さん、甲斐千恵子さん、南政子さん、などの文章を読んでいると非常な興味をそそられ、これこそSMの極致だ、と思うようにさえなった。

多大の感動を以て読んだ。その背景になる歴史的事実は、今の僕には判らないが、それでも日本女性が毛むくじゃらの外人に無理矢理犯されるという事実に、僕の血が妖しく騒ぐのである。

先月号に引き続いて塚本鉄三氏のカメラルポ「M女加津子がすすり泣くとき」は抜群。僕は胸を熱くして見、且つ読んだ。妊娠したので尚更、被虐味を増した加津子さんの心と体が、ベテラン塚本氏の手によって、どのように翻弄されるか、僕は最大の興味を持つ。

長谷田亀治氏の「SM楽書帳」の乳首を貫通したフォトは凄かった。

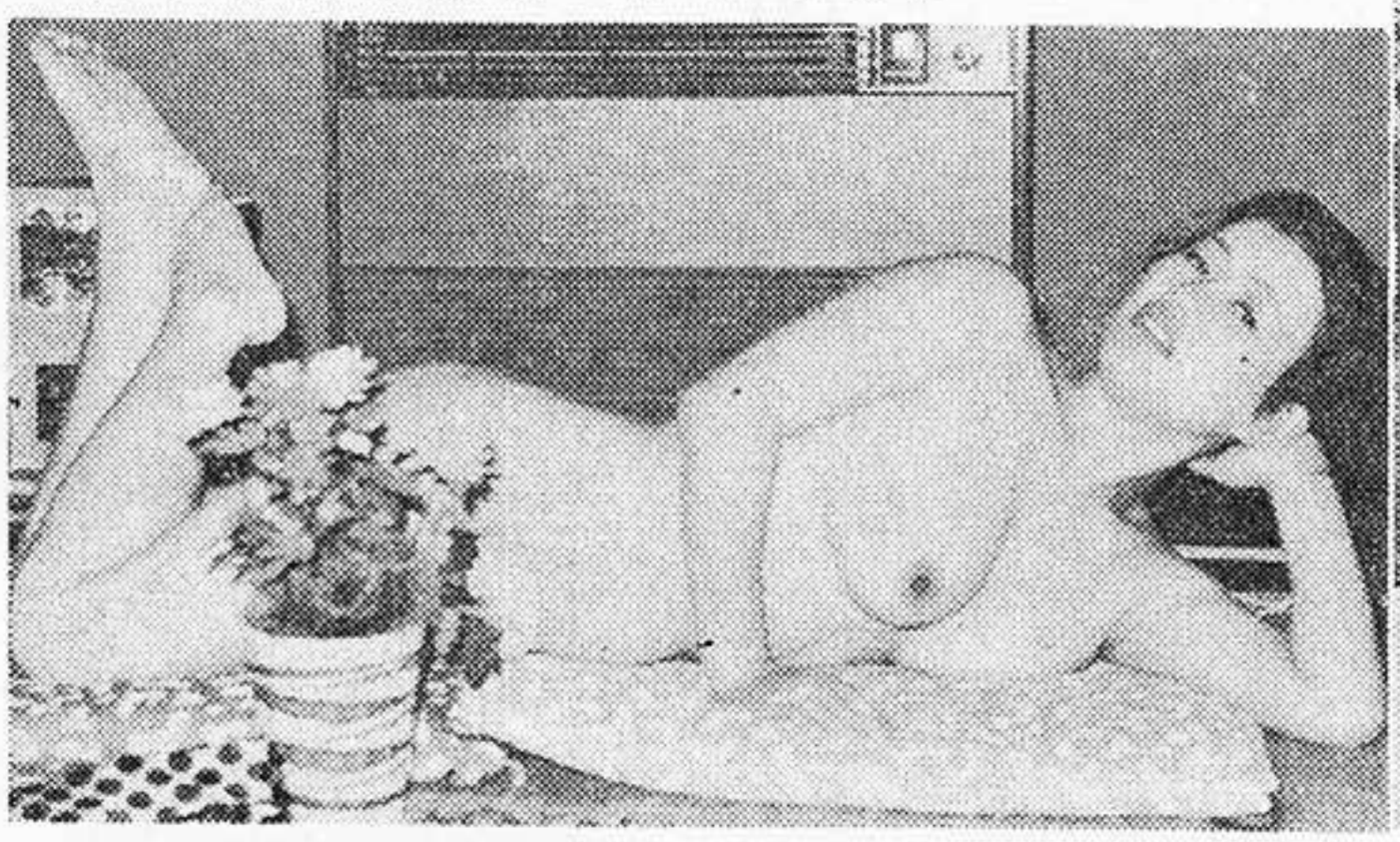
南加津子さん、貴女は本当に素晴しい女性です。SMへの激しい情熱と願望、そして勇気に、心から賛辞を贈ります。どうか立派なお子さんを無事出産されて、それからも奇クに登場して、私のようなSMの囚人の目を楽しませて下さい。

ススキ花咲く蔵王への誘い

最上卓也

九月八日（土曜日）蔵王温泉にプレイ用として部屋を予約致しました。花笠祭りや、避暑地としての夏のざわめきも過ぎ、温泉地としての静けさが戻ってくる初秋の一夜をプレイで過ごすためです。

この夜、私共とご一緒に、語らいとプレイ、そしてフォトの交換などで過ごしてみようと思われる方はおられませんか。ご夫婦で私共との交換プレイに応じて下さる方、又は、私の責めが好みに合うと思われる女性の方なら、大いに歓迎致します。



――浣腸キチ様へ――

アヌスは完全にお酒を吸収する

――三木令子――

七月号の「アヌスから酒を飲まされて」で日本酒とビールを浣腸し、完全に吸収してしまった体験を書きましたところ、九月号の読者通信の中で東京の浣腸キチ様のお呼びかけがありました。

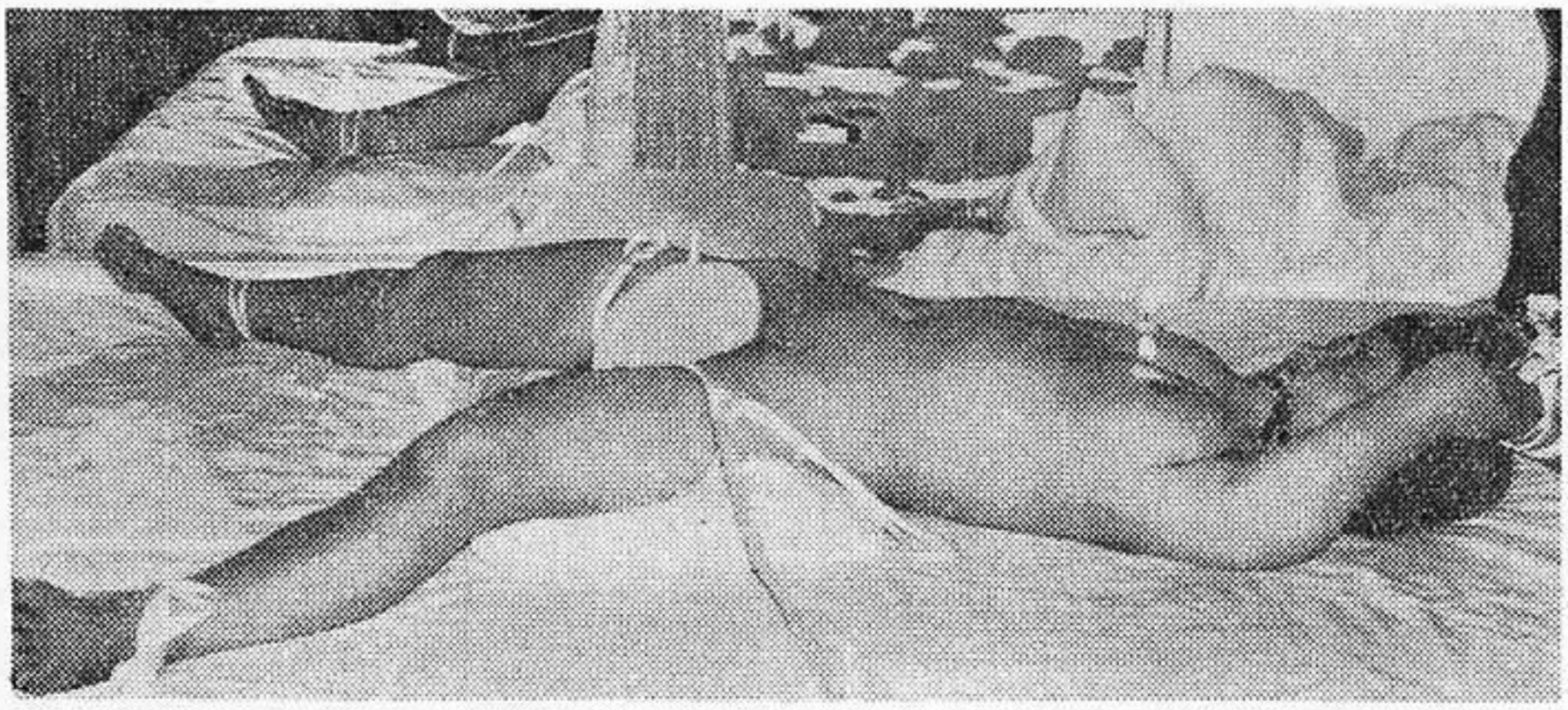
浣腸キチ様は私たちの実験に大変興味を待って下さったようですが、「ただ二百CCの酒を浣腸して眠れるという点は疑問に思う」と言われ、いかに浣腸に馴れた人でも、我慢し切れないで排泄してしまうだろう。もしそれでもと言うなら、私に直接会って、ためして見たいと言われます。

私が直接、浣腸キチ様に自分の体でためしていただくことは、今のところ、その勇気がありませんので、お許しいただきたいと思いますが、この問題について、もう少し書いて見たいと思います。

たしかに、いきなり日本酒を二百CCも浣腸して、最初から全部一滴も余さず吸収してしまうことは、むずかしいと思います。しかし、徐々に五十CC位から始めて浣腸により吸収できる酒量を増やして行くことは可能ではないでしょうか。初めての方でも、五十CC位なら比較的簡単に全量吸収ということは可能ではないかと思います。初めは少量でもだんだん欲が出て、時間をかけて追加浣腸し私の場合は、大体二百CCまでは大丈夫ということになったのだとご了解下さい。体のコンディションが悪くなければ、最後の浣腸後二時間も経てば直腸には一滴の液体も残りません。

勿論、個人差があると思いますので、私の場合が、どなたにでもあてはまるとは思いませんし、私だって勿論、吸収し切れない時もあるわけで、いつも洩らさずに眠ることができるわけではありません。しかし排泄するためでなく、全量吸収を目的として、注意深く浣腸すれば、私の場合、可能だと言っているわけです。

ご投稿の中に「まして、ビールをイルリガートルで二本乃至三本も浣腸されれば、如何に浣腸に馴れた人でも排泄感がないことはありません」と言っておられますが



但し、一部屋だけの予約ですので、同室での一夜となりますから念のため。宿泊料については、二人分までは当方で負担致しますがそれ以上（例えば部屋の追加）の分と交通費は用意致しかねますのでよろしく。ただ、もし遠来の方でしたら、一泊ぐらい追加して、静かな山形などを、ご案内致しましょう。

私共の行なっておりますプレイや、責めの好みについては、昨年から今年の七月号にかけて数回、奇クの本文やサロン欄に掲載して頂いていますので、ある程度は分かって頂けると思いますが、強いてまとめれば、何気なく酒酌み交しながら始める羞恥責めとローソク責めが主で、まだ血を見たり、身体に跡が残ったりしたことは、一度もありません。

又、私共の好むプレイ用具は、大小数十本のローソクや玉ギラスそれにボーリングピン、それに、艾や、バイブ等です。ムチは、ピシーッと肌にまといつく羊皮製のを所待しております。

撮影の件については、添付の写真が示すように、私のカメラ技術は全く見られたものではありませんので、これだけは是非、ご愛用のカメラを、ご持参願います。

同封のフォトは、私共のプレイ記録アルバムから引き出したものですが、同好者のご参考までに。ご連絡を楽しみにしています。

それはその通りで、七月号にも書きましたように、私の場合でも、せいぜいビール一本分の浣腸で十分です。このビール浣腸は、とても楽しいもので、ビールから出たガスで大腸がパンパンになり、お腹が膨らんで蛙腹になります。二三時間経ってからのガスの排出も何とも言えません。

私の場合、十分快便があったか簡単な浣腸によって直腸が完全にカラになっているときに、日本酒かビールをアヌスから浣腸して、ゆっくりと、吸収するのを待ちます。すると間もなく頭がポーッとして酔っぱらってくるのが分ります。その具合を見て、慎重に追加注腸し、余り無理をしないで適当に止め、それからは自由な姿勢で三十分、一時間、一時間半と我慢するのです。多少、我慢を要するのは、せいぜい始めの三十分から長くても一時間位のものです。

私の場合、今暑い季節のせいかとくにビールがおいしく、大ビン一本で十分に酔っぱらえますし、その後の大腸＝腹部の膨満感がすてきです。きれいに盛り上がった蛙腹を圧迫しながら排出するときの満足感も格別です。冷やさないビールなので冷たい感じはありません。

以上が私たちの、ちょうど気持いい程度までの、アヌスからの酒の飲み方です。度をすごして苦しくなってもいいから、思い切ってうんと酔っぱらってみたいというときは別で、やってみたことがありますが、完全に酔っぱらうまで繰り返し繰り返し、お酒で洗腸しました。一升ビンを用意し、イルリガートルを使って途中からは排泄されたお酒の上ズミを再注腸しながら飲めるだけアヌスからお酒を飲んでみたのです。ビールは適当でなく日本酒を用いますが、やりすぎると危険かも知れません。

液体を注腸するとき、される方はどんな液体を注腸されたか、すぐには分りません。一度にコロリと死んでしまうような大変な毒物なのか、気持よく酔わせてくれるお酒なのか、ちょっと分らないわけです。黙ってお酒を注腸されてしばらくしてハハンと分るときがあります。そんな時は思わず「あなた、お酒なのね」と聞いてしまいます。「うん、分ったね」と楽しそうに私を眺める夫に、私は、「ああいい気持。うんと酔っぱらわして」と心の中で叫ぶのです。

〈体験記〉

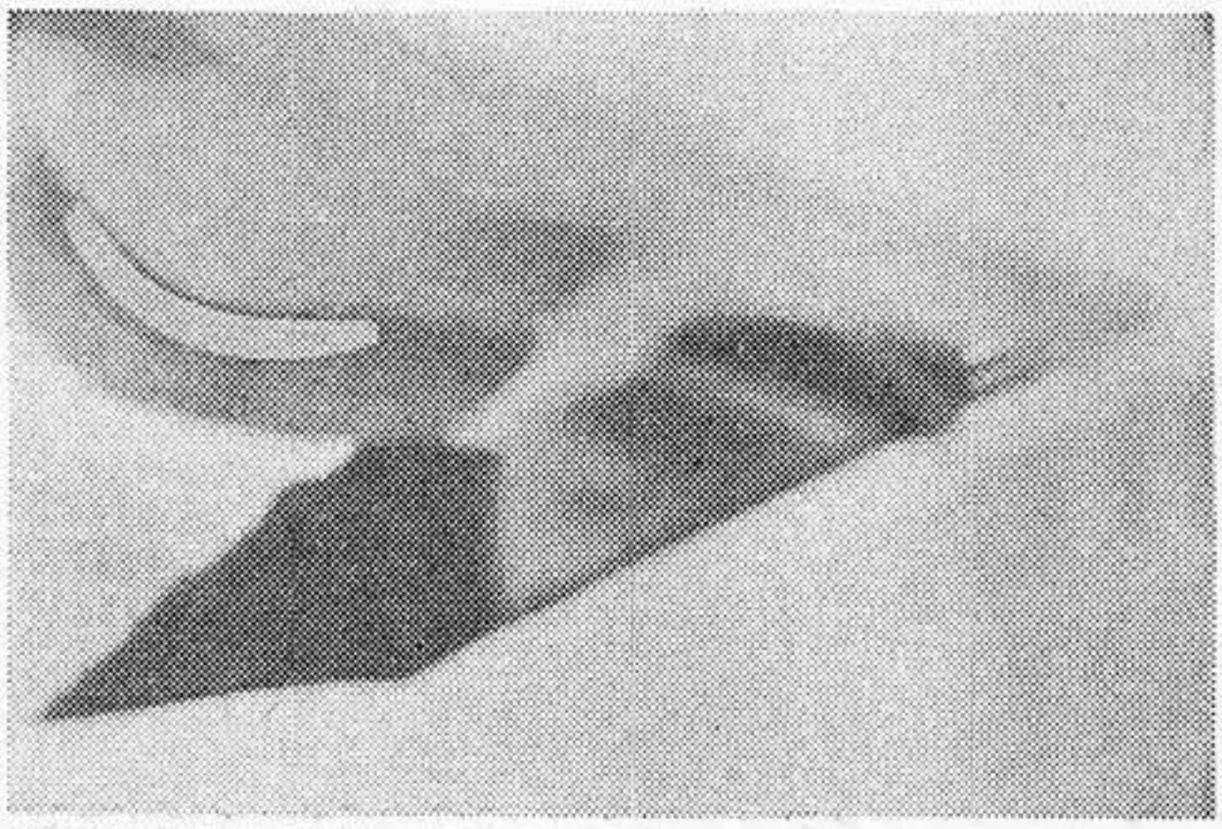
…オンナ・トイレ・スカトロ…

福島和夫

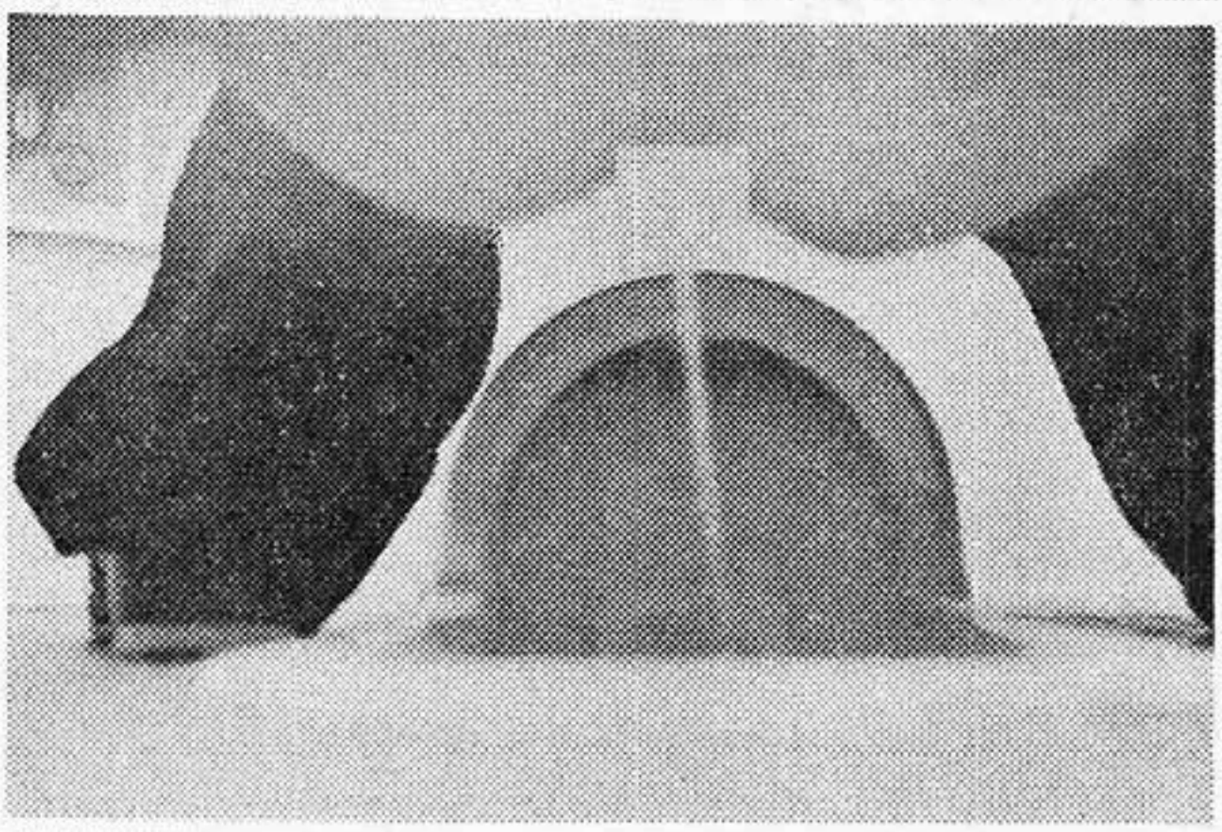
私の女トイレ探訪は、その後もずっと続いております。最新のもの、写真ができ上がりましたのでお送りします。出来がとても悪いのが、かえすがえすも残念です。

行きつけの勝手の判ったパチンコ店のトイレで撮ったものです。写真裏面番号Aのものです。カメラを使用する以前に、手鏡で覗いた時は角度も他のものと異なって至極面白く、また迫力のある場面が覗けましたのに、今回は私としたことが、全くあわててしまい、カメラの距離を無限大にセットするという大失敗をやらかしてしまいました。

場所はパチンコ店ですから、女性の出入が数少なく、その中でも若い女性となると、とても困難でしたが、百円で買った玉を長く持たせるのに、随分と苦労をかさね粘りに粘った結果、やっとのことで若くてチャーミングな女の子を見つけ、トイレへ行くのを辛抱づよく待ったのです。

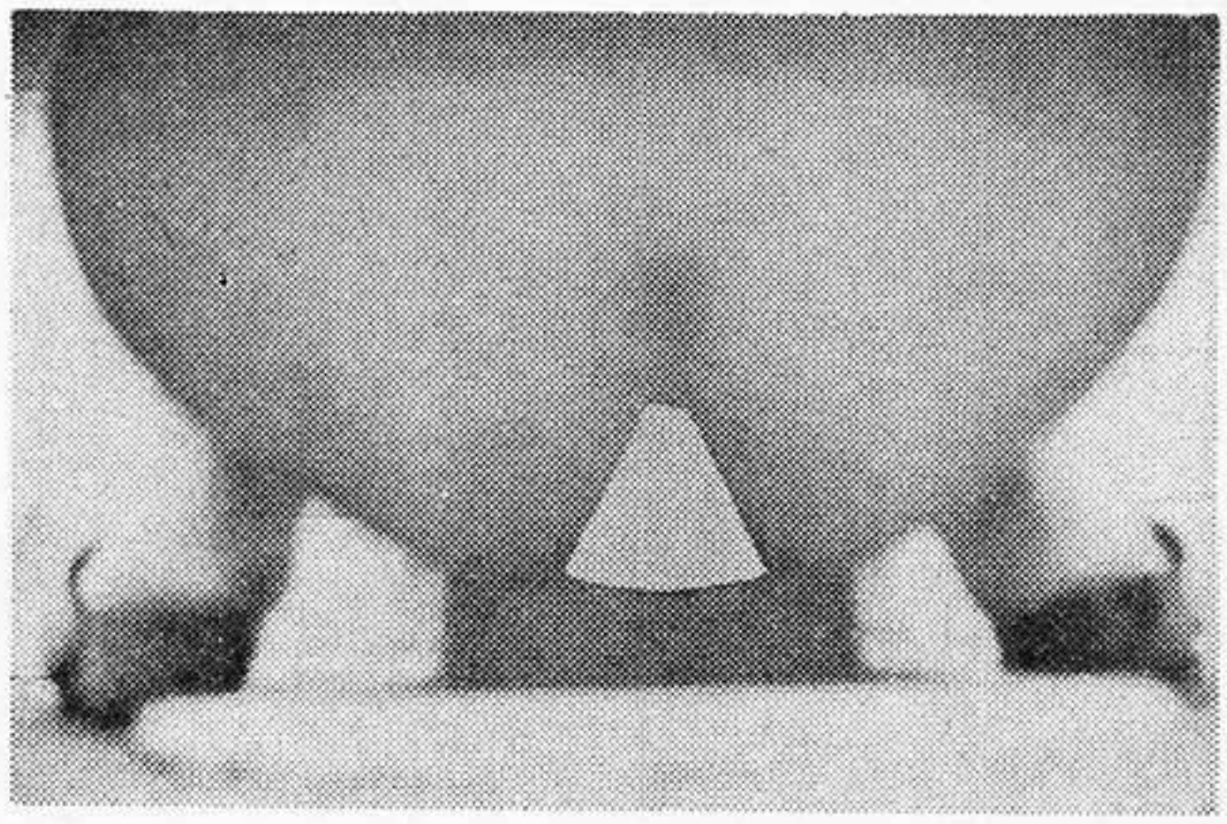


ミニのよく似合う、ぽってりとした十八、九のお下げにした娘さんで、どこかの会社勤めの帰りにパチンコをしに寄ったような風でした。手鏡で覗いたときは、さすがの私も、あっと驚いたくらい、薄紅色の健康的な肌のお尻がうつっていて、びっくりしました。



それだけに、この写真の失敗は返す返すも残念でした。私の目に灼きついた彼女の美しいお尻やアヌスは、まだ目の底に、はっきりと残っております。

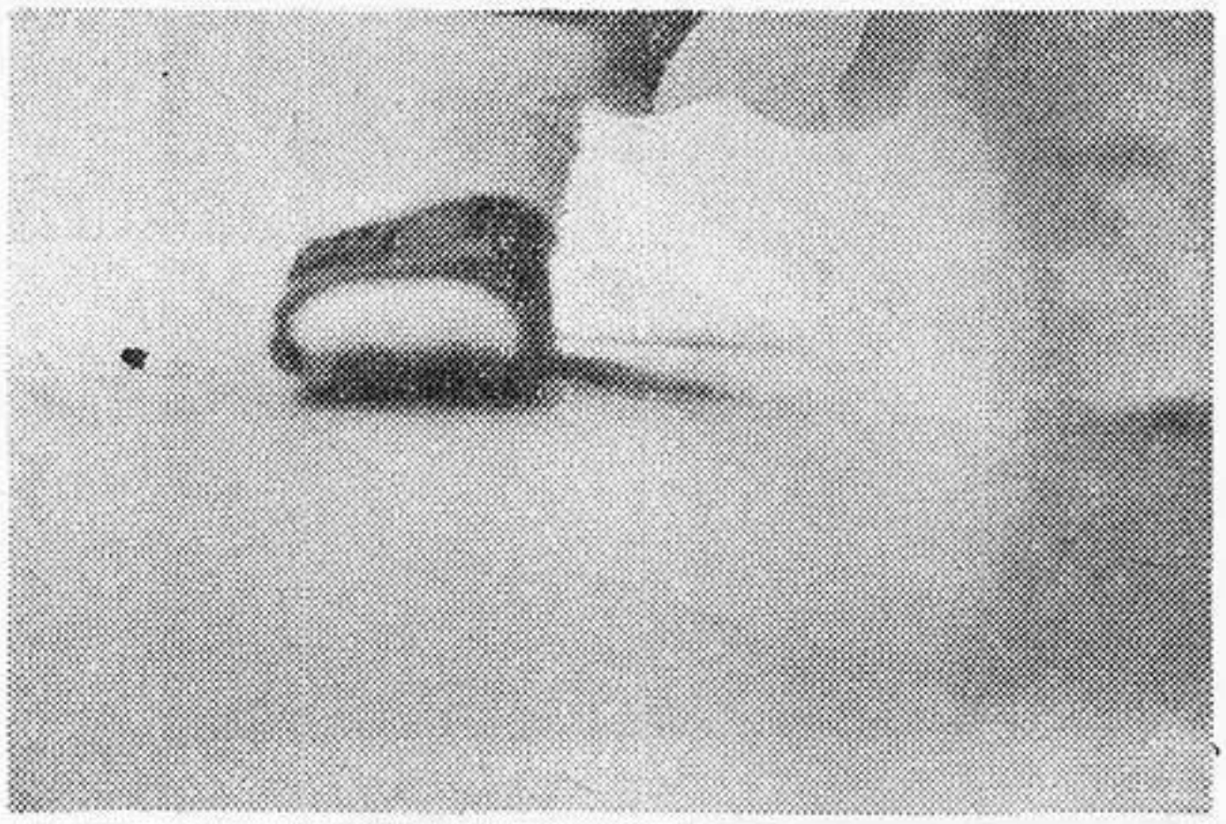
残りの二枚は、ボーリング場のトイレで納めたものです。ボーリング場は若い女の子が多くて、その点、パチンコ店などの比ではありませんが、それだけに怪しまれずにチャンスを摑むのも、なかなか、むずかしいです。

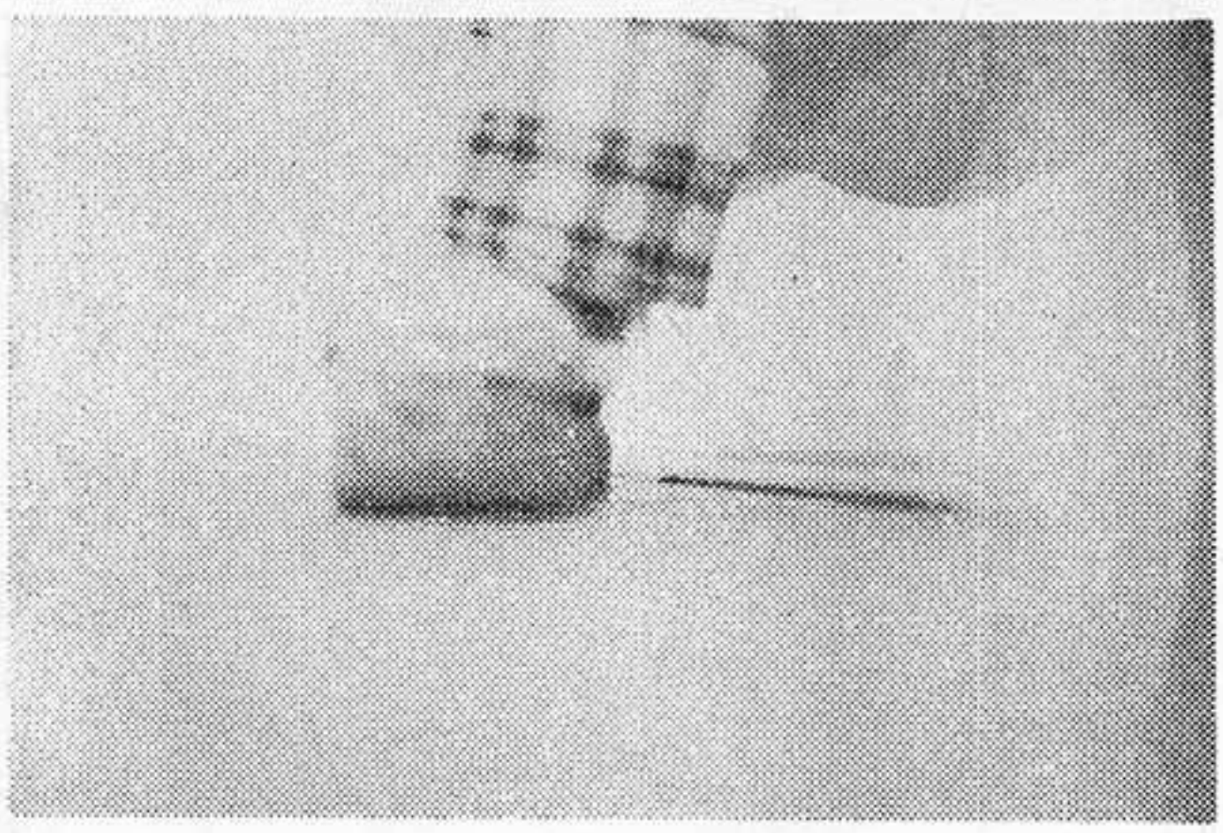


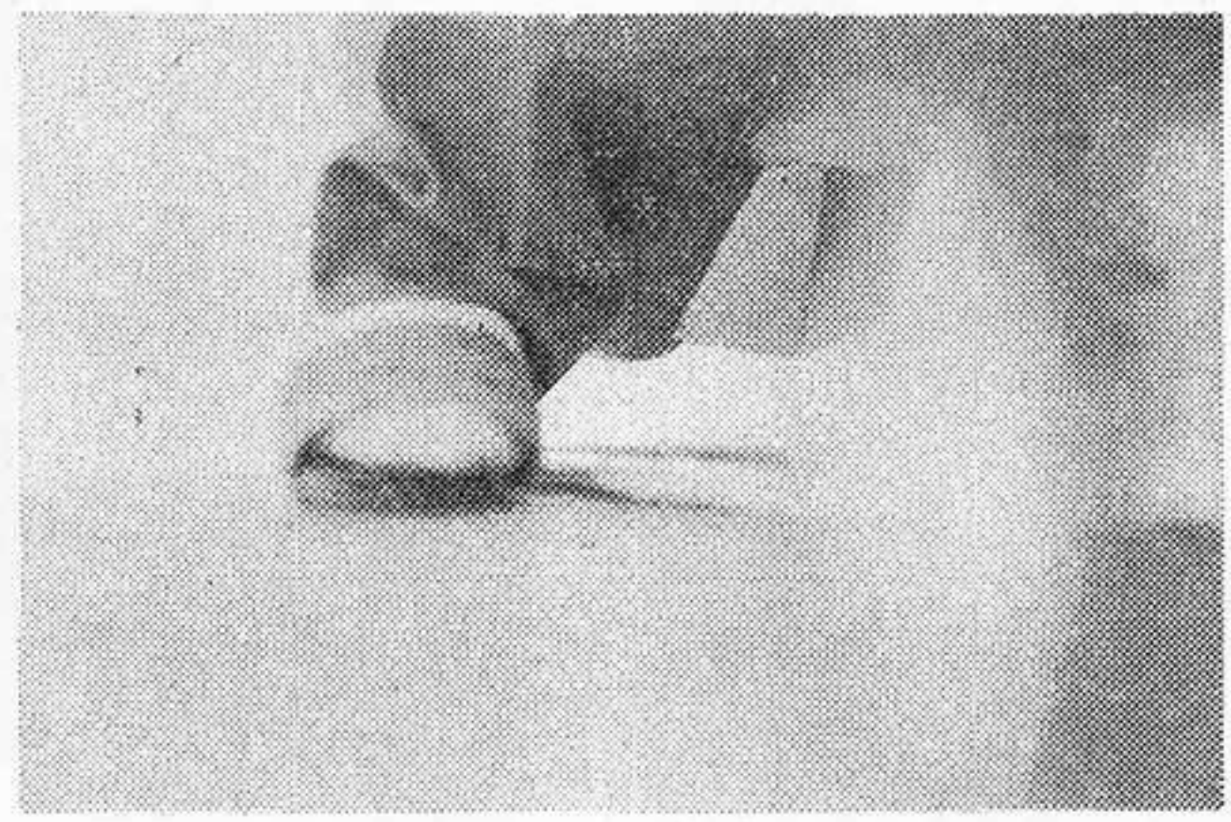
それに、僅かの時間の間に、勝負をしてしまわなければ、一瞬のうちに、シャッター・チャンスを逸してしまうこともあり、それなりに困難なものです。

殊に、自分好みのタイプの女の子なんかのトイレ行きを発見したら、もう胸もわくわく、頭に血がのぼってしまい、どうしても失敗し勝ちです。

〝あわてるなッ！　落着け、落着け〟……と自分自身を叱りつけているつもりですが、カメラを持つ手のヤツが、いつの間にか先走ってしまうという結果が、失敗に繋がるようで、後で悔まれるのが殆







悩ましい自転車

秋野美水

根っからの、いわゆるエッチに出来ているらしい私は、自転車に乗っている女性を見ると、それがおバアちゃんでない限りは全部が美人に見え、俄然働き出す脳活動の作用によって、急にドキドキワクワクを始動させる神経が、ピーンと張りつめてしまうらしいのです。

だから、バイコロジー時代とかいわれる最近の街では、ちょっと立っているだけでも目が疲れ、神経がくたびれることも、よくあるのです。ホントに体に毒です。

ことに、女性の夏は極端なほどの軽装でしょう。超ミニのスカートやショートパンツで、ムチムチした太腿をこれ見よがしに展示してるでしょう。展示する方は涼しいんでしょうが、その展示品に、いとも簡単に、まことに直結的にポーッとさせられる私の方は、まるで灼けつく太陽が二つも三つもに増えたように、心身共に、文字通りカッカッとのぼせてしまいますので、ホントに困ります。

私を〝茹でエッチ〟にしてくれる自転車好きの女性に、私は、私の開発した自転車を贈りたいと思っています。その新型車は、

一、車輪は角張った六角輪。

一、サドルは山型の三角形で両側面に内腿をくすぐるバネ式のケバを植えつける。

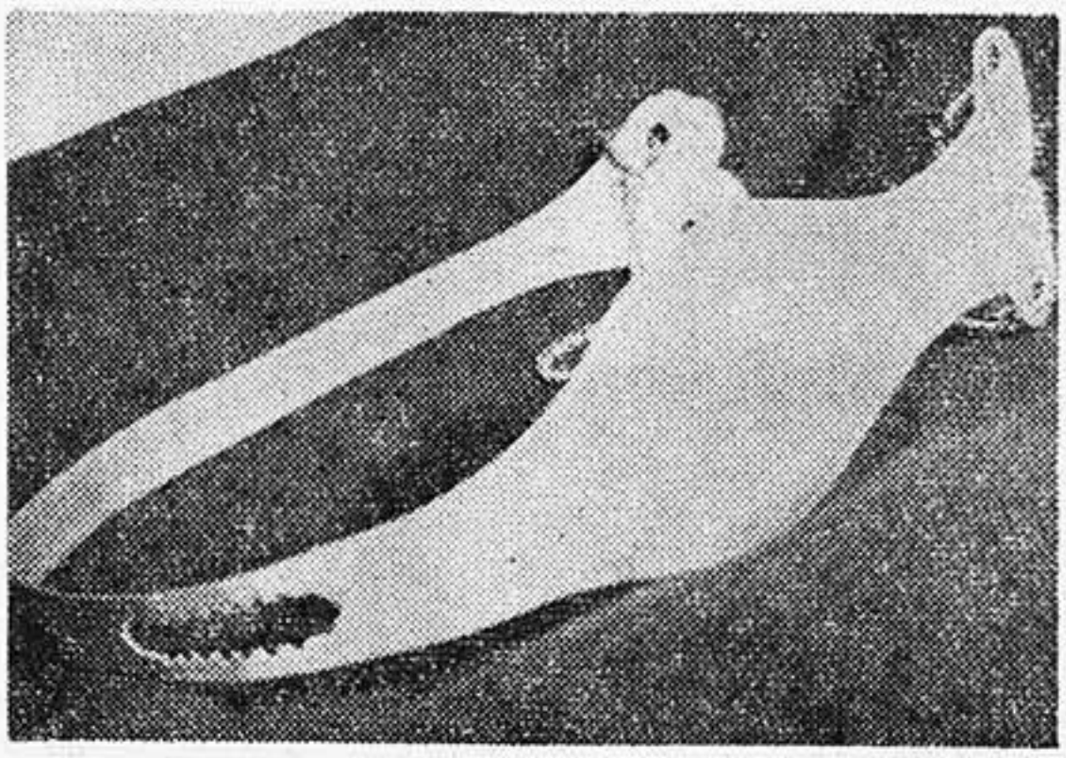
一、ハンドルとペタルに、両手両足首を縛りつけられるようにした固定バンドを付ける。

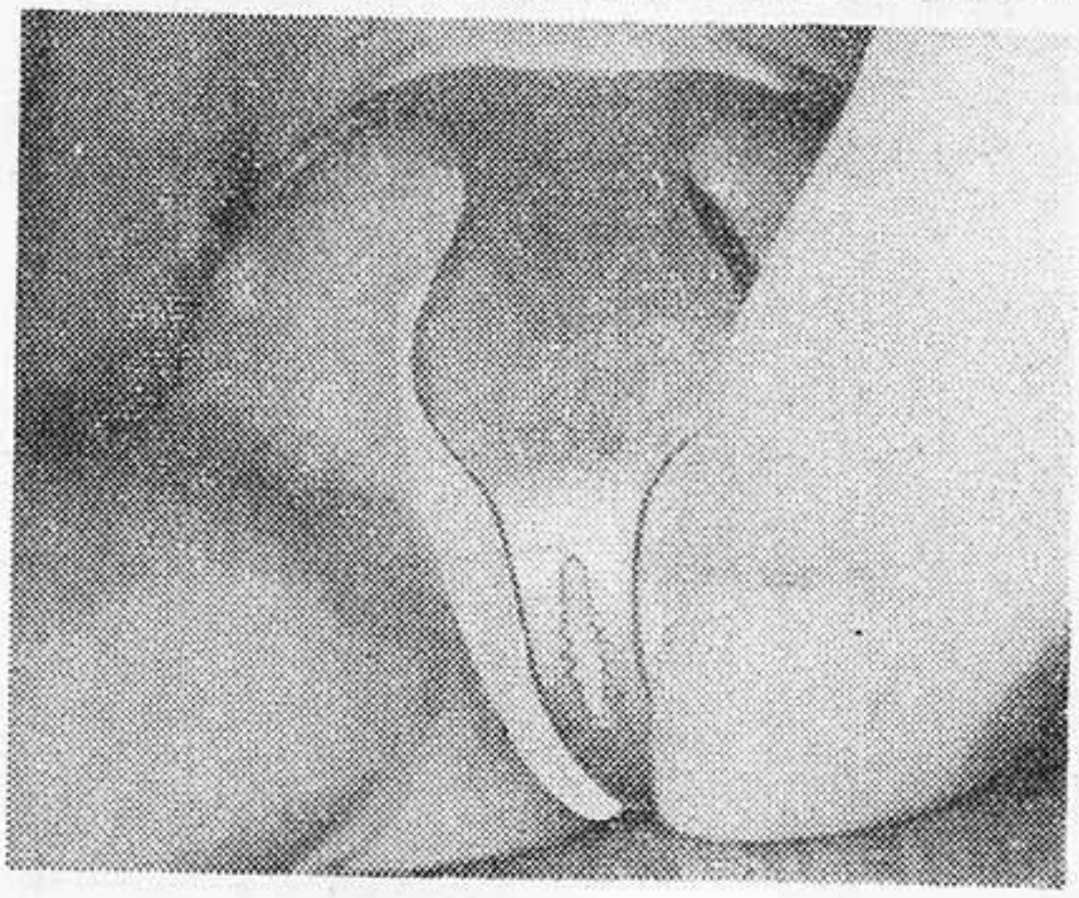
……という、発案です。でも、まだ資本金の関係上、試作品も出来ていないのが残念です。

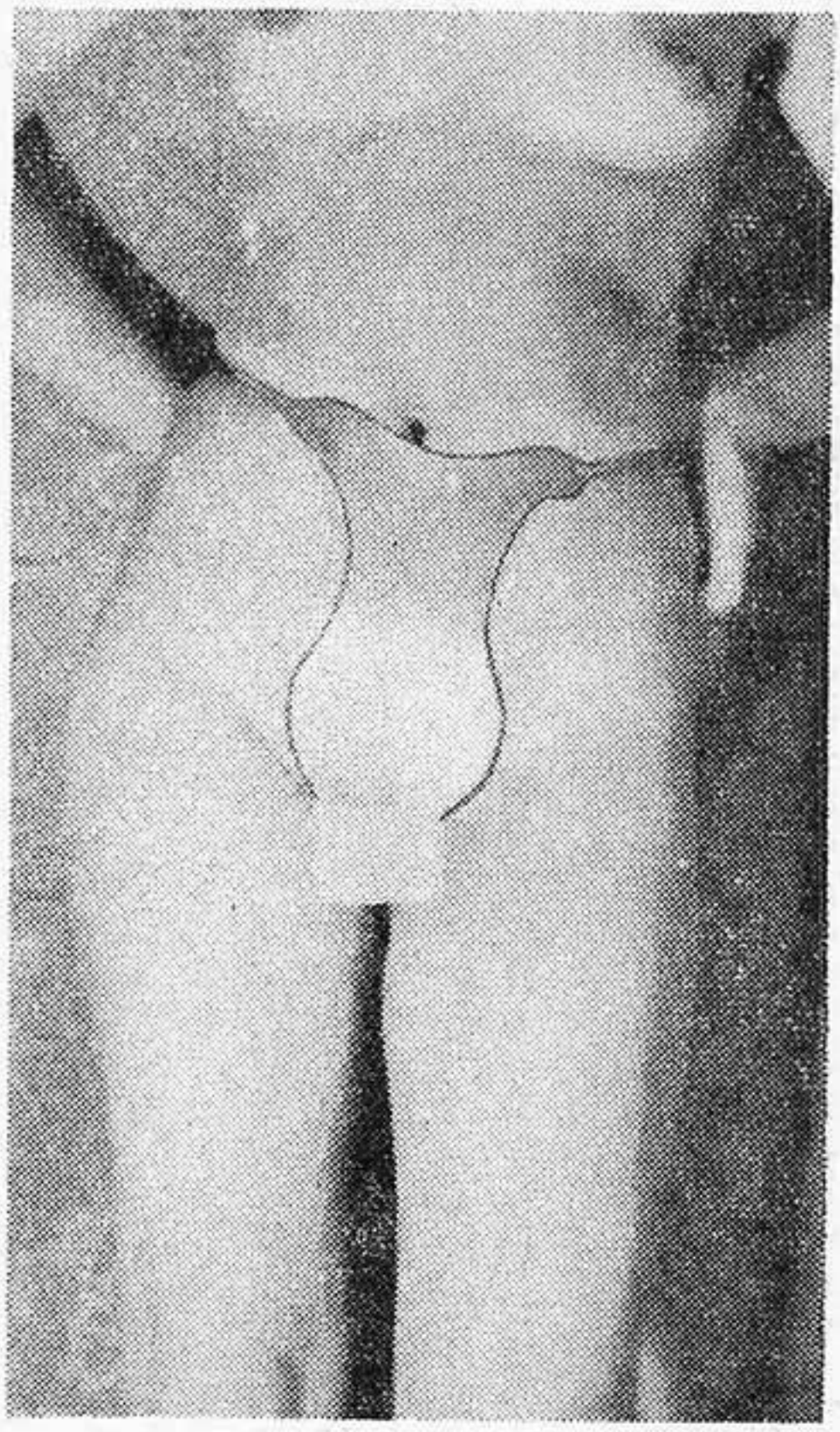
貞操帯の妖しい魅力

河本光三

四月号のこの欄で『SM的女性下着について』拙文を書かせて戴きましたところ、多くの同好的マニアの方々から、いろんなお便りを賜わり大変心強く感じました。SMと女性下着という関係を考えてみますと、これは、なかなか巾広く、奥行きも深いように思います。







この前に申しましたように、SM的女性下着の布地としては、生ゴムの果す役目は非常に大きいものがあります。私は〔女性の下着製作〕という職業柄、いろいろなゴム製下着を作って参りましたがSMプレイに使用する場合は、その効果は絶大なものがあるようです。

今回は、女性のSM的下着の中で、特殊な目的を持ち、しかも、機能的にも、拘束性を必要とする〈貞操帯〉を作製してみました。〈貞操帯〉と言いますのは、既に皆様もご存じのように、十字軍の兵士が、遠く異境へ出陣する際、家に残した妻の貞操を守るために使用したと言われる錠前付きのバ

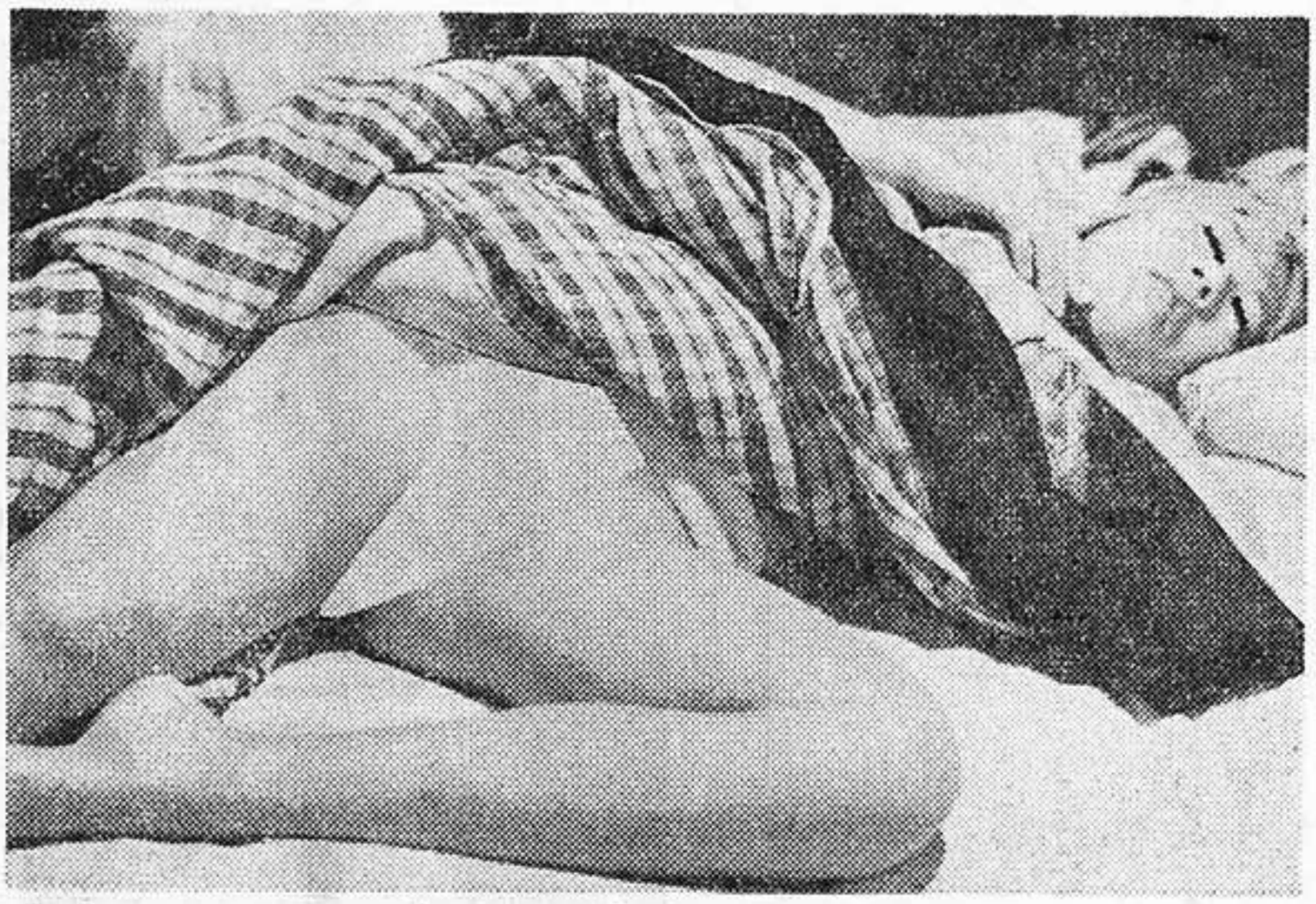
編集部だより

○夫婦SMプレイの真実味溢れる告白と華麗なる夫人の貴写真とで何回となく本誌の誌上を沸かして下さった早坂信治氏が肝臓を害されて過日入院され、最近退院されその全快祝いを兼ねてのプレイ旅行の記事を、夫人の郁子さんから寄せられました。次号のトップには、その美しい姿態をふんだんに御覧にいれることが出来ます。

○南加津子さんのお腹は、ますます大きく膨らんで、まさにパンク寸前、出産前の臨月腹にあえぐ彼女に訊ねたところ快諾を得ましたので、塚本鉄三氏のカメラルポとして特に取材して頂きました。

○先月号のこの欄にて予告しました通り、長谷田亀治氏のSM楽書帳では、〈北欧ポルノ紀行〉として生々しい最近の現地レポートを物して下さいました。時間の許すかぎり、今後も『SM楽書帳』の麗筆を揮って下さるそうなので、大いに期待しましょう。

○塚本鉄三氏の談によれば、限りないSMの深淵に沈潜した木村洋子さんの次の願望は、甲斐千恵子



妻をM女にしたい

沢田路夫

眠っている妻の写真です。ご覧の通り大柄ですどことといって非の打ちどころのない妻ですが、残念ながら私の好むM女でないのが欠点です。

私は、なんとかして妻をMに仕立てて、妻のこの美しいお臀に浣腸をしてやりたいと、いつも思っています。

〝思いっきり足を開かせて、晒しものにしてやりたい。招待するお客は、中年の男性がよいかナ、それとも逞しい青年にしようか。いや、もっと若い少年がいいナ。十五、六才の美少年に、中年期に入った妻のお臀が虐められる。そうだ、少年に浣腸で責めてもらうことと改善の余地があろうかと思います。同好の方々のご意見を承りたいものです。

（兵庫県伊丹局私書箱23号、河本光三）

ンドなのです。その当時の貞操帯の写真を見ますと、革製だったようですが、私は拘束性を重要なポイントにおいてジュラルミンを素材に使ってみました。

冷たい金属性の、鈍く光る輝きは、妖しい貞操帯の魅力を含んでおります。これを鎖と錠前を併用しますと、「女性の貞操を守る」という貞操帯の目的が完全に果たされると思いますが、プレイ用に使用する場合は、まだ、いろいろ

にしよう。妻はどんな表情をするだろう？　きっと羞恥と苦痛と悦虐の呻きやM女としての嬌声が入り混じって部屋中が賑やかになることだろうナ。妻ばかりではなく責める少年も冷静でいられる筈はないから、乱れに乱れることだろうナ。そんな二人の痴態をカメラに納めたい。そして、その二人を並べておいて、思いっきり小便でもひっかけてやりたい。それから私が、ゆっくりと妻を責めあげてやろう。その責めぶりを、少年に撮影してもらいたい……〟

そんなことを夢見ながら、私はいつも真面目で、しっかり者の妻を、どうしたらM女に変身させることが出来るかと、思い悩んでいるのです。諸兄方、よろしくご指導下さい。

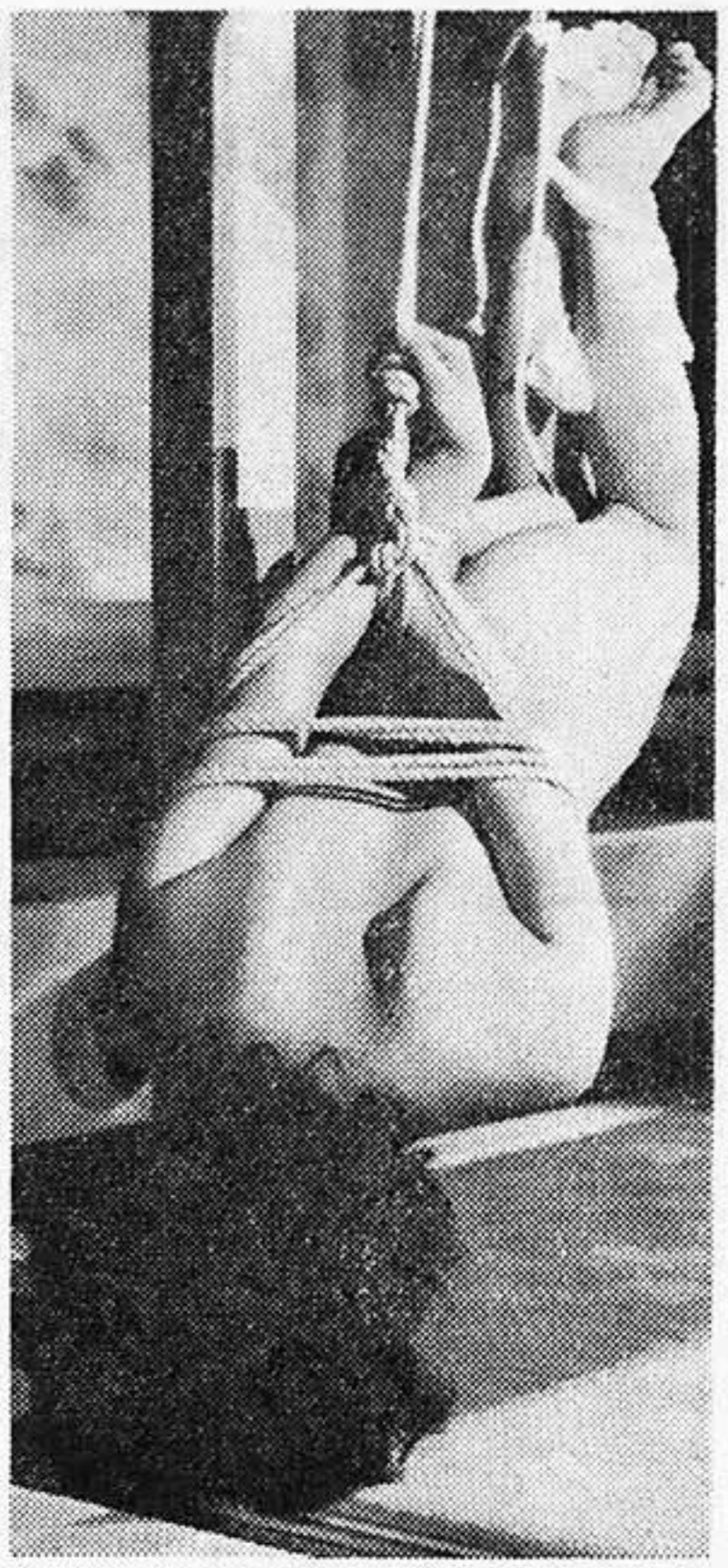
出来ることなら、グラマーな座間明子さんとプレイしたいものだと思いながら、縛りでもない妻の写真を送ります。

さんの提唱される人と犬との交りとか言うことです。そういう場面を、人にも見られたいし、写真にも撮ってほしいと願っているそうです。どなたか、よいアイデアをお持ちの方はいられませんか。

○度々読者通信を寄せられ、そして遂にルポの主人公となり、また自らも告白を書かれた玉木章子さんは、その後も幾度となく便りを寄せられ、次のチャンスを待っているとのこと。どのような目ざましい〈章子のSM生活〉を見せてくれるか、今から楽しみです。

○〔吊り責め〕を強く望んでいる前田真知子さんは、夏の休暇がとれるので上洛を望んでいる由。夏の京は暑いのと、ノースリーブの縄痕を、どう解決するかが気がかりです。交通事故で入院中だった鈴木千鶴子さん、やっと退院して自宅療養中ですが、傷の痕があってヌードになれないとか。浣腸責めなんかで活躍してもらえないでしょうか。再起を望みます。

○春日ルミ女史の告白回顧談は好評でした。引続いて余暇のあり次第、執筆して貰うよう依頼しております。ルミ女史のペンに啓発されてかMの告白や読物の投稿が参りました。次号に載せます。



処女と娼婦の……同居する女……

「僕の心のビーナス真知子」

〈真知子論〉―その前に―

小沢準一

正に世界の女性の美の理想像として、女神ビーナスが存在する如く、僕はSMの世界の女性の美の理想像として、長谷田真知子夫人を掲げるに吝ではない。

「奇ク」8月号、『SM楽書帖』に於いて彼女の立身像を見たときから、僕は長谷田真知子夫人の魅力の虜になってしまった。

まことに、性欲の極致美としてこれに勝るものがあろうか。魅惑に満ちた豊かな乳房、まろやかで瑞々しい肢体、そして、何にもまして、その端正な目鼻だちを持った顔。

処女と娼婦が同居している女性というのは、この長谷田真知子のような人を指すのであろう。

僕のイメージとしては、全裸よりも、下着を付けた女性の方に、より情欲する。

僕は、黒いガードルとストッキングをつけた真知子夫人の写真を切り抜いて、いつも肌身はなさず持ち歩いている。

長谷田真知子夫人は、僕の憧れの女性、否理想像といってよい。そして、何度も何度も、僕のオナペットの対象像として、僕にこよなき快感を与えてくれた彼女。

長襦袢の裾を大きく割って、羞

読者諸兄姉へ――

オムツが欲しい！

――押目好夫――

ある日、ふとした機会に奇クを見て「あっ」と驚きました。それは、今までに考えたことも見たこともなかったオシメフェチ、オシメカバーマニア等の方々が、大勢奇ク読者の中におられるらしいことが窺えたからです。

というのも、私がオムツフェチだからですが、少年の頃よりの性癖で、今でもオムツなしでは一日として生きて行かれないような気持で毎日を過ごしている状態なのです。だから今の私は、オシメとかオシメカバーという言葉を、見たり聞いたりするだけでも、興奮してしまうのです。

私のような変わった人間は、よもや他にはいないだろうと思っていましたので、奇クを見たときには、驚きと一緒に、同じような性癖の持主が他にもいると知った嬉しさと、この安心感。私にとって奇クは、本当に救世主か恩人のような気がします。

それは、今までの暗いじめじめした性の澱みを、奇クが堤を切って一気に流し清めてくれる如く、又、五月晴の大空に吐き出させてくれるが如く、見事に私をコンプレックスから解放してくれたように思うからです。

私の性癖と申しますのは、オムツを当てて排尿する快感を味わうことで、最近は浣腸を覚え、一段と充実したオムツプレイが出来るようになりましたが、根っからのオムツフェチの私ですから、使用回数も多くて、オムツの必要枚数にも事欠くばかりです。

ですが、私は、オムツならなんでもよいという訳ではなく、特定のオムツが必要なのです。それは半年ぐらい、他人（つまり他の家の赤ちゃん）が使用したもので、しかも幼児柄のものでないと駄目なのです。

この二つの条件を備えたオムツこそ、私にとって最高のオムツでして、浴衣や、最近多くなった白地のものには全然魅力を覚えないのです。街を歩いていて、幼児柄や水玉模様のオムツが干されてあるのが目につくと、ノドから手が出そうに欲しくなります。

読者の皆様、お子様の古いオムツがありました、是非、私に譲っ

恥あふれる可憐な表情の写真からは、今にも彼女の喘ぎや悶えの声が聞こえてくるようだ。

☆

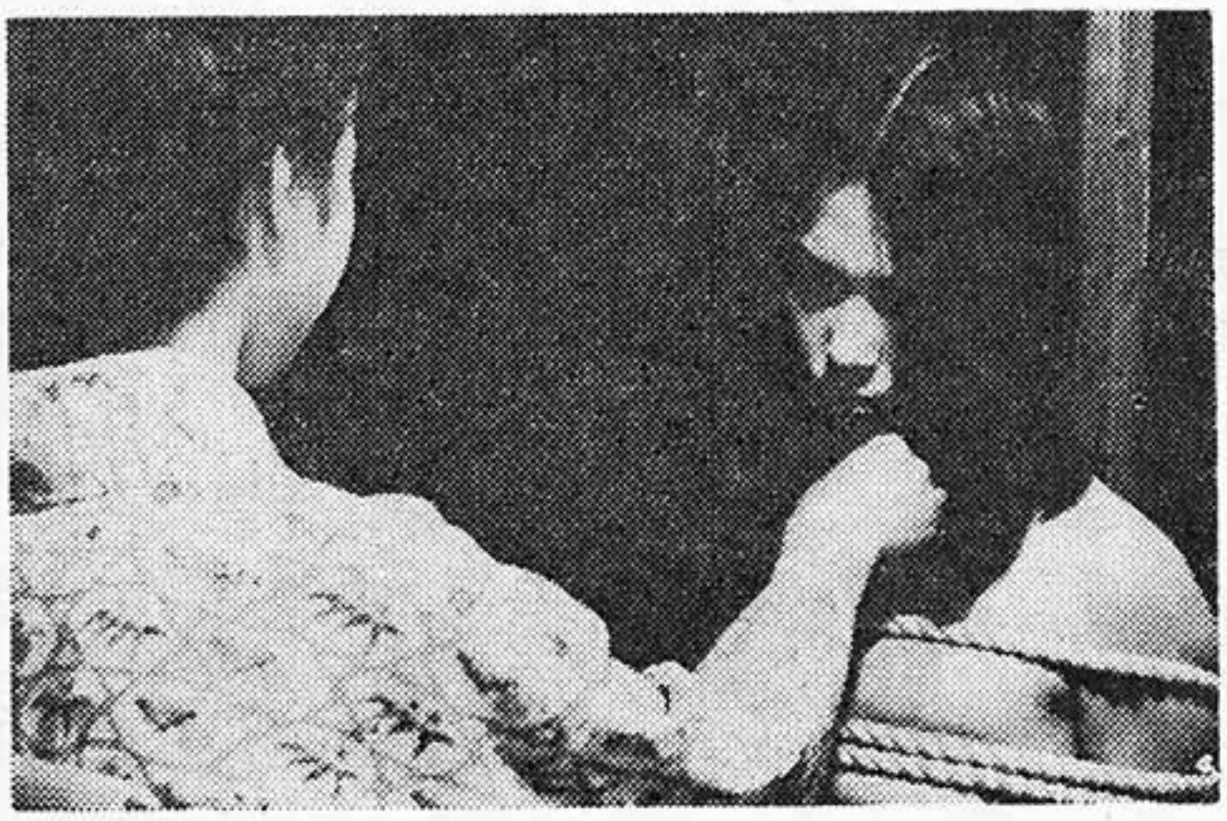
拝啓、長谷田亀治様。
私は二十六才の若輩者です。
奇ク8月号、二〇八ページの奥さまの立姿写真でショックを受けました。『真知子論』を書こうと、志しております。

今回、それに対しての御許可を得たいことと、以後、御無礼致すであろう数々の行動を、お許し願うべく、名のりでました。
どうか、今後とも、誌上にて、奥さまとのプレイのことや、奥様のお写真を是非、発表下さるようお願い致します。　敬具

神奈川県・小沢準一

長谷田亀治様

ムシのよいお願いかも知れませんが、私は他人の使い古したオムツが欲しいのです。新しいものや自分で作ったものでは駄目なのです。勿論、有償で結構ですし送料等の負担もさせて頂きますので、幼児柄のオムツをお持ちの方、是非お願いいたします。
又、マニアの方でご希望があれば、私方にオムツフェチフォト、及びオムツカバーフォトを一〇〇枚ほど所有しておりますので、お譲り頂くオムツの枚数、カバーの品質などによって、交換に差上げることも、お約束出来ます。
読者諸兄姉の御厚情を心からお待ちしますと共に、同好フェチ、オムツマニアの意見発表を期待します。どうかよろしく。



映画『赤い肉』のスチール

映画 テレビ 最近の緊縛シーン 東山映史

最近の映画界で緊縛、責めなどSMシーンの多いのは日活、東映作品だろう。
日活はロマン・ポルノをうたっているが、時代物——とくに大奥ものでは、吊るし責めなどの、女性が女性をいじめるSMシーンをとり入れている。
「**新色歴・愛戯お仕込処**」では可憐な**小川節子**が将軍のお添寝の女中になるが、反対派の策謀で、殺人のぬれぎぬを着せられ吊るし責めの拷問にあう。半裸の白い湯文字一枚で、太縄で後手に緊縛され、吊るされて打たれる。前の二条朱美の吊るし責めのような妖艶さはなかったが美しかった。
新人、**梓ひとみ**の「**昭和おんなみち、裸性門**」では、女郎になった梓の鏡子が、客の取り合いから同僚女郎と喧嘩になり、傷つけて折檻にあう。これも赤い腰巻一枚で、たすき掛け、乳房のまわりも縛られ、後手と腰で吊るされ、打たれる。一寸、駿河責めのような形で、水平になった足をバタつかせるところは、すさまじかった。
東映では**池玲子**、**杉本美樹**の二大ポルノ女優の緊縛比べが、楽しい。
杉本の「**女番長もの**」池の「**猪鹿お蝶もの**」も、シリーズものとして楽しませてくれる。
「**やさぐ姐御伝・総括リンチ**」も楽しみに見たが、池のお蝶が両手吊るしで、麻薬を秘所に入れてこなかったかと探られる。ここも新人女優が池に股ざきの責めにあうのが、いただけた。
テレビでは「**必殺仕置人**」が楽しい。**野川由美子**の〝鉄砲玉のおきん〟が大奥に入って捕えられ、黒い縄で縛られ、責められる。牢で悪同心に、両手をハシゴ縛りにされて打たれるなどなかなかよいシーンを見せてくれる。さすが「肉体の門」のボルネオ・マヤのリンチで売り出しただけある。このときは**三島ゆり子**も捕えられ、ハシゴの両面に二人の美女が縛られて拷問されるオマケも、ついていた。

開股高手小手縛り逆吊り　大手札二枚一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈つほ〉
高手小手縛り逆さ吊り正面　大手札二札一組　四〇〇円
木村　洋子　略号〈つふ〉
髪を引き廻される豊満美女　大手札三枚一組　五〇〇円
関谷富佐子　略号〈ほむ〉
縄目に悶える妖艶な肉体　大手札三枚一組　五〇〇円
関谷富佐子　略号〈ほく〉
股間縛りに喘ぐ刺青女性　大手札三枚一組　五〇〇円
山原　清子　略号〈ほき〉
立縛り髪責めの哀歓　大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈おけ〉
片足吊り上げ羞恥責め　大手札四枚一組　六〇〇円
安井喜久子　略号〈おて〉
猪吊りの滑車責め　大手札四枚一組　六〇〇円
左近麻里子　略号〈ちつ〉
後手吊りにもがく裸女　大手札三枚一組　五〇〇円
川越美佐子　略号〈むた〉
芋虫コロコロ責めの女　大手札四枚一組　六〇〇円
川越美佐子　略号〈むせ〉
ムチ打ちの陶酔境に遊ぶ　大手札三枚一組　五〇〇円
関谷富佐子　略号〈へさ〉
両手吊りで痛めつける肌　大手札四枚一組　六〇〇円
大島　照代　略号〈へし〉

後手縛り竹棒開股責め　大手札四枚一組　六〇〇円
大島　照代　略号〈へす〉
股間縛りに苦悶する乙女　大手札五枚一組　四〇〇円
一宮百合子　略号〈るり〉
髪を引き廻される豊満美女　大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈なに〉
縄目に悶える妖艶な肉体　大手札三枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号〈せな〉
逞ましき臀部の無茶責め　大手札四枚一組　六〇〇円
大島　照代　略号〈せね〉
首枷手枷責めに泣く女　大手札三枚一組　五〇〇円
美木乃々子　略号〈みき〉
豊麗全裸の女体を縛る　大手札四枚一組　六〇〇円
遠藤百合子　略号〈ゆり〉
両手り吊全裸の晒しもの　大手札四枚一組　六〇〇円
金原奈加子　略号〈ゆひ〉
煙草責めに喘ぐホステス　大手札二枚一組　四〇〇円
佐々木真弓　略号〈こぬ〉
海老責めに苦悶する女体　大手札三枚一組　五〇〇円
佐々木真弓　略号〈こお〉
褌の前袋をさらす羞恥　大手札五枚一組　七〇〇円
横尾　峯子　略号〈ふか〉
強烈縛りに悶悦する裸女　大手札三枚一組　五〇〇円
刑部　典子　略号〈けそ〉

強烈エビ責めの美しき女　大手札三枚一組　五〇〇円
松本アサ子　略号〈まと〉
緊縛写真に埋れた緊縛裸女　大手札四枚一組　六〇〇円
大塚　啓子　略号〈けお〉
柱の前に晒す全裸緊縛麗姿　大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号〈はの〉
羞恥責め寸前の妖艶姿態　大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号〈はひ〉
片足吊り上げ縛り　大手札四枚一組　五〇〇円
愛知　葉子　略号〈つお〉
逆さ吊りと足吊り責め　大手札四枚一組　六〇〇円
愛知　葉子　略号〈つよ〉
強烈エビ責め地獄　大手札三枚一組　五〇〇円
玉田美佐子　略号〈ねむ〉
羞恥のアグラ縛りで責める　大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号〈えめ〉
海老縛りで悶える全裸　大手札四枚一組　六〇〇円
金原奈加子　略号〈えひ〉
菱縄縛りの美と愛の表情　大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号〈その〉
コードで柔肌を喰いちぎる　大手札四枚一組　六〇〇円
大島　照代　略号〈しく〉
狙われた和服の娘襲わる　大手札十二枚一組　一五〇〇円
愛川　悦子　略号〈ねい〉

美しき臀部を晒して泣く　大手札四枚一組　六〇〇円
左近麻里子　略号〈つや〉
全裸の刺青女後手強烈縛り　大手札五枚一組　七〇〇円
山原　清子　略号〈けの〉
羞恥の足挙げ御開帳責め　大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号〈これ〉
柔肌にムチは弾けて喘ぐ女　大手札三枚一組　五〇〇円
関谷富佐子　略号〈こな〉
ホステスの爛熟した女体責め　大手札三枚一組　五〇〇円
佐々木真弓　略号〈こち〉
悦虐責めの終着駅　大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号〈こた〉
全裸の強制開股責め　大手札四枚一組　六〇〇円
金原奈加子　略号〈ゆみ〉
陽光に映える裸身の縄目　大手札四枚一組　六〇〇円
左近麻里子　略号〈せい〉
菱縄雁字搦目ヤケクソ縛り　大手札四枚一組　六〇〇円
木村　洋子　略号〈せえ〉
瑞々しい裸身に本縄を許す　大手札四枚一組　六〇〇円
左近麻里子　略号〈せゆ〉
大の字に磔けムチ打つ　大手札四枚一組　六〇〇円
関谷富佐子　略号〈わま〉
淫らな開股羞恥縛り　大手札三枚一組　五〇〇円
一宮百合子　略号〈やす〉

＜最新撮影＞異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態　大手札型印画紙（9×13糎）極鮮明焼付

各組　一枚一組（送料共）

四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

（郵便番号545—91）

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

1 台上に晒す全裸（三浦　純子）
2 開股バイブ責め（三浦　純子）
3 尻挙げ開脚責め（三浦　純子）
4 二つ折り臀挙げ（三浦　純子）
5 麻縄強烈柱縛り（三浦　純子）
6 エビ責め縄猿轡（三浦　純子）
7 海老縛り閨責め（三浦　純子）
8 正面エビ強烈責（三浦　純子）
9 喘ぐ縄猿轡痛め（三浦　純子）
10 痛苦に耐える女（三浦　純子）
11 鴉づかみの黒髪（三浦　純子）
12 二折りの引回し（三浦　純子）
13 開股正面逆立責（三浦　純子）
14 豊満を縛る魔手（座間　明子）
15 沖縄美人の表情（座間　明子）
16 高らかに笑う顔（座間　明子）
17 股間縛りに喘ぐ（座間　明子）
18 美しき全裸縛（座間　明子）
19 後手縛りを誇る（座間　明子）
20 開股縛りに諦観（座間　明子）
21 緊縛に悶える足（座間　明子）
22 白肌をくびる縄（前田真知子）
23 鏡に映るエビ責（前田真知子）
24 全裸の美女に縄（前田真知子）
25 さらけ出した女（前田真知子）
26 絖肌を柱に晒す（前田真知子）
27 首縄菱亀甲縛り（前田真知子）
28 柔肌に喰い込む（前田真知子）
29 裸女を押込める（前田真知子）
30 光に映える白肌（前田真知子）
31 逆反り弓吊り責（前田真知子）
32 責に諦観の美貌（前田真知子）
33 開股責めの序曲（渡部　好美）
34 蝋涙責めに哭く（渡部　好美）
35 悦虐の開股縛り（渡部　好美）
36 閨中の股間縛り（渡部　好美）
37 全裸緊縛の愉悦（渡部　好美）
38 爛熟した女体賓（三浦　純子）
39 ムチ打ちの洗礼（三浦　純子）
40 愛妻飼育の過程（三浦　純子）
41 股間縛りの正面（三浦　純子）
42 海老責に喘ぐ顔（谷山久美子）
43 強烈二折り責め（谷山久美子）
44 赤裸の尻を暴く（谷山久美子）
45 アニマルの表情（谷山久美子）
46 苦痛に反る足指（谷山久美子）
47 極限の苦痛襲う（谷山久美子）
48 悦虐悶えの果て（谷山久美子）
49 緊縛最高の悦楽（谷山久美子）
50 歯で咬んだ猿轡（谷山久美子）
51 責めるの許して（谷山久美子）
52 苦悶の末の頂点（谷山久美子）
53 椅子開股で晒す（谷山久美子）
54 強縛愉悦の極み（谷山久美子）
55 大の字開股縛り（谷山久美子）
56 情容赦ない麻縄（谷山久美子）
57 厳しき後手縛り（谷山久美子）
58 ムチ打ちに泣く（谷山久美子）
59 条痕を尻に残す（谷山久美子）
60 哀憫非情な麻縄（谷山久美子）
61 女性自身を晒す（谷山久美子）
62 柱に二女の連縛（好美・叢子）
63 責め疲れた二女（好美・叢子）
64 全裸の二女陳列（好美・叢子）
65 高手小手を開陳（好美・叢子）
66 椅子開股の二人（好美・叢子）
67 連縛双丘の珍景（好美・叢子）
68 羞恥に悶える女（叢子・好美）
69 美しき床の飾り（叢子・好美）
70 羞らう美女二人（叢子・好美）
71 正面相対の連縛（叢子・好美）
72 股間縛りの併立（叢子・好美）
73 尻も何も丸出し（好美・叢子）
74 捕われの全裸像（渡部・川路）
75 一体にした緊縛（渡部・川路）
76 点火した蝋燭責（渡部・川路）
77 足挙げ正面棒責（川路むら子）
78 棒縛り羞恥責め（川路むら子）
79 三本の棒で拘束（川路むら子）
80 麗しき首縄旅情（前田真知子）
81 伸びやかな肢体（前田真知子）
82 一糸まとわぬ女（前田真知子）
83 灯篭の前で縛る（前田真知子）
84 Mを恋する表情（前田真知子）
85 無垢の肌に麻縄（前田真知子）
86 美は麻縄を超越（前田真知子）
87 白肌と汚れた縄（前田真知子）
88 金髪は縄に動く（シーラケニ）
89 後手縛りで開脚（シーラケニ）
90 両手挙げ美肌晒（シーラケニ）
91 日本式胡坐縛り（シーラケニ）
92 碧眼に驚きの目（シーラケニ）
93 白人の肌を縛る（シーラケニ）
94 金髪碧眼の女性（シーラケニ）
95 高手小手に縛る（シーラケニ）
96 諦観白人の表情（シーラケニ）
97 投げだした全裸（シーラケニ）
98 卓上の一輪の花（シーラケニ）
99 畳の上に転がる（シーラケニ）
100 縛った異国の女（シーラケニ）

浣腸責め地獄の妊産婦
大手札四枚一組　六〇〇円
増田みゆき　略号＜ほな＞

浣腸責めの甘い恐怖
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜とか＞

浣腸液注入直後の状況
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜とま＞

強制浣腸の各美姿態
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜とみ＞

浣腸責めの美態開陳
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜とめ＞

浣腸を待つポーズ
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜とも＞

エネマと縛りの恐怖
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号＜よて＞

エネマ責めの恐怖
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号＜よる＞

浣腸器を弄び愛撫する女
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号＜よろ＞

イルリガートルの浣腸責め
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号＜よた＞

浣腸にむせび泣く女
大手札四枚一組　六〇〇円
大島　照代　略号＜つゆ＞

身動き出来ぬ浣腸地獄
大手札四枚一組　六〇〇円
大島　照代　略号＜つえ＞

浣腸とオシメ装着
大手札四枚一組　六〇〇円
大塚　啓子　略号＜ひそ＞

強制浣腸責めの序曲
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号＜よか＞

襲いくる浣腸器嘴管の先
大手札三枚一組　五〇〇円
長井葉津子　略号＜より＞

鼻孔の奥を探る魔手
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜はむ＞

開孔器にてひらく鼻孔
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜はら＞

なぶられる拘束裸身の鼻
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜はれ＞

仰臥した緊縛女体の鼻なぶり
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜はに＞

美女の鼻をもてあそぶ
大手札三枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号＜ちる＞

美女の鼻孔を観賞する
大手札三枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号＜ちれ＞

開孔器で検査する鼻孔
大手札三枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号＜ちき＞

鼻孔に煙草挿し込み責め
大手札三枚一組　五〇〇円
美木乃々子　略号＜ぬと＞

可愛いい鼻責めのアップ
大手札五枚一組　七〇〇円
美木乃々子　略号＜ぬは＞

強烈縛りで顔面翻弄
大手札八枚一組　一二〇〇円
美木乃々子　略号＜ぬほ＞

可憐乙女の鼻をいたぶる
大手札四枚一組　六〇〇円
一宮百合子　略号＜るえ＞

鼻責めと鼻孔のアップ
大手札三枚一組　五〇〇円
中河　恵子　略号＜ねけ＞

鼻責めの陶酔境
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号＜なは＞

淫虐鼻なぶりの形相
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号＜ない＞

鼻の穴を責める
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号＜なく＞

夫婦連縛にて鼻責め
大手札十枚一組　一五〇〇円
増田みゆき　略号＜らか＞

鼻責めに悶える女
大手札七枚一組　九〇〇円
木村　洋子　略号＜むる＞

顔面を凌辱される女
大手札四枚一組　六〇〇円
木村　洋子　略号＜むよ＞

鼻責めと緊縛
大手札五枚一組　七〇〇円
大塚　啓子　略号＜うい＞

鼻責めによる悦楽
大手札二枚一組　四〇〇円
東浦・大塚　略号＜きな＞

美しき鼻をいたぶる
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号＜ゆは＞

乳房いじめの責め
大手札二枚一組　四〇〇円
大塚　啓子　略号＜とお＞

豊かな乳房を責める
大手札四枚一組　六〇〇円
東浦ひかる　略号＜とき＞

逆エビ吊り責め
大手札六枚一組　一〇〇〇円
梨花悠紀子　略号＜りつ1＞

逆胴吊り責め
大手札六枚一組　一〇〇〇円
梨花悠紀子　略号＜りつ2＞

大の字逆さ吊り
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号＜なは＞

豊満乳房しばり責め
大手札二枚一組　四〇〇円
増田みゆき　略号＜むの＞

吊り打ち責め
大手札三枚一組　五〇〇円
関谷富佐子　略号＜やり＞

腰元の吊り責め
大手札二枚一組　四〇〇円
村井知可子　略号＜こり＞

乳房強調膨隆責め
大手札四枚一組　六〇〇円
木村　洋子　略号＜むよ＞

エネマシリンジ挿入責め
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚　啓子　略号＜こわ＞

ワシづかみ責めの乳房
大手札三枚一組　五〇〇円
大塚・東浦　略号＜えう＞

強烈乳房責め五態
大手札五枚一組　七〇〇円
山原　清子　略号＜てら＞

妊婦資料と妊婦責資料……妊婦のヌードと妊婦の責め写真

未婚の妊婦の両手吊り　大手札　四枚　一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わさ〉

突き出た若妻妊孕美の腹部　大手札　四枚　一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わし〉

麗わしの妊婦責めの魅力　大手札　四枚　一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈おひ〉

身籠った美しき裸身縛り　大手札　四枚　一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈おも〉

裸身縛り恵子の妊孕美　大手札　四枚　一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈おす〉

初妊娠の裸身を羞らう　大手札　四枚　一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈おぬ〉

妊婦全裸の羞恥フォト　大手札　三枚　一組　四〇〇円　安原さゆり　略号〈やま〉

妊婦全裸縛りフォト　大手札　三枚　一組　四〇〇円　安原さゆり　略号〈やむ〉

妊婦の九カ月腹フォト　大手札　三枚　一組　四〇〇円　安原さゆり　略号〈にみ〉

妊娠六カ月のヌード　大手札　三枚　一組　四〇〇円　安原さゆり　略号〈にえ〉

双胎妊婦腹全裸の鑑賞　大手札　二枚　一組　四〇〇円　増田みゆき　略号〈にそ〉

膨満双胎の腹部強調縛り　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈にく〉

妊婦の豊かな乳房と腹部　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈にま〉

羞らいの妊婦媚態をさらす　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ほこ〉

便々たる腹を突き出す妊婦　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ほろ〉

双胎臨月腹の威容を誇る　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りて〉

見事に垂れた太鼓腹開陳　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りな〉

臨月の蛙腹のアップ写真　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りに〉

仰臥する臨月の蛙腹　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りね〉

双胎の臨月の剝玉子腹　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りふ〉

堂々と誇示する双生児腹　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りま〉

素晴しく巨大な臨月の蛙腹　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りは〉

豆絞り猿轡をされた妊婦　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りの〉

蛙腹に腹帯をする妊婦　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りへ〉

臨月妊婦を革具で責める　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りむ〉

全裸の見事な臨月腹を鑑賞　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りす〉

出産間際の垂れた太鼓腹　大手札　三枚　一組　五〇〇円　安原さゆり　略号〈りみ〉

臨月妊婦腹のヌードフォト　大手札　二枚　一組　三〇〇円　安原さゆり　略号〈りく〉

臨月腹の背面ヌードフォト　大手札　二枚　一組　三〇〇円　安原さゆり　略号〈りも〉

膨隆七カ月妊娠腹を見る　大手札　五枚　一組　七〇〇円　増田みゆき　略号〈ひる〉

妊娠七カ月の妊娠線　大手札　五枚　一組　七〇〇円　増田みゆき　略号〈にほ〉

七カ月の妊娠腹大写し　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈にも〉

孕んだ若妻裸身に羞らう　カラー　四枚　一組　一二〇〇円　中河　恵子　略号〈ぬね〉

妊娠七カ月の妊娠線　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ぬち〉

膨隆七カ月妊娠腹を見る　大手札　四枚　一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈ぬへ〉

孕んだ美女の妊婦腹観賞　カラー　四枚　一組　一二〇〇円　中河　恵子　略号〈ぬめ〉

羞恥を晒す女体棒縛り　カラー　三枚　一組　一〇〇〇円　前田真知子　略号〈すそ〉

柔軟肢体二つ折り緊縛　大手札　三枚　一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈ぬに〉

全裸正面の縄掛け艶姿　大手札　三枚　一組　五〇〇円　小池　美喜　略号〈れろ〉

柔肌の高手小手縛り　大手札　三枚　一組　五〇〇円　小池　美喜　略号〈れほ〉

後手首を縛られた全裸体　大手札　三枚　一組　五〇〇円　小池　美喜　略号〈れへ〉

飼育された可憐な美少女　大手札　三枚　一組　五〇〇円　小池　美喜　略号〈れと〉

猿ぐつわ着用全裸縛り　大手札　五枚　一組　七〇〇円　美木乃々子　略号〈ぬへ〉

真紅の腰巻着用縛り　大手札　三枚　一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈ぬち〉

可憐な表情の全裸縛り　大手札　四枚　一組　六〇〇円　金原奈加子　略号〈ゆめ〉

股間縛りの柔肌いじめ　大手札　四枚　一組　六〇〇円　金原奈加子　略号〈ゆも〉

雁字搦目の後手縛り　大手札　四枚　一組　六〇〇円　金原奈加子　略号〈ゆあ〉

浴室での全裸刺青さらし　大手札　五枚　一組　七〇〇円　山原　清子　略号〈よな〉

全裸の高手小手童女縛り　大手札　三枚　一組　五〇〇円　長井葉津子　略号〈よの〉

奇ク活躍若手人気五人娘緊縛写真集

K組百態　大手札印画紙（9×13糎）極鮮明焼付写真

各組一組一枚（送料共）

五組五枚　八〇〇円
十組十枚　一五〇〇円
二十組二十枚　二八〇〇円
五十組五十枚　五〇〇〇円
百組百枚　八〇〇〇円

最近の奇ク誌上に於て口絵或は本文の写真や告白手記などで大活躍している若くて美しいM女たちの印画紙に焼付けたフォトを女体緊縛コレクトマニアの方々の為にお譲りします。この素晴しく迫力に満ちた奇ク独特の華麗な蒐集品を、どうかファンの皆様のお手元で愛して下さるよう願います。

☆

（郵便番号545—91）天星社
大阪市阿倍野局　私書箱14号

1 正面から狙う眼（鈴木千鶴子）
2 引回し股間縛り（深田　菊子）
3 ボリウムを縛る（笠井奈保子）
4 M女なればこそ（高村　浩子）
5 柔肌にむごき縄（深田　菊子）
6 後手足首後吊り（高村　浩子）
7 縄で開股を強要（深田　菊子）
8 臀部と後手縛り（前田真知子）
9 排泄を耐える女（笠井奈保子）
10 椅子開股両足吊（鈴木千鶴子）
11 屋上のいたぶり（前田真知子）
12 臀部を晒す緊縛（笠井奈保子）
13 高々と後手縛り（鈴木千鶴子）
14 首縄に泣く屋上（前田真知子）
15 美女両脚柱縛り（深田　菊子）
16 豊満な尻部責め（深田　菊子）
17 惨美貌の羞らい（深田　菊子）
18 猪宙吊りの浩子（高村　浩子）
19 棒責めにあえぐ（鈴木千鶴子）
20 美へ与える汚辱（前田真知子）
21 縦縄に呻く女体（深田　菊子）
22 白き裸身の縄目（笠井奈保子）
23 両足吊浣腸姿態（鈴木千鶴子）
24 閨での羞恥責め（深田　菊子）
25 正座しての懇願（前田真知子）
26 仕置と折檻の果（高村　浩子）
27 奴隷の誓い宣言（笠井奈保子）
28 菱縄縛りに喘ぐ（笠井奈保子）
29 強烈な股間縛り（鈴木千鶴子）
30 総てをさらして（前田真知子）
31 片足挙げ柱縛り（深田　菊子）
32 全身に喰込む縄（高村　浩子）
33 宙に浮いた苦痛（鈴木千鶴子）
34 もっと股を開け（笠井奈保子）
35 転がされた女体（笠井奈保子）
36 形よきお臍悦情（深田　菊子）
37 そんなのはイヤ（前田真知子）
38 喰込む股間縛り（高村　浩子）
39 菱縄正面髪摑み（鈴木千鶴子）
40 両足吊り逆エビ（高村　浩子）
41 縄束の中の折檻（深田　菊子）
42 乳房強調の猿轡（笠井奈保子）
43 責め抜かれた果（鈴木千鶴子）
44 全裸の緊縛正坐（笠井奈保子）
45 階段に呻く女体（深田　菊子）
46 後手縛りの模範（深田　菊子）
47 両足首逆さ緊縛（深田　菊子）
48 階段で逆立縛り（深田　菊子）
49 責めに反る拇指（前田真知子）
50 豊満な全裸縛り（笠井奈保子）
51 プロポーション（鈴木千鶴子）
52 羞恥を晒す女体（深田　菊子）
53 海老責二つ折り（高村　浩子）
54 正面開股菱縄縛（深田　菊子）
55 白肌に喰入る縄（前田真知子）
56 尻立てアヌス責（深田　菊子）
57 竹と棒責め地獄（前田真知子）
58 豊隆乳房へ責め（高村　浩子）
59 海老棒責めの惨（鈴木千鶴子）
60 羞恥股裂き責め（前田真知子）
61 高々棒吊り両足（深田　菊子）
62 正面片足引上げ（前田真知子）
63 強烈麻縄の魔力（笠井奈保子）
64 二ツ折りの仕置（鈴木千鶴子）
65 猿ぐつわの表情（笠井奈保子）
66 逆片足エビ責め（前田真知子）
67 厳重な後手縛り（笠井奈保子）
68 反り返った女体（鈴木千鶴子）
69 縛りに放心状態（笠井奈保子）
70 美を汚辱する時（前田真知子）
71 片足吊りの正面（深田　菊子）
72 乳房強調の縛り（深田　菊子）
73 片足吊りの序曲（笠井奈保子）
74 縄で攻める開股（深田　菊子）
75 縄痕むごし柔肌（前田真知子）
76 淫らな羞恥責め（鈴木千鶴子）
77 開股を攻める縄（高村　浩子）
78 放置された縛体（笠井奈保子）
79 憂愁の美女緊縛（深田　菊子）
80 足挙げ開股責め（深田　菊子）
81 猿轡苦痛の表情（笠井奈保子）
82 悦虐に泣く乳房（高村　浩子）
83 責められた悦楽（鈴木千鶴子）
84 屋上の引き回し（前田真知子）
85 写真マニアの顔（笠井奈保子）
86 臀部突立足縛り（深田　菊子）
87 気懶るき責の宴（鈴木千鶴子）
88 さあ立たないか（前田真知子）
89 棒縛り開脚責め（深田　菊子）
90 人身御供の裸身（笠井奈保子）
91 悶えに悶えた末（鈴木千鶴子）
92 痛いから許して（前田真知子）
93 乳房責と股間縛（高村　浩子）
94 諦観の晒しもの（笠井奈保子）
95 階段で開く両脚（深田　菊子）
96 強制された開股（笠井奈保子）
97 顔を向けないか（前田真知子）
98 大の字開股責め（深田　菊子）
99 美しき縛り表情（深田　菊子）
100 豊かさを縛る縄（笠井奈保子）

血紅女体切腹絶命ポーズ
大手札四枚一組 六〇〇円
梨花悠紀子 略号＜せん＞

女体切腹シリーズ
大手札12枚一組 一八〇〇円
大塚啓子 略号＜せい12＞

血紅切腹祭壇に果てる女体
大手札三枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号＜せぬ＞

首桶に落ちる女の首
大手札三枚一組 五〇〇円
水野加代子 略号＜せへ＞

愛妻の切腹を介添えする
大手札三枚一組 五〇〇円
水野加代子 略号＜せほ＞

切腹する女体を介錯する
大手札三枚一組 五〇〇円
水野加代子 略号＜せは＞

血紅使用介添え切腹
大手札五枚一組 八〇〇円
大塚・東浦 略号＜きつ＞

介添え切腹の女
大手札四枚一組 六〇〇円
甘木春子 略号＜あか＞

自刃した血まみれ屍体
大手札10枚一組 一五〇〇円
山原清子 略号＜えし＞

自らの腹を切り裂く女
大手札三枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号＜やい＞

自ら柔肌を切り裂く場面
大手札三枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号＜やえ＞

自らの下腹に突き刺す刃
大手札三枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号＜やお＞

血紅女体切腹苦悶悦楽表情
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚啓子 略号＜くえ＞

哀婉美女の血紅切腹
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚啓子 略号＜るな＞

絞首刑に果てる女体
大手札二枚一組 四〇〇円
新宮夫人 略号＜るく＞

引回しと晒の処刑
大手札二枚一組 四〇〇円
新宮夫人 略号＜るに＞

血紅使用血まみれ切腹
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚啓子 略号＜わい＞

殿中の自決女体切腹
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚啓子 略号＜わこ＞

切腹美態から絶命ポーズへ
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚啓子 略号＜わは＞

女体自刃の美態
大手札三枚一組 五〇〇円
細川アヤ子 略号＜ねに＞

女体切腹媚態
大手札二枚一組 四〇〇円
細川アヤ子 略号＜ねは＞

肉体美少女全裸切腹
大手札五枚一組 七〇〇円
長野良子 略号＜なせ＞

褌裸女血斗凄惨場面
大手札五枚一組 七〇〇円
絹川・大塚 略号＜らは＞

和洋争斗場面展開
大手札六枚一組 八〇〇円
田中・愛川 略号＜らり＞

血紅使用斬られる美女
大手札七枚一組 一〇〇〇円
絹川文代 略号＜らふ＞

鎌腹を切られる女
大手札二枚一組 四〇〇円
愛川・田中 略号＜らく＞

咽喉笛を刺される女
大手札二枚一組 四〇〇円
愛川・田中 略号＜らみ＞

斬首の瞬間
大手札三枚一組 五〇〇円
新宮夫人 略号＜のき＞

晒台の女の生首
大手札三枚一組 五〇〇円
新宮夫人 略号＜のく＞

全裸正面切腹姿態
大手札三枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号＜のそ＞

切腹した裸女の屍体
大手札三枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号＜のみ＞

切腹に悶える悦虐裸身
大手札三枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号＜のい＞

美しき裸女の屍体
大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号＜のり＞

屠腹される女体
大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚啓子 略号＜のる＞

立腹切腹に悶える女体
大手札10枚一組 一八〇〇円
大塚啓子 略号＜のさ＞

切腹に苦悶する裸女
大手札10枚一組 一八〇〇円
大塚啓子 略号＜のむ＞

絞首された女体
大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号＜のひ＞

斬首処刑場面
大手札二枚一組 四〇〇円
新宮夫人 略号＜くし＞

絞首刑にされる女
大手札三枚一組 五〇〇円
新宮夫人 略号＜こけ＞

血まみれ血斗場面
大手札12枚一組 二〇〇〇円
山原清子外 略号＜えみ＞

ゴムフェチの美体
大手札四枚一組 六〇〇円
梨花悠紀子 略号＜こま＞

ゴム包みの束縛女体
大手札四枚一組 六〇〇円
東浦ひかる 略号＜こは＞

メンスバンド只今着用
大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号＜もか＞

白褌刺青女体脇差切腹
大手札10枚一組 一八〇〇円
山原清子 略号＜ひに＞

白褌刺青女体短刀切腹
大手札10枚一組 一八〇〇円
山原清子 略号＜ひぬ＞

ゴム衣着用緊縛
大手札三枚一組 五〇〇円
水本茂美 略号＜みす＞

メンスバンドを脱ぐ女
大手札三枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号＜ゆお＞

月経帯を着けた緊縛
大手札三枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号＜ゆす＞

両足首括り逆さ吊り
大手札五枚一組　八〇〇円
梨花悠紀子　略号＼さか＼

手足逆さ宙吊り
大手札五枚一組　八〇〇円
梨花悠紀子　略号＼さと＼

逆さ吊りの女体を析檻
大手札五枚一組　八〇〇円
梨花悠紀子　略号＼させ＼

メンスバンド着用替ゴム見せ
大手札五枚一組　七〇〇円
東浦ひかる　略号＼へみ＼

股に喰い込む黒フンドシ
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼とし＼

股を開いた黒フンドシ姿
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼とひ＼

開股逆さ吊り姿態
大手札三枚一組　五〇〇円
左近麻里子　略号＼ちて＼

褌美・表と裏の二態
大手札二枚一組　四〇〇円
左近麻里子　略号＼ちけ＼

強烈責め被虐の果て
大手札五枚一組　八〇〇円
梨花悠紀子　略号＼りお＼

踊り子の美しき緊縛
大手札三枚一組　五〇〇円
絹川　文代　略号＼りこ＼

股間縛りの法悦境
大手札三枚一組　五〇〇円
絹川　文代　略号＼ぬこ＼

相撲褌着用の艶姿
大手札12枚一組　一八〇〇円
美木乃々子　略号＼ぬわ＼

六尺褌着用の艶姿
大手札七枚一組　一〇〇〇円
美木乃々子　略号＼ぬお＼

パリスSSバンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼おこ＼

サカエメンスバンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼おえ＼

サカエ軽便型バンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼おた＼

バリスメンスバンド前開き
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼おい＼

携帯用白色メンスバンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼おか＼

バリスバンド着用縛り
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼おは＼

パピアメンスバンド着用
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼おし＼

相撲褌を締めた女
大手札五枚一組　七〇〇円
東浦ひかる　略号＼そい＼

メンスバンド着用開股ポーズ
大手札三枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号＼つん＼

黒ゴム衣後手縛リ
大手札三枚一組　五〇〇円
木村　洋子　略号＼なほ＼

ゴム衣緊縛悶悦姿態
大手札五枚一組　七〇〇円
木村　洋子　略号＼なへ＼

ゴム衣とゴムの猿ぐつわ
大手札三枚一組　五〇〇円
木村　洋子　略号＼なと＼

甘美なる椅子プレイ
大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号＼なあ＼

開股拷問椅子の正面責め
大手札四枚一組　六〇〇円
中河　恵子　略号＼なた＼

オムツ着用の股間縛り
大手札四枚一組　六〇〇円
東浦ひかる　略号＼むく＼

オムツ着用フェチフォト
大手札七枚一組　一〇〇〇円
大塚　啓子　略号＼むね＼

オシメをつける二人プレイ
大手札六枚一組　一〇〇〇円
山原・東浦　略号＼むし＼

ゴムのオムツカバー強制着用
大手札六枚一組　一〇〇〇円
山原・東浦　略号＼むに＼

生ゴムの猿ぐつわ責め
大手札四枚一組　五〇〇円
木村　洋子　略号＼むこ＼

オシメ着用と女学生
大手札七枚一組　一〇〇〇円
大塚　啓子　略号＼うえ＼

六尺フンドシの女性像
大手札四枚一組　六〇〇円
関谷富佐子　略号＼くろ＼

黒フンドシを着用した女
大手札四枚一組　六〇〇円
大塚　啓子　略号＼くふ＼

黒フンドシの女（背面）
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号＼くう＼

黒フンドシの女（正面）
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号＼くま＼

黒フンドシを誇る姿
大手札三枚一組　五〇〇円
遠藤百合子　略号＼くわ＼

黒フンドシ背面刺青模様
大手札三枚一組　五〇〇円
山原　清子　略号＼くこ＼

黒フンドシ入墨姿
大手札三枚一組　五〇〇円
山原　清子　略号＼くの＼

黒ふんどし媚態の魅力
大手札五枚一組　七〇〇円
山原　清子　略号＼くな＼

白晒六尺フンドシの姿態
大手札五枚一組　七〇〇円
刑部　典子　略号＼けす＼

黒六尺フンドシを締めた女
大手札五枚一組　七〇〇円
刑部　典子　略号＼けせ＼

フンドシ姿の羞らい
大手札三枚一組　五〇〇円
栗本　ミチ　略号＼ふへ＼

フンドシ姿の女の魅力
大手札三枚一組　五〇〇円
栗本　ミチ　略号＼ふの＼

六尺褌の羞じらい
大手札五枚一組　七〇〇円
横尾　峯子　略号＼ふけ＼

双臀に喰い込む褌
大手札五枚一組　七〇〇円
横尾　峯子　略号＼ふく＼

褌美に羞じらう女
大手札六枚一組　八〇〇円
玉田美佐子　略号＼こん＼

最近撮影の新人新趣向緊縛責め写真集

SM組百態 大手札印画紙（9×13糎）極鮮明焼付写真

各組 一組一枚（送料共）

五組五枚 八〇〇円
十組十枚 一五〇〇円
二十組二十枚 二八〇〇円
五十組五十枚 五〇〇〇円
百組全部百枚 八〇〇〇円

（郵便番号 545-91）天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

奇クの誌上を賑わしている新しいマゾ女性の方が、清純に或は妖艶に、それぞれその個性にマッチした縛られ方責められ方をされて甘い吐息を洩しています。マニアの方の蒐集帖の一頁に更に新鮮な資料を加えて頂きたく、ここにSMの香ぐわしい魅力に溢れるニューフォトを提供いたします。

☆

1 片足吊りに喘ぐ（玉木章子）
2 柱に晒す全裸女（玉木章子）
3 猿轡に呻く縛女（玉木章子）
4 開股縛りの片足（玉木章子）
5 菱縄縛りに泣く（玉木章子）
6 右足挙げ柱縛り（玉木章子）
7 日陰の女の羞恥（玉木章子）
8 開股責めの正面（玉木章子）
9 八の字開脚責め（玉木章子）
10 乳房縛り真正面（玉木章子）
11 開股縛りの強要（玉木章子）
12 正座正面晒縛り（玉木章子）
13 バイブ責め姿態（玉木章子）
14 絶叫！開脚責め（玉木章子）
15 手吊り足吊り責（玉木章子）
16 臀部からの苛虐（玉木章子）
17 正面で足を開く（玉木章子）
18 卓上の開股痴態（玉木章子）
19 縄は女を泣かす（玉木章子）
20 強烈縛りに開脚（玉木章子）
21 強烈海老責縛り（江口淑子）
22 鞭打ちにもがく（江口淑子）
23 強制する開股責（江口淑子）
24 辱恥をさらける（江口淑子）
25 奴隷の誓を開陳（江口淑子）
26 排泄姿態の強制（江口淑子）
27 耐久カガシ責め（江口淑子）
28 排便姿態で縛る（江口淑子）
29 欄間に晒す開股（江口淑子）
30 笞で強要の汚辱（江口淑子）
31 縄の痛さに泣く（鈴木千鶴子）
32 浣腸にのけぞる（鈴木千鶴子）
33 凄絶海老なぶり（鈴木千鶴子）
34 大の字開脚晒し（鈴木千鶴子）
35 棒責め裸女失神（鈴木千鶴子）
36 両足首開脚吊り（鈴木千鶴子）
37 全裸手吊り正面（鈴木千鶴子）
38 エビ責にあえぐ（鈴木千鶴子）
39 艶美椅子に悶ゆ（鈴木千鶴子）
40 全裸緊縛浣腸責（鈴木千鶴子）
41 足の裏の温い女（深田菊子）
42 亀甲縛乳房責め（深田菊子）
43 足を吊るのは嫌（深田菊子）
44 強制開股椅子責（深田菊子）
45 交叉した手首結（深田菊子）
46 伸びやかな肢体（深田菊子）
47 のけぞる両の足（深田菊子）
48 開股で見ないで（深田菊子）
49 縄猿轡海老責め（三浦純子）
50 令夫人緊縛横顔（三浦純子）
51 引回された裸女（福井桃子）
52 色気発散の脚線（福井桃子）
53 さあどうするの（福井桃子）
54 寝乱れたマダム（福井桃子）
55 臀部晒し柱縛り（福井桃子）
56 高手小手臀部晒（福井桃子）
57 長髪の美女緊縛（福井桃子）
58 縛られてお喋り（福井桃子）
59 縄が痛いんだよ（福井桃子）
60 高々と上る手首（福井桃子）
61 ボリウムを括る（笠井奈保子）
62 逞ましき臀部責（笠井奈保子）
63 太股に喰込む縄（笠井奈保子）
64 飛出す乳房責め（笠井奈保子）
65 柔肌に喰込む縄（笠井奈保子）
66 豊満臀部鞭打ち（笠井奈保子）
67 首縄高手小手縛（笠井奈保子）
68 縄の束に埋れる（笠井奈保子）
69 全裸手吊り正面（鈴木千鶴子）
70 エビ責にあえぐ（鈴木千鶴子）
71 艶美椅子に悶ゆ（鈴木千鶴子）
72 全裸緊縛浣腸責（鈴木千鶴子）
73 足の裏の温い女（深田菊子）
74 亀甲縛乳房責め（深田菊子）
75 足を吊るのは嫌（深田菊子）
76 強制開股椅子責（深田菊子）
77 交叉した手首結（深田菊子）
78 伸びやかな肢体（深田菊子）
79 のけぞる両の足（深田菊子）
80 開股で見ないで（深田菊子）
81 縄猿轡海老責め（三浦純子）
82 令夫人緊縛横顔（三浦純子）
83 引回された裸女（福井桃子）
84 色気発散の脚線（福井桃子）
85 さあどうするの（福井桃子）
86 寝乱れたマダム（福井桃子）
87 臀部晒し柱縛り（福井桃子）
88 高手小手臀部晒（福井桃子）
89 長髪の美女緊縛（福井桃子）
90 縛られてお喋り（福井桃子）
91 縄が痛いんだよ（福井桃子）
92 高々と上る手首（福井桃子）
93 ボリウムを括る（笠井奈保子）
94 逞ましき臀部責（笠井奈保子）
95 太股に喰込む縄（笠井奈保子）
96 飛出す乳房責め（笠井奈保子）
97 柔肌に喰込む縄（笠井奈保子）
98 豊満臀部鞭打ち（笠井奈保子）
99 首縄高手小手縛（笠井奈保子）
100 縄の束に埋れる（笠井奈保子）

開股強制を拒む（笠井奈保子）
喰い込む股間責（笠井奈保子）
美少女逆エビ責（前田真知子）
足吊りくの字指（前田真知子）
股間縛りで開脚（前田真知子）
交差した後手首（前田真知子）
強烈股間縄涕泣（三浦純子）
バイブ責で悶絶（松本たえ）
高々と後手縛り（松本たえ）
強烈海老開股責（松本たえ）
柱縛り正面晒し（松本たえ）
後手両手逆吊り（松本たえ）
責められた乱髪（大塚啓子）
後手縛片足吊り（大塚啓子）
全裸柱抱き縛り（大塚啓子）
太ロープ首縄責（大塚啓子）
麻縄亀甲綾縛り（荒尾慶子）
喰込む縄股間縛（荒尾慶子）
首縄縦縛り正面（荒尾慶子）
強烈緊縛で絶頂（荒尾慶子）
美体乳房強調縛（荒尾慶子）
股間縛りの麗姿（荒尾慶子）
海老責浣腸地獄（長井葉津子）
後手吊の全裸晒（長井葉津子）
迫るイルリ嘴管（長井葉津子）
素人娘緊縛全裸（長井葉津子）
浣腸責めの恐怖（長井葉津子）
半減した浣腸液（長井葉津子）
稚き臀部を開く（長井葉津子）
麻縄縛りの正面（長井葉津子）
注ぎ込まれる液（長井葉津子）
洋裁生のM姿態（長井葉津子）

〔秘蔵版写真一掃分譲品〕

昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天星社に於て分譲しておりましたSM資料写真は、その後、最分譲中止になっておりましたが、近になって再開を強く要望されておりますので特に希望者に限り増をいたします。御注文の方には焼て五日間位の予定で作成の上、早速は焼付申上げます。

〈Mフォト〉

馬乗り女王様行状記　大手札四枚一組　一〇〇〇円　花田沙登子　略号〈わふ〉

両足の首絞め責め　大手札三枚一組　八〇〇円　花田沙登子　略号〈わむ〉

肩車の臀部に喘ぐ　大手札三枚一組　八〇〇円　花田沙登子　略号〈わら〉

女王様の臀臭をかがす　大手札二枚一組　六〇〇円　花田沙登子　略号〈わけ〉

足舐めの強制　大手札三枚一組　八〇〇円　花田沙登子　略号〈わな〉

女王様の牡犬調教　大手札八枚一組　一五〇〇円　花田沙登子　略号〈わね〉

〈入墨女賊拷問刑罰集〉

女賊仰向け木馬責め　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よひ〉

全裸の入墨女賊折檻　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よせ〉

入墨女笞打ち白洲糾問　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よゆ〉

ハリツケ女賊拷問　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よめ〉

凄絶エビ責め拷問　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よす〉

全裸の四つ這い木馬責　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よも〉

逆さ吊りのお仕置　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よき〉

大の字磔女賊処刑　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よた〉

凄絶エビ責め拷問　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よめ〉

全裸の四つ這い木馬責　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よす〉

逆さ吊りのお仕置　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よも〉

大の字磔女賊処刑　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よき〉

三角木馬責め　大手札三枚一組　五〇〇円　山原　清子　略号〈よさ〉

〈日本女性拷問刑罰集〉

石抱き算盤責め　大手札三枚一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈もと〉

凄惨女囚海老責め　大手札三枚一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈もに〉

女囚竹棒羞恥責め　大手札三枚一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈もち〉

白洲笞打ち折檻　大手札三枚一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈もほ〉

非情の囚女開股責め　大手札三枚一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈もへ〉

凄惨女囚海老責め　大手札三枚一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈まむ〉

汚臭と足舐めの強要　大手札十二枚一組　三〇〇〇円　山原・大塚　略号〈まめ〉

痛烈、ムチ打ちのご馳走　大手札十二枚一組　三〇〇〇円　大塚・山原　略号〈まね〉

首絞めでM男に止どめを刺す　大手札十二枚一組　三〇〇〇円　山原・大塚　略号〈まむ〉

男馬を乗り潰す裸女二人　大手札十二枚一組　三〇〇〇円　山原・大塚　略号〈まも〉

美女二人から縛られる男　大手札十二枚一組　三〇〇〇円　大塚・山原　略号〈まれ〉

二女にいじめられるM男　大手札十二枚一組　三〇〇〇円　山原・大塚　略号〈まも〉

裸女二人の尻の下にうごめく　大手札十二枚一組　三〇〇〇円　大塚・山原　略号〈まふ〉

〈M写真M場面決定版〉

白洲調べに悶える囚女　大手札三枚一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈もは〉

土壇で胴斬りの仕置　大手札三枚一組　五〇〇円　美木乃々子　略号〈もり〉

パンプスの下に喘ぐM男　大手札十枚一組　二〇〇〇円　大塚　啓子　略号〈わそ〉

二女の臀臭にむせび泣く男　大手札十二枚一組　三〇〇〇円　山原・大塚　略号〈まみ〉

豊満な太股で首を股責め　大手札十枚一組　二〇〇〇円　大塚　啓子　略号〈わよ〉

男奴隷緊縛虐待への過程　大手札十枚一組　二〇〇〇円　大塚　啓子　略号〈わた〉

顔面騎乗の女王様　大手札五枚一組　一〇〇〇円　大塚　啓子　略号〈らも〉

〈女体切腹フォト〉

腸露出無念腹切腹　大手札十枚一組　一五〇〇円　大塚　啓子　略号〈せ10〉

全裸の切腹悦楽1　大手札四枚一組　七〇〇円　大塚　啓子　略号〈ひた〉

全裸の切腹悦楽2　大手札四枚一組　七〇〇円　大塚　啓子　略号〈ひと〉

マニヤの切腹　大手札三枚一組　五〇〇円　甘木　春子　略号〈まに〉

血紅切腹決定版　大手札十枚一組　一五〇〇円　大塚・山原　略号〈まれ〉

血紅切腹凄惨姿態　大手札十枚一組　一五〇〇円　大塚　啓子　略号〈れは〉

血紅切腹連続写真　大手札十二枚一組　二〇〇〇円　大塚　啓子　略号〈のせ〉

血紅美女の切腹　大手札三枚一組　五〇〇円　絹川　文代　略号〈ちた〉

豊満腹を切り裂く女　大手札三枚一組　五〇〇円　長野　良子　略号〈ほふ〉

明瞭な臨月腹の妊娠線　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りき〉

双胎の臨月腹を鑑賞する　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りけ〉

妊婦の乳房を縛り弄ぶ　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りさ〉

妊婦後手縛り引き回し　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りし〉

亀甲縛りの臨月妊孕美　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りた〉

乳房緊縛の双胎臨月腹　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りち〉

臨月双胎蛙腹の股間縛り　大手札四枚一組　六〇〇円　増田みゆき　略号〈りぬ〉

浣腸される妊産婦　大手札三枚一組　五〇〇円　増田みゆき　略号〈りひ〉

臨月妊婦の全身像　大手札二枚一組　四〇〇円　安原さゆり　略号〈りせ〉

臨月妊婦腹の側面　大手札三枚一組　五〇〇円　安原さゆり　略号〈りそ〉

妊婦臨月腹のアップ　大手札二枚一組　四〇〇円　安原さゆり　略号〈りと〉

恵子の妊孕美緊縛　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈おに〉

膨満の妊娠腹の緊縛　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈おみ〉

妊婦開股縛り哀歓　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わう〉

八カ月の妊婦開股責め　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わえ〉

妊婦腹誇張の開股縛り　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わの〉

妊孕美人の媚態立像　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わお〉

妊孕美人の媚態坐像　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わき〉

両手吊り片足挙げの妊婦　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わく〉

両手吊り妊婦の正面　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わせ〉

両手一本吊りの妊婦　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わち〉

縛られた妊婦の艶姿　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈わす〉

臨月の妊婦三態　大手札三枚一組　五〇〇円　安原さゆり　略号〈よむ〉

動物的な臨月妊婦の腹　大手札三枚一組　五〇〇円　安原さゆり　略号〈よみ〉

産み月の膨大な腹　大手札三枚一組　五〇〇円　安原さゆり　略号〈よま〉

麻縄でくびった妊婦腹　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈よは〉

ころがされた緊縛の妊婦　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈よほ〉

臨月妊婦の革紐縛り　大手札三枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈よに〉

見事に美しい臨月腹妊婦　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈よち〉

臨月の妊婦麻縄縛り　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈よへ〉

臨月の妊婦全裸鑑賞　大手札四枚一組　六〇〇円　中河　恵子　略号〈よら〉

九カ月妊婦全裸正面立像　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のま〉

羞らう妊婦の裸身前向立像　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のめ〉

九カ月の妊婦腹を晒す　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のや〉

九カ月の妊娠腹を縛る　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のし〉

便々たる太鼓腹に縄掛け　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のこ〉

膨満腹も露わな両手挙げ縛り　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のろ〉

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のは〉

十文字縛りの妊婦腹　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のほ〉

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のに〉

開股責めと椅子縛りの妊婦　大手札三枚一組　五〇〇円　木戸　悦子　略号〈のへ〉

脈打つ全裸の臨月腹　大手札三枚一組　五〇〇円　中河　恵子　略号〈よへ〉

猿轡にうめく臨月妊婦腹　大手札三枚一組　五〇〇円　中河　恵子　略号〈こふ〉

革紐による臨月腹股間縛り　大手札三枚一組　五〇〇円　中河　恵子　略号〈こや〉

逆さ吊りの臨月妊婦　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さめ〉

両手吊りの臨月妊婦　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さも〉

強烈縛り妊婦責め　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さに〉

妊婦全裸縛りの全身　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号〈さろ〉

○

いつ見ても何回見ても見飽きない奇譚クラブ。その写真のなんと素晴しいこと。思わず全身がぞくとする不思議な魅力を持って私は、その妖しさにじっと我慢する。八月号で長谷田亀治氏が「SM楽書帳」で香港紀行を書かれたが、かつて東南アジアを旅行したことのある私は、まるで自分がSM探訪をしているような気でなつかしく且つ楽しかった。真知子夫人の写真も美しかった。九月号を見るとやはり「SM楽書帳」が出ていて、どうやら毎月続きそうだ。辻村隆氏の麗筆「サロン楽我記」を上まわる連載紀行をお願いしたいものだ。

（三重県・園田一）

○

村田恭子さんのプレイ報告を、大変興味深く読みました。浣腸、自縛、小道具の3節に分類した手記は、ひたむきな女の心をリアルに映していて非常に好感が持てました。余計な言い分とは思いますが、村田さん、自縛浣腸バイブプレイ等は如何でしょうか。同時にこれらを行うわけです。「次の機会にはゆっくり書いてみたい」「面白い告白」を一読者として大いに期待します。

（横浜市・熊内時雄）

○

私は28になる独身の男性です。三年前から奇クを愛読しはじめた者ですが、何故もっと早く奇クを知らなかったかと残念です。と言いますのは、自分一人がこうした性向を持っているものとばかり考えて悩んでいたからです。奇クを読んで本当に真面目な人達、同志の沢山あることに心強く感じました。最近SM雑誌が沢山出てきましたが、みんな興味本位の売らん哉主義のものばかりで読む気がしません。私は宿直の日、更衣室にかけてある女子社員の制服のポケットからハンカチを取り出して愛撫することを覚えました。特に好きな女の子のハンカチは私のオナペットにまでなってしまいます。朝までに元に返しておきますから少しもわかりません。こんな経験を是非書いてみたいと思っていますから、その節はよろしく。

（東京都・津々田猛）

○

玉木章子さん、この頃は顔を出されませんね。僕は貴女の大のファンです。ルポで第二回目の縛りをされるように僕は期待していたのですが、まだなのですか。それでしたら、僕がそちらまで出向いて縛ってあげてもよいです。塚本さんほどまでには行きませんが、少しは文章を書く方法を心得ていますので、面白いレポートが書けると思います。写真は不得手ですので僕は責めるだけにしたいと思います。貴女のように可愛いくてそれでいて飼育済みの女性が僕は好きです。（大阪市・溝井一久）

○

私は観光バスのガイドをしております。殆ど近くのきまったコースを受持っていますが、時には一泊か二泊で遠出するコースもやります。気を使いますし身体もきついですが、いろんな人と会えて楽しいです。仕事柄、人なれがしていて人前で歌を唄ったり喋ったりすることが気にならないのですが、それでいて私は恥かしがり屋で、その上、恥かしい目にあうのが好きな女の子です。純粋の京娘でおしとやかな方ですが人からは、そうは見られないようです。26才になりますが恋人はいません。デートの暇がないせいかと思って、今年の夏は休暇をとるつもりをしています。中学生の頃に体操倉庫で同級生のお友達が縄で縛られているのを見てから、そんなことに興味を持つようになり現在まで続いています。仕事の性質上、毎朝、浣腸する習慣（途中で便意を催したら困るので）になり、今では浣腸も大好きでイチジク浣腸を手ばなしたことはありません。でも、他人から浣腸されたことは一度もありません。色は黒い方ですが背は一六〇センチもあって肉づきもあります。空想だけで実地のSMプレイはしたことがなく、そんなことに憧れのようなものを持っています。

（京都市東山区・山村園子）

○

私は女性の無毛症に興味を持っている一男性です。いつの頃から

か、私は女性のその部の密生した黒毛に恐怖に似たような感情を持つようになり、無毛症の女を探していました。でも、実際にはなかなか、そうした女性にめぐり会うことが出来ず悩んでいました。他のどんな条件には目をつぶっても自分の妻にする女性は無毛症の女でなければならないと決心しているのです。最近の誌上では女性に対する剃毛とか抜毛とかいった責めをやっておられる方々の記事が多くのっていますが私には、とても、そんな機会も勇気もありません。責めの一種に線香の火で毛根を一つ一つ焼いてゆく方法があるそうですが、そんなことって出来るのですか。奇クの読者の中で私と同じ趣味を持っておられる方はいられませんか。それから女性読者の方で私の望みをかなえて下さる方は、おられませんか。どうぞよろしくお願いします。

（和歌山県・木田山人）

○

八月号から私達マゾ人士の憧れの女性春日ルミ女史の文章が載り出し、それに口絵にMフォトセクションが出ていて嬉しい。私はねっからのマゾで、マゾ以外には用なしの男である。マゾこそ私の人生だと思っている。もっともマゾ女性の写真や告白の中で、女性を自分に置き換えて結構楽しい妄想をやっているが、やはり同好の士や女王様と面接したいのは人情である。ルミ女史のような強力で能動的な女性が、中心となって我々マゾ種族をぐんぐん引きずっていってくれないものだろうか。みはらひろしさんのドキュメンタリーフィクションは本当に素晴しかった。こんなにも私の胸をかきむしるような強烈な衝撃を与えてくれた筆力には只々頭の下る思いがした。実際に、こんな目にあったらさぞ怖いだろうが、小説を読んでいる範囲では実に楽しかった。三原寛氏の迫力のある次作を大いに期待している。

（東京都・珍妙佳生）

○

毎月奇クを愛読している27才になる独身のM男性です。奇クをはじめて手にして以来2年、最近では本を読むだけでは満足できず、実際にプレーを体験してみたくなりました。どなたか私にマゾの真髄を教えて下さい。プレーの経験は一度もありませんが、S女性の奴隷として、人間イス、座ブトンに自由に使って下さい。なるべく30才ぐらいまでのプロでないS女性の方を希望します。

（東京都目黒区・垣内音吉）

○

僕はSMに関心を持つ男性ですが経験は一度もありません。8月号の奇クで松田恵子さんの浣腸手記「診療所通い」を拝見致しましたが、とてもしびれました。僕はまだ他人に浣腸した事もなく、された事もありません。しかし経験者は、楽しい、何とも云えない格別の味、人には云えない程の趣きだと言います。僕は浣腸に対しての知識や便秘に対する医学は学んで居りますが、実際に経験がないと研究の材料になりません。是非一度、恵子さんのような方に僕の実験台になっていただいて、色々と研究の種にしたいと思います。どうか、僕の願いをかなえて下さい。僕の愛する恵子さんへ。

（栃木県宇都宮市・海老田健郎）

○

私は二十八才になる人妻です。一年程前、書店にてふと見かけて手にした奇譚クラブに大変興味を持ちまして以来、毎月、夫にかくれて愛読しております。夫はそういうことには少しも興味や関心を持っておりませんから、二、三冊たまりますと古本屋へ売り払っております。私は女性がいじめられる記事や女性の写真に非常にひかれます。自分がそんな目にあっていると空想するのが好きですが、実際に、そんなにされたら怖ろしい気がします。また、それだけにされてみたいような気もするのです。主人は真面目一方の人柄で私が時々そんな話題を出すのですが少しものってきません。九月号で木村洋子さんの「二人の男性に責められた私」を読んで思わず胸を鳴らしました。どなたか、お話だけでも伺える男性の方、お友達になって頂けませんか。子供はありません。

（東京都・関冬子）

○

僕はゴム特有の硫黄くさい、あの生ゴムの臭いが好きだ。ゴム嗜好の記事ののっている奇クは僕の

＝御送金についてのお願い＝

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もありますのでご利用下さい。便宜上「切手代用」にても結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

愛読書だ。6月号の読者通信で佐々木信子さんはゴムについての独り遊びを書いているが僕も貴女と同じだ。同好同士是非話し合いたいものだ。僕は戦時中は海軍の将校だったが、その頃から生ゴムに憑かれて、大分いろんな経験を積んだものだ。女性は男性とは違うだろうが、僕のいろんなゴム狂崇の体験を話してあげたい。暇があれば、告白として書いてみてもよい。

（横浜市・亜麻仁矢）

○

私は21才になる男子学生です。SMについては以前から関心があり3年位前から奇クを愛読しておりましたが、昨年アメリカへ旅行して、あるバーでSMショーを見てから、いても立ってもいられない気持になりました。その時は男性がM役、女性がS役で、S女性は革の黒いブーツをはき、長い革の鞭を右手に持ってM役の男性を打ちすえているのでした。その晩はホテルに帰っても寝られず、S役の女性に強い憧れを覚え、私もあのM役の男性のように鞭打たれたいと願いました。日本に帰ってからもM女性に対する憧れはつのる一方でした。お恥かしい事ですが私はMです。しかし、これまで一度もSMプレイを経験した事はありません。どなたかSに興味のある女性、S傾向の御夫婦の方でも、飼育調教してやろうと思われる方はおられないでしょうか。未経験者ですので御満足されない時があるかもしれませんが、その様な時は罰としてどの様なお仕置でも心から感謝の気持を持ってお受け致します。出来ましたら一週間とか一カ月とかいう様に長期のM生活をしてみたいと思っております。私のサイズは一六五cm、七〇kg、一〇〇cm、八二cm、98cmと、少し太っております。またプレイ写真を撮られても結構です。カメラルポに、もしM男が必要な時は私を使って頂けないでしょうか。

（大阪府門真市・日吉芳雄）

○

八月号と九月号の二回にわたって登場した塚本鉄三氏のカメラルポの主人公、南加津子さんの妊婦姿は素晴しかった。一年以上も前から読者通信を出しておられた南さんが、急に思い立ったようにしてルポの主人公として、その見事な姿態を私達妊婦マニアの前に晒されたことは、本当に嬉しいことでした。便々と膨らんだお腹、お臍まで剝き出しになった太鼓腹は私のいくら眺めても見あきない宝物です。かつて福井桃子さんが三カ月にわたって、やはりカメラルポで登場した時も、私は胸をわくわくさせて、日に日に大きくなってゆく彼女のお腹のことを思って眠れぬくらいでした。南加津子さん、貴女の美しくも見事に孕んだお腹に、私はすっかり心を奪われてしまいました。その上、貴女はSMについても格別の関心をお持ちの由、私はこの一カ月ばかりの毎日が落ち着けません。今年は街

☆OLとなった美女の悦虐を探求する

カラー・プリントの部

女子大生の時に、奇クの緊縛モデルを志して、その華麗な告白の文章と共に、優美きわまりない緊縛の姿態を誌上に栖して、多くのファンを獲得した前田真知子嬢は、大学を卒業してOLとなった最近は、更に一層成熟度を加え、艶麗さを増してきました。

ここに、お求めによって、前田真知子嬢の全裸の緊縛肢体を総天然色のカラーフォトによって、ファンの方々のコレクションの一端に加えて頂くため撮影しました。

胡坐縛りで悶える

カラー　三枚一組　一〇〇〇円
前田真知子　略号〈まへ〉
凝脂の乗った全裸の後手高手小手縛りの上に、組んだ左右の足首を括って引き寄せれば、彼女のマゾ心に火がついて燃えさかる。

擽り責めに呻めく

カラー　三枚一組　一〇〇〇円
前田真知子　略号〈まほ〉
あからさまに、さらけ出された腋までむき出しになった太鼓腹は私のいくら眺めても見あきない宝物です。かつて福井桃子さんが三カ月にわたって、やはりカメラルポで登場した時も、私は胸をわくわくさせて、日に日に大きくなってゆく彼女のお腹のことを思って

悦虐の裸身を晒す

カラー　三枚一組　一〇〇〇円
前田真知子　略号〈まよ〉
しなやかな女体に加えられる暴虐に対して、身動き一つ出来ない縄目をきしませて身を二つ折りにしながら、ああと泣く美女。

成熟した女体の謎

カラー　三枚一組　一〇〇〇円
前田真知子　略号〈まち〉
ヌメヌメとした臀部の肌の女臭を、ふんだんにふりまきながら縛られた美女のマゾの謎は、その色っぽい肢体の中に充満している。

明眸を汚ごす縄目

カラー　三枚一組　一〇〇〇円
前田真知子　略号〈まお〉
澄んだ明るい眸でじっと、こちらを眺める美女のどこに、こんな妖しい悦虐の魔物を秘めているのかとムゴイ縄目を見て考える。

でもお腹の大きな婦人をよく見かけます。そんな時、私は南さんの事を思い、そして奇クとの強いつながりを身を以て感ずるのです。ああ、私は南さんの魅力的な大きなお腹に顔を埋めてみたい。そして緊縛したり浣腸してみたいと心から願います。

（岡山県倉敷市・乃利武一郎）

○

七月号八月号と、続けて千恵子のチコ飼育法を皆様のお目にとめて頂き、そのお隣の頁に、美女と野獣の写真を配して他人事と思えず、貴方の前に私自身が裸にされ血の昂まりを抑え切れません。ケモノの私ですもの、裸が当然ですわ。動悸と快感でウキウキした気持です。この半年の飼育をも一つ見て下さい。スポーツ店で売っている跳び縄の握りの角を丸めて、私のアヌスへ挿入する自習と共に愛犬チコにも試みました。初めは私の小指から試み、逐次、太い指で馴らし、跳び縄の握りを少し整形して挿入したら、シッカリ植わるように太い輪ゴム止めを使います。相……頂の前戯として試み、ビスケットを与えては機嫌をとって飼育致しました。跳び縄の握りで結ばれたチコと千恵子の裸図は如何なものでございましょうか。紐の長さを色々にして綱引きをしたりします。更に握りを前と後に挿入して紐をチコに引かれる時のお見せ出来ないような光景と興奮は私達でなければ出来ないかと思っております。……の後、愛犬が口で握りを引き抜き舌で始末してくれる時は、夢の中を、さ迷っている心持で、チコへの汲めどもつきない愛情が湧いてまいります。次に八月号で、夏はタオルケットで肌を保護するよう、おすすめ致しましたが、実は私の背中にチコの爪跡があって、なかなか消えずに困った経験からでございます。今日、昼休みに食事しようと事務服のままブラリと東京駅地下街に参りましたら、都内に多くの店を持つ有名な書店の前で、ラッシュ時の通行人に向かって、うず高く積まれた奇クを男店員が、つきっきりで特売しているのに出会いました。どうしても目につくような売り方で、びっくりしました。東京では奇クの意識が一般通念となった証拠でもあり、心強く存じました。

（東京都・甲斐千恵子）

○

いつも楽しく拝見させてもらっています。内容が、うわついたものでなく、号を追うて充実してゆくのは心強い限りです。七月号のトップに十大介氏の「SMプレイに関する二、三の考察」が、のっていましたが、一つの意見としてとても良く書けてあったと思っています。私も私なりに、いろいろと、考えておりましたが、何だか

☆妊婦資料と南加津子の縄による凌辱

従来、数多くの妊婦の資料を提供して貴重な文献―蒐集という役割りを果してきました本誌が、ここにマニアの方々の為に、新鮮で素晴しい妊婦資料を贈ります。

初妊娠に羞らう女

大手札　三枚一組　五〇〇円
南加津子　略号／みい＼
初めて妊娠した一糸まとわぬ裸身を正面に晒して隠すすべもない肌を羞らう、縛りなしのムード。

腹の膨らみを曝す

大手札　三枚一組　五〇〇円
南加津子　略号／みろ＼
ぽってりと可愛いく膨らんだ妊娠腹を何のかくすこともなく真正面にあらわに見せた女の素直さ。以上の二組は緊縛なしの資料。

乳房と腹部を縛る

大手札　三枚一組　五〇〇円
南加津子　略号／みに＼
たわわに実り乳汁の溢れそうな乳房とメロン腹に、その二つを強調する縄が無惨に掛けられる。

アグラ縛りで責る

大手札　三枚一組　五〇〇円
南加津子　略号／みへ＼

初妊娠に羞らう女

大手札　三枚一組　五〇〇円
南加津子　略号／みい＼
初めて妊娠した一糸まとわぬ裸身を正面に晒して隠すすべもない肌を羞らう、縛りなしのムード。

開股縛りに悶える

大手札　三枚一組　五〇〇円
南加津子　略号／みえ＼
両膝頭に左右から縄を掛けられて、これ以上は開けられない程開かされた太股に彼女の悦虐が？

足吊り開股の羞恥

大手札　三枚一組　五〇〇円
南加津子　略号／みる＼
椅子の上で脚を吊られながら右と左に開かされたM女加津子の果汁もしたたるばかりの緊縛姿態。

妊婦海老責め地獄

大手札　三枚一組　五〇〇円
南加津子　略号／みり＼
腹に子を宿しているのを圧迫する苦痛に額から脂汗をたらして耐える凄絶な妊婦の海老責め実態。

豊満M女の哀しさ

大手札　三枚一組　五〇〇円
南加津子　略号／みと＼
むちむちとこってり肉のついた彼女に情容赦なく縄の悪魔が襲いかかり、そのすべてを剝ぎとる。

☆妊婦資料と南加津子の縄による凌辱

両足首を揃えて縛り両膝が左右に大きく開くように引きつけると彼女はどんな格好になるか？

一つの考えとして、まとまらず、ただ己の行為を正当化さす為の、こじつけではないだろうか等と迷ったりしていました。だが十大介氏の文を読んで、これなのだと我が意を得た気持にさせてもらったのは、私一人ではないと思っております。これからも、この様な物をのせて下さる様お願いします。

（大津市・物部宝雄）

○

女装趣味の少ない奇クですが、SM誌としては他に追随を許さないことは間違いなく、長年愛読しM女性を自分におきかえて味わっています。八月号の奇クサロンで「パンスト亡国論」を寄せられた佐原陽一郎氏のご意見には同感です。SMの立場からみても、パンストではムードがなく、かつてのストッキングが最高といえます。ピンクのガーターの上にのぞく太股。コルセットに吊るされたストッキングの感じは、すばらしいものです。海外のSM写真をみても黒のストッキングがムードを盛り上げているといえます。奇クのフォトでも取り上げてほしいものです。また、女装趣味の私としては生ゴムを使ったメンスバンドにもあこがれを持っています。最近は生ゴムを使ったものが全く見られず、残念です。ゴム特有のにおいのただようメンスバンドを身にまとうとき、より一層の女装を味わうことができ、その上、責めを受ければ女装Mのよろこびは、この上もないことだろうと思っています。S女性の体験談を寄せられた春日ルミさん、本当に久しぶりですね。最近の誌上には、かつてのアイドルだった懐かしい女性が相ついで再登場しているとき春日ルミさんも、きっと姿をみせてくれることと信じていました。ルミさん（こう呼ばせてください）に、いじめられたいと、以前から思っていましたが、なかなか言い出せず、とうとうルミさんは誌上から姿を消してしまい、消息を知るすべもなくなってしまいました。当時は、まだ若かったせいか、誌上のルミさんに片思い？　を、こっそり話しかけていたものです。今では先に述べたように女装Mのよろこびを追求するサガとなり、倒錯の渕にさまよっています。こんな女装者に興味を持つSのプレイメートを求めて、これからも、さまよいつづけていく私です。

（京都府・中村　純）

○

武井綾子様。名古屋に貴女のような方がおられることを知り、同好者として非常にうれしく思います。小生は奇クを永年、愛読している二十六才の男性です。過去に名古屋の女性からのお便りがなく残念に思っていましたが貴女のご投書を読ませて頂き、心おどる思いで筆を取りました。武井様、ぜひ小生とお友達になっていただけませんか。貴女の一番お美しいと思われている部分を小生は直視し貴女のさがを満たして上げたいのです。貴女は縛りには余り興味を示されていない御様子ですが、苦痛をともなう責めよりも、貴女のお美しい部分を見ることによって貴女の羞恥心をかきたてる責めの方が、小生も好きです。きっと貴女のさがを満足してあげられると

南加津子の臨月妊孕美カラープリント

羞恥の臨月腹開陳
カラー三枚一組　一〇〇〇円
南加津子　略号ハつけ〉
臨月妊婦の美しさと羞かしさとを余すところなくヌードになってさらけ出した稀有なチャンス。

美しき臨月の蛙腹
カラー三枚一組　一〇〇〇円
南加津子　略号ハつむ〉
まんまるく膨らんだ美しい蛙腹を中心にして初めての妊娠に恥かしがる一糸まとわぬ裸身を写す。

太鼓腹の美を晒す
カラー三枚一組　一〇〇〇円
南加津子　略号ハつろ〉
今まさに乳汁を洩らしそうな豊かな乳房と便々たる臨月の太鼓腹との見事なコントラストを描く。

便々たるメロン腹
カラー三枚一組　一〇〇〇円
南加津子　略号ハつは〉
十カ月の便々たる妊娠腹の異色美を適確に奇麗なカラーにて把握した妊婦マニア垂涎のフォト。

臨月妊婦の開股責
カラー三枚一組　一〇〇〇円
南加津子　略号ハつへ〉
はち切れそうな太鼓腹の妊婦が高手小手に縛られた上で思い切った強制開股させられている場面。

膨隆腹緊縛羞恥責
カラー三枚一組　一〇〇〇円
南加津子　略号ハつと〉
脚を高々と頭上に挙げさせられての羞恥責に臨月の妊婦は大きな乳房をゆすって悶えるのだった。

思います。

（名古屋市・千種奇ク男）

○

名古屋の武井綾子さま。お近くの三河に住んでいる四十五才、ロマンスグレイの商店主です。性向はマゾが強く、そしてフェチの傾向もあり、女性の下着を常用しております。また、私自身、ナルシスの面を持っております。ですから、綾子さんのナルシスのお気持が、とてもよく理解できます。ぜひ一度、綾子さんの美しい体、ピチピチとした若々しい肌、可愛らしい全身を隅から隅まで賞玩させて下さい。私の性向や立場からして、決して乱暴したり、ご迷惑をおかけするようなことは、いたしません。きっと、綾子さんのお気持が満足していただけるようなプレイができる事と思っています。綾子さんのお呼びかけを、首を長くして待っています。

（岡崎・美枷輪生）

○

大阪の佐々木信子さま、お元気ですか。実は、わたしも信子さんと同じようなゴムフェチなのです。から、ひまがあればゴムのオシメカバーをつけ、ゴムの雨合羽を着ます。そして雨合羽の上から漁師の着るような胸まであるゴム長靴をつけ、さらに大きな胸当付きのゴム前掛けをしめるのです。また手には黒いゴム手袋、顔に防毒マスクをつけ、鏡の前に坐ります。そして、ときには女性によって強制的に犬の首輪をつけられ、口にはゴム靴をくわえさせられて後手にくくられたり、ゴム靴で御飯をたべさせられたりしたいのですが……。そんなわけで、信子さまのお友達として、またはゴムドレイにされたり、したり……と思います。

（東京・雨合羽太郎）

○

木村洋子様。以前にかかれました「マゾ放浪記」それに今月号の「Mの性に泣く私」を拝見いたしました。当方も前からSMに興味を持ち、機会があれば貴女みたいな女性を素っ裸にひんむき、両手を後手に縛り、太股を左右に拡げさせ、いたぶったり、いろいろなポーズをさせ、羞恥責めをしたいと思います。洋子さん、貴女の縛られた写真を見ているだけではなく、ぜひぼくの手で貴女の体を縛らせてもらえないでしょうか。それに、貴女の持っている特権を、ぼくにも一度、試して下さい。そして、お互いに満足のできるプレイをしませんか。

（奈良市・当麻次郎）

○

名古屋の武井綾子様へ。小生は必ず、あなたの御希望にそうと思います。あなたは自分の美しい身体を異性に見せ、めでて欲しいだけといわれますが、小生は異性の美しい身体を見て、めでてみたいと願っています。更に、あなたは縛ったり軽い責めをしたいと男性が言うなら、されてみたい好奇心があるそうですね。小生も全く経験はありませんが、少しなら女性を縛ったり責めたりしてみたいと望んでいるのです。ぴったりだと思います。また武井様が、もう相手を見つけておられるのでしたら同号の文京区満口英子様にお目にかかりたいと思います。「心ではそう願いながら平凡に生活している」というあなたに、小生がよく適合するからです。溝口さんも文面から察するところ、積極的に男性の相手を求めておられないようでもあります。もし駄目なら、全国的に北は北海道から南は沖縄に至るまで、M傾向初心者の女性を求めます。十五才から三十五才ぐらいまでの未婚の方で、未経験かそれに近い初心の女性にあこがれます。小生は本誌を、きょう初めて購入した者で、経験ゼロです。ただし、今まで心の中での願望として、M傾向の女性を望んでいたのです。小生は三十才の教師で時間には恵まれていますので、たとえ全国どこであろうとも行けます。

（東京都新宿区・山本正夫）

○

奇クファンでS女性の方、私たちの「サド・レディズクラブ」へ入りませんか？　最近はサディスチンとして名乗りを上げるほど女性は強くなりましたが、女王の到来を待つM男の数は計り知れません。強き女性よ！　もっと彼等を責めようではないか。このクラブは現在、七名の会員数（全員女性で平均年令二十四才）で、会費はなし。（責め道具は一部を除いて持参）直接、プレイに参加できない方は手紙等、文通交換でも歓迎します。クラブの会合場所も確定していない段階なので、とりあえず会員を「男奴隷集め」に全力を傾けていますが、発案者の二十二才の女性などは、すでに六人の男を便器代りに使ったというベテランです。入会資格は、三十才までの方（プレイ経験は問いません）

うら若き初産婦出産間際の裸身を晒す

大手札三枚一組　略号〈つわ〉　五〇〇円
南加津子
妊娠線も鮮やかに蛙腹は日を追う毎に、お臍を中心にして次第に下にさがって出産も間近かだ。

臨月の妊孕美鑑賞

大手札三枚一組　略号〈つあ〉　五〇〇円
南加津子
妊娠という生理現象によって起った女性の美しさを、とことんまで追究して、その裸身をあばく。

ベッドの上の妊婦

大手札三枚一組　略号〈つれ〉　五〇〇円
南加津子
巨大なお腹をほうり出してベッドの上にて、いろんなポーズをとって見せる露出症気味の妊婦。

鮮明な蛙腹妊娠線

大手札三枚一組　略号〈つこ〉　五〇〇円
南加津子
たおやかな女体の腹部と乳房が異様なまでに膨隆して裸身に醸しだす妖しいムードをおさめた。

突き出した太鼓腹

大手札三枚一組　略号〈つそ〉　五〇〇円
南加津子
息を吸い込み腰を引いて精一杯太鼓腹を前に突き出して誇張した巨腹をバッチリと狙ったフォト。

臨月の妖しき裸像

大手札三枚一組　略号〈つこ〉　五〇〇円
南加津子
おやかな女体の腹部と乳房が異様なまでに膨隆して裸身に醸しだす妖しいムードをおさめた。

開股する若き妊婦

大手札三枚一組　略号〈つち〉　五〇〇円
南加津子
便々たる妊娠腹をさらしながら左右の足を八の字に自ら開いて、妊娠した女性の悦楽に酔うのだ。

臨月太鼓腹の神秘

大手札三枚一組　略号〈つて〉　五〇〇円
南加津子
妊娠した若き女性の神秘を、これほど間近に、しげしげと眺めることが出来るのは今だ。

羞らう全裸の妊婦

大手札三枚一組　略号〈つら〉　五〇〇円
南加津子
只でさえ裸になるのは恥かしい若き女性が、異様なまでに膨らんだ腹部をさらして恥かしがった。

どんどん名乗りを上げて下さい。

（東大阪市・小田幸子）

○

恥かしい幾多の姿態を強制されて男性に見られることを願いとする、恥かしがりの女性と交際したいと思います。多数の女性が深層心理に持つ願望ですが、社会生活を破壊されることを恐れて願望が実現できないことは、大切な人生なのに全く残念なことです。勇敢に、そのチャンスを求めて望みを達していられる方々には敬意を表しますが、恐れと願望とのジレンマに悩む方にこそ私は役立ちたいと思います。恥かしさの喜びに、うちふるえる歓喜の表情を見ることが私の無上の喜びです。御希望により縄も用いますが、拘束時の不本意な行為を恐れる方は二人で御出でになっても結構です。私の方で介添えの女性を連れても参ります。私も幼い娘と多数の部下を持つ身で、社会生活とは慎重に切り離して行動したいのです。過去の幾多の経験は一切、秘密のうちに行なわれ、例外なく全員結婚して今は一人だけ飼育しています。本人達の同意を得ている写真が多数ありますので見て頂きたいと思います。奇ク十年の愛読者ですが誌上で発表されたことのないスタイルも多数、企画実行した経験があります。先ずお手紙でよく知り合いたいと思いますので、内気なあなたのお手紙をお待ちしています。

（東京原宿・犬山潔）

○

八月号で春日ルミ女王様の御勇姿を拝見し、大変感激いたしました。ぼくは今年二十二才の大学生ですが、生来のマゾ気質から、すばらしい女王様に奉仕の心をつくしたいと思っておりましたが、ついに一度もチャンスは訪れませんでした。しかし春日ルミ女王様、貴女を知ってからは、何か自分にもM男としての自覚がつき、思いきってお便りを差し上げた次第です。どうか女王様、ぼくの舌技をお試し下さい。女王様は豊中だそうですね。ぼくは尼崎市。何とぞぼくのお願いを一度でも、おかなえ下さいませ。どうか顔面騎乗でぼくの顔を乗りつぶして下さい。

（兵庫県・尼のマゾ野郎）

○

〝鈴木千鶴子嬢の全快を祈って〟六月号を開くと、過去二回にわたって塚本氏にカメラルポされた千鶴子嬢の恥かしいフォトが目につき、私の目をとらえました。しなやかな肢体、引きしまった足、妖精のようなフェイスと、どこをとっても非のうちようのない彼女です。さすがダンサーだと感心させられます。その彼女が、これ以上開くことができないぐらいに大きく開股させられ、激しい責めをもM女としてそれを昇華し、天にも

昇るといった悩ましい表情を顔面一ぱいに浮かべ、我々マニアを陶酔の境に導き入れてくれます。この彼女が交通事故に会われたとかその後、経過の方は如何ですか。早く全快され、もっともっとM女としての姿をマニアの前に披露して欲しいものです。最後に彼女の全快を心から祈っております。

（金沢十三）

○

長谷田亀治様。八月号のSM落書帖、本当に楽しく拝読させていただきました。又、一月号および七月号の手記を、あらためて読みかえし、すばらしい御夫婦のSMプレイを目の前に浮かべながら、楽しませていただきました。私もアナル・セックスには大変、興味をもっています。あの小さな可愛いい菊花、すばらしい感覚をひっそりと秘めながら何かを待っている。その魅力は、たとえようもありません。しかも、長谷田夫人のような美しい方（八月号のフォートで初めて知ったのですが）のMプレイは、さぞ天国の花園を見る観があるでしょう。発表されたフォトは私を奇クに再び引き戻してくれました。次回には特訓場面を執筆されるとか、できるだけフォートを多く出して、美しい表情の羞恥責めの故に、更に美しく見えるところを期待しています。ただ、マスクは、せっかくの美しさをマイナスにしています。ところで、長谷田様は神戸にお住まいとのこと。若し許されるならば、お目にかかり、色々とお話を聞き、コレクションをみせていただければ幸せです。

（神戸・雑古谷充夫）

○

毎月々々、通信欄のにぎやかなこと。小生、たのしく拝読しております。岡崎の喜多知子様、お元気ですか。貴女の名前が、ここしばらく誌面で拝見できなく、淋しく思っております。もし、お元気でしたら、貴女の近況でも知らせて下さいませんか。SMについて小生と、やりとりして下さい。

（名古屋・貴大造）

○

青木順一様。小生は三十八才の飲食店主でございます。小生、誰よりもSMにつきましては負けないつもりでおります。貴男方夫婦が、うらやましくてなりません。と申しますのも、小生の家内は、いくら優しくしても、なだめてもMには、なれないのです。貴具として一通り、揃えておりますが、宝の持ちくされでございます。貴男の奥様のようなM性に調教されるのには、どのような方法をすればいいものか御教授いただけないものでしょうか。突然、ぶしつけな、お便りを差し上げましたがどうぞ調教の方法を教えて下さい。

（名古屋市・縛好男）

○

遠藤能子様。同好会の件、参加OKです。また、高千穂順子様。淋しい一人の生活。勝気でも、やはり女は女で、ペットをお求めの由。お二人様、よろしかったら二枚目の私と共にプレイを、なさいませんか。また、アドバイスも致します。プレイのテクニックと技術は、経験しなければ、とうていこの道は開けませんね。どれだけのSM小道具をお持ちか存じませんが、大変だと推察致します。芦屋と申せば、関西で一流の場所です。これ以上の良い住み場所はありません。そんな上品なところに高千穂様がおられるのですね。よろしかったら、ぜひ文通なり資料を送附いたします。

（大阪・山本　司）

○

上野の黒猫館というところで発行した「黒猫通信」の旧号をお持ちの方。お譲り下さるか、拝見させて下さいませんか。私は三、四号を持っています。SM同好者が寄せた投書の一つ一つを読んでいくと、友を求める者、プレイの報告をする者、等々、興味深く、この冊子のファンの一人です。尚、この黒猫館は特殊衣料など製造して大人のオモチャ店などに卸（小売もする）をしているところだそうですが、マニヤの主人の集めた古今東西図書写真のコレクションなど見事で、ぜひ一度、この特別室を拝見させて頂くとよろしいと、思います。場所は上野駅下車、高速道路下の昭和通りを、うぐいす谷駅の方向に三百メートルほど行ったところの左側です。

（東京・石塚生）

○

前田真知子様。奇クにて毎号、貴女の可憐なる緊縛美を楽しく拝見させて頂いております。貴女が最初に、まだ大学生で、あえて本誌に登場したときからの真知子ファンです。初めのうちは、まだ堅さがとれず、貴女のカメラに向けられた視線に、冷たい隙間を感じておりましたが、最近は一段と女

次号（十一月号）は九月二十二日に発売いたします

らしい艶が出てきたようにも思えます。でも、私の数少ないSMプレイの経験から考えると、本当に快楽の極に辿りついたかどうかは疑問です。それは、貴女が、まだ女として真実、成熟していないからなのでは……と、勝手な想像をしております。私は東京のある大学の大学院に籍を置くものです。おそらく貴女よりも一つか二つ、年上だと思います。SM歴は七、八年で、その間、数人の女性とプレイをしました。貴女と同年代のS男性として一度、貴女とSMプレイを楽しみたいと考えております。あるいは、緊縛写真のモデルになって頂けないでしょうか。もし、この拙文、お目にとまったら御返事下さいませ。

（東京・真行彰）

○

私のフォトをご採用下さり、ありがとうございました。縄目もないフォトでは、誌友の皆様には味気のないものでございましたでしょうが、千恵にとりましては体中が、しびれてしまうほど恥かしいものでございました。でも私は、思いきって全身を晒しものにしてよかったと反省しております。心の友である奇クや誌友の皆様方に一歩近づき、SM願望の世界に踏み込めたということですから。私の投稿しました「犬と人との性」について長谷田様から、おたよりを頂き、感激しておりますが、蛇やウナギ責めフォトはMの極致だと思います。全裸で縛られ、蛇やウナギで玩具にされ嘲笑されたらどんなに、めくるめく思いでしょう。夢ですわね。せめて、いつか縄のある全裸を誌上に晒させたいと思います。長谷田亀治様。八月号での貴方の文章を拝見させて頂きました。本文、サロンともSMの極致への憬れが如実に表現されていて感激致しました。サロンのフォトも大変、珍しく貴重な文献で、おどろきました。縛られて犬と組んでいる写真ならと、欲張ってM女の想像を、たくましくさせてみたりも致しました。A責めのフォトをお送り下さったとのこと大変、残念ですけれども事情があって奇ク誌とは一方通行でございます。いずれ、何かの機会に編集部におもむきました際に頂けるかも知れないと楽しみに致しております。お礼までにと私の悶えるAをネガのまま、お送りしますのでごらん下さい。はしたなくもMを求め、悶えに悶えぬく千恵の心をお察し下されば幸でございます。誌上に、これからも珍奇なSMフォトを発表下さることを心から、お待ちしております。

（神戸市・小杉千恵）

○

寺田陽子様。昨年の十月号と本年の一月号の誌上で、お便りを拝見しましたが、その後、いかがお過ごしですか。よいプレイの相手が見つかりましたか。私も、あなたがおっしゃるように、日本全国の温泉めぐりをしながら、SMプレイを、ぜひ、あなたとしてみたいと思っています。たとえば草津温泉では逆エビ責めを、箱根温泉では後手吊りを、熱海温泉では股間縛りを、山中温泉では海老責めを、白浜温泉では菱縄縛りを、等々、所変われば責め方も変えれば感興も一しおでしょう。出来ればあなたの写真と私の記事で大いに奇クの誌上を飾りましょう。

（静岡・皆本常善）

○

武井綾子様。七月号での、あなたの文章、拝見しました。あなたはナルシストです。ぜひ私と友達になっていただきたく、この文章を書きました。私にも、あなたのような性癖が少なからず、ありますが。それは、私が一人暮しをしているのに由来するのかも、わかりません。また、女の人を縛ってみたいという欲望があります。だけど、それは強いものではなく、ただ性的な欲望の一端として存在しています。羞恥的なことが一番、好きです。あなたのナルシズムを十分、満足できると確信しています。私は二十三才、百六十センチ五十四キロです。勤めは平凡、心身とも健全です。快い、お返事をお待ちします。

（大阪・山彦海彦）

○

松本芳夫氏の「バラの窓」には感心させられました。文献に対する真面目な態度と実生活における開拓精神の高さは、我々読者が見習わなければならないところでしょう。従来の告白にない、それらとともに、後半の実践と所感、記述など、読物としても好ましく、今更ながら本誌支持層の厚さを知らされました。氏は稿を改めて報

告したいと結んでおられるが、御夫婦の健康を祈らせていただきます。可能なれば写真発表の勇気を次稿に期待するものです。長谷田亀治氏の「SM落書帳」も豊富な経験と探求心を楽しく述べられて秀れた作品でした。奇クは、こうした〝文献誌〟であるべきです。氏の健筆と御夫人の活躍で大いに誌上、華を添えて下さい。おしむらくは、編集部注にあるとおり、貴重な資料がカットされたこと、残念であります。尚、掲載フォト中、羞恥責めのカットは不適切で編集部の善処を望みます。

（東京都千代田区・南町年夫）

○

溝口英子様。七月号にお便りを寄せられました貴女に私の願望を述べて見たいと思い、ペンをとりました。英子様に私の趣旨が届きましたら幸甚です。私は、まだムチ打ち等のように身体に傷をつけるような責めは得意としませんが羞恥責めに徹します。見知らぬ英子様を誌上で責めて見ます。お気に召しましたら御返事下さるようお願い致します。若い女が見知らぬ男に胡坐縛りにされ、女性の肌を露出され、男に卑猥な言葉を言わされます。男は執拗な視線を大きく露出した肌に向け、ニヤニヤしながら女性の足の裏、ふくらはぎ、乳房等を弄びます。そして女性の可憐な唇で奉仕することを要求します。つぎに、全体が鏡の部屋で、誰にも見せたことのない、そして自分で見たことのない部分を男のゴツゴツした指や舌で弄されているのを自分の目で見させられます。このように乙女の羞恥心をたかめ、更に浣腸を強制し、いろいろなことを大声で告白するように強制します……その他、いろいろ羞恥責めを考えておりますが私の文才では、貴女を誌上で羞恥心を高めるのは無理のようです。ぜひ一度プレイに応じて、羞恥の極致から貴女のM性を目覚めさせ奇ク愛読者を喜ばせて下さい。英子様は、きっと、まだ未開拓の素晴しい素質を、お持ちのM女性だと確信しています。私は板橋で小さな会社を営む、今年三十才になる男性です。ぜひ、お手紙を下さい。

（東京都・羞恥男）

☆奇譚クラブ既刊号在庫一覧表☆

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますので、お申込み次第、折返し急送致します。
○送料は総べて当社にて負担致しますから、誌代のみ前金にてお送り願います。多数まとめて御注文の際は、一括して、〈小包〉にて発送申し上げます。

☆既刊雑誌在庫案内☆

昭和41年7月号（送共三〇〇円）
昭和41年8月号（送共三〇〇円）
昭和41年10月号（送共三〇〇円）
昭和41年11月号（送共三〇〇円）
昭和42年6月号（送共三〇〇円）
昭和43年2月号（送共三〇〇円）
昭和43年3月号（送共三〇〇円）
昭和43年4月号（送共三〇〇円）
昭和43年5月号（送共三〇〇円）
昭和43年6月号（送共三〇〇円）
昭和43年11月号（送共三〇〇円）
昭和43年12月号（送共三〇〇円）
昭和44年1月号（送共三〇〇円）
昭和44年2月号（送共三〇〇円）
昭和44年3月号（送共三〇〇円）
昭和44年4月号（送共三〇〇円）
昭和44年5月号（送共三〇〇円）
昭和44年6月号（送共三〇〇円）
昭和44年7月号（送共三〇〇円）
昭和44年8月号（送共三〇〇円）
昭和44年9月号（送共三〇〇円）
昭和44年10月号（送共三〇〇円）
昭和44年11月号（送共三〇〇円）
昭和44年12月号（送共三〇〇円）
昭和45年1月号（送共三〇〇円）
昭和45年2月号（送共三〇〇円）
昭和45年3月号（送共三〇〇円）
昭和45年4月号（送共三〇〇円）
昭和45年5月号（送共三〇〇円）
昭和45年6月号（送共三〇〇円）
昭和45年8月号（送共三〇〇円）
昭和45年11月号（送共三〇〇円）
昭和45年12月号（送共三〇〇円）
昭和46年1月号（送共四〇〇円）
昭和46年2月号（送共四〇〇円）
昭和46年3月号（送共四〇〇円）
昭和46年4月号（送共四〇〇円）
昭和46年5月号（送共四〇〇円）
昭和46年6月号（送共四〇〇円）
昭和46年7月号（送共四〇〇円）
昭和46年8月号（送共四〇〇円）
昭和46年9月号（送共四〇〇円）

＜編集後記＞

○『手鎖足枷の美女』≪美女なればこその哀愁美≫○『僕の責め方』≪冥府からのオノロケ、お盆だから？≫○『ひとり暮しの女の便り』≪チョンガーもコブツキもボヤボヤボヤすんな！≫○『豊かに熟しきった女性が好きだ』≪ボクだってダーイチュキ≫○『SM企業』≪ポスト調教士でゴタゴタするよ、きっと≫○『女と犬の性について』≪どうせなら象かカバになさったら？≫○『私が手玉に取った紳士』≪至福者ですナ、ご両人共に≫○『腹ボテ女のハダカが見たい』≪妊婦専門サウナ開業なんていかが？　案外繁昌するかもよ≫○『ミミクリーとイリンクス』≪人間遊べる間が花だもんネ≫○『女相僕書誌拾遺』≪難作業山とガブリ四ツ≫○『紫蘭の門』≪イヨッお疲れさん。コワレなかったア？≫○『春子曼陀羅』≪捜して行こうよ、巡業先へ≫○『大噴火』≪やっぱりありあったんだネエ、タイムマシンも≫○『汚辱にまみれた身体検査』≪されてみたいけど、戦争だけはイヤッ！≫『縄と革』≪お好み用品コーナーへどうぞ≫○『追憶の妊婦群像』≪何度も圧し潰されたんでしょうナア、夢の中で≫○『浩が行く』≪ボクも行きたいッ！≫○『ヨーロッパポルノ紀行』≪横文字にヨワイから……≫○『パリ雑感』≪……日本がいいの≫○『天神祭に来た女』≪渡御の舞と悦虐の舞の対決に？≫○『グラマーな猛女』≪締め殺される直前で……≫○『隷従の誓約』≪……をしましょ≫○『排泄戯考』≪後の食事代が高くつく≫

◉読者原稿募集◉

〔告白、手記、体験〕

読者の皆さまが御自分で親しく体験されたことや秘められた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。

採用しました原稿には五千円以上の謝礼を贈ります。

〔小説、読物、創作〕

本誌の編集内容に適した異色ある力作を大いに期待いたします。すべて自作の未発表の作品に限ります。これはと思う作品は、必ず誌上で取り上げます。腕だめしの意味でふるって御寄せ下さい。採用篇には五万円迄の稿料贈呈。

〔奇クサロン向原稿〕

小品、写真、挿絵、通信、短信往来、感想、批評、読後感、モデル編集者執筆者への通信、夫婦プレイの報告、SMニュース、映画雑誌新聞からの見聞記など、本誌独特の奇クサロンに適した投稿を求めます。記念品、写真資料又は二千円以上の謝礼を採用篇に対して、お贈りします。

〔イラスト、カット〕

本誌の内容に適したSM画を求めます。大きさは自由ですが必ず白い紙に黒色で描いて下さい。優秀な作品は誌上に継続的に掲載の上　当方からテーマを与えて制作して頂きたいと思います。腕に自信のある方は、どうか、習作をお見せ下さるよう願います。

画料については、作品に応じて御相談申し上げます。

◎御応募下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております故悪しからず御諒承願います。

奇譚クラブ　定価　四〇〇円
十月号
（第二十七巻第十号　通刊第三百八号）

昭和四十八年九月二十日　印刷
昭和四十八年十月一日　発行

郵便番号558
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所　暁出版株式会社
（昭和三一年四月二〇日第三種郵便物認可）
（昭和四二年四月二一日　国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号）
振替口座大阪四二七八三番

編集人　杉原虹児
発行人　吉田稔
印刷人　北村俊夫

☆本誌御購読の栞☆

予約に限り

一月分（1冊）　四〇〇円〈送共〉
三月分（3冊）一二〇〇円〈送共〉
半年分（6冊）二四〇〇円〈送共〉

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しておりますため、十八才未満の方には絶対販売下さらないよう申し上げます。特にくれぐれも、お願い申し上げます。